

# 古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究

(課題番号90543695)

平成30年度～令和4年度科学研究費補助金

(基盤研究C)研究成果報告書

研究代表者 大庭孝夫

(九州歴史資料館)

2023年

九州歴史資料館



## 例 言

1. 本書は独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金の交付を受けて実施した研究の成果報告書である。本研究の概要は以下の通りである。

- ・研究種目：基盤研究（C）
- ・課題番号：18K011085
- ・研究課題名：古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究
- ・研究組織：研究代表者 大庭孝夫 九州歴史資料館研究員（研究者番号 90543695）
- ・研究期間：2018年度（平成30年度）～2023年度（令和4年度）  
なお、当初は令和2年度までの予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大により、研究計画等に影響を受け、期間延長・再延長の手続きをとり、令和4年度まで実施した。
- ・交付額：2018年度（平成30年度） 直接経費 1,300,000円  
2019年度（令和元年度） 直接経費 1,000,000円  
2020年度（令和2年度） 直接経費 900,000円
- ・研究成果（本研究に関わるもののみ）  
大庭孝夫 2021「九州型石錘の機能に関する一試論 一福岡市西新町遺跡出土石錘を中心に一」『九州歴史資料館研究論集』46 九州歴史資料館  
大庭孝夫 2022「漁具からみた西新町遺跡海人集団の特質 一西新町型石錘を素材として一」『九州歴史資料館研究論集』47 九州歴史資料館  
大庭孝夫 2023「玄界灘における弥生～古墳時代の網漁業についての一試論 一いわゆる「半球状有孔滑石製品」を中心に一」『九州歴史資料館研究論集』48 九州歴史資料館  
投稿中 2023年3月に刊行予定  
大庭孝夫 2023『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』：本書
- ・研究成果公開  
令和4年度九州歴史資料館パネル展「「倭の水人」の実態を探ってみた」  
展示期間：令和4年6月28日（火）～令和4年9月4日（日）  
会場：九州歴史資料館2階文化情報広場  
日本考古学協会 2022年度福岡大会ポスターセッション「弥生時代の超大型石錘「半球形有孔滑石製品」を用いた漁具の調査」  
日程：2022年10月8日（土）・9日（日）  
会場：九州大学伊都キャンパス

2. 本書は6部構成をとる。第I章では本研究の目的と経過、第II章では研究をめぐる環境、第III章では玄界灘沿岸地域における漁労活動の基礎情報の整理、第IV章では玄界灘沿岸地域における漁労活動の各研究成果を示し、第V章で研究の総括を行った。また、第VI章では本研究の基礎データである九州型石錘一覧表を掲載した。

3. 本書の執筆・編集については大庭が行ったが、第VI章の一覧表の作成にあたっては伊東ひかりの多大な協力を得た。また、校正については桑野暢子の協力を得た。

# 目次

I	はじめに	1
1	研究の目的と経過	1
(1)	研究の背景	1
(2)	研究の目的	2
(3)	研究の対象と方法	3
(4)	研究の経過	4
II	研究をめぐる環境	5
1	博多湾の地理的環境	5
(1)	検討にあたって	5
(2)	潟湖の自然環境	6
(3)	水上交通の拠点としての潟湖	6
(4)	博多湾の地理的特徴	7
2	玄界灘沿岸地域における歴史的環境	10
(1)	検討にあたって	10
(2)	玄界灘沿岸の地域間交流	10
(3)	いわゆる「博多湾貿易」の成立と展開	12
(4)	文献史料における博多湾の海人集団の動向	13
3	西新町遺跡のこれまでの成果	14
(1)	西新町遺跡の調査成果概要	14
(2)	朝鮮半島系遺構・遺物の様相	16
(3)	列島内交易の様相	18
(4)	多様な生産体制	19
(5)	西新町遺跡の特殊性	20
(6)	西新町遺跡の墳墓 藤崎遺跡	20
(7)	小結	21
III	玄界灘沿岸地域における漁労活動の基礎情報の整理	23
1	弥生～古墳時代の石錘	23
(1)	石錘とは	23
(2)	九州型石錘の研究史	23
(3)	石錘の分類	24
(4)	九州型石錘Ⅰ類	25
(5)	Ⅱ類(下條大形B類)	26
(6)	Ⅲ類	29
(7)	Ⅳ類	29
(8)	Ⅴ類	29
(9)	Ⅵ類(半球状有孔滑石製品)	29
(10)	Ⅶ類(打欠石錘)	30
(11)	その他	30
2	土錘を中心とする弥生・古墳時代における漁業技術史研究	31
(1)	土錘とは	31

(2) 土鍾を用いた網漁の種類の特定と操業規模	31
(3) 土鍾と土器製塩と水産物	32
(4) 土鍾の具体的様相	33
3 玄界灘沿岸地域における釣漁の様相	36
(1) 釣漁とは	36
(2) 釣針の特徴	36
(3) 玄界灘沿岸地域の釣漁の様相	37
4 玄界灘沿岸における飯蛸壺延縄漁の導入	39
(1) 蛸壺漁とは	39
(2) 玄界灘沿岸地域における飯蛸壺漁の民俗例	39
(3) 弥生～古墳時代における玄界灘沿岸地域の飯蛸壺延縄漁	40
(4) 小結	44
5 刺突漁	44
6 捕鯨	46
7 潜水漁	47
(1) 潜水漁とは	47
(2) 玄界灘沿岸地域における潜水漁	48
(3) 民俗例・文献にみるアワビの採取	48
(4) アワビオコシ	49
8 海藻類の採捕	51
9 玄界灘沿岸における土器製塩について	52
(1) 土器製塩とは	52
(2) 土器製塩の工程について	52
(3) 土器製塩の導入と展開	53
(4) 小結	55
10 動物遺存体からみた玄界灘沿岸の漁労活動	57
(1) 検討にあたって	57
(2) 玄界灘沿岸地域における出土動物遺存体の動向	57
(3) 小結	60
11 弥生～古墳時代の船の構造及び操船技術について	60
(1) 検討にあたって	60
(2) 弥生～古墳時代における船の構造	61
(3) 操船技術と航法 壱岐・対馬ルートを中心に	65
IV 玄界灘沿岸地域における漁労活動の研究	67
1 九州型石鍾Ⅰ類の機能に関する一試論－福岡市西新町遺跡出土石鍾を中心に－	67
(1) はじめに	67
(2) 九州型石鍾について	67
(3) 九州型石鍾Ⅰ類の用途の検討	70
(4) 九州型石鍾Ⅰ類の考古学的分析	75
(5) 九州型石鍾Ⅰ類の検討結果からの諸問題	79
(6) おわりに	83

2	玄界灘における弥生～古墳時代の網漁業についての一試論～いわゆる「半球形有孔滑石製品」を中心に～	85
(1)	はじめに	85
(2)	半球形有孔滑石製品についての考古学的な検討	86
(3)	特徴的な出土状況からみた使用状況の検討	95
(4)	半球形有孔滑石製品を用いた漁網の復元	99
(5)	水産物の加工と流通	104
(6)	小結	105
3	漁具からみた西新町遺跡海人集団の特質～西新町型石錘を素材として～	107
(1)	はじめに	107
(2)	西新町型石錘の検討	107
(3)	西新町型石錘の観察	109
(4)	西新町遺跡 17 次 7 号竪穴住居跡出土石錘群の再検討	111
(5)	西新町型石錘を使用した漁労活動による生産と流通についての試論	119
(6)	まとめ	123
4	九州型石錘からみた壱岐島の海人集団の特質	125
(1)	はじめに	125
(2)	原の辻遺跡出土の九州型石錘について	128
(3)	カラカミ遺跡における九州型石錘について	135
(4)	車出遺跡群における九州型石錘について	136
(5)	壱岐島出土の九州型石錘の材質の特徴	136
(6)	動物遺存体からみた壱岐島の漁労活動	136
(7)	壱岐島出土九州型石錘の特徴からみえる壱岐の海人の特徴	137
(8)	まとめ	139
5	九州島外における九州型石錘についての予察	141
(1)	はじめに	141
(2)	瀬戸内地方中部における九州型石錘	141
(3)	近畿地方における九州型石錘	144
(4)	山陰地方における九州型石錘	146
(5)	北陸地方における九州型石錘	148
(6)	まとめ	149
6	漁具としての刀子に係る予察的検討	150
(1)	検討にあたって	150
(2)	検討結果	150
V	総括	153
1	玄界灘沿岸地域における漁業技術史の画期	153
2	水産物を中心とした交易品の流通構造	155
3	海人集団の特徴と役割	157
4	展望	159
VI	九州型石錘一覧表	171

# I はじめに

## 1 研究の目的と経過

### (1) 研究の背景

アジア大陸の東、北東から南西に弧状に連なる日本列島は、その四方を海に囲まれ、人々は海と極めて深い関わりを持ちながら暮らしてきた。列島を取り囲む海は黒潮と親潮が影響を及ぼすため、魚介類の種類も多く、世界有数の漁場として知られる。現在日本人は魚離れといわれるが、列島には農業に適した平野も必ずしも多くないことから、古くより海の漁労活動は、主要な生業体系の一部を構成しており、現代の生活においても魚介類にとどまらず、カツオやコンブのだしを含め、海産物を多く摂取する。

旧石器・縄文時代以降、この豊かな海や河川または湖を舞台に、漁労活動を行う人々が広く分布してきた。弥生時代、水稻農耕の導入に伴う新たな食生活の開始により、水田漁業など新たな漁場の開発、新しい漁具の登場などによって漁具・漁法は大きく発達し、機械化以前の日本の伝統的な漁業の原型を形作った。この後、古墳時代になると、倭王権のもと列島各地で政治的統合が進む中で、玄界灘沿岸、西北九州、瀬戸内地方、伊勢湾沿岸などで海の生業を専門とし、交易や軍事的な役割などを通じて王権を支えた「海人集団」の形成が進み、やがて阿曇、宗像等の特定の氏族が成立した。ただし、弥生時代・古墳時代研究が、コメをめぐる農耕社会としての問題に常に焦点が当てられ、かつ海に関する資料が非常に断片的であったため、漁労活動に対する評価が極めて低く（和田 1982）、これまで漁労活動の実態についてはあまり関心を持たれてこなかったといえる。

本研究の対象地域となる玄界灘沿岸地域は、九州島の北西部に位置し、東は響灘、西は対馬海峡・壱岐水道と連なり、冬季風波の激しきで名高い。また黒潮と分かれた対馬海流が沖を流れることで、温暖な気候をもたらすと同時に、豊かな海の幸をもたらす優れた漁場でもある。さらに、玄界灘は対馬海峡、朝鮮海峡、東シナ海を挟んで、アジア大陸の東端の朝鮮半島と近接し、朝鮮半島南端の釜山港と博多港は直線距離で 200 km 強に過ぎず、高速艇を用いた場合は 3 時間程度で往来できる。このような地理的条件から、博多湾沿岸には倭王権・古代国家の外交の港津である「那ノ津」が置かれ、外国使節を迎え・饗応し、遣唐使や遣新羅使などの海外への公的使節が使用した「筑紫館（後の鴻臚館）」が整備された。その後、唐商人、新羅商人などが拠点とした「博多」は国際交易の一大港津としても機能した。このように玄界灘沿岸地域は、通時的に中国・朝鮮半島の様々な情報や技術、文物などを盛んに受容することで、列島の諸社会に大きな影響を与えてきたといえる。

本研究では、弥生～古墳時代において海の漁労活動を担い、海上交通や交易を担った人々である海人、その集団組織である海人集団を対象とする。海人集団は魚介類を捕獲し、生活を営んだ漁労活動、海を越えた交易や操船技術、場合によっては戦闘行為を含む特殊な技術を持った漁に関わる組織的な集団を指す。玄界灘沿岸の遺跡には、中国・朝鮮半島系の交易を示す遺物とともに、多種多様な漁具が伴う場合が多く、北部九州の海人集団は対外交易の担い手としての役割が古くから想定され、漁労活動に関する研究もその活動内容や範囲を対外交易に関連付けて議論されてきた経緯がある。

またこの海人集団は、海浜部に点在する漁村に居住し、弥生時代以降米食の開始に伴う副食物の必要性や農耕活動の拡大、人口増加に伴って、内陸部の農村等に魚介類や海藻類等を供給した。この当時、冷蔵・冷凍保存技術が十分に発達していなかったため、水産物を運ぶため、塩漬けや乾燥（干物）等の水産物の加工・保存技術の発達、加えてそれらを運搬するための移動・輸送手段、海上交通の発達などを指向したことで、結果的に広域的な人やモノの移動、行き来が盛んになったとみられる。このように、

海人は漁労活動に留まらない、非常に幅広い活動を行っていたと考えられる。

本研究では、海人自体の動きや活動、交流ネットワークに重きを置いた、ローレベルな交流に関する議論に中心になるが、古墳や墳墓から出土する副葬品を主とした、ハイレベルな政治的交流については、交渉の相手や地域、内容がローレベルとは異なる可能性があるため、注意が必要である。

## (2) 研究の目的

海人集団を研究するにあたっては、様々なアプローチ方法があるが、本研究では漁具・漁法という切り口で分析を実施する。列島における漁具・漁法は、暖流や海流、海底の深度や緯度などの自然環境や特性の異なる様々な条件を有する海域に対して、各地域の海人が長年にわたって、経験と創意工夫を重ねて改良したものであり、その様相は複雑多岐にわたる。また漁業は移動性が高い生業であり、漁具や漁法も伝播や改良などにより随時変化するため、概して古いものは残りにくい特徴を有する。

海や河川近くの遺跡に残されていた漁具は、釣漁・網漁でも有機質の木や繊維を素材とするものが多く、大半は漁具の部品で腐朽しにくい材質である土錘や石錘が占めるという偏りがみられる。

先行研究では出土漁具から、釣漁、網漁、刺突漁、潜水漁、蛸壺漁、ヤナ漁、筌漁などの存在が確認されているが、素材のバリエーションに富むことから、その多量性に阻まれ、漁労活動の全体像がなかなか見えにくいという難点がある（魚津 2012）。また出土漁具の時間的・空間的な在り方から海人の動向等が検討されているが、研究時期が古くかつ資料数に限界があるものや、特徴的な漁具から対外交易や地域間交流を担った海人の活動内容や範囲の考察など、漁労活動全般の様相までせまったものは少ない。さらに、集落内での生産活動の一部として出土漁具から具体的な漁網や漁法を復元した事例はあるものの、地域内における漁法の変遷や広がりなどの漁労活動の基本的な整理も、これまでほとんど検討されてこなかったといえる。

縄文時代においては、福井県鳥浜貝塚や滋賀県粟津湖底遺跡などの低湿地貝塚の調査で、漁具と動物遺存体の共伴による、生業スケジュールを含む資源利用システムの検討が行われているが、本研究の対象とする弥生～古墳時代の玄界灘沿岸地域においては、糸島市御床松原遺跡や福岡市海の中道遺跡などの砂丘遺跡でわずかな動物遺存体の出土をみるが、海浜部の遺跡において動物遺存体の出土はほとんどなく、石錘や土錘など比較的残りやすい遺物で当時の漁労活動を復元せざるをえない状況にある。

近年、漁労活動に関する出土資料が蓄積され、研究基盤が飛躍的に進展ししつあることから、弥生～古墳時代の出土漁具、特に石錘を対象に、加工痕や使用痕跡の観察・分析、動物遺存体、遺跡を取り巻く古環境、自然景観、歴史的環境、民俗例及び関連研究などを総合的に捉え、漁具や漁法の復元を試みる。加えて復元した漁法を遺跡レベルでみていくことで、出土状況や遺跡内での組成や在り方、当時の海岸線との位置関係、景観などの周辺環境を総合的に検討していく。つまり遺跡に立ってみえた、復元された環境を前提として研究を行う。このことで、固有の生態系や社会状況を有する各遺跡での漁労活動の性格づけ、遺跡内で複合的に行われた生産活動の実態が把握できるとともに、その特徴や活動範囲、役割等、専門性や農耕集団との関係性までを視野に入れた研究を行う。

本研究の成果により、復元できた漁具や漁法と遺跡・遺構・遺物の有機的な関連性を見出し、海産資源利用システムを復元し、その時間的推移や地域的差異、広がり抽出することで、多角的な生業における漁労活動の内容を明らかにし、今後様々な視点での弥生～古墳社会の具体的かつ横断的な議論が可能になる基礎的な研究を目指した。

### (3) 研究の対象と方法

本研究の対象地域として、玄界灘沿岸、特に現在の福岡市域、糸島市域となる博多湾沿岸地域を選んだ理由としては、それ以外の玄界灘沿岸地域と比較すると、福岡市西新町遺跡や今宿五郎江遺跡、糸島市御床松原遺跡など漁労活動痕跡を多く残す遺跡の調査事例が蓄積されており、弥生～古墳時代にかけての漁労関係資料が豊富なことにある。また下條信行氏による九州型石錘の一連の研究（下條 1984・1989）、それを受けた山中英彦氏（山中 2007）、森本幹彦氏（森本 2015）、山崎純男氏による福岡市海の中道遺跡の実証的な研究成果（山崎 1984・山崎編 1993）など優れた先行研究も多く、ある程度漁労技術を共有する領域であることが明らかになっている。さらに、玄界灘沿岸地域は、水稻農耕社会の発展に伴う社会の成層化がみられる吉武高木遺跡、奴国の中枢集落である須玖遺跡群、中期～後期に街区的な集落内部の重層化がみられる比恵・那珂遺跡群など、列島の弥生～古墳時代の生産・流通及び社会の発達などの研究をリードしてきた非常に重要な地域でもある。これらの先行研究は、海の生産活動の構成から弥生～古墳時代の海人集団の在り方について具体的に検証できるレベルに十分達している。

なお、先述したように玄界灘沿岸地域では遺跡から動物遺存体がほとんど出土しないことから、捕獲した魚種及び漁場等の実証的な研究は難しい面がある。そのため、先行研究でも研究の素材となった石錘を対象として、石錘の加工痕や使用痕跡の観察・分析を行うことで漁具使用時の情報を読み取り、使用された漁具や漁法の復元を試みることにした。そこで、福岡県、佐賀県、長崎県の玄界灘沿岸地域の遺跡出土石錘について、形態や法量、重量など発掘調査報告書の記述を中心に総数 1,100 点にも上る一覧表作成を行い（第 5 表）、分析の復元可能な資料群を抽出した。次に抽出した資料群について、可能な限り資料調査を行い、形態や法量、重量の計測や記録という従来の観察手法に加え、先に示した漁具に残る加工痕や使用痕跡、またピンク色や白色など色調などの要素を客観的に記録するなど、新たな視点の観察を行った。例えば、同一の形状の一群や、一式の網としてセット関係を推定することが可能な石錘群の中で重量にバラつきが多いものは、曳網漁で使用されたため磨り減ったと理解するなどした。

しかし、出土漁具は形状や使用痕跡、共伴する動物遺存体から具体的な用途が特定できるものは限られ、出土漁具のみで捕獲対象の魚種をはじめ、漁労技術全体を復元するのは困難が伴う。だが、民俗資料の漁具は機械以前では材質が変化しても、機能が同じであれば年代による形態変化が少なく伝統的な形態・機能を維持しており、釣漁や網漁などの使用形態・機能を検討する上では大いに参考になる。ちなみに、博多湾を中心とする筑前地方の漁村では、弥生・古墳時代の釣漁・網漁の沈子と同様または類似する形態の滑石製沈子を使用した漁網が民俗例として紹介されていることから（平川 1990 他）、民俗例に加え、歴史書、地誌、絵図などの内容を、考古資料を中心として相互に関連付けることで、各資料に即しつつ漁労活動のアウトラインから把握することを研究の一つの核とした。ただし、それらが示すものが弥生～古墳時代まで遡るかということについて当然批判が予想されるが、食材の性質が変わらない限り漁労活動はその領域となる海及び魚介類に関する知識に基づいた最も合理的な漁法及び加工をとったことを前提とすれば、全く同様の在り方ではないかもしれないが、様々な特性を当時の人々が理解し、それが出土漁具の形態や特徴にも表れているとする姿勢をとった。

さらに、遺跡レベルの生産活動の諸様相の分析の核として、博多湾沿岸地域の西部を占める早良平野の北東部、博多湾沿いの砂丘上に立地する西新町遺跡をターゲットに据えた。西新町遺跡は古墳時代前期を中心に、九州型石錘を用いた在地系の釣漁や網漁、瀬戸内系の管状土錘 C による袋網系網漁、飯蛸壺延縄漁などの複数の漁法が採用され、土器製塩の発達による漁労活動の飛躍的な発展とともに、同遺跡を核とした在来系の漁労集団の再編などが指摘されている（乗松 2010・森本 2015 他）。

加えて、朝鮮半島由来のカマド付竪穴住居や多量の朝鮮半島系土器など、朝鮮半島からの多数の渡来人の存在が予想されると同時に、西日本各地の土器が出土していることから、列島内外との交易拠点であったことが指摘されている(久住 2007 他)。このように西新町遺跡は漁労活動を含む各種生産活動と、交易を含む流通、広域的な人々の交流の在り方や地域社会の発達等の実証的研究の好条件を備えている。

出土漁具が増加した今日、遺跡単位や行政単位という小地域ごとの検討は進んできたが、地域間相互の関係性が見えにくくなっている。その課題を解消するために、この西新町遺跡の分析成果から西新町遺跡の集団の役割や特徴を明らかにすることで、博多湾沿岸地域に営まれた海浜集落や海人集団が弥生～古墳時代にかけて歴史的に果たしてきた社会的機能・役割の多様性、国内外の地域間関係を取り結ぶ役割などの議論を進める。

なお、本研究の成果により、弥生～古墳時代への社会の発展に伴い、漁労活動が変化を遂げたのであれば、逆に生業活動の中で農耕へ特化する様相等、社会構造の変化をも明らかにできる可能性がある。

#### (4) 研究の経過

本研究のきっかけとしては、平成 10 年度に福岡市西新町遺跡の発掘調査を担当し、平成 11 年度の調査報告書の中で多数出土した漁具の実測・報告を担当したことにある。その後平成 19 年度に同遺跡の調査報告書の総括編を作成するにあたり、同遺跡とその周辺出土の石錘を中心とする漁具について考察を行い、本研究の基礎となる分析方法の有効性を確認した。さらに平成 24 年度に豊前市塔田琵琶田遺跡の調査を担当した際に多量の飯蛸壺を検出し、平成 26 年度の同遺跡調査報告書の中で玄界灘沿岸地域の飯蛸壺との比較検討を行うなど、弥生～古墳時代の漁具について常に関心を払ってきた。

本研究では、研究初年度にあたる平成 30 年度から玄界灘沿岸地域の出土漁具について、発掘調査報告書等の文献から集成作業を開始した。集成作業は翌年度の令和元年度中に基礎的な作業はほぼ終了し、その後実物の資料調査を進めていく予定であったが、令和元年度前半は熊本地震復興支援に伴う熊本県教育庁への派遣及び同年度後半以降は新型コロナウイルス感染症拡大による本県への緊急事態宣言、まん延防止措置が度重なって発出されたことにより、発出期間中は不要不急の出張が制限され、当初本研究の核と考えていた新たな観点での詳細な資料調査の実施はほぼ困難となった。そのため、研究期間は令和 2 年度までの予定であったが、令和 4 年度までの計 5 年間に延長したものの、令和 4 年度前半まで状況は好転しなかったため、結果的に資料調査については、当初の予定数より大きく減ることとなってしまい、不十分な結果となってしまった。

そこで当初の計画を若干変更し、優れた先行研究をまとめて玄界灘沿岸地域における漁労活動の様相を俯瞰的にみたもの(第Ⅱ・Ⅲ章)、福岡県所蔵資料を中心とした出土漁具の研究(第Ⅳ章)という大きくは 2 本立てで研究を継続して実施した成果が本書である。

##### 本書での時期区分

古墳時代の開始は、定型化した大型前方後円墳の出現の画期として奈良県箸墓古墳の出現を重視し、布留 0 式併行期以降を古墳時代の指標とする立場に立ち、庄内式期は弥生時代後期終末として扱う。

時期の判断は、分析対象資料には竪穴住居などへの廃棄、環濠を含む溝や落ち、後の時代の遺構の混入など時期の絞り込みが難しい資料が多く含まれており、設定地域での同時期性を確保するため、細かな時期差に注意を払いながら可能な範囲での時期区分となったため、古墳時代前期については前期前半と後半の 2 時期区分となったものが多い。

## II 研究をめぐる環境

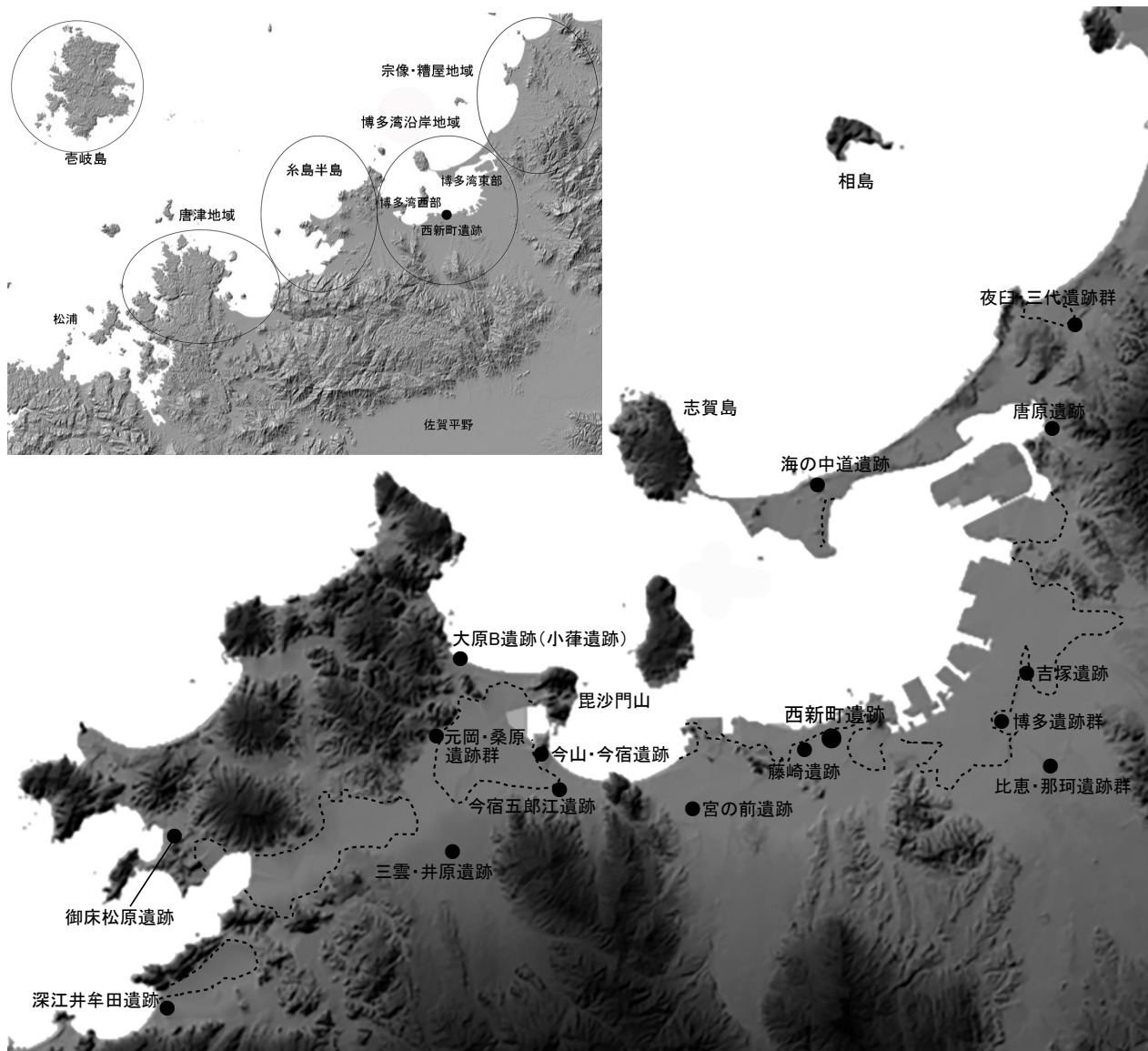
### 1 博多湾の地理的環境

#### (1) 検討にあたって

本研究の核となる博多湾は、湾口の玄界島が風浪を遮り、船が安全に停泊できる波風の穏やかな汀でもある。地理的には、湾内に志賀島、能古島、玄海島という島嶼を抱きつつ、なだらかに北西側に傾斜する海底地形で、湾中央部でも水深が約 35 m と比較的浅い。

この博多湾の特徴は、湾北部の志賀島に接続する大規模な陸繋砂州である海の中道等、発達した砂州によって外海である玄界灘と隔てられた大規模な「潟湖」で、内陸部には河口干潟や三角州が発達する。特に海の中道は、縄文海進期に主に沿岸流によってもたらされた砂により規模の大きい砂丘が複雑に展開する様相をなし、玄界灘からの荒波を防ぐ天然の防波堤となっている（第1図）。

また博多湾は「那ノ津」とも呼ばれ、多々良川、御笠川、那珂川、室見川などの大小の河川とともに、湾自体が国際交易を含む水上交通の舞台となり、ヒト、モノ、情報等の結節点としての港津が沿岸の河口部に形成されたが、これは潟湖という条件が重要であったと考えられる。



第1図 対象地域の地形と主な遺跡（縮尺任意）（国土地理院電子国土 Web 陰影起伏図より作成）

ここでは、潟湖という条件に注目し、日本海沿岸に点々と分布する潟湖という自然的・地理的・歴史的な特性を活かした古代の人々の営み、地域間交流の核としての役割と特徴を中心に先行研究を整理し、併せて西新町遺跡と博多遺跡群の自然地理的特徴を細かくみてみたい。

## (2) 潟湖の自然環境

潟湖とは、陸橋のような細く長く発達した砂州や砂丘によって、海の一部が切り離され、海岸沿いの平野域に形成された湖・内海（ラグーン）のことである。日本海側では干満差がそれほど大きくないことや西からの季節風が卓越するという気候条件から、島根県宍道湖や中海、京都府北部の天橋立と阿蘇海、青森県の十三湖など、潟湖が数多く点在する（長尾 2015）。一方、太平洋沿岸には潟湖は少なく、概して砂丘の幅も広い。潟湖は地形の性質上、そのラグーンの水深は 10 m 程度と浅いものが多く、流入する河川による土砂の堆積や近世以降の新田開発、洪水対策などのために、潟湖は埋め立てられていき、戦後は干拓事業などによって完全に姿を消してしまったものも多い。さらに現在まで残された潟湖も後世に何らかの人為的改変を受けた場合がほとんどである（長尾 2015）。

ちなみに、潟湖の形成過程としては、河川の河口部に砂州が形成され発達すると、かえって河川から流れる水は砂州によって遮られ、海に流れ込めない水の一部は河口部にたまって湖を形成する。しかし、多くの場合、海と湖とは砂州によって完全に遮断されることはないため、湖は淡水と海水が混じった汽水湖、ラグーンとなる。こうしたラグーン地形のことを、潟湖地形とも呼ぶ（石村 2017）。

また外海と連続した汽水域である潟湖には、ヨシ・ガマ・マコモなどの抽水植物などが多く生育し、こうした水性植物帯は、魚類の産卵や生育の場でもあった。さらに淡水魚類に加え、外海から魚が侵入するなど、生育条件さえ合致すれば汽水・沿岸性の魚類も確認できる。このように陸と海との接点に位置し、人為的改変が可能な水深の深さと豊かな生物多様性の高い環境が形成される潟湖は、農業や漁業、狩猟、採集など多様な活動を複合的に営む場として、生産性の高い環境を示す（長尾 2015）。

## (3) 水上交通の拠点としての潟湖

### ① 木造船に適した環境

潟湖は、外海との間に延びる砂州が波風を防ぐ防波堤の役割を果たし、その一部に開いた潮口は、外海との通行を可能にする。ラグーンは外海と隔てられているため波がおだやかで、水深が浅いことから、喫水が浅い丸木船や準構造船という弥生～古墳時代の船と調和的で、船を安全に停泊させることができると同時に、絶えず海水域と淡水域を往来して船を動かすことで、海水による船体の腐朽や船底に付着した貝類、フナクイムシの付着を防ぐことも可能である。加えて、干満の差は太平洋側と比べて日本海側では小さく、喫水が浅い船自体を砂浜など陸上に引き揚げるのが容易であり、陸上でフジツボ等の除去、船体の修理等のメンテナンスも行うなど、木造船の維持・管理に適した環境であった。

### ② 港津としての潟湖

港津のできる場所について、村井章介氏は、①船の出入りの容易さ、②波風が避けられる地形、③内陸部とのアクセス、④港の水深という 4 つの条件を挙げるが（村井 1996）、潟湖はこの①～④の条件を概ね満たすものが多い。また潟湖は、日本海沿岸においては船による一日の行程内に点々とあり、相互に連動することで広範囲なネットワーク網ができる。さらに潟湖に流れ込む河川を通じ、より喫水の浅い船に乗り換えて、内陸部との交通も盛んに行われたことで、地域間交流・流通の拠点として機能した。

ちなみに、潟湖周辺に海上からの目印となる山があれば、海上交通を行う上ではさらに良いとされる。

潟湖と地域間交流、政治勢力の関係について早くから言及したのは、森浩一氏である（森 1984 他）。森氏は、古代の港津に関係する考古資料を概観し、潟湖周辺には古墳や古代官衙、神社、寺院等の古代の遺跡が数多く分布することから、古代において潟湖地形が港津の適地として利用されたことを示した。さらに地形復元を行い、埋立前の潟湖の範囲と首長墳を含む大型古墳などの遺跡の分布が強く相関することから、潟湖が複合的生業と海上交通の進展、そして地域間交流に立脚した政治勢力の形成の大きな要因となったことを指摘した（森 1984 他）。この森氏の考察は、当時の考古学・古代史研究に十分なインパクトを与え、古代における潟湖の重要性が広く認識された。この視点での研究は、その後、高橋浩二氏や石村智氏などによる古代の潟湖を拠点とした地域間交流の研究などに継承されている（高橋 2008、石村 2017）。特に高橋氏は、この潟湖を通じたネットワークと政治勢力の形成について、「資源の多様性を基盤とする生業活動と物資流通拠点という役割の複合的な経済が推定され、水稻農耕による生産余剰が必ずしも主要な位置を占めていなかった」とし、その「物資流通機構を掌握して富を引き寄せることが畿内政権にとっても重要であった」との見解は（高橋 2008）、海の生産活動と物資流通機能を同時に検討する必要性を示している。

ただし、潟湖があるからといって、必ず大規模集落や古墳等の墳墓が集中するわけではなく、かつそうした様相が顕著な時期とそうでない時期が存在することから、海上交通の拠点として一律に評価できるものではなく、潟湖周辺に重要遺跡が集中する背景は、環境の在り方の違い、各地域・各時代における地域社会の在り方等が影響したという指摘（馬路 2015）は、留意すべき条件である。

なお、博多湾内の今津湾周辺には、古墳時代を通じて、前方後円墳を含む大規模な古墳群である元岡・桑原遺跡群と今宿古墳群が展開するが、その被葬者として海上交通を駆使し対外交渉に関わった政治勢力の存在が想定されていることから（菅波 2011）、博多湾においても森氏の視点が有効と思われる。

#### （４）博多湾の地理的特徴

##### ①潟湖としての博多湾の特徴

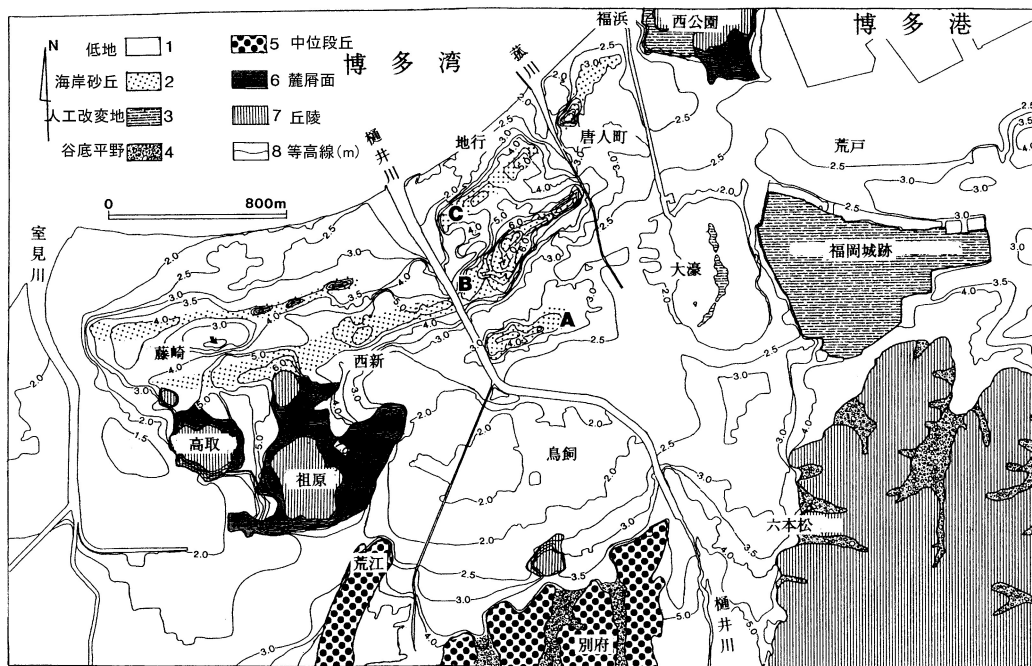
玄界灘沿岸地域が対外関係の窓口となった要因として、大陸に近いという地理的条件に加え、博多湾という大規模な潟湖を抱えていたという自然条件に負うところが少なくない（磯・黒田 2013）。

博多湾は日本海に面する潟湖の中でも大規模なもので、湾内部には今宿から今山に至る砂州を伴う今宿湾、大濠公園にその名残を残す古鳥飼湾（下山ほか 1998）などの内湾も形成される。

多くの河川が流入する博多湾の水域環境は多様で、淡水域や汽水域、内湾や外洋域によって棲息する魚種が異なる。特に湾内の塩分濃度の低い沿岸水と高い外洋水の潮境には潮汐の影響を強く受ける水域が生まれ、沿岸部に棲息する魚類のみならず、外洋から来遊するイワシ類、アジ科、サバ類やブリ類も回遊し、索餌や産卵、越冬のための回遊といった生態も考慮すると高い生産性を示す水域となっていた。

またこれらの魚類は、産卵期に浅い海域に接岸する性質をもつものが多く、その習性を利用して捕獲されることも多かったとみられ、漁労活動も発達した。河川下流域～河口～内湾には豊富な栄養塩が供給されることで豊富なプランクトンなどが繁殖し、アサリやハマグリ、ヤマトシジミといった貝類が棲息し、クロダイやスズキ、ボラなどが来遊しやすい環境が生まれた。

なお、博多湾内には泥質の海成堆積物（博多湾シルト層）が堆積するが、博多湾の南岸には海岸砂（箱崎砂層）が堆積し、砂州が形成される。その背後には沖積低地の福岡平野が広がるが、砂州背後は水はけが悪く、湿地が形成される。特に大濠公園の池底の地層には多くの潮間帯生物の痕跡が残されており、かつてここに樋井川の河口干潟が広がっていたと考えられている（下山他 2013）。



第2図 西新町遺跡・藤崎遺跡周辺の地形（下山他 1998 より引用）

## ②博多湾の海岸線の変遷

博多湾中央部に海進による海水が大規模に侵入し、広い海湾が形成されるようになったのは、およそ縄文時代早期にあたる8,000年前頃以降で（下山他 2013）、その後地域的な地殻変動や河川・潮流の堆積や浸食、潮汐運動や地形の影響、さらには近年の埋め立て工事などの要因により、現在の海岸線が形成された（第1図）。

縄文時代早期の約7,000年前になると、縄文海進と呼ばれる海面上昇がストップして高海面期となった。最盛期には現在の海水準より最大2.2 m程度高かったと想定されている（下山他 1998）。縄文海進後海面上昇がストップすると、河川によって運ばれた陸地からの土砂により、湾内は浅くなり、その後の堆積によって陸地となった部分が海側に延びてくる。よく弥生の小海退と呼ばれるが、海面低下を伴う海退ではなく、湿地の前進による堆積性の海退との意見もある（下山他 2013）。

縄文海進後も海水準は常に変動し、弥生時代後期は現在よりも1 mほど低く、古墳時代には近年の埋め立て前の海岸線に近づくが、8世紀には現在よりも1 mほど海水面が上昇する。12世紀初頭にも再び現在よりも1 mほど上昇した。14～15世紀のパリア海退では現在より1 mほど海水準が低下したとされる。なお、このパリア海退は、日本海沿岸に立地する中世前期の集落が衰退する原因の一つと言われ、青森県の十三湊遺跡などでは15世紀前半～中頃にかけて集落が砂に埋もれ、廃絶するなど、日本海側全域の港津集落にインパクトを与えた環境の変動と考えられている（村上 2009）。

## ③西新町遺跡・藤崎遺跡の地理的特徴

樋井川左岸の西新から藤崎方面にかけて、海岸に並行して3列の砂丘と砂丘間低地が連なるが、中央の砂丘列を中心に西新町遺跡・藤崎遺跡が展開する（第2図）。

砂丘全体は長さ2.5 km、幅約170 m、標高8 mを測り、3列中央の砂丘列と最も南側の砂丘列との間には、標高3 m未満の低湿な環境を示す砂丘間低地が明瞭に認められる。中央の砂丘列と最も北側（海側）の砂丘間は、主に海浜砂で構成され、この一部にも藤崎遺跡や西新町遺跡の遺構の一部が検出されている。よって、遺跡は中央の砂丘列を中心としながら、北側の砂丘間低地まで一部遺構が展開する（下

山他 1998)。このことから、基本的に遺跡は直接的に波風が当たる砂丘の海側斜面を避けて、砂丘間の鞍部に集落が形成されることが最大の立地的な特徴である。

中央の砂丘列では、藤崎遺跡で弥生時代前期の甕棺墓を中心とする墓地が発見されており、少なくとも弥生時代前期以前には陸化していたと考えられる。しかし、中央の砂丘列の海浜砂層最上部に弥生時代後期終末の土器が二次的に堆積していたことから、弥生時代後期まで中央砂丘列北側の一部は海浜の状態にあったとみられる（下山他 1998）。



第3図 博多遺跡群周辺の地形（下山他 2013 より引用）

最も北側の砂丘列は、現在西南学院大学構内に一部保存されている元寇防塁に沿って東西に延びるが、幅 50 m 未満と狭い。この北側の砂丘列より海側は江戸時代以降に陸化した。

なお、最も南側の砂丘列は、縄文海進期の最大海進期に形成された古鳥飼湾のバリアとほぼ一致し、縄文時代早期から湾奥部において、波浪によって削られた古砂丘砂の再堆積によって形成された小規模な砂丘と考えられている。最も南側の砂丘の南は麓原山や紅葉山などの独立丘陵があるものの、概ね後背湿地となっていた。

#### ④博多遺跡群の地理的特徴

博多遺跡群では、砂丘Ⅰ・砂丘Ⅱ・砂丘Ⅲという海拔 3 m を超える 3 列の砂丘列と、その間の砂丘間低地の組み合わせから構成されている（第3図）。最も南側の砂丘Ⅰ上面には数十 cm の厚さの遺物を含む黒土層が形成され、弥生時代から古代までの遺構が分布する。砂丘Ⅰには弥生時代中期前半には集落と墓地が形成されるが、弥生時代後期後半になると砂丘Ⅰ南側で玉類製作遺構が見つかるため、この時期には完全に陸化していたとみられる。

古墳時代前期の遺構は砂丘Ⅰ～砂丘Ⅱの南半にかけてみられ、古墳時代前期では遺構は明確ではないが、多量の大型鉄滓と蒲鉾形の鞆羽口から、高度な鉄器生産の存在が予測されている。また 5 世紀前半の全長 56 m の前方後円墳である博多 1 号墳が築造される。

砂丘Ⅱの南半には弥生時代中期の甕棺墓が確認されており、砂丘Ⅱ南半は弥生時代中期には陸化していた。砂丘Ⅱ北半には奈良時代の遺構が確認されており、そのころまでに陸化していたとみられる。

最も北側の砂丘Ⅲでは、11 世紀の遺物が見つかるものの、主として 12 世紀以降の遺物が中心となる。砂丘Ⅲでは、一般に黒土層の発達も貧弱で、陸化してすぐに遺跡が形成されたと判断される（下山他 2013）。この砂丘Ⅲから海側の海拔 2 m 前後の低地では、元寇防塁とみられる石塁遺構が発見されることから、11 世紀末までには陸化していたとみられる（下山他 1998）。

## 2 玄界灘沿岸地域における歴史的環境

### (1) 検討にあたって

これまでみてきたように、玄界灘沿岸地域は、その環境から大陸・朝鮮半島との対外交渉の列島側の窓口となった地域である。このうち、本研究の対象とする弥生～古墳時代、中国とは王権間の象徴的な政治関係であったのに対し、朝鮮半島とは政治交渉だけではなく、より実質的な関係も含まれていたとされる（上野 2020）。中でも朝鮮半島南部との繋がりは、縄文時代から黒曜石をめぐる交流を中心として断続的で少ないながらも存在し、弥生時代になると中国の史書に記された、対馬や壱岐、唐津、糸島、福岡を主なルートとする鉄素材をはじめとした、朝鮮半島からのヒト、技術、情報、道具等の交流ネットワークがより活発に機能したことが考古学上でも実証されている。

ただし、先行研究によりこの日韓の交流ネットワークは、通時的かつ直線的にその関係が繋がっていたわけではなく、交流の頻度には高低があり、ネットワークの主導権も朝鮮半島南部や列島の地域集団同士の関係により変化した。

中国・朝鮮半島と列島との通交関係は、本研究における議論の基盤として、かつ弥生・古墳時代の列島社会を考えるためにも重要な研究素材である。ここでは通交関係の時代的変遷と特徴を含めた、玄界灘沿岸地域における歴史的動向を先行研究から振り返り、本研究の基礎的な情報を整理したい。

### (2) 玄界灘沿岸の地域間交流

#### ①玄界灘沿岸地域における集落研究の動向

弥生時代の開始に伴い、玄界灘沿岸地域において水稲農耕を中心とする農耕社会が成立する。福岡平野では御笠川、那珂川中・下流域に遺跡が進出し、大きく遺跡立地が変わる。これは縄文時代晩期の寒冷化により海岸線が後退し、地形的に安定することで、沖積低地における水田開発が可能になったことを示すとされる（宮本 2013）。なお、弥生時代初頭、板付遺跡・那珂遺跡群・有田遺跡群など初期環濠集落が発見されているが、博多湾沿岸地域の海浜部の砂丘においても藤崎遺跡や今宿遺跡などで墓地としての砂丘の利用が始まっている。その後砂丘の利用は一旦中断するものの、弥生時代中期中頃～後半にかけて、藤崎遺跡・西新町遺跡では砂丘上に墓地とともに集落が形成される（常松・宮井 2013）。

前期末以降になると、玄界灘沿岸地域では地域的なまとまりである「クニ」とその核となる拠点集落が形成され始める。具体的には糸島市及び福岡市西区の一部が『魏志』倭人伝でいうところの伊都国と考えられてきたのに対し、福岡市西区以外の福岡市域は概ね「奴国」の領域に該当すると考えられてきた。この伊都国や奴国の比定地を含む博多湾沿岸各地域は現在では市街地が連綿とつながりその境界は不明瞭であるが、弥生時代当時はそれぞれの低丘陵や山塊、それに陸側に大きく入り込んだ入り江などによって分断され、それぞれ地形的に独立していたと考えられている（小澤 2013）。

弥生時代中期後半～後期初頭の比恵・那珂遺跡群や今宿五郎江遺跡では、集落規模が急速に拡大し、大規模な拠点集落に発達する。小澤佳憲氏は当該期の集落の大半が一斉に集落規模を縮小・消滅し、その集落に居住した集団は規模が拡大した拠点集落に移住する現象を「集住」と呼ぶ（小澤 2013）。この現象は、畿内では既存の拠点集落が衰退し、丘陵上に集落が移動することが早くから知られおり、列島の広範囲において集落動態上の画期として認識されている。なお、小澤氏の指摘については、必ずしも一部の集落のみに集住したとはいえず、「画期」というよりもやや時間幅のある現象とする見解もあ

るが（久住 2008・2010）、後期初頭以降、広域で居住集団の離合集散が活発になったといえる。

博多湾沿岸地域の人口増加の第一のピークは弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけてとされ（石井 2009）、多くの集落が出現かつ大規模化するが、後期以来の内陸部の拠点集落も存続するものが多い。後期後半以降、このような人口増加に加え、集落の内部構造における区画の出現などの格差が顕在化する点からみて（武末 2002）、先の後期前半～中頃に進行した集団の再編は、集団の移動により集団関係が質的に変化し、つまり集団の序列化を伴うものであったと考えられている（小澤 2008）。ちなみに、この時期に海の生産活動に関わる人々が内容・質的にも大きく変化した可能性がある。

また弥生時代後期～古墳時代前期前半、博多湾沿岸の海浜部の砂丘上に朝鮮半島系土器や西日本各地の外来系土器が多数出土する遺跡の出現について、白井克也氏は博多湾沿岸地域が一貫して西日本規模での対外交路ルートの結節点となることを論証し、これを「博多湾貿易」と呼んだ（白井 2001）。

古墳時代前期後半になると、比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群、西新町遺跡など博多湾貿易の主体となった遺跡のいずれにおいても住居数が激減し、前期末～中期初頭の段階までには集落の多くが廃絶、古墳の築造も減少し、「博多湾貿易」が衰退する。「博多湾貿易」やその中核を担った集落の衰退の直接の原因は様々な議論があるが、倭王権における政治変動と広域の地域ネットワークの再編をはじめとした様々な要因が複合的に作用した結果である可能性が指摘されている（辻田 2013）。

5世紀代、博多湾沿岸地域の集落の多くは断絶し、住居数も激減する。その後、住居数は5世紀後半～6世紀代にかけて漸的に回復し、6世紀中葉～後半に再び人口増加を迎える（石井 2009）。

## ②いわゆる「海村」と「貨幣」について

武末純一氏は、弥生時代を通して海を舞台に拡大する地域間交流について、弥生時代の農村に対して農具が少なく漁具の出土比率が高い海浜部集落を「海村」と名付け、「海村」が担った対外交路は北部九州の「国」の形成にも大きな役割を果たしたと論じた（武末 2009）。中でも海村の典型例として糸島市御床松原遺跡や対馬の集落遺跡を挙げ、御床松原遺跡では石庖丁の出土量は通常の農村の1/5程度しかなく、加えて地理的条件と文献史料から海上活動の比重が高かったとみられる対馬においても石庖丁の出土量が少ないことから、石庖丁の出土比率が「海村」の目安になると指摘する（武末 2009）。さらに『三国志』「魏書」東夷伝弁辰条の、倭人は朝鮮半島南部の韓、東北部の濊とともに、鉄を朝鮮半島東南部の洛東江流域に存在した弁辰諸国、加耶の地で鉄を入手したとの記事から、鉄をめぐる交易に海村の人々も深く関わったとする（武末 2009）。

このように弥生時代の後半期には、玄界灘沿岸地域と朝鮮半島南部との日韓両地域の海村世界での継続的な交流の基礎のもと交易活動が展開し、その上位に北部九州の国々と中国王朝本土や楽浪郡・帯方郡との外交交渉が位置するという、対外交渉の重層構造が形成されたとした（武末 2009）。

加えて弥生時代中期～後期、漢代に流通した貨泉や五銖銭等を中心とする「貨幣」が列島にもたらされるが、この貨幣は海浜部の集落で出土例が多くかつ生活域から出土することから、青銅器原材料や威信財としてではなく、貨幣は交易の場での対価として使用されたことを指摘した（武末 2009）。

森本幹彦氏は、博多湾沿岸地域に流入する貨幣の分布及び出土状況は楽浪系をはじめとする朝鮮半島系土器の分布状況と概ね一致するが、朝鮮半島系土器が多く出土する三雲・井原遺跡や比恵・那珂遺跡群などの拠点集落からは貨幣がほとんど出土しないことから（武末 2009）、貨幣はある程度列島側で選択的に受容し、貨幣としての使用は消極的という面もあったとする（森本 2017）。

古澤義久氏は、中国から朝鮮半島北部の貨幣流通圏では後漢代以降、五銖銭が主体で、貨泉をはじめとする王莽銭は少数にとどまる構成であるのに対し、列島で出土貨幣が貨泉に偏る状況は意図的な選別

による可能性が高いことを指摘し、銭種構成の不一致から大陸との交易の対価としての貨幣用途に疑問を呈している（古澤 2015）。

以上の先行研究と『魏志』の記事にある「諸の市買には皆鉄を用いる。中国の銭を用いるが如し。」などから、古墳時代開始期を境にして貨幣の使用頻度が減少するため、「博多湾貿易」において貨幣が主体的に用いられた形跡は認められないと考えられる。

また武末氏は「海村」の交易ネットワークは、内陸部の「農村」からなる集落間関係とは別のネットワークであるとする（武末 2010）。しかし、鉄製農具などの鍛造鉄器は各集落で消費され、上位層に独占されるものではなかったとする見解（野島 2009）や、弥生時代後期後半～終末において「海村」間の交易ネットワークは中国王朝周辺での情勢の混乱の影響が比較的小さく、上位層が関わる対外交渉とは異なるローレベルのネットワークがこの時期にも存在したとの指摘（谷澤 2020）、加えて魚津知克氏は海浜部に所在する古墳の築造背景について検討する中で、「モノ・技術・情報の流通が政治権力によって制御され、生産の基盤となったという「統治の論理」で理解されるが、その「統治の論理」を受け入れつつも、生産を生業化する「暮らしの論理」を保持して生活した一般の人々という2つの論理のせめぎ合いの中、古墳時代社会が構成され推移していった」（魚津 2017）ことなど、交易の実態は様々であったと理解され、交易ネットワークの重層構造の解明は、本研究でも重要な視点と思われる。

ちなみに、武末氏は長崎県原の辻遺跡における銅権、島根県田和山遺跡における楽浪系とされる石硯・研石の存在などから、恒常的な対外交渉は偶発的な交渉で行えるものではなく、交易港や交易の日時などの選定とともに、統一化された尺度・交換レートが必要になるため、弥生時代後半期の日韓の海村では、交易の際に棹秤で銭をはかり、それを文字で記録した可能性を指摘する（武末 2009）。

### （3）いわゆる「博多湾貿易」の成立と展開

白井克也氏は、弥生時代～古墳時代前期の朝鮮半島系・楽浪系土器の出土状況から、朝鮮半島系土器を多量ないしは集中的に出土する遺跡が継続的に営まれているわけではなく、日韓における交易拠点となる地域・集落は時代によって移り変わることを示した（白井 2001）。具体的には日韓の交易拠点は、弥生時代中期には多数の弥生系土器の出土などから朝鮮半島南部の勒島遺跡におかれ（「勒島貿易」）、弥生時代中期後半から後期初頭にかけては、多量かつ多器種の楽浪系土器の出土などから、壱岐の原の辻遺跡と糸島市三雲・井原遺跡に交易の拠点が移動した（「原の辻貿易」久住猛雄氏は「三雲・原の辻貿易」（久住 2007））。弥生時代後期終末には西日本各地の海浜部に交易の拠点が出現することによって、交易機構は拡大し、古墳時代前期になると博多湾沿岸が対外交渉の核（「博多湾貿易」）になるとした（白井 2001）。

その後、久住猛雄氏はこの白井氏のモデルを具体的な資料をもとに深化・発展させるが、特に「博多湾貿易」を弥生時代後期終末～古墳時代初頭の「前期」と古墳時代前期前半の「後期」に分け、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけて一貫して対外交渉の主導権は北部九州にあったとした。博多湾沿岸地域では博多遺跡群や比恵・那珂遺跡群、西の今山・今宿遺跡群を核とする博多湾沿岸の複数の遺跡群に楽浪・三韓系土器の出土が分散的にみられる在り方を「前期博多湾貿易」とした（久住 2007）。続く「後期博多湾貿易」段階になると、朝鮮半島西南部に由来する土器が増加し、その分布も西新町遺跡に集約することから、博多湾沿岸の集落は国際的な取り決めをもとに国際貿易港となった西新町遺跡を軸として、高温操業を示す羽口や椀形滓、多数の鉄片など、列島最高・最大規模の鉄器製作工房である博多遺跡群、土器製塩は今山・今宿遺跡、内的な交易拠点としての比恵遺跡といった、博多湾という一定の範

圏内で各種生産が専門特化することを示した。つまり、地域内部に土器生産・鉄器生産・塩生産など個々の手工業生産拠点が相互に分業的、補完的な機能分化しつつも全体としては有機的に関連しあって一つのおおきなまとまりとして結合する交易ネットワークに再編されるとした（久住 2007）。

古墳時代前期中葉以降、西新町遺跡が急速に衰退し、少なくとも4世紀後半にはその役割を終える。同時期の玄界灘沿岸地域でも集落は激減する。4世紀末になると、博多湾沿岸地域では先の博多湾貿易段階とは異なる形で、朝鮮半島南部の金官加耶を中心とし、大加耶、新羅や百済など朝鮮半島諸地域との交渉や列島内の地域勢力による招聘などにより、列島各地に一定数の渡来人が渡来する。この渡来人は初期須恵器生産や鍛冶、馬匹生産などの先進技術の入手とその生産活動などに従事することで、各地に新たな技術や生活様式を扶植した（辻田 2013）。また有明海沿岸地域でも、菊池川流域の江田船山古墳のように、半島との直接的な対外交渉ルートを持つ地域勢力が登場しており、列島内の諸地域の地域勢力が多角的に対外交渉の担い手として活動したことを示している。

#### （4）文献史料における博多湾の海人集団の動向

歴史書における玄界灘沿岸地域の漁労活動の様子について、『魏志』倭人伝に、「今倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え、文身し亦以って大魚、水禽を厭う」とあり、倭の海人（水人）が盛んに海に潜って魚や貝を採った様子が記される。また、『日本書紀』の「磯鹿海人」、『万葉集』における志賀の海人を対象とした歌、10世紀の『倭名類聚抄』では複数の「海部郷」の存在が記される。

特に『万葉集』にみられる海の生産活動としては、潜水漁（鮫玉採取）、藻刈り、釣漁、網漁、筌漁などがあるが、「藻塩焼く」で知られる志賀の海人による製塩活動の様子は多く詠まれている。なお、大宰府は対馬への兵糧を送る船師（舵取り）を筑前国宗像郡の百姓宗形部津麻呂に命じたが、津麻呂は老齢で役目を果たせないということで、糟屋郡志賀村の白水郎、荒雄に交替したものの、肥前国松浦県美弥良久崎（五島列島の福江島三井楽と比定されるが、異論もある）より対馬を目指して海を渡ったが、暴風雨により帰らぬ人となったという歌から、宗像の海人と志賀の海人の親近性が窺えると同時に、海人が広く海上交通を担っていたことが具体的に確認できる。

『日本書紀』には、三韓征伐にあたって、吾瓮海人（北九州市藍島が根拠地か）、磯鹿海人（福岡市志賀島が根拠地か）を遣わしたとの記事から、玄界灘の海人は外洋航海の舵取りを実際に担い、平和な時は別にして、水軍にもなる性格を兼ね備えていたとされる（岡崎 1968）。

10世紀に編纂された『倭名類聚抄』には、玄界灘沿岸地域では「筑前糟屋郡阿曇（雲）郷（現在の福岡市東区～糟屋郡新宮町付近）」「宗像郡海部郷」「怡土郡海部郷」など、海人とかかわりの深い郷名をみることができる。この「海部郡」「海部郷」は、福岡県以外でも大分県や愛媛県、和歌山県、三重県、島根県など西日本の各地に地名や記録に残り、これらの地域は倭王権のちの律令国家に魚介類、海藻類などの「贄」「調」と呼ばれる特産物を貢納するなど、王権の祭祀等に重要な役割を果たした。

さらに海人の信仰・儀礼については、『魏志』倭人伝にも、「倭の水人が体に入れ墨をして、大きな魚、水鳥に襲われないようにする」とあり、「胸形：むなかた」は、胸に文身、蛇のうろこの形をした入れ墨をしていたことを指すという見解もある（金関 1979 他）。以上、海というのは非常に危険に満ちており、朝鮮半島までの外洋航海を直接的に担った玄界灘の海人は航海や漁業に際しての危険を防ぐため海の信仰が発達したとみられる。『古事記』『日本書紀』には、いずれも玄界灘沿岸の特定の海人集団が崇拝した、宗像、住吉、綿津見の三海神が登場し、玄界灘沿岸地域の海人集団の信仰が王権にとっても重要視されたとみられることは注目される。ちなみに、「記紀」の神統譜においては、「綿津見神」と「住吉神」

が同系同類の神として位置づけられる。

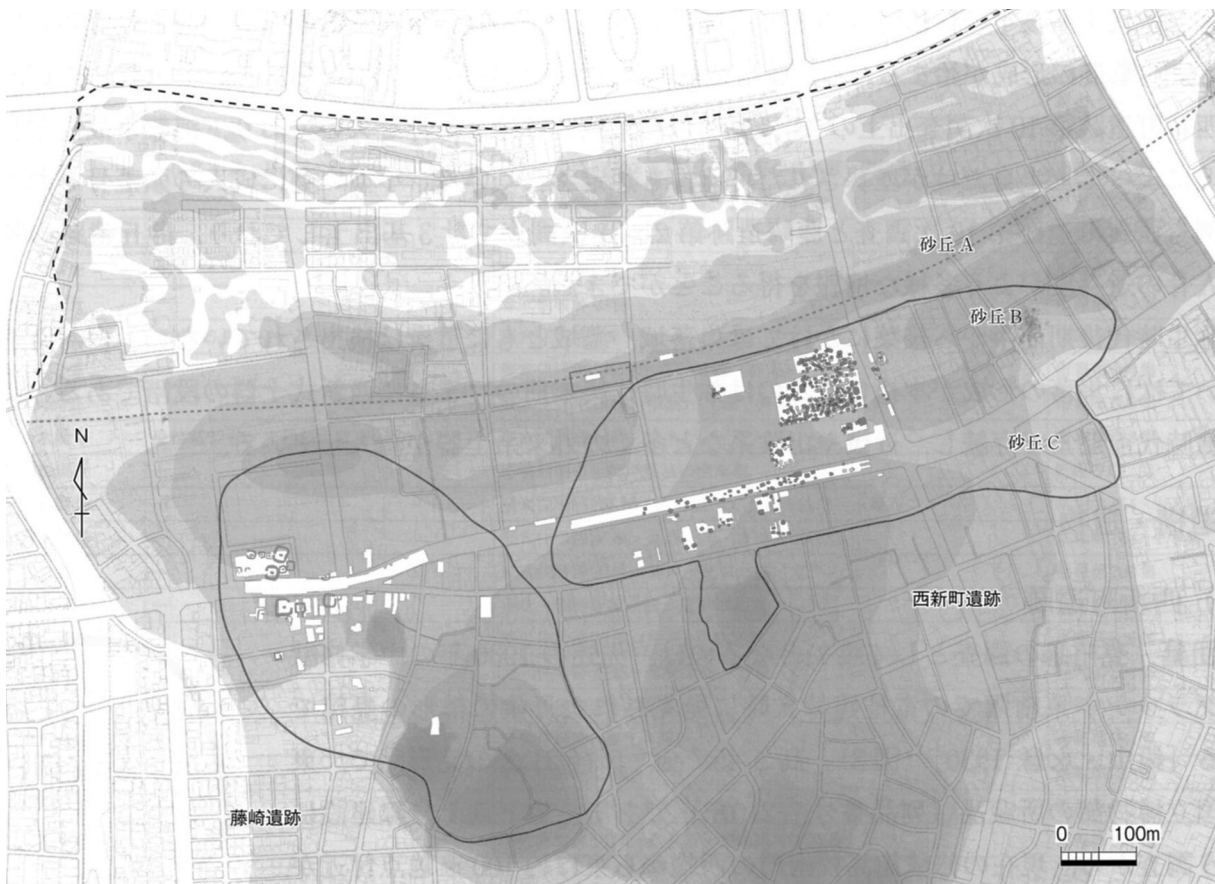
なお、新川登亀男氏は、住吉神は摂津、長門、筑前、壱岐、対馬といった畿内から朝鮮半島への航路の重要地点に配置されていることから、倭王権の西進と朝鮮半島諸国との通交の守護神としての性格を指摘する（新川 1988）。筆者は、5・6世紀段階、住吉神・綿津見神を奉じた後の阿曇・住吉の海人集団は、筑紫君や江田船山古墳の被葬者等の北部九州の伝統的な地域勢力と特に結びついていたのに対し、宗像氏は倭王権や日本海沿岸の諸勢力と結び付いていた可能性を考えている。加えて、志賀海神社の綿津見神の三神を奉じ、海人の統率者でもあった阿曇氏は、王権の活動の重要な部分となる宴会と祭祀に、アワビなどの海産物を安定して供給した。このことで、律令時代以前の6・7世紀、倭王権を中心とした国家的な統一が進行する中で、膳氏とともに王権への供御をつかさどる有力氏族として仕え、後には律令体制の中で「贄」「調」の貢納物を出納し、調理する大膳職の役割を担うこととなった。

### 3 西新町遺跡のこれまでの成果

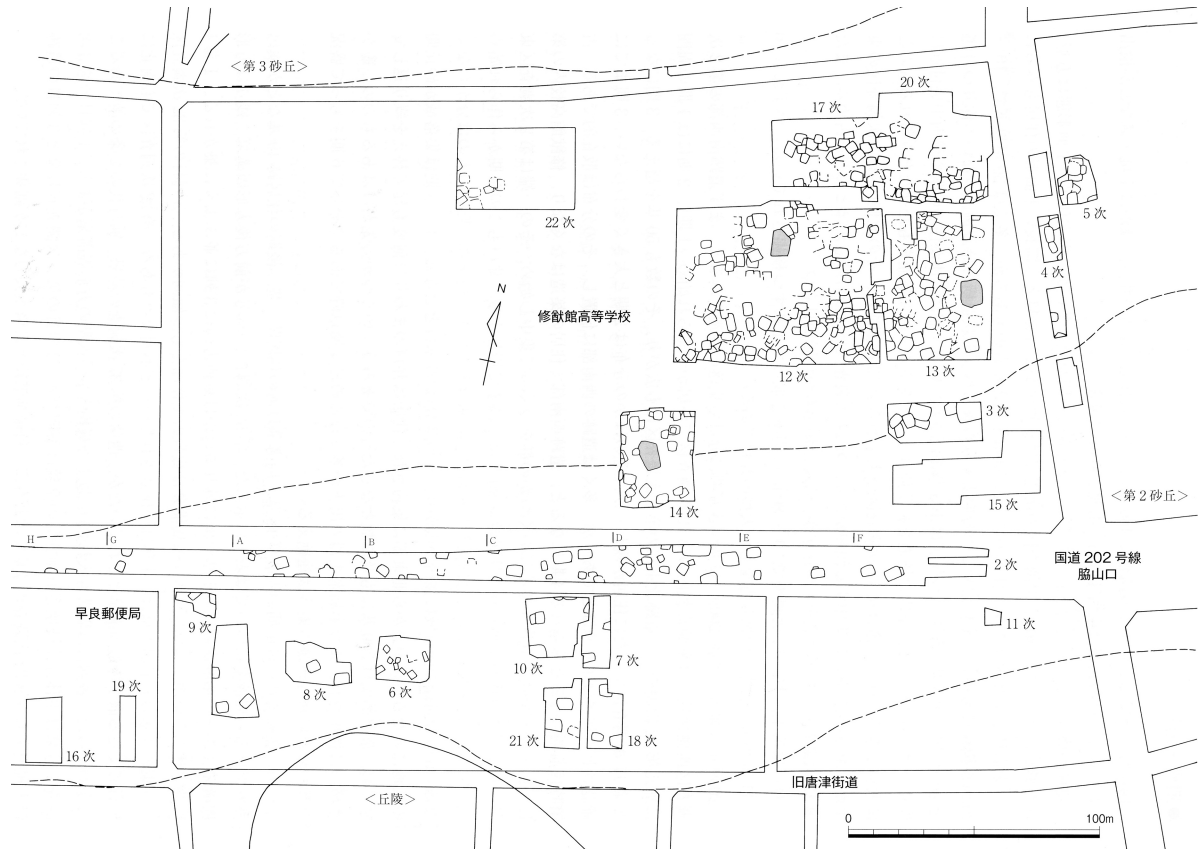
#### (1) 西新町遺跡の調査成果概要

古墳時代前期前半、倭と朝鮮半島との一大交流拠点で、本研究の核となる福岡市西新町遺跡について、発掘調査及び先行研究に基づいた、研究の到達点とその特質について振り返ることにしたい。

本遺跡は、室見川河口の東側、博多湾の海岸線に平行して東西に長く延びる砂丘上に位置し、遺跡範囲は東西 430 m、南北 250 m と想定されている。これまでの発掘調査で 520 棟を超える弥生時代後期終末～古墳時代前期前半を中心とする竪穴住居跡が確認されている。弥生・古墳時代当時、遺跡北端から 200 m 程度北で海岸線に至ったとみられる。遺跡周辺には博多湾に沿って形成された 3 列の砂丘（浜



第 4 図 西新町遺跡・藤崎遺跡の微地形 (1/10,000) (福岡市博物館よりデータ提供)



第 5 図 西新町遺跡遺構全体図 (1/3,000) (福岡市史 2013 より引用)

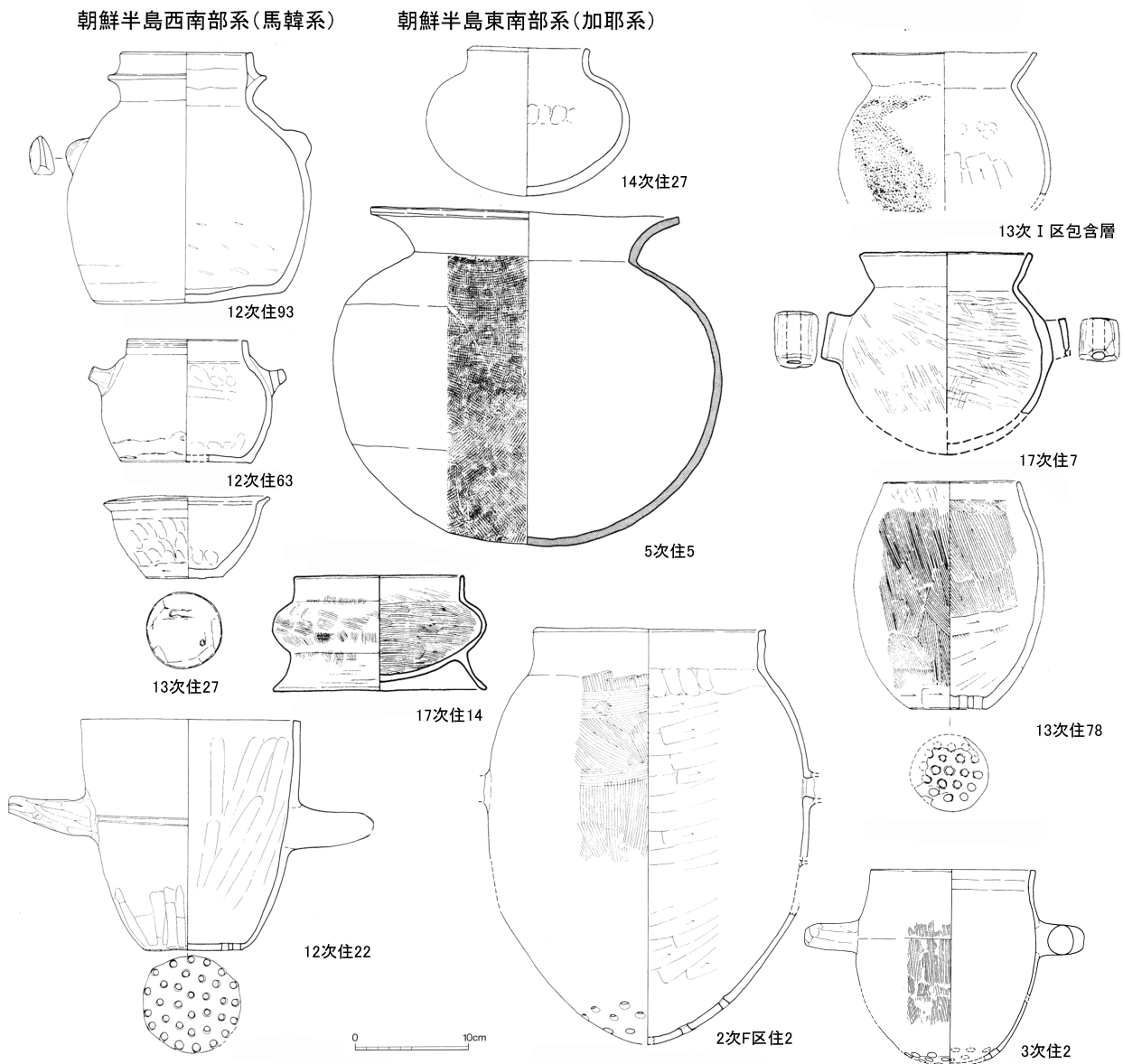
堤)が存在し、遺跡は最も海側の元寇防塁が築かれた砂丘と中央の砂丘との間の鞍部を中心に集落が展開するが、波風の影響がある砂丘の海側斜面を避け、砂丘間の鞍部及び内陸側斜面に集落が営まれたためとみられる。この自然環境や地形的な制約が集落の展開に大きく影響する (第 4 図)。

遺跡の調査は、主に福岡市教育委員会によって継続的に実施されているが、1998 年以降の福岡県教育委員会による県立修猷館高校大規模改築工事に伴う発掘調査 (12～15・17・20・22 次調査) によって、古墳時代前期の列島ではほとんど例をみないカマド付竪穴住居跡、同時期の列島内では群を抜く量の朝鮮半島系土器に加え、畿内系・山陰系を中心に瀬戸内系・東海系など西日本各地の土器を中心とする多量の遺物が出土した。この成果から、「加耶の鉄」と呼ばれる鉄等の対外交易のため、朝鮮半島南部の一定数の渡来人が一時滞在するとともに、西日本各地の人々もここに集まり、混在し交易を行っていたことが想定されている。ただし、本遺跡で認められる半島の生活様式は、周辺地域に定着・拡散することはないことも大きな特徴である。

本遺跡の調査成果によって、土器の移動現象をもとにした 3・4 世紀の具体的な日韓交渉を論じる下地が整ったと評価されるとともに (中久保 2017)、遺跡の立地の特殊性、生業・生産、交易・流通、儀礼、集団構造など、列島規模での社会構造を検討する上で重要な素材を提供したといえる。

遺跡は、西に隣接する藤崎遺跡とあわせると、砂丘上には弥生時代を通じて墓地が営まれるものの、中期以降小規模な集落が営まれるにすぎなかったが、古墳時代前期初頭以降、博多湾沿岸地域における集落・居住域が急拡大する動きに合わせて、西新町遺跡も大規模集落として急速に発展する。

遺跡の範囲については北端が 17 次及び 20 次調査でその北限が捉えられ、また 13・20 次東端では地形が落ち込み、竪穴住居が少なくなるため、このあたりで西地区と東地区は分離され、大きくは西地区と東地区に分かれる (武末 2010)。集落の構成は、弥生時代後期後半～終末には西地区の南西側を中心



第 6 図 西新町遺跡出土の半島系土器 (1/6)

に竪穴住居が散在するが、古墳時代前期前半以降、竪穴住居が激増し、次第に中央から北東側に集落の中心域が移動することが指摘されており（武末 2010）、時期が新しくなるにつれ南側から東側に集落域が拡大する。なお、考古学的時期区分でいえば、最大 100 棟前後が併存していたと復元されるが（第 5 図）（重藤・下原 2009）、その実態は竪穴住居 3～20 棟を集落構造の基礎単位とし、近接した範囲において居住域が密集した状態であったとみている。

## (2) 朝鮮半島系遺構・遺物の様相

遺跡から出土した甗や壺等の多種多様な朝鮮半島系土器は、その形態と特徴から忠清南道、全羅南道、慶尚南道など朝鮮半島西岸～南岸地域の土器から主に構成されるが、特に朝鮮半島南西部の百濟（馬韓）を中心とした地域の土器が目立つ（第 6 図）。なお、本遺跡以外の遺跡で出土する朝鮮半島系土器は壺等の限定された器種であることがほとんどであるが、本遺跡における朝鮮半島系土器は貯蔵器・供膳器が多い傾向にあり、甗などの煮沸具も一定の割合を占める。以上のことから、交易に加え、滞在・

居住を伴う日韓交流の在り方を復元することができる（中久保 2017）。

朝鮮半島系土器の分布は、遺跡東側では半島東南部の加耶系土器が目立つのに対し、遺跡西側では甑など百濟（馬韓）系土器が主体となるとの指摘がある（武末 2010）。このことから、本遺跡の半島系の人々は、遺跡東側は加耶系、西側は百濟系が主体の集団に分かれていたとも解されるが、西側でも東寄りを中心に加耶系の土器がみられるため（武末 2010）、きれいに区分できるものではない。ちなみに、カマド付竪穴住居と炉を有する竪穴住居では、住居の平面形態が異なることやカマドの煙り出しの存在など、カマド付き竪穴住居の外観は一目で分かるかと予測され、集落景観上においては、カマドの有無で差異が表示されていたとも考えられる。

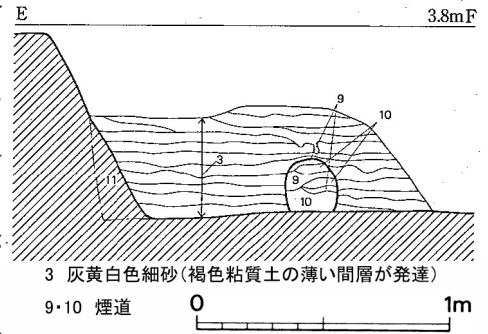
また、馬韓系の有孔把手を有する布留系甕（第6図17次住7）、土師器の技法で模倣された甑（第6図2次F区住2）などの模倣土器の存在から、倭人と百濟・加耶の人々が混在していたことを示す（武末 2010）。

なお、この状況について、在地の人々が渡来人の生活様式を受容したのではなく、渡来人からの製作依頼によるものもあったとする（重藤 2018）。ただし、土器の量からすると、土師器が圧倒的で、カマドにおいても煮沸にあたっては甑とともに布留系甕などの土師器甕も使用していたと想定される。

さらに、竪穴住居の約20%を占める造り付けカマドは、一つ掛けで朝鮮半島のものと同じ（武末 2010）、半島のオンドル状遺構と称されるものと類似していることから、朝鮮半島の渡来人がもたらした知識・技術によって構築されたとみられる（重藤 2009）。ただし、造り付けカマド付竪穴住居と朝鮮半島系土器は必ずしも共伴関係にはない。武末

純一氏によると、造り付けカマド付竪穴住居は遺跡のやや東に偏って分布しており、居住者の出自などに起因する可能性を指摘する。加えて、炉を設置する住居はほぼ同数存在するが、カマドの影響で、偏在炉が多いとされる（武末 2010）。これは、これまで住居の中心にあった炉を囲んだ生活から、火処と食事場所が分離され始めたことを示しており、生活様式も大きく変化していたと考えられる。なお筆者の感覚的なものであるが、本遺跡で検出したカマドは橙褐色粘土と砂を互層状に積み上げて構築するものと（第7図）、黄白色を呈するしまったやや粘性のある砂で構築するもの（第8図）がある。このうち、後者は、砂に炭酸カルシウムを主とする貝粉や海水に由来する炭酸マグネシウム、あるいは製塩作業に伴うにがり凝固剤として固めて構築したものであった可能性があり、カマドの構築技法は列島内で変容した可能性がある。

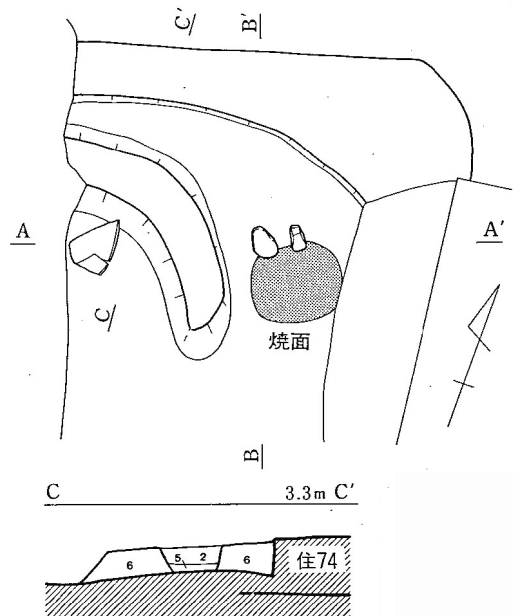
加えて、カマドにおける米を蒸す調理方法の導入について、遺跡ごとに粘り気の異なる米品種を一緒



3 灰黄白色細砂(褐色粘質土の薄い間層が発達)  
9・10 煙道

第7図 カマド構築状況

(互層：17次住1カマド煙道、1/30)

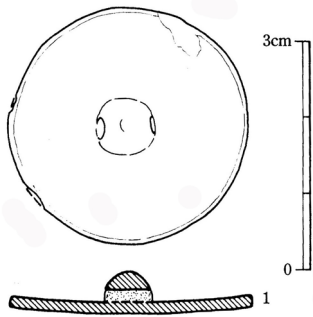


1. 暗黄灰色細砂(覆土)
2. 1+明黄灰色細砂、炭混じる
3. 暗赤褐色粘質土(焼面)
4. 明黄灰色細砂+暗赤褐色細砂
5. 暗黄灰色細砂+明黄灰色細砂
6. 明黄灰色細砂(カマド構築砂、粘性有)

0 1m

第8図 カマド構築状況

(黄白色粘質砂：12次住128カマド煙道、1/30)



第9図 小型素文鏡 (実大)

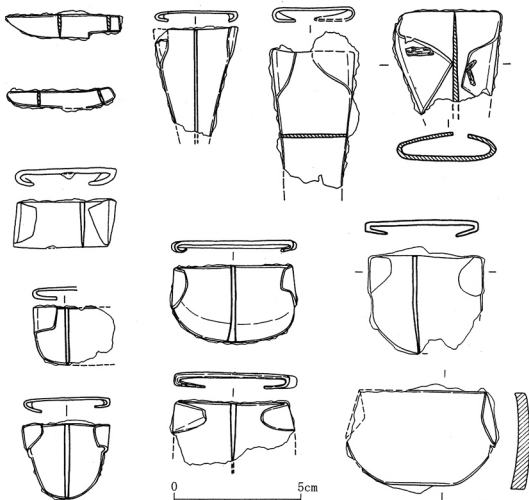
に調理する必要があったこと、蒸した米は保水率が低く傷みにくいとの指摘（小林 2017）や甗を用いた炊飯法は大量調理に向いているという特性は、砂丘上に立地し、漁労活動や長距離の海上交通を担った西新町遺跡の条件と調和的であることは、注目できる。

### （3）列島内交易の様相

先述したように、本遺跡では古墳時代前期初頭～前半にかけて、畿内系、山陰系、吉備系、東海系など西日本各地の土器が出土し、西日本各地の人々も集まり、列島内交易のセンター的機能を有していたとみられる。

ちなみに、弥生時代後期終末になると、博多湾沿岸地域をはじめ、瀬戸内地域、山陰地域、吉備地域、四国地域、畿内地域、伊勢湾沿岸地域など、列島西部各地域で砂洲や河口、河川沿岸など港津を意識した集落立地を示す交流拠点が出現し、広域ネットワークが形成される。これらの拠点集落は庄内型甗や他地域からの外来系土器の種類や量が豊富に認められることから、遠隔地からの鉄をはじめとする外部物資などの財や情報など、地域間交流の活発化に伴い、流通・経済面が社会維持のため重要視され、出現・発達したと考えられている。

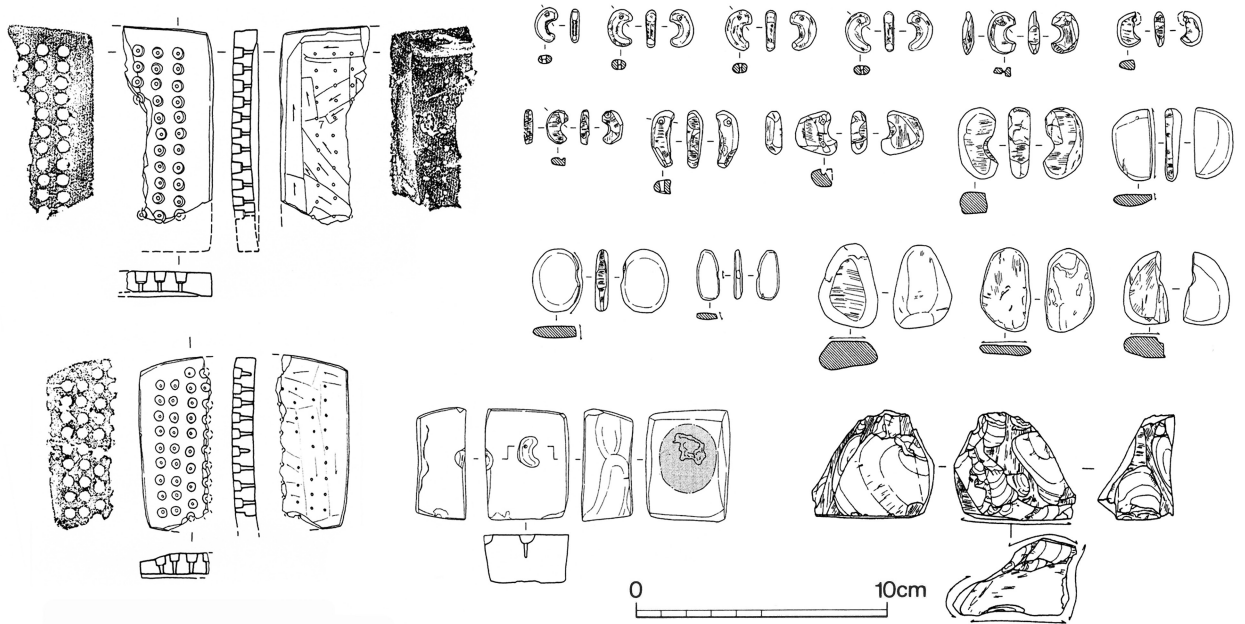
特に多くみとめられる山陰系土器は大半が在产地品であるが、その故地の製品と酷似することから、山陰との恒常的な交流がうかがわれる（久住 2004）が、単なる搬入というより、より定着的なものであったと評価できる。加えて、山陰系との地域間交流を示すものとして、碧玉素材に加え、17次調査1号住居跡で出土した小型の素文鏡は、鳥取県長瀬高浜遺跡出土鏡群との類似性から、山陰地域からもたらされた可能性が指摘されている（第9図）（重藤 2006）。また小型品である鉄鋤先について、重藤輝行氏は刃先が角になり、研ぎ減りがなく、刃縁に窪みや段がないといった、使用痕跡がなく実用に耐えない、小型品で刃部が形成されていないものを「ミニチュア鉄器」と呼び、朝鮮半島の鍛冶工人と関連する遺物であると指摘した（第10図）（重藤 2009）。先の長瀬高浜遺跡でも本遺跡例と類似する小型品で刃部が形成されておらず、研ぎ減りといった使用痕跡が確認できない未使用品の可能性が高い鉄鋤先5点、鉄鎌1点が出土する。長瀬高浜遺跡のこの非実用の小型品について河野正訓氏は、一過性のものではなく集落存続時期全般にみられること、多種多様であること、祭祀遺構からの出土が目立つことから、祭祀に利用するための製品であるとし、地方独自の祭祀を行っていたと理解する（河野 2014）。このよ



第10図 ミニチュア鉄器 (1/3)

うに河野氏の見解も踏まえると、本遺跡のミニチュア鉄器は山陰系譜のものであった可能性があり、そうであるならば本遺跡では山陰系の祭祀形態の存在も認められることから、山陰の人々との恒常的な交流に加え、山陰系の人々が集落内に一定数居住していたことを実証できると考えている。

その他、瀬戸内型地方や大阪湾沿岸に由来する漁具も列島内交流を示す遺物であるが、その詳細は本研究の第III章で取り扱う。



第 11 図 玉類生産関連遺物 (1/3)

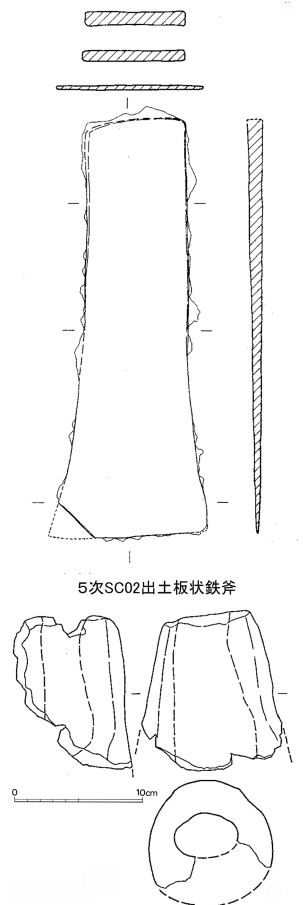
(4) 多様な生産体制

西新町遺跡では、後に検討する漁網錘・釣用錘である九州型石錘をはじめ、飯蛸壺や製塩土器、水産物の解体具の可能性のある刀子など、多様な漁法で獲得した海産物の加工を行っていたと考えている。加えて、二次的なガラス生産を行ったとみられるガラス小玉鋳型（ただしガラス小玉の生産は少数か）、蛇紋岩製勾玉製作や山陰産碧玉を使用した玉類生産関連遺物（第 11 図）、鞆羽口の出土から鉄器製作（ただし博多遺跡群のような高度な鉄器生産ではなく、鉄素材は取引交換がメインとなるか）（第 12 図）、12 次 105 号竪穴住居西赤色顔料ピット及び 105 号竪穴住居内出土赤色顔料付着土器（第 13 図）など、腐食して遺存しない器物も含めると、様々な財を利用した複合的な手工業生産の存在が想定される。

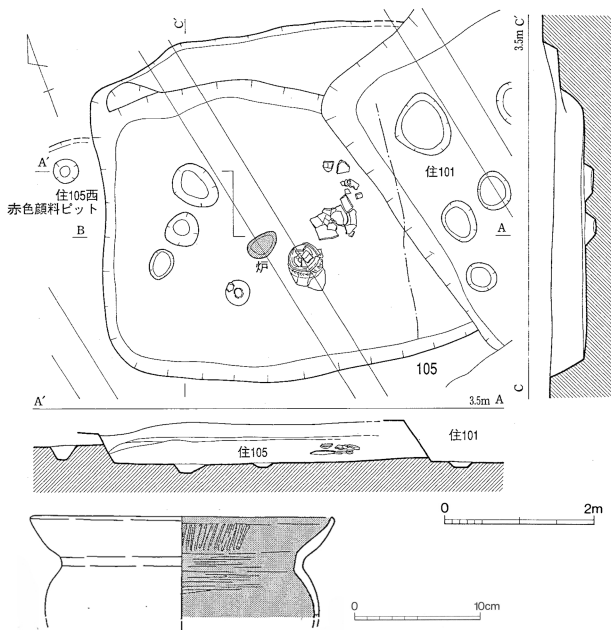
このうち、碧玉素材・剥片、土製鋳型によるガラス勾玉生産や蛇紋岩製勾玉の生産は技術系統が全く異なるが、弥生時代からの連続性を求めることのできる玉生産が確認できる点も特徴である。中でも玉生産は対外交易活動と有機的に結び付くと評価されるが、本遺跡及び墓域とみられる藤崎遺跡の副葬品の中にも本遺跡で生産した玉類はみられない。このように、現状では生産された製品の流通先について十分に明らかではなく、これらの玉生産の評価はさらなる検討が必要である（谷澤 2014）。

このように本遺跡は、朝鮮半島から西日本の広範囲で人々が往来し、混在する交易拠点であるとともに、海産物や玉類などの各種生産拠点を併せ持つ集落として、一般的な集落との性格が異なる、様々な性格を持った当該期の列島では類をみない一大交易拠点集落として位置づけることが可能である。

このうち、海産物に係る生産活動、体制等の問題については、本研究の第 IV 章で主に取り扱うが、製網に必要な紡錘車、動物遺存体の出土が皆無であることから、集落外に海産物の加工場所や製網を含む漁具保管場所が想定されること、さらに交易品を保管するための倉庫群、棧橋などの港湾施設、道



5次SC02出土板状鉄斧  
12次住64出土鞆羽口か(カマド支脚に転用)  
第 12 図 鉄器製作？  
関連遺物 (1/6)



第13図 12次住105赤色顔料関連遺構・遺物

(1/100・1/6)

くみられることから、ここが生活の拠点であり、年間を通じての居住地であったと考えている。

ただし、農業に適していない立地から、穀物は完全に外部依存であることに加え、本遺跡のように基盤が砂からなる環境では、土器の材料や覆い焼きで使う粘土の採取は難しく、他所からかつ多量に入手しなければならない。加えて本遺跡は土器生産の燃料となる薪も近隣には少なかったと考えられることから、使用した土器は他遺跡からの搬入品であった可能性が高く、土器の特徴から比恵・那珂遺跡群出土土器との類似などが指摘されている（久住 2004 他）。

このように、本遺跡は農業など含めた生産性が低い土地であるからこそ、自給生産できた海産物以外の対外交易による鉄素材、山陰系碧玉の素材等を用いた玉生産など、基本的に外部物資の流通を前提とした集落であり、周辺の集落との関係なくしては存続できなかつた。おそらく集落を維持するためには、土器や燃料、食料、建築材等の必要物資の供給を背後の平野に展開する拠点的な農耕集落が担うという、一定の協業システムが構築されていた可能性がある。この特性が対外及び列島内交易を担った交易圏の結節点となりえたと考えており、財を集めたことで繁栄し、列島内外の人々が「一時的な雑居」することで一時的な人口密度も高かったことが遺構密度の高さから窺えよう。

このように本遺跡における諸活動の在り方は、それまでの伝統的な交易構造とは異なるシステムで運用されていたと評価される。

ただし、朝鮮半島系の人々の居住を示す竪穴住居の造り付けカマドや甗、二次的なガラス生産を行ったとみられるガラス小玉鋳型をはじめとする新たな生活様式を含む様々な朝鮮半島系要素は、西新町遺跡の集落にほぼ限定され、九州内はもとより博多湾沿岸地域においても同時期の列島内においてもほぼ拡散・定着せずに在地化することもなく、古墳時代前期後半までに遺跡は衰退する。

#### (6) 西新町遺跡の墳墓 藤崎遺跡

西新町遺跡の同一砂丘上、西に隣接する藤崎遺跡では、弥生時代後期終末～古墳時代前期前半にかけて西新町遺跡と時期的にほぼ並行する時期の方形周溝墓群が営まれている（第14図）。

32次1号方形周溝墓からは三角縁盤龍鏡1面と素環頭大刀、3次6号方形周溝墓から三角縁二神二

路など、港津集落として必要な施設は未発見であり、今後の発掘調査の課題である。

#### (5) 西新町遺跡の特殊性

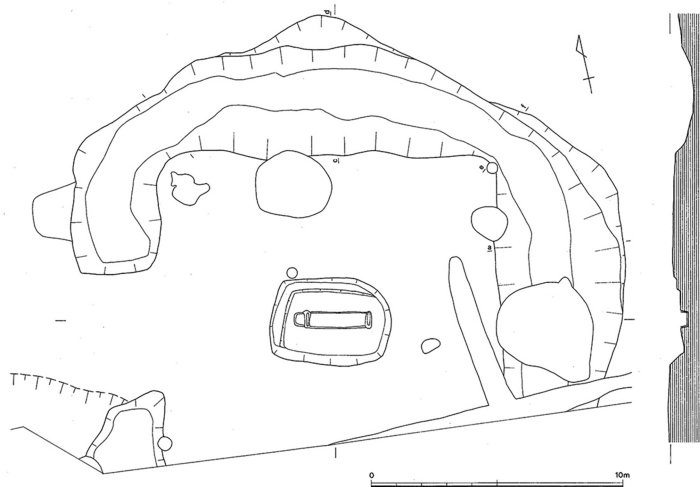
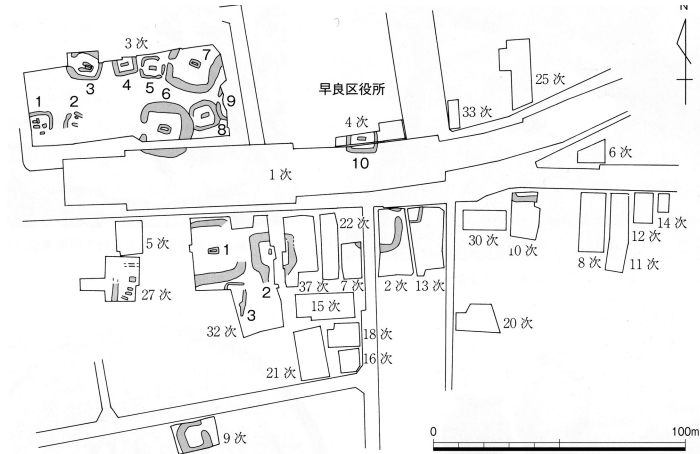
砂丘上に立地し、周囲の集落遺跡からは孤立した立地を示す本遺跡の一带は、海産物にこそ恵まれてはいるものの、近辺には水田に適した土地はなく、波浪や飛砂の被害を受けやすい。この厳しい立地条件から、本遺跡が通年の居住地ではなく、製塩や漁労のための季節的な作業場ではなかったかという疑いが起こる。だが、先述した砂丘上の鞍部に密集して展開する竪穴住居と造り付けカマド、甗に代表される朝鮮半島系土器と模倣土器、多様な生業形態など、季節的な仮住まいにはふさわしくないものが数多

車馬鏡1面が出土する(第14図)。博多湾沿岸地域ではいわゆる舶載三角縁神獸鏡の出土数が多いものの、藤崎遺跡は前方後円墳ではない方形周溝墓であり、かつ箱式石棺という在地的な埋葬主体と在地系土器の副葬品が大半を占める様相、先の複数の三角縁神獸鏡や銅鏡の副葬という点で特異な在り方を示す。舶載鏡である三角縁神獸鏡は、古墳時代前期前半において倭王権とのつながりによってこの地にもたらされた可能性が高く(辻田2013)、倭王権が朝鮮半島の鉄などの財や様々な情報、技術、文物などを安定して入手するために藤崎遺跡の集団を重視したと捉えられる。

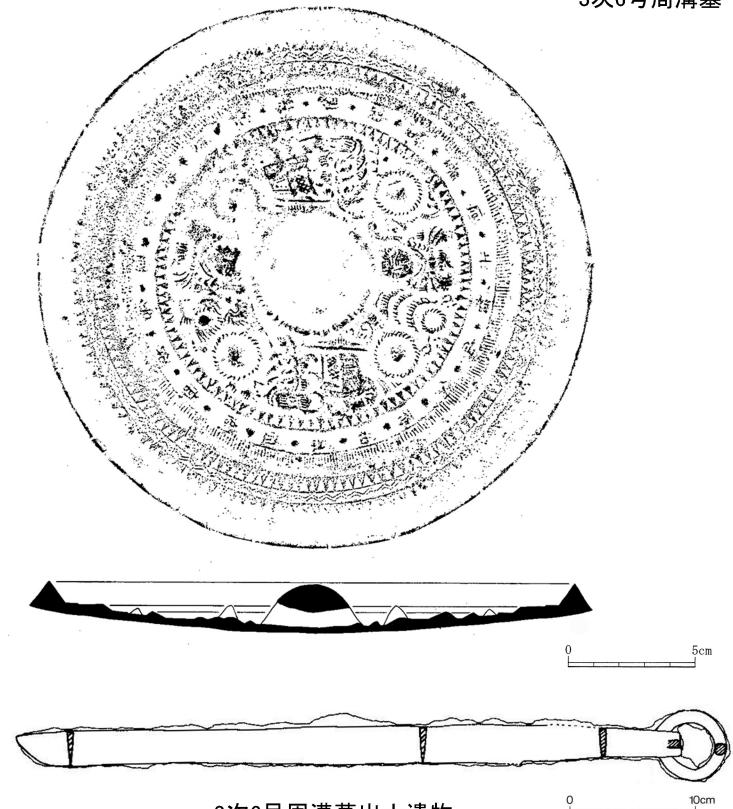
ただし、藤崎遺跡では西新町遺跡で多量に出土する朝鮮半島系土器が全く副葬されていないことから、藤崎遺跡には朝鮮半島系の人々の墓が含まれず、西新町遺跡に逗留した渡来人がこの地で一生を終えることなく、本貫地へと戻っていった可能性も想定されている(武末2010)。さらに銅鏡、鉄製武器の副葬は顕著だが、半島系土器を含む交易品や漁具副葬はほぼなく、藤崎遺跡の被葬者は海人集団そのものというよりも、西新町遺跡における交易に従事した在地集団を組み込んだ首長層やその親族集団といった人々の墓地である可能性が高いとみている。

(7) 小結

古墳時代前期前半、畿内中枢においても、朝鮮半島系土器を含む他



3次6号周溝墓



3次6号周溝墓出土遺物

第14図 藤崎遺跡方形周溝墓群と出土遺物

(1/3,000、1/300、1/3、1/6)

地域からの搬入土器が多量に出土する纏向遺跡を核として、河内の中田遺跡群、久宝寺遺跡、和泉の下田遺跡、四ツ池遺跡などの拠点集落が交易ネットワークにより結ばれていたことが指摘されている（中久保 2017）。

このように古墳時代前期前半は、列島の地域間交流が非常に活発化する時期でもあり、博多湾貿易の最盛期にもあたる。その博多湾貿易の核をなす西新町遺跡は、遺跡立地や各種生産用具、朝鮮半島系土器や大型板状鉄斧等の出土から、「加耶の鉄」を巡る対外交易を中心とした国際交易拠点としての性格を有し、西日本各地の土器が多く出土することから、朝鮮半島からの先進的な文物、技術、情報を得るため西新町遺跡に西日本各地の人々も多く集まり、交易を重ねていたと推測される。

ちなみに、これまで集落出土渡来系遺物の研究は、その有無や最も捉えやすい搬入品・忠実再現品に偏っていたが（武末 2010）、半島からの渡来集団の故地や系譜をより直接的に捉えるためには、朝鮮半島系土器の中でも特に酸化焰焼成で炊事用の軟質系土器の研究をさらに進める必要があり、そこで渡来集団を捕え、次に墳墓研究と結合すべきとの意見（武末 2010）は、重要である。

この時期、西新町遺跡に匹敵する質と量の朝鮮半島系土器が出土する遺跡は、列島内にはなく、渡来人や列島各地の人々が定着しているにも関わらず、周辺の遺跡では朝鮮半島系遺構や遺物がほとんど出土しないことは、西新町遺跡自体に規制がかかっていたとの意見もある（寺井 2005）。

本遺跡は古墳時代前期後半になると急速に衰退するが、この状況は博多湾沿岸の多くの砂丘上の集落や拠点集落とも連動する傾向にある。しかし、本遺跡にかわるような集中的な交易の拠点は形成されておらず、弥生時代後期から続く拠点集落と交易網に大きな変動があったことが推測されている（中久保 2017）。

この博多湾貿易の衰退は、寒冷化による砂丘の再形成といった環境の変動という要因に加え、近畿地方を含めた西日本各地域の中心的大規模集落や交易網の結節点となる集落遺跡が連鎖的にまた同時期に規模が縮小し連動すること（久住 2007）は注目される。

古墳時代前期後半は筒形銅器や巴形銅器に代表されるように、半島から往来があったのは確実であり、考古資料ではむしろ日韓交渉が盛んになる時期にあたる。朝鮮半島嶺南地域では多量の土師器系土器とともに百濟（馬韓）系土器も出る遺跡として、金海鳳凰台遺跡や東萊貝塚があることから、宗像・沖ノ島祭祀遺跡の開始とあわせて、本遺跡の衰退は金官加耶や百濟と倭王権との直接的な通交など、倭王権の主体的な関与による半島交渉へ移行したことが想定されよう。ただし、王権間の直接的な通交が本格化したとしても、博多湾から壱岐、対馬、韓国金海周辺に至る航海ルートがメインに変わらないが、筆者は直接的な担い手が博多湾の海人（阿曇、住吉等）から宗像の海人になったことが影響した可能性を推測している。

### III 玄界灘沿岸地域における漁労活動の基礎情報の整理

#### 1 弥生～古墳時代の石錘

##### (1) 石錘とは

漁具である錘は、漁網の場合は海中で均一に網を張るため、釣漁の場合は対象魚類に向けていち早く効果的に沈める必要があり、漁具の中でも最も重要な道具の一つである。

古代の漁具において、植物繊維による網や木を素材とした浮子が遺存することはほとんどない。一方、主に石や土からなり遺存しやすい錘は形態や重量によって用いた漁の種類や規模がある程度把握できることに加え、地域的なまとまりも看取されることから、古代の漁労活動においては石錘や土錘を中心に分類と変遷、分布、機能などが議論されてきた。

ちなみに、熊本県天草地方の曳網で用いられた石錘は、網の海底移動がスムーズに行なえるように径10 cm程度の楕円形の硬質の安山岩系の海岸石（丸石）が適しているとされ（山下 2015）、沈子となる石錘には溝を設けていない。一方、山下義満氏は多くの古代の石錘には紐をかけるための溝ないしは打ち欠きが施されることについて、現在の強固な紐による結びは溝や打ち欠きがなくとも沈子への固定化が可能であるが、古代の簡素な素材の紐は溝や打ち欠きがなければ沈子への固定が難しかったとの指摘（山下 2015）は卓見である。よって、植物繊維である古代の網紐や釣糸は打ち欠部で綱紐が切れやすくなるリスクよりも、綱紐と沈子のしっかりとした固定のため溝ないしは打ち欠きが必要であったと考えられる。なお、打ち欠石錘の一部は編物用錘具という意見もあるが（渡辺 1973 他）、海浜部の遺跡で出土する打ち欠石錘の多くが漁網錘として用いられたと考えている。

##### (2) 九州型石錘の研究史

九州型石錘の研究史については、近年林田好子・中尾篤志氏により良く整理されており（林田・中尾 2014）、また本書でも分析対象資料ごとに関わる研究史については取り扱っている。よって、以下の内容と重複する部分があるため、ここでは石錘についての主な先行研究のみ取り上げることとしたい。

まず九州型石錘の分類、分布、変遷、機能、使用した集団の在り方など多角的な検討により多大な成果を上げた下條信行氏の一連の研究がある（下條 1984・1989 他）。下條氏は弥生時代に新たに出現した九州型石錘について、玄界灘沿岸を中心に分布すること、軟質の滑石を削りと研磨によって円錐形や紡錘形、分銅形に成形しているものや、両端に突起を持った細長い棒状のものに紐を緊縛するための孔・溝を施した沈子群を「九州型石錘」と規定した（下條 1984）。また九州型石錘大形A型（本稿のI類）について、形態と分布域から「博多湾型」と「糸島型」に分け、その8割以上が海に面した遺跡から出土していること、特に「博多湾型」は玄界灘沿岸部を中心に南は鹿児島県の薩摩半島から北は福井県の若狭湾まで広範囲に分布することから、博多湾を中心とする玄界灘における海上交易活動を担った古代玄界灘海人の広範囲な行動圏を表すとし、海人集団の社会的位置づけを明らかにした（下條 1984）。

また九州型石錘の機能について、糸島市御床松原遺跡出土の打ち欠石錘の重量が64～140 g、210～300 gに対し、同遺跡の九州型石錘は平均重量が150 g前後と、九州型石錘の重量分布域がちょうど打ち欠石錘の重量分布域の中間の重量を示すこと、網漁錘であれば一定量の出土が必要であるが、九州型石錘は一遺跡あたりの出土量が少ないことから、少量で機能を果たしうる用途が想定されるとした（下條 1984）。大形A型の用途については、大野左千夫氏が天秤釣用の沈子（大野 1981）としたことに賛同した。

その後、下條氏の一連の研究に基づき、主に各遺跡単位で分類や整理が行われていたが、1998年からの福岡県立修猷館高校改築工事に伴う福岡市西新町遺跡の発掘調査において九州型石錘、飯蛸壺、製塩土器など多量の漁具関連遺物が発見されたことで、再び研究が活発になった。

山中英彦氏は、下條氏の研究を基礎として、半球状有孔滑石製品（橋口・八幡 1977）や打欠石錘を含めた、弥生～古墳時代の石錘を含む漁具について総体的に取り上げ、検討を加えた。特に漁具を土器と同様に在来系と外来系に区分し、九州型石錘や打欠石錘などの在来系の漁具、他地域から波及した土錘、飯蛸壺、製塩土器などを外来系の漁具として出土遺跡を類型化して、政治勢力との関係を含めて整理を試みた（山中 2007）。なお、山中氏は下條氏とは異なり、九州型石錘 I 類（下條氏の大形 A 型）について、浮網等で使用する垂下する縦型の漁網錘であるとする。

乗松真也氏は、古墳時代前期前半、博多湾沿岸地域では備讃瀬戸北岸の袋網系網漁や刺網系網漁、飯蛸壺延縄漁など様々な漁具・漁法の流入と九州型石錘を用いた釣漁・網漁など、漁具・漁法の状況を整理し、西新町遺跡をはじめとする博多湾沿岸地域の港津集落は、在来の漁具に加え、備讃瀬戸北岸で達成された操業規模の拡大化を伴った袋網系漁網などの新たな漁労技術の導入によってさらなる交易対象品としての水産物を調達し、交易への関与を強化、深めようとしたと指摘する（乗松 2010）。加えて交易品の性格により市場が異なり、市場ごとに参加者・交易品の空間的な範囲が異なることから、遠隔地との交易では主に希少品が取引され、海産物のような季節性の高いものは近隣地域を中心に交易されたと推測し、交易を経営基盤とする西新町遺跡では交易対象品のうち一部の自給生産を余儀なくされたという、生産部門を統制できない当時の社会の脆弱性を示すと理解した（乗松 2010）。

林田好子・中尾篤志氏は、玄界灘沿岸地域を対象とした 61 遺跡、430 点の九州型石錘の網羅的な集成に基づく地域別・形態別・時期別等の詳細な整理に加え、12～13 世紀の長崎県の膝行神貝塚の土坑出土の滑石製石鍋片を転用した I 類石錘に類似する資料の存在から、弥生・古墳時代の九州型石錘と中世に属する資料とが系譜的な繋がりを有する可能性を指摘した（林田・中尾 2014）。

森本幹彦氏は、I 類石錘の中で底部がとがるタイプを新たに I C 類として設定するなど、型式や分布、時期、用途等の再検討を行い、各型式の成立過程と分布状況から I 類石錘は博多湾西部が分布の主体であるとし、下條氏が提唱した「博多湾型」「糸島型」という名称が適切ではないとした。さらに博多湾の東西で在来系漁具の構成に差が明確にみられることを再確認し、古墳時代前期前半に飯蛸壺をはじめとする畿内・瀬戸内系譜の外来系漁具と博多湾西部の在来系漁具を融合・再編したのが西新町遺跡であるとするなど、博多湾を中心とする海人集団の変遷についても言及した（森本 2015）。

筆者も西新町遺跡を中心とする石錘の分類と機能について整理し、九州型石錘 I 類が釣用錘であることを実証し、西新町遺跡 17 次 7 号竪穴住居跡出土石錘群について民俗例にあるボラ網のような浮網・曳網の機能を持った漁網であった可能性を指摘した（大庭 2009）。

以上、九州型石錘の形態別時期変遷については、先述したように林田好子・中尾篤志氏が詳細に整理しているため（林田・中尾 2014）、本書では機能に焦点を当てた分類と分析、考察を行う。

### （3）石錘の分類

石錘は各遺跡から未製品が出土するため、自給生産が基本であったと考えられるが（山中 2007）、近世でも釣針・疑似餌・釣竿等の漁具の諸道具は個人所有品で、各自が加工を加えていたことを考えると（山下 2016）、加工が容易な滑石製石錘は漁具の中でも特に個性が強く、遺跡単位で多くのバリエーションが生じやすい要因となっているが、細分しすぎると普遍的な分類ではなくなる。このことから、形態

も重要であるが、機能まで考慮に入れた分類が必要と考えている。

また弥生～古墳時代の漁具は、現代の漁具と比較すれば未分化の段階と考えられるため、一つの漁具が多機能を有していた可能性があること、加えて民俗例における滑石製石錘の中には、成形が粗いままでも使用するにつれて角がとれて丸くなることで事足りるため、細かい調整は不要である事例なども細かい型式分類は重要でないと考えている。

今回下條氏の分類を基礎（下條 1984）に、より機能的な視点から分類・検討を行った山中英彦氏の分類（山中 2007）と森本幹彦氏の分類（森本 2015）を参考に、筆者の分類（大庭 2009）に修正を加えて新たに分類を行った。また九州型石錘を模倣した土製品もあるが、それも集成及び分析の対象とする。さらに九州型石錘については、大きくは穿孔と溝の有無によって有溝石錘、有孔石錘、有溝・有孔石錘に大別し、細分していく方法と、形態と重量・大きさにより大別し、溝・穿孔の位置と数によって細分していく方法がある。これまで下條氏など主に後者の方法を用いて資料の検討が行われており（林田・中尾 2014）、今回も後者の方法で分類を行う。

さらに、玄界灘沿岸地域における石錘の特徴として、加工の容易な軟質の滑石を素材とするものが多く、他に粘板岩、花崗岩、玄武岩、泥岩、砂岩、白雲母片岩、凝灰岩が素材として併用される。このうち、大型品は滑石を素材とすることが多い一方、小型品は滑石のほか、砂岩や粘板岩なども目立つ（林田・中尾 2014）。このように、材質や色調など加工の容易さや用途に見合った石材を選定している。

#### （4）九州型石錘 I 類

九州型石錘 I 類は上端部が尖り気味にせばまり、下端部が幅広の上窄下寛形を呈する。下條氏の分類では大形 A 型に相当する（下條 1984）。断面は円形ないしはやや楕円形を呈し、体部には 1～3 の孔と主に紐ずれ防止用の長軸方向の上下端部とを結んだ溝が刻まれる例が多く、孔と溝を組み合わせて緊縛用の装置を構成する。また複数の孔を有する場合、下部が上部よりも径が大きなものが多い。垂下式で重心が下部にあるので、いち早く水中に深く垂下させることができ、正確に海中の魚群の群れまで到達することができたとみられる（内田 2016）。玄界灘以外の同時代の類例はほとんどなく、当該期の玄界灘沿岸の漁労活動の特徴づける資料である。

分類については、山中英彦氏（山中 2007）及び森本幹彦氏（森本 2015）の分類に従い、底部形態が丸みを持つものを I A 類（下條の大形 A I 型（博多湾型））、底部に面を持ち、水平であるものを I B 類（下條の大形 A II 型（糸島型））、また森本氏は新たに紡錘形に近い、I A 類から派生した底部がとがるタイプを I C 類として設定した（森本 2015）。この I C 類は、後述する佐渡式イカ釣具の「しらやき」の形状をみると（第 44～46 図）、森本氏の分類視点が機能の面からも正しいことがわかる。詳細は第 IV 章 1、67～84 頁をご覧ください。

なお、形態と大きさから釣用錘としての機能が想定される細長い棒状の小型 I B 類（第 39 図 8）が存在することは、I 類が釣用錘として機能していた根拠の一つとなる。ただし、下條氏は I 類（氏分類 A 型）についても 80～500 g のものを大形、8～25 g のものを小形に大きくわけ、大形、小形それぞれを形態から細分する（下條 1984）。このように大きさも重要な要素で区分するべきと考えるが、対象資料数が非常に少ないことから今回は区分していない。

加えて溝と孔の位置と数も分析にあたって重要な要素であるため、後述する II・III・V 類石錘と同様、1 孔のものを「あ」、2 孔のもの「い」、それに加え上溝のものを「1」、全溝のものを「2」、長軸溝と短軸溝を併用するものを「3」とした。

#### I A類（下條A I型、博多湾型）（第15図1～4）

底部をゆったりと丸みを持って仕上げることを分類基準とするが、下端部が尖るものは、森本氏の意見に従い（森本2015）、I C類として分離した。I A類は孔が1ヶ所、そこから上端部に1条の溝や孔を中心に十字に施溝されるものが目立つ。長さ10～14 cmを通常とするが、20 cmを超えるものがある。重量は平均200 g台で、300 gを超す大型・超大型のものが目立ち、I B類より総じて大型である。I類石錘の中で最も多く出土し、I類の中心となる。素材は滑石製が多いが、西新町遺跡では凝灰岩質泥岩や砂岩質のものも存在する。

#### I B類（下條A II型、糸島型）（第15図5～7）

先端部が尖り、低く寸胴タイプの釣鐘形や、先端が尖り、底部幅が狭く、長いスマートな筍形がこの類に含まれるが、いずれも底部を水平にする特徴がある。形態的には側面が直線的に仕上げられているものが目立つ。I A類より長さ、重量ともにやや小さく、100～200 gの中型～大型が多い。1孔、2孔と孔が穿たれ、溝が存在しないものもある。素材は滑石が多いが、その他粘板岩、花崗岩、玄武岩、白雲母片岩なども使われ、バリエーションが多い。

なお、I A類とI B類の機能差について、力武卓治氏はI A類・I B類は釣漁の錘であることを前提として、下端部が丸味を持つI A類は海底が岩礁の場合、下端部が平坦なI B類は海底が砂地である場合に使用されたとして、海底の状況により使い分けたとの意見がある（力武1997）。

#### I C類（森本I C類）（第15図8・9）

上窄下寛形ではなく、紡錘形に近い、底部が尖るタイプをI C類とした。森本氏はI A類から派生したと指摘する（森本2015）。出土例は多くないものの、薩摩半島及び若狭湾で発見された九州型石錘はこの類とみられること、またIV章1の佐渡式イカ釣具の「しらやき」もこの形態であり（72～74頁）、I類石錘の機能を推定する上で重要な型式となる。

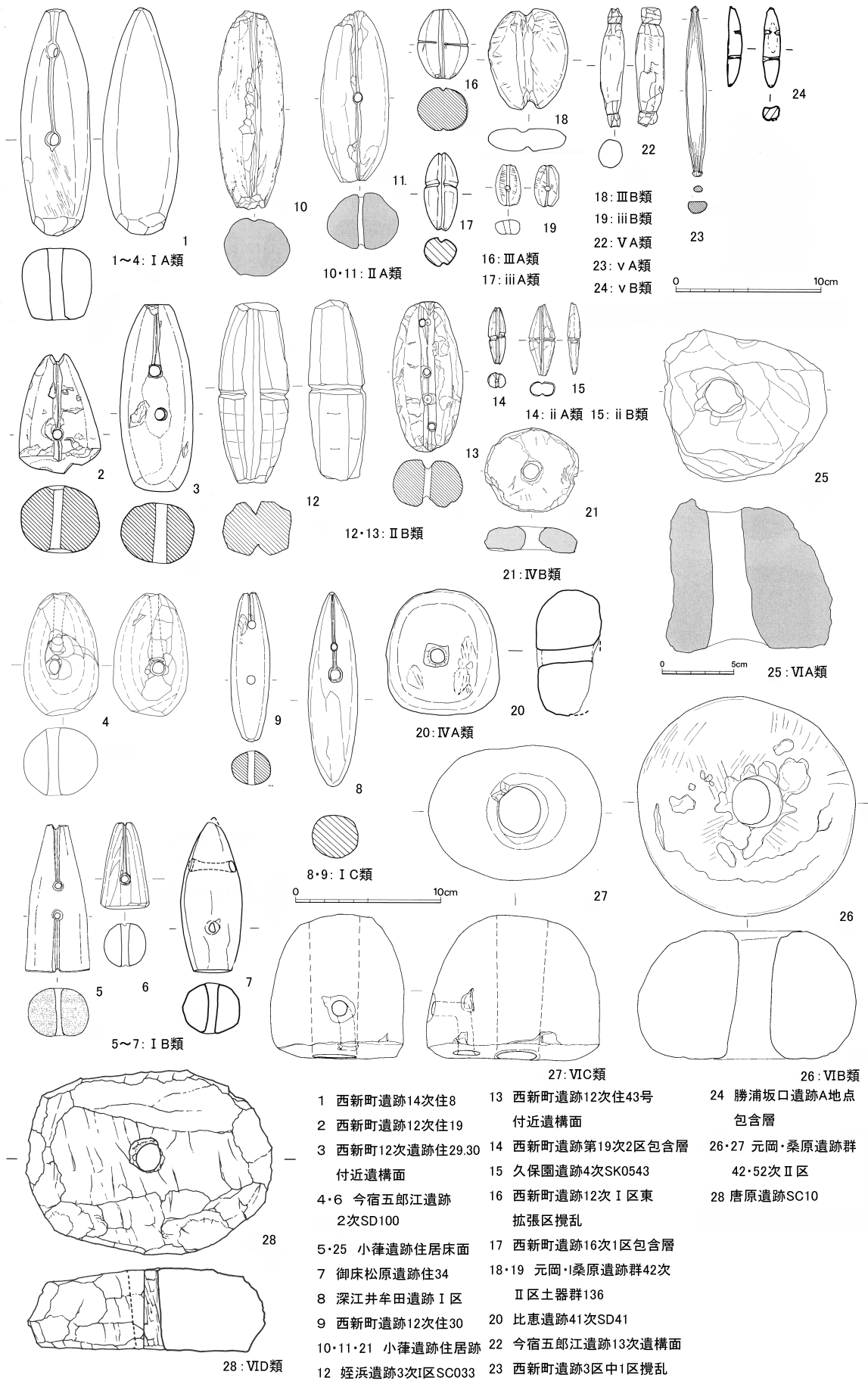
また、下條氏により指摘されたI C類（I A類）の分布は、山陰や北陸、大阪湾、鹿児島県大隅半島などの海浜部に分布するが、年代が判明するものは古墳時代～近世のもので、確実に弥生時代に遡るものはない。さらに材質も滑石を基本とするのではなく、在地の石材が使用されており、福井県小曾原窯跡出土例のように須恵質のものもある（内田2016）。このことについて、漁具機能が同様のものであれば、時期が異なっても形態的に類似するのではないかとの指摘がある（内田2016）。I類石錘の範囲と内容については、予察的な内容となるが、第四章5の149・150頁で若干検討している。

以上の分類に加え、丁寧に研磨しているものは、海中で光り輝き、魚の眼につきやすくするという疑似餌としての機能が予想されたことから（大庭2021）、丁寧に研磨し整形しているものを「●」、加工痕をそのまま残すものを「○」とした。また色調では、民俗例の釣用錘は白色、赤色、黒色の布などを取り付け、集魚機能を高めたものがあることから、色調も実際に資料調査したものを第5表に載せた。

なお、真鍋篤行氏による土錘の分析では（真鍋1992）、土錘の溝幅が釣漁の場合は釣糸の太さ、漁網の場合は沈子網の径と相関関係があるとし、溝幅が漁具の特定に有効であるとする（真鍋1995、本書31・32頁）。この指摘から、石錘の溝幅や孔径も計測し、第5表を作成した。

#### (5) II類（下條大形B類）（第15図10～15）

平面形が対称的な紡錘形をなす、やや扁平な横型の錘で、長軸に一条の溝を施すものを基本とし、長



- |                           |                                  |                               |
|---------------------------|----------------------------------|-------------------------------|
| 1 西新町遺跡14次住8              | 13 西新町遺跡12次住43号<br>付近遺構面         | 24 勝浦坂口遺跡A地点<br>包含層           |
| 2 西新町遺跡12次住19             | 14 西新町遺跡第19次2区包含層                | 26·27 元岡・桑原遺跡群<br>42·52次 II 区 |
| 3 西新町12次遺跡住29.30<br>付近遺構面 | 15 久保園遺跡4次SK0543                 | 28 唐原遺跡SC10                   |
| 4·6 今宿五郎江遺跡<br>2次SD100    | 16 西新町遺跡12次 I 区東<br>拡張区攪乱        |                               |
| 5·25 小葎遺跡住居床面             | 17 西新町遺跡16次1区包含層                 |                               |
| 7 御床松原遺跡住34               | 18·19 元岡・I桑原遺跡群42次<br>II 区土器群136 |                               |
| 8 深江井牟田遺跡 I 区             | 20 比惠遺跡41次SD41                   |                               |
| 9 西新町遺跡12次住30             | 22 今宿五郎江遺跡13次遺構面                 |                               |
| 10·11·21 小葎遺跡住居跡          | 23 西新町遺跡3区中1区攪乱                  |                               |
| 12 姪浜遺跡3次I区SC033          |                                  |                               |

第 15 図 九州型石錘分類図 (1/4)

軸方向に孔が数か所開けられるものもある。筆者の前稿（大庭 2009）や山中氏（山中 2007）の分類では大型、小型の区分を行っていなかったが、下條氏は大型品については 100～200 g が最も多く、次いで 300 g がこれに次ぐこと、一方小型品は 8～25 g の間にあり、10 g 前後のものが多いと区分している（下條 1984）。森本氏も 50 g 以下を小型、50～100 g を中型、100～250 g を大型、250 g を超えるものを超大型とし、小型品は 10 g 未満が多いとする（森本 2015）。滑石製錘を中心にすり減って重量が減ったものもあることは留意すべきであるが（大庭 2009）、Ⅱ類石錘ではその重量で概ねその用途を分けることが可能で、特に 50 g 以下の小型品の多くは釣用錘とみられることから（第 15 図 14・15）、森本氏の分類に従い、大型のものをⅡ類、小型のものを ii 類とした。

またⅡ類石錘のうち、体部断面も機能や編年に関わりがあるとの指摘から（森本 2015）、体部断面が円形に近いものを「A」、体部断面が矩形に近い扁平なものを「B」とした。

さらに小分類として、溝を長軸のみ施すものを「1」、短軸のみが「2」、短軸と長軸両方が「3」、孔は 1 孔のみ施すものを「あ」、2 孔が「い」、3 孔以上は「う」に分類した。

なお、以前の筆者の分類では平面形態が紡錘形をなし、溝がなく上下に 2 孔のみ存在するものを別に区分したが（大庭 2009）、溝の有無に関わらず、形態から用途が同様と想定できるとの指摘（森本 2015）に加え、対象点数も少ないことから、今回あえて区分は行わなかった。

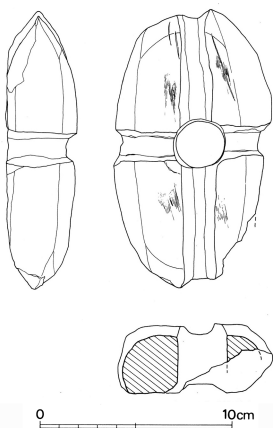
Ⅱ類石錘は、基本的に粗い加工のものが多く、丁寧に研磨するものが多いⅠ類石錘とは大きな違いがある。この理由については、釣用錘であるⅠ類石錘と網漁錘が多いⅡ類石錘という使用用途の違いによるものと考えられる。材質については、滑石を基本とするが、砂岩や安山岩のものも多く、Ⅰ類石錘ほど滑石の割合は高くない。

ちなみに、Ⅱ・Ⅲ類石錘のうち、短軸方向に溝を刻む 2 類は、網漁では沈子綱にぶら下がる形で装着した場合と、延縄の沈子として使用した可能性が考えられる。加えて、姪浜遺跡で出土したⅡ-3-あ類は（第 16 図）、「ボラ網」と呼ぶ漁網錘の民俗例と同様の形態で、沿岸に棲息するボラ漁に使用された可能性がある（平川 2011）。

Ⅱ類石錘の分布は、吉岐から玄界灘東部の響灘まで広範囲にわたるが、森本氏はⅡ類石錘のルーツは糸島半島周辺である可能性を指摘する（森本 2015）。なお、Ⅱ類石錘のみ出土する遺跡は三苦永浦遺跡、比恵遺跡、姪浜遺跡と早良平野から博多湾東部に位置する（林田・中尾 2014）。その他の型式とⅡ類石錘の相伴関係をみてみると、西新町遺跡 12 次 43 号竪穴住居跡などでⅠ類石錘と相伴するが、三苦永

浦遺跡 SX01 ではⅡ類石錘のみ、後述する西新町遺跡 17 次 7 号竪穴住居跡ではⅡ類石錘と自然石石錘のみなど、他の型式の石錘と相伴関係を持たないことを踏まえると（林田・中尾 2014）、基本的にⅡ類石錘は他の型式の石錘とは組み合わせられないと考えられる。西新町遺跡で集中的、特徴的にみられるⅡB-1-2 類ないしはⅡB-1-3 類（西新町型石錘）を含むⅡ類石錘については、第 4 章 3、107～124 頁で検討している。

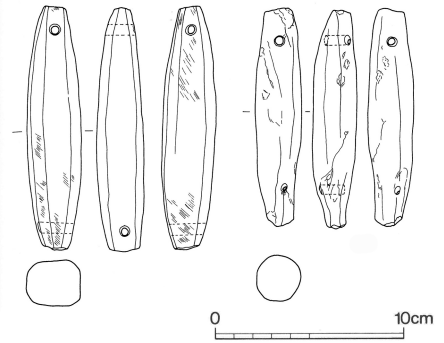
なお、Ⅱ類石錘のうち、長崎県原の辻遺跡出土のⅡB-い類は、重量が 79.5 g と 139.1 g と重量はあるが、細長い形状、色調が青黒色、上下 2 孔の孔径が 4～6 mm などから釣用錘であることは確実で（第 17 図）、Ⅱ類石錘の中にも大型魚を対象にした釣用錘が存在することを示している。これについては第 4 章 4、132 頁で検討している。



第 16 図 姪浜遺跡出土  
Ⅱ類 (1/4)

また、唐原遺跡 SC06 出土の短軸方向にのみ敲打の溝が施されたⅡA-2

類は瀬戸内地域を中心にみられる瀬戸内型石錘である。乗松真也氏は沿岸部だけではなく、中国山地の内陸部でも多数出土すること、長軸の両端部に敲打痕が確認できる場合も多いことから、漁具の石錘とは取り扱っていない（乗松 2013）。資料調査の結果、唐原遺跡例も端部に敲打痕がみられるもので、唐原遺跡の性格と 1 例のみの出土であることから、本稿では一応漁具に含めるが、漁業用の錘以外の網錘の可能性も含めて今後検討が必要であろう。



第 17 図 原の辻遺跡出土 II 類 (1/4)

(6) III類 (第 15 図 16～19)

平面形が楕円形をなし、左右対称のものである。長短比が長さ 1.2 対横幅 1 程度以下の球形に近いものを II 類石錘から区分したため、II 類石錘より総じて小型である。大小の区分、小分類は II 類石錘と同様のものとした。なお、大小と問わず、同じ形態のものがまとまって出土することはない、ほとんどが単体で出土することから、多くが釣用錘と考えられる。

(7) IV類 (第 15 図 20・21)

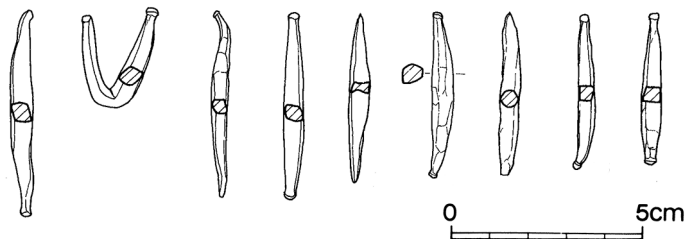
中央に 1 孔持ち、紡錘車形をなすもので、大小の区別は II 類石錘と同様である。紡錘車との区別が難しいが、弥生～古墳時代の紡錘車は糸をつむぐため、正円で整った形となるものが多いが、漁具としての IV 類は調整・成形も粗いこと、出土遺跡の立地でおおよその区別が可能と考えているが、厳密な区分は難しい。

(8) V類 (第 15 図 22～24)

細長い棒状で、両端に突起や溝、孔を持つものである。細長い体部の両端に紐掛け用の突起を作り出さないしは溝を作り出すものを A、端部以外の体部に溝を持つものを B、両端に孔を持つものを C 類とした。大小の区分や溝を有する場合の小分類は、II 類石錘と同様である。福岡市海の中道遺跡出土鉛錘の中には、本類の「A」の形態と類似する両端に突起を持つ平均 7.5g のものや 2.5g 程度の板状錘があること（山中 2007）（第 18 図）、かつ本類はまとまって出土しないことから、大半が釣漁の錘と考えられる。

(9) VI類 (半球状有孔滑石製品) (第 15 図 25～28)

中央に円形孔をもつ半球形または環状の超大型品で、いわゆる半球状有孔滑石製品である（橋口・八幡 1977）。底部径よりも体高が高いか、それとほぼ同じ形状で、円筒形を呈するものを「A」、底部径より体高は低い厚みがあり、上面が平坦で、体部中央は丸味を帯びるものが多いものを「B」、底径ないしはそのすぐ上が最大径を測り、上面はほぼ面をなさず、丸く収めており、断面が略三角形を呈するものを「C」、体高が低く、上面下面とも平坦で断面が扁平なものを「D」の 4 つに細分した。また、上記



第 18 図 海の中道遺跡出土鉛製釣用錘 (v 類) (1/2)

の形状や法量による4分類に加え、副孔があるものを「1」とした。VI類石錘の詳細は第IV章2、85～106頁で検討している。

#### (10) VII類 (打欠石錘)

打欠石錘は扁平な礫石で対向する側縁の2ヶ所、もしくは四辺いずれも打ち欠きにより紐掛け部としての窪みをつくり出し、その窪みに綱を結び付けた網漁用の錘である。長辺の2ヶ所を打ち欠くものを「A」、短辺2ヶ所を打ち欠くものを「B」、四辺打ち欠くものを「C」とする。

なお、本書では基本的に集成対象としておらず、第5表の一覧表にも加えていない。

また、打ち欠いたままの打欠部に紐綱をかけると、水中でもまれてその部分で紐ないしは糸が摩耗し、切れやすくなってしまい、かつ土器片錘など他の縄文時代の漁網錘と比べ重量が大きすぎることから、必ずしも漁網錘と認められず、一部は編物用錘具とする意見もある(渡辺1976)。しかし、打欠石錘の実証実験では、網漁錘として機能することが証明されていること、出土遺跡の多くが河川下流域から沿岸部に位置しており、漁具が共伴する場合が多いこと、加えて天草や国東半島では短軸の打欠石錘(B類)が漁網錘として用いられている事例もあるため(藤木2009)、基本的には網漁錘であると考えている。

さらに、縄文時代後期前半の秋田県八木遺跡では沈子綱を打欠石錘に縛る際にアスファルトを用いて固定を強化する事例があり、打欠石錘に残された帯状のアスファルト付着痕跡から、装着方法が想定されている(田井中2007)。この事例における装着方法は、緊縛する紐の痕跡は2～4条で、打欠部の一方にアスファルトの付着がみられないものが多いことから、それらは沈子綱に直交するようにぶら下げて用いられたと想定されている(田井中2007)。また八木遺跡では明確な打欠部はない礫にもアスファルトが付着する事例が多く確認され、そのまま漁網錘として使用されたとみられることは、民俗例とも整合し、打欠部がなく、石錘と認識されていない漁網錘も存在した可能性がある(田井中2007)。

玄界灘沿岸地域の打欠石錘は、弥生時代中期になると玄界灘に面した三苦永浦遺跡や引津湾に面した御床松原遺跡では全時期にわたって打欠石錘がみられると同時に、出土石錘のうち81%が打欠石錘であるなど、博多湾外の遺跡では良くみられる一方、博多湾岸の砂浜上に立地する遺跡では出土するが主体にはならない。御床松原遺跡では重量の平均は250gを測り、三苦永浦遺跡では平均重量が218gを測るなど(山中・大澤2003)、縄文時代の打欠石錘と比べ、著しく重さを増し、網漁に一大画期をきたしたという指摘がある(下條1984)。

加えて漁労活動の依存度の高い遺跡は打欠石錘が残るとの意見があるが(山中2007)、これは海底の環境や潮流の速さにより用いられたと考えられ、三苦永浦遺跡や御床松原遺跡の海岸域は岩礁地帯を含み、打欠石錘の断面が扁平で岩礁に引っ掛かりにくい構造であることから、岩礁部分で用いた曳網漁(地曳網)が盛んであったことを示している。一方、博多湾岸の西新町遺跡や今宿五郎江遺跡の海岸域の海底の底質は砂泥地で、袋網系や刺網系の網漁が発達したため、打欠石錘は少ないと思われる。

#### (11) その他

西新町遺跡からは紐づれ痕及び施溝状の窪みがみられる軽石が出土しており、径1～1.5cm程度の紐を緊縛したと観察されることから、網漁の浮子として使用していた可能性がある。しかし、古墳時代中期前半の福岡市吉武遺跡群出土漁網の木製浮子から、基本的に浮子は木製と考えられるため、軽石は釣漁錘での使用ないしは網漁錘として使用されたのか、それ以外の用途があったのか判断は難しい。

## 2 土錘を中心とする弥生・古墳時代における漁業技術史研究

### (1) 土錘とは

弥生時代になると、細管状土錘・球状土錘・円形板状土錘等、一部が大陸に起源を持つとみられる粘土を素焼きした土製品である土錘が玄界灘沿岸地域で出現し、周防灘沿岸、日本海沿岸、瀬戸内地域と西に伝播する過程で、一部の要素が欠落しながら各地域に定着する。弥生時代後期～古墳時代前期には多種多様な土錘が成立するとともに、特定の形態の土錘が地域を超えて展開する。弥生時代の網の沈子網に取り付けたと判断される管状土錘は、形態や重量など、民俗例と同様のものが多くみられ、同様の用途であった可能性が推測される。管状土錘は管状を呈し、真ん中に孔が開けられたものである。沈子網に一定の間隔で装着するが、石錘に比べ着脱は難しく、岩場で使用すると割れやすい反面、特に細長い形態のものは水の抵抗を受けにくく、かつ漁網の沈子として海中で目立ちにくい特徴を有する。また漁網は錘と浮子のバランスにより海中で網を立てるが、土錘は一度に同規格のものを大量に製作可能で、海や河川などの漁場の環境や対象魚種に合わせて使い分けが進んだとみられる。

本研究では石錘について重点的な検討を行っているが、ここでは同じ錘である土錘の先行研究のうち、本研究に関係するものを取り上げ、少し論点を整理してみたい。

### (2) 土錘を用いた網漁の種類の特定と操業規模

和田晴吾氏は、弥生時代の土錘について、形態から「管状土錘」「棒状土錘」「有溝土錘」「有溝管状土錘」に分類し、形態と重量から小型～超大型まで区分することで、多様な漁網の存在と網の大型化など漁具発達の画期を見出した（和田 1982）。また棒状土錘（第 19 図 9～14）の両端の孔には摩滅による溝状の使用痕が存在することから、棒状土錘は孔に沈子網を結びつけて使用したこと、半折しやすい形態からあまり激しい力で曳かれたものではないことなどの特徴を整理し、用途としては刺網漁の錘であると推測した。加えて、その分布と時期から棒状土錘と製塩遺跡との関係性を示すなど、棒状土錘を用いた漁網の種類と規模、塩生産との関連性まで及ぶ重要な指摘を行っている（和田 1982）。

真鍋篤行氏は、弥生時代～中世までの瀬戸内地方出土土錘について、民俗資料の統計学的な分析と考古資料との比較検討による漁具・漁法の復元を行い、漁具発達の画期の具体相を明らかにした（真鍋 1993・1994・1995・1996）。真鍋氏はこれまでの先行研究が形態や重量による分析が中心で、漁具の機能との関わりが明確でなかったこと、漁法の変遷や操業単位の検討が不十分であったとした。

そこで、漁網の種類と内容が把握できた民俗資料のうち、土錘の統計学的な分析を進め、網漁の操業規模を把握する指標として、土錘の長さや最大幅という形態的な要素に加え、潮流の抵抗を少なくするためには沈子網を太くする必要があり、網の強度である抗張力は沈子網の径と比例すること、つまり沈子網の径は網を曳く操業人数・規模と直接的に相関することを見出すという重要な視点を提示した。さらに土錘の孔径・溝幅から、魚を網目に刺して捕獲する刺網系と魚を網で包囲して袋部で捕獲する曳網系（地曳網、底曳網等）に分ける指標を示した。真鍋氏の研究により、弥生時代後期以降に出現する細長い棒状土錘は、沈子網のねじれる余地が少なくなることから刺網に適していること、胴部が中太く短い管状土錘は、水中の地形に合わせて隙間なく網を敷設する袋網系に適していることなど、出土土錘から漁網の特定が可能になった（真鍋 1993・1994）。その後、石錘についても、土錘と同様の方法で溝幅に注目した分析を行い、加えて木製浮子も土錘と同様、民俗資料の法量を統計学的に整理することで、刺網、底曳網とその他の網（まき網・地曳網・定着網等）に分類可能になった。

また、瀬戸内地方における網漁法の変遷について、弥生時代前期～中期には刺網と小規模な定置網を中心とする曳網系に機能分化するが（真鍋 1996）、漁場開発のレベルは低く、かつ本格的な土器製塩の開始前であることから、網漁業で捕獲した魚肉の貯蔵性が悪く、輸送手段も未発達であったとする。そのため、漁労活動は小規模であり、瀬戸内地方西部では貝塚、東部では保存性の良いイイダコを対象とした飯蛸壺漁が盛んであったと論じた（真鍋 1995）。

弥生時代後期になると、棒状土錘を用いた刺網が出現するが、この刺網については網地を引っ張ると、網目が開くことで、魚が網目に絡む頻度を高くする縮結の技術が導入されたことで、刺網の捕獲力を高めたと想定する。さらに袋網系網漁は定型化した大型の管状土錘 C（和田晴吾氏が分類した「縦断面が長方形をなす端正な形を呈するもの」（第 19 図 1～7）（和田 1982））の普及から操業規模の大型化が認められ、底曳網・地曳網などの曳網漁法に網漁のメインが大きく転換したと指摘した（真鍋 1996）。

### （3）土錘と土器製塩と水産物

真鍋氏は先の網漁の特定と操業規模の変遷モデルを踏まえて、塩生産と水産物との関係について論じた。この内容は、奈良時代の文献や木簡に記された水産物の貢納品の多くは塩蔵品であること、特定の土錘と土器製塩が発達する地域が重複し、その変遷も地域を超えて同様の動きをみせる。これに基づき、土器製塩により生産された塩の一部が水産物の保存料として利用されるなど、塩の生産力の上昇が網の大型化による魚類の大量捕獲や漁場域の拡大など、網漁業の発達を促したと理解した（真鍋 1994）。

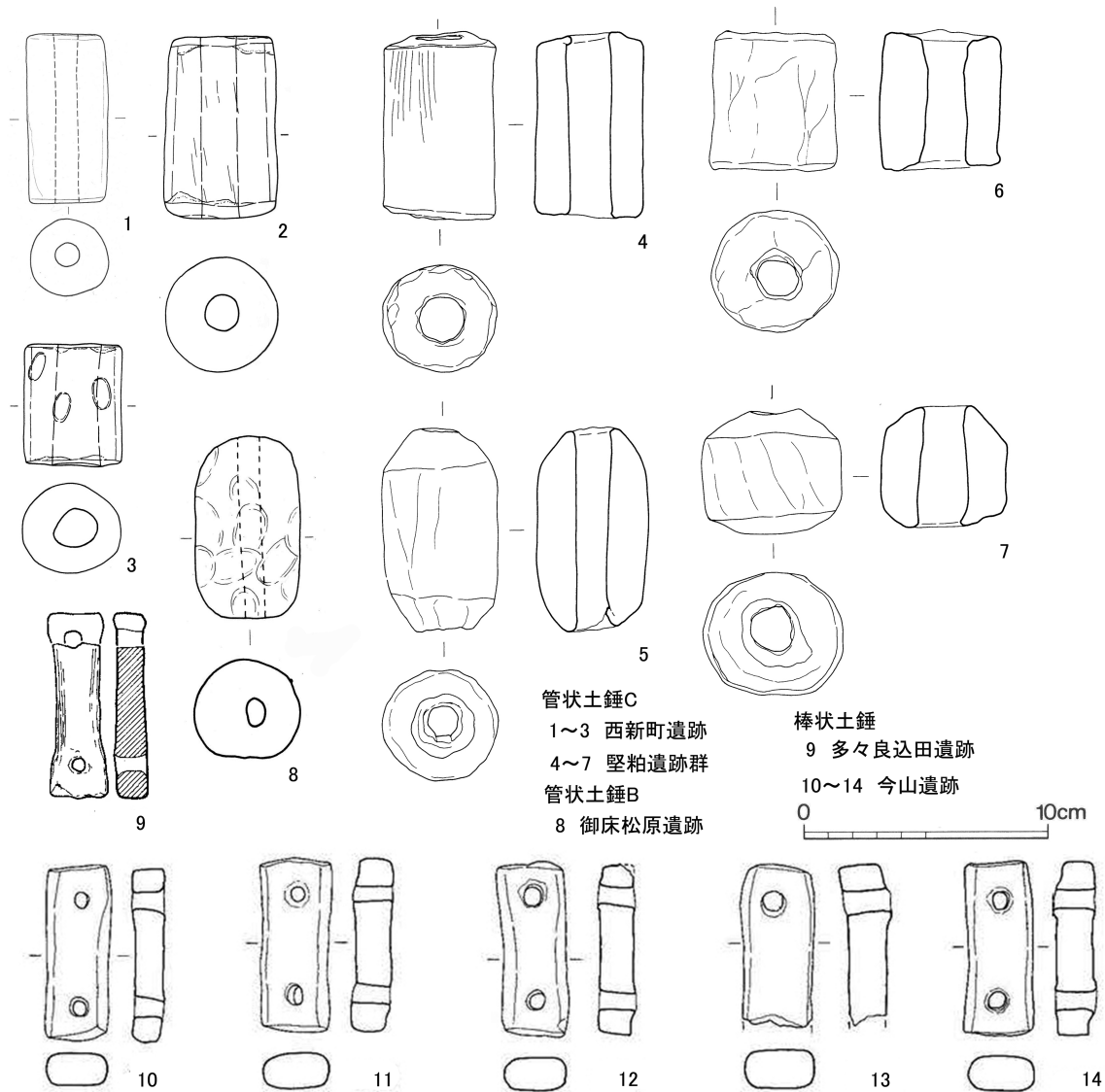
また漁法の変遷について、弥生時代になると米食の開始によりオカズが求められ、そのオカズも長期保存が求められたため、土器製塩の本格的な開始以前の弥生時代中期～後期に盛行する釣漁、飯蛸壺延縄漁、貝類採取については、保存料としての塩不足のため、保存性の高い貝やイイダコを重点的に捕獲したものであったとする。それが弥生時代後期末～古墳時代前期初頭になると、土器製塩の本格的な開始により、塩生産力が上昇したことで、網漁が発達し、釣漁業・貝類採取は減少すると理解とした（真鍋 1994）。このように、弥生時代中期後半頃からの土器製塩が開始される要因の一つとして、水産物の捕獲方法の発達による捕獲量の増加に伴い、その加工に必要な塩生産が求められたためと考えた。

さらに、真鍋氏はこれらの研究成果をもとに、弥生時代後期末と平安時代末に網漁業の操業規模が大型化するという漁労活動の画期を明らかにし、前者は土器製塩の発達、後者は製塩技術の発達という背景があったと指摘する（真鍋 1996）。

加えて、水産物を大量捕獲する前提として、加工・貯蔵する技術や迅速に消費地に運ぶ優れた運搬手段、交通ネットワークの組織化、水産物を受け入れる大規模な消費地の存在が必要になることから、漁具を含めた諸要因を総括的に検討する必要があるとした（真鍋 1995）。

この後、真鍋氏の一連の研究を基礎に、弥生時代後期～古墳時代前期の瀬戸内地方の土錘の検討を行った乗松真也氏は、弥生時代後期後半に管状土錘 C を用いた、それまでより操業規模が 2 倍以上と想定される大規模な袋網系網漁が瀬戸内地方で開発され、分布範囲が弥生時代後期終末になると備讃瀬戸地域や大阪湾北岸から、周防灘、玄界灘沿岸まで、少し遅れて関東南部から北陸にも分布域が急速に拡大することを明らかにした（乗松 2007）。また備讃瀬戸地域北岸から博多湾沿岸地域に伝播した管状土錘 C や棒状土錘を中心とする土錘について、管状土錘 C と棒状土錘をほぼ同時に受容することから、両者がセットで波及するとした（乗松 2010）。

ちなみに、和歌山県西庄遺跡では、古墳時代中期を中心とする漁具や製塩土器、動物遺存体がまとまって出土しているが、魚類遺存体の分析により棒状土錘を用いた刺網の内容と具体的な捕獲対象との関係



第19図 博多湾沿岸地域の管状土錘Cと棒状土錘 (1/3)

性の検討を行っている。この検討によると、棒状土錘はずんぐりとした重い群から細長く軽い群まで数種類が認められるが、重い群はエソ・ハモ・コチ・カサゴなどが対象の底刺網、細長い軽い群はイワシ・サバ・アジなどの浮刺網など、4～5種類の刺網に対応する可能性が指摘されている（久保 2003）。

(4) 土錘の具体的様相

ここでは多種多様な土錘のうち、操業にある程度の人数を要して曳く操作を伴う袋網系漁網の土錘である管状土錘Cと、少人数で操業可能な、魚を網目に刺して捕獲する刺網系漁網の土錘である棒状土錘についてみてみたい。

①袋網系土錘

袋網系土錘は、孔径が大きく、短軸長に対して長軸長が概ね3倍以下のずんぐりした形状のもので、操業にある程度の人数を要して曳く網に用いられたものである。管状土錘は、その名の通り管状の形態で、基本的に中空の孔を網の底辺の沈子綱に貫通させ、直列した状態で網に装着する。管状土錘Cと管状土錘B（第19図8）の違いは管状土錘Cが直線的な円柱形で、両端部が平坦面をなし、管状土錘Bがややふくらみを持ち、両端部に面を持たないことで区別される（和田 1982）。

## 管状土錘 C

先にみたように管状土錘 C の両端部は平坦面をなし、側縁と端部との間に明瞭な稜を持つ。この形態的な特徴から、沈子網を孔に通し、添網を土錘の上下に通すことで網を絡みにくいようにしたと想定されており、長さとの幅の比率から袋網系網漁に使用された錘と考えられている（真鍋 1995）。

一方、端部に面を持たない管状土錘 B は網の圧迫により土錘の両端が欠損するものが多い。このことから、網の大型化により曳く力が強くなったため、破損が少なく、沈子網も切れにくい両端が平坦な管状土錘 C が出現したという指摘（真鍋 1995）は妥当なものである。

管状土錘 C の変遷については、弥生時代中期に備讃瀬戸北岸で出現・定型化して以降、この地域は古墳時代前期まで一貫して管状土錘 C を主とする袋網系土錘の分布の中心であり続ける。弥生時代終末期になると、備讃瀬戸北岸を核としながら、大阪湾沿岸、備讃瀬戸南岸、別府湾沿岸にも分布を広げる。古墳時代前期になると、前段階からの備讃瀬戸北岸への集中に加え、鳴門海峡や伊予灘東岸、周防灘西岸、博多湾沿岸まで分布が拡大する（乗松 2010）。この管状土錘 C の分布域の拡大及び偏在する状況は、備讃瀬戸北岸で達成された操業規模の拡大化を伴った特定の網漁の技術がこの時期に各地の環境や社会状況にあわせて拡散したと捉えられるが（乗松 2007）、同時に管状土錘 C を用いた網漁による特定の水産物の需要があったことを示しており、特産物としての水産物の生産が行われたとの乗松真也氏の指摘（乗松 2007）は卓見である。古墳時代中期になると、管状土錘 C が分布した地域の多くが一転してほとんど土錘が認められなくなる。

なお、福岡市堅粕遺跡などの管状土錘 C と飯蛸壺の共伴事例から（第 27 図）、管状土錘 C が飯蛸壺延縄漁の錘として用いられたとみられ、博多湾沿岸周辺では管状土錘 C は袋網系網漁以外でも使用されていることは注意を要する。加えて、堅粕遺跡では端部に面を有する管状土錘 C と端部の角を取った形態の土錘（第 19 図 5・7）、寸胴のもの（第 19 図 3・6）など大小多様な管状土錘 C が認められる。これが、玄界灘沿岸地域で創出されたものか、それとも他地域の影響を受けたものか、管見の限りでは判断できなかった。今後類例及び網の使用場所などの検討によって明らかにする可能性がある。

## ②刺網系土錘

### 棒状土錘

別名「有孔土錘」「双孔棒状土錘」「瀬戸内型土錘」とも呼ばれる刺網系土錘の代表的なもので、両端近くに孔を開けた細長い棒状または板状の土製品である。使用痕跡から、沈子網に縫い付けるように用いたと考えられている（和田 1982）。幅に対する長さの数値は管状土錘 C と比べて大きいので、網目に魚を絡ませる刺網系網漁で用いられたと想定されている（真鍋 1993）。

棒状土錘は、系譜関係が明らかではなく、突如出現した感が強いとされ（和田 1982）、弥生時代後期の大阪湾沿岸で出現したとみられる。古墳時代前期には大阪、兵庫、岡山、香川など瀬戸内地方の沿岸部を中心に広く展開し、間もなく九州地方や日本海沿岸にも伝わり、広く西日本に分布するようになる。古代から中世にかけて西は鹿児島、東は関東まで分布域を広げ、特に瀬戸内地域では管状土錘と併存して一般的な土錘の類型の一つとなるが、管状土錘が近年まで使用されるのに対し、近世以降は認められず、中世段階で消滅したとみられる（内田 2009）。

この棒状土錘で行う刺網漁は船一艘で可能な小規模な操業形態と考えられ、水深のある漁場や潮流の速い漁場、岩礁地帯付近などの様々な漁場環境で使用可能である。適用範囲が広く機動性が高い刺網漁の導入により、積極的かつ効率的な水産物の捕獲を図ったことが想定されている（真鍋 1994）。すでに

在地系の管状土錘が存在しているにも関わらず、古墳時代前期に西日本に棒状土錘が広がることから、前述したように棒状土錘を沈子とする各種の漁網は、そこに棲息する捕獲対象魚類と関係しながら、相当な効果をもたらしたとの指摘（内田 2007）がある。

北部九州における棒状土錘については、小澤佳憲氏の研究に詳しい（小澤 2020）。北部九州における古墳時代前期の棒状土錘は古墳時代後期～古代のものとは比べ、明らかに太くかつ重いこと、孔径が大きいこと、遺跡や遺構ごとにサイズや断面形、重量に差が認められる。加えて、古墳時代前期の棒状土錘は、藤崎遺跡、多々良込田遺跡など、博多湾や瀬戸内海に面する豊前・豊後地域のごく一部でみられるが、広く普及までは至っていないとされる（小澤 2020）。

また小澤氏は、管状土錘と棒状土錘のサイズ・重量の検討結果から、博多湾沿岸地域では管状土錘と棒状土錘を明確に作り分けしている一方、豊後地域の大分県黒島遺跡や下郡遺跡の豊後地域では管状土錘と棒状土錘が同じ程度の重さになることから、土錘の形態を明確に区別せずに一緒に用いた可能性を指摘する（小澤 2020）。この要因について、小澤氏は博多湾沿岸地域は瀬戸内地方の漁法がそのまま技術導入されたのに対し、豊後地域では新たな漁法として試験的に採用されたものの、定着しなかったと理解した（小澤 2020）。

ちなみに、今山遺跡第 8 次調査では古墳時代初頭前後とみられる棒状土錘が出土するが（第 19 図 10～14）、長さが 6.8～7.1 m、幅 2.6～3 cm、厚さ 1.3～1.6 cm を測り、瀬戸内地方以西のものより長さが短く、断面が扁平な非常に特徴的なものである。今宿遺跡第 5 次調査出土の製塩土器の形態は伊予などの西部瀬戸内系のものに近いとされ（久住 2000）、今山遺跡第 8 次調査では西部瀬戸内系の土器がわずかであるが認められる。なお、西部瀬戸内を含めて今山遺跡第 8 次調査に事例に近い形状の棒状土錘の類例を調査したが、管見の限りでは確認できなかった。近いものとしても西部瀬戸内にはなく、和歌山県の井辺遺跡第 6 次調査 SB-3（古墳時代前期前半）・SD-11（古墳時代前期後半）、内陸部になるが和歌山県市脇遺跡 1 号住居跡（弥生時代後期末）、愛知県大毛池田遺跡包含層（古墳時代中期）にある。また断面は円形になるが、平面形で類似するものとして、佐賀市榎木遺跡 168 号溝（古墳時代前期後半）、大分県小部遺跡 SH11（古墳時代前期前半）が存在する。この特徴的な棒状土錘については、今後も類例調査を続ける必要がある。

このことから、土錘を使用した在来の漁網による漁業技術の様相は明らかではないが、古墳時代初頭前後、棒状土錘を用いた網漁は魚に目に付きにくい網目などの遺存しないものを含む漁網による瀬戸内地方の先進的な網漁業技術は相当な漁獲効果があったため、博多湾沿岸地域はダイレクトに受容し、漁業技術が大きく変革したこととみられる。ただし、この受容の要因として、砂地や砂泥質という海域環境という条件も考慮する必要がある。

さらに、この伝播した背景については、博多湾沿岸地域において本格的な土器製塩技術の伝播を伴うことから、新たに技術導入した網漁で多量に捕獲した水産物の塩蔵加工する条件が整ったと理解される。しかし、管状土錘 C や飯蛸壺を用いた新たな漁具・漁法も伴うことから、土錘だけではなく、本地域で特徴的な滑石製の石錘を含む在来の網漁業技術がどの技術水準にあり、技術導入によりそのまま受容したものと何が変容・変化したかという観点の実態解明が求められる。

筆者は、管状土錘 C は袋網系の手繰網、棒状土錘は先行研究のとおり刺網と考えているが、実態解明にあたっては、使用痕の観察等、考古学的な観点と民俗資料等様々な情報を相互に関連付けて検討する必要があるだろう。

### 3 玄界灘沿岸地域における釣漁の様相

#### (1) 釣漁とは

釣漁とは、基本的には釣糸とその先端に装着された、平面形がひらがなの「し」字状を呈する釣針に生餌または疑似餌（ルアー）を付けて魚を誘引し、魚の口にかからせ釣糸を引き上げて捕獲する漁法で、現在でも鮮度の高い水産物を漁獲する漁法として重要な位置を占めている。釣漁具には、釣針・釣糸に加え、竹竿などの竿、沈子・疑似餌、浮子、えさなどがあるが、弥生～古墳時代においては、竿はあまり用いず到手釣りも多かったと推測されることに加え、魚を釣るには釣針の重量で十分であるとの指摘（山中 2007）もあることから、釣針と釣糸以外は必ずしも必要な道具でないと考えられる。特に釣道具の中でも釣針は魚が釣糸を引いても抜けないための仕掛けが重要であるため、強度のあるかつ効果的な釣針の出現は漁業技術史にとって大きな画期となる。一方、釣糸は柿渋で染めた麻糸を使用したものが多かったと予想されるとともに、魚種に合わせて細くないしは太くした。

釣漁は、漁場、天候、季節、魚の性質など、効率的に漁獲するためには習熟が必要である。弥生～古墳時代においても、釣漁は網漁と並ぶ重要な漁法で、古墳時代前期の鳥取県長瀬高浜遺跡では数多くの鉄製釣針が発見される一方、網漁具となる土錘・石錘は少ないため、古代において基本的に網漁がメインとなる紀伊半島～瀬戸内～玄界灘以外では主要な漁法の位置を占めていた。なお、比較的岩礁帯の多い海域の玄界灘沿岸地域の民俗例では、網漁に加え、釣漁・延縄漁も盛んであった。

釣漁は対象魚種や地域などによって多くの種類が存在するが、大きく分類すると手釣、竿釣などの一本釣、多くの釣針を付けた延縄釣に区分され、現在では機械釣などの竿釣、ひき縄釣、立縄釣などもある（福岡県水産林務部漁政課 1991）。ちなみに、平安時代の寝殿造りにある釣殿にみられるように、公家社会では娯楽としての釣漁が行われていた。

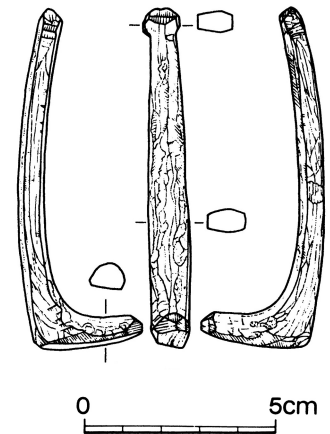
出土遺物の釣漁具としては、釣針、沈子・疑似餌にほぼ限られる。そのうち、釣針は縄文時代前期からすでに大きさ、形態などが多様性に富み、様々な魚種によって使い分けが行われていたとみられる（山崎 2007）。対象魚種、漁法の特定については、釣針の大きさ、フトコロの幅、鏝の有無、先曲げの角度などが条件に応じて異なると想定されることから、同時に出土した動物遺存体を分析するなど、当時の環境や魚類の生態を合わせて検討する必要がある。

#### (2) 釣針の特徴

釣針は鏝の形態から無鏝、内鏝、外鏝、両鏝、軸鏝、錨形、逆 T 字形などに分類することができ、多種多様を呈するが、それは魚種や漁法の多様性に対応する（村上 2017）。特定の魚種を狙った延縄漁には定形化した釣針が多数必要とされる（内田 2009）。古代の釣針は、今日市販されている釣針と同様の形態のものが多くあり、数千年を経過しているにもかかわらず、機能面はほとんど変わっていないものも少なくないと予測される。

釣針は、縄文・弥生時代には骨角器、後に鉄製品が主に用いられるが、針部は鉄、軸部は骨角器という複式釣針も存在する。特に骨角器が釣針の素材として選択されたのは、ある程度の強度をもち、漁師自ら加工しやすいことに加え、光沢の強い材質は水中では光に反射して白く輝き、魚眼に触れ集魚しやすくなるという疑似餌的機能も併せ持ったためとの指摘（内田 2004）は妥当な見解である。さらに遺物としての出土は期待できないが、釣針に細長い布や鳥の羽毛などを装着することで、より魚眼に目に付くようにした場合もあったとみられる。

釣針の型式分類については、和田晴吾氏・大野左千夫氏・渡辺誠氏・魚津知克氏らの優れた先行研究が存在する（大野 1981・和田 1982・渡辺編 2000・魚津 2012）。本研究の対象時期より若干下るが、5世紀後半～6世紀初頭を盛期とする和歌山県西庄遺跡では、出土した複式釣針及びその同様の機能を有する鉄製単式釣針、鹿角製疑似餌と出土した動物遺存体との共伴関係から、これらは外洋で行われていたカツオ疑似餌竿釣用に開発されたことが先行研究により明らかになっている。加えて、出土魚種の推定体長と現在の漁期から、カツオの漁期は春から夏にかけて高い比重を持っていたことが指摘されている（久保 1997）。さらに古代に下るが、福岡市海の中道遺跡の貝塚でまとまって出土した長さ3～5 cmの中型釣針（第 22 図 3～8）は、形態・法量とも均一性があり、捕獲魚の体内に残ったまま解体場に運搬・廃棄されたことが想定されることから、延縄漁の釣針とみられること、加えて共伴した動物遺存体から漁期についての指摘（山崎 1993）など動物遺存体との共伴関係の議論も少ないながらも行われている。



第 20 図 西北九州型結合式釣針（菜畑遺跡）(1/2)

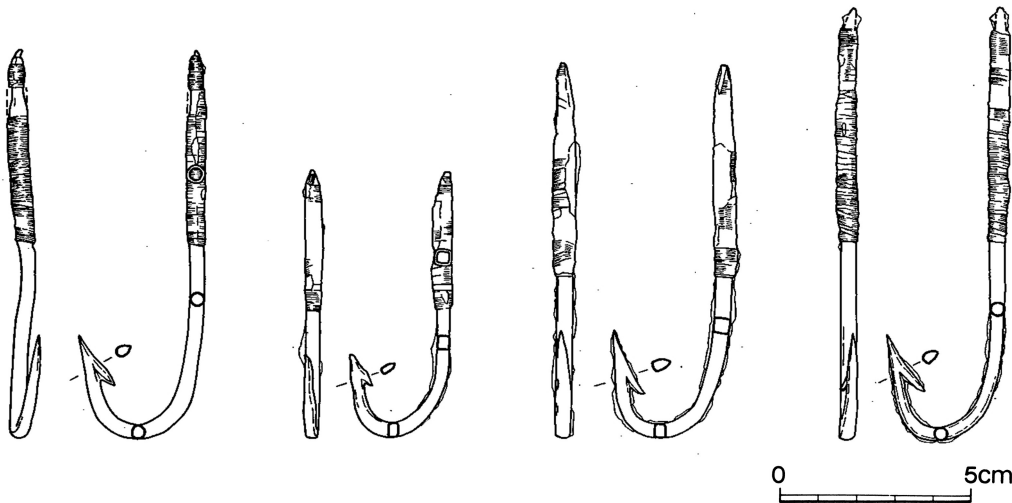
ちなみに、鳥取県長瀬高浜遺跡では古墳時代前期の総計 34 本を超える鉄製釣針が出土するが、鉄製釣針のほとんどが通常のものよりも重く、かつ魚の口に対して針の懐が広いとされる。さらに軸が長く、巻糸の幅が広いことから、沿岸部での磯釣り程度のものではなく、外洋性のものであったとされる。このことから、外洋航海術にたけた海人集団の存在が指摘されている（河野 2014）。

### （3）玄界灘沿岸地域の釣漁の様相

現在玄界灘の釣漁としては、カナギを用いたかなぎ撒き餌釣などのマダイ・ブリ・イサキ等を対象とした撒き餌及びつけ餌のほか、マダイ・アジ・ヒラメ・ヒラマサ等の一本釣などが行われている。その他、動力船を利用した機械釣、ひき縄釣などもある（福岡県水産林務部漁政課 1991）。

弥生時代の釣針は、縄文時代からの系譜が認められる骨角器の西北九州型結合式釣針（第 20 図）が長崎県原の辻遺跡や五島列島の寄神遺跡、佐賀県菜畑遺跡、柏崎貝塚、雲透遺跡などで出土する。西北九州型結合式釣針の軸部は鹿角、針部が猪牙で製作されることは縄文時代と同様であるが、軸部と針部の接合部が平坦であることや針部に合わせて軸部の抉りを調整するなどの新たな工夫が認められる。また、鳥根県タテチョウ遺跡、西川津遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡等では多数の西北九州型結合釣針が出土し、出土数からみれば中心地が山陰地域に移動したような状況を示す（山崎 2007）。さらに、骨角製の単式釣針は菜畑遺跡、鹿児島県高橋貝塚や青谷上寺地遺跡で出土するが、全体には多くない。ちなみに、青谷上寺地遺跡では弥生時代中期に属する大小の骨角製釣針が顕著で、一般的な鉄製品が盛行する弥生時代後期以降でも鉄製釣針を含む鉄製漁具は目立たない（村上 2017）。

鉄製釣針の確実な最古の資料は、弥生時代中期の長崎県布津木場原遺跡出土甕棺のものとする（山中 2007）。弥生時代後期後半になると、北部九州では基本的に釣針は骨角製から鉄製へ材質転換が行われ、鉄製釣針は長崎県カラミ遺跡、原の辻遺跡、木場原遺跡、福岡県御床松原遺跡、唐原遺跡、徳永川ノ上遺跡、大分県小園遺跡、宮崎県中尾原遺跡等、出土数は多くないものの、九州から太平洋側の高知にかけて一定の分布域を形成する（渡辺 1995）。博多湾沿岸地域では弥生時代後期後半以降鉄製釣針が普及するが、出土鉄製漁具の大半が鉄製釣針であるものの、出土量は多くはなく、それぞれの法量



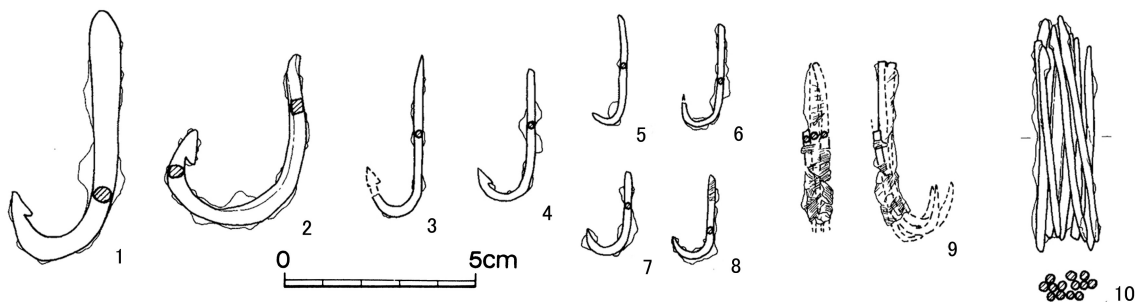
第 21 図 徳永川ノ上遺跡出土鉄製釣針 (1/2)

も大きくない。特に現在でも釣漁で行われるマグロやフカ(サメ)などの大型魚の捕獲にあたり、魚を釣り上げる際に魚は瞬間的に自分の重量の3~5倍の力を出す

といわれていることから、外洋での大型魚の捕獲にあたっては、弥生~古墳時代前期の釣漁具ではかなりの危険と困難を伴うと予想されることから、ヤス・モリと併用して釣り上げていたことが予想される。

弥生時代後期終末のみやこ町徳永川ノ上遺跡IV-42号墓棺外副葬品の大型鉄製釣針(第21図)は、最大のもので長さ11.4cm、幅2.75cmを測り、軸の上部には糸巻痕が、針先には内アグがあり、現在対馬などで使用されているブリ用の釣針に極めて良く似るとの指摘がある(山中・大澤2003)。また軸頂部には掛かりがなくが尖るが、これは釣糸との結び目への力の集中を防ぐこと、生き餌を付けて大型魚を狙う際に生き餌の泳ぎが不自然にならないようにするための指摘(内田2009)は妥当なものである。糸島市上罐子遺跡の弥生時代後期の琴板には鉄製釣針2本が描かれ、福岡市赤穂ノ浦遺跡出土の銅鐸鑄型に釣針が彫られることから、鉄製釣針が墳墓に副葬される理由としては釣針自体が集団や被葬者の何らかの社会関係を示すシンボルであったと考えられ、実用品ではなかったと考えている。

ちなみに、8~11世紀の福岡市海の中道遺跡では、釣針の未製品の中で長さ6cm前後に切り揃えた円棒状のものがあるが(第22図10)、その端部には鋸を持つものと持たないものがある。よって、この鉄製釣針は細く短い角棒を研いで丸棒にし、その一端をわずかに鍛え、研いで一部は鋸を付け、腰部を曲げて完成したものと考えられる(山中2007)。加えて、内側に逆刺をもつ長さ5cm以上のものと長さ5cm以下のものに区分でき、5cm以上のものは先端部が直線のままのものと先端部を内側にわずかに曲げたものの2種類がある。小型品は直線タイプで鋸の有るものと無いものに分けられる(第22図3~8)。さらに長さ5cm弱に復元される3本の鉄製釣針を樹皮で錨状に束ねたものがあり、イカ・タコ用の擬餌針と極めてよく類似するとの指摘がある(第22図9)(山崎編1982)。このことについては、第IV章1、78・79頁で取り上げている。



第 22 図 海の中道遺跡出土鉄製釣針 (1/2)

#### 4 玄界灘沿岸における飯蛸壺延縄漁の導入

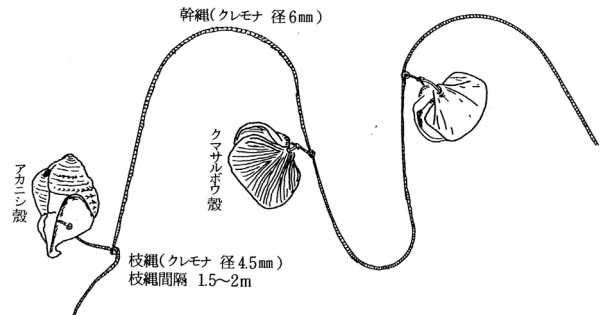
##### (1) 蛸壺漁とは

日本が消費量世界一であるタコは、世界で 200 種、日本近海には 50 種類近くが棲息するといわれる。現在マダコ、ミズダコ、テナガダコ、イイダコの 4 種を主に食し、弥生～古墳時代には専用土器である大小の蛸壺の存在から、主にイイダコ・マダコが漁の対象であったと考えられている。

福岡県では、それぞれの棲息地からマダコのことを岩ダコ、イイダコのことを渦タコとも呼ぶように、体長 60 cm ほどに成長するマダコは、本州南部より南、潮間帯から水深 50 m ほどの岩場に棲む。

一方、小型のイイダコは北海道南部から九州までの水深 10 m ほどの内湾性の砂泥地に棲息する。なお、いずれも行動は夜行性で、昼間は岩場、砂地、泥地に身を隠しているが、夜間は餌を求めて徘徊する。

蛸壺漁は、瀬のないおだやかな環境において、タコが岩間などの狭い場所に入り込み、にがてな光や肉食魚に襲われないようにする習性を利用した漁で、現在でも有明海で行われている。現在有明海で行われる巻貝や二枚貝などの貝殻を用いた貝殻製飯蛸壺漁は、「タコ縄」と呼ばれ、2～4 月はクマサルボウ、5～8 月は小型のニシ、9～12 月は大型のニシというように、タコの成長に合わせて漁期によって異なる容量・種類の貝殻を使い分けて捕獲する。漁法としては、1 縄に貝殻を 1.5～2 m 間隔で 500 個取り付けて一連の延縄状にし、海底に直線状に沈めておく。通常は 10～14 縄を 2～12 月までの漁期中、同一の場所に沈めておき、毎日あるいは 1～2 日おきに綱を揚げる（第 23 図）（福岡県水産林務部漁政課 1991）。なお、マダコ用蛸壺は貝殻では大きさが足りず、古代では土製、現在では陶器製やプラスチック製が主体になるが、手釣り漁や見突き漁などでもマダコを捕獲した。



第 23 図 現在の有明海における貝殻製飯蛸壺

（福岡県水産林務部漁政課 1991 より引用）

##### (2) 玄界灘沿岸地域における飯蛸壺漁の民俗例

イイダコは浅海域に棲息するため、民俗例における飯蛸壺漁は、基本的に水深 10～20 m 前後、深くても 30 m 位の海底に数百点以上、幹縄につないだ飯蛸壺を沈めて捕獲する。機械化している現在では動力で幹縄を巻き取ることから、1 回に 10～40 本の幹縄を繋いで使う（平川 2012）。

先述したように、イイダコは夏ダコは小型、冬ダコは大型に成長するため、体長に合わせて夏と冬で使用する容器を変えるが、夏ダコは現在では延縄漁の餌としての役割を持っており、特にタイやハモなどを対象とする延縄漁では、餌としてのイイダコは身が固く食いちぎるのに時間がかかるため、釣針に掛かりやすいとの利点があり、餌としての夏ダコの需要は高いとのことである。ただし、この餌取りは釣りに要する労力の何倍もの手間と時間を要したとされ（海の博物館編 1988）、弥生～古墳時代に餌としての夏ダコを捕獲していたかは疑問が残る。

玄界灘沿岸で近年まで飯蛸壺延縄漁を行っていたのは博多湾西岸の福岡市西区姪浜、今津浜崎で、貝製と土製両方用いられていたが、主体は土製であった（平川 2012）。この飯蛸壺延縄漁は長さ 60 m の幹縄に、約 1.5 m 間隔で飯蛸壺の孔に枝縄を付けたものを連結する、つまり一本の幹縄に 40 個程度の飯蛸壺を装着した。飯蛸壺漁は朝方行い、壺を順次海中に投入し、海底に沈める。取り上げは幹縄を繰

り上げ、イイダコが入っていればその場でイイダコを壺から取り出し、再び元の場所に沈める。飯蛸壺はカキ等がくっついてタコの入りが悪くなるので、定期的に表面を掃除する。

このように、その他の漁具に比べ、集落内で比較的多くの飯蛸壺が出土する理由として、カキ等を取るための掃除をするため、一旦集落まで持ち帰ったことが漁具の中で飯蛸壺の出土割合が高い要因ともなっているとみられる。

また飯蛸壺の幹縄と枝縄いずれも藁縄を用い、かつては宗像市鐘崎に藁縄の専門業者がいたとのことであるが（平川 2012）、藁縄では耐久性の関係から、使用期間は1年程度と短い。

### （3）弥生～古墳時代における玄界灘沿岸地域の飯蛸壺延縄漁

#### ①飯蛸壺の種類

巻貝や二枚貝などの貝殻を漁具として用いる貝殻製飯蛸壺漁は、佐賀県託田西分貝塚でいずれも穿孔した巻貝（アカニシ）と二枚貝（サルボウ）の出土から、少なくとも弥生時代後期には開始されたと考えられるが、資料数が少ないことから、ここでは土製の飯蛸壺を対象にする。

土製の飯蛸壺は、やや胴長の器形が基本で、口頸部付近に紐通しの孔を1～2孔、一部は底部に水抜き孔を有するが、通常の土器に比べ、器壁が厚く、調整が粗雑である。弥生時代中期初頭～中葉になると、大阪湾沿岸和泉側を中心とする地域でマダコやイイダコを捕獲するために作られた専用土器である土製蛸壺が出現し、間もなく大阪湾一帯に広がる。その後、瀬戸内海を経由して、飯蛸壺のみ弥生時代後期後半、北部九州に伝播したと考えられている（平尾 2003）。

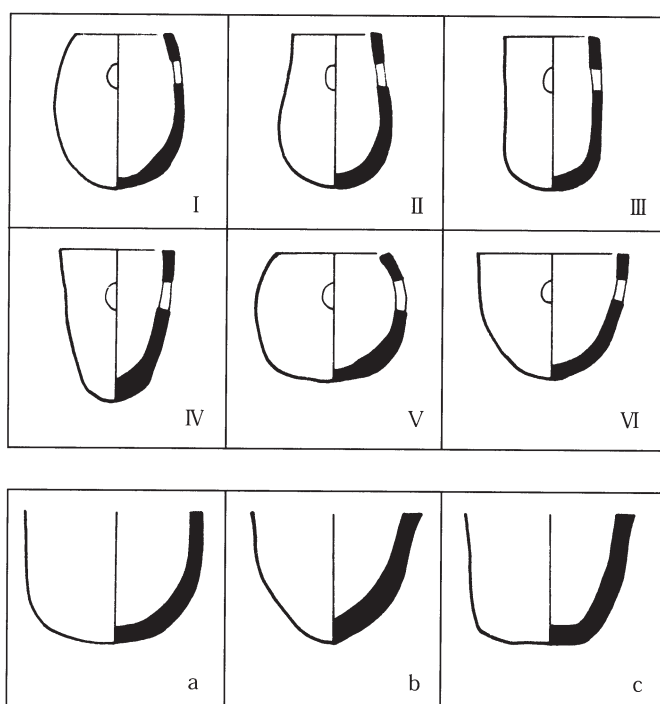
土製飯蛸壺は大阪湾から周防灘・豊前海までの瀬戸内地域、博多湾岸～唐津湾岸の玄界灘周辺のみで発見され、イイダコが多く棲息する有明海沿岸では確認されていない（平川 2012）。この理由としては、貝殻製飯蛸壺は土製に比べ重量が軽いため、有明海などの底質がより泥地の海底に好んで用いられ、砂

泥質の博多湾では土製飯蛸壺漁が受容されたという、海底の底質と材質の関係を求めた優れた指摘がある（平川 2012）。また博多湾は波が穏やかであるが、日本海沿岸では波が高いため、破損しやすい土製のものよりも、貝殻製のもの好んで用いたとの指摘がある（平川 2012）。

この飯蛸壺漁の盛行は、稲の豊作を祈る農耕儀礼と関連していたのではないかという意見やイイダコの習性をうまく利用して労力や時間を無駄に使うことなく、水稻農耕の合間に漁を行うことができることから、農耕カレンダーと合致するという見解もある。

#### ②先行研究からみた飯蛸壺の変遷と特徴

北部九州における飯蛸壺研究は、福岡市西新町遺跡の調査で大量の飯蛸壺が出現したことに始まるといっても過言ではない。西新



第 24 図 平尾和久氏による飯蛸壺の分類  
（平尾 2009 より引用）

町遺跡では3割近い竪穴住居跡から計400点以上、北部九州出土総数の約3割を占める量が出土した(平尾2003)。調査担当者の一人である平尾和久氏は、この成果をもとに北部九州で出土した弥生時代～古代の飯蛸壺を型式分類し、その変遷と分布から飯蛸壺の出現及び展開、伝播、地域性などの基礎的な整理を行った。

平尾氏の研究成果によると、玄界灘沿岸地域では弥生時代後期後半以前には飯蛸壺は存在せず、弥生時代後期後半以降、弥生時代中期から飯蛸壺延縄漁を行っていた大阪湾と播磨灘沿岸地域からある程度の規模の人々の移住・定着により、飯蛸壺延縄漁が北部九州に伝播し、開始されたとする(平尾2003)。加えて、玄界灘沿岸と周防灘沿岸の導入期の飯蛸壺の形態が異なり、導入期の飯蛸壺の故地が異なる可能性があるとした(平尾2007)。

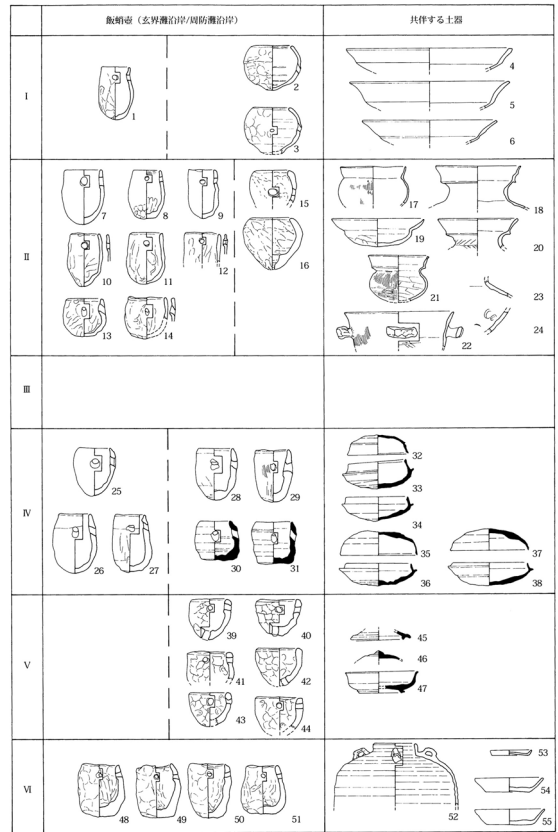
また飯蛸壺の分布について、弥生時代後期後半、玄界灘沿岸の博多湾沿岸地域及び周防灘沿岸地域の少数の遺跡のみ確認されていること、続く古墳時代前期には福岡市西新町遺跡を中心とする玄界灘沿岸、特に博多湾沿岸地域に集中するが、古墳時代中期には博多湾沿岸地域の出土数が激減することとは対照的に、周防灘沿岸に分布域が拡大し、古墳時代後期にかけて周防灘沿岸が分布の中心となった(第25図)(平尾2007・2009)。

その後、山中英彦氏は福岡市箱崎遺跡出土飯蛸壺の半数が底部に水抜き孔をもつことから、博多湾沿岸では遺跡毎に博多湾岸に移住した本貫地が異なっていたことを示すと指摘した(山中2007)。

平川敬治氏は、考古学、民俗学・民族学、民具的な視点で飯蛸壺の分類、変遷、分布などの検討を行った(平川2012)。特に平川氏の分類は、それまでの形状による分類に加え、砂地・泥地という海底の環境や孔の位置と傾斜から、飯蛸壺の水中での姿勢まで含めた、イイダコの生態を考慮した優れた分類である。

まず分類については、円筒形(平尾氏のⅠ～Ⅳ類)をⅠ類、鉢形(平尾氏のⅤ・Ⅵ類)をⅡ類、釣り鐘型をⅢ類、現在の瓶形をⅣ類とし、小分類として民俗例における使用場所の環境の差を考慮し、砂地で使用されたスリムな形のA(平尾氏のⅢ・Ⅳ類)、泥が中に入らないに膨らみを持つものをB(平尾氏のⅠ・Ⅱ・Ⅴ類)に分けた。その結果、玄界灘沿岸地域では、古墳時代前期まではⅠ類A・B両方がみられ、使い分けは顕著でないとする。また古墳時代後期の福岡市姪浜遺跡の事例から、底部が丸みを持つもの(平尾氏のa類)は泥地用、尖り気味のもの(平尾氏のb類)はより泥質の強い場所用、平坦なものは砂地用(平尾氏のc類)の可能性を指摘し、釣鐘型と底部穿孔があるものは、海底の底質が砂地であれば砂抜きに適していると指摘した(平川2012)。

このように形態の差は海底の底質の差や水深、水流等に対応している可能性があり、形態差=時期差、地域差とは直結しない可能性を提示した。加えて、出土遺物の口径と民俗例の比較から、博多湾岸で出土する飯蛸壺は全て「冬ダコ」用で、豊前地域のイイダコ壺の大きさが玄界灘沿岸に比べ小さく、「夏



第25図 平尾和久氏による飯蛸壺編年図  
(1/16) (平尾2009より引用)



第 26 図 博多湾沿岸地域における飯蛸壺 (1/4)

箱崎遺跡出土の飯蛸壺は、器壁が薄く作りが良いことが特徴で、西新町遺跡と同じく、胴部が直立するスリムな形態や、やや丸味を帯びた形態があり、底部は尖底気味のものが目立つ (第 26 図下)。これらの特徴は遺跡周辺の海底の底質が砂地であることに影響されたとみられる。また箱崎遺跡出土飯蛸壺は山中氏も指摘するように (山中 2007)、底部に水抜き孔を持つものの割合が、西新町遺跡が 8% であるのに対し (平尾 2009)、半分近く水抜き孔を有し、かつ紐孔が直角方向に 2 孔施されている割合も高い。

これは本質地の違いに求める意見もあるが (山中 2007)、水抜き孔を持つことで海から引き上げる際に中に入った砂や水などの重量が軽減されることから、操業人数が少なく済むないしは一つの延縄により多くの飯蛸壺を装着することができたなどの利点が予測される。加えて、水抜き孔の有無はイイダコが棲息する海底までの深さや海域の潮流の速さなど、海域の環境による影響も考える必要がある。

以上、3 遺跡では今山遺跡第 8 次調査の方が若干時期が古いという時期的な要因の可能性があるので、西新町遺跡と箱崎遺跡周辺の海底の底質は砂地～泥地、今山遺跡は西側の今津湾が強い泥地という漁場環境の違いが飯蛸壺の形態の差に表れている可能性が高く、平川氏の見解は支持できる。

### ③飯蛸壺の製作技法について

以上、玄界灘沿岸地域では環境に応じた形態を示す傾向の強い飯蛸壺であるが、製作技法の面での検討はほとんどないため、西新町遺跡出土飯蛸壺の観察からみえる特徴について少しみてみたい。

ダコ」用と指摘する (平川 2012)。以上のことから、博多湾沿岸地域における飯蛸壺延縄漁は、冬～春の産卵を控えたメスを対象にしていた可能性がある。

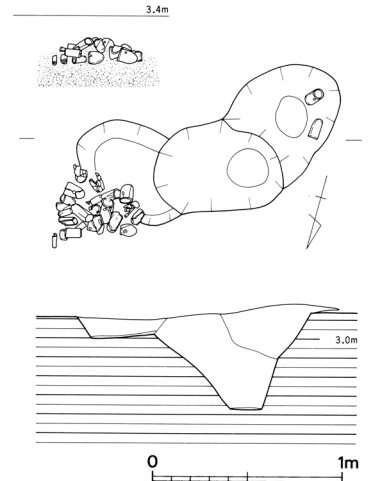
以上の平川氏の指摘に基づき、博多湾西部の福岡市今山遺跡と西新町遺跡、博多湾東部の箱崎遺跡出土飯蛸壺の特徴をみる。

今山遺跡は博多湾の内湾である今津湾と瑞梅寺川河口干潟に挟まれた幅数十 m の南北に延びた砂丘上に立地する。今山遺跡 8 次調査では、器形は円筒形、口縁部を絞り、胴部は膨らみ気味、胴部底部は尖底気味の古墳時代前期初頭前後 (久住 2005) を中心とする飯蛸壺が多量に出土している (第 26 図上) (米倉編 2005)。先の飯蛸壺の特徴は、平川氏が指摘した海底の底質が強い泥地で使用された要素と合致する。ということは、今津湾内の瑞梅寺川河口干潟で主に使用された可能性がある。

次に福岡市西新町遺跡出土の飯蛸壺は、今山遺跡第 8 次調査と同じく器形は円筒形の I 類であるが、胴部が直立するスリムな形態や丸味を帯びた形態で、底部は丸底が主体であるが、尖底気味や平底のものも含まれる (第 26 図中)。このことから、砂丘上に立地する西新町遺跡周辺の海域で用いられたと考えられる。

大阪湾岸の真蛸壺の製作技法について、篠宮正氏は、真蛸壺に粘土紐の巻き上げ痕跡が確認できないことから、粘土塊からそのまま上方に広げながら成形した、ないしは内型に粘土板を貼り付け成形しており、この製作技法は飯蛸壺にも共通すると指摘する（篠宮 2012）。

西新町遺跡出土飯蛸壺を観察すると、外面にタタキを施すものや布留系甕と同様、器壁の薄いものがあり、断面では明確な粘土紐痕跡が認められるものもある。また内面からの押圧による外面の粘土ヒビがあるものも少なくなく、篠宮氏の指摘のように、粘土紐を積み上げて成形していないものも確実に存在する。これは製塩土器を含む土師器の製作方法とは大きく異なっていることを示しており、器壁が厚いことも併せて飯蛸壺は土師器工人とは異なる人々によって製作されていた可能性があり、今後飯蛸壺の製作技法や工人については検討の余地がある。



第 27 図 堅粕遺跡 10 号土坑横土器群 (1/40)

④飯蛸壺の漁法について

第IV章 1～3 の九州型石錘の検討では、体部や孔・溝の使用痕、摩耗状況を漁法復元の重要な指標としてきたが、集落出土の飯蛸壺は表面に付着したカキ殻等を除去するなどのメンテナンスのために集落に持ち帰ったものも少なくないと予想される。西新町遺跡出土飯蛸壺ではカキ殻等が付着したものはないため、大半がメンテナンスされていたとすると、使用痕により漁法を復元することは難しい。

玄界灘沿岸地域における古墳時代初頭前後の飯蛸壺がまとまって出土した事例を挙げると、福岡市今山遺跡第 8 次調査 D-11 区包含層 (31 個)、堅粕遺跡 10 号土坑横土器群 (32 個) (第 27 図) や箱崎遺跡 8 次調査 58 号住居跡 (17 個)・44 号土坑 (23 個) がある。平尾和久氏は弥生時代後期後半～古墳時代前期の飯蛸壺延縄漁では一つの幹縄に結び付けた飯蛸壺が 15 個程度が一単位として想定するが (平尾 2003)、筆者は先のまとまって出土した事例から、もう少し多い、20～30 個が一単位であったと考えている。ちなみに、堅粕遺跡の 32 個が一本の延縄で、先の民俗例から装着間隔が 1.5 m とすると、約 50 m 程度の長さの延縄になる。この約 50 m という延縄の長さは、第IV章 3 の西新町型石錘と自然石石錘を用いたまき網の長さ (52.5 m 程度と想定) と同規模であることは注目できる。

加えて、堅粕遺跡 10 号土坑横土器群では備讃瀬戸地域由来の管状土錘 C が 11 点共伴していることから (第 27 図)、堅粕遺跡の飯蛸壺延縄漁では管状土錘 C を錘として利用したとみられる。

さらに西新町遺跡出土の飯蛸壺の紐孔方向は水平が 80%、外傾が 16%、内傾が 4 % と水平方向に穿孔されたものが大半である (平尾 2009)。これは、延縄を装着した状態では開口方向は上向きで、海底に至ると横倒しになり、イイダコが入るのを待つ。引き揚げて回収する時は、口が斜めになるのでそこから水を出すことができる。一方、外傾のものは海底では横倒しになるが、引き揚げる際は開口が斜め向きになることが多く、潮流の早い場所では水の抵抗が大きくなるため、潮流の少ない波の穏やかな場所で使用したことが想定される。この紐孔方向の傾向も西新町遺跡周辺の海域環境と調和的である。

また飯蛸壺延縄漁の導入以後、一本の幹縄に複数の釣針を取り付ける漁業である延縄漁が玄界灘沿岸地域に定着した可能性がある。時代は下るが、奈良時代後半以降の福岡市海の中道遺跡第 2 貝塚から長さ 3～5 cm の中型釣針が約 50 点小片となって発見され、形態・法量とも均一性が認められる。このことから、捕獲魚の体内に残ったまま解体場に運搬され、その後ゴミ捨て場である貝塚に廃棄された状況が想定されており (山崎 1993)、この時期には博多湾沿岸地域では延縄漁が定着したことが確認できる。

#### (4) 小結

古墳時代前期・後期における土製の飯蛸壺漁の異常な盛行については、博多湾岸が浅い砂地であるという条件とイイダコの漁期が農繁期とぶつからず、海中に一定期間沈めてからのち引き揚げるという、農業と並行して行うことができ、また比較的簡単な生業であったことも一因と考えられる（二枚貝を使用した天草地方では1～5月が漁期）。しかし、時期により飯蛸壺の出土量が大きく増減する状況は、生業の中での土製の飯蛸壺漁のあり方が不安定であったことを示している。これは、現在飯蛸漁が盛んな有明海沿岸ではみられないが、おそらく現在でも一部残る二枚貝を使った漁法は存在していた可能性があり、イイダコが棲息する場所では二枚貝を用いた漁が一般的に行われた可能性がある。

さらに、北部九州に飯蛸壺が出現する弥生時代後期後半は、備讃瀬戸及び大阪湾沿岸地域由来の土器製塩の導入よりは若干時期的に先行するが、その後の飯蛸壺の動態は製塩土器と非常に類似する。しかし、塩生産は5世紀後半に天草・宇土半島に移動し、大規模化するが（山崎 2007）、天草・宇土半島には飯蛸壺の出土はない。この理由としては、『延喜式』に「乾蛸」と短冊状にスルメのように加工した「楚割り」が、讃岐・隠岐・肥後から献上されたとの記事もあり、脂肪分の少ないイイダコはイカと同様干物加工に適しているものの、現在でも干シタコはスルメと異なり、広く流通するものではなく、漁師の保存食としての利用が基本である（平川 2012）。

博多湾でも飯蛸壺が大量に出土する遺跡（西新町遺跡等）と少ない遺跡（唐原遺跡等）があるが、山中英彦氏は以前唐原遺跡で大小 300 基余り発見されている炉跡がスルメイカ加工（乾燥）用の炉跡ではないかと指摘した（山中 2007）。筆者は、弥生時代後期後半に飯蛸壺漁を受容、積極的に展開した理由として、弥生時代中期後半～後期前半に開始される在来の九州型石錘を用いたイカ釣漁で捕獲したイカと似た魚種であることが、飯蛸壺漁の受容とその後の盛行をもたらしたと考えている。このため、唐原遺跡ではイカ釣漁という「本業」が飯蛸壺漁を阻んでいた可能性も考えているが、基本的にイイダコはその小ささとぬめりを取る必要があるなどイカに比べ加工に手間取るため、水産加工品としてはイカに大きく劣ることが、限られた分布とその後の展開に影響している可能性があると考えている。

ちなみに、飯蛸壺からイイダコを取り出す際、現在では塩や灰、空気を入れたりするが（平川 2012）、弥生・古墳時代では濃い塩水（鹹水）か灰を入れて取り出した可能性がある。西新町遺跡の調査ではカマド内に灰が堆積するような状況はほとんどみられないことから、カマド等で生成した灰はタコを取り出す際に使用した可能性がある。

## 5 刺突漁

刺突漁は対象水産物を棒や竹等で突き刺して捕獲する原始的な漁労活動の一つである。刺突漁は、個人の技量や潮流などの環境により差が生じるが、肉眼では水深 15 m 位まで獲物を捕えることが可能である。なお、漁師によれば、数ある漁の中で、刺突漁で突いたものが一番新鮮で美味しいとされる。

刺突具は、刺突部が柄に固定され、柄を持ったまま突き刺す「ヤス」、獲物に刺さると刺突部が外れ、鉤頭に緊縛した索綱によって引き寄せて捕獲する「モリ」に区分される。だが出土遺物においては鉤頭に索綱を結び付けるための孔や溝、段などがなければ、両者の区分は困難なものが多い。このヤス・モリの刺突部先端部には逆刺を付けて、突き刺した対象水産物に食い込み、抜けにくくなる工夫を施すものがある。また鉤頭が刺さると、柄は外れて水面に浮くことによって、魚の位置もわかり、かつ柄にかかる水の抵抗によって魚を動きにくくし、魚の体力を消耗させるのにも役立つ特性がある。

縄文時代前期以降、石銛や回転式離頭銛等の刺突具が発達する。特に離頭銛は、獲物に的中すると容易に柄から外れるため、小さな船なら転覆させられかねない大型のクジラやイルカ、サメ、アシカなど大型の海獣類でも、水中で弱らせてから、安全に引き寄せることもできた。

弥生時代になると、弥生時代前期の佐賀県菜畑遺跡から石銛の他に木製のヤスやモリの刺突具と一緒に出土した、イルカ、ジュゴン、クジラ、サメなどの動物遺存体の存在から、水稻農耕導入当初から刺突漁が集落内で同時に行われていたと考えられる。ちなみに、島根県西川津遺跡や鳥取県青谷上寺地遺跡では離頭銛と二ホンアシカ、クジラ類の動物遺存体の共伴から、離頭銛による海獣類を対象とした漁が広く山陰地方でも行われていたことが確認できる。古墳時代になると、主に3本1組で柄に緊縛した有茎式、袋部を持ち1本ないしは複数の先端を接合した有袋式の鉄製のヤス・モリが前期古墳の副葬品・儀礼品として盛行するが、実用品としての骨角器や木製品も同時に認められる。

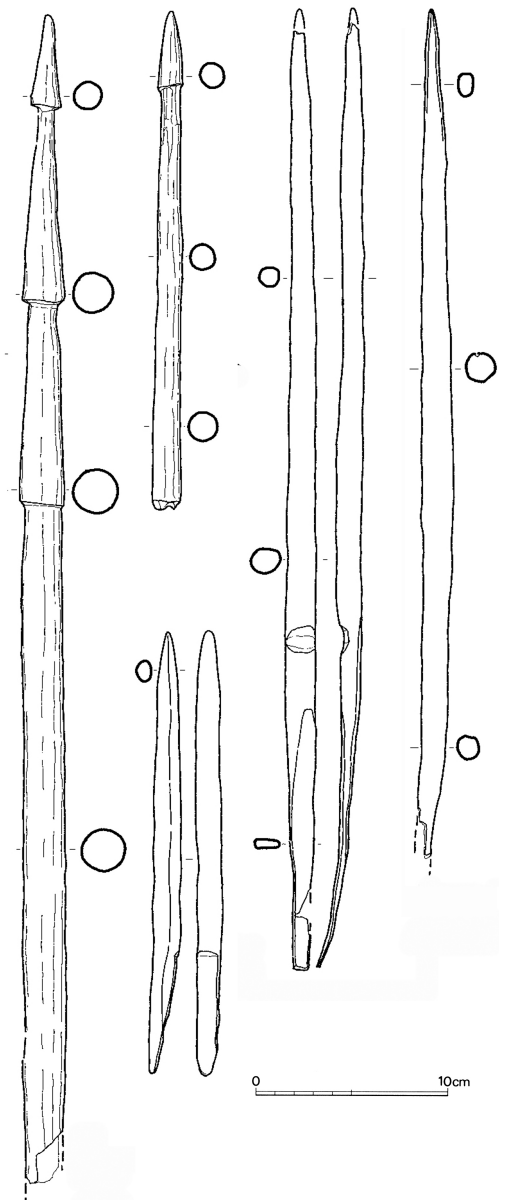
なお、刺突漁は個人の技量や道具に大きく依存する。刺突漁に関わる海人にとって、例えば魚を突くには刺突具をまっすぐに仕上げることで、刺突部と柄のつなぎ合わせに技術を要することなどから、刺突具は自ら製作し、微調整を行う必要がある点で骨角器が鉄製品よりも好まれたという指摘は（魚津 2012）、支持できる。

ちなみに、この漁法では魚類のほかサザエやウニ等の貝類を捕獲する見突き漁にも用いられていた。見突き漁の特徴として、年間通じて行うことができる漁であるが、春から夏は海藻が茂るため難しく、水が澄んだ冬場が盛漁期となる。なお、初夏に大しけがあれば、海藻が根から取り去られるので、多く捕獲できる。

玄界灘沿岸地域では、弥生時代におけるヤス・モリの出土事例は少ないが、離頭銛が長崎県カラカミ遺跡、原の辻遺跡から出土している。ヤス・モリは先の菜畑遺跡をはじめ、中期には唐津市雲透遺跡で鹿角製ヤス、後期には元岡・桑原遺跡群や今宿五郎江遺跡（第 28 図）でイスノキという堅い材を素材とする木製ヤスが多数出土する。これらの遺跡では釣用錘と考えられる九州型石錘も多く出土することから、大型魚類の捕獲にあたって、釣漁具と木製ヤスを有機的に使用したとみている。木製ヤスは基本的に突起はあるが逆鉤がない無鉤式で、加工も粗雑なものが多い。これは材質の強度にも関係している可能性がある。このように、弥生時代の刺突漁には木製のヤスが多く使用されたとみられ、強度の問題から数本束ねて使用した可能性がある。なお、銛頭の一部は弥生時代後期に鉄製に転換するものもあり、カラカミ遺跡や原の辻遺跡に事例がある。

## 6 捕鯨

クジラは、古くは「勇魚」とも呼ばれ、1回の捕獲で大量の肉や油脂を得ることができ、余すところなく生活に利用で



第 28 図 今宿五郎江遺跡第 11 次出土  
木製ヤス (1/4)

きた。その大きさから、近世でも鯨一頭獲れば数浦が潤ったとされ、外洋での捕鯨業の成立以前はことにそうであったに違いないとの指摘がある（岡崎 1968）。また中世後期に開始された、専門の捕鯨集団による産業としての捕鯨業成立以前、他の漁業も兼ねる形で、時に応じて臨時の組織が編成されて捕鯨を行った。この鯨の肉や油、ひげ、骨などの各部位は余すことなく、捕鯨に従事した人々を中心に漁場に近接する地域に主に分配した、自給的な消費形態であったとされる（中園 2019）。

捕鯨の定義については、通常の営みの中で遊泳する鯨に対し、捕獲するための道具を操作により捕獲したことをもって定義づけられる（中園 2019）。近世以前の捕鯨は、近海を通過する鯨を対象に行われていたと考えられる。ただし、縄文時代の貝塚から出土する鯨骨や縄文時代中期の阿高系土器底部に残るクジラの脊椎骨圧痕などもクジラを捕獲した証拠にもなる一方、これらは捕鯨を直接的に示すものとは限らず、骨を様々な道具として利用したにすぎない可能性もあることは留意すべきである。

クジラは哺乳類の鯨目の中で、生体の体長が概ね 4 m を超えるものを指し、それ未満をイルカ、両者を合わせて鯨類と呼ぶ。鯨類を対象とする漁のうち、鯨を対象とするものを捕鯨、イルカを対象とするものをイルカ漁という。鯨の場合、死亡や行動不能の状態では海を漂流するものを「流鯨」、岸に漂着したものを「寄鯨」というが、それらに対する捕獲活動も古くから行われてきたと思われる。ちなみに、長崎県原の辻遺跡の弥生時代中期の壺肩部に櫂を多数描いた船と、鯨と考えられるものが描かれた線刻があるが、山崎純男氏はこれを「寄り鯨」「流れ鯨」「迷い鯨」の捕鯨図と理解した（山崎 2007）。

列島には、房総半島先端部の安房漁場、紀伊半島から伊勢湾の紀伊半島周辺漁場、室戸岬・足摺岬先端部の土佐漁場、対馬海峡域に面した西海漁場（山口県・福岡県・佐賀県・長崎県）の捕鯨の 4 大漁場が存在した（中園 2019）。これらはいずれも可耕地の少ない島嶼部やリアス式海岸を多く抱え、農業生産が難しい場所である。特に冬には南下し、春には北上する鯨の回遊路にあたる西北九州では鯨を捕獲できる確率は高く、その回遊ルートの中で半島や島など鯨が陸地に近づく場所での捕鯨が古くから行われていたとみられる。先の阿高系土器底部にみられるクジラの脊椎骨圧痕なども、壱岐・対馬・五島列島の島嶼部から南九州までの九州西海岸に集中することも（山崎 2007）、これを裏付けている。

古代の捕鯨方法としては、手投げの刺突具を鯨に突き刺すことで捕獲した突取捕鯨の存在が指摘されている（中園 2019）。これは鉞をクジラに打ち込むことで動きを封じ、その後綱で鯨と船などの抵抗物とを繋ぐことによってクジラの体力を奪い、捕獲した。特に、クジラの中でも死んでも浮くクジラの種類を狙って、鉞を使用した捕鯨が行われていたと考えられる（内田 2007）。

縄文時代早期末の長崎県つぐめのはな遺跡で出土した重量のあるつぐめのはな式石鉞については、クジラ類を対象にしていたことが指摘されている（川道 2007）。この漁の内容は、時速 6 km 程度の速力の丸木船を用いた捕鯨では、瀬戸の潮流に比べあまりに遅すぎ、流れが緩やかになる時間も短いことから、足元の安定した場所からの突き漁もしくは投げ漁による捕鯨が想定されている（川道 2007）。加えて鎌崎型スクレイパーは棒状のシャフトをはめ込み、皮下脂肪の厚い海獣類の解体に用いられたとの指摘がある（川道 2007）。以上のことから、つぐめのはな遺跡でのクジラ漁は、春と秋に幅が極端に狭い瀬戸を潮流に逆らうように遊泳するクジラをつぐめのはな式石鉞による岸からの大量の投射もしくは刺突によって、人為的に座礁させて捕獲し、その場で鎌崎型スクレイパーにより解体したと理解できる（川道 2007）。このように、縄文時代早期末には石鉞を用いた突取が行われていたとみられるものの、季節性が強く、特異な環境という場所、時期等かなり限定された捕鯨であったとみられる。

なお、中世以降になると、最終的に先が尖った剣で鯨を突いて深手を負わせて仕留めるようになるが、古墳時代の北九州市貝島古墳群出土の逆刺のない長い形状の固定式の鉞は、止めを刺す剣の役割を兼ね

ており、6～7世紀には突取捕鯨のような捕鯨が存在したとの指摘がある（内田 2009）。

さらに、岡崎敬氏は弥生時代には積極的な捕鯨が行われていたとは考えにくく、シャチ等に追われて浦に逃げ込み、速度の落ちた鯨を当時の村人総出で捕まえていたことが多かったのではないかと指摘する（岡崎 1968）。また中世以降行われた湾口を網で締め切り、鯨を閉じ込め捕獲する漁法である断切網法に似た、原始的な断切網法も時代や地域を限って存在した可能性が指摘されている（中園 2019）。

## 7 潜水漁

### （1）潜水漁とは

潜水漁は、アワビやサザエといった岩礁性貝類を求めて海中に潜って捕る原始的な漁法の一つで、先の刺突漁や海藻類などの採捕と重複する部分がある。かつてはほぼ裸で素潜りで潜っていたため、概ね5月～10月が漁期となっていた。現在、潜水漁を行う女性を「海女（アマ）」と呼ぶが、アマは元々海に活動の場を求めた人々を指し、古代においては男女の区別は明確でないことから、ここでは今日一般的な海女漁ではなく、潜水漁とする。

アワビやサザエは岩にへばりついているため、骨角器や木器、鉄器の一方の端部を薄くしてヘラ状にし、岩礁から剥ぎ取った道具、いわゆる「アワビオコシ」が、縄文時代の佐賀県菜畑遺跡や長崎県対馬の佐賀貝塚、五島列島の大浜遺跡で鯨骨製品が確認されていることから、縄文時代から潜水漁が存在したとみられる。弥生時代になると、西北九州だけではなく、日本海沿岸地域まで鹿骨製アワビオコシの盛行と分布の拡大が認められ、後期にかけてアワビ殻の出土割合が増え（豊田 2018）、鉄製アワビオコシとみられるものも出土する。このことから、弥生時代になると、貝から採取した「真珠」を含むアワビが交易品として意識的・選択的な利用へを転換することで、アワビオコシによるアワビの採取が盛んになり、日本海沿岸の広範囲にわたって、選択的な資源利用が発達する。これは、外部の経済システムの包摂・依存が特定資源への関与を強めた結果との指摘がある（高田 2021）。

なお、潜水の水圧などによって、耳の外耳道と呼ばれる部分に、骨性の隆起ができる「外耳道骨腫」と呼ばれる特徴を持った人骨が、鳥取県青谷上寺地遺跡などで確認されていることから、古代の潜水漁の存在を示すという意見がある。なお、研究者によって骨腫か否かの判別が異なることや、アワビ殻が出土する遺跡の人骨で「外耳道骨腫」がないもの、内陸部の出土人骨でも「外耳道骨腫」があることなど、長時間の潜水によって形成されないものもみられることは留意する必要がある（豊田 2018）。

ちなみに、潜水漁については、民俗学の研究が多く行われており、主に潜水漁に従事する人「アマ」について女性を「海女」、男性を「海士」、また白水郎、蟹人、阿末、海部、潜女などの名称が文献ではみられるが、現在ではもっぱら潜水漁に携わり、性別に関わりなく、男女の漁業者を指して「アマ」と呼ぶことが多い。しかし、文献からみると、古代ではアマ（海人、白水郎）という言葉は、潜水漁を含む漁労活動に関わる人々だけを指すのではなく、航海に携わる人々、製塩に関わる人々など、広く海に関わって生活していた人々を呼ぶことが一般的である。

### （2）玄界灘沿岸地域における潜水漁

『魏志』倭人伝の記事には、「好んで魚鰓を捕え、水深浅と無く、皆沈没して之を取る。…今倭の水人、好んで沈没して魚鰓を捕え、文身し亦以って大魚、水禽を厭う…」とある。これについて岡崎敬氏は、3世紀の東松浦半島において、「倭の水人」が盛んに海に潜って魚や貝を採ったという潜水漁の様子を

描写していることを指摘した。さらに倭の水人は、後に『日本書紀』・『肥前国風土記』・『万葉集』などの文献にある「白水郎」となり、その起源は古墳時代まで遡ることも指摘した（岡崎 1968）。

なお、人間が素潜りで到達できる深さは、通常水深 15 m 位までとされる。潜水漁は、潜水能力とともに、資源の分布状況や適切な管理が必要で、アワビや海藻類などを求め、時には集落外の沿岸伝いに移動し、アワビや海藻類を獲得した可能性もある。

さらに潜水漁の存在を裏付けるものとして、主に弥生時代中期に北部九州で男性用の腕輪として使用されたゴホウラ貝の存在がある。ゴホウラ貝は琉球諸島の海で採取できる貝で、弥生時代と併行する時期にそれらの貝殻を集積した遺構が沖縄本島やその周辺の島々の遺跡で発見されている。ゴホウラ貝はまず南島周辺で粗加工されてから、鹿児島県高橋貝塚などの九州南部を介して北部九州まで運ばれ、地域集団内の工人によって好みの形態の貝輪に加工され、最終的に北部九州の集団内で使用され、その一部は畿内などの遠隔地への交換財として運ばれた（豊田 2018）。

また、ゴホウラ貝は素潜りの限界近くの海底に棲息している。これらは潜水を得意とする海人が採掘し、遠距離に運ばれた行為や背景により、それらの貝殻の神秘性を高めたことも重要な交換財となった要因であると考えられている。

### （3）民俗例・文献にみるアワビの採取

アワビは、対馬暖流の流れる海岸沿いの岩礁地域に普遍的に棲息するが、他の貝と比べ総じて数が少なく貴重なもので、古代において重要な海産貢納物であった。『延喜式』に記載されたアワビの捕獲量は、筑前・肥前国が最も多く、かつ産地を示すものとして「筑紫鯨」がみえるなど、古代より玄界灘沿岸地域はアワビの産地として知られていた。

アワビの採取は、明治 11 年に編纂された『福岡県漁業誌』では、船からヤスで突いて捕獲する方法と、海女による潜水漁の 2 方法が紹介されている（財団法人西日本文化協会 1982）。

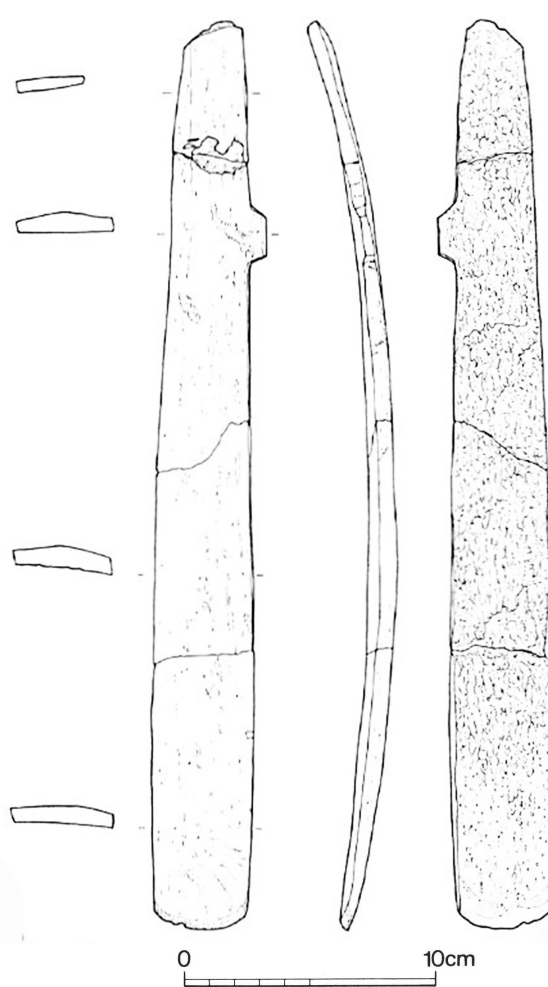
船による捕獲は、漁場は海底が岩礁で、寒露の頃（10 月 8 日頃）に始め、春分の頃（3 月 20 日頃）に終わる。日の出より出漁し、錨を下した船上から海底を直視し、アワビを確認すれば、長い柄を持った三又の鉾（ヤス）で突き取るないしは挟み取った。海中が濁った時は、種子油を海面に落とすことで透明にした。1 日大小 40 個で上漁であるとされる。

一方、海女によるものは、大暑の頃（7 月 23 日頃）にはじめ、寒露の頃に終わる。漁場は主に水深 9～16 m（老練の海女でも水深 16 m が限界）までの岩礁地帯で、船には船頭 1 人に海女 2・3 人乗り組み、昼間に出漁する。潜水時間は長くて 1 分程度で、1 回ごとにアワビ 1 個得れば上漁であるとされる。船頭は海女が浮上する時は竹棹を入れて浮上を助け、海女が寒さで海中で気絶した際には、船頭が海中に入り助けた。ウェットスーツがない時代、限定された時期の漁であった。なお、近代の志摩地方の海女は、2 kg 近い錘を先端に結び付けた縄をたどることで、目的の場所まで素早く到達できたという民俗例から、穿孔加工された大きな自然石はアワビの採取等で使用された可能性がある。

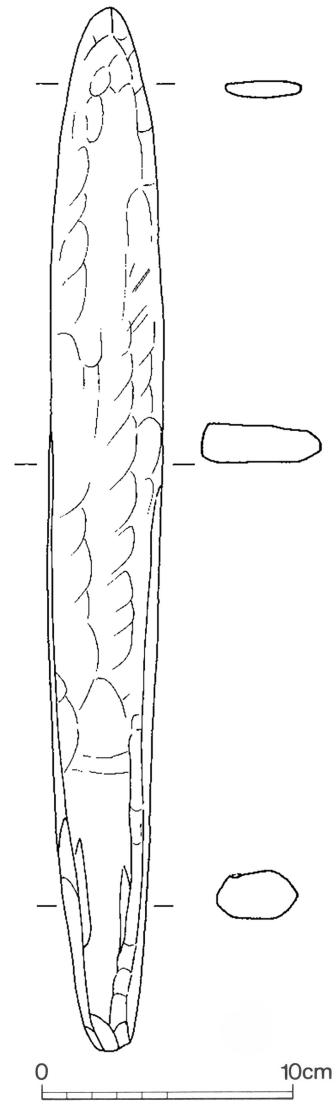
### （4）アワビオコシ

アワビの採取は素手では基本的に不可能なので、岩礁から剥ぎ取るためにへら状の「アワビオコシ」と呼ばれる道具を使用する。現在のアワビオコシは、「磯ガネ」や「磯ノミ」など地方で呼び名が変わるが、アワビオコシはアワビ採取にとどまらず、サザエやトコブシ、海藻の採捕など広く磯の道具として用いられたものと考えられている（岡崎 1968）。

アワビオコシは、縄文～弥生時代にかけての遺跡を中心に扁平・棒状の鯨骨（第29図）や鹿角製、石製、木製（第30図）、鉄製のものが出土するが、これらは短冊形をなし、短辺を研磨して片刃状になるという共通の特徴を有する（豊田 2018）。なお、へら状の平たい石でもアワビを剥ぎとることが可能であるが、弥生時代以降、本格的なアワビの採取の盛行に合わせて、本格的な専用の道具を整備したものとみられる。



第29図 原の辻遺跡出土  
鯨骨製アワビオコシ（1/3）



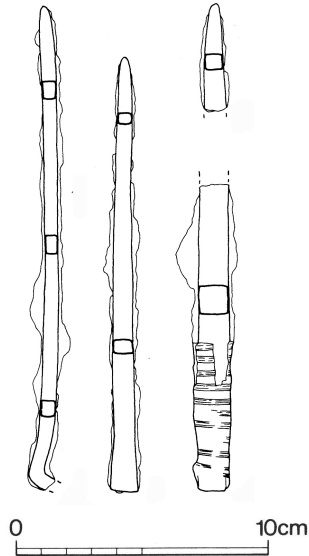
第30図 元岡・桑原遺跡群出土  
木製アワビオコシ？（1/3）

岡崎敬氏はそれまで「へら状骨製品」ある

いは「骨剣」とされてきたものについて（第29図）、周辺漁村に残る形態的に類似した民具に注目し、これらがアワビオコシであると推測し、弥生時代に潜水漁が存在したことを指摘した（岡崎 1968）。また岡崎氏は、この鯨骨製アワビオコシは、鹿角に比べて大型品を製作でき、しかも折れにくく、へら状に製作するためには極めて適した材料であるとし、『魏志』倭人伝にみられる魏に貢納した貝から採れる「真珠」の採取を目的として、アワビ漁を積極的に行っていた可能性を指摘した（岡崎 1968）。ただし、弥生時代の「真珠」の出土例は少ないことは課題である。これら大型の鯨骨製アワビオコシの存在は、深く潜水することができる海人の存在を示すものであり、壱岐では春から秋にかけて潜りに卓越した海人がアワビ等の貝類を捕獲していたと考えられる。

中尾篤志氏は、縄文・弥生時代のアワビオコシを集成・分類し、鯨骨製アワビオコシと鹿角製へら状製品の変遷と系譜の検討から、縄文時代中期前半に西北九州地域の沿岸部で誕生した鯨骨製アワビオコシが弥生時代に山陰や北海道に伝播するとともに、山陰の鹿角製「へら状製品」と北部九州の鯨骨製アワビオコシとの関係性を指摘した（中尾 2005）。

武末純一氏は、弥生時代中期における列島との交流拠点である韓国の靑島遺跡出土の鹿角製アワビオコシと北部九州及び山陰地域の潜水漁用の鯨骨製・鹿角製のアワビオコシの形態の類似から、靑島遺跡出土アワビオコシは列島から搬入または鹿角に材質転換して忠実に模倣されたとみた（武末 2009）。



第 31 図 御床松原遺跡出土

鉄製アワビオコシ (1/3)

また河合氏は、アワビオコシについて形態・素材・加工方法の観点で分類した上で、その用途について検討を行った。実際のアワビ漁の捕採具との比較検討、青谷上寺地遺跡・島根県西川津遺跡の出土動物遺存体にアワビが多くないことを挙げ、これらの遺跡で出土した先端部の摩滅が著しく、羽部が丸みを帯び、長さ 5 cm 未満～25 cm 程度で大きさも形も非常に多様なへら状の骨角器について、磯の貝類を採取するための道具、すなわち広義の「磯鑿」として捉えるべきであるとした。この骨角製アワビオコシが、アワビの捕獲に適しており、使われる頻度が高かったにしても、本来はアワビの捕獲に特化したものではなく、岩礁に吸着する貝類の採取にも使用された可能性が高いとし、どこまでを「アワビオコシ」と認定するかの判別は非常に困難であるとの指摘を行った（河合 2014）。

なお、骨角器などはアワビやサザエを傷めることが少なく、水深のある場所では鉄製のアワビオコシが使いやすいという民俗例から、鉄製アワビオコシが出現する弥生時代後期にはより水深がある場所で採取するようになった可能性があり、アワビやサザエが棲息する環境や種類に応じて、各種材質のアワビオコシを使い分けていた可能性がある。かつ糸島市御床松原遺跡では弥生時代後期の鉄製アワビオコシとされる鉄製品があるが（第 31 図）、古墳時代になっても鉄製アワビオコシの事例は数例であり、普遍的に鉄器化したかどうかは検討の余地がある（豊田 2018）。さらに弥生～古墳時代、神奈川県三浦半島の海蝕洞窟遺跡で出土する極めて多量のアワビ貝殻に比べ、玄界灘沿岸地域では少ないことから、アワビの採捕が漁労活動における占める位置についても、検討が必要である。

なお、6 世紀の宗像市浜宮貝塚ではアワビ・サザエが顕著に出土しているほか、長崎県串山ミルメ浦遺跡出土貝類ではアワビとサザエが突出して多く、加えて炉跡や甑の存在から干しアワビ等の水産加工品の製造に関わった可能性が指摘されている（豊田 2018）。

ちなみに、アワビは藤原宮や平城宮からはアワビやサザエ、ウニなどの殻が出土しており、殻付の新鮮な状態で運ばれてきたとみられることから、内陸部の官衙や集落でも生食や磯焼きなどで食していた。生食以外にも、耳を乾燥して干しアワビやのしアワビに加工された。加工したアワビは、古代より大王家や神社などへの貢納品となり、木簡や『延喜式』では志摩・相模・安房・上総・常陸・出雲・石見・隠岐・長門・紀伊・阿波・伊予・筑前・肥後・肥前・豊後・日向・壱岐などがみられ、特に志摩・筑前・肥前は各種のアワビの加工品が挙げられている（岡崎 1968）。

また神を迎えるマツリにおいて、魚介類や海藻類とともに、「のし」と呼ばれる干したアワビの身を

薄く切って伸ばしたものが添えられるが、現在でも伊勢神宮に神饌の熨斗鮓が残る。これは、海産物が貴重な存在であるということと同時に、海の塩が儀礼の場を清め、海産物を自らもそれを食べることで心身の穢れを祓うという見解がある。特に福岡では熨斗の文化が比較的近年までよく残り、贈答品にタイのヒレを添えたり、来客の際に玄関にハコフグを出したりした（国立歴史民俗博物館 2020）。

## 8 海藻類の採捕

日本列島は、海流と寒流の影響が入り混じり岩場が多いことから、多種多様な海藻の棲息に適している。列島の沿岸には、コンブ・ワカメ・ホンダワラ・アラメ・アマモなどの群落、いわゆる藻場が形成され、魚が集まる性質から魚の養育場として、かつ産卵場として重要である。

海藻は、古くからミネラルの供給源として日本人の食生活に深く根差しており、特にワカメは最も手軽に食べられる海産物として、交換財としての価値も高い。加えて、『万葉集』にはアマが海藻を刈る歌が多く詠まれていることや、ホンダワラは藻塩焼きなどの製塩用の材料として用いられた。

ちなみに、現在でも博多湾沿岸の岩礁域には、海藻類が多数棲息しており、アカモクやフノリ、博多の郷土食である「おきゅうと」は、海藻のエゴノリとイギスから作られており、古代においても様々な種類の海藻類が利用されたことは想像に難くない。

海藻類は、潮の引いた浜辺や浅瀬で簡単に採取できるが、三浦半島の洞穴遺跡からは、大量のアワビ貝庖丁が出土しており、海浜部集落から出土する石庖丁などの収穫具の一部は海藻を刈るためのもの可能性がある。ただし、現在ではワカメなどは船上からワカメ鎌などを使って採取する見突漁で、古代においても大量に採取するためには船上から鎌や竹を用いるないしは潜水し、採取したとみられる。

古代の主要な海藻類はワカメで、藤原宮跡出土木簡には「軍布」、平城京出土木簡では「若海藻」と記される。また史料ではワカメの加工品として、塩洗・水洗とあるが、塩洗は海水で故意に塩分を付けて塩分摂取を目的としたもの、水洗は真水で洗って塩分を落としたものと考えられる（内田 2009）。

さらに贅での海藻類の貢納を彷彿とさせる、海藻の採捕儀礼（神事）が、日本海沿岸沿いの北九州市和布刈神社、早鞆神社、山口県住吉神社、島根県日御碕神社に現在でも残る。その内容は、旧暦の元旦の深夜、正装した神官が松明をかざして干潮の岩場に生えはじめたワカメを鎌で刈り取り、神前に供えるというもので、海藻の初穂儀礼ともいうべきものである（内田 2009）。

なお、隠岐の海神社では、近年まで元旦に竹の枝をメカリ鎌にみたてていた。これは竹の枝に海藻を絡ませる、ないしは枝が分かれた木や竹を竿の先に付け、海上で切れて漂うワカメを陸からひっかけた漁法が奉納神事に残ったと考えられ、古代の海藻類の採捕の状況を推測することができる。

## 9 玄界灘沿岸における土器製塩について

### (1) 土器製塩とは

塩は人が生活する上で必要不可欠なものである。古代においては、塩は生命を維持するため、調味料として、水産物や漬物などの食品の保存・加工に加え、鋳物生産、馬の飼育などの家畜の飼育や皮革生産などの諸生産活動、さらには祭祀や儀礼など様々な場面でも用いられてきた。このように基幹生活物資である塩は、古代社会や経済を明らかにする上で重要であるが、塩自体は全く残存しないため、その動きを知る唯一の手がかりとなるのが、古代の塩生産に用いられた製塩土器である。

なお、食品を塩漬けして保存する塩蔵加工は古くから行われてきたが、その原理は食塩による脱水作用及び食塩の水分活性の低下作用によって、微生物の増殖を抑制することにある。特に水産加工品で食塩含有量が20%以上の場合は、1ヶ月以上の保存が可能とされる（三船2019）。

塩生産の方法としては、岩塩や塩湖などから取り出す方法と海水から取り出す方法があるが、日本列島では岩塩が産出しないため、古代より海水を煮詰めて塩を作っていた。このうち、土器製塩は濃縮した海水（鹹水）を原料に、土器で煮詰めて水分を蒸発させ、結晶化した塩を得るもので、関東地方において縄文時代中期後葉の製塩土器が確認されており（阿部2019）、塩田による製塩が始まる平安時代まで土器製塩は行われた。

渡辺誠氏は、多量の製塩土器が出土した愛知県松崎貝塚において、ウズマキゴガイという海藻に付着する微小貝を多数検出することに成功し、その90%以上が焼けて黒く変色していることから、海藻であるアマモを用いた、藻塩焼き採鹹の存在を実証した（渡辺1994）。福岡市海の中道遺跡においても、動物遺存体の90%以上が焼けて黒く変色していたことから、ホンダワラ科の海藻ないしはアマモを用いた藻塩焼きの存在が指摘されている（山崎2007）。なお、玄界灘における藻塩焼きの様子は、『万葉集』で「志可の海人は藻がり塩焼き暇なみ髪流の小櫛取りも見なくに」など多く詠まれていることから、文献と考古資料両方においても志賀島で藻塩焼きによる製塩活動の存在が実証できる。さらに『延喜式』では、筑前国は「調庸塩」の貢納国とされる。

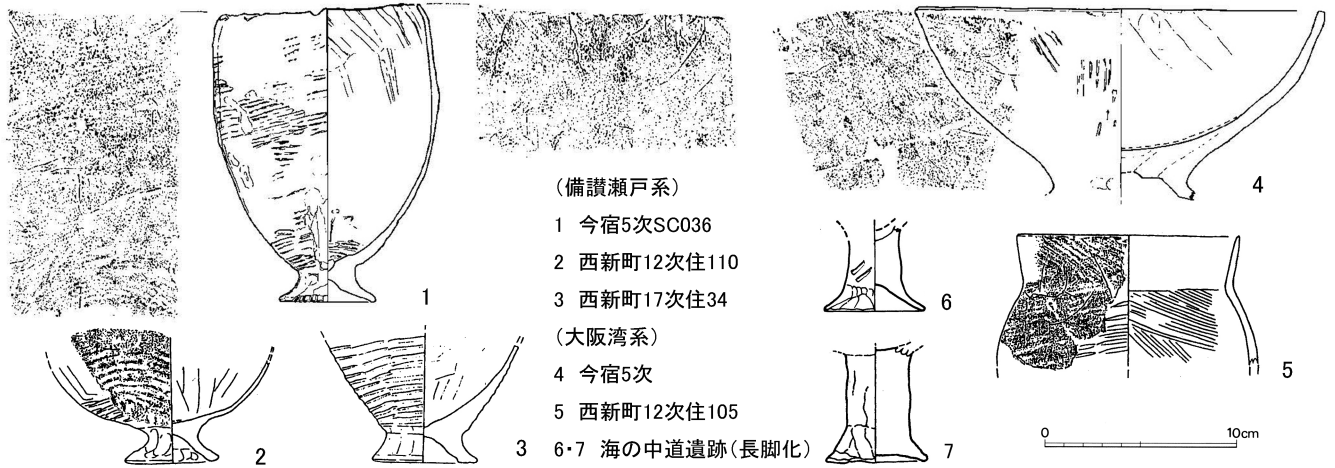
以上のことから、玄界灘沿岸地域では古代から藻塩による製塩が行われていたとみられる。ちなみに藻塩焼きで用いた海藻は量が必要なことから、おそらく潜水漁ないしは船による藻刈りにより採捕されたものとみられ、塩生産と漁労活動は相関性が認められる。

加えて、海浜部の遺跡において土錘や石錘などの漁具と製塩土器がしばしば共伴することから、本研究においても、製塩活動は海に関する多角的生産活動の一部として捉えている。よってここでは、先行研究から弥生～古墳時代の土器製塩の様相をまとめ、基礎情報を整理したい。

### (2) 土器製塩の工程について

土器製塩の工程として、海水を濃縮し鹹水を作る工程である「採鹹」は、乾燥させた藻を集めて海水を注ぐことを繰り返し、鹹水を得る方法と、塩分を多く含む藻灰を海水に溶かし、上澄みを取る方法が推定されている。この方法により、塩分濃度を海水の3%から20%程度まで上げたと考えられる。ただし、藻灰は濃度を上げるためではなく、塩の結晶化を促進する目的で使用したとの見解もある（阿部2019）。この採鹹が製塩工程で最も重要であり、これによって時間の短縮、燃料の節約に繋がった。

鹹水を作る際、海水が蒸発しやすい夏に海水をためて一週間ほどしておくと、天日のみで塩分濃度が10%近くまで上げることが可能であることから、採鹹は季節的なものと考えられる。海の中道遺跡で



第 32 図 博多湾沿岸地域における製塩土器 (1/4)

はウニの遺体が集中する層とホンダワラ科の海藻及びアマモに付着した環形動物・微小貝が同一層で出土したことから、春季に藻塩焼き採鹹が行われたとの指摘もある（山崎 1993・渡辺 1994）。なお、現在伊勢神宮の祭祀で用いる堅塩の採鹹作業は、7月下旬に行われる。

その後濃縮した鹹水を土器で煮沸して水分を蒸発させ、結晶化した塩を取り出す工程である「煎熬」、さらに過熱することで塩の不純物を取り出し、保存性を高めるとともに味を向上させる工程である「焼塩」という工程を経て、運搬に便利な固形化した塩ができる。なお、土器製塩実験によると、煎熬工程の粗塩づくりは労力がかかり、焼塩工程は比較的容易にできるとされる。

なお、煎熬工程では塩化ナトリウムが主成分である粗塩を作ることになるが、完全に水分がない状態まで煮詰めると、セメントのように固く土器に付着するとともに、苦味が強い硝酸マグネシウムも混じるので、少し沸点が低い硝酸マグネシウムの結晶化前に煮詰めるのをやめたと推測できる。この場合は水分が残るので、脱水によってにがり成分を取り除き、「焼塩」工程に至ったとみられる。

また煎熬には燃料となる大量の薪が必要で、少々の樹木では燃料不足となるので、土器製塩を行う場所は周辺に樹木が豊富であること、海水を容易に確保できることが必要条件となる。ちなみに、海水と淡水が混じる場所で採取した海水は良い塩がとれるとされる。

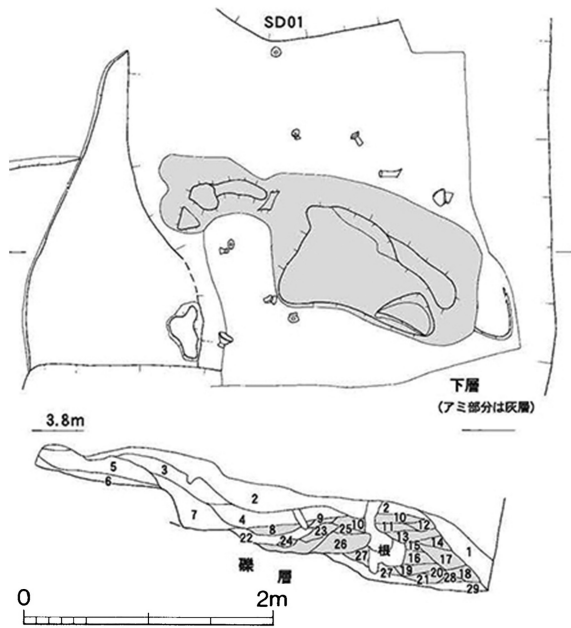
塩生産各段階は、太陽熱が利用でき、降雨日数が少なく、日照時間の長い、夏を中心とする季節が中心であったと考えられる。加えて、製塩活動は自然の力に頼ることが多く、塩の製造が順序良く無事に終わり、期待通りの生産があげられることを祈る様々な祭祀行為が行われたことが予想される。

### (3) 土器製塩の導入と展開

#### ①専用土器による土器製塩導入以前の北部九州の製塩活動

弥生時代前期後半の比恵遺跡 30 次調査の貯蔵穴と板付遺跡の環濠内から、ウズマキゴガイなどが二次的に火を受けて変色・炭化した灰層が検出された。両遺跡とも内陸部に立地することから、海藻を焼いた灰自体が持ち込まれ、藻塩焼製塩が行われた可能性がある（山崎 2007）。

また弥生時代前期後半～中期前半にかけて、胴部に強い被熱を受けピンク色に発色し、器表内面がうすく剥離し、かつ内面には炭酸カルシウムに由来するものと想定される白色物質が付着した甕が、板付遺跡、福岡市姪浜遺跡、大川市下林西田遺跡で確認されている。これらは日常用土器を製塩用に転用したものとみられるが、下林西田遺跡では擬朝鮮系無文土器も発見されていることから、朝鮮半島に



第 33 図 今山遺跡第8次検出灰層 (1/60)

あったとみている。

### ②専用土器による土器製塩の導入

弥生時代中期後半に備讃瀬戸地域で開始された専用土器による土器製塩は、弥生時代後期初頭前後には大阪湾の和泉地域、古墳時代前期前半には北部九州も含む瀬戸内海沿岸地域や東海西部、北陸西部にスポット的に土器製塩技術が伝播・定着する（大久保 2007）。

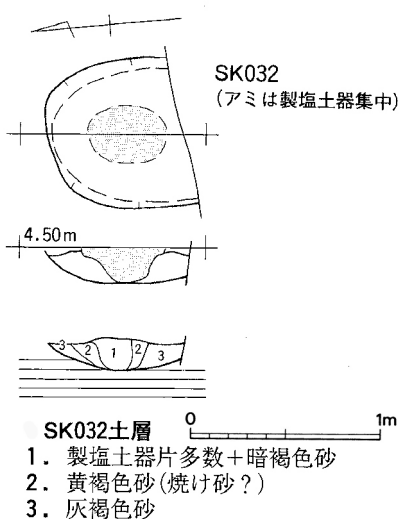
北部九州では弥生時代後期終末～古墳時代前期前半に主に玄界灘沿岸地域、響灘沿岸地域や別府湾沿岸地域で製塩土器が出現し、集約的な塩生産が開始される。特に博多湾西部の今山・今宿遺跡や西新町遺跡、博多湾東部の海の中道遺跡では備讃瀬戸地域と大阪湾沿岸地域という2系統の製塩土器の定着が認められる（第 32 図）。これは、博多湾沿岸地域における大阪湾沿岸地域由来の飯蛸壺延縄漁（平尾

2007）や備讃瀬戸地域由来の管状土錘Cによる曳網漁や棒状土錘による刺網漁の導入という漁具・漁法の動向とも一致することから、博多湾沿岸地域の集団が多種多様な海の生産技術の導入を図った結果の一端が製塩土器の様相にも表れたと理解される。ちなみに、2系統の製塩土器を併用する要因として、備讃瀬戸系製塩土器の形は運搬に適していることが西新町遺跡でも主体を占める原因と考えているが、大阪湾系製塩土器については苦汁成分を含んだ粗塩を素早く潮解させる機能を有していた可能性を考えている。

また海の中道遺跡、宗像市神湊上方B遺跡や北九州市黒崎貝塚では、備讃瀬戸系製塩土器が少量出土したことから、畿内～瀬戸内～博多湾ルートで製塩土器が伝播したと考えられる。

### ③博多湾沿岸地域における製塩土器出土遺跡の様相

今山・今宿遺跡は、博多湾西部の今山に向かって砂嘴状に延びた砂丘上に立地する。5世紀後半～6世紀初頭が遺跡の最盛期の和歌山県西庄遺跡や8～9世紀を最盛期とする海の中道遺跡でも、



第 34 図 今宿遺跡第5次 SK032 製塩炉 (1/40)

砂丘上が土器製塩の煎熬作業場所と想定され、海水を得やすい砂丘上が主要な生産域の一つであったとみられる。

今山遺跡 8 次調査では、製塩炉は未発見であるものの、大半が粉々に砕け層状に堆積する製塩土器が少なくとも 2,000 点以上発見され、古墳時代初頭では北部九州最大の製塩遺跡である（米倉編 2005）。また製塩作業時の灰の集積や焼土とみられるものも確認されるなど（第 33 図）、弥生時代後期前半の岡山県上東遺跡で確認された製塩炉とみられる土坑のように、炉体に灰を敷き、炉壁には粘土を貼ったものと推測される。さらに、今宿遺跡 5 次調査 SK032 は、約 0.8 m 程度の楕円形に広がる焼土遺構（第 34 図）を確認し、製塩土器片が集中することから、製塩炉の可能性が指摘されている（久住 2000）。

この今山・今宿遺跡出土の製塩土器は、タタキにより成形された器壁は薄く、体部はやや丸味を持って立ち上がる深鉢形で、倒杯形の脚台を持ち、備讃瀬戸Ⅲ b 式～Ⅳ a 式に類似するものが多くを占めるが、調整などは備讃瀬戸よりも伊予などの西部瀬戸系のものに近いとの指摘がある（久住 2000）。加えて大阪湾系の大阪湾 A I 式の製塩土器は、弥生時代後期後半～庄内式併行期のものに系譜が求められるとの意見がある（積山 2012）。なお、備讃瀬戸系・大阪湾系のいずれにも該当しない製塩土器の可能性のある破片があり、当該期北部九州独自の形態の製塩土器が存在したかどうかは今後の調査研究による確認が必要である。

ちなみに、製塩土器は完形品で出土することはまずなく、小破片で出土する。この理由としては、土器に吸収させた苦汁成分によって、製塩土器を加熱していくと、塩を吸った土器は塩類風化をおこし、土器の形状を保てなくなるため、小破片となっていると理解される。

また今山・今宿遺跡では九州型石錘や飯蛸壺、棒状土錘などの漁具や朝鮮半島系土器が出土する。特に漁具と共伴する在り方は、漁労活動と土器製塩が連動する様相を示す。この今山・今宿遺跡について、久住猛雄氏は「前期博多湾貿易」の拠点の一つとして位置付けるが（久住 2007）、今山・今宿遺跡の集団は広域的な地域間交流の中で、備讃瀬戸～大阪湾地域から土器製塩を受容し、ある程度の規模で分業化、組織化された塩生産を主導した集落であったと推測される。

一方、西新町遺跡でも備讃瀬戸系を中心に大阪湾系の製塩土器もみられるが（第 32 図）、製塩土器の出土量は多くなく、今山・今宿遺跡などで生産した塩を土器ごと搬入した。食用や加工用とした消費遺跡と考えられる（平尾 2004）。このように、玄界灘沿岸地域では古墳時代前期の製塩土器が海浜部の一部の遺跡でのみ発見されることから、確実に土器製塩が行われている遺跡は今山・今宿遺跡のみで、ここで生産した塩は、特定の遺跡にのみ搬出され、特定の用途に用いられたと考えている。

加えて、製塩を行う上では大量の薪が必要で、かつその海人集団が造船のための森林管理（今山・今宿遺跡の周辺には丘陵がある）も兼ねて行っていたとすれば、薪を調達しやすいことも今山・今宿遺跡で製塩活動が発達した背景にあった可能性がある。

#### （4）小結

弥生時代中期～古墳時代前期にかけて、列島の一部の地域でのみ土器製塩を盛んに行ったのかについては、大規模な網漁の開始など漁労活動の進展に伴い、それ以前よりも大量の漁獲物を確保できることになったことから、それを保存加工するために大量の塩が必要になったことに要因の一つがあるとの見解がある（真鍋 1994・1995）。

先の製塩炉とみられるものが確認された岡山県上東遺跡のものは 150 cm × 95 cm の長方形で、長辺の壁面には粘土塊がのびるため、炉壁が存在したとみられる。この製塩炉には 30 個内外の製塩土器を

並べることができ、1回の煎熬で5～16ℓ程度生産できる。それを『延喜式』による官人等への塩配給量を引用すれば、1回の操業で延べ430～1140人程度の配給量を調達できたと推測されている（大久保2020）。

備讃瀬戸地域と比べれば、今山・今宿遺跡における製塩土器による塩生産は小規模で、その他の製塩土器出土遺跡も出土量から消費遺跡とみられ、博多湾沿岸地域全体の受容を満たすほどの塩生産の想定は難しく、西新町遺跡でさえも、魚介類を大規模かつ長期間保管可能な（塩分濃度20%以上）塩蔵加工できるだけの塩が存在したかどうかは、製塩土器の出土量から難しかったと可能性がある。

また塩のにがり分は空気中の水分を吸収し、溶け出す潮解作用があるため、塩自体が腐らず、長期保存するためには、焼塩という潮解を防ぐような何らかの処置がなされたはずである。奈良時代になると、生産地、集積地、消費地で焼塩専用の筒状の土器が出現し、それぞれの使用場所において熱を加えることで、にがり分を除去した固形塩を生成したと考えられている。焼塩専用土器の出現については、今後検討が必要であるが、古墳時代前期では煎熬用土器のみ認められることから、生成された塩は半固型塩である粗塩とみられ、にがり分もまだ残りかつ吸湿性がある状態であることから、固形塩として集積され長期保存できたかは疑問が残る。

以上のことから、古墳時代前期までの土器製塩という集約的な塩の生産手法は、日常的なローカルな需要を満たすものではなく、古墳の築造開始に伴い集約労働には必要不可欠なもの、ないしは交換価値の高い生産品として、玄界灘沿岸地域の非常に限られた生産遺跡で生産された塩は特定の用途でのみ使用されたと推測され、その主な用途の一つとして塩生産と漁労活動の動向が一致することから水産物の加工であったと考えている。加えて煎熬で煮詰まったにがり分が入った液体自体が、凝固剤として、食品用はもとより、土壁など建築用としても有効なものであることから、にがり分を塩、製塩土器とともに、流通させていたと推測される。ちなみに、海の中道遺跡出土の製塩土器は、脚台が長脚化していくが（山崎2007）、長脚化にあたって脚部と胴部を付加する製作技法は大阪湾系製塩土器の系譜上に位置づけることができる（藤本2019）。

5世紀になると、博多湾沿岸地域では製塩土器はみられなくなるが（山崎2007）、これに軌を一にするように、5世紀中頃まで明確な土器製塩の痕跡が見いだせなかった熊本県天草諸島から宇土半島にかけての有明海沿岸の海浜部で、先の海の中道遺跡で確認された脚部の長脚化を受け継ぎ発達させた細長い脚部に内湾する椀が乗った形態の天草式製塩土器を多量に出土する製塩遺跡が出現し、6世紀には專業化まで想定できる大規模なものに発展する。

このように、博多湾沿岸地域の製塩土器と天草式製塩土器との製作技術上の繋がりが想定されることについて、山崎純男氏は宇土半島基部に前方後円墳の進出を契機として、政治的な理由により、製塩專業集団の再編が行われ、博多湾周辺の製塩を担った集団が天草・宇土半島の有明海側に移動させられた可能性を指摘する（山崎2007）。

この5世紀中頃～後半は、皮革加工などの手工業生産や馬の飼育、軍事用備蓄など塩の需要拡大に伴い、土器製塩が列島全体として最盛期を迎える時期であり、古墳時代中期以降は塩生産を專業する地域と集団が設定、再編成されたとも考えられる。このことは、塩生産の外部依存、土器製塩でつくられた固定塩の生産と塩の貢納につながるような生産形態が開始されたとも捉えられる。であるならば、博多湾沿岸地域でも製塩土器が多く出土するはずであるが、天草・宇土半島等で集約的に生産された塩は製塩土器そのものに詰めて遠隔地まで運ぶのではなく、俵や籠などの植物製品に詰め替えて、博多湾沿岸地域にももたらされたと理解したい。

## 10 動物遺存体からみた玄界灘沿岸の漁労活動

### (1) 検討にあたって

縄文時代の貝塚には、貝殻や動物の骨などの動物遺存体が含まれており、当時の食文化を復元するための貴重な情報源となっていることに比べ、弥生時代の動物遺存体研究はかなり遅れている。これは、弥生時代の海浜部の集落出土動物遺存体が格段に少ないことに加え、弥生時代が農耕社会であるという立場が重視され、動物遺存体研究を含む海の生産活動全般について付随的な価値しか認めていなかったことが大きかったといえるのではないだろうか。だが、出土漁具の用途の実証的な検討にあたっては、出土漁具の分析と同時に出土した動物遺存体との比較検討が重要で非常に有効であることは、和歌山県西庄遺跡の報告等でも明らかである（富加見編 2003）。また食文化の面においても、動物遺存体の様相がその時々食材を端的に示し、食文化の実態を反映するものと考えられている。

本研究対象となる玄界灘沿岸地域は、遺跡調査数にも関わらず、弥生～古墳時代にかけての魚骨・鱗等の動物遺存体の出土は極めて少なく、分析事例も数えるくらいしかない。例えば博多湾沿岸地域東部の弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居 80 棟以上、炉跡 300 基以上等を発見した、まさに「海村」（武末 2009）といえる福岡市東区唐原遺跡さえも、漁具が出土しているにも関わらず、動物遺存体は全く報告されていない。さらに、各種の海の生産活動が確認されている福岡市西新町遺跡や福岡市今宿五郎江遺跡でも、弥生～古墳時代の動物遺存体の報告はなく、弥生時代中期後半～古墳時代前期が盛期の糸島市御床松原遺跡において動物遺存体が少量出土し、同定されている程度である。

このように、遺跡からの動物遺存体の出土は、極めて良好な諸条件によって生じたものであり、かつ微細・脆弱な状態で出土することが一般的で、つい見落としがちになる。このことから、本来の存在したもののごく一部しか知ることができないが、弥生～古墳時代前期における玄界灘沿岸地域の海浜集落出土動物遺存体について、可能な限りまとめてみることで、本地域の動物遺存体の傾向と今後の課題等を整理したい。

### (2) 玄界灘沿岸地域における出土動物遺存体の動向

#### ①御床松原遺跡

内湾である引津湾に面した砂丘上に立地する糸島市御床松原遺跡第 1 次調査では、その多くが弥生時代中期～古墳時代前期に属すると考えられる動物遺存体が本地域ではまとまって発見された（井上編 1983）。そのうち貝類については、内湾砂泥性貝類と岩礁性貝類がいずれも半数程度出土しているが、中でもオキシジミ、フトヘラタリの内湾砂泥性貝類が最も多く、次いでサザエ、アサリ、スガイ、ハマグリなどバラエティー豊かで、特定貝類の選択的採取を窺うことができない。また鉄製アワビオコシが出土するもののアワビ殻の出土はわずか 1% で（小池 1983）、同時期の神奈川県三浦半島の洞窟遺跡で出土する多量のアワビ殻と貝庖丁等の加工品の存在と比較すると極めて少なく、潜水漁は主要な漁労活動であったとは言えない状況を呈する。なお、1 次調査区南側では多量の貝層の存在が指摘されており（井上 1983）、貝類の処理場所も調査区外に存在した可能性がある。

魚類については、多量に出土した漁具に比べ、マダイ、クロダイ、スズキ、サバ、マグロ類、フグ類の遺存体がそれぞれ数点出土する状況であった。またフグ類はその大きさがそろっていることから、夏から秋冬にかけて漁網により捕獲した可能性が推測されている（金子 1983）。

第 2 次調査では、弥生時代前期～中期初頭頃の包含層及び土坑（S K 04）から出土した動物遺存体

の出土比率は、イヌとイノシシの陸棲動物 60%、貝類と魚類合わせた海棲動物 40%で、1次調査と同様、岩礁性の魚類と貝類が目立つ程度であった（立石和也 2010）。

なお、調査ではフローテーション等での微細分析やブロック分析など行われていないため、調査中に目立ったある程度の大きさの動物遺存体のみ採取された影響もあるとみられるが、全体的に動物遺存体が少ない理由は、調査区外の海に近い場所で魚を解体したなど魚類や処理場所に関わる可能性があり（金子 1983）、漁具の出土量から本来は多くの動物遺存体が存在したものと想定される。加えて魚類では岩礁性のものが目立ち、集落は砂丘上に位置するが、主たる漁場は付近の岩礁域であったとみられる。

## ②雲透遺跡

東松浦半島北岸の標高 62 m前後の台地上に位置する雲透遺跡は、北東に玄界灘を望み、弥生時代中期前半～中頃に存続が限定される集落である（仁田坂 2014）。遺跡は三方がわずかに高まった丘陵に囲まれ、北側に大きく開く谷の緩斜面に集落が営まれているが、この立地は強い海風をある程度防ぐと思われる。谷奥部に居住域が、その手前に貝塚が形成される。貝塚の規模は約 11.5 m×約 3.5 mで、そこから動物遺存体が哺乳動物 4 科 4 種、魚類 5 科 6 種、貝類 18 科 30 種、その他 4 綱 4 種が確認されている。貝類は岩礁性の小形巻貝が中心で、アワビは少なく、かなり限定された様相を示す。

魚類の動物遺存体は、マグロ、マフグ、マダイを検出したが、マグロは外洋の回遊性であることから、出土した結合式釣針等を用いて外洋まで捕獲していた可能性が指摘されており、漁労技術の高さが窺える。またマグロの骨は脊椎骨が主で、頭骨、顎骨の出土が全くないこと、マフグ・マダイについては逆に頭骨・顎骨の量に比べ脊椎骨の量が非常に少ないことなど、魚骨の特定部位のみ廃棄されており、遺跡において頭部の除去等の加工作業の存在が想定されている（仁田坂 2014）。なお、鹿角製ヤス、鹿角製銚・猪牙製鉤針・結合式釣針の鹿角製釣針軸などが出土するが、石錘や土錘は全く出土していない。

また哺乳動物はシカ・イノシシが大部分を占め、鹿角は金属製の刃器で切り取った痕跡を持つものがあり、鑄造鉄斧も発見されていることから、漁具等の材料として動物骨のみを遺跡に意図的に持ち込んだ可能性が指摘されており（仁田坂 2014）、刺突具等の骨角器製作を積極的に行っていた可能性がある。

## ③原の辻遺跡

長崎県壱岐市の原の辻遺跡とカラカミ遺跡では漁具とともに動物遺存体が多く出土しており、比較的多くの分析も行われている。原の辻遺跡では、埋没時にごみ穴として利用された環濠内から多くの動物遺存体が確認されている。環濠は低湿地の土壌であることから、小型魚類の骨の遺存は期待できない一方、犬の骨が目立ち集落で多くの犬が飼育されていたと予想されることから、犬が小型の魚類の骨を食べたことに影響された可能性も指摘されている（茂原・松井 1995）。なお、魚類のうち、マダイは骨が大きくて頑丈なため、最終的に犬も食べずに遺跡に残りやすい傾向も指摘されている。

## ④カラカミ遺跡

カラカミ遺跡では、岩礁、砂礫底、砂泥、泥底の潮間帯から水深 10 m程度の範囲で、ウニ類・アワビ・サザエ等の採取が行われていたと推測され、干潮時に海岸を歩き回って採取したか、潜水漁をして採取していたと考えられている。なお、比較的深度の深い地点に棲息する貝類であっても、高い波浪や海流によって、海底から巻き上げられることもあるので、そのようにして打ちあがった貝類が浜辺で採取された可能性も指摘されている（富岡・立石・古賀・江川 2011）。このうち、弥生時代中期末ではスガイが比較的多く、大きさのあるスガイが選択的に採取されていたとみられる。また、弥生時代後期ではサザエが増加するが、サザエの蓋の大きさが集中することから、サザエの採取を専門的に行う集団が成立した、ないしは小型で成長途中の個体を意図的に採取しなくなった可能性があり、資源を管理し、枯渇

を回避する意図があった可能性が指摘されている（古賀・立石・富岡 2013）。

魚類では、フェフキダイ科、タイ科がそれぞれ3割を占めるなど、岩礁域や沿岸を回遊する魚種が多くみられ、石錘や骨角製の刺突具の出土漁具から、岩礁域が主な漁場と推測されている。

このように、カラカミ遺跡では、平野部に立地する原の辻遺跡と比べると、より多くの海産物に依存していたことが予想されるが、貝類が多量に棲息する干潟の発達に恵まれず、大規模な貝塚を形成するまでの採貝活動ができなかったため、動物遺存体の埋蔵環境が、小規模な貝層や湿地性の包含層に限られ、残りが悪い理由の一つとみられる。またイノシシ属の骨にみられるイヌによる多数の咬痕から、イヌだけでなく、タヌキ、カラスなどによる死肉漁りが予想され、特に小型の魚骨などの骨は全体が食べられて消失してしまった可能性もある（丸山他 2013）。

以上、壱岐島ではイヌ、イノシシ属が多く、シカ科が少ない状況は、壱岐島の弥生時代の集落の特徴といえる。特にシカ科が少ないことは、弥生時代の壱岐におけるシカの生息数がイノシシ属に比べて多くなかったことを示しており、かつシカの出土部位が鹿角、中手、中足骨などに集中することから、シカの骨は壱岐島外から骨角器の素材として持ち込まれた可能性が指摘されている（納谷内他 1995）。

なお、弥生時代において、シカ・イノシシは穀物、特にイネを食い荒らす害獣であり、水田稲作の農閑期にイノシシやシカに集中して狩猟していた可能性があり、壱岐ではイノシシ属に動物性食料の大部分を依存していたと予測される。またイヌの骨の保存状態は良かったものの、すべて散乱状態であったことから、食用のために解体された後に投棄されたと考えられている（丸山他 2013）。

またカラカミ遺跡出土鳥類の分析から、壱岐島とその周辺には多様な野鳥が生息しており、弥生時代から捕獲していた。特に岩礁性の海岸部に生息するウミウ、アホウドリ、ミズナギドリなどから、カラカミ遺跡の人々が海岸部から海洋部にかけて狩猟を行い、海岸部が狩猟の場としても重要であったと考えられる（丸山他 2013）。これらの鳥は、明確な解体痕は認められないが、鳥類は食肉だけではなく、羽毛利用のために捕獲されていた可能性も考慮すべきであろう。さらに大型のアホウドリ科の骨3点中、2点には加工痕がみられることから、アホウドリ科の長骨が骨角器の素材として利用されていたことを示す。なお、アホウドリ科の骨角器利用は、鳥取県青谷上寺地遺跡などでも報告されている。

#### ⑤海の中道遺跡

福岡市東区海の中道遺跡は、博多湾東部の陸繋砂洲上の玄界灘側に立地する遺跡で、土錘や石錘、鉛錘等の漁網錘あるいは釣用錘、鉄製釣針、鉄製刺突具、藻刈用の鉄製鎌、魚類の解体に使用された刀子等の漁具、製塩土器などの製塩関連遺物、動物遺存体が多量に発見された（山崎 1984 他）。遺跡は古くは古墳時代前期に遡るが、8世紀後半～10世紀が盛期で、本研究の対象時期とは隔たりがあるが、博多湾沿岸の動物遺存体の傾向を把握する上で重要であるため、取り上げる。

動物遺存体の分析により、貝類は春から秋は博多湾外の岩礁性貝類を採取し、冬には博多湾内の内湾砂泥性貝類を採取したとされる。魚類はホンサバ、マフグ類、マダイ、マアジ、イサキ、クロダイの順で検出され、貝類と同様、ホンサバ、マアジ、マダイなどの外湾性魚類と、マフグ、クロダイなどの内湾性魚類という博多湾内外での捕獲活動が確認できる。また貝類と魚類の動物遺存体の共伴関係から春から秋に魚類の捕獲を主とし、冬場は内湾砂泥性貝類を採取したと想定されている。さらにクロダイ・マフグ・コチの大型魚類は釣漁によるとされる。

加えて出土釣針の中で3本の釣針を桜の皮で束ねたものは（第52図）、イカ・タコ釣り漁の釣り針と極めて類似し、遺跡からはコウイカの遺存体が少なからず出土することから、博多湾内におけるイカ釣漁の存在が指摘されている（山崎 1984）

### (3) 小結

玄界灘沿岸地域では弥生～古墳時代にかけて動物遺存体の出土は非常に少なく、分析事例も数えるくらいしかない現状では出土動物遺存体と漁具とが比較検討できる状況ではなく、遺跡レベルでの漁労活動の実証的な研究は十分に行うことができない。筆者も調査担当者として調査した西新町遺跡でもフローテーション等の微細分析を行えば、魚骨等が拾えたかもしれないが、調査中竪穴住居の埋土等からそれらしき、カルシウム分の痕跡すら目に留まらなかったのが実際のところである。

ただし、海の中道遺跡では、出土動物遺存体と漁具、出土遺構等の相関関係の検討により、生産活動全般の構成についての研究が行われており（山崎 1984・山崎編 1993）、今後も動物遺存体の出土がみられた際には1 cm以下の微小遺物を回収するため、全てフローテーションし、微細分析することが理想ではあるが、フローテーション法でも微小遺物以外の遺物分析との連携が必須なため、共伴関係を注意しつつ、特徴的な遺構の埋土を中心に提起し、同定を実施することで固有な生態系や社会状況を有する各遺跡での生産活動をできるだけ明らかにする意識が重要と考えている。このように出土動物遺存体のデータを蓄積することで、操業海域の特定などから、集団の特性も明らかになるであろう。

また雲透遺跡のような出土魚類の部位の同定により、魚類の調理痕からみえる加工処理法、さらに出土魚類の体長復元による捕獲方法の検討などから、当時の食文化の復元についても今後検討が必要である。ちなみに、縄文時代の貝塚出土の魚類の動物遺存体の体長を復元すると、やや小ぶりなサイズが多いことから、大型釣針や離頭鉤が思い浮かぶ勇猛果敢な縄文時代の漁労イメージよりも、網や罟を使った静的なイメージの漁労が盛んに実施されていたことが指摘されている（富岡 2010）。

加えて、雲透遺跡やカラカミ遺跡の貝塚は、限定された規模であることから、弥生時代中期～後期の貝類の採取は、生活を維持していくための主要な食糧ではない可能性を示している。

この他、海浜部の遺跡から出土した弥生時代の人骨のコラーゲンから窒素安定同位体比分析を行うことで、死亡する数年間程度の平均的食性を明らかにすることが可能である。この分析によって、個人レベルでの食性差、年齢、性別、階層などの情報を得ることができる。近年、人骨の歯石のDNA分析を行い、口腔内の菌組成の組成が明らかになることで、食生活の復元も試みられている。しかし、このような人骨からみる食性が遺跡の状況をどれだけ反映しているか、その他の出土資料の分析結果との相互比較・検証が必要である。また、土器の胎土に残存した脂質を分析する土器残存脂質分析により、縄文土器による調理対象物が圧倒的に魚などの水産物の調理加工に偏っていたなどの研究成果により、海浜部の生業内容や社会関係を明らかにすることが期待される。

今後は可能な限りの動物遺存体の回収と分析に加え、その成果を複数の遺跡に広げることや、漁労関連遺物・遺構の分析成果とのクロスチェックなど、様々な研究手法による多角的な分析を積極的に行うことで、漁労活動についてより具体的にイメージしていく必要がある。

## 11 弥生～古墳時代の船の構造及び操船技術について

### (1) 検討にあたって

縄文時代、朝鮮半島まで及んだ腰岳産黒曜石の流通、弥生時代における水稻稲作の伝播、倭のクニグニや卑弥呼の中国王朝への遣使などに代表される、モノと人の移動、様々な情報の獲得と運搬・流通にあたっては、周囲を海に囲まれた島国である日本列島では陸路にもまして、河川と海を連携させた水運が重要で、その運搬具である船は今も昔も必要不可欠である。また『万葉集』にある志賀の荒雄による

対馬へ水先案内や神武東征の槁根津日子・椎根津彦の水先案内の様子など、海人は操船と水先案内の役割を担うことで交通や交易活動が盛んになった側面も持つ。弥生時代前期末～中期には、日本海ルートでヒスイ、南島ルートでゴホウラ・イモガイなどの南海産貝類がもたらされ、北部九州の海人の活動範囲が一気に拡大したことが窺われる（常松 2013）。

加えて、柴田昌児氏は列島の沿岸域に展開した地域集団は、日常的な生業活動の結果、日常生活領域を形成し、その領域に接したり、その外側に存在したりする別の地域集団との接触により、人の移動や非自給物資の調達、あるいは情報の互酬的交換を目的とする行動も日常的に行われたとした。このような海上活動により日常生活領域の連鎖が生まれるが、古代は船舶の航行能力に限界があるため、連鎖的な交易空間によるモノや人の流れの安定的恒常性が「交易」へと展開したとする（柴田 2013）。

このように、漁労活動と交易は不可分な関係で、特に海を通じた交易にとって、どのような内容、規模、体制等で航海を行ったかという視点は重要と考えている。そこで、ここでは、海の移動手段でもある船とその操船技術について先行研究をまとめることで、この後の総括に繋げていきたい。

なお、「舟」「船」という2つの表記があるが、ここでは煩雑になるので、小型・大型の意味を内包する「船」という表記に統一する。

## （2）弥生～古墳時代における船の構造

弥生～古墳時代にかけての船の構造については、多くの先行研究があるが、古代の造船及び航海術に係る資料になると、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』などの文献史料及び船形埴輪や絵画土器などの考古資料が主なものになる。ただし、文献史料には倭王権あるいは律令国家が関わる船の簡単な記述や詩歌の情緒的な表現が中心で、造船や航海術の体系的な記録はない。考古資料についても、船部材などの実物は廃船後の転用材にほぼ限定され、あとは古墳祭祀に関わる船形埴輪や器物、土器や石室などの絵画資料があるが（森田 2019）、現実的な構造を把握できる船形埴輪はほぼ5世紀のものに限られる。

### ①丸木船

古墳時代の船形埴輪や船部材の出土資料等から、弥生～古墳時代には縄文時代以来の刳船である丸木船に加え、丸木船の舷側に別材の板を継ぎ足した準構造船が出現したことが確認できる。

一般的な丸木船は長さ6 m前後、幅80～100 cm前後の一本の丸太を半裁し、その内部を削り抜き、船首・船尾を尖らせた単純な構造の船である。削り抜きの深さを変えたり、船首・船尾・船底を加工するなど、多様な形態が認められる。また前後に別木を削り抜き材を継ぎ足したものもある。

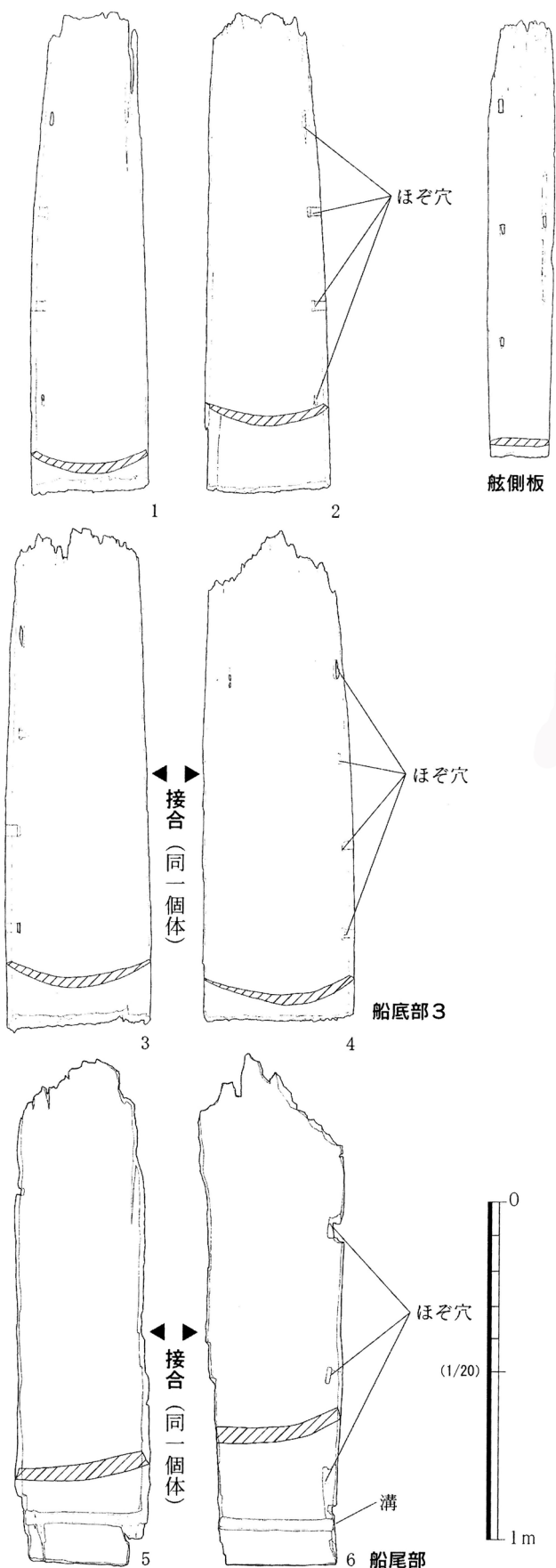
弥生～古墳時代の絵画資料などでは、その多くが準構造船をモチーフとして描かれており、海上交通による地域間交流では準構造船を主に用いていたと推測されるものの、海岸や湖などの内水面域からの出土事例から、丸木船は波の穏やかな沿岸部や河川などで長い時代使用され続けたと考えられる。

丸木船の特徴として、一木で構成されることから強度にすぐれるという長所を持ち、特に樹木の年輪がつまった側を船底にすることによって安定し、岩に当たっても壊れにくく、転覆しても回復が容易であるとされる（橋口 2005）。このように浮沈構造で丈夫で長期間使用できる一方、丸木船は材料の大きさに制約され、特に幅は木の直径を超えることができず、大型化には限界がある。加えて大きな帆を用いると風を受けて転覆しやすくなるという弱点がある。

しかし、丸木船のような細長い船は舷側が低いので櫂走には有利な構造で、台湾と与那国島間の航海実験では丸木船のみ黒潮を越え、与那国島に到達したとの実験結果がある。だが、舷側が低いので高波を受けると危険な状態になってしまい、波に船がまたがってしまったときに折れる可能性もあるの

船底部 1

船底部 2



※船底部 1 と 2 は接合せず別個体。船底部 3 と船尾部のそれぞれの 2 枚については同一個体である。

第 35 図 潤地頭遺跡出土準構造船部材 (1/20)

で荒い波の航海には適していない。ちなみに、1991 年に隠岐の知夫里島を出発し、日本海を 56 km 漕いで 13 時間後に島根半島の七類港にたどり着いた丸木船の「からむし II 世号」の実験では、船には 15 kg の黒曜石を外側に結縛し、漕ぎ手 4 名、舵手 1 名、合計 5 名が交替しながらの航海を行っている (後藤 2010)。

また縄文時代の丸木船の製作実験では、石斧を用い、原木の伐採から丸木船を造るのに、述べ 42 日間を要したとされ (石川県埋蔵文化財センター 2014)、そのままの原木による石斧の加工はかなりの重労働であるが、縄文時代早期後半の千葉県市川市の雷下遺跡出土丸木船では、掘り抜く際、火を焚き炭化して削りやすくなった部分を石斧で削ったことが確認されていることから、様々な工夫をしながら加工したとみられる。

さらに『日本書紀』の「天磐櫂樟船」「鳥磐櫂樟船」の記事から、クスノキは日本各地に多く自生し、かつ巨木化し、防腐・防食にくい性質であるため、少しでも大きな船を造る船部材として、かつ堅固ながっしりとしたクスノキは格好な材料であったと考えられる。出土した船材では、クスノキとスギが多いこともこのことを裏付ける。

なお、イカの釣漁で使う船の縁には、竹を半分に割り、節を取り除いたものや、松の木の皮を剥いたものを取り付け、釣糸が擦って傷まないようにしている (池田 1986)。釣糸や漁網の沈子綱の強度が弱い古代においても、漁労活動で使用する船の舷側にはこのような工夫が行われていたのであろう。

## ② 準構造船

弥生時代になると、石器や鉄器の使用により加工精度が向上し、板材にきっちりとした加工 (臍法) を行うことができるようになり、造船技術が飛躍的に発達した。最古のものは鹿児島県中津野遺跡出土の弥生時代前期後半の舷側板があるが、弥生時代前期末～中期初

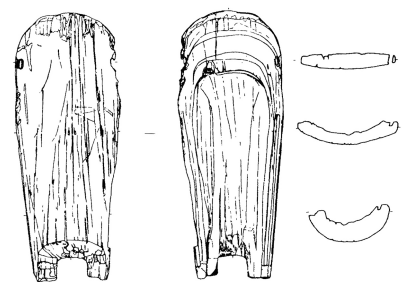
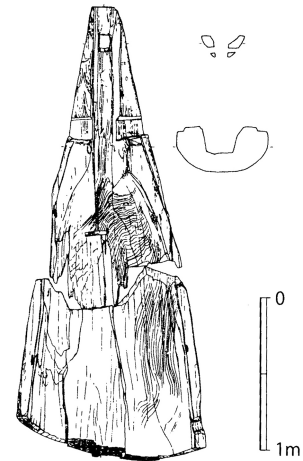
頭には鑄造鉄器が列島に流入したことと大陸や朝鮮半島からの文物流入を背景とした活発な交易活動のため、朝鮮半島からの造船技術導入により準構造船が出現し(柴田 2013)、弥生時代後期以降、盛んに造られた(石川県埋蔵文化財センター 2014)。なお、準構造船は史料の記事がほとんどなく、実物資料としては部材が不要になった後に井戸側等に転用されたものが主なものとなる。古墳時代前期前半の井戸側に転用された糸島市潤地頭給遺跡出土の準構造船部材は、縦板型準構造船で、船底部4枚、船尾部1枚、舷側板1枚からなり、全長6～7mに復元される。いずれもスギ材である(第35図)。

先述したように、丸木船では舷側が低く波が入り込むため、準構造線は舷側に別材の板を継ぎ足して高くすることで、波が入り込みにくく、積載量を増やすこともできる。準構造船は、丸木船の両舷に舷側板と呼ばれる部材を縄や樹皮で結縛ないしはほぞ穴・溝で結合して継ぎ足し、船の容量を大きくし、大型化したものである。この構造により、波の進入を防ぎ、船の耐航性が向上した。加えて、丸木船である船底部がキール(竜骨)の役割を果たしことで、波切りが容易であり、機動性と耐久性が高く、航海能力においては高い能力を有していた(石村 2013)。一方、前後に複数の材を接合することで全長の長い船体を造ることはできるが、船体の幅は丸木船部分である船底部材の大きさに規制されるのでどうしても狭くなり、船体も低いものとなり、船体の断面積は小さく、喫水は浅くなる。これを示すものとして、『常陸国風土記』の記事にある「軽野の大船」は、長さは約43m、幅は約3mと、全長の幅の比が15:1となり、かなり細長い構造となっている。加えて、幅が狭く、左右のバランスを崩しやすい構造であることから、できるだけ重心を下げる必要があり、乗船する人員や荷物で安定を保つ必要があった。さらに、縄文時代の丸木船は基本的に絵画やミニチュア造形の対象にならなかったが、弥生時代以降の準構造船はしばしばその対象となったことから、実用・象徴の両分野において、船の役割が高まったとも理解できる(宇野 2017)。

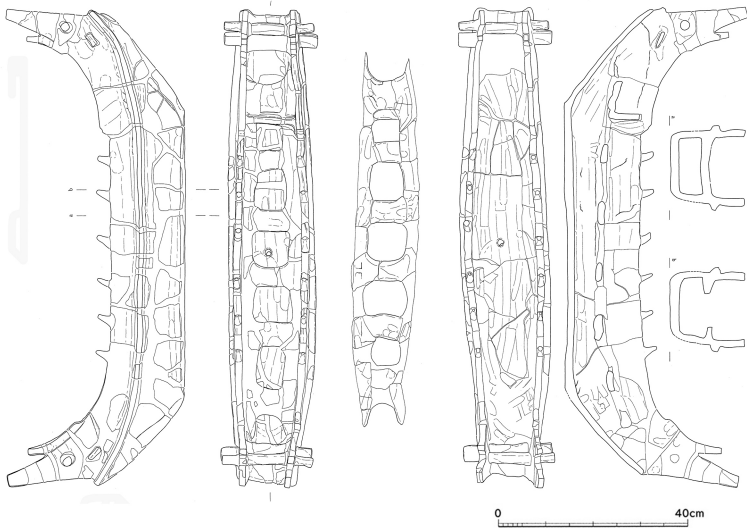
a 縦板型準構造船

大阪府八尾市の久宝寺遺跡では、弥生時代後期末～古墳時代前期の準構造船の舳か艫の部分と考えられる、丸太を削り抜いた船底部、波除けの縦板、舷側板の一部がまとまって発見された(第36図)。この船の構造は、船首ないしは船尾の縦板と舷側板を丸木船部分にほぞ穴と木栓、ほぞ溝で結合したものであり、全長12mに復元される。船首と船尾が2つに分かれたようにみえることから、二股船とも呼ばれる。同じく縦板で二股をなす古墳時代中期の大阪市長原高廻り2号墳の船形埴輪は、削り抜いた船底部に縦板と舷側の板材を組み合わせたもので、船首と船尾には隔壁がはめ込まれ、中央付近の舷側板の上部には、オール支点となる突起を4対造り出している。帆を付けていた痕跡はなく、8本のオールでより大きな力を発揮する後ろ向きで漕いだものと推測される。

岐阜県荒尾南遺跡出土の弥生時代後期の壺に描かれた絵画土器では、両側の小型船には帆が描かれており、小型船には帆が存在した可能性もあるが、この絵画土器で中央に描かれた82本の櫂をもつ大型船には帆はない。弥生～古墳時代の準構造船の大型船に帆があったかという議論があるが、帆で走る時



第36図 久宝寺遺跡出土  
準構造船部材 (1/50)



第 37 図 西都原 169 号墳出土船形埴輪 (1/16)

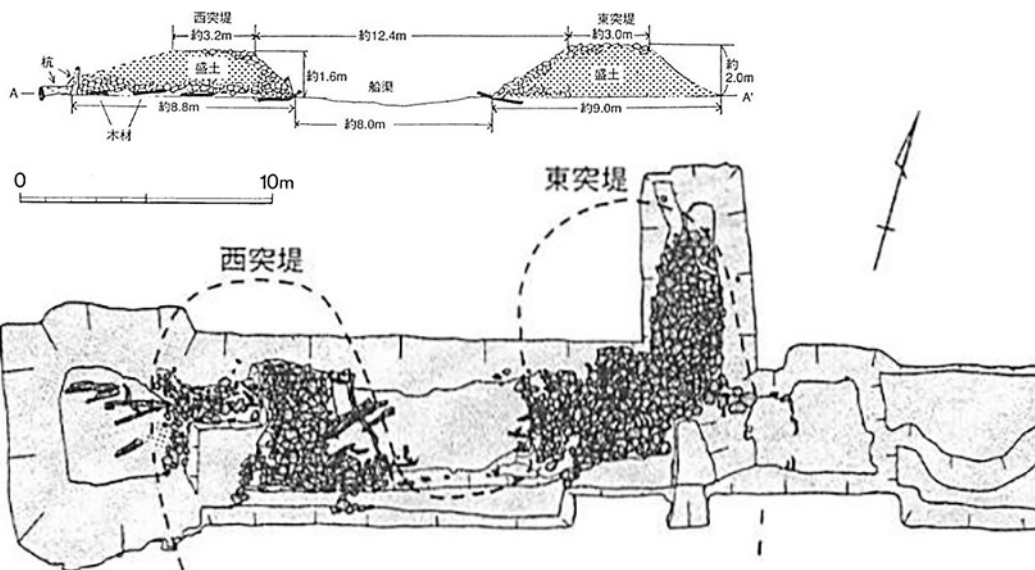
まで本格的な帆はなかったと考えられる。

なお、この豎板型準構造船はいずれも同じような造り方であることは、弥生時代後期における鉄製工具の普及に伴い、後期終末以降、加工技術が向上するとともに、船の大型化・規格化がなされ、その技術が広がることで遠距離交易などの経済活動が盛んになったと考えられる。

b 一体成形船

豎板型準構造船に対して、長原高廻り 1 号墳出土の船形埴輪は船底部と舷側板が一体となり、波除けの豎板がないもので、一体成形船または貫型準構造船とも呼ばれる。一体成形船である西都原 169 号墳例（第 37 図）は隔壁のさらに外側に、船体補強のための貫き構造の梁を上下二段に渡し、舷側の左右がずれないように固定した船である（広瀬 2015）。このように部材と部材と接合にあたっては、桜の樹皮や木栓などによる接合（緊縛）の痕跡が確認されているが、舷側板の厚みや高さが発達することでそれだけでは強度が足りない場合も想定され、西都原 169 号墳例のように隔壁や梁などを使用し、補強していたとみられる。さらに実験航海によって、前方の梁の間に板をはめ込むことで正面からの波を防ぎ、板を外すことで前方監視を可能にした構造であったことが指摘されている（板橋 2006）。

は常に風が吹いているとは限らず、初期の帆は後ろからの風しか利用できなかったと考えられ、かつ帆柱と帆の重さの為、船の安定性が悪くなりがちで、船底が丸木船の準構造船では転覆の危険性が増す（松木 1995）。また 2005 年に行われた大王の棺航海実験では、幅が狭く不安定な準構造船ではよほどの好条件でなければ、帆走は有効ではなく、推進は漕行が主であったとされる（板橋 2006）。以上のことから、基本的に船幅が広く安定性がある構造船



第 38 図 原の辻遺跡船着き場遺構 (1/300)

また準構造船にはいくつかの発達段階が設定され、弥生時代後期終末には確実に船底部と豎板が二股状になる豎板型準構造船があり、やや遅れて 4 世紀末～5 世紀前半にかけて準構造船は朝鮮半島南部とも親和性を持

ちなみに、一体化・大型化した一体成形船に発達したとの指摘がある（一瀬 1992）。その後、本体が刳り船ではなく、遣唐使船のような板材を組み合わせた、面木造りと呼ばれる船底に丁板を排して幅を広げたとみられる構造船が遣唐使船以降朝鮮半島の技術導入を受け出現したとみられるが、丸木船や準構造船も引き続き認められる。

さらに、5世紀になると朝鮮半島情勢に対応するため、百済・加耶から馬の飼育が伝わる。時期的に馬は準構造船に乗せられてきたと考えられるが、通常の準構造船は長さ12 m前後、幅1.5 m前後、漕ぎ手が10人前後であることから、一隻につき馬1頭と馬飼人1名が限界と考えられる（千賀 2019）。加えて欽明期15(554)年条の百済からの援軍依頼に対して、「助軍数一千、馬一百匹、船40隻」という回答から、誇張はあるとみられるが単純計算では船一隻につき兵25人、馬2・3頭を輸送したことになり、漕ぎ手や武器・食糧を含むと、10トンほどの積載量が必要との試算がある。

このように、全長12 m程の準構造船に馬を積もうとすると、1頭あたりある程度の面積が必要であることから、最低限の漕ぎ手と食料・水しか乗せられない可能性があるため、刳り抜いた船底を分割し、船底の幅を広げた「面木造り」とその板材の結合法である「チキリ結合」を用いた船（構造船を含む）が使用されたのではという意見がある（千賀 2019）。確かに準構造船と文献記載内容が一致しないことから拝聴すべき意見であるが、実物資料など考古資料による裏付けが今後必要であろう。

ちなみに、長崎県原の辻遺跡では、土と木の葉や粗朶を交互に積み重ねる敷葉工法によって基礎を作り、石積によってドッグ状施設を造った二列の石造突堤が発見されており、その中央には船を引き上げるためのスロープが設けられていた（第38図）。このように、準構造船に伴う碇が発見されていないことから、準構造船はできるだけ州浜に揚げて海流や風に押し流されないようにした可能性が高い。加えて近代以前の港津では、沖合に船舶を停泊させ、舳によって人や物資を陸に運ぶやり方が一般的であったが、準構造船は喫水が深くないので、この船着き場は直接利用できた。

なお、船をドックに入れる際には、原の辻遺跡のように石積が露出していることは船を傷つけるため、木杭の骨組みを用いた岡山上東遺跡例は波止場として適切なものであると理解される（宇野 2017）。

### （3）操船技術と航法 壱岐・対馬ルートを中心に

準構造船・丸木船とも、原動力はともに主に人力であった。すなわち、縄文時代の丸木船は櫂を手で自在にあやつるペーロン式で、準構造船は舷側上縁に突起を造り櫂で漕ぐ。いずれも帆走に比べ、漕ぎ手さえいれば比較的容易に操船でき、かつ機動性にすぐれる一方、長時間の航行は困難であったとみられる。また準構造船の漕ぎ手は、進行方向に向かって背を向けて座って漕いだとみられることから、船の指揮をとる者も必要であった（阿南 2007）。阿南亨氏によると、全長12 m程の船では、片舷9人の漕ぎ手で、船長や舵取り、交代要員や水先案内人、水や食料などの必需品、時には武具や馬を乗せることを考えれば、搭乗人数30名弱がひとつの目安であったと指摘する（阿南 2007）。

ちなみに、『後漢書』に記載された中国への遣使内容は使節と献上品、漕ぎ手に加え、生口160名とあるため、遣使使節は最低6隻からなる船団で行った可能性がある。

日本の慣習的航海方法について、柴田昌児氏は陸地をみながら岸沿いあるいは島伝いに航行する「地乗り」法と最短距離を移動するため陸地から離れた沖を航行する「沖乗り」法があったとする。「地乗り」では航行の目印とするランドマーク（山・島・岬・大樹など）を頼りに航行するが、一般的には特徴的な山が目印になる場合が多く、これを「山アテ」と呼んだ（柴田 2013）。

志賀島・能古島間の航路想定ラインから西新町遺跡をみると、ちょうど油山がランドマーク、同じく

博多遺跡群をみると四王寺山（大野城跡）がランドマークとなった可能性がある。

この地乗り航法の事例として、天平8（736）年の遣新羅使一行は、荒津（博多津）を出港して、「筑前国志麻群之韓亭（唐泊）」→「引地亭」→「肥前国松浦郡狛嶋亭」で停泊しており、8世紀に「地乗り」航法をしていたことが確認できる。加えて海の難所として名高い宗像市鐘崎に、8世紀には宗像氏が「金崎船瀬都」という港を整備したこと、その東には『日本書紀』に筑紫国岡水門（遠賀川河口の芦屋町付近か）という港が史料で確認できる。これらから、島々が連なる日本列島では、その多くが島や山がみえた「地乗り」法で主に船を進めたと考えられる。

また1975年に実施された古代推定船野性号による韓国仁川から博多港までの海路踏査では、「地乗り」航法で基本的に行い、海岸線が入り組んだ地形とおよそ6時間ごとに流れの方向が逆転する干満の潮流をうまく組み合わせることで、「三角航法」を行うことで、1日当たり漕ぎ20マイルに追い潮を加えれば、30マイルほどの航行も可能であることが指摘されている（藤口2009）。このことから、航行にあたっては、当然潮待ちが不可欠で、特に干満の潮位の利用は航行距離を延ばすのに非常に効果的であった。さらに航海に最も適した季節は、夏には南西の風を利用できる春から夏を中心とする半年間で、北西の季節風が吹き荒れる冬季は厳しく、倭人の新羅来襲が5～8月に集中することもこのことを示している。加えて帰路も南東の季節風と対馬海流に乗っての航海が可能である（東1995）。陸地を示す明かりも極めて少なかったと考えられるので、夜間航行したとは考えにくく、現実的に昼間の10～14時くらいが航行可能時間と推測される（藤口2009）。

以上、海路では天候に恵まれること、海上が平穏なことが絶対条件で、海が荒れたりするので、船を泊める港津が必要であった。平安時代の紀貫之の日記『土佐日記』によると、土佐国府から帰京（平安京）するのに、海路で片道だけで50日かけており、そのうち、実に33日は強風や波浪あるいは風待ち、潮待ち、水手の休息などで船は動いていない。ちなみに、古代ポリネシア人が移動した復元カヌーによる航海実験では、10人ほどの乗組員を載せて、櫂のみで航行する実験では屈強なクルーが漕いでも、2日間で体力は限界になった（後藤2003）。

では、一日あたりの航行可能距離はどのくらいであったのだろうか。平安時代中期の延喜14（915）年に学者三善清行による『意見封事十二ヶ条』では、1日の平均航行可能距離は22kmほどである。1975年に実施された、古代推定船野性号による韓国仁川から博多港までの海路踏査実験では、一日の最低航行可能距離は一日20マイル前後（約32km）とされる（藤口2009）。

このように、櫂のみで漕ぎ続けてストレートに朝鮮半島の楽浪郡までは行くのは無理なことに加え、潮流や暗礁は地点によって異なるため、その海域に詳しい者がいないでは進み具合がずいぶん差が生じることから、全体の航海を見通し、最終目的地まで責任をもつ船長に加え、一定区間の海域について熟知している在地のパイロットの各1名は必須である（藤口2009）。また長い航海では、補給（食料）が必要であり、一定海域の通行自体の保証など各寄港地の人々との友好関係の確立も必要条件である。特に資料としては残るものではないが、パイロットがこのような関係に重要な役割を果たした可能性がある。以上、船長、漕ぎ手といった体制及びパイロットによる船の運航に関する指揮権の確立と命令及び経験に基づいた的確な指示がなければ、「水行」は困難であろう（藤口2009）。

このように、朝鮮半島への航海も含む海上交通の実態は、各地の港津に立ち寄り、その都度食料や水などを補給するという、政治的な安定がなければスムーズな航海は不可能であることも事実である。出発地から到着地までずっと同じ船で行ったのか、漕ぎ手が変わるのか、乗り継ぎ、乗り換えたのか、出土資料による検証とともに、様々なシミュレーションによる検討が必要である。

## IV 玄界灘沿岸地域における漁労活動の研究

### 1 九州型石錘 I 類の機能に関する一試論 ～福岡市西新町遺跡出土石錘を中心に～

#### (1) はじめに

日本列島は農業に適した平野が必ずしも多くないことから、旧石器・縄文時代以降、海岸部や河川沿いに住む人々は、海や河川、または湖を舞台に、沿岸部を中心とする魚介類を捕食する漁労活動を行っていた。特に弥生時代になると、水稻農耕の導入や鉄器の普及などによって、水田漁業などの新たな漁場や漁具の開発・改良によって漁具・漁法は大きく発達し、機械化以前の日本の伝統的な漁業の原形を形作ったと考えられている。また弥生時代、北部九州で漁労活動に従事した人々である海人は、『魏志』倭人伝では「倭の水人」として認識されていた。この後、玄界灘の海人のうち、軍事的な役割などを通じて王権に関わった海人集団は阿曇、宗像、住吉など、特定の氏族として成立した。

玄界灘は、黒潮から分流した対馬海流により、温暖な気候をもたらすと同時に豊かな海の幸までもたらす優れた漁場でもあった。玄界灘の海人は捕獲した海産物を交易品として遠くまで運ぶため、塩干物等の海産物の加工・保存技術やそれらを運搬するための輸送・運搬手段の発達を指向したことで、人・モノ・情報の移動などの地域間交流が盛んになった。特に玄界灘沿岸地域は、アジア大陸や朝鮮半島と地理的に近接し、古くから大陸文化の門戸となることが様々な考古学的な証拠から明らかになっているが、弥生～古墳時代にかけて、中国・朝鮮半島と列島各地との様々な文物や情報の伝達にあたり、その直接的な担い手として、玄界灘の海人が重要な役割を果たしてきたと考えられている。

筆者は、平成 10 年度に福岡市西新町遺跡の発掘調査を担当し、多数の朝鮮半島や列島各地に由来する遺構・遺物とともに、多数の漁具が出土し、報告書の中で漁具を報告して以来、玄界灘沿岸地域における弥生～古墳時代における海の生産活動について常に関心を払ってきた。しかし同遺跡では多種多様な漁具が出土したにも関わらず、動物遺存体の目立った出土はなかった。確かにフローテーション等の精緻な調査手法を用いれば、魚骨等を発見できたかもしれないが、多数の堅穴住居跡埋土等から、それらしきカルシウム痕跡すら目に留まらなかったのが実際のところである。この状況は同時代の博多湾岸の海浜部の遺跡でもほぼ同様の状況であることから、かねてより疑問に思ってきた。

最近、漁具の民俗例に注意を払う中で、明治時代に新潟県佐渡島で開発され、優れた漁獲効果及びその後の加工法から、スルメイカが回遊する日本海各地に伝播した漁法である「佐渡式イカ釣具」の「しらやき」と呼ばれる白色の磁器製の錘が、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて玄界灘沿岸地域で盛行する特徴的な沈子群である「九州型石錘」と、形態が酷似するだけでなく、色調や加工方法、効果など機能面の参考になることを確認できた。このことにより、九州型石錘を用いた漁具・漁法が推定復元できただけでなく、イカを捕獲したのであれば出土動物遺存体がほぼ皆無である疑問も解消できた。

そのため、本稿では、九州型石錘のうち、「佐渡式イカ釣具」の錘に類似する資料群について、西新町遺跡出土漁具を中心に民俗例と比較・観察を進め、九州型石錘を使用した漁労活動について考察していきたい。

#### (2) 九州型石錘について

##### ①九州型石錘とは

漁具である石錘は、釣用錘や延縄漁、漁網錘等多種多様な漁法で使用される漁具の中で最も基本的な

ものの一つで、中でも漁網錘がその用途として圧倒的なものである。現在でも、漁網錘である沈子を「いわ」と呼ぶ地域もあり、近年まで簡単に入手できる自然石を沈子に用いた漁網が存在するなど、古くから漁網錘に石製品が用いられた。

釣用錘や漁網錘に関わらず石錘の形態や組み合わせは対象魚種や海底の状況、生態系、潮流等に適合するように海中でバランスを保つ必要があり、漁網の綱径や釣糸の太さと漁網錘の大きさは相関関係にあると考えられてきた（真鍋 1994 他）。また石錘のいくつかのバリエーションは地域性を持っており、石錘を分析することである程度その当時の漁法について復元することができる（山中 2007）。

今回対象とする玄界灘沿岸地域では、弥生時代中期後半～後期、これまでの漁網錘の石錘とは形態、重量、材質、出土量を異にする大小多様な石錘が出現し、それらは古墳時代前期にかけて盛行することで漁具・漁法が大きく発展した。下條信行氏は、この石錘について集成作業と基礎的整理を行い、垂下式で、軟質で加工しやすい滑石を削りと研磨によって円錐形や分銅形、紡錘形という手の込んだ成形、かつ釣糸等を結びつけるための孔・溝を施したり、両端に突起を持った細長い棒状を呈するなどの特徴を持ち、玄界灘沿岸地域を中心に分布するこれらの特徴的な沈子群を九州型石錘と規定した（下條 1984）。特に下條氏は、大形 A 型については弥生時代前期後半、唐津地域で小型品が出現し、その後東の博多湾に至ると大きさ、重量を増し大型品に変遷することを明らかにした、また形態と分布から大きくは「博多湾型」と「糸島型」、「湯納型」に分類し、九州型石錘が出土する遺跡の多くが海浜部に立地すること、特に博多湾型は玄界灘沿岸地域を中心に南は鹿児島県薩摩半島から北は福井県若狭湾まで広範囲に分布することから、博多湾を中心とする玄界灘における海上交易活動を担った、古代玄界灘海人の広範囲な行動圏を表す資料と指摘した（下條 1984）。

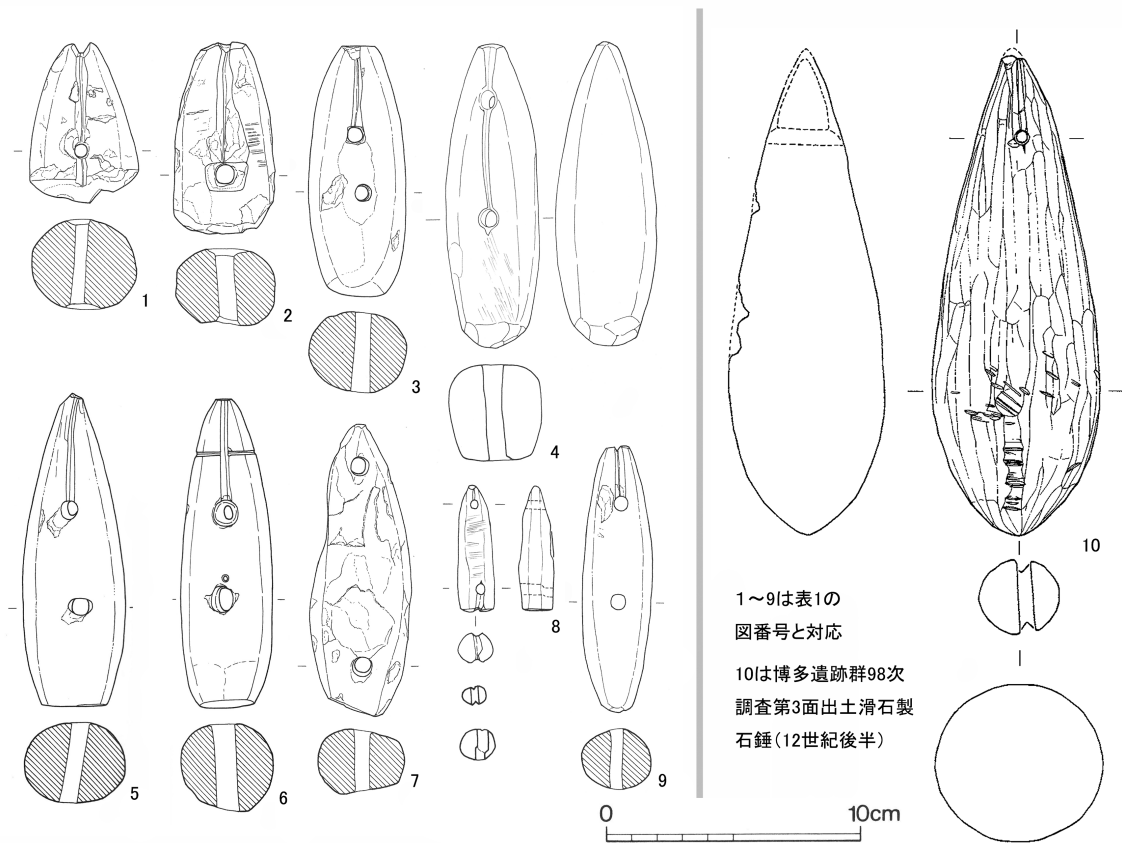
さらに、博多湾岸の九州型石錘出土した遺跡の類型化を行い、九州型石錘出土遺跡を立地と出土遺物内容から、漁村型（御床松原遺跡等）、半農半漁型（拾六町ツイジ遺跡等）、農村型（三雲・井原遺跡等）に分類し、海浜部と内陸部の集落との河川を通じた有機的なつながりを示す資料が九州型石錘であり、社会的分業関係の成立に伴って、「漁村」が出現することを指摘した（下條 1989）。加えて、下條氏は韓国全羅南道長川里遺跡から出土した花崗岩製の多条溝をもつ石錘の存在から、大形 B 型の系譜を韓国に求めていたが、その後大形 A 型自体の系譜も朝鮮半島に求め、韓国忠清南道の寛倉里遺跡や慶尚南道の勒島遺跡などから弥生時代中期に北部九州に伝播、弥生時代後期以降盛行し、各地に拡散したと指摘する（下條 1989・2012・2013）。

## ②九州型石錘の研究動向

北部九州における石錘の研究史については、山中英彦氏（山中 2007）や林田好子・中尾篤志氏の論考に詳述されているため（林田・中尾 2014）、ここでは、主な研究史のみ整理する。

山中英彦氏は土器と同様、漁具を外来系と九州型石錘のような在地系に分類し、その漁具が出土した博多湾沿岸地域の海浜集落を外来系と在地系の要素が強い集落に類型化することで、博多湾沿岸の港津の特定とその在り方、政治勢力との関係等、当時の社会構造について検討した（山中 2007）。

その他林田好子・中尾篤志氏による玄界灘沿岸地域を対象とした 61 遺跡、430 点の九州型石錘の網羅的な集成に基づく地域別・形態別・時期別等の詳細な検討（林田・中尾 2014）、森本幹彦氏による検討（森本 2015）や筆者による検討（大庭 2009）などがある。特に森本氏は、型式や分布、時期、用途等の再検討を行い、各型式の成立過程と分布状況から、下條氏が提唱した「博多湾型」「糸島型」という区分が適切ではなく、いずれも博多湾西部が分布の主体であるとした。さらに博多湾の東西で在来系漁具に地域差がみられるが、古墳時代前期前半に飯蛸壺をはじめとする畿内・瀬戸内系譜の外来系漁具



第 39 図 西新町遺跡出土九州型石錘 I 類と関連資料実測図 (1/3)

図 番号	遺跡名	分類	出土遺構		石材			加工 状況		法量				溝幅		孔径(上から)			時期	備考
			遺構内容	石材の種類	色調	色調 分類	加工 分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長軸 溝幅 (mm)	短軸 溝幅 (mm)	1番上の 孔径 (mm)	2番目 孔径 (mm)	3番目 孔径 (mm)				
		未製品 (I C類か)	3中3区攪乱	砂岩	暗灰黄	ウ	a	10.1	3.8	3.8	156.0		4.0							孔は未貫通のため、水深器の可能性はある
7		I B類	43号住居跡上層	滑石	青灰	オ	a	11.5	3.9	2.5	170.8			6.5	5.5				古墳前期中葉	自然面を多く残す。自然石の形状を生かす
2		I A類	144号住居跡	滑石	青灰	オ	a	7.4	3.9	2.9	126.1	3.5		7.0					古墳前期前半	加工痕残す
1		I A類	19号住居跡	滑石	青灰	オ	a	6.2	4.3	3.5	114.7	3.0		4.5					古墳前期初頭	
3		I A類	29.30号住居跡付近遺構面	滑石	赤灰	イ	a	9.8	3.8	3.0	175.3	2.0		5.5	5.0				古墳前期前半～中葉	
9		I C類	30号住居跡	滑石	灰白	ア	a	10.2	2.7	2.3	105.9			5.0	5.5				古墳前期中頃	
5	西新町遺跡Ⅲ (第12次調査)	I B類	139号住居跡	細粒砂岩	灰白	ア	a	12.1	4.2	3.0	179.0	2.0		5.0	6.0				古墳前期中頃	非常に丁寧に研磨
6		I B類	72号住居跡覆土上層	砂岩	にぶい黄、やや赤みがある	エ	a	11.9	3.8	3.4	185.8	3.0	1.5	5.5	9.0				古墳前期中頃	
		I A類	166号住居跡	擬灰質泥岩	にぶい黄	エ	a	12.7	4.0	3.0	274.3	2.0		3.0	3.0	8.0			古墳前期	1孔未貫通 砥石の転用品
		未製品 (I 類か)	1号住居跡覆土上層	滑石	灰白	ア	a	8.3	3.9	3.1	156.8								古墳前期	
		未製品 (I B類か)	119号住居跡	滑石	青灰	オ	a	4.1	4.8	3.3	(108.9)								古墳前期	
		I 類か	3西拡張区遺構面	滑石	灰白	ア	a	(4.10)	5.3	3.0	103.6			5.5					古墳前期	頂部平坦、非常に丁寧に研磨
8		I B類	50号住居跡	滑石	青灰	オ	a	4.9	1.4	1.2	13.2			3.0	4.0				古墳前期前半	
	西新町遺跡Ⅳ (第13次調査)	I B類	59号住居跡	細粒砂岩	黄褐	エ	a	5.3	2.5	1.6	(21.6)			(4.0)	3.0				古墳前期	全体的に摩滅
		未製品 (I B類か)	2号住居跡	滑石	暗青灰	ウ	a	8.0	2.5	2.3	90.9								古墳前期前半	
4	西新町遺跡Ⅵ (第14次調査)	I A類	8号住居跡	砂岩	暗赤灰	イ	b	11.9	3.7	3.7	207.5	1.5		7.0	7.0				古墳前期前半	線状の加工痕多数
	西新町遺跡Ⅶ (第17次調査)	I C類	6号住居跡覆土	滑石	灰	オ	a	7.2	3.0	2.7	144.5			6.0	5.0				古墳前期前半	穿孔2
		I C類か	溝14	砂岩	灰黄	エ	a	6.5	3.8	3.7	(98.5)	2.5		6.5	6.0				古墳前期前半	穿孔2

第 1 表 西新町遺跡出土九州型石錘 I 類の観察結果 (九州歴史資料館所蔵分)

と博多湾西部の在来系漁具を融合・再編したのが西新町遺跡であると指摘した (森本 2015)。

これらの先行研究の多くは、主に型式分類やその分布論を中心とした内容で、機能と漁法の復元に関する踏み込んだ言及はあまり多くない。

また近年、石錘の変遷について新たな知見がいくつか発表された。林田・中尾氏は 12～13 世紀の長崎県西海市の膝行神貝塚、楼楷田遺跡など古代以降の九州型石錘 I 類に類似する滑石製石鍋転用石錘の

存在を指摘し、弥生・古墳時代の九州型石錘との系譜的な繋がりを示す予察的な展望を示した（林田・中尾 2014）。土岐耕司氏は、玄界灘及び沖縄県における古代・中世の滑石製石錘を集成し、中世期に下る九州型石錘 I 類に類似する石錘の存在を明らかにした（第 39 図 10）（土岐 2020）。

このように、近年では九州型石錘に類似する中世期の石錘の存在から、系譜が繋がるかは不明であるが、九州型石錘 I 類の優れた機能が古墳時代以降も細々ながら継続したことが明らかになっている。

以下では九州型石錘のうち、佐渡式イカ釣具と形態、色調などが類似し、機能が推察できる九州型石錘 I 類（下條氏の大型 A 型）に絞り検討を行う（第 39 図）。

### （3）九州型石錘 I 類の用途の検討

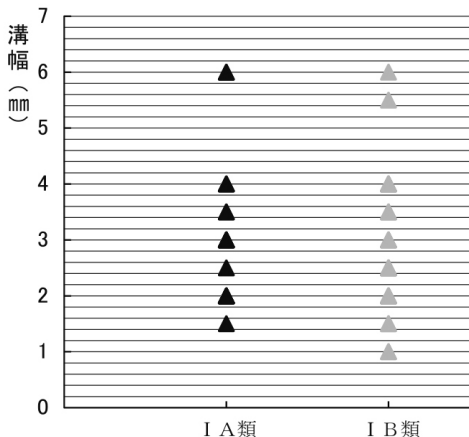
#### ①用途に関する考古学における先行研究

九州型石錘 I 類の機能について初めて言及したのは、管見の限りでは、大野左千夫氏である。大野氏は九州型石錘 I 類について、垂直に荷重がかかるように製作され、比較的出土量が少ないこと、時期的に鉄製釣針の出現に対応することなどから、九州型石錘 I 類がサバやカツオなどの沖合いの回遊魚を捕獲した天秤釣の沈子である可能性を示した（大野 1981）。下條氏も大野氏の意見に賛同し、『日本水産捕採志』を引用して、天秤釣はサバ、アジ、イカ漁などに多く利用されていることを明示した上で、御床松原遺跡ではクロダイ、スズキ、マダイ、フグ、サバ、マグロ、カツオなどの魚骨が出土しており、九州型石錘 I 類はこうした外洋漁に威力を発揮したとした（下條 1984）。

山中英彦氏は両氏とは異なり、弥生時代、釣漁にあたっては鉄製釣針の重量で十分で、錘は不要との立場から、九州型石錘 I 類を垂下する縦型の漁網錘であるとした（山中 2007）。力武卓治氏は九州型石錘 I 類は釣用錘であることを前提として、下端部が丸味を持つもの（本稿 I A 類）は海底が岩礁、下端部が平坦なもの（本稿 I B 類）は海底が砂地で使用したと指摘した（力武 1997）。

筆者は九州型石錘 I 類が集積して出土することなく、かつ単体で使用したことを想定させる 1 遺跡あたりの出土量の少なさ、孔径及び上下端を結んだ溝幅がいずれも 3 mm 程度と細いことから釣糸を結んだ釣用錘である可能性が高いこと（第 40 図）、加えて山中氏が釣用錘ではない根拠とした重量構成帯のバラつきは対象魚種の違いに求めた（大庭 2009）。乗松真也氏は、九州型石錘石錘の機能について、釣漁もしくはそれ以外の漁に使用された可能性があるが、溝幅の狭いものや孔径が小さいものなどについては、延縄漁などを含む釣漁の可能性があるとした（乗松 2010）。

また、曳網系漁網で滑石製錘を用いた福岡市西区今津浜崎の民俗例と考古資料とを比較検討した平川敬治氏によると、錘に滑石を使用することの利点として、軟らかく加工しやすいこと、海底が泥地で



第 40 図 I 類石錘の溝幅の推移

あっても滑石製沈子はすべりやすいため泥をかむことが少ないこと、簡単に着脱できることなど、曳網の沈子として適しているとした。一方、欠点として、使用による摩滅により、2シーズン程度で使用不可能な状態になるため、常に新しいものを補給しなければならないところにあるとした（平川 1990）。実際、筆者による九州型石錘 I 類の観察では、表面が顕著に摩滅する事例は少なく、水中で石錘自体を目出させるためか底部に意図的に多くの面を研磨によりカットした痕跡も残っていることから、この点からも釣用錘の可能性が高いとみている。

このように、九州型石錘 I 類は釣用錘の可能性が高いとみら

れるが、その対象魚種、漁法については大野氏の指摘を追認する意見が多い。筆者は、弥生時代の漁具は、近現代の漁具と比較すれば未分化の段階であるため、一つの漁具が多機能を有していた可能性があることも念頭に置く必要があるが、九州型石錘 I 類はイカ釣具の錘であると考えている。

九州型石錘 I 類がイカ釣具の錘である可能性を指摘したのは、管見の限りでは平川敬治氏が最初である。平川氏は先の論考の中で、弥生～古墳時代の滑石製石錘について、滑石は加工が容易ということもあるが、滑石は水中で光を受けて輝くため（第 41 図）、イカ・タコを含めた肉食魚にとって疑似餌の効果を高める性質を持つと判断し、滑石製石錘がイカ釣漁の錘の可能性を指摘した（平川 1990）。なお、平川氏は滑石製の九州型石錘のうちどの類をイカ釣漁の錘としたかは言及していないものの、おそらく I 類のことを指している可能性が高い。



第 41 図 I 類石錘の加工痕（湯納遺跡）

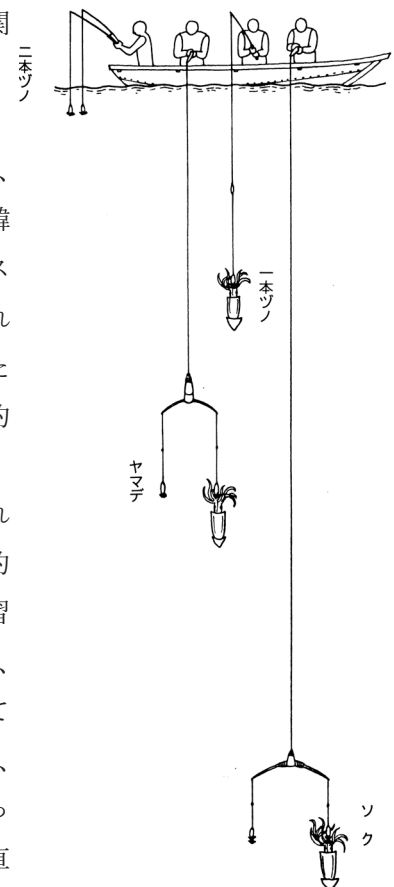
さらに内田律雄氏は、古代の鹿角製錘がイカ釣の疑似餌としての機能を有し、それが日本海沿岸に偏在することを指摘するが（内田 2004）、九州型石錘 I 類は上下に 2 孔穿ったものが他の類より多く、天秤釣が想定されるとした。つまり、上の孔は道糸と、下の孔には天秤竿を装着し、天秤竿の両端にはハリス・釣針が付き、魚なら両端に 1 匹ずつの 2 匹、イカならば複数の釣針の装着が可能と指摘する（内田 2016）。このように、本稿以前にも九州型石錘 I 類とイカ釣具との関連を指摘する意見が存在した。

## ②民具における類似例—佐渡式イカ釣具—

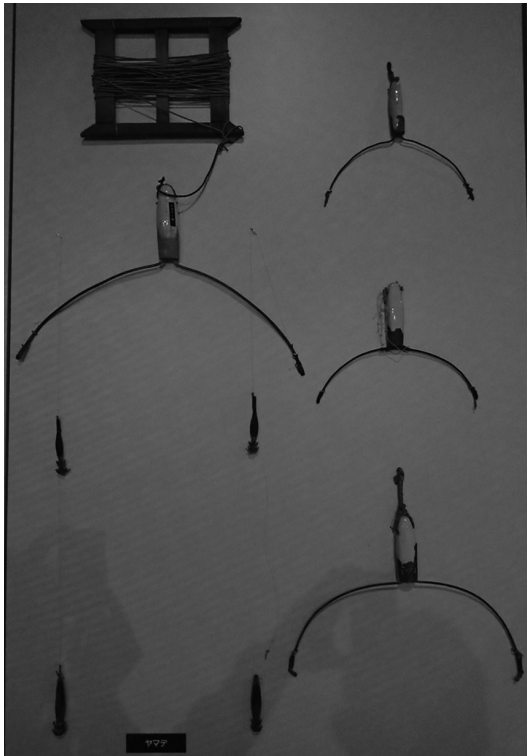
佐渡式イカ釣具は、明治期に新潟県佐渡島で開発されたイカ釣具で、優れた捕獲能力から日本海沿岸の鳥取県や島根県、青森県、遠くは韓国の鬱陵島等のスルメイカが回遊する各地に伝播した漁法である。スルメイカは、かつて海洋資源が豊かであった頃、陸地の近くで行われた夏イカ漁では、海底にツクシが生えるようにイカが棲息し、採ったイカは自家用の食料にしたほか、鰯に加工し、換金商品として経済的にも重要な位置を占めていた（池田 1986）。

佐渡式イカ釣具は、餌に似せた釣針である錨形釣針を装着し、それを海中で上下させることでイカが餌と間違えて釣糸に引っ掛かり、釣り上げる方式のものである。深海から表層まで広く移動するイカの習性に応じて、上釣用のツノ（かつては角を使用か）、中釣用のヤマデ、底釣用のソクマタの 3 種のイカ釣具を使い分け、これらを一組として使用したことが大きな特徴である（第 42 図）（池田 2004）。明治時代以降、佐渡ではイカ釣漁は太陽が黄昏時から集魚燈を用いた夜間操業を行ったが、それ以前は日没前後の薄明るい時間帯及び朝方の夜が明ける直前、イカが海面近くに浮上する際に捕獲した（池田 1986）。

佐渡式イカ釣具のうち、上釣用のツノはヤマデにより海面近くまで浮上したイカの群れを釣り上げたもので、柄に竹の枝からなる竿を取



第 42 図 佐渡式イカ釣具使用法  
（両津市郷土博物館編 1997 より引用）



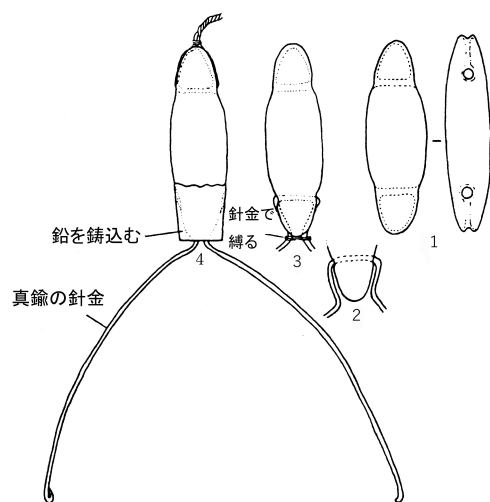
第43図 民俗例のヤマデ  
(両津郷土博物館所蔵)

り付けた構造である(第45図)。その竿先に約1mの長さの釣糸を装着し、その先に鉄か真鍮、または竹の芯のツノドウに、12、14本の釣針をつけたツノバリ(錨形釣針)を付け、ツノドウにエサのイカを巻きつけて使用した(第45図)。なお、ツノは釣糸の長さが長すぎると釣り上げたイカを引き寄せるのに時間がかかり、かつ糸が絡まりやすいとされる(池田1986)。使用法は、両手を互い違いに上下し、常にツノバリを海中に存在させることでイカが餌と間違え、ツノバリに引っ掛けることで多く捕獲でき、1人で1夜最大3,000尾は釣ることができたという(池田2004)。

中釣用のヤマデは、海面下約15~22mにいるイカを釣った天秤仕様の竿釣りである(第43・45図)。ヤマデは明治30年ごろ、佐渡両津の漁師によって、ソクマタを応用して考案されたとされる(池田1986)。ソクマタを使って深海のイカを釣り上げながら、徐々にイカの群れを上層におびき寄せ、水深約15~22m位までイカが浮いてくると、トンボ(錨形釣針)を使って釣り上げた。

またヤマデの大きな特徴として竿から6~9mの長さの釣糸の途中に白色の陶器製の疑似餌の機能を持った錘でイカを誘引することである。この「しらやき」と呼ばれる白色の磁器製の錘(第44~46図)の左右に、鉄または真鍮製の針金を取り付け、弦状に2本の腕をつくる。その両端に釣糸を付け、その先にトンボ(錨形釣針)を取り付けた(第45図)。このイカをおびき寄せる最も重要な部分である錘は、先の磁器製のほか、松材、陶器やガラスを用いて製作したものでアワビの殻を貼り付けたもの、水牛や鉛を用いたもの、さらに赤色や白色、黒色などの木綿布を巻き付けたものなど、少しでもイカの眼に触れやすくするために、集魚機能を持つよう漁師が独自に様々に改良して用いた(池田1986)。

ソクマタは深海を回遊するイカを釣るもので、水深約60~105m位の深さを回遊するイカを釣り上げるときに使用した(池田1986)。その構造は約75~105mの長さの釣糸に、海中で天秤状になるよう、



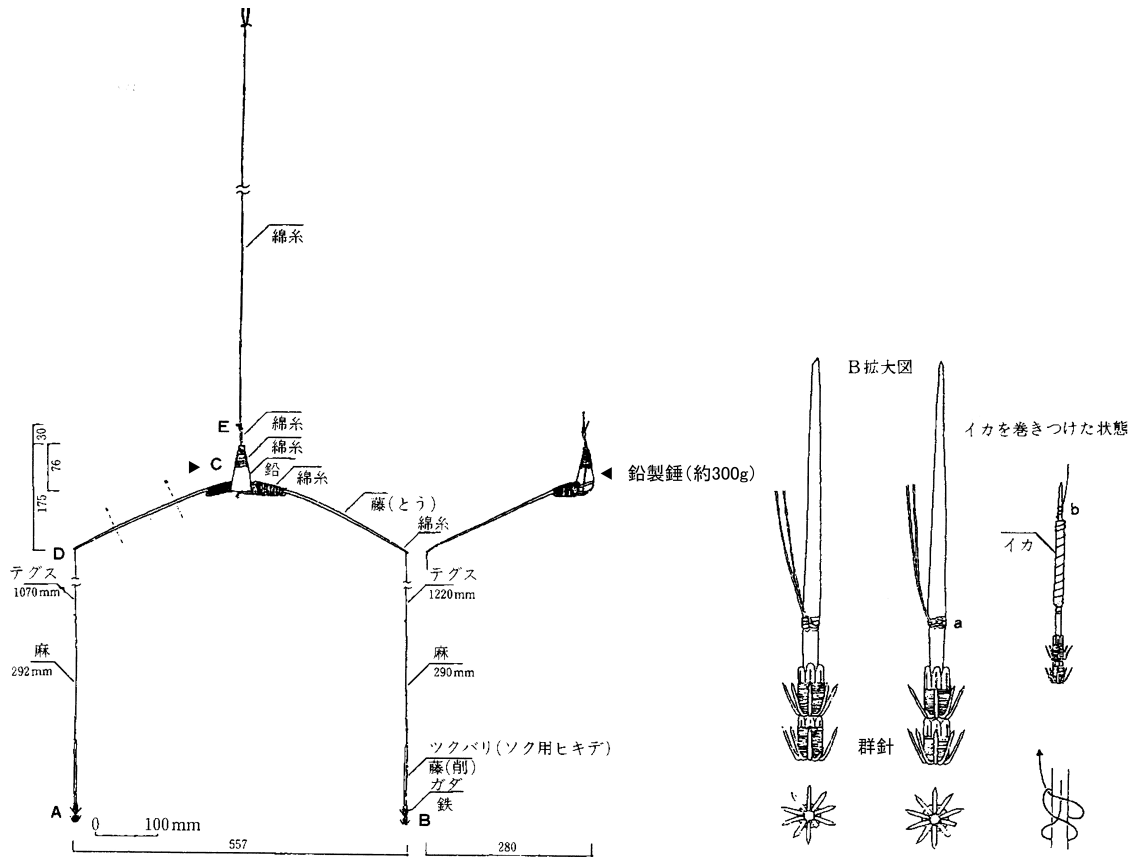
300gの鉛製の錘の左右に藤や真竹を削った腕を取り付け、その両端に釣糸を付け、釣糸の先に長さ15cm、径5mm程度に削った真竹を軸とする錨形釣針を付けた(第45図)。

### ③九州型石錘I類の用途

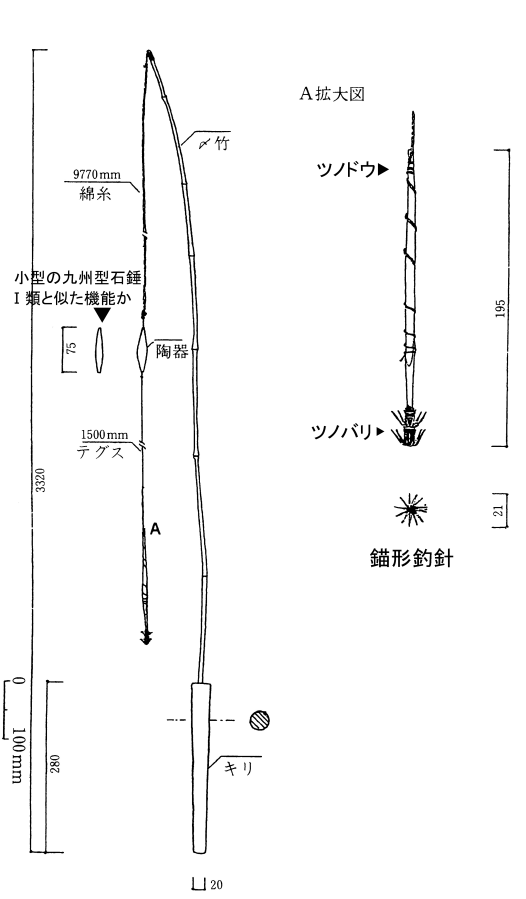
以上3種からなる佐渡式イカ釣具を概観したが、九州型石錘I類の用途を考える上で、中釣用のヤマデ(第43・45図)が最も参考になる。

九州型石錘I類は、先述したように天秤釣の錘であることが先の考古学の先行研究でも想定されてきたが、ヤマデも天秤釣であること、ヤマデの錘である「しらやき」と呼ばれる白色の磁器製の錘(第44~46図)の形態は、その形状と大きさ、孔と溝の存在と位置など、九州型石錘I類(特

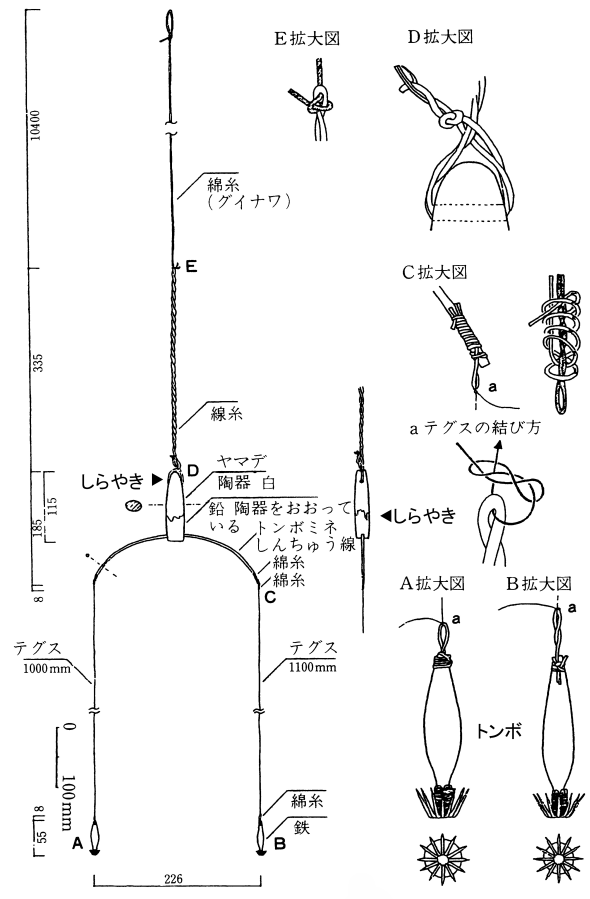
第44図 しらやき(神野1984を一部改変)



佐渡式イカ釣具(ソクマタ:底釣)

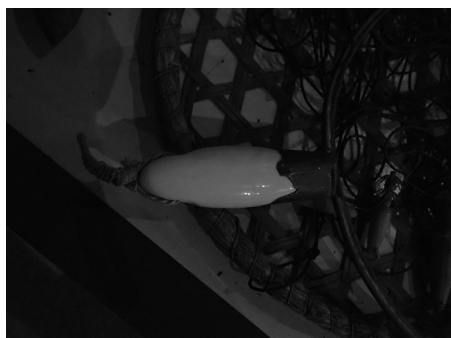


佐渡式イカ釣具(ツノ:上釣)



佐渡式イカ釣具(ヤマデ:中釣)

第 45 図 両津郷土博物館所蔵佐渡式イカ釣具実測図 (ツノ・ヤマデ・ソクマタ) (池田 2004 より引用)



第46図 しらやき写真  
(両津郷土博物館所蔵)

にIC類(第39図9)と酷似するだけではなく、「しらやき」が持つ水中で光り輝くことで得る集魚・疑似餌的機能は、九州型石錘I類が白色・ピンク色系の滑石等を精巧に研磨することにより、水中では白く光り輝いたと想定されることと一致する。なお、近現代の民俗例との形態的類似性をもつての比較研究については当然批判も予想されるが、形態は漁具の機能や有効性を反映した分化の到達点であり、それぞれの道具がその効果に応じて特化した形態的特徴を示しているという前提に立てば、本稿の検討の範囲では時代に関わらず形態の類似性が機能面まで及んでいると考えている。

ちなみに、天草の民俗例では、イカ釣用とは限らないが佐渡のヤマデのような天秤釣が多くあること、イカ疑似餌にアワビ貝等の光沢のある貝片を埋め込むことで海中で光を放ちイカを寄せる効果があったとの指摘から(山下2016)、玄界灘においても九州型石錘I類は海中で光り輝くことでイカを寄せる効果があったと推測できよう。さらに白色、ピンク色、黒色系や灰色系の石材を使用した

錘は、餌となる魚の色に似せて集魚する疑似餌的な効果があったと思われる。加えて「しらやき」は長さ10～13cm程度(第45図)、重量は不明ながら、「しらやき」より重いソクマタの鉛製錘が300gと九州型石錘I類の法量に近い。

博多湾は、北部で水深35mに達し、湾中央部は比較的水深が浅いという面から、古代でも水深約15～22mのイカを対象とするヤマデ的なイカ釣具が能力を発揮した可能性があるろう。

現在でも、佐賀県唐津市呼子や福岡県宗像市鐘崎など、玄界灘ではイカ釣漁が盛んであるが、明治24年の筑前海の漁獲高においてもイカは漁獲高6位であり、当地域はイカの産地であった。玄界灘(筑前海)でのイカ釣漁について、明治11(1878)年編纂の『福岡県漁業誌』では、「烏賊釣 漁業の季節は小満頃(5月20日頃)に始め立秋の頃(8月7日頃)に終わる。漁場は海岸10尋以内(約18m以内)の所とす。漁船は1艘1人又は2人乗にして薄暮の頃より出漁し、月夜暗夜とも燎火(篝火)を照らし烏賊を誘致し、餌烏賊又は汎庵漬等を用い綸(竿)を垂る。綸は長さ7・8尋(14m前後)、その端に1尺4寸余り(約42cm)の割竹に鉄長6寸量目30目位(錘、約112g)を括り合せ沈めとす。その端にテクス2尺8寸余り(約84cm)を付着し竹釘を付く。烏賊は海底に栖まざるを以て、十尋(約18m)の深なれば7・8尋(約14m)を垂る。海中に上下するときは烏賊忽ち餌に吸着し、綸に応ずるを以て徐々に綸を手繰り、水際にて攪網(すくい網)を以て掬捕す。老練の漁士は水際にて綸を2・3回回転し、直に船中に引き揚ぐ。一夜百余を得るは上漁とす」とある(西日本文化協会編1982)。

このことから、明治時代、玄界灘におけるイカ釣漁は一本釣ではあるが、112gの沈子(錘)、漁期、操業時間と篝火の使用、竹釘(錨形釣針)の使用、操業深度など、先の佐渡の状況と整合的である。

なお、古代には魚介類を倭王権に調・贄として貢納する制度が整えられ、各地から魚介類を畿内や大宰府に貢進するための保存食が発達する。『延喜式』では、奈良県春日大社の祭祀である「春日祭」では、神饌としてイカ(干イカ)が挙げられ(小倉2021)、イカは調・贄において重要な食材でもあった。また『延喜式』ではイカの貢納は、若狭・丹後・出雲・豊前から主に調として貢納され、西海道では筑前国から大宰府へイカが貢納されている記録がある。なお、文献史料によれば貢納品である魚介類の多く

は塩引きであるが、この貢納品はイカを鰯や燻製などに加工したことが想定される。このイカの加工については、後述する。

加えて、あくまでも参考資料ではあるが、古代の代表的海の神である住吉大社や住吉神社で奉じられる「住吉三神」は、底筒男命・中筒男命・表筒男命と、ウワ=表、ナカ=中、ソコ=底とそれぞれ海面、海中、海底という海の深さを三段階で示すとも解釈できること（肥後 1968）は注目される。

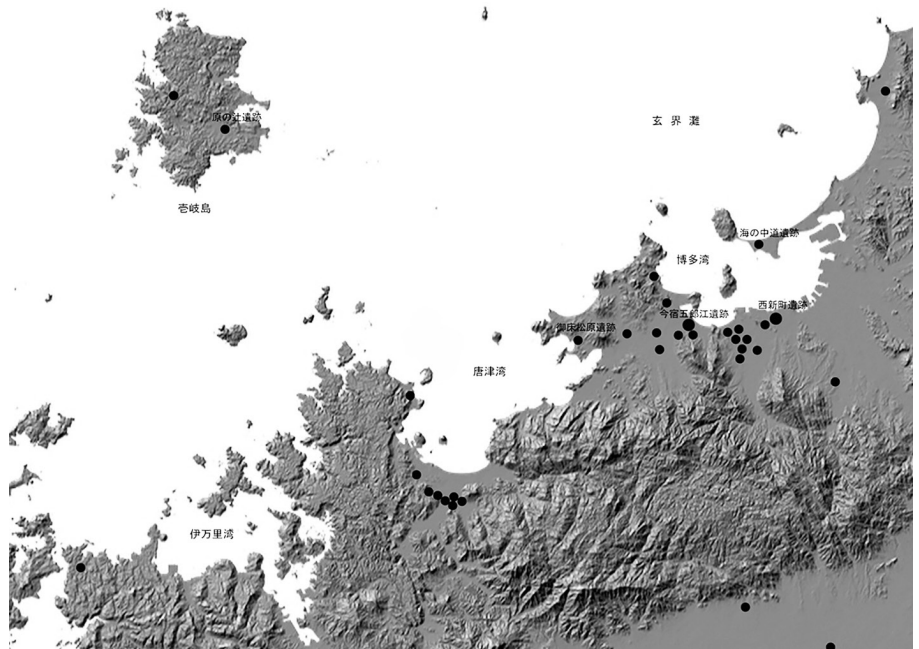
神話的な事象であるとはいえ、この深さの感覚は元々は潜水漁に関連した可能性があるが、先のイカ釣漁にみられる海の水深による漁具区分と調和的で、古代の海人集団の海中の認識を示している可能性があるだろう。

以上、民俗例を中心に九州型石錘 I 類の関連事例を検討してきたが、次では西新町遺跡出土九州型石錘 I 類を改めて考古学的観察により分類・分析することで、佐渡式イカ釣具のヤマデの錘である「しらやき」との関係を実証する。

#### （4）九州型石錘 I 類の考古学的分析

前節で佐渡式イカ釣具であるヤマデに使用される「しらやき」という磁器製の錘が、九州型石錘 I 類に形態・法量・色調などが酷似しており、九州型石錘 I 類の使用法を推測させることから、ここでは考古学的検討を行う。なお、西新町遺跡は I 類石錘を含めて九州型石錘の種類と量が豊富であるため、漁法の復元だけでなく、漁労活動の総体的な内容を把握できる可能性を有する遺跡である。今回の I 類石錘の在り方を論じるために、観察と分析については同遺跡出土 I 類石錘を用いた。

本稿における九州型石錘 I 類の分類は、下條氏の型式分類を基礎に、より機能的な視点から分類・検討を行った森本幹彦氏による優れた分類を取り入れ（森本 2015）、先にみってきた新たな分析項目を加えて検討する。なお、九州型石錘は各遺跡から未製品が出土することから、自家生産が基本であったと考えられる。漁具は、近世でも釣針・疑似餌・釣竿等の漁具諸道具は個人所有品で、各自が独自に加工を加えていたとされる（山下 2016）。主に加工が容易な滑石を素材とする九州型石錘は漁具の中でも個性が強く、多種多様な形態や大きさが存在し、多くのバリエーションが生じやすい理由となっている。このように、特に遺跡単位でのバリエーションが顕著であるため、考古学的な型式分類よりも民俗例等に示された実際の機能を考慮に入れた分類が求められる。なお、I 類の分類については、第三章 1 の 25・26 頁に詳述しているため、参照いただきたい。



第 47 図 九州型石錘 I 類出土分布図  
（国土地理院の陰影起伏図を加工）

## ①分析結果

以上の分類視点を実証するため、九州型石錘が最も多く出土した遺跡の1つである福岡市西新町遺跡出土九州型石錘Ⅰ類（九州歴史資料館所蔵分）について全て観察を行った（第39図・第1表）。

まず形態面では、ⅠA類は5点、ⅠB類は7点、ⅠC類は2点と「しらやき」（第44図）の形態と酷似するⅠC類が少ないが、ⅠA・B類とも他遺跡出土例と比べ、分銅形・筍形というよりも長大な砲弾形を呈するものが多く、ⅠC類とは機能的には差がないとみられる。九州型石錘が多く出土した弥生時代中期後半～後期中葉を中心とする福岡市今宿五郎江遺跡出土九州型石錘Ⅰ類と比較すると、時期的に今宿五郎江遺跡の方が古いこともあるが（第15図4・6）（森本2015）、本遺跡より長さが短く、時期が下るごとに大型化、長大化の傾向がみとれる。さらに、Ⅰ類石錘が集積して出土した事例がなく、Ⅰ類石錘は単体で漁具に装着されたとみられることは、Ⅰ類石錘が漁網錘ではなく、釣用錘であった可能性を示す。

次に材質からは、Ⅰ類石錘の材質は滑石が6割強を占めるが、滑石製が占める割合は本遺跡では九州型石錘Ⅱ類が9割、Ⅲ～Ⅴ類が8割近くを占めており（Ⅱ～Ⅴ類の分類は第Ⅲ章1の26～29頁、第15図を参照）、Ⅰ類の滑石の割合が低いことが目立つ。Ⅰ類石錘の材質が滑石以外にも砂岩や砂粒砂岩、泥岩と多様な材質を使用しており、Ⅰ類が加工のしやすい素材を求めただけではないことがわかる。

色調の面では、基本的に滑石の原色である青灰色系（オ）が3割を占めるが、白色系（ア）とオリーブ色系（エ）は2割強、ピンク色系（イ）は2割弱、黒色系（ウ）は1割強であった。白色の磁器製である「しらやき」は赤色や白色、黒色などの木綿布を巻き付け、少しでもイカの眼に触れやすくするために改良されていることと九州型石錘Ⅰ類の色調の傾向とは調和的で、石材の色も用途に見合っただけで意図的に選択した可能性が高い。

ちなみに、Ⅱ類の滑石製石錘もピンク色系の割合が高いことは注目されるが、これは採取段階で石錘として利用するものは色調も重視した結果を示す可能性がある。

加工状況では、未製品を除くと、Ⅰ類石錘では7割近くが表面を丁寧に研磨していた（a'）のに対し、Ⅱ類石錘では8割強が成形のための研磨（a）のみである。

Ⅰ類石錘にみられる加工痕について、河合章行氏による骨角器の製作工程と技法の分類を当てはめると（河合2013・2022）、明確な「切断」や「分割」工程の加工痕は実物観察では確認できていない。次の「粗加工」段階では鑿・刀子等の鉄製工具による「切削B」（第48図）とその後粗砥石等を用いた「研削」、「仕上げ」段階では仕上砥石等による「研磨」が確認できる。

先述したように西新町遺跡では、この河合氏分類における施溝等の「切断」「分割」の明確な痕跡が認められないこと、西新町遺跡においても滑石の剥片の出土は管見の限りではないことから、毘沙門山等の原産地における素材採取の際に叩石等による打撃で打ち割っていた可能性はあり、原産地で先の石材の色調とともに、最終的な製品の大きさと形が合うものを意図的に選ぶ、ないしはおおよその形に整え、それを集落に持ち込み、最終的に製品として仕上げたと予測される。

また、長さ・幅5mm前後の連続するケズリを施す「切削B」は、多くのⅠ類石錘にみられ、Ⅱ類石錘も同様であることから、「切削B」が九州型石錘の基本的な製作技法であったと考えられる。なお、最終的な「仕上げ」工程では、考古学的な観察で確認できたものではないが、表面の平滑が顕著なものについては仕上砥石によるものだけでなく、皮革等による研磨も行われたことも考慮すべきと思われる。

以上のことから、Ⅰ類石錘は海中で光り輝くため、選択された材質、石錘の色調と丁寧な研磨により、佐渡式イカ釣具の「ヤマデ」の「しらやき」と同様の機能を持ったと考えられる。

また 2 孔の場合、上の孔は道糸（古代は麻糸を使用か）と緊縛されているとみられるが、下の孔径は 3～9 mm、平均 5 mm 程と細い。先に紹介した佐渡式イカ釣具のソクマタの錘は、300 g の鉛製錘の左右に藤や真竹を削った腕を取り付け、弦状に 2 本の腕をつくり天秤竿をなしている。西新町遺跡出土九州型石錘 I 類の実物観察では I 類の孔に棒状の腕を差し込んだ明確な痕跡は確認できなかったが、内田氏の指摘によれば（内田 2016）、大型かつ 2 孔以上のものは（第 39 図 3～7・9）、平均径 5 mm 程度の下孔に藤や真竹製の竿を入れ、その左右を藤や竹で補強しつつ弦状に天秤竿の腕を作った可能性がある。一方、I 類石錘で最も多い先端と体部中央の孔を溝で結んだ I-1-1 類の 1 孔上溝タイプのもは（第 39 図 1・2）、別作りの天秤竿中央から垂下させたものの可能性があり、小型の 1 孔の I 類石錘（第 39 図 8）は、大型の 1 孔のものと同様、天秤竿から垂下させた錘ないしは道糸と釣糸の途中に装着したイカ一本釣用の錘であった可能性がある。



第 48 図 連続した加工痕（切削 B）  
今宿高田遺跡出土 I 類石錘未製品

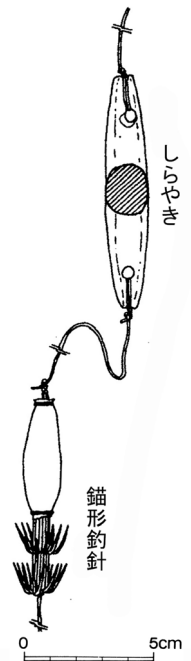
また前稿（大庭 2021）で佐渡の民俗例を挙げ、I 類石錘の用途として天秤釣以外の可能性も提示していたものの、天秤釣を強調するような内容になっていたが、脱稿後、内田律雄氏がイカの良い漁場である隠岐島を中心とする山陰地方で用いられた民俗例のしらやきについて別の使用形態を指摘していること（内田 2009）を確認した。

内田氏は形態から A・B・C 3 つに区分し（内田 2009）、そのうち C 類は天秤釣、B 類はしらやきと錨形釣針と合わせたものとするが、A 類は天秤釣ではなく、しらやきの上孔は道糸、下孔は直接釣糸を結び、その下に錨形釣針を付け（第 49 図）、イカを捕獲したとする。前稿後、西新町遺跡以外の I 類石錘の資料調査においても、下孔に明確に棒状のものを差し込んだ痕跡は確認できておらず、筆者は現在 I 類石錘の使用形態は天秤釣よりも内田氏 A 類のような使用形態が多かったのではないかと考えている。

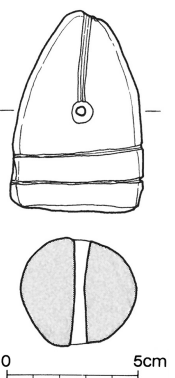
さらに、内田律雄氏は、スコットランド新石器時代の有溝石錘の民俗例から、短軸溝は複数の釣針を装着するための溝とするが（内田 2016）、そうすると体部下部に 2 本の短軸溝を有する糸島市一の町遺跡例（第 50 図）は、石錘下部の短軸溝に釣糸（ハリス）が緊縛され、その釣糸に複数の釣針が装着されていた可能性もある。

なお、これらの多様な釣漁の発達・展開にあたっては、石錘の改良と同時に遺物としては残りにくいものの、釣糸や紐の改良が伴っていたとみられる。

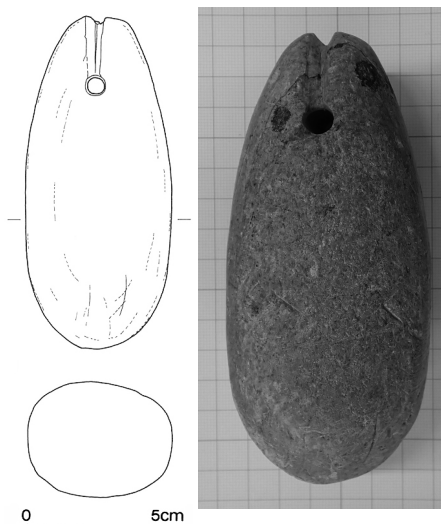
九州型石錘の中でも特に特徴的な形態を持つ I 類は、壱岐島、唐津湾沿岸部、糸島半島、博多湾沿岸部、玄界灘西岸の広範囲に分布するが、特に糸島半島西岸の御床松原遺跡、博多湾岸西部の今宿五郎江遺跡・西新町遺跡で多くの石錘が出土し（第 47 図）、現在でもイカ漁が盛んな地域と同一であることは注目される。一方、博多湾東部では博多遺跡群と海の中道遺跡、福津市勝浦坂口遺跡など非常に少なく、糸島半島から博多湾西部にかけての漁労活動を行った集団が主に用いた漁で使用したとみられる。加えて、九州型石錘 I 類では最も古い弥生時代前期後半のものが唐津地域の菜畑遺跡で出土するが、唐津地域が他地域に比べ九州型石錘が先行する状況として、東松浦半島のような多島海



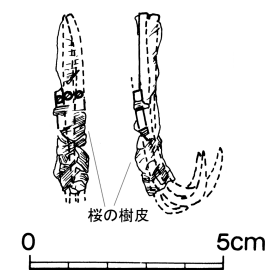
第 49 図  
しらやき使用例  
（鳥取県金比羅  
神社資料館蔵、  
内田 2009 より  
引用）（1/3）



第 50 図  
一の町遺跡出  
土 I B 類石錘  
（1/3）

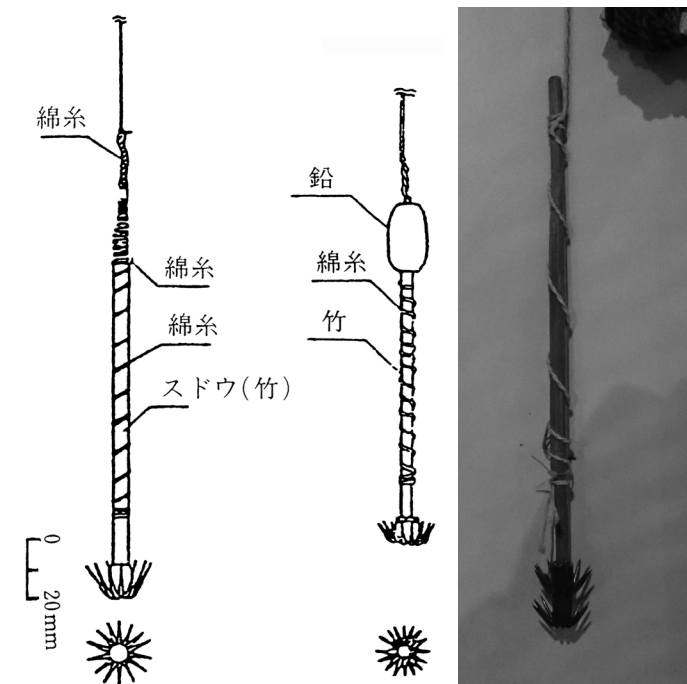


第 51 図 兵庫津遺跡出土 I 類石錘  
(1/3) (神戸市所蔵)



第 52 図 海の中道遺跡  
出土釣針 (1/2)

こと、孔径と溝幅、海底にあたり、曳きずられた明瞭な痕跡はないことから、釣用錘である可能性が高いことなどが共通する要素である。14 次調査区は、中世～近世にかけて港町の町屋が並んでいた



第 53 図 民俗例の錨形釣針 (図は池田 2004 より引用、  
写真は両津郷土博物館所蔵分を筆者撮影)

の状況により漁労技術及び航海技術が発達したことが原因であった可能性がある。

主に九州型石錘 I 類の広がりについて、下條氏 (下條 1984)、内田氏 (内田 2016) により山陰や北陸、鹿児島県薩摩半島などの主に日本海側の海浜部に分布することが示されているが、これらの資料群のうち、年代の判明するものは古墳時代～近世に属し、確実に弥生時代に遡るものはないこと、材質も玄界灘沿岸のように滑石を基本とするのではなく、在地の石材が使用され、福井県小曾原窯跡例のように須恵質のものもある。よって、すべてが弥生～古墳時代前期の九州型石錘に直接的な系譜が追えるものではない可能性を考えている。林田・中尾氏は長崎県膝行神貝塚の 12～13 世紀の土坑から出土した滑石製石鍋片を転用した I A 類石錘の存在を指摘するが、このことについて内田律雄氏は漁具機能が

同様のもので、似通った魚の捕獲が行われていたのではないかと推測する (内田 2016)。土岐耕司氏は 12 世紀後半の博多遺跡群出土の九州型石錘 I 類の存在を示している (第 39 図 10)。

さらに、兵庫県神戸市兵庫津遺跡で 16 世紀と想定される I 石類に形態的に類似する滑石製石錘が複数出土しており (黒田他 2010)、資料調査を実施した。その中で 14 次調査資料 2 点のうち、第 51 図に掲載したものの重量は 554.8 g と 12 世紀後半の博多遺跡群出土と同様、法量がかなり大きくなっているが、滑石製であること、1 孔上溝の形態、色調と丁寧に研磨され海中で光り輝いた

ことが判明しており、そのうち水産業に関連した町屋付近から多数の動物遺存体が出土するものの (丸山 2010)、イカの遺存体は見つかっていないため、この石錘の用途は不明である。地理的・時期的にも距離があるが、大阪湾の中世後期でも本石錘と類似する形態が存在することは注目される。

このように、玄界灘沿岸や他地域においても直接的な系譜は繋がらないものの、九州型石錘 I 類と酷似する形態の石錘がみられることは、九州型石錘 I 類の作りやすさや漁具としての機能や耐久性がいかに優れていたかを良く示しているといえると同時に、I 類石錘の一部はイカ以外のメバル等の底棲の魚類を対象にした釣用錘であった可能性がある。

## (5) 九州型石錘 I 類の検討結果からの諸問題

## ① 弥生～古墳時代におけるイカ釣漁の復元

筆者の前稿では、九州型石錘 I 類は山中英彦氏が想定する垂下する縦型の漁網錘としての可能性を残していたが（大庭 2009）、先の検討により弥生～古墳時代の九州型石錘 I 類を使用した漁法は、佐渡式イカ釣具のヤマデと同様のイカ釣漁の可能性が高いことが明らかになった。

福岡市海の中道遺跡では、古代に属するとみられる 3 本の釣針を桜の樹皮で錨状に束ねた釣針が出土するが（第 52 図）、報告者の山崎純男氏は、イカ・タコ用の釣針と極似すると指摘する（山崎 1984）。また鳥取県長瀬高浜遺跡では、細い針状の鉄製品を 3 本束ねたものが出土している（内田 2009）。

このように、出土資料は少ないものの、現在のイカ釣漁の錨形釣針（第 53 図）の機能を想定させるような形態のイカ釣用の釣針が古代から存在した可能性がある。このことも軟体動物であるイカの動物遺存体の出土が望めない以上、古代にイカ釣漁が存在した証拠となる。

なお、佐渡市の両津郷土博物館所蔵民俗例では「しらやき」の下方に着けられた錨形釣針は 13 本、2 段からなる（第 53 図）。九州でも天草等で「イカガナ」と呼ばれ、同様のイカ釣針が確認できる。また先の佐渡両津の資料では錨形釣針の胴部が竹製のものもあり、池田哲夫氏は古くは竹を茶筌状に端部を尖らせ、それを釣針にしたと指摘する（池田 1986）。また昭和初期の天草のスルメイカ漁の錘と釣針、疑似餌を兼ねた漁具のカナキンは昭和初期まで錨形釣針が 1 重で、その後 2 重に変化したとされる（山下 2016）。

以上のことと先の『福岡県漁業誌』にある竹針の記述から、九州型石錘 I 類を用いたイカ釣漁の釣針は、細い鉄製釣針を数本束ねた、ないしは茶筌状の竹の端部を尖らせた、錨形釣針であったと推測される。

加えて、九州型石錘 I 類を用いたイカ釣漁において船近くに寄り集まってきたイカを最終的に大量に捕獲する方法として、再び民俗例からの引用になるが、天草のイカ釣具では竿に付けたサバ・アジなどのエサを海中に沈め、エサとともに海面までそのままついてきたスルメイカをタモによってすくいあげる漁法である「スカシ」漁法は原始漁法に近いとの指摘（山下 2015）と『福岡県漁業誌』の記述があることは、弥生～古墳時代におけるイカ釣漁の参考となる。このように、九州型石錘を使用したイカ釣漁では、最終的な釣り上げる方法としてはタモを使用した可能性がある。

ちなみに、現在の玄界灘沿岸のイカ釣漁をみても、現在は釣糸がドラムにより自動的に上下する機械釣で、イカが光に集まる性質を利用して、夜間集魚灯を使用し操業する。漁期は 6～12 月が中心で、水深は 40～100 m、夏は沿岸寄り、秋～冬にかけて漁場は沖合域へ移動する。春～秋はヤリイカ（ケンサキイカ）、秋～冬はブドウイカ、沖合でスルメイカを捕獲する。このように、現在のイカ釣漁は昼間深い海にいるヤリイカなどのイカが船上の灯火で集めた餌となるプランクトンを求めて浅い海面に浮上してくるところを釣るが、日暮れ時や餌食いの悪い時間にはイカ等の切り身を付けて釣る。イカの群れが次第に浮上して食いがよくなれば、疑似餌に変えて釣る。その後、興奮したようにイカの群れが船のまわりに寄り集まれば、釣針に引っ掛けて次々に船に引き上げる（福岡県水産林務部漁政課 1991）。

このように漁期については、先の『福岡県漁業誌』を含めて考えると、玄界灘では早春から夏にかけて沿岸に産卵にくるヤリイカが対象で、後述する鯛の天日干し加工の時期と沿岸域が漁場で捕獲しやすい、夏が漁期であったとみられる。

またイカ釣の操業は、『福岡県漁業誌』や明治期の佐渡の事例でも夜間に篝火を焚いて行ったとされ、特に佐渡では月夜が良いとされる。古代の万葉集で博多湾における釣漁について詠った次の 3 首の和歌から、少なくとも奈良時代には夜に漁火（篝火）を焚き、夜通しで釣漁をしていたことがわかる。

「志珂の白水郎の釣し燭せる漁火のほのかに妹を見むよしもがな」(巻12、3170)、

「志賀の浦に漁りする海人の明け来れば浦廻漕ぐらし楫の音聞こゆ」(巻15、3664)

「志賀の浦に漁りする海人家人の待ち戀ふらむに明し釣る魚」(巻15、3653)

このように、漁火で夜通し漁を行う光景は博多湾で特徴的なものであったため、歌に詠まれたと想定される。先の海の中道遺跡は歌に詠まれた時期と重なる漁業と貢納用の塩蔵の様々な魚介類の加工の拠点であったと想定されるが、イカ釣漁の錨形釣針(第52図)とともに、時期は古代に属する可能性がある九州型石錘Ⅰ類が出土していることから、イカ釣漁に限定できないが、万葉集に詠われた漁の光景の1つがイカ釣漁であった可能性がある。さらに、このことが弥生～古墳時代まで遡るかどうか証拠はないが、九州型石錘を使ったイカ釣漁でも篝火を焚いて夜間に行った可能性があるだろう。

## ②佐渡式イカ釣具と弥生～古墳時代のイカの加工

イカは脂肪含有量が少なく、干物として加工適性が良く、干物とすることで旨味成分が増え、保存料としての塩もほとんど不要であることと、一部重複時期はあるものの、古墳時代前期以降、九州型石錘Ⅰ類を使用したイカ釣漁の衰退と博多湾岸における本格的な製塩土器の本格的な導入が整合する。真鍋篤行氏は弥生時代中・後期の飯蛸壺漁の発達について、イダコも干物として塩を使わず加工できるため、水産物の加工品として流通していた可能性を理由に挙げる(真鍋1994)。弥生時代、鰯は長期保存だけではなく、内陸部への流通も容易で、需要が高かったことは想像に難くない。そこで、イカの干物である鰯について民俗例を参考としながら、弥生～古墳時代のイカ加工法について検討してみたい。

佐渡式イカ釣具の伝播にあたっては、先の3種のイカ釣具の能力に加え、加工技術まで指導したことが理由の一つであった。この佐渡の鰯製造は、簀乾と串乾、縄乾で行われていた(池田2004)。

簀乾は、夏から秋にかけて行われたもので、茅を細縄で簾状に編んだ簀の上に、内臓を取り去り水洗したイカの表側を簀の面に載せて並べ、裏側から陽を当てて乾燥して鰯を製造する。晴天下では1日半か2日ほどで乾燥し、製品となる。この方法は乾燥法が容易であるが、鰯の表面に簀の跡が深くつき、外見も色沢も悪く、かつ鰯の身も薄く品質を損なうことがあり、特に曇天・雨天の場合は乾燥に3～4日を要した。また雨が降ると簀に載せたまま巻いて屋内に積んでおくので変色して光沢を失い、悪臭も放ち、長期の貯蔵に耐えない粗悪な製品になるとともに、鰯の表面に深い簀の痕を残し、肉も薄くなるため、海外輸出はもちろん、国内用でも最下等の刻み鰯の原料にしかならないとされる(池田2004)。

串乾は主に冬季のスルメ製造で、1.5 m程度の長さの篠竹に内臓を取り去り水洗したイカの耳先を突き刺し、胴の上部及び眼との間を割った竹を弓状にして鰯を引っ張って平らにする。1本の竹竿に20匹ずつ刺し軒下などに吊すが、乾燥までに1週間程度を要した。乾燥後、伸ばしたり、重石に乗せて整形するなど手間がかかり、耳に竹串を刺すため串穴ができる(池田2004)。

縄乾は、木枠で張り渡した縄に内臓を取り去り水洗したイカを掛けて乾すもので、製品としての見栄えや品質も良い。乾燥に3・4日程度を要し、乾燥後も耳や胴体を引っ張り、形を整える必要があるため、手間がかかる(池田2004)。

以上、明治期の佐渡の民俗例から3種の鰯加工をみてみたが、弥生～古墳時代において漁期が夏に限定されたにしても、雨天の際の乾燥法が開発されていなければ、雨期中は天日干しだけでは、イカは無駄になることが多かったとみられる。

以上の問題について、山中英彦氏は博多湾東部の最奥部の小砂丘全面の調査を行った福岡市唐原遺跡で検出した弥生時代後期～古墳時代前期に属する、計300基にも及ぶ、径0.5～6 mと規模に大小がある円形・楕円形土壇(炉跡)について、イカ漁などで大量捕獲した海産物の加工炉、つまり人工乾燥に

よる加工炉であると指摘した（山中 2007）。唐原遺跡は、砂丘上に立地し、炉跡は砂丘の尾根上、長さ 100～300 m、幅 100～200 m の間に分布する（第 54 図上）。炉跡は、深さ 15～30 cm の浅い凹レンズ状を呈しており、素掘りのものや炉床及び炉壁に粘土を貼り付けたもの（第 54 図下）、炉床及び炉壁部に 5 cm 内外の礫石を敷いたもの（第 54 図中）があり、いずれも遺構覆土には焼けた粘土塊と、赤褐色砂（焼砂）、灰層を含むものが多い。

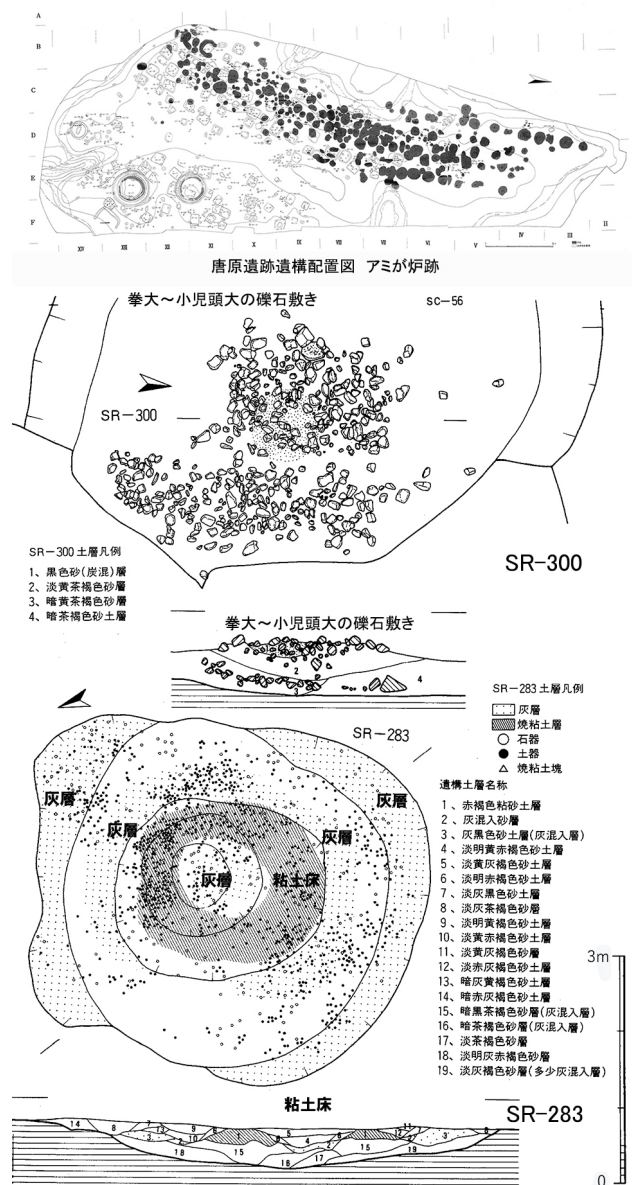
山中氏はこの炉跡について、『日本水産製品誌』「第 1 編食品第 1 節乾燥品」の人工乾燥による海産物加工で、大分県や鹿児島県で木製枠を多角形に組み立て、木製枠に縄を通し、縄に竹串で刺したヤリイカを並べて（佐渡式の縄乾に近い）、その中で火を燃やすことで人工的に乾燥させた事例を引き、玄界灘沿岸に早春から夏にかけて沿岸にやってくるヤリイカ等を木枠に吊り下げて、その内部で火を焚き、人工的に乾燥させて鰯に加工した炉跡ではないかと指摘した（山中 2007）。

唐原遺跡の炉跡の多くは周辺部に灰を掻き出した灰層が堆積するため、繰り返し使用されていることが分かるが、出土遺物には製塩土器や動物遺存体もないため、人工的な鰯加工炉跡とした山中氏の指摘は卓見で筆者も同調する。もし、この想定が正しければ、唐原遺跡では集約的なイカ捕獲・加工の集約的な生産体制が取られたことを示す。

ちなみに、幕末期の長崎県平戸大島で開発されたイカの炭火乾燥は、当初は薪火であるだけではイカの肉質が巻縮するので、火室をつくり、炭火で焙り乾燥するようになったことで大漁でも無駄なく加工できたとされることも（片岡 2011）、山中氏の指摘を補強する。

なお、唐原遺跡では九州型石錘の出土例はなく、この炉跡と九州型石錘との直接的な関係を追及することはできないが、筆者が担当した西新町遺跡 12 次調査時、古墳時代の遺構検出面上面に径 1～2 m の硬化した焼土面が十数基存在し、調査時は近世以降に形成されたもの、ないしは古墳時代前期のカマド上面の一部と考えていた。しかし、すべてがカマドの位置と一致しないことから、今考えると唐原遺跡と同様の素掘りの炉跡と同様の機能を持った炉であった可能性がある。今後の調査時には記録及びこのような視点を持った調査が求められる。

先述したように、現在玄界灘では春から夏が漁期のヤリイカと 5～12 月が漁期のスルメイカの漁獲が多いが、先の唐原遺跡では火を燃やすことで人工的にイカを乾燥させた可能性があるものの、乾燥効率を考えると基本的に鰯加工は天日干しで、九州型石錘 I 類を使用したイカ釣漁は春から夏にある程度



第 54 図 唐原遺跡の炉跡 (1/100)

限定されたものと推測され、そうであるならば、ヤリイカを対象とした可能性がある。

さらに九州型石錘を使用したイカ釣漁の効果として参考になる例として、鳥取県の泊で佐渡式イカ釣具を導入したところ、「ソク、トンボは使用法も容易で、…佐渡式イカ釣具のソクを使ったところ今までのイカ捕りでは1晩かかっても2・3匹であったものが50～60匹漁獲することができた」とされる（池田2004）。このように優れた捕獲能力を誇ったイカ釣漁が弥生時代中期後半～後期前半に玄界灘沿岸で開発され、需要に応じて古墳時代前期にかけて発達した可能性が高いのではなかろうか。

古墳時代前期後半以降、博多湾沿岸の比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群、西新町遺跡のいずれにおいても竪穴住居数が激減し、古墳時代前期末～中期初頭の段階までに集落の多くが廃絶する傾向がみられる。それに連動するように、九州型石錘も古墳時代中期にはほぼなくなる。石井陽子氏によると、玄界灘沿岸地域の集落動態では人口増加の第一のピークが弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけてであることから（石井2009）、古墳時代中期以降、水産物が大幅な需要減になり、加えて玄界灘沿岸から天草周辺に製塩遺跡の中心が移動し（山崎2007）、大規模かつ集約的な塩生産により塩が増産されたことに伴い、塩を使った様々な魚介の塩蔵品が各集落で組織的・分散的に多く生産され、相対的に集約的生産形態をとった鰯の需要が減ったことで、九州型石錘Ⅰ類がなくなった原因とみられる。

### ③イカの流通と社会

博多湾沿岸では、弥生時代中期後半～後期初頭、比恵・那珂遺跡群や今宿五郎江遺跡などでは、集落規模が急速に拡大し、大規模な拠点集落に発達する。小澤佳憲氏は当該期に集落の大半が一斉に集落規模を縮小・消滅し、その消滅・縮小した集団が規模を拡大した集落に移住した現象を「集住」と呼んだ（小澤2013）。九州型石錘Ⅰ類を用いたイカ釣漁も、中期後半～後期初頭にかけて「集住」が進む中で、水産物の需要が高まりかつ鉄器の普及による鉄製釣針などの新たな漁具が出現する中で新たに開発された漁具・漁法と思われる。この漁具の発達は、大量の水産物をもたらすと同時に、保存の問題が生じる。

イカ類は、クロダイなどに比べ、一頭あたり捕獲に要する労働力と保存加工の比較的容易さなど、コメなどの穀物を除く他の保存食料よりも優良な食料資源であったと考えられる。九州型石錘Ⅰ類を用いた漁法で捕獲したイカはどのくらいの捕獲量があったかはわからないものの、先の民俗例からすると自家消費を越えた捕獲量があった可能性があり、生鮮品としての消費だけでは思えず、先にみてきた鰯という塩を使わず比較的容易な加工法で、さらに先の唐原遺跡で想定される乾燥法の開発による良質な加工品かつ運搬に適している。このことから、西新町遺跡のような大規模集落内での自家消費に加え、内陸部との交易にとどまらず、国内外まで及んだ交易品であった可能性もある。

なお、新鮮な魚介類が流通可能な範囲は、昭和初期まで漁村から徒歩で一日に運搬できた約5～6kmの範囲であったとみられる（藤井2019）。弥生～古墳時代前期に盛行する糸島市御床松原遺跡ではクロダイ、スズキ、マダイ、フグ、サバ、マグロ、カツオなどの動物遺存体が出土し、特に九州型石錘は外洋漁に威力を発揮したとされる（下條1984）。ただし、外洋魚を捕獲しても、弥生時代は本格的な塩生産が行われておらず、加工や運搬などの技術が未熟であったため、海浜部集落周辺以外での流通は少なかったと判断される。ちなみに、網漁業による新鮮な魚介類の捕獲と流通については次節で論じる。

また鰯の重宝された理由の一つとして、夏がイカ釣漁のピークであったとすれば、夏の陸産資源欠乏期を補う食料として重要であったとも考えられる。

次に弥生～古墳時代における海人集団の出現についてみてみたい。九州型石錘Ⅰ類が多く出土し、その展開に重要な役割を担ったと考えられる福岡市今宿五郎江遺跡は、今津湾に面した砂丘後背地に存在した入海沿いの低丘陵の先端部～沖積微高地に立地する。弥生時代中期後半～後期にかけて、南北約

270 m、東西約 200 m の博多湾沿岸で最大の環濠集落として発達する。遺跡は入海に面しているため、九州型石錘や木製ヤスなどの多くの漁具とともに大量の木製農耕具も出土していること、楽浪系土器をはじめ、東海系、山陰系、西部瀬戸内系、近畿西部系など列島内外各地域の土器も出土していること、後期終末とみられる列島最古級のカマドを持ち、鍛冶工房とみられる竪穴住居も発見されており、糸島半島東部、伊都国の交易を支える重要な拠点であったと考えられている（森本 2016）。特に大量の木製農耕具の出土から、遺跡では水稲農耕が行われたことは確実で、かつ木製ヤスや大量の漁具から刺突漁など高度な漁労技術をあわせ持った、複数の生業基盤を有する集団が共存したと想定される。だが、漁労活動が季節的で農業と兼業できていたのかという、いわゆる農民漁業の問題、さらに海人集団が農業集団に取り込まれ、寄留していたのか、あるいは時代や遺跡の特殊性もしくはこの状況がどの程度普遍性を持つのかという、複雑で多くの問題を有するため、海人集団の在り方について遺跡や時代ごとの詳細な検討が必要であろう。ちなみに、今宿五郎江遺跡では集団がそれぞれ得意な分野の生業をある程度特化して行い、別の生業を行う集団に協力する程度の仕組みで、集落を運営していたと考えている。

以上、課題は残るものの、今宿五郎江遺跡や西新町遺跡のような複合的な生業や交易を行う集団が、その舶載物などの交換財の一つとして、海洋資源を利用し、加工した海産物を生産した可能性があることを指摘しておきたい。

#### (6) おわりに

釣漁業は残された釣針などから、少なくとも縄文時代から行われてきた漁獲法の一つで、現在でも鮮度の高い水産物を捕獲する漁法として重要な位置を占めている。縄文時代においてすでに骨角製釣針は大きさ、形態などが多様に富んでおり、魚種による使い分けが行われていたとみられる。弥生時代になると、水稲農耕の開始により副食物が求められ、かつその副食物も長期の保存性が要求されたことで加工・貯蔵技術が大きく発達する（真鍋 1994）。

先にみてきたように、玄界灘沿岸地域はイカ資源が豊富で、しかも経済的な価値が高いたとれば、その捕獲技術の効率化を目指した漁具・漁法の改良や考案が古くから試みられていたと考えられる。軟体動物であるイカは、通常は遺跡においてその遺存体をみることはないが、民俗例などの状況証拠から弥生時代中期後半～後期前半に大型の九州型石錘 I 類が出現し、古墳時代前期にかけて盛行する漁具・漁法の一つとして、九州型石錘 I 類を用いたイカ釣漁の存在を指摘した。

また魚介類を加工し、食料保存または貢納品として加工することは古くからあるが、煮沸や乾干により長期保存が利けば長距離輸送や大量流通も可能になる。

本格的な製塩活動の開始以前の弥生時代中期後半～後期、製塩活動の初期にあたる古墳時代前期にかけて、塩を使わず乾干することで製品化が可能な、春から夏にかけて大量に捕獲したイカの鰯加工は、自家消費だけではなく、内陸部や国内外まで流通した可能性を想定した。

古墳時代初頭前後の流通構造について、久住猛雄氏は白井克也氏のモデル（白井 2001）を発展させ、弥生時代後期後半まで対外交易の主体であった「原の辻・三雲交易」が、後期終末になると西日本各地の海浜部や河口に交易の拠点が出現することによって、交易機構が拡大する過程を示した（久住 2007）。この内容は、後期終末～古墳時代前期初頭、博多遺跡群や比恵・那珂遺跡群、西の今山・今宿遺跡群を拠点とする「前期博多湾貿易」、古墳時代前期前半～前期中葉になると対外交易の場が西新町遺跡を軸として、鍛冶は博多遺跡群、土器製塩は今山・今宿遺跡、内的な交易拠点としての比恵・那珂遺跡群といった、博多湾岸の各種生産が専門特化する傾向を示す交易ネットワークに再編される「後期

博多湾貿易」に発展し、博多湾沿岸地域が一貫して西日本規模での対外交易ルートの拠点となっていくことを明らかにし、これらまとめて「博多湾貿易」と呼称した。

西川修一氏は、弥生時代後期、博多湾岸を含む列島各地で地域生産の特産物的な物資を創出し始める現象は、外部から供給される物資を調達するニーズの高まりに対する代償の確保をはかった結果で、それは後代の律令制下の「調・贄」のような、「交易」の端緒となったと指摘する（西川 2015）。

これらの指摘から、博多湾岸では、相互に分業的、補完的な機能分化しつつも全体としては有機的に関連しあって一つのまとまりとして結合した、分業・交換ネットワークが形成されていたことを示す。それが西新町遺跡を軸に集約・再編されたのであれば、西新町遺跡を軸とする諸生産の集約と有機的な配置がなされていたと理解できる。

海人集団の動向について、森本幹彦氏は久住氏の意見を踏まえ、博多湾の東西で在来系漁具に地域差がみられることから、古墳時代前期前半にイイダコ壺漁をはじめとする畿内・瀬戸内系譜の外来系漁具と博多湾西部の在来系漁具を融合・再編したのが西新町遺跡であるとする（森本 2015）。

また乗松真也氏は、西新町遺跡をはじめとする博多湾岸の港津的集落は、在来の漁具に加え、新たな漁労技術の導入によってさらなる交易対象品としての海産物を調達し、交易への関与を強化、深めようとしたと指摘した。加えて交易品の性格により市場が異なり、市場ごとに参加者・交易品の空間的な範囲が異なることを指摘し、遠隔地との交易では主に希少品が取引され、海産物のような季節性の高いものは近隣地域を中心に交易されたと推測した（乗松 2010）。

これらのことから、地域内の集落ごとに分業しあう効率的な社会的ネットワークを形成していた博多湾沿岸の港津的集落で集落間分業された商品としては、海産物では鰯のような干物加工やさほど塩を使わない程度の魚介類の塩蔵加工、生の貝類や魚類まで取り扱われた可能性がある。これは、岡崎敬氏が玄界灘沿岸地域では、弥生時代、沖積平野が可能な限り水田化され、農村は急激に増加するとともに、海産物の要求も増大して、各地に発展した海士集落（海村）はコメなどの穀物、衣類、鉄器などの物資を求め、農民と漁民とは相互扶助的に、共存するに至ったとの指摘（岡崎 1968）を今回「鰯」という水産加工物から補強することができたといえる。

さらに博多湾岸を中心とする玄界灘沿岸では、弥生時代後期後半以降、東西で出土漁具の様相が異なることは、各小地域の自然環境や集団の特徴による漁業生産力の違いに応じて変化が生じたことを示し、その条件を活かす海産物の商品化・流通システムをそれぞれの条件に応じて構築したためと想定されよう。このため、前節でみた今宿五郎江遺跡などでは複合的な状況が生じていると理解される。

しかし、遺跡レベルでの漁労活動の追求は十分に行われていない状況にあり、まずは固有の生態系や社会状況を有する遺跡単位での生産活動を明らかにすることが必要である。加えて専門的ともいえるように水産物を多量に獲得する場合、集落から離れた資源獲得場所近くに専用の処理の場を設ける場合や複数の集落で分業し処理するなど様々な場面が想定される。今後は集落外の海岸沿いなども含む集落の構造、変遷、集落間及び地域内外の関係など、漁具を含む遺構・遺物から遺跡ごとの検討結果を蓄積し、総合的に分析することが必要である。

本稿は、「九州型石錘の機能に関する一試論 ―福岡市西新町遺跡出土石錘を中心に―」『九州歴史資料館研究論集』46 2021年にその後の調査による新たな知見を加えて、加筆・修正したものである。

## 2 玄界灘における弥生～古墳時代の網漁業についての一試論

～いわゆる「半球形有孔滑石製品」を中心に～

### (1) はじめに

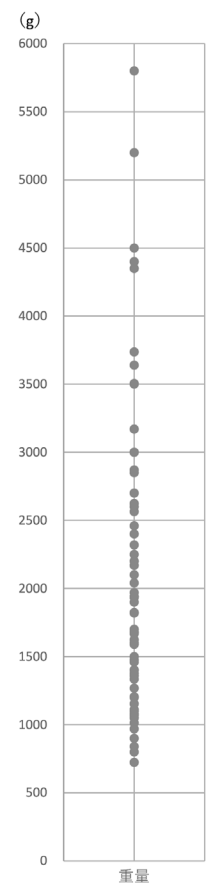
日本列島は四方を海に囲まれ、古くより魚介類などの水産物を重要な食料資源としてきた。海に生息する魚介類は、大きくは暖流や海流の影響により、その内容・質・量等に影響を受けやすい。入り組んだ海岸線を持つ日本列島の場合、湾の開口状況や海底の深度、緯度に応じて多様な状況がみられ、魚介類の組成は場所場所で大きく異なる。

博多湾には、多々良川、御笠川、那珂川、室見川等の河川が流入し、塩分濃度の低い沿岸水と高い外洋水の潮境には、潮汐の影響を受ける水域が生まれる。そのため博多湾内には沿岸部に棲息する魚類のみならず、湾口部に近い沖合にはイワシ類やアジ科、サバ類、ブリ類も回遊するなど、高い生産性を示す水域となっている。なお、これらの魚類は産卵期に浅い沿岸域に接岸する性質を持つものがあり、その習性を利用して捕獲されることも多かったとみられる。さらに河川下流域～河口～内湾には、流れ込む河川により、豊富な栄養分が供給されることでプランクトンなどが繁殖し、アサリやハマグリ、ヤマトシジミといった貝類をはじめ、クロダイやスズキ、ボラなどが来遊しやすい環境が生まれた。

一方、魚類を捕獲するための漁具・漁法は、このような自然環境や特性の異なる海域に対し、各地域の海人が長年の経験と創意工夫を重ねて今日に至ったもので、その在り方は複雑多岐にわたる。対象とする玄界灘沿岸地域の弥生時代前期～古墳時代前期の漁労活動としては、出土漁具から網漁、釣漁、刺突漁、潜水漁、笠漁などの存在が想定されている。その中で、水の抵抗をできるだけ少なくして水中の魚介類をすくい捕るあるいは絡め捕る漁具である網の発明は漁具及び漁労活動の一大画期といえる。網は使用・対象範囲も広く、かつ漁獲量も大きい漁具で、現在の海面漁業では中心的な漁具である。漁網の沈子である各種の土錘や石錘は、その素材の特性から比較的残りやすく、漁労活動の痕跡がみられる遺跡からは土錘や石錘が出土するケースが多い。また、土錘や石錘の形態や重量は多様であることから、対象魚種や対象海域の環境などによって漁網の形や大きさなどが異なることが想定されるが、漁具一式が復元できる程度の良い出土状態を示す事例はほとんどないため、出土資料からの漁網の復元研究は少ない。

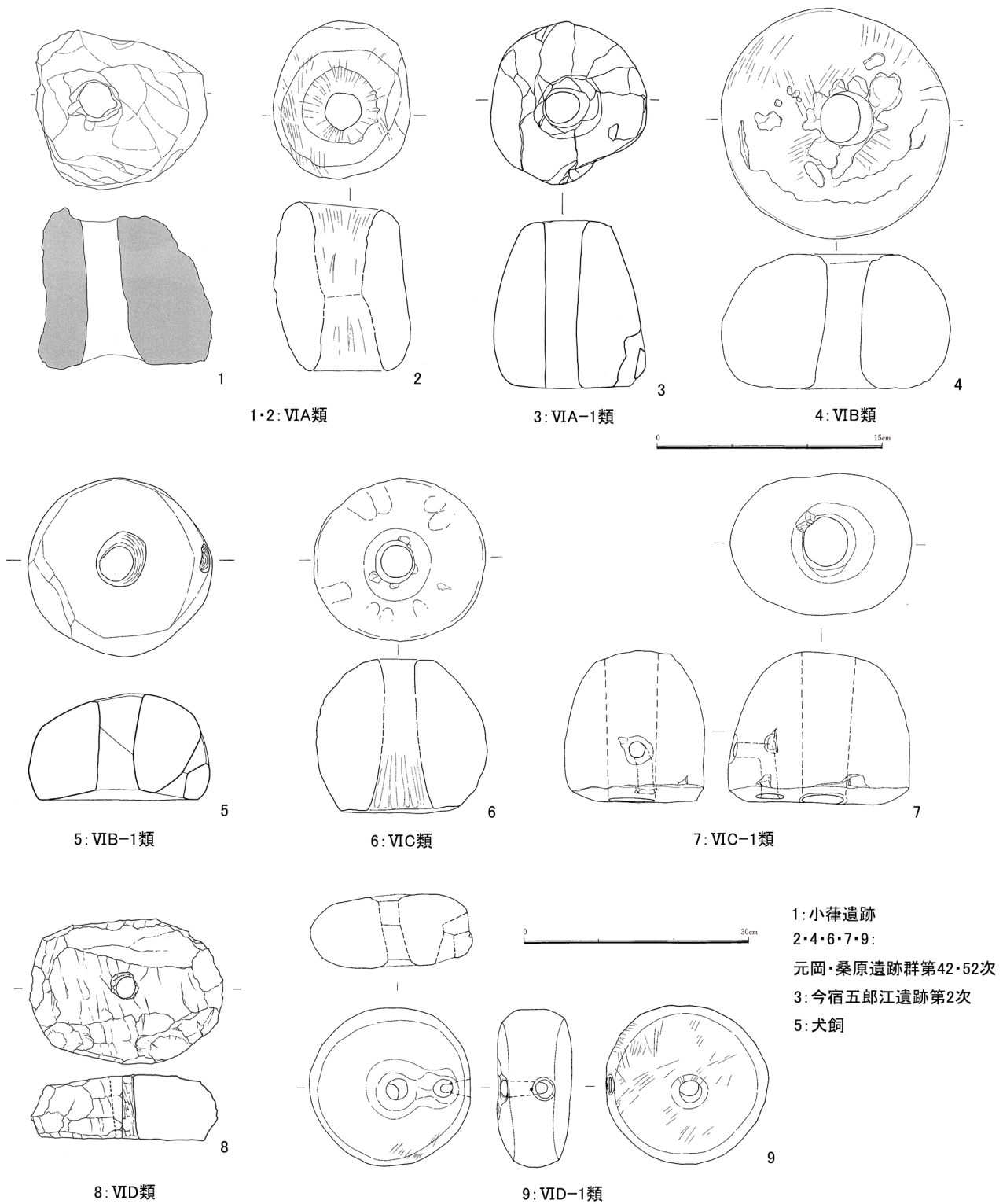
今回検討する半球形有孔滑石製品（以下「本石錘」と略）は、橋口達也氏に命名されたもので（橋口・八幡 1977）、博多湾沿岸地域を中心に分布する。形態は滑石を円形に成形し、中央に円形孔を施した、ドーナツ状を呈する大型石錘で、5 kg を超えるものも存在する（第 55・56 図）。

本石錘は、筆者が玄界灘沿岸域における弥生～古墳時代の漁具を集成する中で、本石錘には主孔と副孔という 2 つの孔が施された例がかなりの割合で認められること、下面が平底に加工され、ほとんどが滑石製であることから、その重量で海底に固定でき、海底にめり込まない一方、下面が平坦であることから海底で少し動くことも想定した石錘であると予測した。さらに、本石錘を用いた漁網は、刺網系漁網とされているが（森本 2015）、民俗例から刺網系漁法の中でも現代の固定式刺網漁に近い形の漁法で使用された可能性を想定できた。そこで、本稿では本石錘につい



第 55 図

半球状有孔滑石製品  
の重量分布



第 56 図 半球状有孔滑石製品の分類 (9 は 1/8、他は 1/4)

て、考古学的な検討と民俗例との比較検討により、使用形態、漁具としての特性・効果等の検討と復元を行った上で、本石錘の出現と展開、社会背景を視野に入れた考察を行っていききたい。

(2) 半球形有孔滑石製品についての考古学的な検討

①半球形有孔滑石製品の先行研究

本石錘について、橋口達也氏は「半球形有孔滑石製品」と名付けた論文の中で、その時点での集合作

業を行い、それらが弥生時代後期終末～古墳時代前期前半に属することを共伴土器から明らかにした。それまで本石錘は小型船の碇という意見もあったが、重量が2 kgを超えるものが多く、碇としては重過ぎること、加えて本石錘と各種石錘との共伴状況から、漁具として位置づけた（橋口・八幡 1977）。

その後、福岡市唐原遺跡の出土漁具の報告を担当した山村信榮氏は、半球形有孔滑石製品を「円形の有孔石錘」と名付け、この「円形の有孔石錘」は弥生時代後期後半の博多湾沿岸地域の遺跡から釣・網用錘である九州型石錘と一緒に出土するが、打欠石錘や棒状土錘を含む土錘、飯蛸壺等との明確な共伴はないことなど、本石錘とその他の漁具との共伴関係を整理した。さらに、本石錘の使用形態について、中央に施された主孔は網の本綱を結び付けたもので、主孔の外側に施された副孔は網の両端に目印となる浮子を結び付けたものではないかと指摘した（山村 1989）。山村氏の検討は共伴関係の整理に加え、管見の限りでは本石錘の主孔と副孔の機能の違いを最初に指摘したものである。

大庭康時氏は、弥生時代中期～後期の大規模な環濠集落である福岡市今宿五郎江遺跡の環濠内から出土した多量の漁具のうち、石錘について報告する中で、本石錘を形態から4つに分類した（大庭康 1991）。その内容は、半球形有孔滑石製品（I類）の中で、大型で丸味を持った円筒状を呈し、幅と高さの対比がほぼ同じものをI a類（本稿VI A類）、基部からふくらみを持って立ち上がり、頭部で丸く収めた、高さよりも幅が広いものもI b類（本稿VI B類）、断面が扁平を呈するものをI c類（本稿VI D類）、最大径が基部にあり、ふくらまずに頭部で丸く収めるものをI d類（本稿VI C類）と細分した（大庭康 1991）。この大庭康時氏の分類は優れた分類であり、本稿でもかなりの部分で参考にした。

平川敬治氏は、近現代の博多湾及び糸島半島、有明海の網漁で用いられた伝統的沈子と弥生～古墳時代の漁網用沈子との比較検討を行った（平川 1990）。本石錘については底部から側面にかけてかなり摩滅していること、下面が平坦で、海底にすわり、かつすべる機能を持つと推測されることから、本石錘を刺網系の碇石（錘）とするという本稿の結論と同様の優れた結論を導き出している（平川 1990）。

力武卓治氏は、福岡市小葎遺跡出土石錘の報告の中で、本石錘について径に比べて高さが高い器台型をVII a類（本稿A類）、径に比べて高さが低いドーナツ形のものをVII b類（本稿の主にD類）に分けた（力武 1997）。なお、力武氏は小型の扁平な環状の滑石製品をVII c類としたが、本石錘とは大きさが異なり、量も少なく、小型の漁網の錘や網錘、紡錘車の可能性もあるため、ここでは対象としていない。

山中英彦氏は、弥生～古墳時代の各種石錘を分類・検討する中で、本石錘を形状から3つに細分した（山中 2007）。山中氏は本石錘の特徴として、滑石が多いが、福岡市比恵遺跡では安山岩製もあること、また橋口氏の指摘の通り碇石ではなく、漁網の始点、終点、変曲点などの漁網の要所に使用された在来系の大形漁網用の石錘であるとした。その使用方法については、石錘中央の主孔に竹や棒を差し込んで海底に固定したと想定した（山中 2007）。

森本幹彦氏は、本石錘は刺網系網漁の錘であること、環状のものと厚みのあるものに2つに分類し、副孔は網の垂下のバランスを保つためのものと指摘した（森本 2019）。

中尾篤志氏は、本石錘について、滑石を整形・製作という点で九州型石錘と共通し、用途としては刺網ないしは延縄の錘とした（中尾 2022）。

以上、本石錘を巡る主な先行研究をみてきたが、現状では本石錘は小型船の碇ではなく、漁網の錘であるとする見解は一致し、副孔は浮子ないしは網の沈子綱のバランスを保つための綱（添綱）を結んだ孔などの意見がある。しかし、先行研究の中で本石錘に焦点を当てた、詳細な分析による考察は少ない。

以下では、漁網錘である半球形有孔滑石製品について、先行研究における分類を参考に想定される用途と機能という視点で改めて分類する。なお、先述したように小葎遺跡VII c類と分類されたドーナツ状

を呈し、重量が300～500g程度の小型品が少数存在するが、本稿では定型化した800g前後以上の大型石錘を「半球形有孔滑石製品」と規定し（第55・56図）、取り扱うこととした。

## ②半球形有孔滑石製品の分類

分類については、先の先行研究、特に本稿では大庭康時氏による今宿五郎江遺跡の分類（大庭康1991）等を参考に半球形有孔滑石製品を大きく4つに分類した。

### VI A類（第56図1～3）

下面径よりも体高が高いか、それとほぼ同じに近い形状で、円筒形を呈する。上下面中央には全体の形状に比べ、大きめの主孔が穿孔されているものが多い。下面は平坦であるが、平坦面は少なく、海底のすべりは少なかったとみられる。

本類は形状から、網の錘としては、その他の類より早く海中に網を降下させることができる。また着底した海底に錘が少しめり込み、網を海底に固定するのに役立ったと推測されるが、海底に泥の堆積が多い箇所では泥にめり込みすぎてしまう可能性がある。

### VI B類（第56図4・5）

下面径より体高は低いが厚みがあり、上面は平坦かそれに近い。体部中央は丸味を帯びるものが多い。VI C類との違いは断面形状と上面が平坦であるかないかであり、第57図の長さ/厚さの散布図でもVI B類とVI C類は法量面では分離できない。また副孔をもつものが少ないことも特徴である。

形状から海底が泥でも砂でも使用可能であると推測されるが、そこが長所であり短所でもある。

### VI C類（第56図6・7）

底径ないしはそのすぐ上が最大径を測り、上面はほぼ面を形成せず、丸く収めており、断面が略三角形を呈するものである。下面は平坦で、上面に向かって幅を減じることから、主孔と副孔にそれぞれ漁網の綱を結んだ場合、両者の位置が上下関係を持つことから、両者が干渉することを避けることが可能である。このことは、本類が副孔をもつものの割合が非常に高いことにも表れている。このようにその形態から優れた機能が想定されることから、今回VI B類から分離した。

### VI D類（第56図8・9）

体高が低く、断面が扁平なもので、上面下面ともに平坦である。扁平なので、円筒形のVI A類とは異なり海底が泥であっても、泥にめり込むことは少なく、その場合の網揚げはVI A類よりは揚げやすかったと推測される。加えて、海底が砂であれば、着底面積が広いことから、砂にもめり込むことが少ない。一方、平坦面が広いため、いち早く網入れしたり、海底に固定させるという面では他の類より効果がやや弱いとみられる。なお、流し網・浮網系の漁網で使用した場合、下面が平坦であることから優れた効果を果たした可能性がある。

また、上記の形状や法量による4分類に加え、副孔があるものを「1」として区分した。

以上の分類をもとに、玄界灘沿岸地域の福岡県・佐賀県・長崎県の半球形有孔滑石製品の出土遺跡を集成し、上記の分類を反映させたものが第2表である。

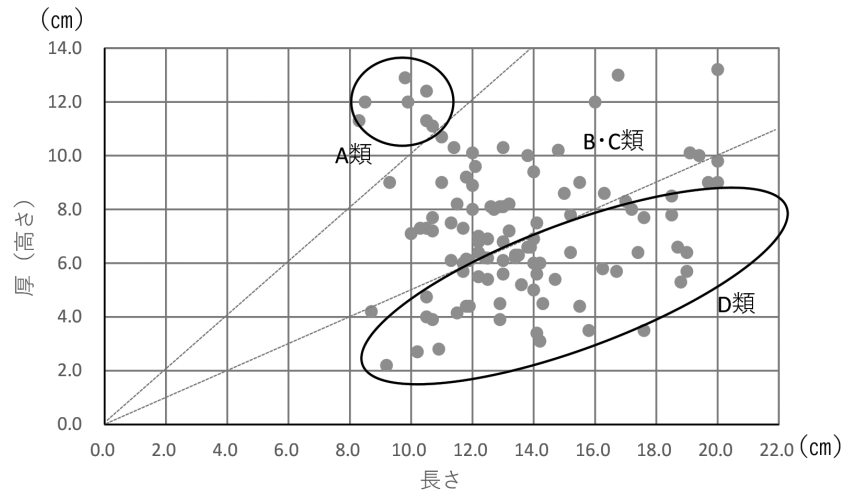
## ③分類による分析結果

半球形有孔滑石製品の材質からみた特徴について

本石錘の材質は9割近くが滑石製であり、その他は砂岩製・花崗岩製がそれぞれ約4%、あとは安山岩製、凝灰岩製、石灰岩製がごく少量存在するが、滑石製が圧倒的である。

博多湾西部の福岡市西区今津の毘沙門山付近に片岩系滑石の露頭が存在し、ここで採取した滑石を

素材とした滑石製沈子を用いたカナギ（イカナゴ）を対象とした曳網系漁網が近年まで残っていた（平川 1990）。この曳網系漁網は潟地の底を曳くため、滑りやすい滑石という沈子の材質が効果を発揮した。この滑石製沈子を使用した今津浜崎の漁師は、休漁期など漁網の手入れ時期に毘沙門山の滑石露頭から滑石を拾い、漁網に合わせて数種



第 57 図 半球状有孔滑石製品法量散布図

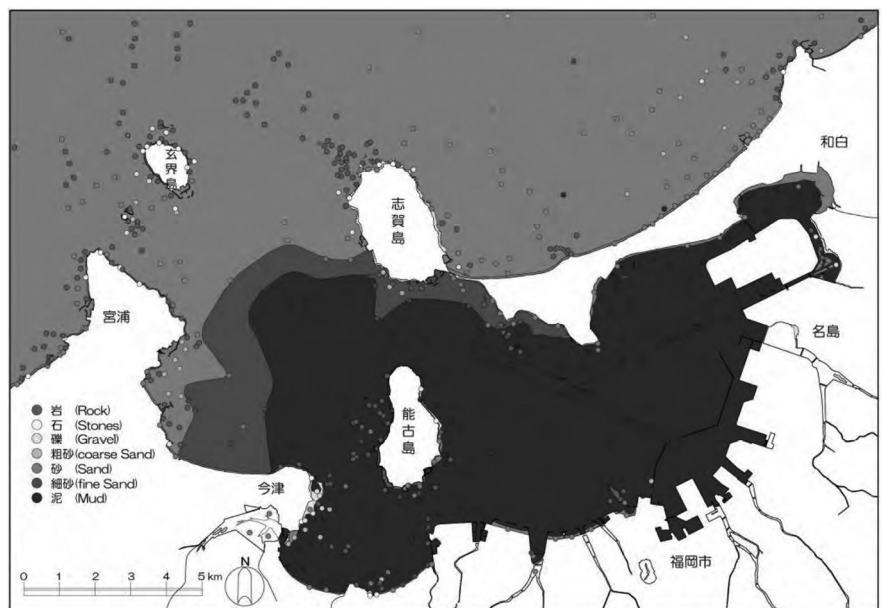
の沈子を製作した。一方、滑石は非常に軟らかく加工しやすい反面、使用による摩滅が顕著にみられるため、2シーズンで使用不可能な状態になり、常に新しいものを補給しなければならないとされる（平川 1990）。

石材同定分析は行っていないものの、筆者の観察では弥生～古墳時代の博多湾西部の本石錘の多くは、毘沙門山付近の滑石を使用したと予測される。集落内では本石錘製作時の剥片の存在が報告されておらず、未製品も非常に少ないことから、民俗例と同じく、直接船などを用いて、毘沙門山等の産地で滑石を採取し、現地でおおよその形まで粗加工を行い、集落に運搬し、自らの集落内で最終加工を行い自給生産したものとみられる。なお、博多湾東部出土の本石錘は肉眼観察であるが、滑石製でも毘沙門山産と類似する石質は少なく、毘沙門山とは別の博多湾東部付近にある産地を想定する必要がある。

博多湾の海底の底質は流れ込む多くの河川の堆積作用で形成された泥地がほとんどであるが（第 58 図）、本石錘下面は平坦で、ほとんど滑石製であるため、すべりやすく泥にめり込むことが少なかったと想定されることから、古代博多湾で漁労活動に従事した人々もこれらの滑石を素材とする利点と本石錘の形状の特性を理解し使用していたと考えられる。

各分類の時期別割合

各分類の割合を検討するにあたって、全時期を通した割合を第 59 図の円グラフ、弥生時代前期～中期前半、古墳時代中期前半のものを除く時期別のものを第 60 図の棒グラフに示した。存続時期は弥生時代前期後半～古墳時代中期前半に絞られ、先に検討した垂下式の釣用錘である九州型石錘 I 類（大庭 2021）に比べ、時期幅が広い。なお、本石



資料：海図「福岡湾」（平成 20 年 11 月，海上保安庁）  
第 58 図 博多湾底質の土質分布（福岡市環境局環境監理部 2016 より引用）

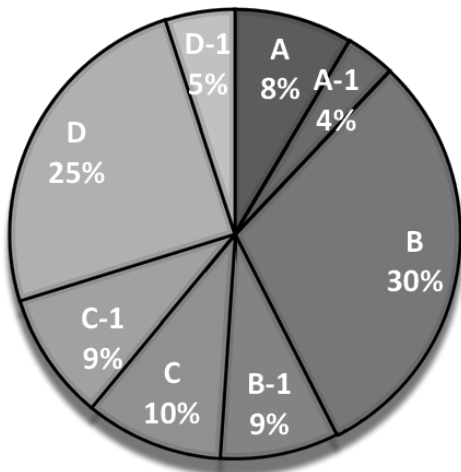
遺跡番号	個別番号	遺跡名	分類	出土遺構	石材	法量				孔径		時期	備考		
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	主孔(mm)	副孔(mm)				
1	1	鹿部田遺跡1次	VIA類	住居1 柱穴	滑石	8.3		11.3				弥生後期前半	半分欠損		
2	2	夜白・三代地区遺跡群	VIA類	第2トレ	滑石	9.3		9.0	(563.0)	27.0			1/2欠損、孔内つるつる、加工・使用痕不明		
	3		VIB類か	包含層	滑石	(8.8)	(12.3)	(3.6)	(348.9)	33.0			大きく欠損、孔内工具痕		
3	4	人丸古墳	VIB類	箱式石棺蓋石直上	滑石	16.3		8.6	3,737.0	30.0		古墳中期前半	孔内つるつるで、工具痕残る、底面摩滅。海底で曳かれたか。上面網のあたり痕あり。		
	5		VIB類	包含層	滑石	13.5		6.3	(1,423.0)	15.0		不明	孔はノミ状工具による、孔内はつるつる気味、側面に不定方向のノミ痕残る		
4	6	三代須川3号墳	VIC-1類	墳丘内	滑石	11.7		7.3	1,377.0	18.0	9.0	弥生後期?	主孔・副孔内つるつる、底面使用による荒れか、側面下部5mm前後の先端が丸いノミ状工具によるケズリあり		
	7		VID-1類	墳丘内	滑石	13.6		5.2	(1,508.0)	16.0	6.0	弥生後期?	主孔工具痕、副孔つるつる、底面剥離、側面横方向の工具痕、全体被熱で何かに転用		
5	8	三苦永浦遺跡	VIB類	K地区SC01		(12.3)	(12.3)	(3.8)				弥生中期後半～末	大きく欠損		
6	9	唐原遺跡	VID類	SC-10	滑石	19.0	14.3	6.4	2870.0	20.0			古墳前期前半		
	10		VID類	SC-10	滑石	18.0	(14.0)	5.8	1620.0	20.0			古墳前期前半	欠損	
	11		VID類	SC-10	滑石	15.2	13.4	6.4	2170.0	20.0			古墳前期前半		
	12		VIB類	SC-37	滑石	19.9	17.0	(8.0)	3640.0	30.0			弥生後期後半以降	上下面は丸味を帯びる	
	13		VID類	SC-41	滑石	14.3	13.6	4.5	1360.0	20.0			弥生後期後半		
	14		VID類	SC-41	滑石	15.5	13.8	4.4	1460.0	18.0			弥生後期後半		
	15		VIB類	SC-62	滑石	13.4	12.8	6.2		18.0			弥生後期後半?		
	16		VIA類	SC-74	滑石	15.8	(12.0)	15.7		29.0			古墳前期前半	欠損、上面にも穿孔途中の孔、十字方向に穿孔で唯一	
	17		VIB類	SK-103	滑石	15.0	15.4	8.6	3170.0	26.0					
	18		VIC-1類	SR-93	滑石	17.6	16.6	7.7	3000.0	27.0	6.0			弥生後期後半	
19	VIB類	包含層D-XII区	滑石	15.2	14.8	7.8	2565.0	24.0							
7	20	顕孝寺遺跡第1次	VIB類	SC525	滑石	17.4	12.8	6.4		15.0		弥生前期末～中期前半か	孔は石製工具による両面穿孔か		
8	21	吉塚遺跡第1次	VIC-1類	溝365	滑石	12.2	11.3	6.4		22.0	10.0		古墳前期前半か		
	22		VIB-1類	3地点	滑石	10.7		7.2		28.0	7.0		弥生後期前半か	主孔は整状工具痕、副孔は回転工具痕、器表に顕著な摩滅なし。	
9	23	吉塚遺跡群第13次	IVC-1類	SD2108		13.2	12.0	7.2		19.0	5.0		弥生後期～古墳前期か		
	24		IVD-1類	SD2108		10.2	9.9	2.7		25.0	5.0		弥生後期～古墳前期か		
10	25	大岡	VIB-1類			12.2		7.0		23.0	3.0		弥生後期終末		
11	26	雀居遺跡第12次	VID類	第Ⅲ面遺構検出面	滑石	12.9		4.5		17.5			弥生前期前半～中期初頭	半分欠損	
12	27	雀居遺跡第18次	VID類	SX678	滑石	12.9	11.0	3.9	723.6	19.0			弥生中期初頭	孔は石製工具による両面穿孔か、表面被熱、磨をそのまま使用、底面少し摩滅	
13	28	板付遺跡	VIA類	環濠(第二区)	滑石	11.00	12.00	9.0	2460.0	16.0			弥生前期～古墳前期	未使用品、未使用であるため、底面も含めて全体的にケズリ痕あり。孔は未貫通。	
14	29	那珂遺跡第14次	VID類	第49号祭祀土壇	滑石片岩	9.2	9.2	2.2		20.0			弥生後期初頭		
	30		VID類	第49号祭祀土壇	滑石片岩	(10.2)	5.0	4.2					弥生後期初頭	未製品か、半分欠損	
15	31	比恵遺跡第18次	VIC類	SE-02	滑石	(8.0)	9.7	4.4		21.0			弥生後期～前期か	下半部欠損	
	32		VIC類か	包含層	滑石	14.7		(2.6)		24.5			弥生中期後半か	上半部欠損	
16	33	比恵遺跡群第24次	VIC類	包含層	滑石	12.5		6.9		17.0			弥生中期後半か		
	34		VIC-1類	包含層	滑石	12.7		(4.8)		14.5	5.0		弥生中期後半か	上半部欠損	
	35		VIC-1類	包含層	滑石	10.5		7.3		20.1	6.5		弥生中期後半か		
	36		VIC-1類	包含層	滑石	10.7		7.7		24.0	7.0		弥生中期後半か		
17	37	比恵遺跡群第31次	VIB類か	SE-18	滑石片岩	(10.0)	(9.3)	(2.4)		20.0			弥生時代前半	下半部欠損	
18	38	比恵遺跡第40・42次	VIC-1類	SD-01 上層	滑石	13.2	11.5	8.2	1590.0	20.0			弥生後期前半		
	39		VIA-1類	SD-01 上層	滑石	12.1	11.9	9.6	1824.0	13.0			弥生後期前半		
19	40	比恵遺跡群第41次	VIB-1類	SD41	片岩系	11.7	10.6	6.0	(1,013.0)	13.0	10.0		弥生後期前半	円礫をそのまま使用、主孔上面窪む、孔内つるつる、下面には未貫通の孔1あり、孔を開ける際に割れてそのまま転用	
20	41	比恵遺跡第60次	VIB類	SC-2	安山岩	13.0		5.6		14.0			弥生後期前半		
21	42	比恵遺跡第115次	VID類	SD-07	滑石	14.0		5.0	(640.0)	25.0			古墳前期前半か?	半分欠損	
22	43	西新町遺跡第6次	VID類	SC05		20.0	16.2	13.2	4350.0	18.0			弥生後期終末	加工少ない	
23	44	西新町遺跡第8次	VI類再加工	SX39	滑石	(5.2)	(3.3)	(1.7)	(248.5)	6.0			弥生中期後半	VI類の再加工、副孔が残る	
24	45	西新町遺跡第9次	VID類か	SC65	滑石	(4.8)	(7.0)	(3.2)	1500.0	(4.2)	8.0		弥生中期後半	大きく欠損、側面に未貫通の孔あり	
25	46	西新町遺跡第14次	VIB-1類	包含層	滑石	10.3		7.3	(556.5)	20.0	9.0			半分欠損、欠損面を研磨のため再加工か	
26	47	西新町遺跡第16次	VIC類	SX019		12.9	12.9	8.1		34.0			弥生中期中葉～後期初頭か		
27	48	西新町遺跡第19次	VIB-1類	SK18	滑石	14.0	14.0	6.0		20.0	4.0			弥生中期後半	
28	49	西新町遺跡第20次	VI-1類か		滑石	(3.7)	(1.7)	1.4		8.0			古墳前期か	破片、VI類ではない可能性	
	50		VI-1類か		滑石	(5.3)	(5.6)	(0.8)		5.0			古墳前期か	破片、VI類ではない可能性	
29	30	有田 西福岡中学校所蔵品	VIB-1類			19.4		10.0	5800.0	30.0	8.0			超大型品、表面にはノミ痕あり	
30	31	姪浜浦山弁天町	VIB-1類			12.0		8.0	1820.0	23.0	5.0			1935年出土、九州大学所蔵	
31	32	姪浜遺跡3次	VIB類	IKSC105	滑石	(10.4)		(5.5)		(55.0)			弥生後期前半		
	33		VID類	表土	片岩	11.6	11.9	4.4		28.0			弥生後期後半か	3/4欠損	
32	34	青木遺跡	VID-1類	表土	滑石?	18.2	18.5	8.5		38.0	4.5		弥生後期後半か		
	35		VIB類	EH・EN-58G		17.2	13.4	8.0		24.0			弥生後期後半		
33	36	宮の前遺跡E地点	VIB類	EH・EN-58G		14.1	11.0	5.6		18.0			弥生後期後半	孔は方形、側面欠損か	
	37		VIB類	F地点2号住居址	滑石	(9.8)	(9.8)	5.1	2000.0	20.0	10.0		弥生後期終末	半分欠損	
35	38	湯納遺跡	VIB類		滑石	(11.0)	(6.0)	(4.7)	(447.9)	18.0			古墳前期か	再加工品、使用時に半分に分かれたもの	
	39		VIB類			16.5	(6.6)	11.6					古墳前期か	半分以下欠損、研磨痕顕著	
36	40	野方遺跡第1次調査	VIB類	A環濠内		14.0		9.4		20.0			弥生後期後半～終末	1/3欠損、ケズリ痕顕著	
37	41	野方久保遺跡第1次	VIC類	BXSD-20		13.7	13.7	9.2		20.0			弥生後期前半～古墳前期前半		
38	42	長垂大谷遺跡第1次	VIB-1類	SB-01	滑石	16.0	14.0	12.0	2,850.0	36.0	10.0		弥生後期終末	底面は海底面との擦れで3cm程減る、著しい使用痕	
39	43	今山遺跡第8次	VID類	礫層07	滑石	20.0	16.3	9.8	4,400.0	4.0			弥生前期後半	自然礫をそのまま使用か、両側穿孔、未貫通の孔あり、孔の両側を縛った痕跡あり	
	44		VIB-1類	C11区礫層	滑石	19.1	16.8	10.1	3,500.0	24.0	5.0		弥生前期後半	自然礫をそのまま使用か、主孔同土網で縛った痕跡あり	
40	45	大塚遺跡第18次	VIB類	SX-011	滑石	20.0		9.0	3650.0	29.0			弥生後期終末	1/3欠損	
41	46	今宿五郎江遺跡(昭和59年度)	VIB類	環濠 II層	滑石	14.2		6.0	840.0	25.0	10.0		弥生後期前半～中頃	半分欠損	
	47		VID類	表採		11.8		4.4	1050.0	28.0					

第2表 半球状有孔滑石製品一覧表①

遺跡番号	個別番号	遺跡名	分類	出土遺構	石材	法量				孔径		時期	備考
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	主孔 (mm)	副孔 (mm)		
42	48	今宿五郎江遺跡(昭和61年度調査)	VIA-1類	SD-100	滑石	10.5	12.3	12.4	2320.0	17.0	8.0	弥生中期後半～後期後半	
	49		VIB類	SD-100	滑石	(11.0)	(5.9)	(4.9)	470.0	(26.0)		弥生中期後半～後期後半	半分以上欠損、被熱痕跡
	50		VIA類	SD-100	滑石	10.1	(5.0)	10.5	740.0	(15.0)		弥生中期後半～後期後半	半分以上欠損
	51		VIB-1類	SD-100	滑石	11.3	11.2	7.5	1200.0	20.0	8.0	弥生中期後半～後期後半	
	52		VIA-1類	SD-100	滑石	10.7	10.2	11.1	1600.0	19.0	11.0	弥生中期後半～後期後半	
	53		VID-1類	SD-100	滑石	10.5	14.3	4.0	1080.0	24.0		弥生中期後半～後期後半	副孔未貫通、未成品か
42	54	今宿五郎江遺跡(昭和61年度調査)	VIA類	SD-100	滑石	10.7	14.6	3.9	610.0			弥生中期後半～後期後半	未製品
	55		VIC類	SD-100	滑石	16.3	16.0	5.8	1935.0	23.0		弥生中期後半～後期後半	穿孔は一方から
	56		VIB類	SD-100	滑石	16.2	(11.5)	7.8	1070.0	20.0		弥生中期後半～後期後半	半分近く欠損
	57		VID類	SD-100		13.4	13.5	6.3	1940.0	24.0		弥生中期後半～後期後半	
43	58	今宿五郎江遺跡第3次	VID-1類	SD-100	滑石	(11.4)	(5.4)	2.4	250.0	18.0	12.0	弥生中期後半～後期後半	大きく欠損
	59		VID類	SD-02	片岩	16.6		5.5	2,400.0	25.0		弥生後期後半	
44	60	今宿五郎江遺跡第4次	VIC-1類	包含層上層		12.8		7.7		30.0	9.0	弥生中期後半か後期後半か	
	61		VIC類	包含層上層		(11.9)		8.4	(669.9)	22.0		弥生中期後半か後期後半か	半分欠損
45	62	今宿五郎江遺跡第5次	VIC類か	SD-01 21層	滑石	(6.9)	13.5	9.5	922.3	21.0		弥生後期初頭	欠損、方形
	63		VIA類	SD-01 9層	滑石	8.5	12.0	12.0	1678.81	18.0		弥生後期初頭	
	64		VIA-1類	SD-01 10層	滑石	(10.3)	12.0	9.8	1153.9	23.0	6.0	弥生後期初頭	
	65		VIB類	SD-01 10層	滑石	13.0	13.0	6.1	1624.6	21.0		弥生後期初頭	
46	66	今宿五郎江遺跡第8次	VID類	溝6	滑石	15.6		(3.5)	(600.0)	32.0		弥生後期終末	半分欠損、断面扁平
47	67	今宿五郎江遺跡第9次	VIC-1類	流路449 G35-4713上部砂礫	滑石	10.0	9.8	7.1	1270.0	10.0	7.0	弥生後期か?	
48	68	今宿五郎江遺跡第12次	VIB類	SD-01(A) 1区	滑石	(6.8)		(4.8)	194.5	26.0		弥生中期末～後期前半	2/3欠損
	69		VID類	SD-01(A) 1区	滑石	11.5		(3.4)	183.1	23.0		弥生中期末～後期前半	下半部欠損
	70		VID類	SD-01壁面	滑石	(13.0)		(4.5)	532.5	21.0		弥生後期後半	2/3欠損
49	71	今宿五郎江遺跡第10次	VIB類	SD-427 18層	未製品滑石	18.8	17.4	5.3	2250.0	18.0		弥生後期後半	半分欠損
	72		VIC類	SD-427 21層	蛇紋岩	12.6		8.1	1013.0	30.0		弥生後期後半	下半部欠損
	73		VIB類	SD-427 16層	砂岩	17.8	(8.3)	6.0	1474.0	24.0		弥生後期後半	一部欠損
50	74	今宿五郎江遺跡第15次	VIC-1類	SD-120 2層	花崗岩	19.7	21.1	9.0	5200.0	18.0	8.0	弥生後期後半	
51	75	谷遺跡3次	VID類	IV区灰色砂下	滑石	17.6	15.6	3.5	1,402.0	26.0		弥生後期後半	
52	76	飯氏遺跡第3次	VIB類	31号土壇	滑石	14.0		(8.3)		25.0		古墳時代前期後半	半分欠損
	77		VIA類	住居床面	滑石	10.9	3.4	2.8	1036.0	23.0		弥生中期後半～後期前半	上面一部欠損
	78		VIA類	住居床面 F-6	滑石	11.0	10.2	10.7	1227.7	23.0		弥生中期後半～後期前半	1/3欠損
	79		VIB類	G-12	滑石	11.8	10.2	6.2	1205.6	25.0		弥生中期後半～後期前半	
	80		VIB類	F-2	滑石	12.5	11.5	6.2	1335.6	25.0		弥生中期後半～後期後半	ほとんど研磨なし
	81		VIB類		蛇紋岩	12.2	13.6	5.5	2623.7	13.0		弥生中期後半～後期後半	凹縁を加工
54	82	青木遺跡	VIB類		滑石	12.7	14.0	8.0	3505.0	19.0		弥生中期後半～後期後半	上下面を平たく研磨
	83		VID-1類	表土	滑石	11.9	11.6	4.4		26.0		弥生後期後半か	
55	84	元岡・桑原遺跡群第3次	VID類	表土	滑石	18.5	18.2	8.5		40.0	4.5	弥生後期後半か	
	85		VID類	SX-009	滑石	15.8		3.5		13.0		弥生中期後半	上面・側面に研磨痕
	86		VID類	SX-009	滑石	12.4		6.2		13.0		弥生中期後半	
56	87	元岡・桑原遺跡群第42次	VIA類	II区 Z-2	滑石	12.0		10.1	1500.0	28.0		弥生中期後半～古墳前期	1/3欠損、孔には紐ズレ痕あり
	88		VID類	II区 X-3	滑石	11.5		4.2	900.0	28.5		弥生中期後半～古墳前期	裏面は丁寧加工
	89		VIA類か	II区 Z-3	滑石	13.9		6.6	804.0	(19.0)		弥生中期後半～古墳前期	半分以上欠損
	90		VIC-1類	II区 Y-3	滑石	9.9	10.2	12.0	1700.0	32.0	10.0	弥生中期後半～古墳前期	
	91		VID-1類	II区 W-5	花崗岩	10.5		4.8		10.0	5.0	弥生中期後半～古墳前期	
	92		VID-1類	II区	滑石	8.7		4.2	(296.0)	30.0	4.5	弥生中期後半～古墳前期	1/2欠損、ケズリ後研磨
	93		VIC類	II区 X-3	滑石	13.0	13.1	10.3	2100.0	26.0		弥生中期後半～古墳前期	
	94		VIB類	II区 Y-3	蛇紋岩	14.2	10.3	3.1	800.0	14.0		弥生中期後半～古墳前期	
	95		VID類	II区 Y-2	花崗岩	13.8	12.0	6.6	1100.0	42.4		弥生中期後半～古墳前期	
	96		VIB類	II区 Y-2	滑石	14.8	13.8	10.2	2300.0	20.0		弥生中期後半～古墳前期	一部欠損
	97		VID類	II区 Z-2	滑石	14.0	16.0	6.9	3000.0	28.0		弥生中期後半～古墳前期	
57	98	元岡・桑原遺跡群第42-52次	VIA類	II区 U-8-S	滑石	10.5	9.1	11.3	1269.0	23.0		弥生中期後半～古墳前期	
	99		VIC類	II区 U-8-S	滑石	11.4	10.9	10.3	1475.0	21.0		弥生中期後半～古墳前期	
	100		VIB類	II区 U-8-S	滑石	15.5		9.0	2700.0	30.0		弥生中期後半～古墳前期	
	101		VIB類	II区 U-8-S	滑石	15.8	12.0	(7.3)	1944.0	31.0		弥生中期後半～古墳前期	下半部欠損
	102		VIB類	II区 X-7	滑石	11.9		6.1	1112.0	28.0		弥生中期後半～古墳前期	全体に擦過や条痕
	103		VIA類	II区 W-7-N	(10.0)		(9.0)	507.5	(32.0)			弥生中期後半～古墳前期	半分以上欠損
	104		VIB類	II区 X-7	石灰岩	16.8	17.3	13.0	4500.0	30.0		弥生中期後半～古墳前期	未製品か
58	105	元岡・桑原遺跡群第42次	VIA類	II区 SD-02	滑石	9.8		12.9	1017.0	(18.0)		弥生中期後半～古墳前期	半分欠損
	106		VIB-1類	SD-01	滑石	13.0		6.8	1008.0	20.0	4.0	弥生中期後半～古墳前期	1/3欠損
	107		VIC類	SD-01	滑石	12.0		8.9	1900.0	22.0		弥生中期後半～古墳前期	一部欠損
	108		VID類	SD-01	滑石	14.7		5.4	846.0	36.0		弥生中期後半～古墳前期	半分欠損
	109		VID類	SD-01 腐葉土	滑石	14.1	12.3	3.4	970.0	24.0		弥生中期後半～古墳前期	
59	110	沼リュウサキ遺跡	VIC類	II区5号住居跡		12.2		6.8		16.0		弥生後期後半	
	111		VIB類	II区5号住居跡		11.3		6.1		17.0		弥生後期後半	
	112		VIC類	II区5号住居跡		11.7		5.7		20.0		弥生後期後半	
	113		VIC類	II区5号住居跡		12.5		5.4		19.0		弥生後期後半	
60	114	潤古屋敷	VIB類			11.8		9.2	1940.0	21.0		弥生後期後半	表面にはノミ痕あり
61	115	潤地頭給遺跡II(第四区)	VID類	大溝	砂岩	18.7	19.2	6.6	2200.0	42.0		弥生中期後半	
62	116	一の町遺跡第3次	VIB類	BB1-2 遺物包含層上・下位	泥質片岩	14.0		(5.0)		31.0		弥生中期中頃～古墳前期	下半部欠損
63	117	新町遺跡	VID類	2号石組	砂岩	19.0		5.7	310.0	50.0		弥生後期～古墳前期	大部分欠損
64	118	御床松原遺跡	VIB類	54号住居跡 床面	花崗岩	14.1	13.8	7.5	1668.0	20.0		古墳前期	
	119		VID類か	包含層 D6-3 層	結晶片岩	18.0				20.0			下半部大きく欠損
	120		VID類か	包含層	砂岩	23.0				20.0			下半部大きく欠損
65	121	深江井牟田遺跡	VID類	I区	滑石	16.7	11.7	5.7	2040.0	31.0		弥生中期後半～後期終末	16と平面形近い
	122		VIB類	I区	砂岩	17.0	11.7	8.3	2200.0	37.0		弥生中期後半～後期終末	15と平面形近い
	123		VIC類	I区	滑石	13.0	13.0	8.1	1970.0	27.0		弥生中期後半～後期終末	
	124		VID類	I区	滑石	18.5	14.6	7.8	2600.0	25.0		弥生中期後半～後期終末	
66	125	石崎曲田遺跡	VIB類	黒色包含層	滑石	12.2	68.0		234.0	25.0		弥生後期か	大部分欠損、全体的に研磨
67	126	原の辻遺跡(平成5年度調査)	VID類			12.7		1.2		19.0			半分欠損、かなり薄い
68	127	原の辻遺跡原地区(平成8年度調査)	VIB類	A5区包含層3層	凝灰岩	(9.6)		4.5	(250.0)	35.0		弥生後期終末	半分以上欠損、床面平坦
69	128	原の辻遺跡(原地区7区平成10・11年度調査)	VIB類	原7区 4a層	凝灰岩	13.8		10.0	1679.5	30.0		古墳前期前半	
70	129	原の辻遺跡	VIB類	不條地区D2区 SR9		(23.0)		(13.2)		60.0		不明	半分欠損
71	130	渡島中学校所蔵品	VIC-1類		滑石	11.5		8.2		21.0	9.0		

第2表 半球状有孔滑石製品一覧表②

各型式別割合（全時期）



第 59 図 各型式の割合

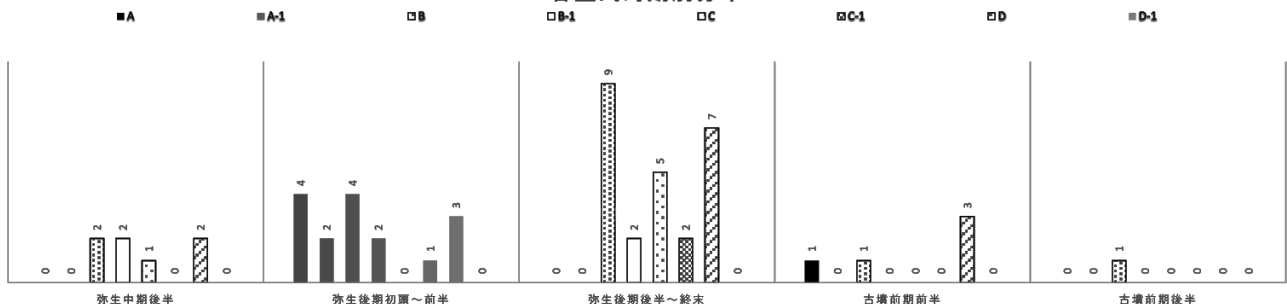
重要である。一方、VI B 類の中で副孔をもつものは 3 割以下と低いことは、VI B 類の特徴を示している。

次に時期別各型式の割合は、時期が確実なものみに絞ったため、対象資料数は非常に少なくなってしまうものの、包含層出土ではあるが福岡市西区今山遺跡第 8 次弥生礫層出土例を初現とする弥生時代前期後半～中期前半に出現したとみられる。この今山遺跡第 8 次調査例は VI D 類と VI C-1 類の各 1 点が認められるが(第 61 図)、いずれも下面が平坦ではなく、自然石に孔を穿ったものである。このうち、VI D 類(第 62 図 1)は孔径 4 mm と重量が 4,400 kg を測る割には孔径が小さく、石製穿孔具によるすり鉢状の両面穿孔を施す。一方、VI C-1 類のもの(第 62 図 2)は自然石をそのまま利用しているが、主孔と副孔が VI D 類よりもシャープに穿たれている。また主孔の一方には綱を横方向に縛った痕跡が明瞭に認められ、後述する弥生時代中期後半～後期前半の本石錘の主孔は縦方向に綱を装着したとみられることから、中期後半以降のものと同様の綱で使用されたものではないと判断される。なお、この自然石を加工した定型化前の本石錘は、中期初頭では雀居遺跡、中期後半では西新町遺跡、後期前半では比恵遺跡などで量は少ないが存在する。

弥生時代中期後半には、VI B 類 4 点、VI C 類 1 点、VI D 類 2 点が確認され、鉄製のノミ状工具による表面の連続加工と穿孔による定型化された本石錘が出現し、副孔も B 類で 2 点認められる。分布は、博多湾東部では三苦永浦遺跡、西部では西新町遺跡、今宿五郎江遺跡、小葎遺跡、元岡・桑原遺跡群など、弥生時代中期後半、博多湾東西に本石錘を用いた網漁が普及したことが確認できる。

続く後期初頭～前半になると、対象資料数が急激に増える。VI A 類は分布の東限にあたる古賀市鹿部田淵遺跡、比恵遺跡、今宿五郎江遺跡、VI B 類は比恵遺跡、姪浜遺跡、今宿五郎江遺跡、VI D 類は

各型式時期別分布



第 60 図 各型式の時期別割合

那珂遺跡、今宿五郎江遺跡と博多湾を中心に東側の古賀市域まで分布域が拡大し、本石錘を用いた網漁の拡大が窺われる。加えて、副孔をもつVI A-1類が比恵遺跡と今宿五郎江遺跡、VI C-1類が比恵遺跡で出土するが、副孔を持つものが比恵遺跡にまとまることは注目される。

比恵遺跡は那珂川と比恵川に挟まれた台地上に立地し、弥生時代中期後半～古墳時代前期の奴国の中核となる大規模集落で、集落内には大溝が縦横に走り、小船を係留する引き込み施設周辺には高床建物の倉庫群が発見されるなど、地域間交流の一大拠点であった。やや内陸部にあたる比恵遺跡での本石錘出土から、比恵遺跡の人々は博多湾に出漁し、本石錘を用いた網漁を行っていたことが明らかであると同時に、副孔を持つ本石錘がまとまって出土することから、副孔を持つ石錘を用いた新たな漁網をこの集団が創出した可能性がある。このことは、中期後半以降集落が急速に拡大する比恵遺跡の集団が、需要に高まった水産物を効果的に捕獲するため、同時期に広く普及が始まる鉄器を用いて、前代以来の伝統的な漁具の改良を重ねた結果、副孔をもつ新たな漁網を創出したと推測されよう。

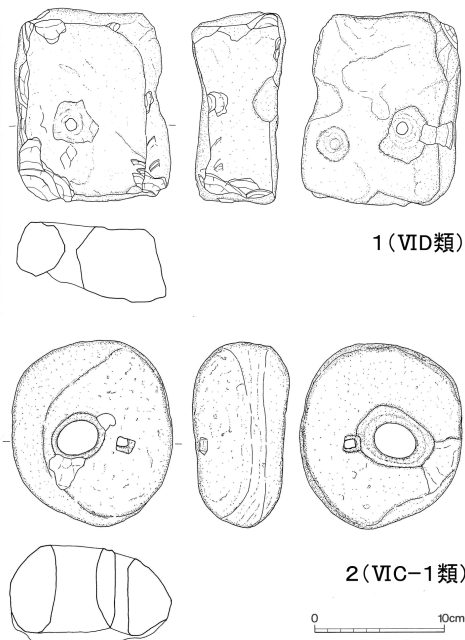
後期後半～終末は、博多湾沿岸地域全域で本石錘が最も出土する。また今宿五郎江遺跡第15次調査では5kgを越す超大型品もみられるなど(第56図9)、本石錘を用いた網漁が盛行するとともに、網も大型化したとみられる。型式別にみると、この時期VI A類はなく、VI B類は博多湾西部の野方遺跡、宮の前遺跡、長垂大谷遺跡、大塚遺跡、今宿五郎江遺跡、泊リュウサキ遺跡等及び博多湾東部の博多区犬飼、長崎県原の辻遺跡まで分布域が拡大する。VI C類は今宿五郎江遺跡や泊リュウサキ遺跡に加え、この時期から集落の形成が始まる海浜集落である博多湾東部の唐原遺跡、VI D類は西新町遺跡と今宿五郎江遺跡、谷遺跡にみられる。

古墳時代前期前半になると、本石錘は急激に減少することから、本石錘を用いた網漁が急激に衰退したとみられる。型式別では、VI A類が唐原遺跡1点、VI B類が原の辻遺跡1点、VI D類が唐原遺跡3点と、それまで分布の中心であった博多湾西部で大幅に減少し、前期後半になると飯氏遺跡でVI B類が1点みられるのみになる。古墳時代中期以降の事例は人丸古墳の主体部箱式石棺蓋石上での副葬例(VI B類)のみである(第68図)。

#### 主孔と副孔の法量比較

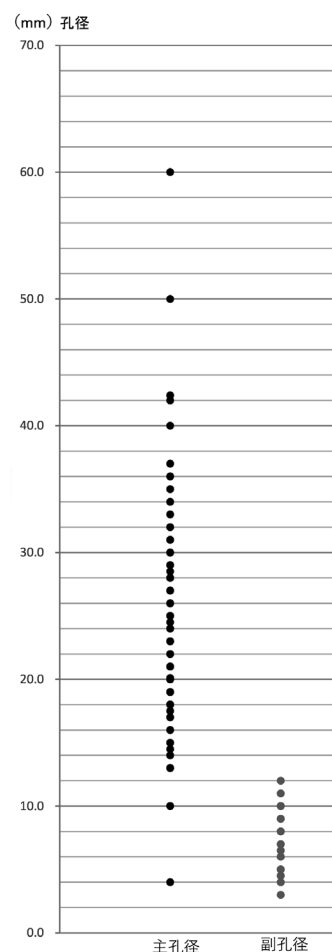
主孔と副孔との法量比較のため、両者の孔径を並べたのが、第62図である。この図をみると、主孔の孔径は10～60mmまでであるが、20～30mm間に最も集中する。一方、副孔の孔径は3～12mmと、先の主孔の孔径とはほぼ重ならない法量幅を示す。

この孔径の状況について、真鍋篤行氏による弥生時代～中世までの

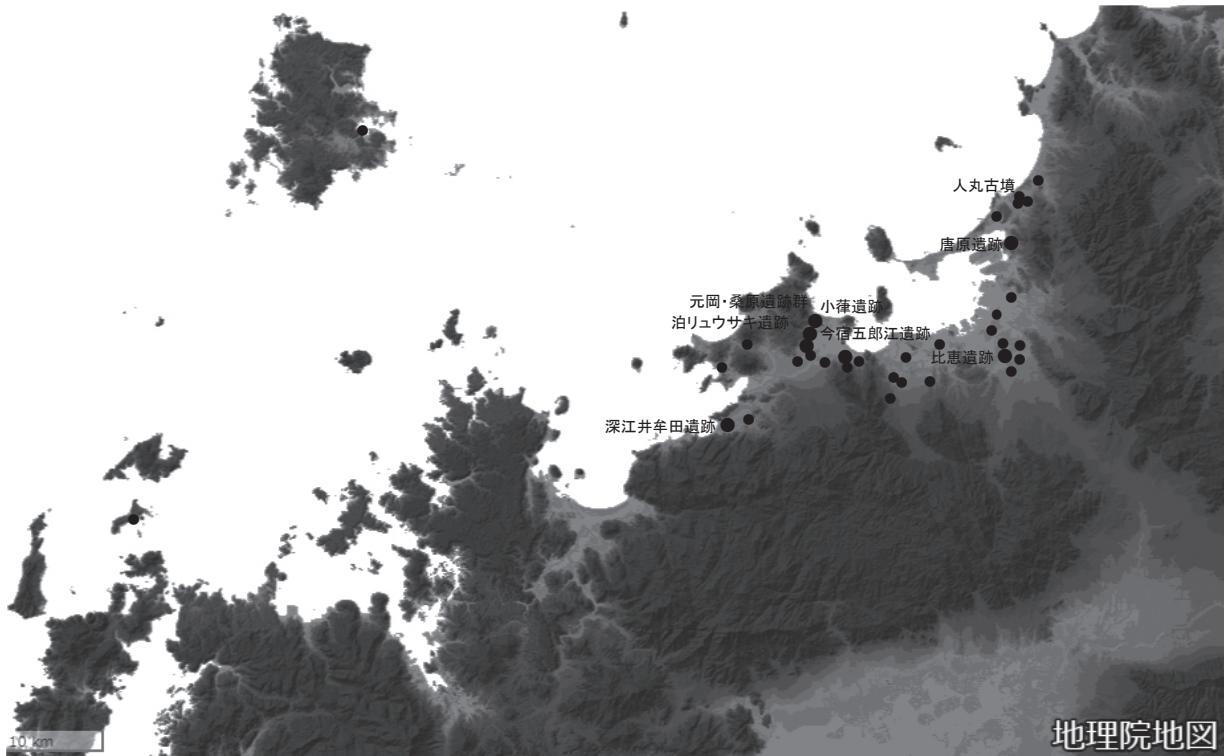


第61図 今山遺跡第8次調査出土の半球

#### 状有孔滑石製品(1/6)



第62図 主孔、副孔の孔径比較



第 63 図 半球状有孔滑石製品分布図（国土地理院地図を加工）

瀬戸内地方出土土錘の研究成果に照らし合わせると、民俗例では網漁は網を水中に早く沈める必要があるため、流水の抵抗を少なくするために沈子綱を太くする。そのため、土錘の孔径・溝幅を沈子綱の直径とみなし、土錘の孔径・溝幅の大きさと網漁の操業規模が比例関係にあることを明らかにした（真鍋 1993・1994）。

このことから孔径が綱の直径とみなすと、副孔は主孔に通した太い綱ではなく、径 3～12mm 程度の別の細めの綱を通していたと推測される。この細い綱については、森本幹彦氏は綱の垂下のバランスを保つための工夫とするが（森本 2019）、（4）の漁網の復元で検討したい。

なお、山中英彦氏は本石錘の主孔に竹や棒を差し込み海底に固定したとし（山中 2007）、島根県宍道湖の張刺網の民俗例では浮子を付けずに綱の両端を湖底に突き刺した竹で固定した刺網が認められる（内田 2009）。本石錘の主孔に残る摩滅痕は内部がつるつるなものが多く、綱がこすれた際に生じたものと観察されること（第 2 表）、滑石という材質や下面が平坦という形態的特徴に加え、主孔径 20～30mm の大きさでは棒を差し込んでいても泥質の海底には固定しにくいこと、本石錘では主孔のみ存在する場合、綱と棒両方主孔に差し込むことは形状から難しいことから、棒状のものを差し込んだ可能性は低く、主孔には綱を通してと想定される。なお、主孔・副孔とも真ん中が狭くなるものは、綱を玉止めて止めていた可能性があり、そうなると、綱の先端が孔内におさまリ、石錘が海底で曳きずられる際に、綱が切れることは少なくなると推測できる。

#### 時期別の分布

本石錘の分布について、東は古賀市鹿部田淵遺跡、西は平戸市渡島中学校所蔵品までの玄界灘沿岸の海岸部と河川下流域の広範囲に分布する（第 63 図）。しかし、九州型石錘が多く出土する唐津湾での出土例はなく、博多湾内にほぼ分布域が集約され、博多湾外では糸島半島西部と長崎県原の辻遺跡、博多湾外東側の新宮町域にまとまって分布する。古賀市や平戸度島における本石錘の広がりについては、石錘を用いた漁網のみ単独で伝播や移動することは少なく、海人集団の接触による漁労技術や造船技術、

場合によっては信仰まで含めたトータル的な内容の伝播や移動を想定する必要があるだろう。

また、本石錘は潟湖である博多湾でも内海の干潟域周辺の遺跡で出土数が多い傾向にあり（第 63 図）、泥質という遺跡周辺の海の底質環境（第 58 図）と整合することは、機能を特定する上で重要と思われる。

さらに、森本幹彦氏は弥生時代中期～古墳時代前期の九州型石錘について、博多湾の東西でその分布に地域差がみられることを指摘するが（森本 2015）、本石錘は博多湾東西で共通して分布する。

以下では、この検討結果を踏まえていくつかの観点から、本石錘について検討してみたい。

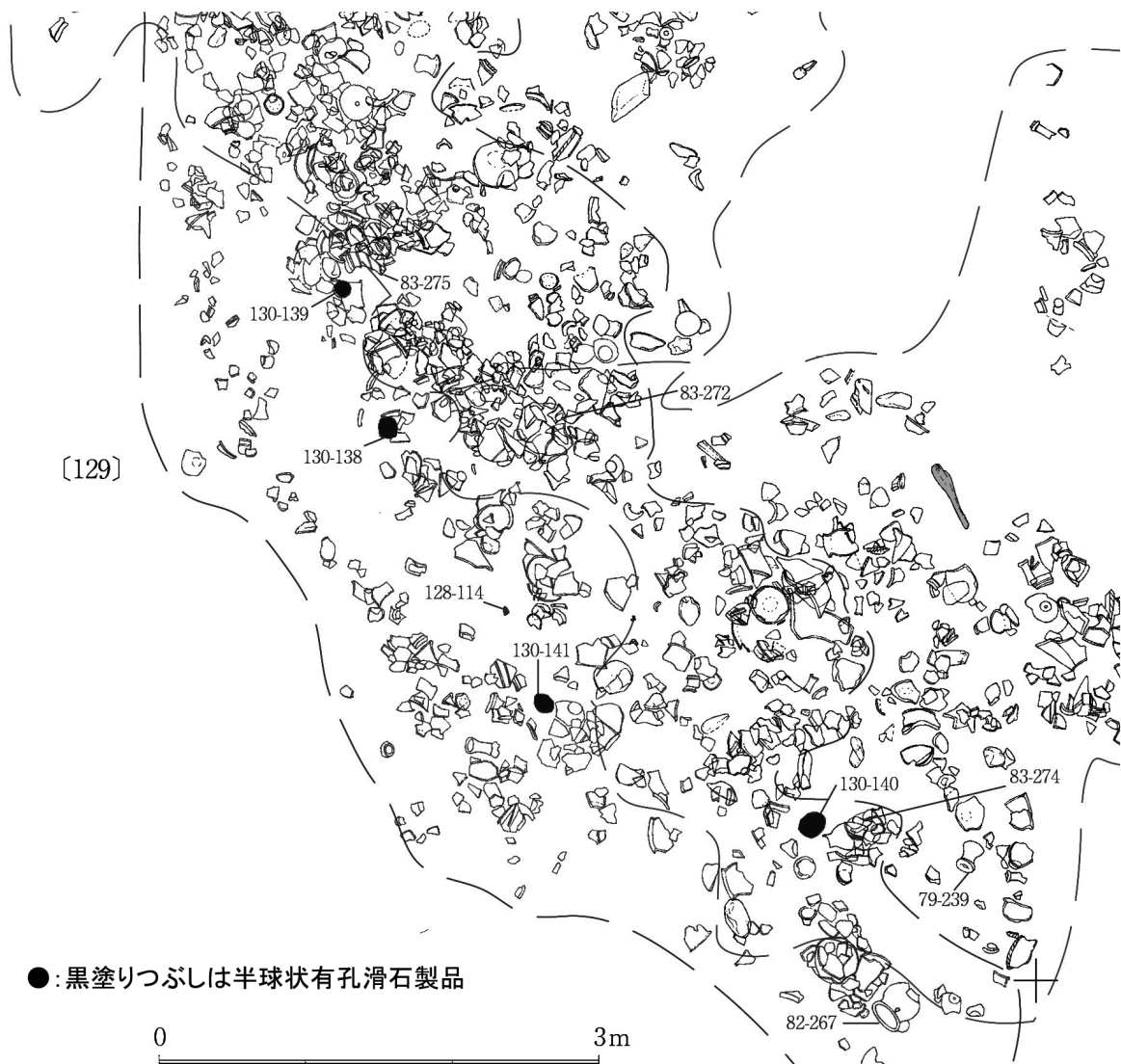
### （3）特徴的な出土状況からみた使用状況の検討

#### ①半球形有孔滑石製品の特徴的な出土状況

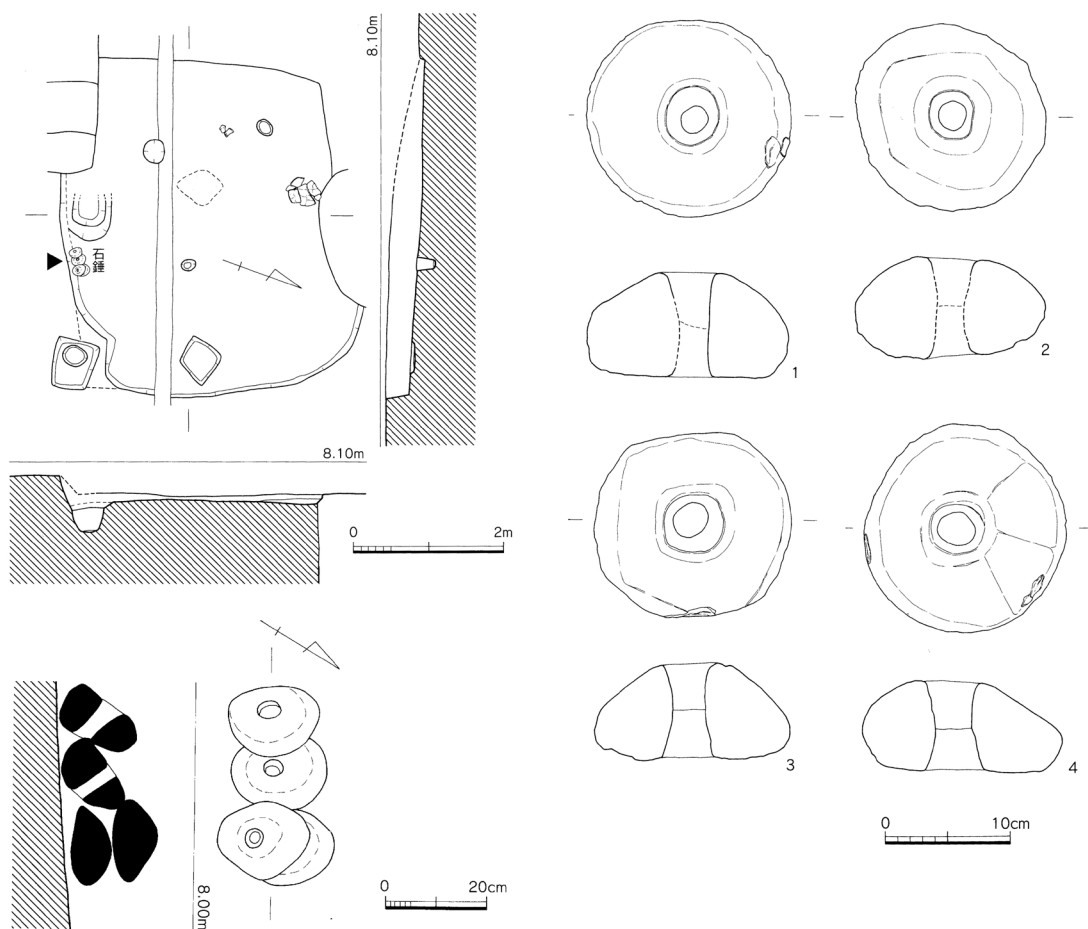
ここでは、半球形有孔滑石製品の使用状況が把握できる特徴的な出土状況を示す事例をいくつか取り上げ、使用状況の復元を試みることにしたい。

#### 福岡市元岡・桑原遺跡群第 42・52 次調査

元岡・桑原遺跡群は、玄界灘に突出する糸島半島の南東端、半島の付け根に湾入する入海である今津



第 64 図 元岡・桑原遺跡群第 42・52 次土器群 129 石錘出土状況 (1/50)

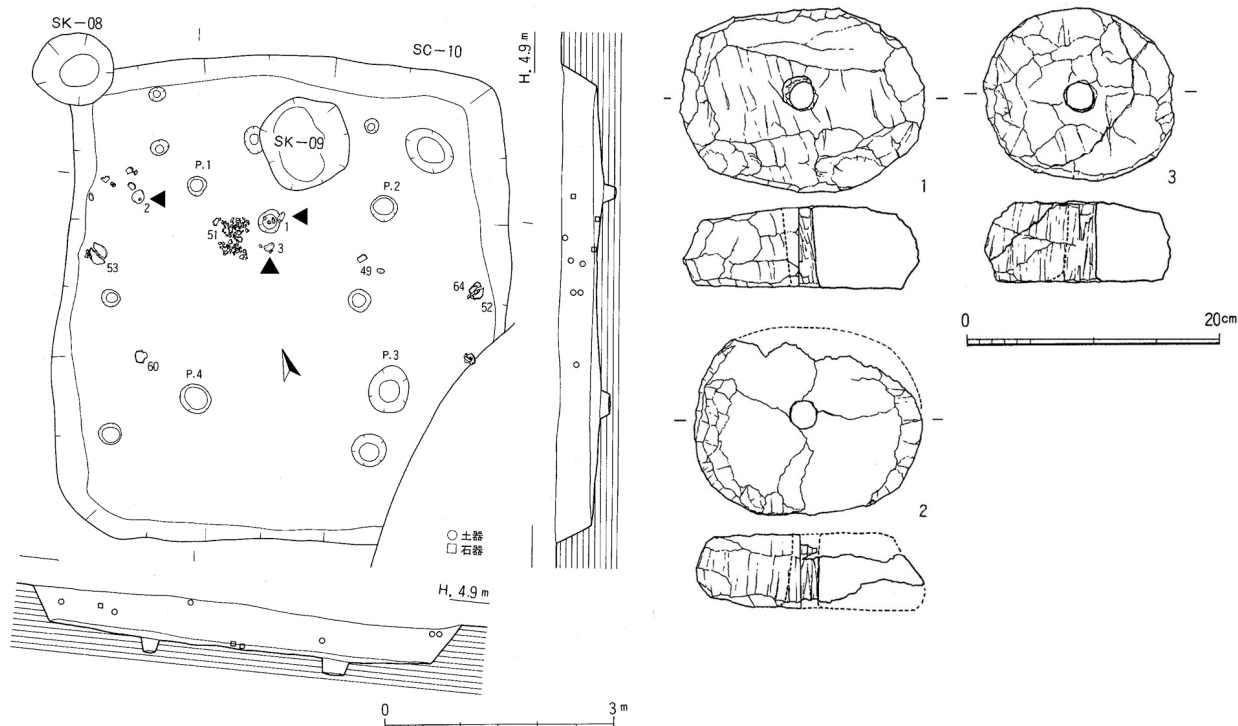


第 65 図 泊リュウサキ遺跡Ⅱ区住5 (1/100、1/15、1/6)

湾の最奥部に位置する。ここで取り上げる元岡・桑原遺跡群第 42・52 次調査区は、遺跡群南西端の標高 8～12 m の丘陵裾部に位置し、すぐ南西側には泊リュウサキ遺跡が所在する。元岡・桑原遺跡群は、朝鮮半島系無文土器や楽浪系土器、列島内外各地の遺物が出土しており、弥生時代中期～古墳時代前期にかけて国内外の交易の拠点として機能したと考えられている（常松 2016）。

第 42・52 次調査では、東西 2 本の自然流路（SD01・SD02）から弥生時代中期後半～後期の土器と石器など、整理箱 10,000 箱にのぼる多量の遺物が発見され、漁具では自然流路から九州型石錘を含む大小の石錘のほか、イルカやクジラの骨も発見されている。そのうち、SD02 上流域のⅡ区土器群 129 からは一定の間隔に並んだ本石錘 4 点が発見され（第 64 図）、報告者は石錘に漁網や綱が付いたままの状態で見つかった可能性を指摘しており（常松 2016・2018）、本石錘の使用形態について復元する上で重要と思われるため、以下で詳しく検討したい。

土器群 129 の本石錘 4 点の間隔は、北から 1 m、2.1 m、2.1 m で、本石錘が漁網に付いたままであったにしても網が完全に開いたまま埋まったものではないとみられる。また、本石錘同士を結んだラインでは九州型石錘Ⅰ類が 1 点出土した以外は漁網錘とみられるものの出土はなく、もし自然石による石錘を本石錘間に取り付ける形の漁網であれば取り上げ時に見逃している可能性も想定しうるが、そのような痕跡は報告書の図面や写真でも確認できないことから、そのまま埋まった網一式であれば、本石錘のみで構成されたと考える方が自然である。また網一式という仮定すると、使用痕跡は下面の状況は類



第 66 図 唐原遺跡 SC-10 (1/100、1/6)

似するものの、型式がVIA類1点、VIB類2点、VIC類1点と異なる。型式がバラバラなものが一緒に使用された可能性はあるが、同一の網で使用したとは断定できない。

南側斜面から流入したと考えられる土器群 129 は、弥生時代中期後半の土器が多くを占めるが、終末期の土器も一部含む。これらの土器は粗砂層とともに流されたことでローリングが繰り返され、溝の層位の逆転も一部行われたとされる（常松 2018）。だが、土器 129 の出土状況図及び報告書に掲載された図版をみると、本石錘周辺出土土器の破断面はシャープであり、さほどローリングを繰り返していないとみられるため、本石錘も廃棄時の原位置をある程度保っていると判断される。

#### 泊リュウサキ遺跡

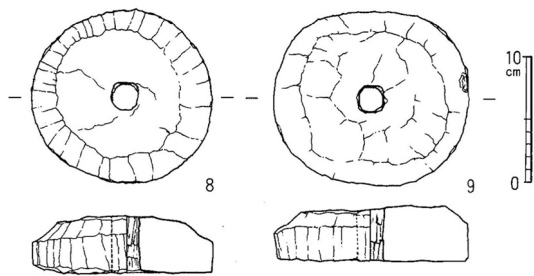
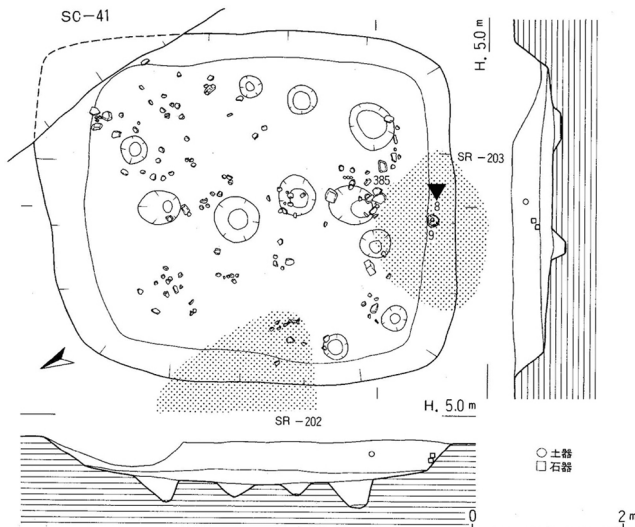
糸島市泊リュウサキ遺跡は先の元岡・桑原遺跡群第 42 次調査区と近接する（平尾 2009）。弥生時代中期後半とされるⅡ区 5 号住居跡は、住居南壁沿いで後の唐原遺跡 SC-41 と点数は異なるがVIB類1点、VIC類石錘3点が意図的に重ねられた状態で出土している（第 65 図）。

泊リュウサキ遺跡は、資料観察では孔、下面が4点とも同様の使用状況が認められること、VIB類1点も角が丸くなっているため、もともとVIC類に形が近かった可能性がある。

以上のことから、同一の漁網で使用されたと考えている。

#### 唐原遺跡

福岡市唐原遺跡は、博多湾東部の砂丘の尾根上に立地し、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡 80 棟をはじめ、大小 300 基を超すイカ漁などで大量捕獲した海産物の加工炉との指摘（山中 2007）がある円形土壇（炉跡）が検出されている（小林編 1989）。古墳時代前期前半の SC-10 では、住居中央北東寄りVID類3点と未図化の石錘破片が床面から浮いた状態で出土した。VID類3点の出土間隔は0.4 mと 1.85 mである（第 66 図）。同一型式であるものの、使用痕跡は同程度ではないが、網での使用場所が異なったことを示すのかもしれない。一方、弥生時代後期終末の SC-41 ではVID類石錘2点が重なった状態で出土し、意図的に廃棄されたと考えられる（第 67 図）。SC-41 出土の2点の下面は使用痕が顕



第 67 図 唐原遺跡 SC-41 (1/100、1/6)

とまって出土していることを踏まえると、本石錘は4点程度で一つの漁網を構成していたとみられること、さらにいずれの遺跡でも本石錘と一緒に組み合わせるような沈子は発見されていないため、本石錘のみで漁網錘を構成していた蓋然性は高いと考えている。さらに、今宿五郎江遺跡2次SD100出土の扁平なVIC類は、上面の相対する範囲が若干摩滅することから、両方とも網地が当たった痕跡と考えられ、この石錘は網の真ん中に装着されたことを示すとみており、3つ以上の錘で網を構成した根拠になると考えている。

以上、本石錘は4点程度で組み合わせる一つの漁網を構成していたと想定される。また、本石錘は山中氏の指摘(山中2007)から漁網の要所に使用されていること、森本氏の指摘(森本2015)から刺網系の漁網錘と考えている。次では民俗例も引用し、本石錘を用いた漁網を具体的に復元していきたい。

著であることから、同一の網で使用されたと考えている。

以上の特徴的な出土状況がみられる3遺跡をみてきたが、泊リュウサキ遺跡Ⅱ区5号住居跡の本石錘4点は意図的に重ねられた状態で、同様の使用痕跡が認められること、唐原遺跡SC-41のD類石錘2点も同様の状況を示すことから(第67図)、一つの漁網で使用されたと考えられるものが、後に本石錘は網や綱から外され、住居内に意図的に廃棄されたと推測される。本石錘は包含層出土が多く、住居内に重ねられて出土した事例はこの2例のみであるが、博多湾東西、所属時期も中期後半と後期終末と異なる条件で、同様の状況がみられることは、少なくとも博多湾の海人集団の共通した漁労活動に係る祭祀行為の存在を窺わせるものである。このような祭祀行為はその他の九州型石錘では確認できないため、本石錘の機能や効果に対する海人集団の意識がそのほかの石錘より強かったことが推測されよう。

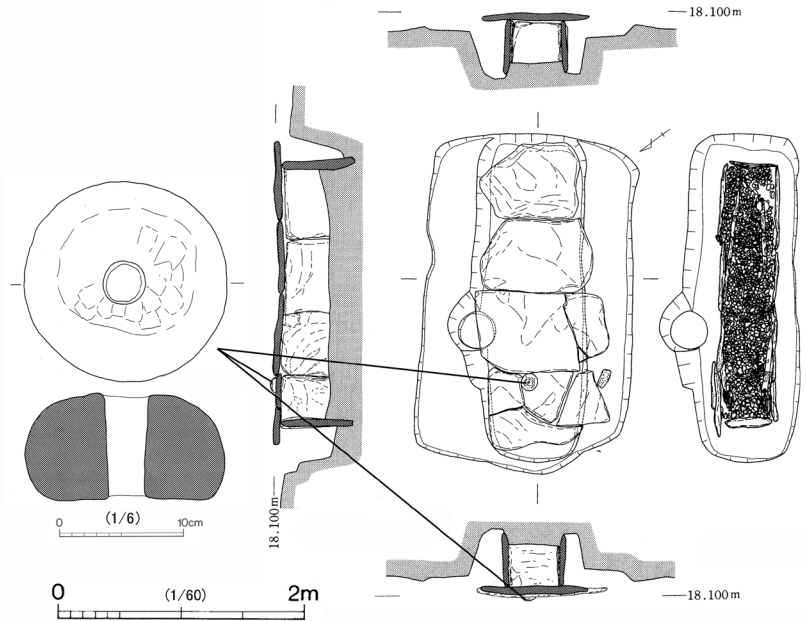
時期は下るが、5世紀前半頃と想定される新宮町人丸古墳では、主体部である箱式石棺の蓋石上にVIB類1点が副葬されていた(第68図)。これは本石錘が古墳時代中期まで継続的に使用されていた可能性を示すとともに、先の本石錘に対する集団の意識が強かった証拠になると考えている。

また、包含層出土であるが、糸島市深江井牟田遺跡、比恵遺跡第24次調査でも4点程度ま

(4) 半球形有孔滑石製品を用いた漁網の復元

① 民俗例との比較研究

刺網は、網の上部に浮子、下部に沈子（錘）を装着した、魚の目に触れないような網糸で編んだテニスネット状の網地を魚の通り道に垂直に張り、一定時間設置して、魚を網目に刺し魚類を捕獲した定置式の漁法である。特に満潮時に潮流に対して直角に網を入れることで、対象魚種を網に刺し捕獲することが多かった。また比較的少ない人数で操業可能な漁法であること



第 68 図 人丸古墳主体部及び半球状有孔滑石製品 (1/60・1/6)

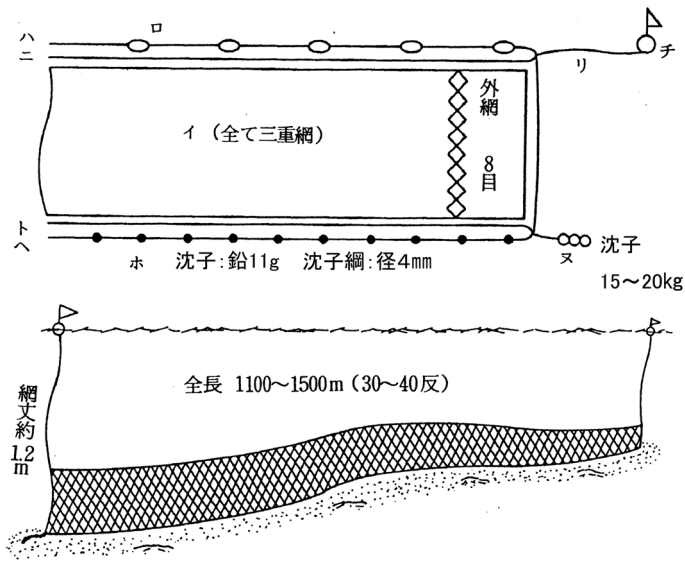
から（真鍋 1993）、玄界灘沿岸地域では現在でも一般的な漁網である。その形態や組み合わせ方法等は、漁期や対象魚種、海底の状況、生態系などに適合するように複雑に展開するものとされ（平川 1990）、網の種類も多様である（福岡県水産林務部漁政課 1991）。

平成初期段階の玄界灘における刺網漁は、大型の錘等で網が移動しないように固定して使用する「固定式刺し網漁業」と、漁網を固定せず、潮流により海中を漂わせて使用する「流し刺し網漁業」に大きく分けられる。また漁網の設置される深さによって、海底を基準とする「底刺し網」と海面を基準とする「浮刺し網」とに分類されるが、「固定式刺し網」はすべて「底刺し網」で、「流し刺し網」は多くが中層または表層の浮刺し網である（福岡県水産林務部漁政課 1991）。

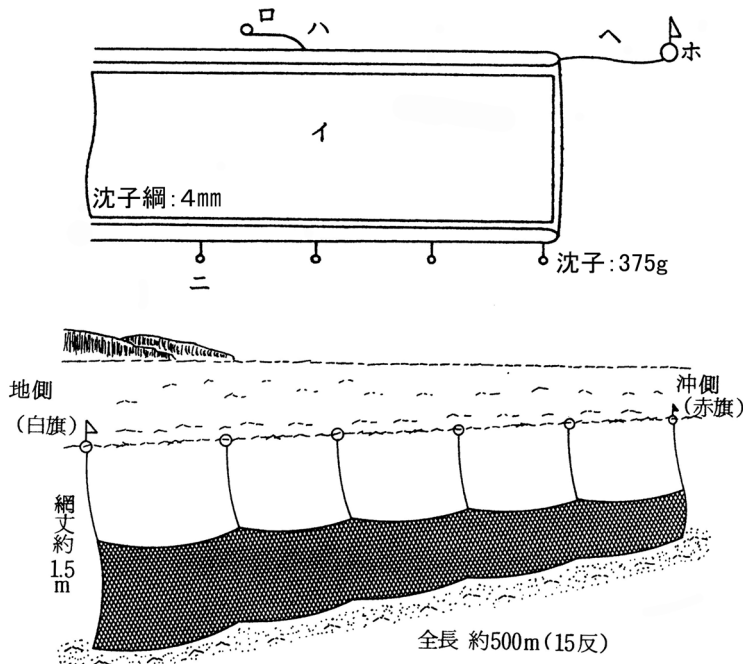
「固定式刺し網漁業」では、固定式である分、流し刺し網漁業に比べ網は大規模で、固定するための錘も重量 15～20 kg と重い。固定式であるかれない・ひらめ刺し網では、先の錘に加え網に 10～70 g の沈子を約 10～20 cm 間隔で密に装着し、操業は沈子をしっかりと着底させ移動しないように固定して行う（第 69 図）。投網はかれない刺し網が夕方ないしは夜明け頃、揚網は翌日の同時間帯、ひらめ刺し網は投網が日没後、数時間後に網を引き揚げる（福岡県水産林務部漁政課 1991）。

「流し刺し網漁業」では、潮流に対し、網を直角に張り込むもので、きす流し刺し網の場合、網の長さ約 500 m、網の幅 1.5 m と固定式と比べ規模は小さく、固定式ではないので錘も 400 g 弱と小さい。網は沈子網及び沈子が着底しているものの固定されておらず、潮流の抵抗により移動する。2 時間ほど網裾が海底をはうような形で流し、この間に遭遇した水深 15～30 m の砂泥域に棲息するキスやエソ等の魚類を網目にさしたり絡ませたりして捕獲する（第 70 図）。このため網の移動範囲の大きい中・大潮時に漁獲量が多い。操業は昼間で、1 日に 2～6 回行った（福岡県水産林務部漁政課 1991）。

なお、民俗例の博多湾や有明海における潮流にまかせて流す「流し網」では、管状土錘を使用した漁網の両端に大型の凝灰岩製有孔石製沈子が用いられている（平川 1990）。平川氏が例に挙げた有明海で使用された大型石製沈子は、底には海底を滑った痕跡である光沢がみられる。この有孔石製沈子と本石錘の形態は大きく異なるものの、形状から海底で滑りやすいことと、重量があることは共通する要素である。一方、「流し網」であれば本石錘は海底を動くことになるが、先の 4 点で一つの漁網を構成する



第 69 図 固定式刺し網：かれい刺し網  
(福岡県水産林務部漁政課 1991 より引用)



第 70 図 流し刺し網：きす流し刺し網  
(福岡県水産林務部漁政課 1991 より引用)

では網の端に付ける沈子を「ホゲイシ」と呼ぶが、これは岩または穴のほげた小石を結び付けていたので、その名称が残っているとされる (田辺 2002)。

以上、出土状況から想定される本石錘の間隔は、元岡・桑原遺跡群と唐原遺跡では 2.1 m 程度の間隔、4 点で構成するとなると、長さ 6～7 m 程度の漁網となる。先の民俗例で引用する天草の昭和時代のものとは、船の積載量、エンジンを使用した操船技術などとは大きく条件が異なり一概には比較できないものの、石錘間隔 2.1 m、そこから推定される刺網の長さ 6～7 m というのは短すぎる印象がある。そこで、弥生～古墳時代の刺網されている棒状土錘で想定される網の規模をみとしてみたい。

のであれば、漁網の中央に加え、両端に装着されたことになるが、本石錘は流し刺し網の錘としては重量があり、網裾が海底に這うような形で流すことは難しいことが予測される。

先の平川敬治氏による福岡市西区今津浜崎の曳網系漁網での滑石製沈子は、使用による摩滅が顕著なため 2 シーズンで使用不可能になるが (平川 1990)、本石錘の下面や下端部の稜は摩滅するものが多いものの、流し網や曳網での使用を想定させるような著しい摩滅は福岡市長垂大谷遺跡第 1 次出土例以外は管見では認められない。また、主孔や副孔内はつるつるに擦れているが、それに比べ下面はさほど擦れていないものが多い。よって、本石錘を用いた刺網は、現在の「固定式刺し網漁業」に近い形になる可能性を考えている。

さらに、熊本県牛深市の昭和 20 年頃の固定式であるイワシ刺網の操業についての聞き取りを行った山下義満氏によると、イワシ刺網の民俗例で使用した刺網は、1 切で長さ (横) 21 m、幅 (縦) 22.5 m、漁網としてはそれを 15 切繋げ、結果的に長さ約 315 m の刺網であったという (山下 2016)。このイワシ刺網は長さ約 315 m、幅約 22.5 m の身網を使用し、網の両端に約 5 kg の大石を沈子として置き、さらにその間の沈子として陶製沈子を配置した (山下 2016)。加えて、長崎県平戸

## ②弥生～古墳時代の刺網との比較検討

弥生～古墳時代の漁網錘として、細長い棒状の土製品の両端に孔を設けた棒状土錘がある。

真鍋篤行氏は弥生～古墳時代の棒状土錘の使用用途について、刺網漁で使用された土錘で、水深の深い漁場や潮流の速い漁場、岩礁地帯付近などの様々な漁場で使用されたとする。このことから、棒状土錘を用いた刺網漁は小規模であるものの、網目の調整、網を張る場所（魚道）、水深の調整など多様な場面での使用が図れる機動性の高いものである。この棒状土錘による刺網漁は、船一隻で可能な労働規模とみられるが、これを高頻度で行うことにより、より積極的かつ効率的な水産物の捕獲を行ったと指摘した（真鍋 1994）。5世紀後半～末を盛期とする和歌山県西庄遺跡では、棒状土錘を用いた刺網漁が活発に行われていた漁労活動が推測されている（久保 2003）。

北部九州の古墳時代前期前後の棒状土錘を検討した小澤佳憲氏は、古墳時代前期前半の大大黒島遺跡 SK-01 出土棒状土錘 18 点及び共伴土器から SK-01 より時期的に古い可能性がある同遺跡 1 トレンチ下層遺物包含層出土棒状土錘 14 点は、それぞれの出土状況から一つの漁網に装着された状態で廃棄された可能性を指摘する（小澤 2020）。この棒状土錘 18 点・14 点で構成される刺網は小規模な刺網であることは容易に推測されるが、先の天草の民俗例のイワシ刺網は重さ 122 g の磁器製の沈子（形態は管状土錘 B）を 1 間に 4 個配置、装着間隔は 50 cm 前後と報告される（山下 2016）。また、玄界灘沿岸のかれい刺し網では沈子の装着間隔は 10 cm である（第 69 図）。加えて、棒状土錘を使用した刺網は土錘相互の間隔を狭くすることで、網のねじれる余地が少なくなり、網を帯状に張ることに適しているとされること（真鍋 1993・1994）などを合わせて考えると、黒島遺跡における棒状土錘を使用した刺網は 10 m を超えない規模であったとみられる。また古墳時代後期後半の西庄遺跡 E 地区 5 号住居跡では棒状土錘 31 点と管状土錘 1 点がまとまって出土し、一つの漁網の可能性が指摘されているが（深加見他 2003）、先の装着間隔を当てはめると漁網の規模は 15 m 程度の可能性がある。このことから、本石錘の大きさと 4 個程度で一つの漁網錘であるとする、明確な根拠はないが、石錘間隔が 3～5 m 程度、網の規模は 10～15 m 程度の小規模なものであったと仮定したい。

弥生時代、漁労活動で主に使用した船は丸木船であったとみられる。丸木船は、一般的に幅 80～100 cm 前後、長さ 6 m 前後の一本の丸太を半裁し、その内部を削り貫き、船首・船尾を尖らせた小規模な船である。先の天草のイワシ刺網は、基本的に刺網に魚が刺さった状態で網揚げし、そのまま帰港する 1 回網操業である（山下 2016）。丸木船の場合も船上が狭小で、船上には浮子を含む網と道具、2 人程度の人を乗せ、捕獲した魚の積載などを想定すれば、先の天草の昭和時代のイワシ刺網のような 100 m を超すような刺網ではなく、1 回の出航で複数回網入れを行う操業形態であった可能性が高い。加えて、1 回で複数の操業回数を重ねる場合、狭小な空間の丸木船上において魚を刺網から取り外す場合、小規模な網でないといけなかった可能性がある。

このように製塩土器による本格的な塩生産が開始される弥生時代後期終末以前に盛期を迎えたのが本石錘を用いた漁網であり、捕獲した水産物の塩蔵加工ができなかったため、漁獲があり過ぎて逆に腐らせてしまうことも多かったと予想される。以上のことから、本石錘は長さ 10～15 m 程度の小規模な刺網の錘であると考えている。

民俗例から弥生時代中期後半以降の本石錘は重量があること、下面が平坦で、滑石製、泥にはまるこたが少ない形状、本石錘以外の沈子は明確ではないことから、刺網系でも固定式、石錘自体の重量と 4 個程度の配置から、刺網でも底刺網に近い構造で、網の長さは 10～15 m 程度の小規模な刺網であった可能性を想定している。

なお、錘は土製・石製に関わらず、刺網のように均一にした状態で漁網を張るには、均一な錘であることはもとより、最初に投下する部分と最後に投下する部分では最後の方が微妙に錘を多く配置する場合などもあり、一律ではない。このように、対象魚に応じて本石錘の装着される間隔と個数の調整が行われていた可能性があることは注意を要する。

### ③刺網構造の検討

以上、民俗例と棒状土錘の事例から、刺網の特徴をみてきたが、いずれも錘には半球形有孔滑石製品のような大型石錘を用いていない。以下では、大型石錘である半球形有孔滑石製品が刺網の錘として創出・展開した理由を刺網の構造の復元からみてみたい。

#### 主孔と副孔の機能について

先にみてきたように、本石錘の主孔の径 10～60mm に比べ、副孔の径は 3～12mm 程度と小さい。漁網においては網によりがかかると網の形状が乱れることから、これを防ぐための沈子綱に添える添綱が必要になるが、刺網の民俗例では添綱が伴わないことが多い。特に長さ 10～15 m 程度の網に復元される小規模の刺網で重量のある本石錘を用いたとすれば、添綱は不要であった可能性が想定される。

一方、小澤佳憲氏の棒状土錘の孔径の分析によると、古墳時代前期の今山遺跡第 8 次調査出土棒状土錘の孔径は平均 6 mm であることから、棒状土錘を用いた刺網の沈子綱は径 6 mm 程度とみられる（小澤 2020）。本石錘副孔の孔径は 3～12mm の幅を持つが、径 4～7 mm に最も集中することから棒状土錘を通した沈子綱の太さと調和的である。

さらに、主孔よりも副孔の方が孔内の摩滅するものが目立ち、主孔と副孔を結んだ表面付近は、上下とも擦れていないものがほとんどで、主孔と副孔に通した網は同一である可能性は低い。

このように、本石錘の副孔は刺網の沈子綱を通したとすると、主孔と副孔は距離があることから、主孔に通した網と副孔に通した沈子綱とは干渉し合わない。主孔の役割は石錘の重量で網を垂直にしっかり張ることができたと同時に、本石錘の主孔に通した縦方向の太い綱を海面から海底に向けて垂直に伸ばせたことで、網を海中できちんと立てることができた。副孔に通した細めの沈子綱は錘の重さにより沈子綱を四方にしっかり張れたことで、網部分は少し余裕を持たせることができ、より魚を刺さりやすくすることができたのではなかろうか。

なお、網を海中でしっかり立てるには浮子も重要であることは間違いない。特に網の材質が麻などの場合、水分を吸収して重くなるため、浮力が必要で、かつ半球形有孔滑石製品のような海底に着床する石錘を使用した漁網の場合、網の位置確認の標識としても役割を担ったと想定されることから、より大きな浮子が使用されていたと推測される。

また、本石錘表面の 1/2 以下の範囲で綱ずれ痕とみられる比較的弱い摩滅痕の事例があるが、網と石錘が直接擦れたことを示している可能性が考えられる。

なお、山村信榮氏が副孔には海面に漁網の位置を示すためのブイ的なものを取り付けるための綱を装着したという指摘は（山村 1989）、先に検討したように、本石錘 4 点程度が一単位となって漁網を構成した可能性があり、そのうち漁網の両端にブイ的なものを付けたとすると、副孔を有するものが 4 点中 2 点というセット関係になるが、そのようなセットが現状では認められないため、ブイ的なものを取り付けた可能性は低いと考えている。ただし、弥生時代前期後半～中期前半の今山遺跡第 8 次の VI C-1 類の副孔は横方向に綱を縛った強い痕跡が認められ（第 61 図 2）、中期後半～古墳時代前期の本石錘との使用法とは異なることから、その場合は副孔にブイ的なものを取り付けた可能性がある。

### 刺網の網地について

古くより網糸の原料として使用されたのは、主に麻・葛・藤・藁である。網地は地中にあると長い年月の間に腐朽してしまうため、遺跡からの出土例は極めて少なく、網構造を含めた実態は不明である。

ただし、縄文時代晩期の宮城県里浜貝塚出土の鹿角製網針は現用例と変わらないもので、縄文土器に施された縄目文様から、縄文時代から高度な紐や網を製作する技術があったことが認められる。弥生時代になると稲の本格的な栽培が行われ、藁をなうに耐える柔軟な稲の品種ができると、藁も網の素材に加えられたと考えられ、藁網の耐用年数は半年から1年程度にすぎないとされる（三井田 2006）。

天草地方では昭和30年代後半までは網糸は綿であったとされ（山下 2015）、唐津地方の葛の網地は近世でも有名であったが、麻網は網目が細かく、強靱で伸縮ともに強く、腐敗も遅いとされ、近世以降は圧倒的に刺網の網地として多く利用され、明治初め頃の麻網の耐用年数は2～3年程度とされる（三井田 2006）。なお、民俗例では網糸を渋柿の柿渋で漬け込むと網が腐りにくくなることから、古代においても渋で染めて使用した可能性がある。さらに網は日中の日干しを行わなければ急速に痛むため、重労働とされる日中の網干を行う必要があった（山下 2015）。

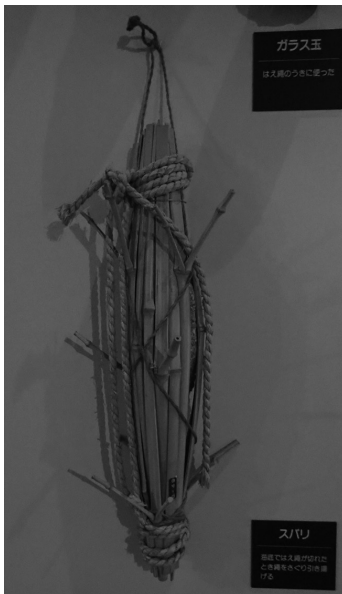
刺網の網糸は、満月の頃、白い麻地の網が魚に視認されて獲れないという事例もあることから、魚の眼につかないような色・材質が求められる。テグスは江戸時代に中国から伝来したとされるため、楠の葉を食べて成長するクスサンという蛾の幼虫を利用した天蚕糸が刺網の網糸に使用された可能性がある（平川 2011）。この天蚕糸は、繭を作る前の幼虫から絹糸線を取り出して、酢酸につけて乾燥したものであるが、弥生時代になると、衣服は苧麻や大麻などの植物性繊維のほか、大陸に由来する絹、蚕を桑で飼育する養蚕により生産された日本独自の絹もあったことが佐賀県吉野ヶ里遺跡などで明らかになっている。このような養蚕技術を背景とした半透明で目立ちにくい天蚕糸を使用した刺網の網地の存在は実証できないが、備讃瀬戸地域由来の棒状土錘、管状土錘Cを用いた漁網の導入に際し、漁網の製網技術や麻や藁、天蚕糸などの網の素材の進化も考慮すべき事項と考えられる。

加えて、『日本書紀』では「天磐櫂樟船」「鳥磐櫂樟船」とあるように、船の材料として堅固ながっしりしたクスノキを重視していたことを示している。クスノキは、巨木化し、腐朽しにくい性質であるため、大きな船をつくるためには格好な材料であった。このように、楠葉の利用と楠材による船製作というのは共通する種類の木材であることは木材の利用の観点からも注目される。このように細かい網目の刺網の製作には、養蚕技術も関連していた可能性もある。

### なぜ半球形有孔滑石製品を創出したのか 縮結技術と網構造

天草のイワシ刺網の民俗例では、「コミ」といわれる、2割近く大きい網地を組み込み、網に余裕をもたせることで魚を刺さりやすくしたという（山下 2016）。これは真鍋篤行氏が「縮結（いせ）」と呼んだ刺網の技術と同様のものである（真鍋 1996）。「縮結」とは浮子網や沈子網より長めの網地を結びつけて、水中で網が膨らむことで、網地を引っ張ると網目が開き、幅が広がることで、魚が網目に絡む頻度を高くし、捕獲力を高めた網製作技術である。真鍋氏は、弥生時代後期～古墳時代前期になると棒状土錘のような細長い沈子が出現し、「縮結」の技術が成立したことで、漁獲力を高めた刺網が普及したことを指摘した（真鍋 1996）。

先にみたように、半球形有孔滑石製品は主孔と副孔を通した網で四方をしっかりと張ることができたことにより、内部の網に余裕を持たせることが可能で、これも縮結技術の一つとみている。しかし、古代の漁網が残存する事例はなく、縮結技術が用いられたかは推測の域を出ないが、内水面漁業である宍道湖の刺網漁では、ハゼなどの小型の魚を捕獲する時と比べ、コイやフナなどの大型の魚を捕獲する時は、



第 71 図 網が切れた場合に引き揚げるための道具：スバリ

(両津郷土博物館所蔵)

たるみの大きな網を使用したとされる (真鍋 1996)。このように、より大型の魚類を刺網に刺す上では「縮結」は必須な構造であったと考えられる。このことから、大型の魚類を刺網で捕獲する際には、「縮結」の技術は必要不可欠であり、本石錘を海底に固定し、刺網自体を安定させ、そこに余裕がある網を組み込むことで、大型の魚類を刺さりやすくした可能性が想定される。

加えて、本石錘の主孔の大きさから縦方向の綱は太かったことが推測されるが、これは漁場の潮流に網自体が耐えるための必要な要素であった可能性を考えている。

このように、本石錘の重量と大きさは、網を設置する場所など漁場の自然環境と相関関係にあり、本石錘は網の構造及び漁獲量の強化を兼ね備えた優れた機能が推測される。

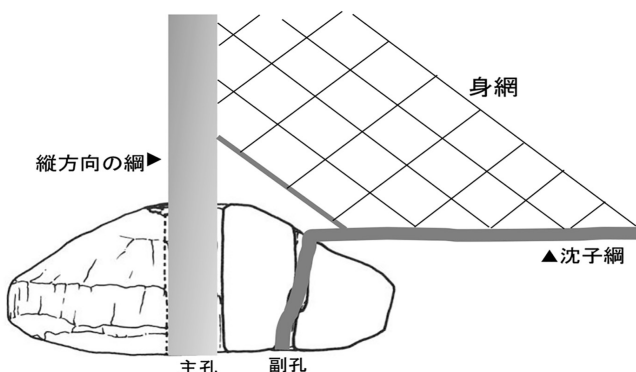
また、先の天草の民俗例では刺網による網揚げで、魚が掛かりすぎた場合には網自体が沈み、やむなく網を捨てたことも少なくなかった (山下 2016)。古代でも、貴重な漁網を必ず回収するため (第 71 図)、魚がかかりすぎた場合にも海上に曳き揚げるための太い綱が求められたと考えられる。

刺網はすばやく網を立て、その場所に固定することが必要であり、長さ 15 m 以下程度に復元される刺網で使用した本石錘は、重量があるため、効果的であった。加えて、平川敬治氏の指摘 (平川 1990) に従えば、本石錘の下面は平坦で動きやすいものが多く、固定式でありながらも、ある程度潮流の動きと網の向きを合わせることでより魚群を捕獲しやすくした、つまり潮流に抵抗しながら、この間に遭遇した底棲及び中底層の魚類を捕獲した網であった可能性がある。その場合、潮流が強い、中・大潮時に漁獲が多かったとみられる。

以上の検討から、刺網を海中でバランスよく安定させ、魚の行動に対応できる操作性、網に余裕をもたせる「縮結」の技術、網を太くすることで、網を揚げやすくするなどの効果を指摘できた。この 3 つの機能を同時に果たしたのが、本石錘を使用した漁網であった可能性が考えられる。

## (5) 水産物の加工と流通

真鍋篤行氏は漁労活動における生産力を高めるためには、漁具の技術革新と同時に、水産物の貯蔵技術や水産物を迅速に消費地に運ぶ輸送手段の技術革新が必要で、漁具・漁法や加工・貯蔵技術、運搬手



第 72 図 半球状有孔滑石製品 (VI C-1 類) 使用想定模式図 (元図は唐原遺跡 SR-93 出土品を使用)

段などの各過程の技術の革新の複合として漁業技術の発達を考える必要があるとした。特に棒状土錘と刺網漁、製塩土器との関係性を明らかにし、海産物の加工・保存、さらには流通を考える上で塩と水産物は密接に関わってきたことを指摘した (真鍋 1993・1994・1995)。

九州型石錘 I 類の用途について検討した前節では、備讃瀬戸系や大阪湾系の土器製塩技術の伝播が古墳時代前期以降とみられることから、九州型石錘 I 類が成立した弥生時代中期後半～後期前半

以降、古墳時代前期にかけて、九州型石錘Ⅰ類を使用した、塩を使わず干物加工可能なイカの捕獲が盛行したと想定した。

弥生時代中期後半～後期の塩生産体制が十分でない段階では、捕獲した大型魚類の加工のための塩は当然十分でなく、本石錘を使用した刺網で捕獲した水産物の加工は、例えば塩水につけて干したり、塩を振る程度の乾燥や焼くなどの固形塩をあまり使用しない加工品が考えられる。沿岸域を回遊し、海底が泥質でも棲息可能なボラなどの白身魚は、濃い塩水につけて日に当てて干すことで、保存食としての加工が可能である。一方、沿岸漁であるイワシやサバ、アジなど身に脂分の多い青魚の加工は塩が少ない状態では保存食としては難しかったことが予想されるが、福岡市は漁場が都市部に近く、朝水揚げされた魚が昼には店頭に並んだことに由来する「ひるもん」という言葉に示されるように、今も青魚を生で食べるという習慣がある。また、今宿五郎江遺跡や唐原遺跡など、博多湾沿岸で多種多様な漁具が出土する遺跡でも水産物の加工に伴って廃棄されたとみられる動物遺存体の目立った出土はない。

そう考えると、本石錘を使用した刺網は主に新鮮な魚ないしは一夜干し程度の加工品を周辺に供給するために開発されたもので、主に干物加工品として内陸部まで流通する商品としての役割を担ったのが九州型石錘Ⅰ類を使用したイカ釣漁による加工品と、明確に役割分担されていたのではなかろうか。ちなみに、新鮮な魚介類が流通可能な範囲は、昭和初期まで漁村から徒歩で一日に運搬できた約5～6kmの範囲であったとみられる（藤井 2019）。『魏志』倭人伝にみられるように多くの陸路が未整備であったとみられる弥生時代においても、新鮮な魚介類の流通範囲としては約5～6kmが限界であったと考えられる。ちなみに、新鮮な魚類は、身だけではなく、頭部などの「あら」も出汁や汁物などに利用されていたのであろう。

この弥生時代中期後半段階、周辺の集落から拠点集落に「集住」することで、より一層拠点集落は大規模化し、集落内の人口が増加したと指摘されているが（小澤 2013）、それに伴い新鮮な海産物の需要が高まったことが半球形有孔滑石製品の発達に関係するとみている。

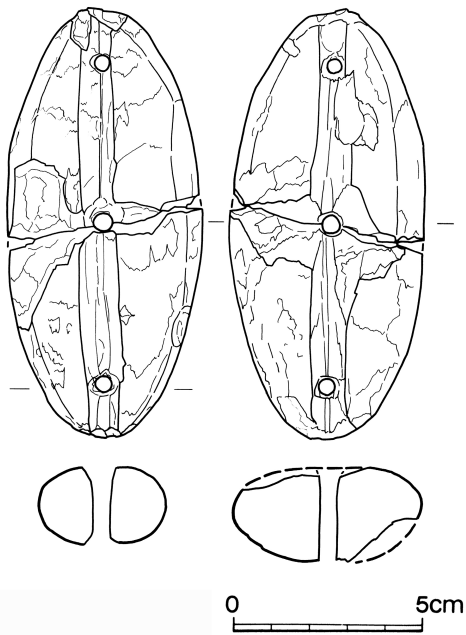
## （6）小結

網漁は、弥生～古墳時代においても大量の漁獲物を一度に捕獲可能な最も効果的な漁法である。その中でも刺網漁は魚が網に絡まることで動きを封じられ、容易に捕獲できる。また、刺網漁は海上のカモメ等の鳥群を目安に対象とする漁場を決め、素早い網入れを行う必要があること、捕獲する魚類の選択制に関わる網目の大きさも含め、対象魚種や対象海域の海流などの条件を見極める経験と知識が必要なプロの漁師の漁とされる。

定型化した大型石錘である半球形有孔滑石製品を沈子とした刺網漁の出現は、定型化した刺網による網漁業がある程度システム化され、展開したことを示している。分布の中心となる博多湾の環境やそこに生息する捕獲対象魚類と関係しながら、漁獲力も高かった刺網漁であったことが想定される。

真鍋篤行氏によると、刺網漁は瀬戸内地域では弥生時代前期から出現し、後期になると「縮結」の技術出現により漁獲物が増加したとされる（真鍋 1994・1995）。今回博多湾周辺でも弥生時代中期後半に半球形有孔滑石製品を使用した「縮結」の技術を持つ刺網が出現したことを予測したが、この予測が正しければ、瀬戸内及び玄界灘両地域で弥生時代後期前後に「縮結」の技術を有した刺網漁が同時期に成立したことになる。刺網の構造や形態は両地域で大きく異なるため、両者の直接的な系譜関係はないとみられるが、ほぼ同時期に両者が創出されたことは、当時の社会動態を考える上で示唆的である。

また、森本幹彦氏は弥生時代後期後半以降、博多湾東西で出土漁具の様相が異なることを指摘するが



第73図 西新町型石錘（西新町遺跡第12次住43出土、報告書では2片で報告するが、同一個体であることを確認）実測図（1/2）

塩の本格的導入と時期的に整合する。特に、古墳時代前期前半段階の本石錘が出土していない一方、「西新町型石錘」（乗松 2010・大庭 2022）という西新町遺跡で特有の石錘が出現する（第73図）。この西新町型石錘を使用した網漁の成立により効率的に多くの魚を捕獲できたことで半球形有孔滑石製品を使用しなくなったと考えている。西新町型石錘の機能と使用形態については、次節で論じている。

半球形有孔滑石製品は古墳時代中期になると、古墳副葬例1例はあるものの、漁具として使用が確認できなくなる。これは、集落の減少（石井 2009）による水産物の需要の低下と政治権力による大規模な海人集団の配置替え（山崎 2007）の影響の可能性もあるが、この時期以降、カマドの導入に伴う生活様式の変化により、魚を「煮る」から「焼く・保存食」という食生活が変化し、加工品の需要が増えた。よって、塩蔵加工品の生産を担う専門的な海人集団の成立等により、本石錘を用いた漁法は消滅を迎えたと考えた方が自然であろう。

なお乗松真也氏は、古墳時代前期、西新町遺跡をはじめとする博多湾岸の港津的集落は、九州型石錘など従来の漁具に加え、備讃瀬戸系などの新たな漁労技術の導入、土器製塩による塩生産からの塩蔵加工品の生産によってさらなる交易対象品としての水産物を調達し、交易への関与を強化、深めようとしたと指摘するが（乗松 2010）、西新町遺跡段階の従来の漁具・漁法に基本的に半球形有孔滑石製品を用いた刺網漁は入らない。このように、古墳時代前期、博多湾沿岸の港津的集落は在来系と外来系の漁具・漁法を融合、展開する中で、在来系漁具についても取捨選択を行っていたことが本稿で明らかになった。伝統よりも効率を選んだといえる。

今回は半球形有孔滑石製品に焦点をあてて検討を行ったが、その成立と展開、衰退、消滅については当時の生産経済システムと連動していることを改めて確認できた。今後はその他の漁具についても検討を進め、生産経済システムの一部である漁労活動の具体相について明らかにしていきたい。

（森本 2015）、半球形有孔滑石製品は博多湾の東西の差はなく、同様に分布する。九州型石錘Ⅰ類は博多湾西岸～糸島半島にかけて偏在するが、半球形有孔滑石製品による定型化された刺網漁は分布域が広いことから、「集住」した拠点集落の規模拡大に伴う日常的な新鮮な水産物の需要欲求に対応したことが最大の理由の一つと考えた。この要因として、中国の史書にみられる中期後半以降の国際交易の発展に伴い新たな織物技術や染色技術が導入され、それが魚の眼につかないような色・材質の刺網の網糸の出現が瀬戸内と玄界灘両地域で同時期に刺網漁が始まった可能性も想定されよう。

さらに、半球形有孔滑石製品が古墳時代前期に急速に縮小し、消滅することは、山中英彦氏が指摘する大阪湾系の飯蛸壺延縄漁、備讃瀬戸系の管状土錘Cによる袋網系網漁、先の棒状土錘による刺網漁などの外来系漁具の受容及び土器製

### 3 漁具からみた西新町遺跡海人集団の特質 ～西新町型石錘を素材として～

#### (1) はじめに

漁具の沈子である石錘は、多種多様な漁法で使用される漁具の中で最も基本的なものの一つで、現在も漁網錘の沈子を「いわ」と呼ぶ地域もあり、古くから石製品が用いられたと考えられている。

漁法を中心となる網漁においては、魚を効果的に捕獲するため、漁網を海中で均一に張る必要があり、錘の形と法量はもとより、網の形状や浮子、網、錘の組み合わせは対象魚種や海底の底質の状況、生態系など周辺環境に適合するように複雑に展開するものとされる（平川 1990）。

玄界灘沿岸地域においては、弥生時代前期以降、小型管状土錘が出現するとともに、打欠石錘は平均重量が 250 g と縄文時代の打欠石錘と比べ著しく重さを増し（下條 1984）、漁網が大型化する。この理由としては、淡白な米食の開始に伴い、おかずである副食が必要になったことで、魚介類や海藻類などの水産物の需要が増えたため、漁労活動が盛んになったと理解される。弥生時代中期後半～後期前半になると、それまでの土錘・石錘とは形態・重量・材質・出土量を異にする、主に滑石を素材とし、工具による刻みまたは擦切りで溝をつけ、孔を穿ち、孔と溝を単独または併用して緊縛の用をなした九州型石錘が出現する（下條 1984）。

この九州型石錘は同時代の列島内では非常に特徴的な沈子で、古墳時代前期にかけて大型化、多種化を指向することでさらに漁法が大きく発達する（下條 1984）。また、九州型石錘出土遺跡の多くが海浜部に立地し、その分布は玄界灘沿岸地域を中心に、南は鹿児島県薩摩半島から北は福井県若狭湾まで広範囲に分布することから、博多湾を中心とする玄界灘における海上交易活動を支えた古代玄界灘海人の広範囲な行動圏を表す資料とされた（下條 1984）。

筆者は、これまで玄界灘沿岸地域の弥生時代中期後半～古墳時代前期における九州型石錘のうち、垂下式で上窄下寛形のⅠ類（下條の大形 A 型）、紡錘形のⅡ類（下條の大形 B 型）について、漁法の特定や捕獲した水産物とその加工・流通、石錘を創出した社会背景まで考察してきた（大庭 2009・2021）。

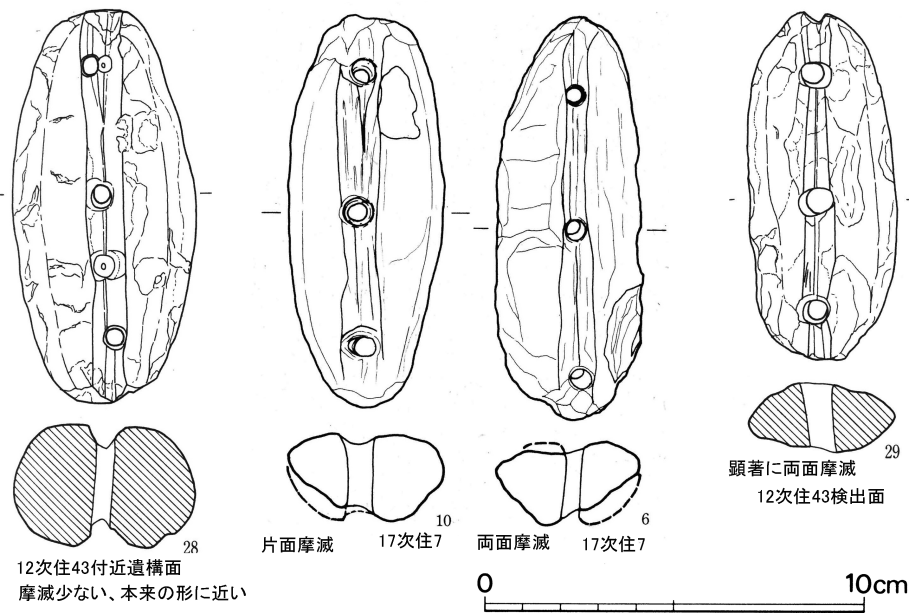
玄界灘沿岸地域の古墳時代初頭前後の網漁については、下條氏に加え、山中英彦氏（山中 2007）、乗松真也氏（乗松 2010）、林田好子・中尾篤志氏（林田・中尾 2014）、森本幹彦氏（森本 2015）、小澤佳憲氏（小澤 2020）等による優れた先行研究がある。これらから、複数の種類の漁網が存在し、それぞれが目的に応じて使い分けられていた可能性などが指摘されているものの、網自体が考古資料として遺存しにくく実証が難しいことから、具体的な漁法の復元、背景まで踏み込んだ研究は少ない。

そこで、本稿では多種多様な九州型石錘のうち、大型で紡錘車形を呈し、断面は扁平、複数の孔を結ぶように長軸方向に溝 1 条が巡る規格性のある石錘で、その多くが列島各地や朝鮮半島との間の一大交流拠点である西新町遺跡に出土が集中することから、西新町遺跡で考案され、生産・使用されたと指摘されている（山中 2007）、「西新町型石錘」（乗松 2010）を対象とする。その西新町型石錘が持つ資料群の特質を抽出し、想定される使用用途、捕獲した水産物とその加工・流通、西新町遺跡における漁労活動を含む生産活動と社会経済活動の発達の具体相を明らかにしていきたい。

#### (2) 西新町型石錘の検討

##### ①九州型石錘の分類について

九州型石錘については、先行研究により形態や緊縛用の溝と孔の有無・数などによって分類が行われている（下條 1984・山中 2007・大庭 2009・林田・中尾 2014・森本 2015 他）。

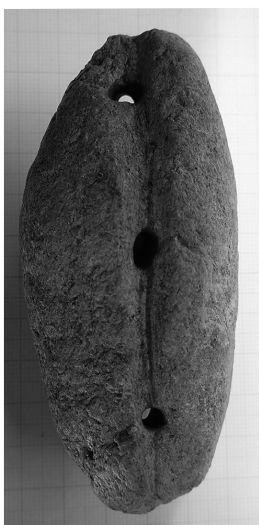


第74図 西新町型石錘と使用痕 (1/2)

西新町型石錘は、平面が長楕円形の上下左右対称的な紡錘形をなす横型の錘で、長軸に溝を施すものを基本とする筆者分類のⅡ類石錘である (26～29頁)。本稿ではⅡ類石錘全体の動向についても補足的に言及する。このⅡ類は山中英彦氏のⅠ～Ⅶ類の大別分類に大枠は従ったものであるが (山中2007)、細分については森本幹彦氏の分類案 (森本2015) などを参考にした。

②西新町型石錘の定義

西新町型石錘を含むⅡ類石錘について、林田好子・中尾篤志氏は平面形態、溝、穿孔の数量、場所などが多岐にわたり、各々を一様式とするか一形態内のバリエーションとして捉えるか判断としないとする (林田・中尾2014)。この理由は、九州型石錘の多くが滑石という加工が容易な素材で製作していることから、漁具の中でも個性が強く、多くのバリエーションが認められることが大きい。ちなみに、近世の熊本県天草地方では、釣針・疑似餌・釣竿等の漁具諸道具は個人所有品で、各自が加工を加えていた事例 (山下2016) と九州型石錘は各遺跡から未製品が出土し、自給生産が基本であったとみられることが整合することから、多種多様なバリエーションが存在すると理解できる。このため、各属性に基づき細分すると、1器種1型式状態になることから、形態も重要であるが、機能まで考慮に入れた分類が求められる。



第75図 西新町型石錘 (17次住7)

またⅡ類全体の分類については、体部断面も機能や編年に関わりがあるとの指摘から (森本2015)、体部断面が円形・楕円形に近いものを「A」、体部断面が矩形に近く製作時の痕跡を残す扁平なものを「B」とした。小分類として、溝の施溝位置が長軸のみが「1」、短軸のみが「2」、短軸と長軸両方が「3」、孔は1孔が「あ」、2孔が「い」、3孔以上は「う」に分類した (第74図、第3表)。

対象の西新町型石錘は、筆者の分類では「ⅡB-1-い類」ないしは「ⅡB-1-う類」にあたる。以下分類名で検討を進めると、先行研究による分類と名称が重複し、煩雑になるので、先述した乗松氏の呼称に従い (乗松2010)、これらを「西新町型石錘」と呼び、検討を進めることとしたい。なお、西新町型石錘は、下條氏分類では主に大形BⅢ型 (下條1984)、山中氏分類ではⅡB

今回、九州型石錘の分類にあたり、下條信行氏の分類 (下條1984) を基礎に、形態的・機能的な視点から分類・検討を行った山中英彦氏 (山中2007) と森本幹彦氏 (森本2015) などの優れた先行研究を参考に、筆者の分類 (大庭2009) に修正を加えて、新たに分類を行い検討する。

本稿で対象とする

類（山中 2007）、林田・中尾氏分類では II D 類（林田・中尾 2007）、森本氏分類では II B 2 類（森本 2015）にあたる。

弥生～古墳時代の玄界灘沿岸地域を対象に、西新町型石錘を集成したのが第 3 表である。集成の結果、西新町型石錘に当てはまるものは、3 遺跡 20 点であり、出土総数の約 9 割が西新町遺跡に集中する。

以下では集成成果とその分析結果をもとに、西新町型石錘の特徴を明らかにする。

### （3）西新町型石錘の観察

#### ①材質の特徴

西新町型石錘の素材は、すべて軟質の石材である滑石である。大規模な潟湖である博多湾は、多々良川、御笠川、那珂川、室見川などの河川が運んだ土砂が厚く堆積し、海底の底質のほとんどは泥地である。滑石は「温石」、「おんじゃく」などと呼ばれ、石の柔らかさから加工が容易である。かつ博多湾周辺の民俗例では、カナギ網において滑石製石錘が近年まで使用されていたことから（平川 1990）、泥地で曳く曳網などの漁法をとった場合、すべりやすい滑石が効果を発揮したとみられる。

西新町型石錘の製作にあたっては、先の滑りやすいという機能に加え、深い溝と複数の孔という複雑な成形が必要なため、加工しやすい滑石に素材が偏ったと思われる。先のカナギ網を用いた福岡市西区今津浜崎の漁師は、休漁期など漁網の手入れ時期に今津の毘沙門山等の近隣の滑石の露頭から滑石を拾い、使用する漁網に合わせて数種の沈子を製作し、一部は付近の漁村にも流通させたことが聞き取り調査で明らかになっている（平川 1990）。石材同定分析は行っていないものの、弥生～古墳時代における博多湾西部の滑石製石錘の一部は、距離的に毘沙門山等の滑石を素材として選択し、自らが船などを用いて採取・運搬し、集落内で自給生産したものであろう。

番号	遺跡名	分類	出土遺構	石材			法量			溝幅 (mm)	孔径			挿入番号	時期 (下限)	備考	
				石材の種類	色調	加工状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		重量 (g)	1 番上の孔径 (mm)	上から 2 番目の孔径 (mm)				上から 3 番目の孔径 (mm)
1	唐原遺跡	II B 類カ	SR-92	滑石	青灰色	●	(4.0)	(1.9)	(0.9)	(9.2)	3.0	5.0	5.0	175-16	弥生後期後半	西新町型石錘の可能性、2孔残存、大きく欠損、溝摩滅	
2	西新町遺跡第1次	II B-1-い類	C区住9	滑石		○	11.4	3.9	2.4	195.0	4.0	5.0	5.0	148-1	弥生後期終末	貫通失敗の孔1	
3	西新町遺跡第10次	II B-1-い類	SC037	滑石			(12.1)	5.4	2.7	(228.0)	2.5	8.0	7.0	34-080	弥生後期終末	一部欠損、溝端部摩滅	
4	西新町遺跡第12次	II B-1-う類	43号住居跡	滑石	にぶい黄橙色	●	11.4	5.2	2.5	228.8	9.0	4.0	5.0	4.5	243-27	古墳前期中葉	III 377 図 8 と同一個体、表面摩滅し、研磨痕みえず、溝はシャープではない、孔には使用痕
5		II B-1-う類	43号住居跡付近遺構面	滑石	緑灰色	●	10.4	5.0	3.3	239.4	8.0	4.5	5.0	4.5	243-28	古墳前期中葉	2孔未貫通、3孔貫通、溝には工具痕が残り、体部の摩滅も少なく、本来の形状に近い
6		II B-1-う類	43号住居跡検出面	滑石	灰黄色	●	9.3	3.9	1.7	102.9	4.5	5.0	6.0	5.0	243-29	古墳前期中葉	両面とも顕著な使用により、溝の彫りがなくなる
7		II B-1-い類	50号住居跡	滑石	灰白色	●	(7.0)	(4.6)	(1.2)	(46.4)	3.5	7.0	(5.0)		243-30	古墳前期	裏面大きく剥離
8		II B-1-う類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	(7.7)	5.0	2.0	(126.6)	7.0	3.5	3.0	2.5	149-5	古墳前期前半	穿孔3、上部欠損、孔・溝使用痕あり
9		II B-1-う類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	10.8	3.9	2.0	126.3	5.5	4.0	5.0	5.5	149-6	古墳前期前半	穿孔3、顕著な使用により、溝の彫りなくなる、割れたまま使用か
10		II B-1-い類	7号住居跡	滑石	灰色	●	8.0	5.4	2.4	143.9	6.0	4.0	5.5		149-7	古墳前期前半	穿孔2、溝・孔顕著に摩滅
11		II B-1-う類	7号住居跡	滑石	灰色	●	10.4	4.2	2.3	134.3	7.0	3.0	4.0	5.0	149-10	古墳前期前半	穿孔3、一部欠損、溝・孔・片面摩滅
12		II B-1-う類	7号住居跡	滑石	灰色	●	(9.4)	4.3	(1.1)	(66.6)	6.5	3.0	3.5		149-11	古墳前期前半	穿孔2、裏面欠損、孔・溝摩滅
13		II B-1-い類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	8.8	4.9	2.4	(142.7)	6.5	4.0	4.0		150-12	古墳前期前半	穿孔3で、1孔未貫通か、一部欠損、表面摩滅
14	II B-1-う類	7号住居跡	滑石	灰色～灰白色			13.2	4.8	2.7	254.0	3.0	4.0	4.0	150-13	古墳前期前半	穿孔3、裏面摩滅、溝・孔摩滅	
15	II B-1-う類	7号住居跡	滑石	灰白色			9.7	4.8	2.9	169.7	6.5	3.0	4.5	3.0	150-14	古墳前期前半	穿孔3、一面顕著に摩滅か、孔・溝摩滅
16	II B-1-い類	7号住居跡	滑石	灰白色			(6.5)	4.2	2.4	(101.1)	8.0	3.0	3.0	3.0	150-15	古墳前期前半	穿孔3で1孔未貫通、下半部欠損、孔・溝顕著に摩滅
17	II B-1-う類	7号住居跡	滑石	灰赤色			10.3	4.8	2.7	(175.0)	6.0	4.0	5.0	5.0	150-16	古墳前期前半	穿孔4のうち1孔未貫通、片面摩滅、溝・孔は摩滅
18	II B-1-い類	8号住居跡床面	滑石	明緑灰色			(8.0)	4.9	2.6	(148.2)	7.0	5.5			150-17	古墳前期前半	穿孔2、使用による裏面剥離
19	II B-1-い類	9号住居跡覆土上面	滑石	灰白色			10.6	5.9	2.7	(248.2)	9.0	6.5	5.5		150-18	古墳前期前半	穿孔2、孔・溝は摩滅
20	大塚遺跡第16-17次	II B-1-う類	SX069	滑石	灰白色に青灰色が縞状に入る	●	9.3	4.4	1.9	(148.8)	3.0	6.0	6.0		31-168	弥生後期後半～終末	全面摩滅、横方向への紐ずれもあるため、西新町石錘とは使用法が異なる。孔は縦方向の摩滅、下半部欠損後使用か

第 3 表 西新町型石錘一覧表

なお、西新町遺跡出土のⅠ・Ⅱ類石錘はいずれも赤色を呈する滑石が多い。釣用錘であるⅠ類石錘は疑似餌的機能として色調は重要と考えられている（大庭 2021）。一方、漁網錘と想定されるⅡ類石錘は色調は必ずしも重要な要素ではないと考えられるものの、素材採取時にはⅠ・Ⅱ類関係なく、大きさ、質とともに素材の色調を重視して選別した可能性がある。

加えて、西新町型石錘はⅠ類石錘と比べ、丁寧に研磨するものはほとんどなく、滑石自体の質も悪く、粗く雑な印象を受ける。この理由としては、海中で光り輝くことで疑似餌的効果も期待されるⅠ類石錘（大庭 2021）と、漁網錘のⅡ類石錘の機能差が素材や調整に表れていると理解され、採取後集落での自給生産にあたり製品の機能を意識した素材選別が行われていたと想定される。

ちなみに、中・大型のⅡ A-1 類石錘の素材は滑石がほとんどであるのに対し、重量 50 g 以下のⅡ類石錘でも滑石が半分以上を占めるが、粘板岩、頁岩、花崗岩、玄武岩、泥岩、砂岩、凝灰岩などの多様な石材が使用される。相対的に成形に手間がかかり、海底にめり込みにくく、滑りやすくすることが必要な、より大型の漁網錘ほど滑石を使用する傾向が顕著であることから、古代博多湾で漁労活動に従事した人々も滑石の利点を十分理解し、使用したと考えられる。

## ②製作技法

深い溝と複数の孔を有する西新町型石錘は、これまで未製品と特定できるものの出土はないが、観察結果から滑石の成形、溝の施溝・穿孔はすべて鑿や刀子等の鉄製工具を使用して製作したとみられる。西新町型石錘以外のⅡ A・B 類石錘は器表や溝などに鑿や刀子の鉄製工具による加工痕が残るものが相当数みられる。西新町型石錘にはこれらの痕跡や孔内にも回転穿孔痕はほとんどない。西新町型石錘は成形時に器表をある程度研磨していたとみられるが、工具痕が残りやすい溝内にも工具痕が残るものがほとんどないことから、西新町型石錘はいずれも著しい使用により摩滅していると解される。

なお、Ⅱ類石錘の多くが稜線が鋭く、幅 5 mm 前後、長さ 1 cm 以内の細かい切削が確認でき、河合章行氏による骨角器加工痕観察による分類では（河合 2013）、鉄製工具を用いた切削 B にあたる（第 76 図）。



この切削 B という加工法は鳥取県青谷上寺地遺跡では弥生時代中期中葉～後半に出現し、古墳時代前期初頭にかけて多様化するとされ、玄界灘沿岸地域のⅡ A・B 石錘の動向と一致することは注目される。

また山中英彦氏は、西新町遺跡出土Ⅰ類石錘は、外来系の海人が在地のⅠ類を模倣して石錘を自給したと指摘するが（山中 2007）、本石錘は表面、断面 V 字形の溝や途中で穿孔をやめた痕跡が多くあるなど、少なくとも弥生時代中期に概ね出現するⅡ類の製作技法の系譜を引くものであり、製作技法的には在地の人々が製作したものと思われる。



なお、近代以降の民俗例では漁網の石錘には溝を設けたものは少ないが、山下義満氏は近代以降の強固な紐による石錘への結びは沈子への固定化が比較的容易であるが、古代の網紐や釣糸は麻などの植物繊維が中心であることから、網紐の石錘への固定は溝がなければ困難であるとの指摘（山下 2015）は卓見である。深い溝と複数の孔により、沈子綱にしっかりと固定できることが本石錘の特徴であり、石錘と沈子綱をしっ

第 76 図 Ⅱ A・B 類石錘加工痕

かり固定する必要がある漁法での使用が想定されよう。

### ③分布と変遷、系譜

西新町型石錘は、弥生時代後期後半～終末に福岡市東区唐原遺跡や福岡市西区大塚遺跡で1点ずつの出土を確認できるが、古墳時代前期になると西新町遺跡でのみ出土し、西新町遺跡が衰退する古墳時代前期中葉以降、本石錘もみられなくなる。このことから、西新町型石錘は古墳時代前期前半に西新町遺跡の海人集団がⅡ類をより特徴的に特化・発展させたものと考えられる。

西新町型石錘の祖型にあたりとみられる長軸1条溝の中央に1孔を施すⅡA-1-あ類は、弥生時代中期後半に御床松原遺跡や今宿五郎江遺跡などでみられるが（林田・中尾 2014）、弥生時代後期後半～終末に出現する西新町型石錘はやや大型で、形態、溝、孔、製作技法などに規格性があり、形態や調整方法等バリエーションの幅が大きいⅡA-1-あ類や他のⅡ類とは明確に区別できる。

なお、下條信行氏は、韓国全羅南道長川里遺跡から出土した花崗岩製の多条溝をもつⅡ類石錘から、Ⅱ類石錘に加え、Ⅰ類石錘の系譜も朝鮮半島に求めている（下條 1989）。その後も下條氏は九州型石錘の起源について、韓国忠清南道の寛倉里遺跡や慶尚南道勒島遺跡などの韓国出土の石錘の事例から、弥生時代中期に北部九州に伝播し、弥生時代後期以降、各地に拡散したと指摘する（下條 2013）。

下條氏の朝鮮半島起源説については、筆者が朝鮮半島の状況を把握できていないものの、鹿角製アワビオコシなど（武末 2009）、列島と朝鮮半島との漁労文化の交流は認められるが、玄界灘沿岸地域においてⅠ～Ⅴ類石錘の時期的・形態的な変遷が追えることから、九州型石錘については基本的に列島内での成立・変遷を考えている。

### ④出土状況

西新町型石錘は出土総数20点と少ないが、Ⅱ類石錘自体、その一部は漁網錘と想定されるわりには、多くても1遺跡5～6例の出土に過ぎず、遺跡・遺構ごとの出土傾向もまとまりがなく、下條氏は釣用錘の可能性を想定したほどである（下條 1984）。

このことについて、Ⅱ類を用いた漁網は石錘の重量もあることから、網の規模が比較的大きくなることが予測され、網を広げて天日乾燥できる広い場所が必要となる。このため、その保管や管理にあたっては、基本的に海浜部近くの小屋で管理したと考えられる。よって、集落内で出土するⅡ類石錘は、石錘自体の修理で使用できなくなって取り替えたものや編物用錘具など他の用途に転用したものを竪穴住居跡の凹みに廃棄した可能性を考えている。

### （4）西新町遺跡 17次7号竪穴住居跡出土石錘群の再検討

以上の各項目の検討により、古墳時代前期前半、西新町型石錘が西新町遺跡においてある特定の漁法に対応して製作され、当該期の漁労活動の中で一定の役割を担っている可能性を抽出することができた。

なお、先行研究ではⅡ類石錘の用途について、平川氏が民俗例との比較検討から曳網系漁網の錘と指摘し（平川 1990）、森本氏は袋網系網漁の錘とする（森本 2015）。

先述したようにⅡ類石錘のほとんどが出土時点では本来の漁網の姿をとどめていないが、西新町遺跡 17次7号竪穴住居跡から出土した西新町型石錘12点と自然石162点は、住居廃絶後の凹みに漁網一式を廃棄したと報告され（重藤編 2006）、山中英彦氏も2種類の石錘を組み合わせた1組の漁網である可能性を指摘する（山中 2007）。さらに筆者も山中氏の指摘や関連する民俗例に基づき、漁網の復元的な検討を行い、自然石石錘は摩滅及び磨り減りがみられることから、自然石石錘が海底に接する刺網の一種である浮網系漁網で使用されたとした。また、西新町型石錘は漁網の要所に配され、漁網のねじりを

防ぎ、バランスをとるための役割を担っていた錘の可能性を指摘した（大庭 2009）。

その前稿では西新町遺跡出土石錘のみの検討であったが、その後、他の遺跡出土漁具の様相や周辺環境などと考え合わせる機会を得たことで、新たな復元案を見いだせた。本例は、漁網一括資料で重要な事例であることから、ここでは前稿での検討（大庭 2009）を基礎に、再検討を試みたい。

### ①出土状況の検討

石錘群は住居床面のやや北寄りに位置する炉跡上部の長軸 1.3 m×短軸 0.9 m の楕円形を呈する範囲からまとまって出土した。第 77 図ではこのうち西新町型石錘 12 点をトーンで示すが、西新町型石錘は石錘群東と中央、南側と分散し、その配置から報告者の指摘通り（重藤編 2006）、竪穴住居廃絶後の凹みに漁網を丸めて廃棄した可能性が高い。多量の漁具が出土した西新町遺跡においても各種の石錘は各竪穴住居等 1 遺構に数点程度の出土で、まとまることはないが（大庭 2009）、この漁網は何らかの理由で集落内に持ち込まれ、石錘は網についたままでもそのまま廃棄されたと考えられる。加えて石錘群北東側は出土レベルが高いことから、廃棄時の網最上面部分が北東部であったと想定される。

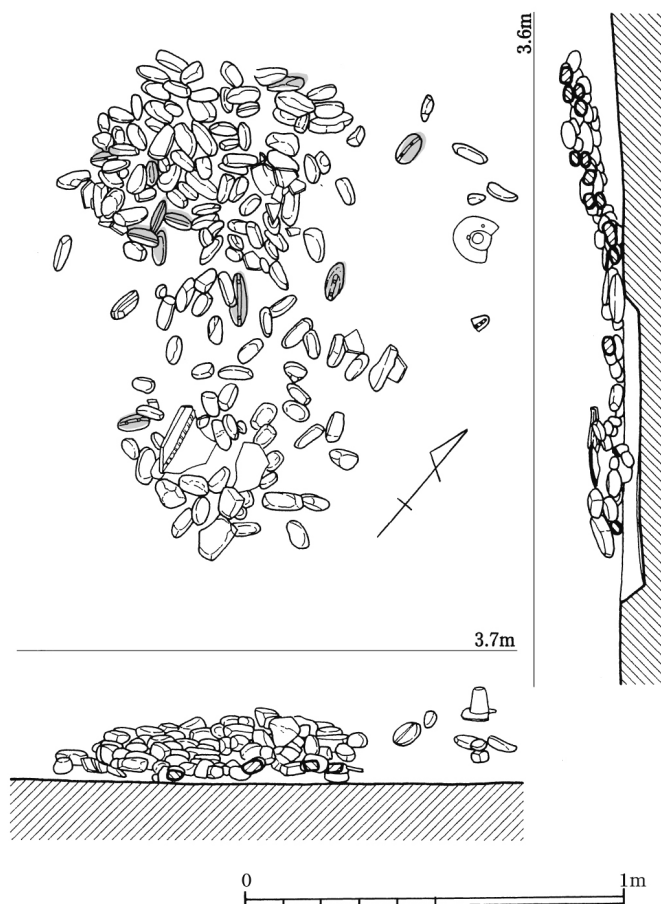
当時の海岸線は、遺跡北端から 200 m 程度で海岸線と想定されるが、重量や使用後に網干を行う必要があり、湿気や漁網に付いた魚の臭いのため、ネズミの被害に遭いやすい漁網は基本的には海岸近くの管理小屋等で置かれていたとみられる。そう考えると、集落内に漁網をそのまま持ち込んだ本例は、台風をはじめとする強風から藁等で葺いた竪穴住居の屋根を保護するため、古くなった漁網を屋根の上にかけるなど（第 78 図）、網としての機能の中でリサイクルされたものの可能性がある（田辺 2002）。ちなみに、釣用錘などはメンテナンスのため、石錘単独で集落内や竪穴住居に持ち込まれた可能性も考え

られる。また網用錘の単独ないしは少数の出土のものについては、先述したようにその一部は、漁網用の編物用錘具などにリサイクルされている可能性も考える必要があろう。

### ②石錘群の観察

今回の検討にあたり、西新町型石錘と自然石錘の再調査を行った。石錘群の法量を検討するため、重量を横軸に、長軸/短軸の長さ比を縦軸にしたのが第 79 図である。

法量グラフでは、自然石錘（図の●）の多くが長/短比は 2 前後、重量は 100～200g 内に収まることから、自然石錘は大きさ・形態、重量を概ね揃えて採取している。自然石錘の形状は俵型であるが角があるものが多いことから、緊縛に適している形状である。長軸方向に紐ずれ痕はなく、縦方向に紐掛けや網を添えていない。一



第 77 図 17 次 7 号竪穴住居石錘群出土状況（1/20）

方、短軸方向に紐ずれ痕や窪み・摩滅がわずかに認められることから横長に使用したと思われる(第81・82図)、痕跡の幅から多くは綱・紐を一重巻にしていたとみられる。石の色調は前稿では黒色系としたが、灰色系を主体に灰白～赤灰～黒色とバリエーションに富んでおり、色調は不統一である。なお、自然石石錘は被熱したものが多いが、この理由は不明である。西新町型石錘(図の▲)の重量分布帯は、102.9 g～254 gまでと自然石石錘とほぼ同様の重量分布を示す。



第78図 網による竪穴住居屋根の保護

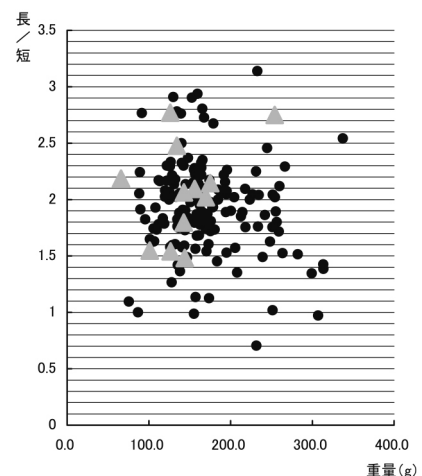
民俗例における糸島郡志摩町野北におけるカナギ漁で使用された滑石製沈子は、当初400g前後で製作されるが、次シーズンでは磨り減ることで200g前後となり、100g以下になると廃棄したとされる(平川1990)。前稿ではこの民俗例を主な根拠として、自然石石錘は重量分布が約100g～300gを示すことから(第79図)、自然石石錘は使用により磨り減ったとした(大庭2009)。

しかし、再調査の結果、使用により若干摩滅しているものの、先の紐ずれ痕跡も若干くぼむものがわずかにみられる程度であることから(第81・82図)、ほとんど摩滅していないと見解を変更する。また自然石石錘の材質は1/162点にのみ滑石である一方、西新町型石錘は全てが滑石で、特に片面側が顕著な摩滅が認められることと対照的である(第74・80図)。自然石石錘を観察すると、丸い海岸石は少なく、川原石に近い印象を受け、九州型石錘の多くを占める滑石製ではほぼないことから、加工せずに使用できるものを意図的に採取したとみられる。このように、当初は1組の漁網と考えていたが、使用痕跡の差からこの石錘群は二種類の網であると思われる。このことについては、次節で検討する。

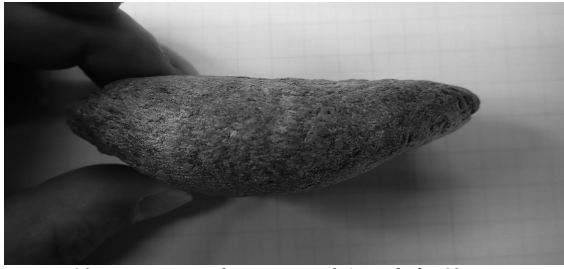
なお、西新町型石錘は約250gを測るものが1点存在し、重量分布にバラつきがあることと先の観察結果から、当初は250g程度に製作され、その後の摩滅により、重量が減少したとみられる。前稿では西新町石錘は表面に加工痕がないことを主な根拠として、西新町型石錘は成形時に表面を平滑に研磨したと判断した(大庭2009)。しかし、今回製作技法の検討に加え、西新町遺跡17次7号竪穴住居跡出土西新町型石錘は片面のみの破損や摩耗が目立つこと(第74・80図)から、前稿とは異なり、特に片面のみが海底に接し、海底で曳かれる状態で使用・摩滅したと見解を変更する。

さらに、本石錘の孔に強い力が加わるのであれば孔は破損するが、観察では片面破損・摩耗するのに対し、孔が形を保つものが目立つ。以上のことから、西新町型石錘は横位や縦位にも使用可能であるが(下條1984)、片面を中心に摩滅することから横位で使用したとみられる。また孔は溝に添わした沈子綱と石錘との固定のために使用されたと想定される。

この使用痕跡は、第74図に示すように先の今宿浜崎の民俗例において、沈子綱が石錘の溝両側を通り、海底を曳かれることで片面に強い擦痕が残り、磨り減る、または使用による摩滅が顕著にみられ、2シーズンで使用不可能な状態になるため、常に新しいものを補給しなければならないという指摘(平川



第79図 西新町遺跡17次7号竪穴住居石錘群重量分布



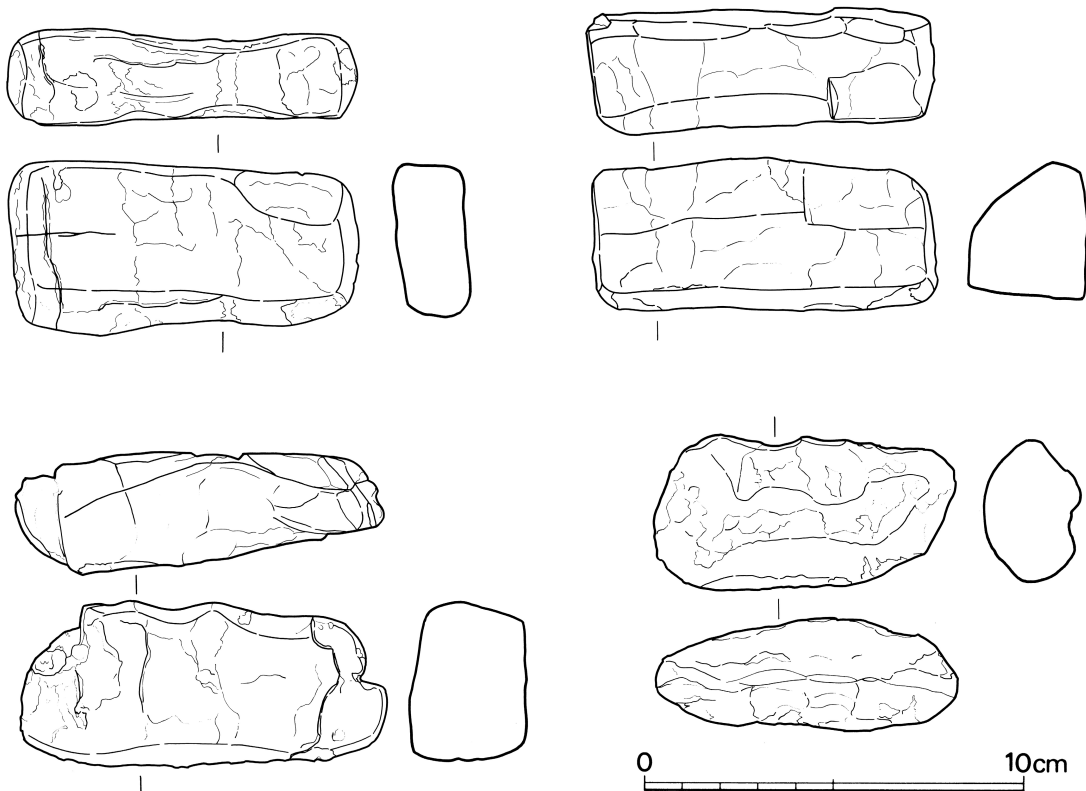
第 80 図 西新町型石錘の摩耗状況



第 81 図 自然石石錘

1990)と同様の観察結果で、西新町型石錘の使用用途を明確に示すものである。

真鍋篤行氏は自身による土錘の分析方法(真鍋 1993)と同様に、石錘の溝幅に注目し、石錘の溝幅が釣漁具の場合は釣糸の太さ、綱漁具の場合は沈子綱の径に関連するとし、溝幅が漁具の特定に有効であることを示した(真鍋 1995)。本石錘の溝幅は対象資料の最小幅で計測したため、溝幅=綱径とイコールではないが、3~9mmの幅で、孔径よりは確実に大きい(第3表)。溝の形状から溝に添わした綱径は溝幅より大きかった可能性が高く、管状土錘Cの孔に通した10mm程度の径の綱を本石錘の溝に添わしていた可能性を考えている。また実測図では片面しか図化していないが、資料調査の結果、両面で溝幅はほぼ同様の数値を示す。孔径も真鍋氏の研究に従うと、孔径は2.5~8mmまで幅があるが、4mm前後に集中し、3孔の場合も上、中、下の孔径のバラつきが少ない(第83図)。古墳時代の綱漁は刺網漁と曳網漁があり、操業単位は曳網漁の方が大きい。曳網漁の沈子とみられる本遺跡出土管状土錘Cの孔径が10mm以上を測るのに対し、西新町型石錘の孔径は平均4mm前後と棒状土錘を用いた刺網の沈子綱の径6mm程度(小澤 2020)よりも細い。このことから、本石錘の孔は沈子綱を通したには細すぎ、先の観察結果と同様、沈子綱を通したのではなく、綱と石錘の固定のため別の紐を通したり、綱自体とのバランスをとるための紐を通したことが機能が想定できる。



第 82 図 自然石石錘実測図 (1/2)

③漁網と漁法の復元

弥生～古墳時代の漁網は、近世以降の漁具と比較すれば、一種類の漁網が多機能を有していた可能性もあり、単に形態の類似だけで、弥生～古墳時代の漁具の機能・用途にそのまま当てはめることは注意を要することを念頭に置いて漁、網・漁法の復元を行う。

前稿では民俗例の使用法をそのまま引用し、汽水域に棲息し、網を使って捕獲しやすい「ボラ」を対象とする「筑前地方のボラ網」のような浮網の可能性を考えた（大庭 2009）。

再検討の結果、西新町型石錘は摩滅しているが、自然石錘は摩滅が少なく、浮網のように激しく海底で動いた痕跡が認められないことから、自然石錘は沈子網に直接ないしは沈子網から垂らした紐に結び付けた形で使用した、網裾が海底に接する漁網に近い形が考えられ、浮網の可能性は低く、前稿での見解を変更したい。

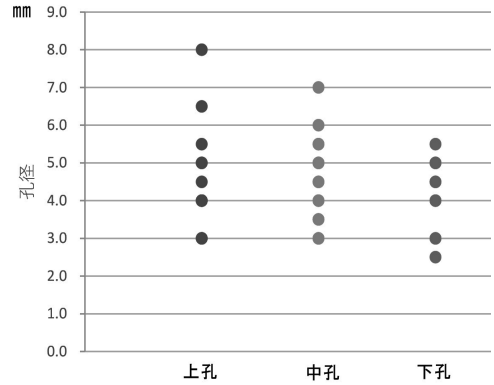
またその後の調査で西新町型石錘とほぼ同じ形態の土錘（真鍋氏の有孔穿孔土錘）が中世～近世段階に瀬戸内地方でみられることと、使用痕跡から2つの漁網が組み合わさり使用された可能性が判明したため、漁網・漁法についても再検討する必要がある。ここでは民俗例との比較研究に基づき、本石錘を使用した漁網・漁法の復元案を新たに提示したい。

漁網の復元

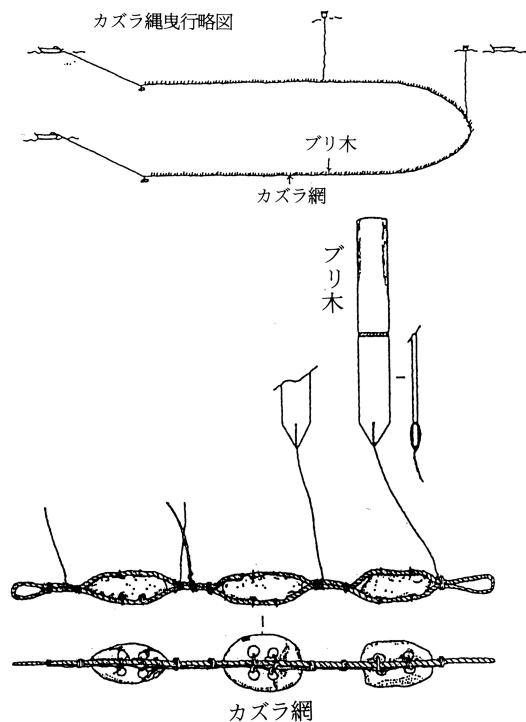
前稿では、民俗例を引用し、西新町型石錘は網のねじりを防ぐため添網と組み合わさり縦位に装着され、孔と溝には沈子網と添網とのバランスを保つための網・紐を通し、上下の沈子網のバランスを保つことで漁網がからまないような用途、つまり浮網の一種と理解したが（大庭 2009）、先の石錘の観察から、曳網の要素が強いことが明らかになった。その後、類例などを調査していく中で、西新町型石錘と形態、大きさが酷似する、中世～近世の有溝穿孔土錘が曳網で使用されていることを確認した。

この有溝穿孔土錘とは、タイシバリ網という水深30～45 m程度の浅い岩礁帯で操業したまき網とセットで用いたカズラ縄の土錘で、播磨灘や備讃瀬戸地域の中世～近世の遺跡からも同様の形態のものが出土し、瀬戸内地方や大阪湾、和歌山県田辺市では近年まで使用（四ツ目とも呼ばれる、真鍋 2021）されていた（第84・85図）。宮崎県域においても、中世後期～近代まで使用された、地曳網の一種の可能性が想定されている「四ツ目土錘」が確認されている（藤木 2006）。特に17世紀の兵庫県兵庫津遺跡第14次第3遺構面出土有孔穿孔土錘は長さ10 cm前後、重さ180 g前後、資料観察では、側面は摩滅し、曳網系漁網で使用されたと考えられることから、本石錘の観察結果と調和的である。

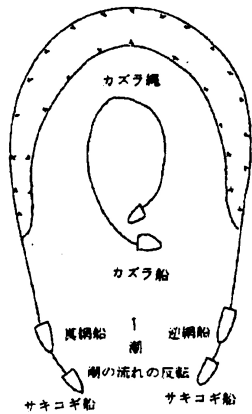
この漁法は、潮のゆるむ時間、船2隻で「ブリ木」



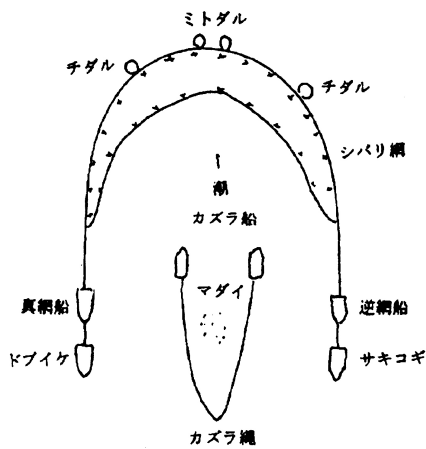
第 83 図 西新町石錘孔径比較



第 84 図 カズラ縄使用状況（真鍋 2021 より引用）



直島のタイジバリ網



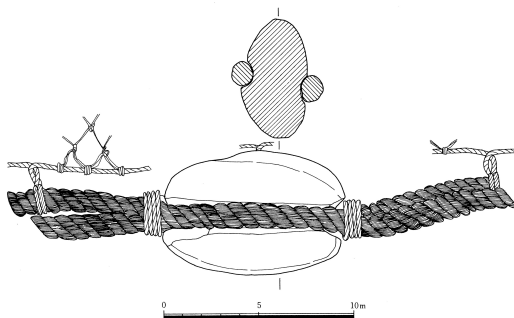
仁尾のタイジバリ網

第 85 図 タイジバリ網の2つの漁法

(真鍋 2021 より引用)

自然石石錘と酷似する石錘の短軸側を紐で結び、沈子網と固定した民俗例は(第 87 図)、自然石石錘の使用法を推測させ、タイを目的とする網であることから、先のタイシバリ網と調和的である。

さらに、明治時代、筑前海の基幹漁業として発達した「ごち網漁」は、先の瀬戸内地方のタイジバリ網からカズラ縄を除いた形の曳網で、潮流や魚の習性を利用し、網の両端につけた長い曳網によって、目的とする魚を網の前面に移動させ、すくい上げて捕獲する漁法である(福岡県水産林務部漁政課 1991)。特に「ごち網漁」の中でも、タイやキスなどを対象とする「手びきごち網」は、ブリ木を網に



第 86 図 カナギ網の石錘と沈子網の装着状況

(平川 1990 より引用)

と呼ばれる、短冊型のスギの薄板を多数装着したカズラ縄(第 84 図)を曳く。このことでブリ木は海中で揺れ光や音が発生し、加えて漁師が船縁を棒などで叩いた音と振動によって、タイをタイシバリ網が待機する場所まで誘い込み、網を巻きタイを捕獲した、まき網漁法の一つである(第 85 図)(真鍋 1995・1996・2021)。マダイは、初夏の産卵期以外は岩礁帯の海底近くに棲むことから、通常の曳網では捕獲が難しい習性を利用した漁である。なお、この漁法では風が強い時や潮流が速ければ網を揚げることはできない。この有溝穿孔土錘の特徴について、真鍋氏は土錘両面の溝に沈子網を2本並行して装着することで網の強度を強く保て、かつ孔に紐を通して沈子網と緊縛することで石錘と網を固定できることから、曳網に適しているとした(真鍋 1995)。加えて断面が扁平な形状から、タイの棲息する岩場で使用しても、岩をうまく避けることができるとする。以上のことから、中世～近世の有溝穿孔土錘もカズラ縄に装着され、先のタイシバリ網のような岩場で操業するまき網で使用した可能性が高いとした(真鍋 1995・2021)。

この事例は地理的にも時間的にも距離があるが、先に示した今津浜崎の底曳網であるカナギ網では、石錘の長軸方向に両面に巡らした溝に沈子網を1本ずつ通し、サンドイッチ状に石錘を挟んで沈子網に装着した事例は(第 86 図)、先の有溝穿孔土錘の使用法と近い。

また大分県のタイ地漕網(地曳網)という曳網系の漁網で

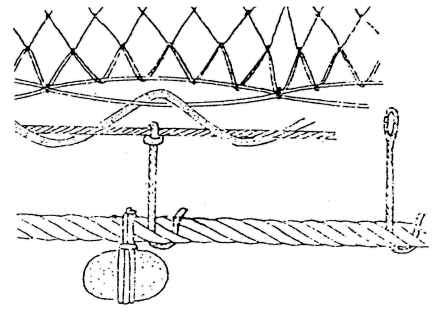
装着し、楯切網などを利用して、捕獲するタイなどの魚類の進路や退路を遮断した上で、声や船の側板をたたき、網に追い込み捕獲した。江戸時代後期の『肥前国産物図考』には、地曳網ではあるが、ヒノキで作られたブリ木を装着した「鯛網」が描かれている。これは、ブリ木を大量に装着した「振縄」を海底を曳き、深い所に棲息するタイを岸近くの砂泥地の浅瀬へタイを誘導し、背後から地曳網を掛けまわして捕獲したもので、先のタイシバリ網と調和的である。

これらのことから、玄界灘沿岸地域でも先のタイシバリ網と類似する漁具・漁法が存在すること、「手びきごち網」の網の長さは25mと近代でも小規模な曳網であり（福岡県水産林務部漁政課1991）、船2隻程度の規模で行えること、さらに『延喜式』に記載されたタイの貢納国として、三河・伊勢・志摩の伊勢湾・和泉・紀伊・讃岐・若狭・丹後・筑前・筑後・肥後などが挙げられ、筑前海における明治24年の漁獲高でもタイはイワシに次いで2位であり、玄界灘沿岸地域は古代からタイの産地であること、西新町型石錘は民俗例にあるタイジバリ網のカズラ縄の有溝穿孔土錘と形態が酷似すること、特に沈子網2本を両面の溝に並行して装着できることで沈子網の強度を強く保て、加えて岩を避けることができる形状など、総合的に考えると、西新町型石錘と自然石石錘を使用した漁網及び漁法は、先の瀬戸内地方のタイシバリ網の内容と調和的であると考えられる。なお、西新町型石錘を用いた漁法は、西新町型石錘の顕著な摩滅から網裾が海底に着床する陸に近い地先で行ったと想定され、かつ摩滅の少ない自然石石錘から陸地近くにおびき出されたタイ等を地曳網ではなく、2隻の船で網を回した「まき網」で捕獲した。いわゆる地漕網に近い形と推測している。もしこの想定が正しければ、真鍋篤行氏は中世に沖取りの地漕網が成立した可能性を指摘するが（真鍋1997）、西新町石錘を用いた漁網が原始的なものの可能性があるが、地漕網の成立年代がかなり遡ることになる。

加えて、1組の曳網系漁網として考えると、西新町型石錘と自然石石錘は摩滅差があり、西新町型石錘は使用痕から横位で用いられた可能性が高く、網のバランスを保つ役割よりも沈子網を強固にする機能であったと想定されること、1組の漁網としてバランスを保つ役割を担うには12/162と西新町型石錘の数が相対的に少ないこと、一方自然石石錘は摩滅痕がほとんどなく、タイジバリ網のような網裾が海底に接する、まき漁網での使用とみられることから、カズラ縄・タイシバリ網という2種類の漁網がセットで使用された漁法に近い形であったと考えたい。以上、西新町型石錘を使用した漁網は、先に指摘した浮網の可能性も残るが、西新町遺跡第17次7号壁穴住居跡出土石錘群から復元される網は、西新町型石錘とブリ木という木片を装着した網を曳いてタイを脅し、まき網であるタイジバリ網まで追い込み、タイジバリ網を巻いて捕獲した漁法に推定復元できる。この漁法は、まき網という袋網系漁網技術が用いられており、備讃瀬戸地域由来の管状土錘Cを用いた袋網系漁網の影響を受けている可能性がある。

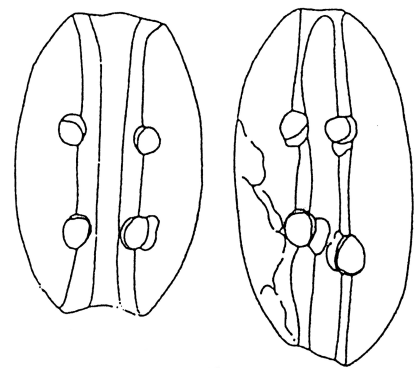
漁法

先の民俗例における浮網のボラ漁で使用されたボラ網の沈子は、上下の沈子網から延びた綱に約300gの滑石製縦長石錘（筆者分類のII A-3-あ類）を縦位に結び、1尋（約150cm）につき5個装着して使用したものである。石錘の装着間隔や網の規模などは今後検討すべき課題であるが、自然石石錘が1尋につき5点装着されたとすると、約35尋（約52.5m）ほどの規模になる。一方、

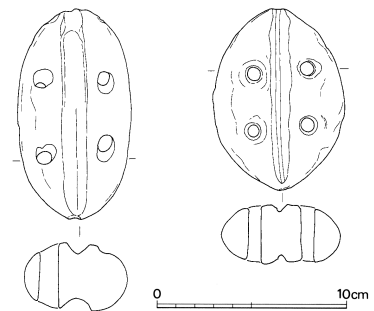


第 87 図 タイ地漕網

（真鍋 1995 より引用）



兵庫県加茂遺跡(中世)



兵庫県兵庫津遺跡(近世中期)

第 88 図 有溝穿孔土錘 (1/4)

刺網の規模は古墳時代後期中葉の和歌山県西庄遺跡5号住居跡出土棒状土錘31点の出土から15m程度と予測され、この自然石錘を用いた漁網はこの時期としては大型の漁網となる。また自然石錘の総重量は30kgを越し、網、浮子、また植物繊維の網自体が海中で吸収する水分量を考慮すると、海中では網自体100kgに近い重量であった可能性がある。

棒状土錘を用いた刺網系漁網は、1回の出航につき複数の操業回数を重ねることで効率的に漁獲したと想定でき、世帯単位を最小とする船1隻で可能な規模であったとみられるが、長さ50mを越す規模に復元されるこのまき網漁では、小規模な船団による漁法に変化した可能性が想定される。ちなみに、時代は下るが、積山洋氏は平安時代初頭の『日本霊異記』の記事から、奈良時代の網漁では1名が操船、2名が網の操作を行い、計3名が操業の基礎単位となるが、基礎単位3つ(3船)で船団を組み操業した場合もあったという指摘は(積山2021)、本例の操業規模を考える上でも参考になる。

弥生時代後期～古墳時代前期の兵庫県袴狭遺跡出土木製品には大小の準構造船17隻による船団が描かれているが、大小の船による航海はそれぞれの船のスピードが異なるため船団としての航海には否定的な見解があり、またこれが単体の船を多数描いたものか、船団を描いたものかの議論がある。しかし、中国の史書において、倭が生口160人や30人を献じたとの記事から、同じ大きさの複数の船による船団を組み中国への遣使が行われたと思われるため、漁労活動においても小規模な船団が存在した可能性を十分想定できうる。なお、先述したように自然石錘の多くは砂岩製で滑石製ではないが、海底が泥地で曳網の場合、滑石が機能的に優れているが、御床松原遺跡出土動物遺存体は岩礁性の魚類が目立ち、砂丘上の遺跡でも主たる漁場が岩礁域であったと想定されていること(金子1983)と非滑石の自然石錘はまき網で使用されたとみられることと調和すると考えている。

このように、弥生～古墳時代の網漁では基本的に外洋性の魚類よりも、魚類が豊富な岩礁域、地先漁場に棲息する魚群に対応した漁労技術を発達させたものと推定できる。ただし、西新町遺跡周辺にはタイが棲息する岩礁域はなく、西公園周辺ないしは博多湾西部の糸島半島東部にまで行く必要がある。縄文時代の漁労活動は半径5～10kmのテリトリー内で行われたという指摘から(赤澤1969)、弥生時代のテリトリーもさほど変わらない領域であったとすると、タイ漁という想定が正しければ、西新町遺跡の海人集団は岩礁が多くある糸島半島東部まで漁労活動の領域として出漁していた可能性がある。

#### ④漁網の規模からみた操業規模の拡大

古墳時代初頭前後、博多湾沿岸地域では瀬戸内地方などから袋網系網漁で用いられた管状土錘C、刺網系網漁で使用された棒状土錘など様々な漁具が導入されたことが指摘されている(乗松2010他)。特に管状土錘Cを用いた袋網系漁網は操業にある程度の人数を要して曳く操作が想定されており(真鍋1995)、管状土錘C出現以前の弥生時代後期前半までの操業規模(=人数)に比べて2～3倍、操業規模が拡大する。これは、備讃瀬戸北岸で達成された操業規模の拡大化を伴った袋網系漁網を含む漁労技術がこの時期に博多湾などの各地に拡散したものと捉えられる(乗松2007)。またこの背景として管状土錘Cを用いた袋網系網漁によって捕獲された特定の水産物が、需要度の高い特産物として流通したとの指摘から(乗松2007)、玄界灘沿岸地域においてもこの袋網系網漁による水産物の需要があった。これにより、西新町型石錘と自然石錘を使用した新たな漁網の出現を促したと想定できる。

博多湾沿岸地域における網漁は、西新町型石錘と自然石錘を用いたこれまでと数倍の規模の曳網系漁網の出現と、先の管状土錘Cの博多湾沿岸地域への伝播とが、時期的、規模的に整合することは注目される。つまり、特産物としての需要の高まりに対し、備讃瀬戸内系の袋網系漁労技術の影響のもと、石錘を用いた網漁という伝統的漁法に基づき、博多湾の環境に適した新たな漁具を創出したのが、西新

町型石錘と自然石錘からなる漁網という可能性が考えられるのではなからうか。

ちなみに、弥生・古墳時代の瀬戸内地方の石錘の溝は浅く、幅広いである敲打技法で施溝されるが（真鍋 1995）、北部九州では鉄ノミによる石錘の施溝が多い。瀬戸内地方西部では鉄ノミによる施溝を有する有溝石錘が存在することから、九州型石錘と鉄素材・鉄器の流通との関連性を強調する意見を踏まえると（柴田 2013）、管状土錘 C・棒状土錘とは逆に玄界灘沿岸地域の石錘の影響とする考えもできるが、瀬戸内において鉄ノミによる施溝は釣用錘の石錘のみであるのに対し、玄界灘沿岸では漁網錘をはじめ、多くの石錘で用いられる。また瀬戸内地方からの影響は製塩土器や飯蛸壺延縄漁など多岐にわたるが、両者の伝播のベクトルに差があるため、溝の製作技術のみで影響の有無を議論はできないと考えている。

#### （5）西新町型石錘を使用した漁労活動による生産と流通についての試論

##### ①西新町型石錘を用いた漁網による海産物生産と流通の推定

以上みてきたような網漁の発達には、特定の漁獲物を効率的に捕獲できたと推測されると同時に、漁獲物の保存の問題が生じる（真鍋 1994・1995・1996）。すなわち、漁獲物を捕獲・運搬し、必要に応じて加工処理し、保存調理することで長期保存が可能になり、その加工品が長距離輸送や大量流通したという利用モデルを考える必要がある。奈良時代の調では、カツオ加工品や干アワビを整形し、薄く長く伸ばしたものである「熨斗アワビ」、魚肉を細片した塩干である「楚割」などが水産加工品として知られる。弥生～古墳時代の水産物がどのような加工法で、加工品となったかは具体的には明らかではないが、土器の詳細な使用痕観察から、加熱を伴わない保存食や魚を焼く調理の比重が高まったとの指摘（小林 2017）や、少なくとも冷蔵機能のない当時、食品としての水産物は塩蔵か乾燥品で保存せざるをえないとの指摘から（三舟・大平 2021）、塩と水産物生産は両者不可分の関係にあると考えられる。

西新町型石錘を用いた漁網は、タイを捕獲対象にした可能性を示したが、タイの特性として味が淡白で癖がなく、生・焼く・煮るなどの多様な調理にも合うことに加え、身が筋肉質で腐りにくく、かつ変質しにくく、ひと塩すると保存性も増す。塩を振っただけないしは一昼夜程度塩水につけて少し乾燥させた比較的簡単にできるタイの加工品は長期保存はできないが、古くから内陸部の集落に流通した水産加工物であった可能性を考えた。

古代の都城出土の木簡のうち、タイ（多比、田比）で最も多い加工品は内臓を取り出さず丸干しした「腊」で、魚肉を細長く切って干した「楚割」や魚の内臓を取り出し、中に米（飯）と酒を合わせたものを詰めて発酵させた「鮓・鮓」もある。『延喜式』では、タイは干物や塩漬け、「なれずし」のような発酵食品といった長期保存の可能な加工品が多い（山崎 2021）。伊勢神宮の神饌にも、「干鯛」と呼ばれる、生鯛の内臓を取り除き、塩水につけた後、晴天の日に2日間ほど乾燥させた鯛の加工品が現存する。またいったん塩水で煮た後、日干しする、いわゆる「煮干し」すれば、より長期保存が可能である。

なお、藤原宮跡や平城宮跡のトイレ遺構から寄生虫卵が検出されていることから、鮮魚としての需要があり、藤原宮や平城宮からは「だし」をとるためか頭部を割った状態の鯛の頭部や貝類ではアワビやサザエ、ウニなどの殻が出土する（山崎 2021）。よって、漁獲した魚介類の一部は鮮魚として周辺の集落に流通させたことも考えられる。しかし、徒歩で鮮魚として流通可能な範囲は半径5～6 km程度である（藤井 2019）。古墳時代後半期以前においては、海路はともかく陸路の整備は未発達であり、『延喜式』に記載されたタイの貢納国のうち、鮮魚として貢納する国は和泉国のみとみられることから、内陸部へ提供される水産物は、日干しなどの乾燥や燻製を含む焼いたものなども考えられるが、最も日持ちする塩蔵加工品が主要なものであったと想定しうる。

塩蔵加工品とするためには大量の塩が必要である。このことについて、水産物の加工・保存、流通を考える上で塩と水産物の技術の発達が発達が密接に関わってきたとの指摘（真鍋 1994・1995）や博多湾沿岸の土器製塩遺跡と漁具出土遺跡がほぼ一致することから、博多湾沿岸地域において製塩活動と漁労活動が有機的に結合することで一連の生産活動を構成していた可能性が高い。

古墳時代になると、博多湾西部の今宿遺跡などで備讃瀬戸系（Ⅲ b 式～Ⅳ a 式）や大阪湾系の製塩土器及び製塩技術を受容する（藤本 2019）。この土器製塩という集約的な塩生産の盛行により、水産物加工が発達したと考えられるが、製塩土器の出土量と分布から古代に比べ塩生産規模は格段に小さい。西新町遺跡では強い被熱を受けた製塩土器の出土は比較的少量で、炉跡なども未確認であることから、消費遺跡に分類されている（平尾 2007）。以上のことから、食塩含有率が 20%以上で、1ヶ月以上の保存が可能な本格的な塩蔵加工品を生産できたかどうかは疑問である。

このことから、ひと塩振る、ないしは濃い食塩水につけて干すことで、タイやボラなどの白身魚であれば、保存効果も高く、それらを対象にした漁具・漁法が発達したと想定されよう。

ただし、西新町遺跡では漁具が多く出土するものの、動物遺存体の出土は報告されていないことから鮮魚として流通させた可能性も残る。ちなみに、生鮭の都への貢納に係る常温状態での生鮭の安全性の実験では、魚類の頭部、鮮度が低下した魚や内臓を取り除かない丸干し、薄塩の塩蔵品には蠅がたかりやすいとの指摘（山崎 2021）や、御床松原遺跡では海辺に近い場所で魚を解体した可能性が指摘されていることから（金子 1983）、西新町遺跡ではたとえ鮮魚であっても蠅害などの腐敗するリスクを高める頭部や内臓の除去は遺跡周辺で行った可能性が高い。また、動物遺存体が出土しない理由としては漁具の管理保管場所や海産物加工場は集落外の採取に近い場所に拠点が設けられるなど、管理・加工の場は集落の縁辺、集落外に設けられ、集落（遺構）内に持ち込まれる部位が選別されていた可能性がある。

なお、西新町遺跡における漁具の出土分布については、集落の北～北東の海側に石錘の分布がまとまる傾向にあり、漁労活動に従事した人々は集落内でも海に近いエリアで活動したと考えている（大庭 2009）。朝鮮半島東南部の国際交流拠点の一つである金海官洞里遺跡では、船を接岸して荷揚げするための栈橋と道路、荷物を保管する倉庫、井戸などが発見されている。西新町遺跡でも漁労やその他の生産域が明確に分離していないものの、ある程度規則的に配置された集落構成を推測しており、遺跡北東エリア周辺に船着き場及び荷揚場、水産物加工場、漁具保管場所があった可能性を考えている。しかし、海人集団が明確に他の集団と異なる区画に居住したかという集落内空間の分け方については、これまでの考古学的な成果では明確な法則をつかむことができておらず、今後の課題でもある。ちなみに、西新町型石錘で復元される漁も数隻の船で行える、比較的小規模な操業規模であることから、明確な区画を占有するほどではなかったとも理解できる。

今後、集落の中で、漁具がどのような施設や場からでるのか詳細に検討を行うとともに、今回十分な検討するに至らなかった集団の專業度の問題については同時期の漁労関連遺物を持たない集落との対比も心掛ける必要がある。西新町遺跡においても、実際には調査地点が偏って不均衡である場合が多く、また調査した範囲がすべてではないので、失われた資料や未調査地点がどのくらいあるのか、集落の範囲はどこまでかを常に検討した上で、水産物の捕獲から加工、廃棄に至る過程、海岸部がどのように利用されていたことも念頭に置いた調査研究が求められる。

加えて、西新町遺跡で検出したカマドは橙褐色粘土を使用するものと、白色を呈するしまったやや粘性のある砂で構築するものがある。このうち、白色を呈するものは、砂にカルシウムを主とする貝粉や海水に由来する苦汁成分（マグネシウム）を添加したことで固めた可能性を考えており、今後の調査に

あたってそのような視点も取り入れる必要性を感じている。

## ②漁労活動にみる西新町遺跡の特質について

古墳時代前期、列島各地で地域の特産物的な物資を創出し始めるとの意見（西川 2015）があるが、先の検討結果で高い商品価値が付与された可能性がある、タイのような大型魚の選択をするようになったと捉えられるのであれば、西新町遺跡の海人集団が外部物資を調達するニーズの高まりに対して水産物を特産物化し、流通させることで、その代償を回ったと理解できる。つまり、この水産物の獲得は需要側の要請や生産品の流通状況に強く規定されていたともいえる。

乗松真也氏は、西新町遺跡の漁労活動について、袋網系網漁や釣漁、飯蛸壺延縄漁などの複数の漁法が採用されたことは、交易品としての季節性の高い水産物の必要性の有無に応じた漁労が行われたと理解でき、在来の漁具に加え、新たな漁労技術の導入によってさらなる交易対象品としての水産物を調達し、交易への関与を強化、深めようとしたと指摘する（乗松 2010）。

この指摘を具体的にみてみると、弥生時代中期後半～後期前半に開始される今宿五郎江遺跡などにみられる木製ヤスとⅠ類石錘を用いたイカ釣漁（大庭 2021）を主とした専門的漁労活動の萌芽的段階から、古墳時代前期前半の西新町遺跡では網漁の大型化に伴う労働編成の大規模化を読み取ることができるとともに、大阪湾、播磨灘沿岸地域由来の飯蛸壺延縄漁（平尾 2003）、従来の漁労活動など、小規模な労働編成で可能な漁も併存する。また刀子と鎌の出土もかなりの数であるが、前者は魚の解体処理具、後者は藻刈りの用具とみれば、これらも海浜での生業に必要な道具と考えられる。なお、ヤスのような刺突具が少ないのは、刺突漁に好適な岩礁が近くに少なかったためであろう。

このように、西新町遺跡では魚介類や海藻類の採捕・加工・流通まで、この海浜で営みうる、様々な生業に従事したことが明らかで、一つの漁業形態のみに集中することはなく、多様な漁業形態が併存することで、その他の生産活動による生産品も含む多彩な商品化を図ったと理解でき、先の乗松氏の見解は支持できる。ただし、西新町遺跡の漁労活動は気象環境から冬季はかなり難しく、季節や気象によって生産規模が増減するという生業環境からすると、遺跡の存在価値は農耕や漁労活動ではなく、対外・列島内交易という交通関係が基盤にあったと考えられる。ただし、この「交通」とは生活や生産の場での人々の移動というよりも、ある特定の目的を持って生活・生産圏外に往き、または往来する現象を指す。

このような社会経済構造は、市場を通じた様々な交換行為を物々交換で行ったモデルである「市場交換モデル」（北條 2020）や杉山浩平氏の「互惠的交易モデル」（杉山 2019）と調和的であると考えている。特に杉山浩平氏は、弥生時代の交易について、これまで海浜集落と農耕集落との直接的な交流を前提として考えられてきたが、海人集団が交易の相手となる集落を巡回する中で、海の生産活動でしか入手できない専門的に獲得した水産物と鉄などの外来性の財からなる交易品を一定の地域を巡回しながら、地域内の農耕集落が生産した生活必需品と交換していくことで財が流通する交易構造を「互惠的交易モデル」として提示した（杉山 2019）。少し飛躍することになるが、後に貢納品ともなった高い商品価値があるタイは特産物として、内陸部の集落との交易にとって重要な交易アイテムとなったと考えた。

つまり、砂丘上の西新町遺跡の集落では、漁具を作るための金属・石器の原材料、紡錘車の出土がないことから漁網用の繊維はもちろん、穀物、野菜、染料、カマドは炉に比べ薪を多く使用するなど、自給できる生活必需品は少なく、集落規模も大きいことから、物資を平野部や丘陵部の集落に求めなければならなかった。つまり、西新町遺跡で生産した水産加工品や、交易で入手した外来系や列島内各地の特産物を内陸部まで持って行って、生活必需品と交換したのではなかろうか。西新町遺跡の集落は、その厳しい環境条件の故に、かえって閉鎖的でありえず、外界との交渉を持たなければならなかったであ

ろう。現在でも漁民と農民と比較した場合、漁民の方が行商として積極的に農村まで出向くことが多いが、その当時もそうであった可能性がある。杉山氏は農耕集落間を往来しながら交易なども行う海人集団は、定住化と農耕化の発達した弥生社会において重要な存在であったとする（杉山 2019）。この意見を踏まえると、西新町遺跡の集団は人とモノが頻繁に動くことで集落を発展させた集団形態であることが予想され、そうであるならばこのような状況を可能にした特殊な社会状況が西新町遺跡を生み出したといえよう。

博多湾沿岸地域と糸島地域では、古墳時代初頭前後、後背湿地のある沿岸の砂丘上に多くの集落が出現し、大規模化する。また内陸部にある弥生時代後期以来の拠点的な大集落も、存続するものが多く、特に砂丘上の海浜部の遺跡群は、朝鮮半島系を含む列島内外の外来系土器の多数出土など、交易拠点や港津的な遺跡が多く（久住 2004）、船による人や物資の移動が盛んになったとみられる。

この様相について久住猛雄氏は、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭、西日本各地の河口の海浜部に交易の拠点が出現することによって交易機構は拡大するが、博多湾沿岸地域では博多遺跡群や比恵・那珂遺跡群、西の今山・今宿遺跡群を拠点とする構造から、古墳時代前期前半～前期中葉になると対外交易の場である西新町遺跡を軸として、鍛冶は博多遺跡群、土器製塩は今山・今宿遺跡、内的な交易拠点としての比恵遺跡といった、博多湾岸の各種生産が専門特化、分業ネットワーク化する傾向を示すことを指摘する（久住 2004・2007）。このように、博多湾沿岸地域の集落が生業分担し、一つの経済圏＝文化圏を形成することによって、博多湾沿岸地域が一貫して西日本規模での対外交易ルートの拠点となっていくことを明らかにした。

このことから、弥生時代後期終末以降、大規模な網漁に加え、製塩活動の開始、水産物の加工、その商品の内陸部との交易など、ムラを超えた生産や資源調達により大きな変化が生じていると理解される。古墳時代前期前半になると、飯蛸壺をはじめとする畿内・瀬戸内系譜の外来系漁具と博多湾西部の在来系漁具を融合・再編したのが西新町遺跡で、西新町遺跡はこの交易ネットワークの結節点として機能したという指摘（森本 2015）と、先の互惠的な交易モデル（杉山 2019）から、西新町遺跡の集団は対外・列島内交易というメインの経済活動に加え、複合的生産活動による財の生産、流通や財の集積地としての役割を担った可能性を考えている。このように、西新町遺跡の集団は玄界灘沿岸における地域社会ネットワークの維持や朝鮮半島及び列島内各地域勢力の直接的な接点、情報や財の集積地として大きな役割を担っていた可能性がある。これら複合的な要素を持つ人々が集住した様相が、西新町遺跡の短期間における極端な堅穴住居の切り合いに表れているのではないだろうか。

加えて、多様な役割を担った西新町遺跡における交易や移動する人々の社会秩序の維持にあたっては、首長層の存在が必要である。西新町遺跡の首長層の墓地と想定されている藤崎遺跡では、複数の三角縁神獣鏡の副葬されているが、この状況は西新町遺跡で集積された遠隔地からもたらされた情報やモノ、それを基盤する遠隔地との間に成立した対外・対内交易を調整できる機能が倭王権や上位層にとって重要であったことを示している。特に様々なレベルでの通交関係を取り結ぶ際に携えた特産物の入手・管理と生産を行い、外交交渉にも長けた西新町遺跡の集団は非常に重要であったと想定される。

### ③西新町遺跡の海人集団による交易の在り方について

山中英彦氏は、漁具出土状況から外来系と在来系の要素が強い集落に類型化して整理を試みた。この中で西新町遺跡は外来系に分類され、大阪湾、播磨灘、瀬戸内地域などの人々が政治的な移動により、移住・定着し、在来の人々と混在して交易に係る水先案内人や各種の生産活動を担ったと理解した（山中 2007）。しかし、前節までの検討から、出土漁具の導入や分布については、政治的な動きと連動する

面もあるが、海人集団が担った特産物生産と流通の結節点という主に経済的な面を読み取ることができ、海人集団の政治的な役割を重視した山中氏の見解（山中 2007）とは必ずしも整合的な結果ではない。

このことについて、伊勢湾岸と三河湾岸の製塩土器から当該地域の社会像を考察した早野浩二氏は、当該地域の古墳時代前期の塩生産はその技術移植を一義的としたものではなく、そのみを抽出して政治的関係を論じることは適当ではないとする。また生産用具の面からも、塩生産の専門性は概して乏しく、各地の生産体制を貫く規範も貧弱であったと推定され、政治と臨海地域の集団が直結することはなかったとした（早野 2007）。乗松真也氏も交易を経営基盤とする西新町遺跡では交易対象品のうち一部の自給生産を余儀なくされたという、生産部門を統制できない当時の社会の脆弱性を示すと理解した（乗松 2010）。さらに谷澤亜里氏は、弥生時代後期後半～終末において、西新町遺跡のような「海村」間の交易網は中国王朝周辺での情勢の混乱の影響が比較的小さく、上位層が関わる対外交渉とは異なるレベルの交易が存在したと指摘した（谷澤 2020）。

以上のことから、西新町遺跡の海人集団は、辻田淳一郎氏が提示した、列島各地の諸集団が楽浪郡などに遣使を行うにあたり、北部九州の諸集団が先導役としていわば水先案内役となってそれらの各地から派遣された使者・集団に同行し、半島南部を経て楽浪郡・帯方郡に渡航し、交易や政治的交渉を行った後、列島に戻り、その後使者たちが様々な文物をそれぞれの地元まで持ち帰る「水先案内モデル」（辻田 2014）に近い役割が想定される。列島諸地域の集団が西新町遺跡に集い、倭王権や各地の集団も参加した「倭国」というまとまった交渉体を形成することによって、倭国という国際的な地位を高め、各種の高級品を下賜されることで交易のレベルを上げ、安定して情報・技術を手に入れたというメリットがあったとみている。よって、西新町遺跡の集団は自ら対外交渉を担う政治的な役割ではなく、直接の担い手としてのパイロットや調整役的な役割が強かったと考えている。

弥生時代後期～古墳時代前期は、鉄素材や奢侈品などの「財」の外部依存が拡大し、社会システムを成り立たせるため、「財」が地域内にとどまらず広域的に移動する構造への変化が、列島の各地域間の著しい土器の地域間移動などからみえる。政治的・外交的交渉と交易などの明確な区分は考古資料では難しいが、この担い手として海人集団による活発な海上交通や交易ネットワークがその当時の社会経済システムの基盤でもあり、対外交渉でも必要不可欠であったこといえるのではなかろうか。

## （6）まとめ

本稿では、西新町遺跡 17 次 7 号竪穴住居跡出土石錘群の検討から漁網を復元し、民俗例等からタイシバリ網に近い形の漁法を想定するとともに、そこからみえる漁労活動を含む生産・流通活動を中心に据えながら、西新町遺跡の特質などを推察してきた。弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけて、九州型石錘の増加および多種化が看取され、機能分化の画期がみいだせるが、その完成形ともいえるのが西新町型石錘と考えている。このように、普及した鉄製工具を使用して多種多様で様々な魚種に適応した漁具で、需要が高く必要とする特定の魚をより確実に大量に捕獲するという漁法を創り出したことにこそ、それまでの本地域ではなしえなかったことであり、漁業技術史において画期として評価される。

瀬戸内～大阪湾沿岸地域から本地域に、飯蛸壺延縄漁や管状土錘 C、棒状土錘を用いた新たな漁具・漁法、土器製塩技術と海産物の塩蔵加工法等が伝わった。この管状土錘 C を用いた袋網系網漁や棒状土錘を用いた刺網漁は、瀬戸内地域の専用の漁法がそのまま持ち込まれたとされ（小澤 2020 他）、特に袋網系網漁技術は漁網の規模の拡大を可能にした網地の素材や製作技術、それに加え船団による漁法、タイなどある特定の魚種を対象とすることを可能とした画期的なものであったと考えている。

しかし、当該期の玄界灘沿岸地域の漁具は九州型石錘など弥生時代中期以来の漁具を基盤にしており、これらの外来系とされる漁法（山中 2007）もそれぞれ受容時期が若干異なり、その広がりも大きなものではない。今回検討した西新町型石錘は、新来の技術を受容する際、在地集団が主体となってこれまで蓄積してきた伝統的な漁労技術を生かして新たな漁具を創り出した事例とみている。

このように在地集団が伝播した各種の漁具・漁法を選択的に受容・改変しながら、土器製塩による塩を用いた多種多様な水産物加工を展開させていったと理解される。以上のことは、当該期の本地域における地域間交流が生み出した文化・文物の受容と展開の様相の一端を示すものとして重要と思われる。

西新町遺跡の4世紀中葉以後の衰退の要因として弥生時代終末期から続く国内外の交易ネットワークが機能不全に陥ったことが指摘されていることから（中久保 2017）、本遺跡の存在価値は交易ネットワークに基づく対外交渉活動であるものの、自給自足的な生産と消費を超えて、集落内にモノが集まり、そこから周辺の集落に分配される交易システムの結節点として、海人集団自体も水産物生産をはじめとする諸生産活動や物流などへと多様な生業に従事した可能性を提示することができた。

これまで西新町遺跡は朝鮮半島や西日本各地との対内外交易という面に焦点が当たっていたが、西新町遺跡でみられるカマド付竪穴住居や半島系遺物は、博多湾沿岸の他の集落に拡散・展開することもほとんどなく、遺跡内でほぼ完結する。このことは、西新町遺跡内で人間や財が滞留してしまったようにみえるが、ここでの検討によって西新町遺跡の集団が戦略物資の流通のため、需要を的確に見極め、素材を効率よく獲得する方法や仕組みを整えるという特定物資の生産活動を直接的に行ったと考えた。また、広く財の流通まで担うことで、内陸部の集落との交易の結節点としても機能した集団の特質を仮説として提示できたと考えている。

なお、小山修三氏は、貿易港の在り方について、対外交渉は財の獲得という利益を社会に与える一方、侵略や伝染病等の社会情勢を混乱させる可能性があり、それを防ぐため、港の区域は孤立状態になるように、政治の中心地から離れたところに置かれるとする（小山 2000）。小山氏の指摘は、奴国と伊都国の境界に港を設け、居留地の在り方を示す西新町遺跡の特質を考える上で示唆的である。西新町遺跡の渡来系知識人が様々な技術を伝えたと同時に、それが王権や上位層、地域集団間の関係性を変えるような自体は避ける必要があったとも考えられる。このような視点でも、遺跡立地は重要であるといえる。

ただし、西新町遺跡における最古級の造り付けカマドの導入に伴う調理方法の変化による漁獲物を含む漁労活動への影響をはじめ、生業スケジュールを見据えた漁労活動の総合的な評価まで至っておらず、その他にも協同作業が必要な網漁の漁労活動で捕獲した水産物が平等に分配されたかという集団構造を含む「漁村」的な遺跡の在り方、内陸部の遺跡との関係、比恵・那珂遺跡群などの拠点集落との関係、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけての「博多湾貿易」の中での漁労活動の位置づけや広がり、衰退の要因等については、筆者の能力が及ばず十分に検討することができなかった。これらの課題については、今後対象遺跡ごとに検討を進めて、明らかにしていきたい。

本稿は「漁具からみた西新町遺跡海人集団の特質—西新町型石錘を素材として—」『九州歴史資料館研究論集』47 2022年をもとに、その後の調査研究成果を若干加え、構成したものである。

## 4 九州型石錘からみた壱岐島の海人集団の特質

### (1) はじめに

九州の北西、玄界灘に浮かぶ壱岐島は、対馬島とともに九州と朝鮮半島との間に位置する。島周辺には対馬暖流が西から東に向かって流れ、島沿岸にはリアス式海岸が発達し、淡水と海水が混じった豊富な栄養を持つ海域が広がる。このことから、壱岐島周辺には沿岸魚から外洋魚まで多くの魚種に恵まれ、これらを対象とした多様な漁法が認められる。現在壱岐島の漁業は、交通の発展によりこの条件を活かし、新鮮な魚介類のまま、東京・博多などの大消費地へ供給される一大漁場となっている。

また壱岐島は対馬島と比べ、かなりなだらかな印象であるが、実際は浸食によって谷が幾筋にも形成された起伏な地形となっている。

壱岐島には、弥生時代後半期、『魏志』倭人伝の記事にある「一支(大)国」に比定された国が存在し、また「南北市糶」という島外との米穀の取引を示す記事から、壱岐島内では長崎県で2番目の大きさを誇る平野である深江田原を有しているも、農業生産力としては不十分であったことを示している。このように、壱岐島は常に海に向かって進出していかなければならない条件を備えていたともいえる。

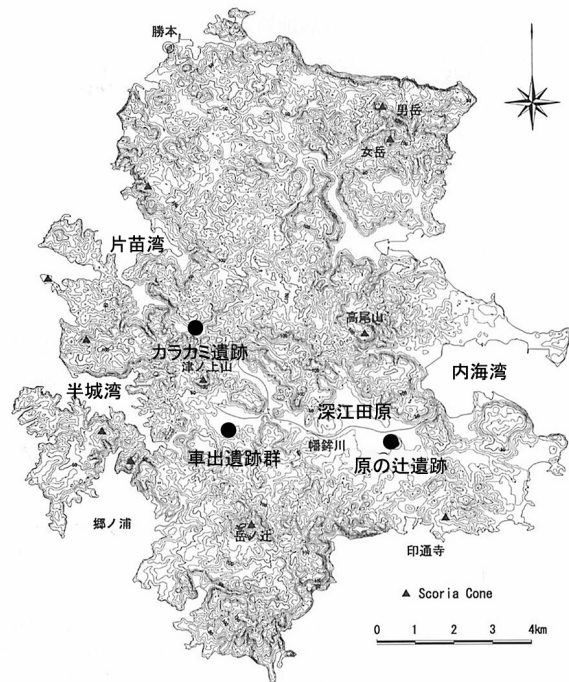
また、一支国の中樞集落である原の辻遺跡において、青銅製の権等の青銅製品や計1,200点にもものぼる粘土帯土器、楽浪系土器、三韓系土器、陶質土器等(古澤2016b)の、列島で最も多量に出土した中国・朝鮮半島に由来する多種多様な出土品が存在する。このことから、壱岐島は弥生時代前期～古墳時代初頭にかけて、中国・朝鮮半島と列島を結ぶ海上交通の舞台となり、半島と列島とを行き交う人、モノ、情報の結節点・中継点として重要な役割を果たしたことが明らかである。

さらに、先の対外交流を示す遺物がまとまって出土した原の辻遺跡、カラカミ遺跡、車出遺跡群(第89図)で出土した骨角製・石製・鉄製の多種多様な漁具から、ヤス・モリを用いた刺突漁、アワビオコシを用いた潜水漁、釣針・石錘を用いた釣漁、石錘を用いた網漁など多様な漁労活動内容が想定される。このことから、通常は漁労活動に従事しながら、時には交易従事者あるいは渡航集団の水先案内人として(中尾2022)、国内外交易を直接的に担った壱岐の海人の動向を知ることは、弥生時代～古墳時代初頭の日韓交流の具体相を検討する上で重要な手掛かりとなる。

さらに、先の対外交流を示す遺物がまとまって出土した原の辻遺跡、カラカミ遺跡、車出遺跡群(第89図)で出土した骨角製・石製・鉄製の多種多様な漁具から、ヤス・モリを用いた刺突漁、アワビオコシを用いた潜水漁、釣針・石錘を用いた釣漁、石錘を用いた網漁など多様な漁労活動内容が想定される。このことから、通常は漁労活動に従事しながら、時には交易従事者あるいは渡航集団の水先案内人として(中尾2022)、国内外交易を直接的に担った壱岐の海人の動向を知ることは、弥生時代～古墳時代初頭の日韓交流の具体相を検討する上で重要な手掛かりとなる。

筆者は博多湾沿岸地域を中心とする玄界灘沿岸地域の弥生～古墳時代の九州型石錘を中心とする漁具について関心を払ってきたが、近年原の辻遺跡・カラカミ遺跡で出土漁具関連遺物が蓄積され、壱岐島内及び玄界灘沿岸地域との様相の相違について一定の傾向を把握できるようになったこと、また原の辻遺跡出土九州型石錘について資料調査する機会を得、形態だけではなく摩耗及び使用痕などを直接観察できたことで、より具体的な検討を行うことができた。

九州型石錘の先行研究においては、九州型石錘の所属時期が判明する事例が多くみられ、かつ多くの



第89図 壱岐島内関連遺跡位置図(1/200,000)  
(長崎県教育委員会2005を一部改変)

番号	遺跡名	分類	出土遺構	石材		加工状況	法量			重量(g)	溝幅		孔径			挿図番号	時期(下限)	備考
				石材の種類	色調		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		長軸の溝幅(mm)	短軸の溝幅(mm)	1番上の孔径(mm)	上から2番目の孔径(mm)	上から3番目の孔径(mm)			
1	原の辻遺跡(平成5年度調査)	II B-1類	5号溝	頁岩	青黒色	●	12.6	2.8	2.4	139.1			5.0	6.0	39-74	弥生後期末～古墳前期前半	断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしっかりあるため未使用品か、上下孔は直交	
2		II B-1類	T9-27区4層上部	頁岩	青黒色	●	11.3	2.4	2.5	79.5			6.0	4.0	39-75	弥生後期末～古墳前期前半	全体的に摩滅が進む、孔の摩耗と表面の剥離は使用によるもの、特に下孔は下方向に紐を下げたことにより剥離で、下方向に強い力が加わったもの、上も紐掛すれ痕あり、上下孔は直交、両端はケズリにより、細くする	
3		III A-3類	不明				5.0	1.9	1.5		0.5	1.5			39-76			
4		II A-1類	5号溝	砂粒砂岩			4.6	2.2	1.5	21.4	1.5				39-77	弥生後期末～古墳前期前半		
5		II A-1類	1号溝排土・表採品	頁岩	黒色		4.5	1.9	1.9	19.0	1.5				39-78	弥生中期～後期か		
6		II A-1類		頁岩	黒色		4.1	1.6	1.3	10.6	0.5				39-79		上下平坦に加工	
7		II A-1類	2号溝				7.7	2.3	2.2	48.8	2.5				39-80	弥生中期～後期か		
8		V A-1類	2号溝	頁岩	黒色		7.4	1.3	(1.0)	(9.0)	1.0	1.0			39-81	弥生中期～後期か	表面剥離、欠損	
9		VID類					12.7		1.2				19.0		39-85		半分欠損、かなり薄い	
10	原の辻遺跡川原・不條地区(平成7～9年度調査)	II A-1類	1号旧河道か、南側包含層V層	粘板岩			3.5	1.5	1.3	7.0	0.5				37-12	弥生中期後半		
11		III B-1類	1号旧河道か、土器溜VI層	砂岩			3.4	2.0	1.7	16.0	2.0				37-13	弥生中期後半	一部欠損	
12		I B-2-1類	1号旧河道P100区IV層	滑石	赤灰色	●	7.4	5.7	4.9	285.0	2.0		3.0	5.5	37-14	弥生中期後半	下面縁欠ける、全体的に摩滅	
13		IVA類	土器溜VII層	凝灰岩			7.2	5.7	3.5	79.0			4.0		37-17			
14	原の辻遺跡原地区(平成8年度調査)	VIA類	A5区包含層3層	凝灰岩			(9.6)		4.5	(250.0)			35.0		108-15	弥生後期末	半分以上欠損、床面平坦	
15	原の辻遺跡八反地区(平成10年度調査)	V C類	E区落ち込み	頁岩		○	6.0	1.5	6.0	10.0	4.5				54-46	弥生中期前半か	孔は上端部に1ヶ所、下端部は切込みのみ	
16		II B-1類	B区10号土壘	頁岩		○	5.0	1.9	8.0	20.0	1.5				54-47	弥生中期後半		
17		III A-1類	C区5層	頁岩			5.8	3.2	(2.9)	(53.0)	3.5	1.5			54-48	弥生中期後半	1/3欠損	
18	原の辻遺跡原7区(平成10・11年度調査)	II A-3類	原7区	片岩系か		●	4.8	1.6	1.2		2.0	1.0			66-40	弥生後後半		
19		III A-3類	原7区	片岩系か		●	5.4	2.2	1.8		3.0	3.0			66-41	弥生後後半		
20		VIB類	4a層	凝灰岩	灰色	●	13.8		10.0	1,679.5			30.0		88-48	古墳前期前半	表面気泡が目立つ、剥離使用によるものか、被熱痕あり、主孔ノミ状工具による、底面凹凸と石材からすべりはあまりよくないか	
21	原の辻遺跡不條・八反地区(平成11年度調査)	II A-3類	A区IV層	砂岩			5.3	1.9	1.6	19.8	2.5	2.0			58-37	弥生後期か		
22		III B-1類	土器溜	砂岩			3.4	2.6	1.2	16.7	2.0				58-38	弥生中期前半～後期末	断面扁平	
23		V A類	2号旧河道II層	頁岩			2.8	1.1	0.9	4.8	2.0	1.5			58-39	弥生後期～古墳前期		
24		V C類	2号旧河道II層	頁岩			(5.4)	2.9	1.5	(11.7)			6.0		58-40	弥生後期～古墳前期	半分以上欠損	
25		V B類		頁岩			(5.2)	2.1	1.6	(10.9)					58-41		半分以上欠損	
26	原の辻遺跡八反地区(平成13年度調査)	III B-3類	SD1 I層	頁岩		○	2.5	1.3	0.9		2.0	1.5			16-1	弥生後後半	上面は平坦に整形	
27		V A-3類	SD3 I層	頁岩		●	7.5	1.5	1.4		1.0	0.5			43-1	弥生後期末	長軸溝1、短軸溝4	
参考		浮子	SD3 II層	軽石	灰黄色		11.4	7.2			13.0				48-18	弥生後期末	浮子、加工痕みえない	
28		I A-1-あ類	SD3 II層	滑石	灰白色、一部赤色	○	13.7	6.4	4.6		4.0		5.0	9.0	48-19	弥生後期末	表面には加工痕残る、赤味が効くため、玄界灘沿岸地域からの搬入品か	
29	原の辻遺跡八反地区(平成14年度調査)	II A-1類	落ち込みD31VI	細粒砂岩		●	(8.0)	1.6	1.3	(21.8)			3.5	3.5	22-10	古墳前期前半	下端部欠損	
30		II A-2類	表採				10.6	7.1	5.5	369.1			7.0		22-12		自然石を利用か	
31	原の辻遺跡高元地区	I類か	B10 I区 I層	砂岩	灰色、一部赤色	●	3.8	2.9	2.2	21.8	2.0		7.0		49-3	弥生中期後半か古墳前期か	下半部欠損した後転用、水中で光ることはない素材か	
32	原の辻遺跡八反地区(平成14年度調査①)	IV A類	SD02	軽石			3.6	1.7	2.0				2.0		23-6	古墳前期前半		
33		V C類	第10調査区	頁岩	黒色	○	(6.0)	1.4	(9.0)				6.0		53-6	弥生後後半	下端部欠損、裏面欠損	

第4表 沓岐島内出土九州型石錘一覧表①

番号	遺跡名	分類	出土遺構	石材		加工状況	法量			重量(g)	溝幅		孔径			挿番号	時期(下限)	備考
				石材の種類	色調		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		長軸の溝幅(mm)	短軸の溝幅(mm)	1番上の孔径(mm)	上から2番目の孔径(mm)	上から3番目の孔径(mm)			
34	原の辻遺跡高元II区(平成15年度調査)	I B-1-あ類	II区Aブロック4層周辺	滑石	灰白色	●	6.5	3.2	4.5	173.8	3.5		9.0			73-16	弥生中期後半か	表面使用による摩滅、底面は丁寧な研磨、溝・孔には使用による剥離、SK25に本来伴っていた可能性あり
35	原の辻遺跡高元F区(平成16年度調査)	II A-3類	2層	頁岩			9.6	2.5	2.4	66.0	0.5	0.2				40-82	弥生後期末	
36	原の辻遺跡石田高原地区A・B区	I B-2-い類	SD03 5層	凝灰岩	灰色	○	4.9	(1.4)	1.0	12.1	2.0	1.5	4.0	3.5		58-68	弥生中期後半か古墳前期か	全体的に摩滅、風化もすすむ、一部欠損
37	原の辻遺跡石田高原地区(平成19年度調査)	ii B-3類	B-II区落ち込み31層	頁岩	褐灰色	○	4.9	1.6	1.0	8.2	1.0	1.0				32-4	弥生後期後半	
38	原の辻遺跡(平成20年度調査)	II A-1類	5区2層	砂岩			(7.9)	3.7	3.7	(120.5)	3.0					46-35		上端部欠損
39		ii A-3類	3区4a層	頁岩			(3.1)	1.6	(0.8)	(4.5)	2.0					46-36	弥生後期	大部分欠損
40	原の辻遺跡原地区	I A-2-い類	B区 I層	滑石	灰色	○	11.2	4.6	4.0	296.2	4.0	5.0	5.5	8.0		12-126		溝内には加工痕がないため、使用による摩滅か、下溝に紐ずれ痕あり
41	原の辻遺跡不稼地区	VIB類	D2区				(23.0)		(13.2)				60.0			9-88	不明	半分欠損
42	原の辻遺跡池田大原地区	ii B-3類	10区 2層	頁岩			(7.0)	1.4	0.7	(20.0)	2.0					113-1		下端部欠損
43	原の辻遺跡原地区	iii B-1類	9-B 土坑	頁岩			3.6	2.0	1.5	20.0	2.0					113-2		
44	原の辻遺跡八反地区(平成13年度調査)	v B-い類	中区SD-5	頁岩	青黒色	○	7.4	1.8	1.8	32.0			3.5	3.0		26-12		石製穿孔具を転用か、上面切込3、下面切込4で紐かけ
45		II A-1類	南区SD-5	緑泥片岩			15.0	5.2	4.0	478.0	3.5					26-13	弥生後期後半～古墳前期前半	
46		I A-1-あ類	南区SD-5	頁岩	青黒色		8.4	3.2	(1.2)	(30.0)	2.5		5.0			26-14	弥生後期後半～古墳前期前半	裏面剥離、顕著な摩滅なし
47		IV A類	北区B-2 7層	凝灰岩		○	9.6	(6.2)	4.5	(299.0)			25.0			26-16	弥生後期後半～古墳前期前半	1/2程度欠損、孔内に加工痕
48		I-3-い類	V区SC-4	頁岩	オリーブ黒色	●	(9.7)	(2.5)	(1.8)	(38.0)	2.5	1.5	4.0	6.0		66-4	弥生中期後半	下半部欠損、孔は使用により摩滅
49		v C類	Q29 3層	頁岩	灰黄色	○	(4.5)	1.3	1.1	11.6			1.0	2.0		66-5	弥生後期前半～後半か	
50	原の辻遺跡原地区(平成11・12年度調査)	v C類	U-11 3層	頁岩	黒色	○	10.2	1.8	1.8	38.4			3.0	3.0		66-6	弥生後期前半～後半か	
51		ii A-2類	Q29 柱穴	頁岩	黒色		4.1	1.2	1.2	10.2	1.0					66-7	弥生後期前半～後半か	
52		ii B-1類	H-9 柱穴			○	6.1	2.2	1.8	35.6	2.0					66-8	弥生後期前半～後半か	
53		iii A-3類	B-11 3層	頁岩	黒色		3.3	1.6	1.4	10.4	1.0	1.5				66-8	弥生後期前半～後半か	
54	原の辻遺跡高元II B区	v A-2類	包含層	滑石		○	(2.7)	(0.8)	(0.8)		0.6					8-16	弥生中期後半か	面加工
55	原の辻遺跡原X V区	v A-2類	SC23	頁岩		○	6.4	(0.8)	(1.0)	(5.3)	0.6					27-3	弥生中期後半	下端部欠損、半分欠損
56	原の辻遺跡高元III・IV区	ii B-い類	土器溜	頁岩	灰色	○	6.0	3.0	1.4	44.0			4.5	3.0		38-188	弥生後期後半～末	
57	原の辻遺跡高元IV区	iii A-3類	2～5区	砂岩			4.4	2.0	2.0		2.5	2.0				29-145	弥生中期後半・後期末	
58	原の辻遺跡高元VII区	ii 類未製品か	包含層	安山岩			5.8	2.2	1.7	32.0						17-123	弥生中期～後期	
59	原の辻遺跡原X V区	v A類	包含層	流紋岩			5.6	1.2			3.5					51-265	不明	両端に切込、断面楕円形
60	原の辻遺跡高元X区	iii 類未製品	SD-1トレンチ埋土	頁岩			6.0	1.3	(0.8)	(8.6)						13-158	弥生中期後半	未製品、裏面欠損
61	車出遺跡	I B-2-う類	D-1区 III層	滑石			7.2	2.2	2.4	41.1	3.0		4.5	4.5	7.0	14-39	弥生中期～後期	
62		ii B-3類	A-3区 IV層	頁岩		○	5.7	2.1	2.0	22.4	2.0	1.5				14-40	弥生中期後半～後期末	
63	カラカミ遺跡東亜考古学会第2地点	ii B-1類	F区	粘板岩		○	5.8	1.9	1.1	15.0	1.0					49-392	弥生後期後半か?	
64	カラカミ遺跡第5～7地点	v A-3類	7tr 5層	頁岩		○	(5.7)	1.6	1.3	(14.0)	4.0	4.0				53-354	弥生後期後半	下端部欠損
65		ii B-3類	B-8 4層	砂岩		○	4.8	2.1	1.5	11.0	2.0	1.0				65-395	弥生中期後半～後期後半	短軸溝は全周しない
66	カラカミ遺跡第1地点	iii B-3類	B-8 5層	砂岩		○	4.1	1.5	1.4	10.0	2.0	1.0				73-439	弥生中期後半	
67		iii A-1類	B-10 5層	頁岩		○	3.8	1.8	1.8	17.0	2.0					73-440	弥生中期後半	
68	國柳遺跡	ii A-1類	II区	滑石			4.0	1.8	(1.2)	(10.0)	2.0					11-82	弥生中期後半か後期後半	裏面欠損

第4表 壱岐島内出土九州型石錘一覧表②

開発に伴う発掘調査による集落遺跡データの蓄積が膨大にあり漁具だけではなくその背景となる集団関係や社会状況がある程度把握可能な博多湾沿岸地域を中心とするものであり、北部九州において博多湾沿岸地域以外の漁労活動に焦点を当てた研究はこれまでほとんどない。

そこで、本稿では主に九州型石錘を中心とする漁具から、弥生時代中期後半～古墳時代前期の壱岐島における漁労活動の変遷と特徴、集団関係などを明らかにすることで、壱岐島の海人の特徴について論じてみたい。

## (2) 原の辻遺跡出土の九州型石錘について

今回、林田好子・中尾篤志氏の集成（林田・中尾 2014）を基礎として、弥生～古墳時代前期の壱岐島内出土石錘について集成したところ、4 遺跡、68 点の資料の存在を確認した（第 4 表）。この資料のほとんどは原の辻遺跡で出土しているため、まずは同遺跡における様相についてまとめてみたい。

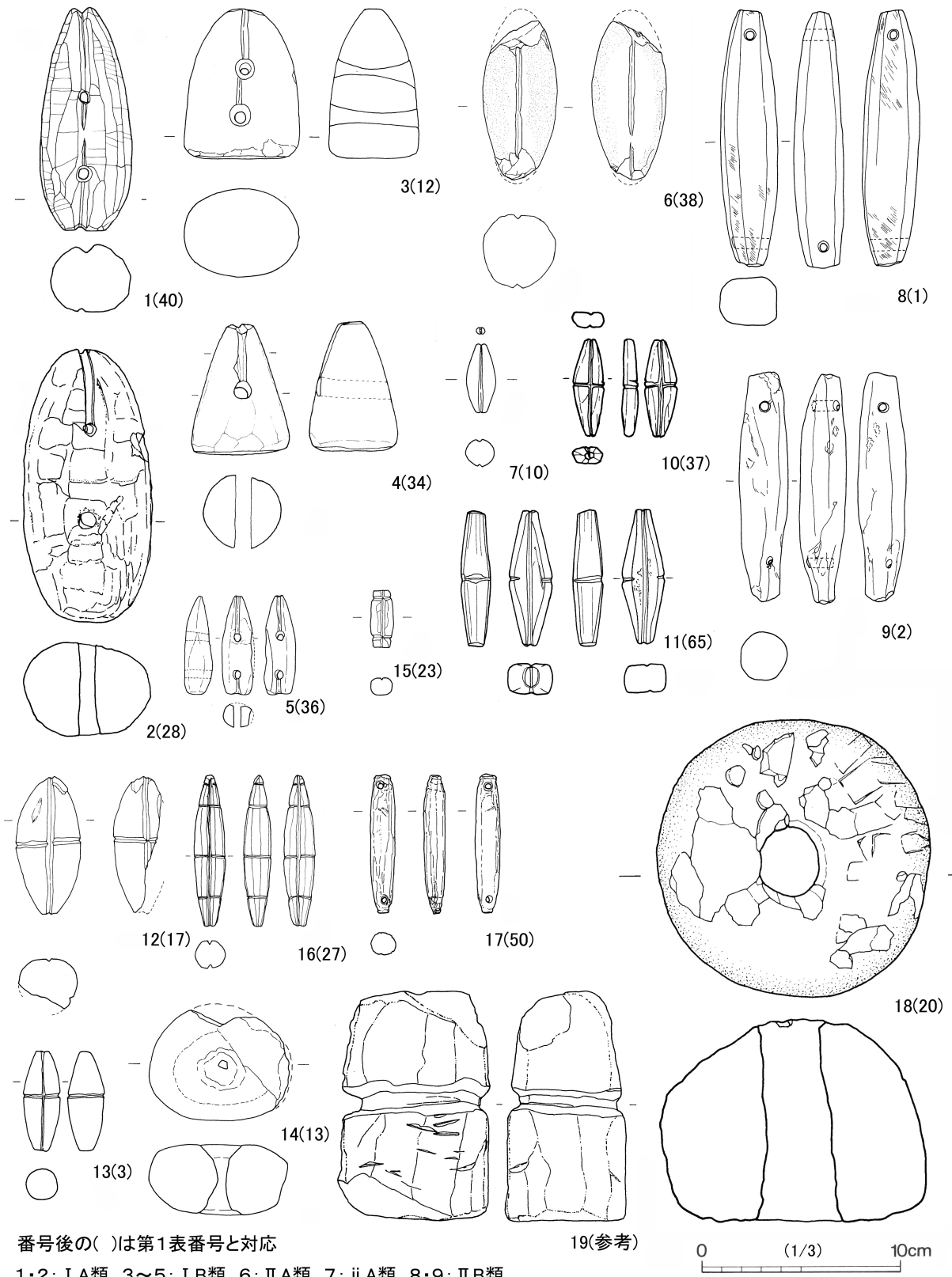
原の辻遺跡は、幡鉾川下流に形成された長崎県で 2 番目の大きさを誇る内陸盆地である深江田原に突き出た、南北に延びる標高 10～18m 前後の舌状丘陵とその周辺の沖積低地に展開する、面積 100ha に及ぶとされる大規模集落である。一部は自然河川を利用し、二重または三重の排水機能を重視したとみられる多重の溝が集落を取り囲むことから、『魏志』倭人伝に記載のある一支国の中枢集落（国邑）と特定されている。また木製農具や石庖丁などから水稻農耕、石鎌などからムギ類などの雑穀類の栽培、磨石・石皿などから堅果類の出土から、水田経営、畑作や堅果類の利用（中尾 2004）など多様な農耕活動と同時に漁労活動も行っていたと考えられる。

遺跡は弥生時代前期後半に丘陵先端部を中心に集落が形成されるが、それ以前の時代との連続性がなく（古澤 2016a）、集落成立からほどなく円形粘土帯土器の出土が確認され、集落が解体する 4 世紀中葉まで一貫して中国・朝鮮半島系の遺物の出土がみられる。加えて集落解体の要因の一つとして 313 年の楽浪郡、314 年に帯方郡が高句麗によって滅ぼされることが契機となったという見解（宮崎 2001）から、対外交流の役割にある程度特化した集落像が窺える。ただし、各時代を通して朝鮮半島系土器が弥生土器を凌駕する地点はなく、対外交流が集落形成の主要な目的の一つと指摘されている（古澤 2016a）。

原の辻遺跡の北側を貫流する幡鉾川が注ぐ内海湾は、湾口に青嶋、赤嶋という島があり、外海が荒れていても湾内は比較的穏やかなことで知られる。この船の停泊に適した内海湾とそれに注ぐ幡鉾川を通じた立地、深江田原という水稻農耕生産に適した土地の広がりが集落形成の要因となったという指摘（古澤 2016a）は妥当なものである。

幡鉾川に近い集落北西の低地に位置する八反地区では、大陸系とされる敷粗朶工法による石積み・木杭で護岸された東西 2 つの突堤から構成される船着き場遺構（第 18 図）や上流側には分水遺構が確認されている。この船着き場遺構は、原の辻遺跡の居住域が拡大し、多重の環濠も掘削され、多くの中国・朝鮮半島系遺物がみられる弥生時代中期前半に造営され、中期後半～後期初頭まで機能したとされる（白石 2020）。また幡鉾川から船着き場遺構に至る流路の復元から、準構造船は内海湾で外洋船である準構造船から丸木船に積み荷を積み替え、幡鉾川を通じて原の辻遺跡に至る船を用いた運搬経路が復元されている（白石 2020）。加えて、八反地区北の不條地区には弥生時代前期後半～中期後半の朝鮮半島系無文土器、中期後半～古墳時代前期の楽浪系土器が集中することから、対外交流の場は遺跡北西の不條・八反地区が一貫して核になっていたと考えられる。

なお、集落形成期にあたる弥生時代前期後半には、丸木船に別材で板を継ぎ足し、波を入りにくくし



番号後の( )は第1表番号と対応

1・2: IA類 3~5: IB類 6: IIA類 7: iiA類 8・9: IIB類

10・11: iiB類 12: IIIA類 13: iiiA類 14: IVA類 15・16: vA類 17: vC類 18: VIB類 19: 参考 軽石製浮子

第90図 沓岐島内九州型石錘分類図 (1/3)

積載量も増やした準構造船が出現する。この準構造船の登場が遠距離交流を活発化させ、朝鮮半島南部の後期無文土器集団が継続的に渡来して、故地との交流回路を維持しながら、船着き場遺構の築造など、一支国の対外交流を主導し、国づくりに関わったとの指摘がある（武末 2009）。

さらに原の辻遺跡では、弥生時代中期を中心に適度な硬さと粘りを持ち、かつ加工しやすい鹿角製刺突具、「西北九州型」結合式釣針、複雑な形状を持ちかつ骨剣とも呼ばれた鯨骨製アワビオコシ・紡錘車などの骨角器がまとまって出土する。刀子柄などは弥生時代後期まで下るとみられるが、後期になるとこれらの骨角製漁具は大きく減少する。それに替わるように、弥生時代中期後半から～古墳時代前期にかけて九州型石錘が盛行するが、その半数以上が溝や河道、包含層出土であり、かつ廃棄された状態であるため、実際の使用・廃棄時期を限定しにくい。また原の辻遺跡では調査区が偏っており、掘ったものがすべてではないという条件があるが、現段階の遺跡における九州型石錘の時期変遷、地区別の出土傾向についてみていきたい。

#### ①各型式の全体的な傾向（第4表）

先述しているが、原の辻遺跡出土九州型石錘のうち、時期が特定できたものは半分以下である。本来なら地区ごとの時期的な変遷と特徴について詳細に検討すべきであるが、時期がわかる資料数の制約から遺跡全体でないと安定的な傾向を把握できないため、ここでは遺跡全体からの傾向を把握する。

検討の結果、釣漁用錘とみられる小型の部類が卓越し、網漁用錘の可能性のあるⅡA類石錘や刺網漁用（森本 2019）のⅥ類石錘、打欠石錘のⅦ類が少量みられるものの、複数の同型式の錘によるセット関係が確認できないため、漁網錘として確実なのはⅥ類石錘のみと考えられる。この要因として古代の網漁は水深の浅い場所で行うことが基本で、網漁が発達する海底の底質が主に砂泥からなる博多湾と比べて、壱岐島周辺は水深があり、岩礁帯が多いこと、かつ潮流も激しいため、漁網の利用が難しかったと理解できる。これは岩礁帯が多い海域でも有効な地曳網の錘である打欠石錘の出土が少ないことにも表れている。また、釣用錘は釣竿とともに集落に持ち帰ることが予測されるため、集落内で出土する一方、漁網は保管場所が内海湾近くに別に存在した可能性や大量に捕獲できる網漁は壱岐島内の消費規模が小さいこと、古墳時代初頭前後の製塩土器の出土がないこと、さほど面積が大きい壱岐島では内陸部でも基本的に鮮魚のまま運搬できることから、壱岐島の人々はより新鮮な状態で捕獲できる釣漁や刺突漁での漁獲物を好んだなどが考えられる。このように漁網で一度に大量に捕獲し、塩蔵加工して内陸部まで流通させた古墳時代前期の博多湾沿岸地域の在り方（大庭 2022、第Ⅳ章3）とは基礎条件が異なることから、原の辻遺跡の漁労活動においては網漁が低調で、釣漁や刺突漁が盛行したと解される。

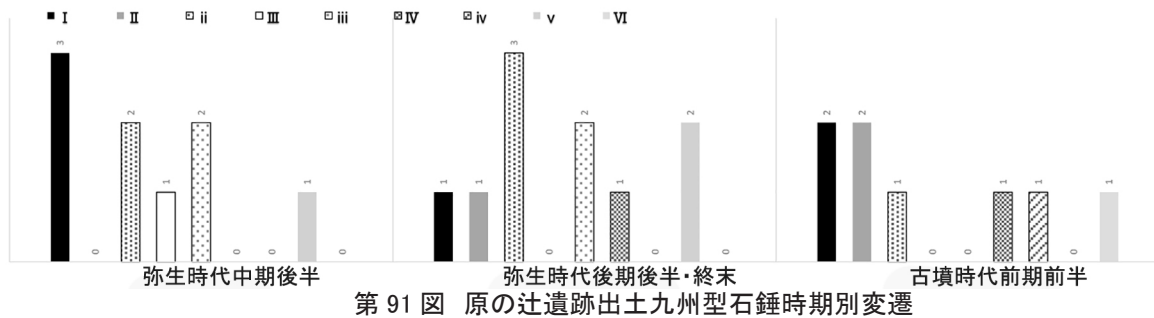
さらに、原の辻遺跡では九州型石錘の未製品が報告されていないことは、九州型石錘の在り方を考える上で重要である。

なお、先述したように壱岐島内では古墳時代前期の製塩土器が未発見であることから、固形塩を用いた塩蔵加工は基本的にはなく、あったとしても濃い鹹水に付けた一夜干しの干物加工が水産加工品として存在する程度と推測される。

#### ②時期的な変遷（第91図）

##### 弥生時代中期後半

遺跡では弥生時代中期後半に九州型石錘が確実にみられるようになるが、その中でⅠ類石錘が安定的にみられることは注目される。中期後半の不條地区出土ⅠB-2-い類（第90図3）は滑石製であること、ずんぐりむっくりした釣鐘形を呈する形態的特徴は、糸島市御床松原遺跡出土石錘に近い印象があり、博多湾・糸島地方周辺からの搬入品の可能性がある。



第91図 原の辻遺跡出土九州型石錘時期別変遷

さらに、時期は不明ながら原地区出土の滑石製 I A - 2 - い類 (第90図1) は、表面の加工痕が顕著で、加工痕が海中で光り輝く多面加工の役割を担っていた可能性がある。加えて底面に摩滅痕がなく、孔と下溝は摩滅する。この第90図1は弥生時代中期後半～古墳時代前期と幅がある資料であるが、形態的には糸島市一の町遺跡に近いものがある。また高元II区出土 I B - 1 - あ類 (第90図4) における孔・溝の顕著な摩滅は、博多湾・糸島半島の I 類石錘でよくみられる使用痕跡と同様のものであることから、同じ漁法で使用されたと判断できる。石田・高原地区出土の I B - 2 - い類 (第90図5) は小型の I 類石錘であるが、全体的に顕著な摩滅痕が認められ (第92図)、この状況は車出遺跡例 (第4表-61) と同様である。この小型の I 類石錘は、摩滅状況から錘自体が海底に直に接する可能性がある場面での使用状況が予測される。よって、I 類石錘の主な機能としてはイカ釣具の錘である可能性を指摘しているが (大庭2021)、この場合はイカ釣漁以外の釣漁での用途も想定すべきであろう。



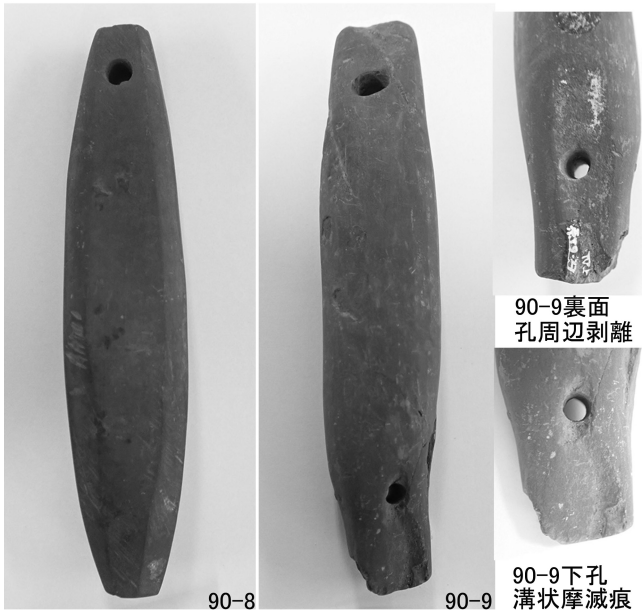
第92図 顕著な摩滅がある I 類石錘 (壱岐市教育委員会所蔵)

以上のことから、玄界灘沿岸地域で九州型石錘 I 類は弥生時代中期後半～後期前半に大型化、定型化するが、壱岐島にも大型化・定型化してまもない I 類石錘と漁法が時間を経ることなく伝播し、基本的に同じ漁法で使用されたことは注目できる。このように、両地域では先の消費規模をはじめ、魚種や海環境などの諸条件は異なる点も多いものの、博多湾・糸島半島の海人と壱岐島の海人との漁労技術に関する恒常的な交流の存在が窺える。これは、最近の中尾篤志氏による玄界灘沿岸地域の漁具の傾向の分析結果では、壱岐島を介した対外交流に際し、糸島半島の海人集団の関与を指摘しているが (中尾2022)、今回の検討結果も同様の結論になった。

その他中期後半には釣用錘である ii・III・iii・v 類石錘が先の I 類石錘と同様、博多湾・糸島半島から導入されたとみられる。

#### 弥生時代後期後半・終末

弥生時代後期初頭～前半にかけて遺跡では環濠や船着き場が機能を停止、朝鮮半島系土器の出土も低調化し、集落が一時衰退するとされるが (古澤2016a)、この時期に確実に属する九州型石錘はなく、漁労活動の痕跡は不明確である。近年の詳細な気候変動の研究により、紀元前後の弥生時代後期初頭において急激な降水量の増大が指摘されているが (中塚他編2021)、後期初頭の集落の衰退については以前より大規模な水害等自然災害の存在が予測されている (松見・古澤2016)。このことから、原の辻遺跡の衰退は急激な降水量の増大により、幡鉾川に近い遺跡北部の船着き場遺構を含む対外交流の場が大きく影響を受け、対外交流機能が一時機能不全になったことで、原の辻遺跡自体の存続が困難になったと理解できる。原の辻遺跡にかわり、規模は縮小するが海浜から距離があり高台の安定した場所に立地



第93図 原の辻遺跡出土ⅡB類石錘  
(吉岐市教育委員会所蔵)

するカラカミ遺跡、車出遺跡群が盛行することから、数年に一度の洪水に備えるなどの目的で数km離れた内陸部の両遺跡に原の辻遺跡の集団が移動したとする見解は（松見・古澤 2016）、妥当と考えている。

後期後半になると、九州型石錘の多種多様化と出土数が顕著に増加する博多湾・糸島半島、唐津地域と比べ、原の辻遺跡自体では出土数の増加傾向はみられないものの、多種化傾向から漁労活動の多角化、活性化は窺えるが、釣用錘が中心であることには変わりがない。

なお、距離的に近い唐津市神田中村遺跡等、唐津地域で顕著にみられる紡錘形に近い、底部が尖るタイプであるⅠC類石錘が吉岐島で全くみられないこと、唐津地域では大型石錘であるⅥ類石錘

がないことも合わせて、吉岐島における石錘からみた漁労技術の交流相手としては、常に博多湾・糸島半島周辺の海人との接触割合が高かったことが指摘できる。

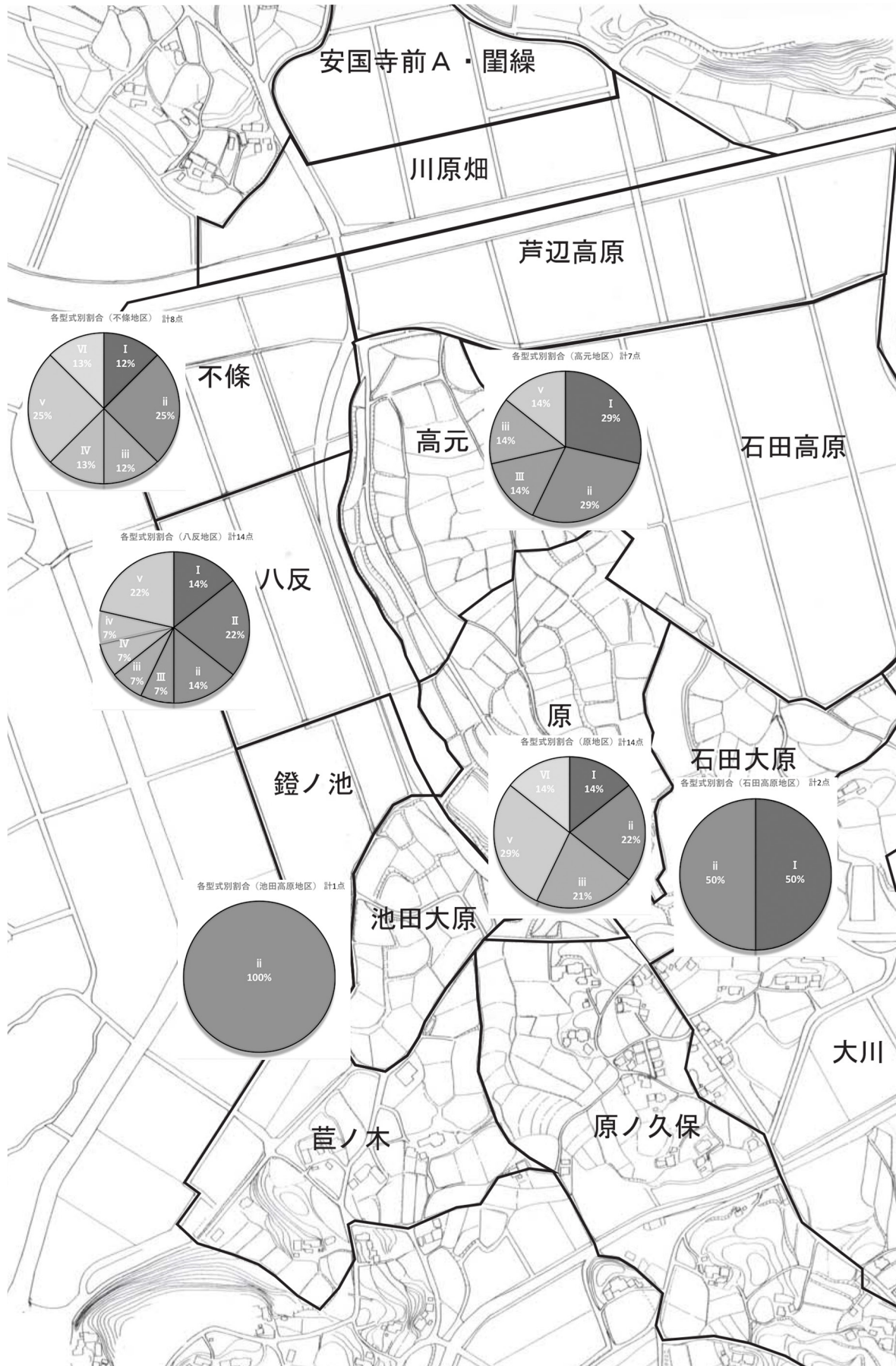
この時期、原の辻遺跡独自の形態である、細長い断面六角形を呈するⅡB-い類が出現する。第90図8のⅡB-い類石錘は、重量が139.1g、ほとんど使用痕及び摩滅痕がないことから未使用品に近いと推測される。一方、同じくⅡB-い類石錘で顕著な使用が認められる第90図9は、上下孔にいずれも紐ずれ痕が顕著で溝状になっており、特に下方向に負荷がかかっていることから（第93図）、釣用錘であることが想定される。また大型の石錘でありながら、上下2孔の孔径が4～6mmと細い糸を通してしたこと、重心は下部にあり、対象水域まで早く垂直に沈む形態、色調は青黒色であること、疑似餌的機能も併せ持つ骨角器の錘の形態と近く、疑似餌的機能も併せ持った錘が想定される。

以上のことから、ⅡB-い類石錘は大型魚を対象とする釣用錘の可能性が指摘できる。北部九州では弥生時代後期から鉄製釣針が盛行することから、鉄製釣針の出現がⅡB-い類石錘を創出させた可能性がある。このⅡB-い類石錘の出現と弥生時代中期を盛期とする骨角製漁具の衰退は時期的に整合することから、弥生時代後期後半、吉岐における漁労活動内容に大きな変化が生じたことが窺える。



第94図 原の辻遺跡出土半球状有孔滑石製品・Ⅵ類石錘  
(吉岐市教育委員会所蔵)

なお、ⅡB-い類石錘を用いた釣漁では丸木船を使用して大型魚を捕獲する際、船自体の転覆の可能性があり、釣針にかかった大型魚を弱らせて釣り上げる必要があり、釣漁だけではなく、ヤス・モリによる刺突漁を組み合わせた複合的な漁法で行っていた可能性がある。一方、摩滅が顕著なⅡB-い類（第



第 95 図 原の辻遺跡地区別の九州型石錘出土傾向

90 図 9) は海底を曳きずりながら捕獲する、いわゆる海底近くに棲む魚類を対象にした漁で使用された可能性を考えている。

さらに第 90 図 19 の軽石製浮子は軽石に施溝し、面加工したものである。博多湾沿岸地域の軽石製浮子は自然の軽石に若干溝をつけるかそのままのものがほとんどであることから、壱岐島の軽石製浮子の独自性がみられる。このように弥生時代後期後半～終末にかけて、多種化とともに、独自の石錘・浮子を創出するなど、壱岐島の環境に合わせた壱岐海人の創意工夫が窺える。

#### 古墳時代前期前半

古墳時代前期前半になると、石錘出土点数が減少し、漁労活動自体の低調化傾向が看取されるが、VI 類石錘は博多湾沿岸地域より伝わったとみられる (第 90 図 18・第 94 図)。VI 類石錘は遺跡からは 2 点出土しているが、博多湾沿岸地域の VI 類石錘と同様の使用痕跡であることから、同様の刺網系漁網の錘として使用された可能性が高いものの、凝灰岩製で気泡が目立ち、底部に凹凸もありすべりが悪く (第 94 図)、博多湾沿岸地域の VI 類石錘のように滑石製で平坦な底部が海底で滑りやすくするという優れた特徴を有することに比べて、機能的には弱い。また出土点数も少ないため確定できないものの、博多湾沿岸地域の網漁技術が導入されたものとして評価される。

この博多湾系網漁の伝播は、漁獲量の拡大をもたらしたと考えられるが、集落としては衰退期にあたるため、需要の拡大という面もあるが、博多湾と壱岐島との海人同士の日常的な漁労技術の交流により、効率の良い新たな技術について積極的に導入を図った結果とみられる。

古墳時代前期後半以降は、原の辻遺跡が解体されることから、九州型石錘の出土は確認できない。

#### ③地区別の出土傾向

原の辻遺跡の地区別の型式ごとの出土傾向について円グラフと地区割図を合成したものが第 95 図である。時期不明なものも含んでいるため、前節の時期的な変遷の検討よりは分析点数が増えているものの、各地区の時期別変遷を示すほどの資料数はない。

まず、遺跡の丘陵部北側の原地区と高元地区、遺跡北西の低地部の不條地区、八反地区にほぼまとまって出土する一方、集落の東側にはほとんどみられない。これは弥生時代中期後半～後期を中心とする楽浪系土器の出土分布が西側に偏ることと調和的であり、対外交渉と海人との関係性を裏付けるものである。また丘陵部南部の石田大原地区、池田大原地区でも出土するが、点数は少ない。

ただし、不條地区と八反地区でも石錘を含む漁具がまとまる様な状況でなく、漁労活動エリアといえるものではないことから、漁労活動エリアが固定化されている状況は認められない。

さらに集落中心部である原地区で I 類石錘や VI 類石錘などがまとまって出土していることから、集落の中核域にも漁具をメンテナンスするために集落に持ち帰ったと想定され、この範囲にも海人が居住していた可能性がある。

#### ④小結

原の辻遺跡における九州型石錘は博多湾・糸島半島とほぼ同様の多種多様な器種で構成され、弥生時代中期後半の I 類石錘の存在、未製品の出土が報告されていないことから、弥生時代中期後半に博多湾・糸島半島の漁労技術をそのまま導入したと考えられる。弥生時代後期後半・終末の II B 類石錘や面加工のある軽石製浮子という漁具の改良・進化は、博多湾・糸島半島からの漁具・漁法の導入だけではなく、壱岐島の海の生態系や環境に合わせた独自の漁法を創出した結果とみられる。ただし、古墳時代前期前半には VI 類石錘を用いた刺網系漁網を博多湾沿岸地域から新たに導入していることから、博多湾・糸島半島と原の辻遺跡の海人同士の日常的・継続的な漁労技術の交流が確認できる。

このように原の辻遺跡では、弥生時代後期後半・終末段階のみ独自の漁具・漁法が存在するが、基本的に博多湾・糸島半島周辺からの漁労技術の強い影響が認められ、かつ多量に漁獲できる網漁の発達が見られないことから、漁法の多様化にとどまり、漁労活動規模の拡大、水産物加工・流通の発展などを見出すことができない。これは島内の消費量に限界があったこと、アワビの採捕・加工とアワビ真珠の採取は別にして、原則島外への水産物の流通も志向しなかったことによる結果とみている。

また原の辻遺跡では周囲に農耕可能な広い平野部を持つ立地と出土遺物などから、生業としては水稻農耕がメインと推定されること、先の石錘の出土分布から漁労活動に特化するような集約性が高い状況はみられず、専門的な海人集団の存在は窺うことができない。

ただし、壱岐の海人の輸送を担う船の操船技術の高さと知識、屈強な身体能力については、釣漁用錘が卓越する状況や弥生時代後期後半・終末の外洋の大型魚を対象とした可能性があるⅡB類石錘の存在、壱岐島周辺の潮流などの環境からも窺うことができ、操船技術の高さと知識を生かし、中国・朝鮮半島までの長距離交易の水先案内人等の役割を担ったことが予測される。一方、一個人の力量を超えた相当程度の協業が必要な網漁の未発達から海人専門集団として組織化・システム化されていたかという点で、集落衰退まで未発達な状態であった可能性が想定される。

### (3) カラカミ遺跡における九州型石錘について

カラカミ遺跡は、島北西部の標高80m前後の小高い丘陵頂部のカラカミ神社を中心に展開し、山を越えた約2km西には片苗湾が位置するという、海から少し離れた立地の集落遺跡である。

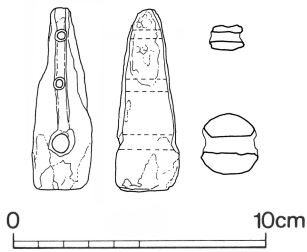
遺跡は弥生時代中期中葉に形成され、古墳時代前期まで集落が継続したと考えられる。丘陵頂部を取り囲むように掘られた大溝や弥生時代中期後半には半地下式の鍛冶炉をはじめ、弥生時代後期前半～後半の国内唯一の地上炉壁構造を持つ鍛冶炉跡（地上式周堤付炉跡）が確認されており、交易を通じて入手した鉄製品や板状・棒状の鉄素材を加工した活発な鉄器生産が想定されている（山梨2019）。

また大溝からは大量の土器、骨角製ヤス・モリ、鯨骨製アワビオコシ、鉄製釣針や鉄製ヤス、鉄製アワビオコシをはじめとする漁具や動物遺存体が発見され、先の原の辻遺跡よりも漁労活動の割合が高いことが窺える。さらに、刺突漁や潜水漁、釣漁を中心とする漁具の様相や貝類が比較的多く出土することから、漁労活動域は浅海が主体で、原の辻遺跡と同様、博多湾・糸島半島のように効率よく大量に捕獲するような漁労活動を積極的に行っていたとは考えにくいことから、漁労のみに特化した集団ではないと理解されている（松見2016）。

カラカミ遺跡では弥生時代中期後半～後期後半の釣用錘であるii・iii・v類という小型石錘のみ認められることが特徴で、原の辻遺跡と比べ出土量はもとより、少ない器種構成である。先の刺突漁や貝類の採捕も合わせても、漁労活動としては小規模である。カラカミ遺跡の集落規模は原の辻遺跡に比べ小さく、博多湾・糸島半島を中心とする新たな漁労技術をあえて逐次導入する必要はなく、従来の漁労活動によって十分食料を確保できる可能性が考えられる。さらに器種構成の少なさは、博多湾・糸島半島の海人との漁労技術交流も原の辻遺跡と比べ少なかったことが推測される。

その他の漁具もヤス・モリ・鯨骨製アワビオコシ、鉄製釣針など、新鮮な魚介類を捕獲するための漁具のみみられることから、基本的に自給自足的な漁労活動内容であったと想定されるが、原の辻遺跡と同じく、刺突具は刺突漁だけではなく、釣漁と刺突漁を組み合わせた複合的な漁法で使用されたことなども考える必要がある。

このように、漁労諸活動の範囲や内容もかなり限定されると予想されることから、先行研究と同様、



第96図

車出遺跡出土I類石錘  
(1/3)

カラカミ遺跡の集団は専門的な海人集団まで発達している状況は確認できない。

(4) 車出遺跡群における九州型石錘について

車出遺跡群は、原の辻遺跡の約5 km西、原の辻遺跡横を流れる幡鉾川上流に位置する、標高10～20m前後の小規模な盆地を中心に展開する5つの遺跡からなる遺跡群である。遺跡から山を越えた約1.5 km西で半城湾にたどり着く。調査例が少なく、原の辻遺跡やカラカミ遺跡と比べ不明確であるが、カラカミ遺跡と同様、弥生時代中期中葉に形成され、古墳時代前期まで継続

すると考えられる。なお、車出遺跡群では丹塗土器や大型甕の出土割合が高いことが特徴である。

車出遺跡群では、I B類石錘とii B類石錘が各1点確認できるが、もう1点出土しているようである。特に滑石製のI B-2-う類(第96図)は、上部の摩滅がかなり激しく、博多湾・糸島半島と同様の漁法で用いられていないとみられるものの、本資料は滑石製であることから、博多湾・糸島半島からの搬入品の可能性がある。

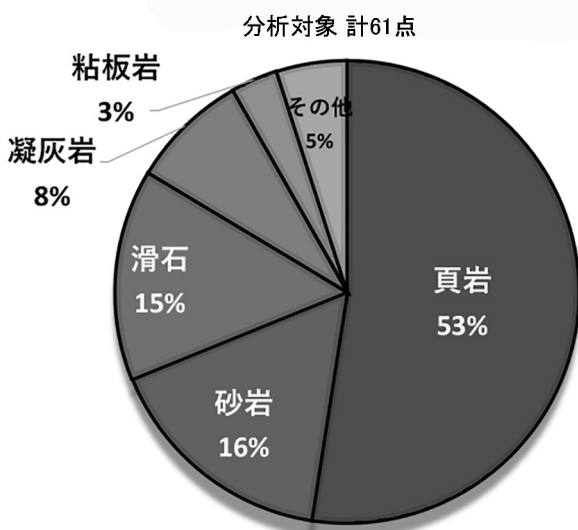
車出遺跡群は不明な部分が多いが、原の辻遺跡と土器の様相が類似し、谷部を抱える立地からも原の辻遺跡と同様、農耕を主体とする生業活動が予測される。原の辻遺跡と車出遺跡群ではともにI類石錘が出土し、小形の釣用錘のみで構成されるカラカミ遺跡とは漁労活動の様相が異なる可能性がある。

(5) 壱岐島出土の九州型石錘の材質の特徴

玄界灘沿岸地域における九州型石錘の特徴として、加工の容易な軟質の滑石を素材とするものが多く、他に粘板岩、花崗岩、玄武岩、泥岩、砂岩、白雲母片岩、凝灰岩が素材として併用される。大型品は滑石を素材とすることが多く、小型品は滑石のほか、砂岩や粘板岩なども目立つ(林田・中尾2014)。

壱岐島出土の九州型石錘では、頁岩が53%と半分以上を占め、砂岩16%、滑石15%と滑石の割合が低いことが特徴である(第97図)。一方、I類石錘では滑石製が62.5%と多数を占め、玄界灘沿岸地域の特徴と一致し、使用痕の比較から、その大半が博多湾・糸島地域と同様の漁法(イカ釣漁等・大庭2021)で使用されたと想定される。また不條地区出土のI B-2-い類(第90図3・第4表12)は石

材の色調が赤灰色と博多湾で顕著な滑石と色調が同様のもので、形態を含めて博多湾からの搬入品の可能性がある。一方、大型石錘のVI類石錘については、材質は博多湾沿岸地域でほとんどを占める滑石製のものとは確認できず、地元産の凝灰岩製である。



第97図 壱岐島内出土九州型石錘の石材材質割合

(6) 動物遺存体からみた壱岐島の漁労活動

原の辻遺跡とカラカミ遺跡では、漁具とともに動物遺存体が多く出土しており、比較的多くの同定が行われている。詳細については、第III章10の58・59頁で取り上げている。

それを要約すると、原の辻遺跡では環濠内から動物遺存体が出土しているものの種類は少ない。

一方、カラカミ遺跡では、岩礁、砂礫底、砂泥、泥底の潮間帯から水深 10m 程度の範囲で、ウニ類・アワビ・サザエ等の採捕が行われていたと推測される。魚類の動物遺存体においても、フエフキダイ科、タイ科がそれぞれ 3 割を占め、岩礁帯や沿岸を回遊する魚種が多く出土し、刺突具からも岩礁帯が主な漁場であったと推測される。

一般的に、弥生時代の海浜遺跡ではアワビなどの大型の貝殻の出土が増え、交易品として重視されたことで、アワビの採捕が盛んになったと考えられているが、カラカミ遺跡からアワビ殻の出土は集中的に確認された土坑以外は少なく、評価が難しい。特に弥生時代後期以降の神奈川県三浦半島の洞窟遺跡における膨大なアワビ殻の出土と比べると少ない状況である。なお、鯨骨製アワビオコシの存在は、倭の水人を示すものとして有名であるが、使用による欠損・再加工など著しい使用痕も少ないようにみえること、先に示すようにアワビ殻の出土は非常に少ないことから、何らかの象徴的な場で使用されたものである可能性も想定すべきと考えている。

このように、カラカミ遺跡では岩礁帯が重要な漁場となっており、平野部に立地する原の辻遺跡と比べると、より多くの海産物に依存していたことが予想されるが、貝類が多量に棲息する干潟の発達に恵まれず、大規模な貝塚を形成するまでの採貝活動ができなかったため、動物遺存体の出土が小規模な貝層や湿地性の包含層に限定された遺存環境も留意する必要があるとされる。またイノシシ属の骨にみられるイヌによる多数の咬痕から、イヌだけでなく、タヌキ、カラスなどによる死肉漁りが予想され、特に小型の魚骨などの骨は全体が食べられて消失した可能性が指摘されている（丸山他 2013）。

以上、両遺跡の動物遺存体の特徴から壱岐島では、島の周辺は全体的に水深があり、波も荒く、岩場など岩礁帯が多く、漁場としては主に島の沿岸の小規模な砂浜や浅い海に生息する魚介類が主な捕獲対象で、時には外洋で大型魚を釣漁・刺突漁を組み合わせることで捕獲していたことが窺える。

#### （7）壱岐島出土九州石錘の特徴からみえる壱岐の海人の特徴

これまで原の辻遺跡、カラカミ遺跡、車出遺跡群という、遺跡ごとに壱岐島の九州型石錘の特徴をみてきたが、調査が少なく様相が明らかでない車出遺跡群は除き、原の辻遺跡とカラカミ遺跡では両者が領域とした海の生態系や環境、集落規模や消費規模等の面も考慮する必要があるが、出土する石錘の量・種類・組成が大きく異なる。弥生時代後期になると、壱岐島では骨角製漁具が衰退ないしは消滅し、代わりに弥生時代中期後半から九州型石錘を中心とする博多湾・糸島半島の影響を受けた漁具・漁法の使用が開始されることから、漁労活動に大きな変化が生じている傾向は両遺跡共通する。一方、多種多様な九州型石錘が盛行する博多湾・糸島半島の石錘の動向と一致する原の辻遺跡に比べ、カラカミ遺跡では釣用錘の一部のみが出土と関係の度合いが異なる。

原の辻遺跡とカラカミ遺跡における異なる様相の背景として、先行研究では比較的広い平野を有し、農耕主体の集落である原の辻遺跡と、内陸部の谷間に位置し、漁労活動や鉄器生産などの生産活動を主体とするカラカミ遺跡という、主要な生産活動の違いが背景にあると指摘されている（松見 2016）。しかし、カラカミ遺跡は谷水田、漁労、狩猟、鉄器生産と、生業の中で水稻農耕の割合が高い原の辻遺跡に比べ、複数の生業を組み合わせた網羅的な生業構造を示す。この網羅的な生業構造がカラカミ遺跡における九州型石錘の出土量と種類の少なさに表れており、漁労活動が生業の一部ではあるものの、漁獲量もさほど多くなく、自給自足的な内容であったと予想される。加えて原の辻遺跡でも、博多湾・糸島半島の影響を受け多角化は志向するものの、石錘自体の出土量が増えないこと、かつ網漁は発達しないことなど、原の辻遺跡の領域内で必要な消費量は超えない程度の漁労活動であったと予測される。

博多湾沿岸地域では、弥生時代後期終末～古墳時代前期前半に備讃瀬戸地域由来の棒状土錘や管状土錘Cと製塩土器、大阪湾岸由来の飯蛸壺や製塩土器が流入することで、漁労活動が大型化・拡大化し、塩蔵加工品の生産や流通を含むシステムも整備される（大庭 2022）。その代表的な遺跡である古墳時代前期前半の福岡市西新町遺跡では、外部から管状土錘Cやこれまでの在地系石錘に加え、新たに西新町型石錘を生み出し、多量の飯蛸壺も含めれば、多種多様な漁具を有する（山中 2007）。対象とする漁法や水産物は明らかでない部分が多いが、管状土錘Cによる袋網系の網漁や石錘の一部を用いた釣漁、飯蛸壺延縄漁など複数の漁法が存在したと考えられる（乗松 2010）。博多湾・糸島半島では多様な水産物を捕獲・加工し、それを交易品とする状況から、従来の漁労活動の空間や水産物の利用方法、集団労働の在り方など、資源の自給自足的状況が大きく変化し、集団間の相互依存が強まったことが想定できるが、壱岐島ではそのような状況はみられない。

これは、海浜部集落背後の内陸部の農耕集落の需要・消費量とその流通構造の違いに起因すると考えられる。原の辻遺跡では博多湾・糸島半島の影響を受け、多角化またはこれまで培った漁労技術を発展させてII B類石錘のような独自の形態の漁具・漁法を創出するが、基本的な漁具構成は弥生時代中期と同様であり（中尾 2022）、基本的に水産物は集落内部での自己消費用であったため、博多湾・糸島半島のような大規模な網漁の発達に伴う集団再編成を行うことはなく、両遺跡とも漁労活動の集約化はもとより、拡大化やシステム化は志向しなかったといえる。

西川修一氏は、弥生時代後期、外部から供給される物資を調達するニーズの高まりに対する代償の確保を図るため、列島各地の特産物的な物資を創出し始め、後代の律令制下の「調・贄」のような、「交易」の端緒となったこと、さらに多様かつ高価値の「財」を生み出した海浜部の漁村が大量の物資が行き交う地域内の特定の場所＝「湊」「港湾」へとシフトしたと指摘する（西川 2015）。古墳時代前期前半の西新町遺跡の漁労活動もその流れで捉えられるが（大庭 2021・2022）、壱岐島の漁労活動においては、そのような発展段階を見出すことはできず、あくまでも従来からの博多湾・糸島半島の海人の影響下にあったように見える。原の辻遺跡では、『魏志』倭人伝における南北市糶の記事や交易品である布・玉等に代表される顕著な諸生産活動の痕跡は確認できず、対内外交易により必要物資は入手することができたため、生産活動自体が低調であったという意見（松見・古澤 2016）を踏まえると、壱岐の海人が交易で用いる列島側のコメ・布・玉等の財はあくまでも博多湾・糸島半島周辺の集団が生産・調達した物資に依存しており、この依存体質が生産活動、漁労活動の拡大化・システム化まで至らなかったことにまで影響していたと考えられる。

また、この原の辻遺跡とカラカミ遺跡の石錘の様相の違いは、漁具はそれぞれの海の環境に応じて異なることを考慮しても、漁労活動の違いだけではなく、それぞれの海人が行う日常的な交流の相手先や内容が異なっていた可能性、いわゆるローレベルの交易圏や生活圏が両遺跡では異なっていたことを示す可能性がある。

このことについて、壱岐島出土の朝鮮半島系土器の傾向からみると、原の辻遺跡における楽浪系土器と三韓系土器は、三韓系土器は遺跡東西で同程度出土するのに対し、楽浪系土器は出土分布が西側に偏る（古澤 2016 a）。これは楽浪系集団と三韓系集団が別個に交流経路を持ったことを示唆しており、博多湾沿岸地域と同様（森本 2015b）、相手先、交渉内容に応じた受け入れ先等の対応が異なっていた可能性があり、楽浪系集団と三韓系集団が滞留した場所も遺跡内である程度分かれていたことも想定されている（古澤 2016a）。さらに、楽浪系遺物の出土は原の辻遺跡やカラカミ遺跡等の大規模集落に偏るため、渡来した楽浪系集団は大・中規模の集落でなければ対応できなかった規模の集団であった可能

性を示す一方、三韓系土器は小規模な遺跡からも出土することから、日常的な交易活動の範囲内の渡来であり、渡来頻度は高かったものの、渡航集団の規模は小規模集落でも対応できる程度であった可能性が指摘されている（古澤 2018）。

このように、壱岐島では弥生時代前期末～中期には朝鮮半島南部の海人と移住や移動を含む日常的な交易が行われるが、楽浪郡設置を契機として交易システムが変化し、弥生時代後期には交易と外交に交流の軸足が遷移し（古澤 2019）、楽浪系集団と三韓系集団はそれぞれ別の交流ルートを持ち、交流目的や交流相手も相互に異なっていた可能性が指摘されている（古澤 2018）。

このように「南北市糶」という交易構造は、原の辻遺跡は内海湾、カラカミ遺跡は片苗湾、車出遺跡群は半城湾というそれぞれ異なる港に繋がるという構造を有することを含めて、政治的な対外交渉などのハイレベル交流、日常的な交易などのローレベル交流いずれにおいても浦（集落）ごとの独自性が強く、多元的・複雑であることを示すと同時に、『魏志』倭人伝に記された一支国という政治的・社会的構造は各集落を統合するような求心性をみることができず、表層的な面があり、実際の地域社会構造は複雑であったことを示している可能性がある。

#### （8）まとめ

以上、壱岐島における九州型石鍾の分析を通して、石鍾の型式や割合、出土量から遺跡ごとの特徴、玄界灘沿岸地域との比較から、博多湾・糸島半島周辺の海人との日常的な密な関係が認められ、石鍾を用いた漁労活動に従事した人々の一部は日常的に博多湾・糸島半島から壱岐島へ至るルートで交易を行っていたことが明らかになった。

壱岐島で出土する弥生時代中期後半の土器の形態や構成は、伊都国や奴国等、九州本島の土器と酷似する。特に石橋新次氏は伊都国域で特徴的な鋤先口縁の広口壺や袋状口縁壺などを「糸島型祭祀用土器」と呼び、この「糸島型祭祀土器」が西北九州を中心に展開する要因として、海上交易及び政治的交渉が伊都国を中心に進められたためと理解した（石橋 1992）。これは、弥生時代中期後半、土器を用いた儀礼様式が共有されるという、地理環境が区分する地域社会を超えて、地域圏同士の明確な結びつき、一体性が表出されたと理解されるが、今回の九州型石鍾の検討結果からも同様の傾向が指摘できる。

さらに岡部裕俊氏は、一支国が距離的に近い末盧国ではなく、伊都国との連携に踏み切った理由の一つとして、伊都国と末盧国の農業生産力の差によることが基本にあり、一支国では伊都国における三雲南小路遺跡・井原鍬溝遺跡、奴国における須玖岡本遺跡に相当するエリート個人の首長墓は確認されておらず、交易の実務に携わった一支国と、海上交易・対外交渉を掌握した伊都国・奴国という機能分担が確立し、海上交易権の掌握を望む伊都国と「南北市糶」の安定化を図る一支国の思惑の一致をみた結果という考えを示す（岡部 2007）。このことは、今回の石鍾の検討結果と調和的であるが、では距離的に一番近く、一支国の次の『魏志』倭人伝ルートにもあたる末盧国、唐津地域と壱岐島との交流の密度は、漁労技術という日常的な交流や楽浪系土器の出土が唐津地域では少ないことなどからも、博多湾・糸島半島よりかなり低い。

では魏からの遣使はなぜ末盧国を介したのであろうか。想像たくましく考えれば、正式な遣使である以上、邪馬台国連合を構成する末盧国で船を降り、伊都国へは陸行することで、邪馬台国内の諸国に対してアピールしたこと、また魏の遣使は楽浪郡から同じ船を用いており、倭のものより大型船であったため、糸島半島の御床松原遺跡や潤地頭給遺跡などの砂丘や潟湖沿いに位置する伊都国の港津に直接入港できなかったことなど、様々な可能性が考えられよう。

壱岐島の漁労活動の在り方として、博多湾・糸島半島と壱岐島という隣接する地域間の連続した交流、かつその時間幅も弥生時代中期後半、後期前半の一時衰退を経て、後期後半～終末、古墳時代前期前半までの長期間にわたり、広く九州型石錘が共有され、釣漁を中心とする共通する漁労技術が認められる。壱岐島の南北市糶の実態は、海に囲まれた壱岐では他地域との交流を行うためには、日常的に海に出て漁を行って海を熟知した人々が拓いた海上交通ルートに乗ることではじめて他地域との交流が可能であり、その内容も波や変動がありながらも、博多湾・糸島半島と壱岐島の海人の漁業圏と日常の生活・交易圏が継続的に重なり合うことで成立したといえる。なお、このルートは今回検討した漁具・漁法以外にも先進的な文物や技術だけではなく、ト骨等精神文化まで及んだとみている。

しかし、壱岐島の海人は漁労活動の多様化は志向しても、島内の消費量の限界から博多湾沿岸地域のように生産・流通の拡大化・システム化までは及んでおらず、集約的ないしは専門的な段階までは至っていない可能性を今回提示した。原の辻遺跡・カラカミ遺跡における石錘の様相の違いは、それぞれの漁労活動だけではなく、弥生時代後期の壱岐島における対外交流は交流目的や規模、内容、また遺跡ごとに相互に異なることが予想される。以上のことから、南北市糶の内容は単純ではなく、複雑な組み合わせにより成り立っていた可能性を指摘することができた。

ただし、この具体相の詳細は今回提示できておらず、その内容と範囲を含めてさらに検討されるべき必要性を感じている。対馬島の在り方も南北市糶を考える上で重要であるが、対馬島の集落遺跡の調査が少なく、出土漁具も少ないため、様相は不明である。

今後、出土位置がまとまったかつ時期が判明する漁具の増加により、今回の検討結果が大きく変更を迫られる事態も十分予想される。さらなる調査に期待したい。

## 5 九州島外における九州型石錘についての予察

### (1) はじめに

九州島外でも九州型石錘が展開することは、九州型石錘を規定した下條信行氏により示されてきたが（下條 1984）、その後山陰地方をはじめ（下條 1989、乗松 2007・2013 他）、瀬戸内地方（乗松 2000、柴田 2011・2022 他）で九州型石錘と関連するとされる石錘が一定量分布することが明らかになっている。この背景としては、いずれも鉄器素材の流通等、地域間交流の活発化に伴う「玄界灘海人」による積極的な交流の痕跡であると考えられている（下條 1984・1989、柴田 2011・2022 他）。

本研究では、玄界灘沿岸地域の九州型石錘の実物観察を通じた実証的な研究を行っているが、今回先行研究で示されたいくつかの九州島外の九州型石錘の資料調査を実施し、玄界灘沿岸地域出土九州型石錘との比較検討を行うことができた。その結果、これまで玄界灘沿岸地域からの搬入品ないしは関係性が考えられてきた九州型石錘については在地の模倣生産の可能性、また系譜的・機能的には繋がらないと思われる中近世の九州型石錘の存在など、九州型石錘の分布状況からの「玄界灘海人」の動向については再評価の余地があるように感じている。

この再評価については、九州型石錘の定義、意義まで含めたものになるが、現在の様々な制約から資料調査による観察が不十分な状態で、体系的な整理もできていない状況である。しかし、本研究を推進する上では重要な課題であるため、実際に資料調査を行った九州島外の資料を中心に整理した結果を紹介することで、その課題解決のための前提条件となる基礎的な整理を行いたい。

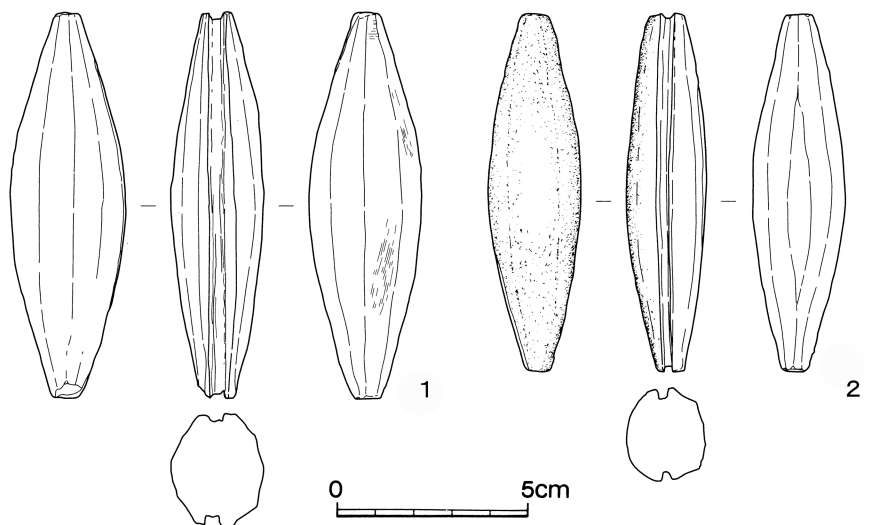
### (2) 瀬戸内地方中部における九州型石錘

愛媛県の東部、燧灘を眼下に望む四国中央市上分西遺跡乗安地区の弥生時代後期後半の竪穴建物 2c 区 SI201 の床面直上からは、滑石製の九州型石錘（筆者分類の II B - 1 類）2 点（第 98・99 図）が三角形鉄片など鍛冶関連遺物とともにそろって出土した（愛媛県埋蔵文化財調査センター 2011）。

柴田昌児氏は、この九州型石錘 2 点について、在地の有溝石錘の系譜では追えず、石材・形態の特徴から玄界灘周辺（場所は限定していない）からの搬入品と評価し、溝に使用痕がないことと瀬戸内海沿岸には流通しない滑石製石

錘であることから、玄界灘海人が鉄素材ともに携行した、そのアイデンティティを表象するアイテムであると理解した（柴田 2011）。ただし、柴田氏は玄界灘沿岸地域の九州型石錘の同様の形態のものより比較的大きいこと、多面体の稜が残るという、玄界灘沿岸地域の九州型石錘との違う点も言及する（柴田 2011）。

筆者は、愛媛県歴史文化



第 98 図 上分西遺跡出土 II B 類石錘 (1/2)

博物館の企画展で本資料を展示していたことから初めて存在を知り、その後現在資料を所蔵する四国中央市教育委員会の協力のもと資料調査できたため、その観察結果とともに、現在の筆者の所見について述べたい。

### ①観察結果

対象となる石錘2点はいずれも緑灰色を呈する滑石で製作されるが、石材は1の方が質は良く、2の方は石英が貫入する。この貫入があるという条件から2の裏面は丸く整形された可能性がある。

平面形はいずれも細長く左右対称の紡錘形を呈し、断面はやや横長の多角形を呈する。側面には両端部まで全周するように溝1条が施されているが、溝内には紐掛けや紐ずれ等の摩滅痕は確認できない(第100図)。溝断面は方形を基本とするが、溝の両壁を垂直にするため、壁側をノミ状工具により数回にわたって深く施溝した結果、溝床面中央が山形になっている(第100図)。このような施溝方法は管見の限り玄界灘沿岸地域では確認できない。また上下端部、側面とも同じ幅で施溝されているが、玄界灘沿岸地域の石錘は上下端部の溝幅は細くなることが多い。

整形はいずれも基本的に多面形に面取りし、面の境は稜をなすが、2の裏面は丸く整形される。面の整形については、1は最終的に若干研磨が施される箇所があるが、1・2の調整は基本的にノミ状工具の刃先を少し斜めに軽く当てて連続して削ることで整形している(第101図)。ただし、この連続した削りは長さが1~2mmと短く、工具の当たり痕も弱く、ノミ状工具による明確な加工痕と最終的には平滑に研磨する博多湾沿岸地域の多くのものとは様相を異にする。

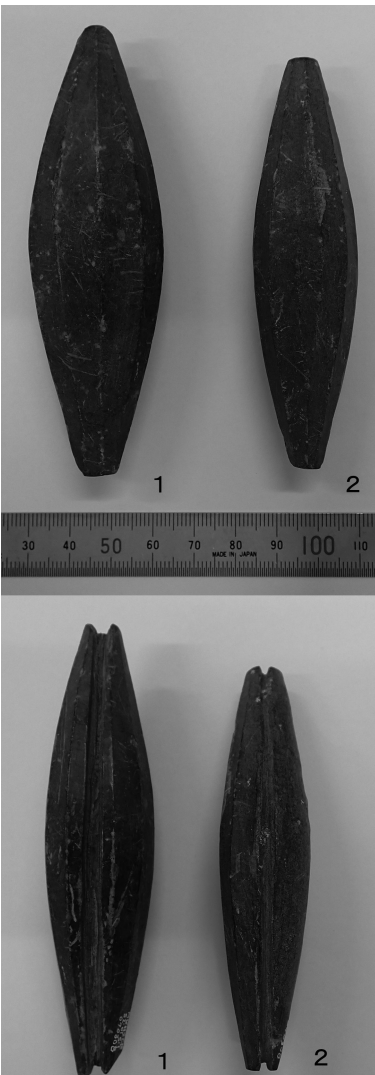
なお、1の削り痕は先端が平坦なノミ状工具で施されているが、2は面の中央が大きく窪んでいるため、幅6mm程度の先端が丸いノミ状工具で少し斜め方向から削ったとみられ、1・2で工具が異なる。さらに、2の丸く整形された裏面は、先端が平坦な小さなノミ状工具先端を軽く当てて細長く削るようにした幅1mm程度の縦方向の削り痕が認められる(第101図下)。以上のことから、2の表面と裏面の最終調整では使用した工具は異なる可能性が考えられる。

また、報告書ではいずれも使用痕跡はないとされるが、これは石錘としての使用痕跡のことを指しており、キズは多く認められる。1の表面は手ずれにより、稜が甘くなっており、かつキズも多くあること、先の溝に摩滅痕がないことから、石錘としては未使用であったと思われる。ちなみに、1の裏面はより摩滅している。2には鋭い稜があるものの、こちらもキズが目立つが、1のような明確な手ずれ痕としての摩滅痕は認められない。

法量は1の方が大きく、全長10.22cm、幅2.93cm、溝幅は3.2mm、重量90.53gを測る。2の法量は、全長9.5cm、幅2.4cm、溝幅は2mm、重量は63.57gを測る。

### ②玄界灘沿岸地域との比較検討

石材については、筆者による博多湾沿岸地域を中心とする九州型石錘について資料調査の結果、今宿五郎江遺跡・西新町遺跡・一の町遺跡等、博多湾西部・糸島半島の九州型石錘の滑石は、やや質の悪い灰



第99図 上分西遺跡出土石錘  
(四国中央市教育委員会所蔵)

色系で、それに赤色味がかかるものが目立つため、赤色味自体が魚の眼につきやすくする疑似餌的效果を果たしたことを指摘した（大庭2021）。一方、博多湾東部の唐原遺跡・吉塚遺跡・比恵遺跡・雀居遺跡出土の九州型石錘は色調が基本白色～灰色系である。以上のことから、博多湾沿岸地域では本例のような緑灰色の単色のものは管見では認められない。さらに、博多湾沿岸地域の滑石製石錘では石質から巣状に小孔が開いたものも目立つ。以上のことから、本例は少なくとも博多湾沿岸周辺で産した石材ではないと考えている。

なお、四国中央市周辺の在地の石材については、ほとんど知識がないものの、本例は滑石よりも緑色片岩系に近い印象があり、在地産石材の可能性も考慮に入れる必要があると思われる。

整形の面では、博多湾・糸島半島における九州型石錘は鉄製の小型ノミ状工具を長軸方向に強く当てて、幅3～5mm前後の連続した切削痕が残るように削ることで縦方向の面を作りだし、その後研磨で丸くすることを基本とする（110頁）。本例でも縦方向の細かい面を作りだすことは一致するものの、切削痕跡の当たりが弱く、1では8mm程度の広めの面を作りだし、かつその後ほとんど研磨していないこと、断面が多角形を呈した事例は管見では博多湾沿岸地域にはない。

本例と同様、断面が多角形を呈するものは、両端部に孔を有するという違いはあるが、弥生時代後期後半の長崎県壱岐市原の辻遺跡出土のⅡB類石錘と形態的には近い（第93図）。この石錘は、重量139gと79.5g、石材は頁岩で色調は青黒色、弥生時代後期後半～終末、博多湾・糸島半島地域の石錘の影響のもと壱岐の海人が壱岐島の海域の環境に合わせて、新たに創出した疑似餌的機能も有する錘で、その大きさと孔径などから時には外洋まで及んだ大型魚を対象とした釣用錘と推測した（第IV章4、132頁）。あえて言うのであれば、本例はこの原の辻遺跡例に近いが、孔や溝の有無、色、石材などは異なるため、直接的な系譜関係についての判断は難しい。

溝については、博多湾沿岸地域の九州型石錘の施溝は長軸1条が基本で、側面のみ施すものはほとんどない。加えて本例の溝幅は2～3mm、深さは2mm程度と深く施され、溝断面は壁を垂直するため、壁側が深くなり、溝下面が山形を呈するという特徴を持つ。博多湾沿岸地域の九州型石錘の溝断面は湯納遺跡等ごく少数で溝断面がコの字状を呈するものがあるが、大半が断面V字形で施されている。なお、この異なる状況については柴田氏も指摘している（柴田2011）。

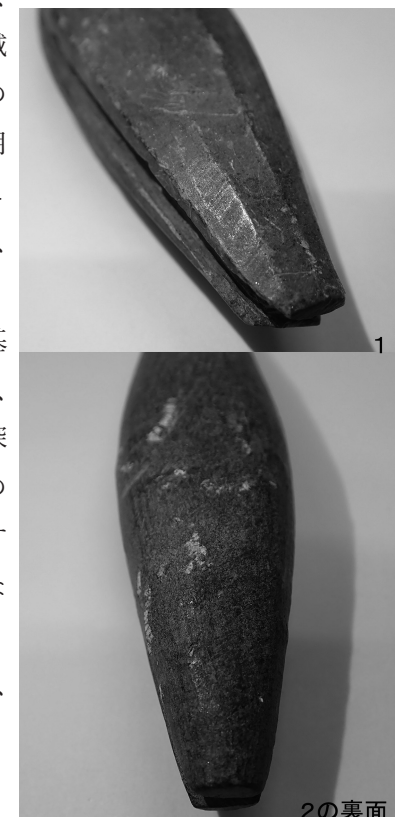
また、本例の溝幅は2～3mmであること、2点のみの出土であるため、網用錘ではなく、釣用錘と思われるが、釣用錘にしては大型である。

## ②上分西遺跡出土石錘の系譜に関して

石錘が出土した上分西遺跡の竪穴建物2c区SI201出土の三角鉄片を含む鉄素材は竪穴建物に集積保管した可能性が想定されている（柴田



第100図 1の溝内加工状況  
(四国中央市教育委員会所蔵)



第101図 1・2表面加工状況  
(四国中央市教育委員会所蔵)

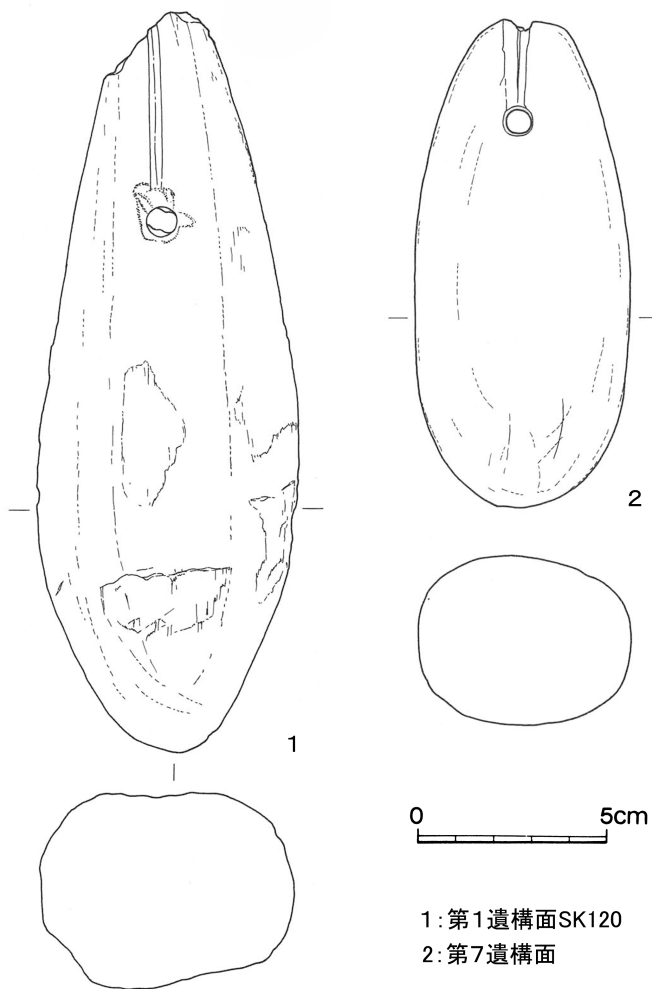
2011)。壱岐島においてもカラカミ遺跡で弥生時代後期前半～後半まで国内唯一の地上炉壁構造を持つ鍛冶炉跡（地上式周堤付炉跡）が確認され、交易を通じて入手した鉄製品や板状・棒状の鉄素材を加工した鉄器生産が想定されており（山梨 2019）、先の石錘の類似から壱岐島と本遺跡との関連を考えたくはなるが、カラカミ遺跡では本例のような大型のⅡB類石錘の出土はなく、かつ原の辻遺跡とカラカミ遺跡では対内外交流・交易の相手や生業内容が異なると予測されているため（第Ⅳ章4、138・139頁）、上分西遺跡との直接的な関係性の証明は困難である。

また本例は竪穴建物床面直上に並べて置かれたとされるが、博多湾・糸島半島周辺では半球状有孔滑石製品（Ⅵ類石錘）以外では石錘を意図的に並べて置いた行為は管見では認められない（第Ⅳ章2、98頁）。この行為で用いられた半球状有孔滑石製品も確認できた範囲では網への装着と使用等顕著な使用痕が認められ、刺網系漁網の錘として使用された後に取り外され行われており、本例のように石錘としての未使用品を意図的に祭祀で用いたものではない。

以上、本例は玄界灘沿岸地域の石錘と製作技術を中心に異なる点も多く認められる。弥生時代の瀬戸内地方の石錘は基本的に溝は浅く、形態もラグビーボールないしは楕円形が多く、石材を含めて瀬戸内地方の石錘（乗松 2000）とは異質な点が多くみられ、玄界灘沿岸地域からの搬入品の可能性はゼロではないが、少なくとも玄界灘海人の核となる地域で、瀬戸内系土器の出土が確認されている博多湾沿岸地域で製作され、搬入された可能性は低いと考えている。一方、形態的には壱岐島原の辻遺跡例に近い

が、材質や側面溝、無孔という点から、玄界灘沿岸地域において、本例の確実な系譜を追うことができない。特に複数の幅1cm程度の面加工による断面多角形、断面逆コの字形の側面1条溝、2点並べて置いた出土状況は本例のみである。原の辻遺跡ⅡB類石錘については博多湾・糸島半島の石錘の影響を受け、壱岐の海人が独自に創出したと位置づけられることから（第Ⅳ章4、132頁）、本例も上分西遺跡の集団が九州型石錘を模倣ないしは影響を受けて独自に創出したことも考える必要があるのではなかろうか。

なお、松山市文京遺跡14次調査から表土等の出土であるものの、粘板岩製とみられるⅤA類1点が出土していることを最近確認した（吉田 2020）。同様の形態のものが元岡・桑原遺跡群でも発見されていること、吉野ヶ里歴史公園特別企画展での展示ケース越しに観察した印象では断面が略三角形であること、色調は暗灰褐色と黒く、用途に見合った石材・色調を選定していること、施溝や体部など博多湾沿岸地域のⅤA類の製作技法と似ている印象を受けた。



第102図 兵庫津遺跡出土ⅠC類石錘（1/2）

今後、実物観察の機会を設けて、博多湾沿岸地域との比較検討を行いたいと考えているが、先に取り上げた瀬戸内地域中部で発見される石錘は、基本的に個人で行える釣用錘のみであることは、網用錘がみられる博多湾沿岸地域とは大きく様相が異なる。

この文京遺跡の事例が博多湾沿岸地域からの搬入品であるのであれば、少なくとも西部瀬戸内地域の斎灘まで博多湾の漁労活動の影響が及んでいた可能性があるものの、古墳時代初頭前後、管状土錘 C や棒状土錘、飯蛸壺等を用いた漁法がそのままダイレクトに玄界灘沿岸地域に伝播したのと対照的であり、地域間交流の双方向のベクトルに大きな違いが認められる。

### (3) 近畿地方における九州型石錘

九州型石錘を規定した下條氏の 1984 年段階の集成（下條 1984）では、伝兵庫出土大形 A I 型が挙がっていたが、図面が示されておらず、具体的な内容は不明であった。

九州型石錘の集成作業の中で、下條氏の研究成果を再確認するため、兵庫県内の報告書について類例を探索する中で、神戸市兵庫津遺跡において九州型石錘 I 類が複数出土していることを確認した。そのうち、図面と詳細な情報が公表されている兵庫津遺跡第 14 次調査出土資料について、神戸市埋蔵文化財センターの協力のもと、資料調査をする機会を得たことから、ここではその観察結果を整理したい。

#### ① 観察結果

神戸市兵庫津遺跡は、中世以降、博多や堺と並ぶ港湾都市として栄えた遺跡で、14 次調査区では中世～近世にかけて港町の町屋跡が建ち並んでいたことが確認されている。そのうち水産業に関連したと想定される町屋跡付近から、九州型石錘 I 類に類似する滑石製石錘が複数出土していることを確認した（黒田他 2010）。なお、14 次調査区以外でも I 類石錘が複数発見されていることが報告書から確認できるが、いずれも写真のみ掲載され、詳しい情報は不明である。

14 次調査では I 類石錘が 2 点出土しているが、第 102 図 1 の 18 世紀中頃の第 1 遺構面 SK120 出土のものは、石材が結晶片岩で色調は緑灰色、上端部が欠損するが、法量は長さ 19.8 cm、幅 6.9 cm、厚さ 5.2 cm、重量は 1,119.5 g と玄界灘沿岸地域の弥生～古墳時代の I 類石錘と比べ非常に大型である一方、溝幅は 3 cm、孔径は 8 cm と大きさに比べ、弥生～古墳時代の I 類石錘と同様の溝幅及び孔径になる。

自然面が所々残ることから、元々この形態に近いものから採取し、基本的に研磨することで成形したと予測される。体部の一部には顕著な研磨がみられ、底部を含めて摩滅痕がない一方、孔内は摩滅することから、弥生～古墳時代の I 類石錘と同様、釣用錘であったと考えられる。

第 102 図 2 の 16 世紀頃の第 7 遺構面出土のものは、滑石製で色調は明青灰～明赤灰色、法量は長さ



第1遺構面SK120

第7遺構面

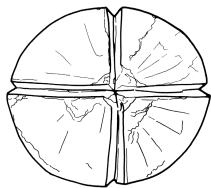
第 103 図 兵庫津遺跡出土石錘  
(神戸市所蔵)

13.1 cm、幅 5.8 cm、厚さ 4.4 cm、重量 554.8 g と 1 と同様、弥生～古墳時代のものとは比べ、大型化が顕著である。溝幅は 5 cm、孔径は 6.5 cm を測る。体部は丁寧に研磨されており、海中で光り輝く疑似餌の機能を持っていた可能性がある。側面には曳きずったような弱い摩滅痕があるものの、一部かつ顕著ではないことから、1 と同様釣用錘であると考えられる。

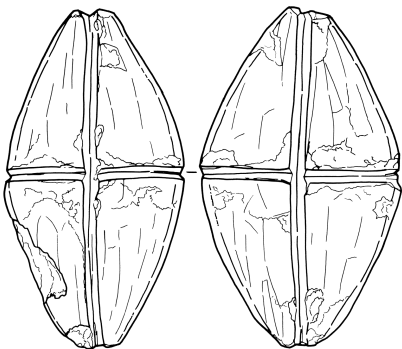
## ②中近世における九州型石錘 I 類石錘の特徴

兵庫津遺跡第 14 次調査区では、多数の動物遺存体が出土し、水産業に関わる町屋跡の存在が予測されているが（丸山 2010）、資料観察では結晶片岩・滑石製であること、1 孔上溝の形態、色調と研磨されて海中で光り輝いたと考えられることと、弥生～古墳時代の I 類石錘の孔径と溝幅が整合し、網用錘のように海底に当たったり、曳きずられた明瞭な痕跡はないことから、かなり大型化しているが、弥生～古墳時代の I 類石錘と同様、釣用錘である可能性が高いと考えられる。

これまでの先行研究では、九州島外の九州型石錘 I 類に類似する石錘について、形態の類似から弥生～古墳時代の玄界灘沿岸地域における九州型石錘 I 類との関係性を導き出し、集団間の交流関係を復元してきた（下條 1984・1989 他）。これまで中世の博多遺跡群（土岐 2020）、平戸（土岐 2020）、西彼杵半島（林田・中尾 2014）等の弥生～古墳時代の博多湾沿岸地域のものとは系譜的につながらない I 類石錘が存在することは示されてきたが、近世、それも神戸で I 類石錘が存在すること、同時に中近世の北部九州や神戸の例はいずれも I 類石錘は最低 500 g を超え、第 102 図の 1 のように 1 kg を超える大型品もある。なお、大型化の理由は不明であるが、沖合かつ潮流の速さ等漁場の環境に影響されている可能性も考えられる。



このことから、水中で光り輝き、早く垂直に海中の場所に到達できる I 類石錘の優れた機能的な特性が再確認されるとともに、今回の本例の先の観察結果からは、弥生～古墳時代の I 類石錘の時期や地域が弥生～古墳時代の玄界灘沿岸地域に時間と空間が限定されず広範囲に及ぶことが明らかになった。

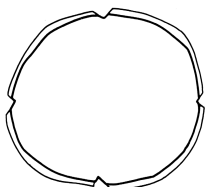


## （4）山陰地方における九州型石錘

### ①先行研究の概要

日本海には西から東へと対馬暖流が流れ、島根県西川津遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡などの交流拠点の存在、鉄製武器の集積など、北部九州から東方への地域間交流のメインルートの一つとして認識されている。山陰地方の九州型石錘についても、広域的な地域間交流の証拠として古くより着目されており、九州型石錘を提唱した下條信行氏は、氏分類の九州型石錘大形 B 型が島根県西川津遺跡、鳥取県青木遺跡、大形 A 型は京都府函石浜、福井県岡津及び食見で出土することから、出土した九州型石錘は弥生時代後期、九州地方と山陰地方の交流を示す資料であるとした（下條 1989）。

その後乗松真也氏は、鳥取県西部の妻木晩田遺跡、東部の青谷上寺地遺跡出土石錘を中心とする九州型石錘について検討を行った（乗松 2007・2013）。乗松氏は、鳥取県では弥生時代中期後半



第 104 図 西川津遺跡 A-2 区

第 2 砂礫層出土石錘 (1/2)

(島根県埋蔵文化財調査センター所蔵、筆者実測)

に多様な漁具が発達する中で、沖合での操業をある程度可能とする釣漁がメインとなる有溝石錘（筆者分類のⅡA類石錘）が北部九州から伝播したこと、また瀬戸内地方の岡山地域では弥生時代後期前半以降は土錘による沿岸域を対象にした網漁を中心に展開するのと対照的に、山陰地域では弥生時代後期後半以降有溝石錘が継続的に一定量分布することを明らかにした（乗松 2007）。

このように、山陰地方における九州型石錘の存在は、日本海沿岸地域の弥生時代中期後半～後期における鉄製武器の集積状況と関連させることで、北部九州と日本海沿岸地域の地域間交流の在り方を実証する資料として注目されてきた。

## ②西川津遺跡における九州型石錘

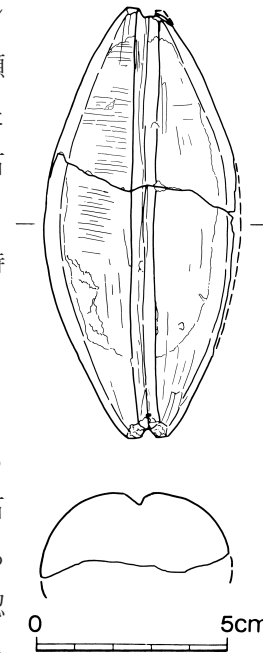
島根県松江市西川津遺跡は松江平野北部の朝酌川沿いの沖積微高地に位置する弥生時代の大規模拠点集落である。先の下條氏の論考により、古くから九州型石錘の存在が知られていたが、玄界灘沿岸地域の九州型石錘と比べ、やや重量があり大型であること、断面が丸くラグビーボール形を呈するなど、若干の違いも認められる。今回弥生時代後期の西川津遺跡海崎地区九州型石錘ⅡA類2点について、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの協力のもと、資料調査をする機会を得たことから、ここではその観察結果とともに九州型石錘ⅡA類の範囲と内容について改めて検討してみたい。

まず弥生時代後期の海崎A-2区第2砂礫層出土のⅡA-3類は（第104図）、長さ9cm、幅5.3cm、厚さ4.7cm、重量は192.5g、石材は砂岩で色調は黄褐色～灰白色を呈する。断面V字形を呈する溝幅は長軸4mm、短軸3.5mmを図り、上下端部は紐ずれによる摩滅が顕著であることから、確実に使用品である。体部は風化ないしはローリングが顕著で加工痕は確認できないが、断面をみると、多角形（12角形）の面加工の痕跡がみられることから、面ごとに研磨し、その後稜をとるように丸く丁寧に研磨したと考えられる。

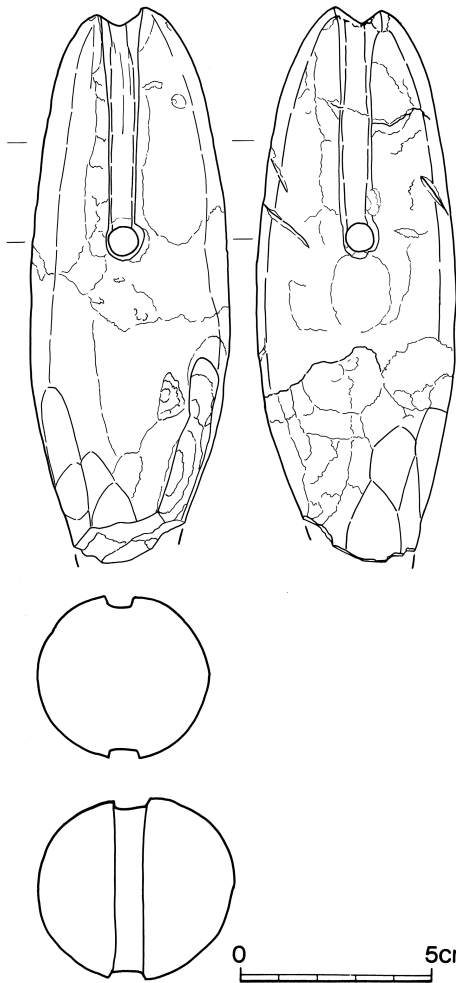
もう1点の海崎J-4B最下層出土のⅡA-1類（第105図）は裏面が欠損するため、現状の長さ10.6cm、幅4.6cm以上、厚さ2.6cm以上、重量117.2gであるが、幅は4.8cm、厚さは4.0cm、重量は200gを超える程度に復元できる。石材はややピンク色掛かった片岩系で、博多湾沿岸地域の滑石ではない。断面V字形を呈する溝の幅は6mm程度で、断面は1より使用感は少ないが、上下端部の欠損は使用によるものの可能性がある。体部は若干ローリングを受け摩滅する。表面は被熱して荒れており、加工痕は確認できないものの、丁寧に研磨したものと思われる。

以上、西川津遺跡出土ⅡA類石錘は、溝は鉄製ノミ状工具によりV字形に彫り、丁寧に研磨した断面正円の紡錘形であること、色調も黄褐色～灰色系とピンク色系を呈するなど、玄界灘沿岸地域の九州型石錘ⅡA類と共通する要素があることから、先行研究で指摘されているように九州型石錘ⅡA類の影響を受けて成立したと考えられる。

用途としては、乗松氏は釣漁や延縄漁での使用と想定するが（乗松 2013）、単体で出土していることから、単独で用いられた錘と考えられること、溝幅も5mm程度であり細い糸を緊縛して使用したとみられること、表面がやや摩滅するものの、顕著な曳きずられ痕跡はないこと、整った紡錘形の形状は海中の目的とする場所に素早く到達でき、丁寧に研磨することで錘自体が海中で目立ち疑似餌的機能を有した可能性があること、色調も魚の眼につきやすい色であるとみられることなど、玄界灘沿岸地域と同様、釣漁で用いられた錘の可能性が想定される。



第105図  
西川津遺跡海崎  
J-4B最下層出土  
石錘（1/2）  
（島根県埋蔵文化財  
調査センター所蔵、  
筆者実測）



第 106 図 岡津製塩遺跡出土 I C 類石錘  
(1/2) (筆者実測)

しかし、重量 200 g を超える II A 類は、径 5 mm 程度の釣糸からするとかなり重すぎる印象があるが、1 の十字溝は釣糸と錘との緊縛度を高めるために施された可能性があり、強い力で曳かれても錘が外れないように工夫したとすると、大型の外洋魚を釣漁で捕獲するために使用された可能性が考えられよう。

ちなみに、青谷上寺地遺跡や兵庫県袴狭遺跡出土木板にはサメが線刻されている。このことから、そのような大型魚に効果を発揮した、玄界灘沿岸地域と共通する特定の魚類を捕獲するために使用された漁法で用いられた石錘である可能性がある。

#### (5) 北陸における九州型石錘

##### ① 先行研究の概要

弥生・古墳時代における日本海を通じた広域的な地域間交流については、北部九州系や山陰系・北近畿系土器、鉄製品、碧玉製玉作関連遺物等の動態から積極的に論じられてきた。九州型石錘についても、下條信行氏により A I 型石錘（本稿では I 類石錘）の日本海沿岸の分布状況から弥生・古墳時代の博多湾海人の行動を示す資料として積極的に論じられている（下條 1984）。ただし、日本海沿岸出土の I 類石錘は、共伴遺物から玄界灘沿岸地域で盛行する弥生～古墳時代前期に属するものはないこと（内田 2016）、玄界灘沿岸地域の I 類石錘より一回り

大きいこと、材質も滑石製ではないことなど、違う点も認められた。このことから、弥生・古墳時代の I 類石錘とは系譜的に

##### ② 岡津製塩遺跡における九州型石錘

福井県小浜市岡津製塩遺跡は、小浜湾に向かって弱く突出した砂丘上に立地する。遺跡すぐ前面には海岸線が迫り、海水を容易に確保できる。また遺跡横には本所川が流れ、淡水と海水が混じる場所であることから、良い塩がとれたとみられる。さらに遺跡周囲には樹木が豊富な丘陵や山が控えていることから、煎熬工程の燃料として必要な大量の薪を確保できる。加えて、遺跡は北と南の丘陵に挟まれた立地で海から絶えず風が吹き、地形的に日陰ができにくい立地であることなど、製塩活動を行うにあたって絶好の好条件を備えている。

遺跡は 7・8 世紀にかけて、藤原京や平城京の宮都に塩を供給した大規模製塩遺跡として著名である。遺構は煎熬工程に伴う整然と配置された石敷の製塩炉跡群と採鹹工程に伴うと想定される焼土面で構成され、周囲には多量の製塩土器が堆積していた（森川他 1980）。

今回観察した I 類石錘については報告書及び注記には出土地点の記載はない（第 106 図）。石錘の下半部は割れて欠損するが、現状の法量は、長さ 14.6 cm 以上、幅 5.2 cm、厚さ 4.8 cm、重量は 484.3 g、完形では 500 g を超すと予測される大型品で、下端部が尖っていたと予測されることから、筆者の分

類では I C 類になる (第三章 1、26 頁)。石材は砂岩、色調は灰オリーブで一部やや赤味を帯びる。断面四角形を呈する溝の幅は 7 mm、溝の深さは浅く 2.5 mm 前後 (第 107 図)、孔径は 8 mm を測る。砂岩のため、使用痕は不明瞭であるものの、溝や孔内には加工痕がほとんどみられないことから、確実に使用したものと考えられる。

体部には細かい凹凸が残っていることから、敲石による敲き調整で成形を行ったのち、一部は粗砥石による研磨が施されたとみられるが、九州型石錘のように仕上げ砥等による細かい仕上げ研磨は全く施されていない。体部下半のみ砥石による幅 1.5 cm 前後の面加工が一部みられるが、これは敲打後に下端部を尖らせるための粗加工であったと想定される。共伴遺物から想定される時期は、遺跡出土土器は 7・8 世紀に限定されることから、本石錘も 7・8 世紀のものと考えられる。

以上、岡津製塩遺跡出土 I 類石錘は、先の下條氏の論考により、玄界灘沿岸地域の I 類石錘と形態の類似性が強調されてきたが、形態は類似するが、大きさや重量が大きすぎる点、溝断面は浅い四角形であること、玄界灘の九州型石錘に通有の鑿等の鉄製工具により連続した細かい加工痕「切削 B」技法 (河合 2013・2022) による調整は全く認められないこと、最終的な仕上げが敲打のち粗い研磨のみであり、海中で光り輝く位丁寧に研磨しておらず、効果という面で乖離していることなど、玄界灘沿岸地域の弥生～古墳時代の I 類石錘とは形態的に類似すること以外の共通要素は少ないといえる。

その他、I 類石錘は若狭町食見や京都府京丹後市函石浜でも各 1 点出土している (下條 1984)。下條氏による函石浜の I C 類石錘は、凝灰岩製で本石錘よりさらに大型品である。

近年、発掘調査で確認された石川県志賀町福井ナカミチ遺跡の I 類石錘は、上半部のみの破片資料であるが長さ 9.8 cm 以上、幅 7.2 cm、厚さ 6.1 cm 以上を測る大型品で、報告書において重量の記載はないが、少なくとも 500g は確実に超えるとみられる (川畑編 2017)。

実見はしていないため確実ではないが、材質は淡灰色を呈した凝灰岩質、溝は V 字溝ではなく、粗い加工によるさほど深くない施溝であることが図面から読み取れる。さらに、図版から表面調整は敲打のち粗い研磨のみ施しているように見え、先の岡津製塩遺跡のものと同様の類似性が高い。

このことから、報告では九州型石錘 I 類であることも考慮し、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけているが (川畑編 2017)、出土遺構である自然流路 S X 311 は 8 世紀後半～9 世紀前半の土器でほぼ占められることから、本資料も岡津製塩遺跡 I 類石錘の事例から、古代に属する遺物とした方が良いと現時点では考えている。

### ③その他

房総半島の南端、千葉県南房総市恩田原遺跡において、筆者分類の v A 類、ii B 類の九州型石錘と類似する弥生時代中期後葉とされる石錘が紹介されている (小林 2018)。実見はしていないため、確実ではないが、長さ 3 cm 以下と非常に小型で、v 類にしては幅太い印象を受けるため、九州型石錘としての要素を満たしているか、今後資料調査を実施し、位置づける必要がある。

### (6) まとめ

本節 (3) の②でも先述したが、確実に古代以降に属する I 類石錘については、中世では博多遺跡群 (土岐 2021)、西海市膝行神貝塚では滑石製石鍋を再加工したもの、近世では神戸市兵庫津遺跡 (145・



第 107 図 岡津製塩遺跡出土石錘 (小浜市所蔵)

146 頁)、近代の漁業誌にみられる天秤釣の錘、現代の沖縄県粟国島の事例（内田 2016）など、数と出土地は非常に限定されるが、弥生～現在にかけて列島西部の広範囲にわたって存在したことが確認できる。また、古墳時代以降のものは再加工品である膝行神貝塚例を除き、弥生・古墳時代の I 類石錘より一回り大きい重量 500 g 前後の大型品がほとんどである。

これらの古墳時代以降の I 類石錘は、弥生～古墳時代における玄界灘沿岸地域の I 類石錘と形態の類似性は確認できるが、製作技法や大きさの違いから、系譜的には繋がらないことは確実である。よって、弥生～古墳時代の I 類石錘とは釣用錘としての機能の共通性から生じた「他人の空似」である可能性を考えており、いち早く海中の目標の深さまで垂下することができる機能的に優れた I 類石錘は時代を問わず製作され、使用されたと思われる。特に 500 g 前後の大型品であることは、底魚のメバルを対象とした粟国島の事例から、海底の底魚を対象にしていた可能性が推測できる。

このことから、特に出土遺構や遺物で時期を決定できず、かつ上層等で中世以降の遺物が混入し、500 g を超えるものは、形態のみで弥生～古墳時代の I 類石錘とすることは注意を要する。

以上、弥生～古墳時代において玄界灘沿岸地域と丹後・若狭地域との直接的な関係は下條氏の九州型石錘 I 類石錘の分布からは追うことはできないと考えられる。日本海沿岸地域における博多湾海人の行動は現時点では島根県域までは追うことができるが、それより東側は明確に示すことはできない。

以上、本来なら鳥取県青谷上寺地遺跡でも弥生時代中期後半～後期の九州型石錘（有溝石錘）が多く存在し、それ以外の山陰地方遺跡出土資料を含めた実物観察結果とその結果を検討することで、九州型石錘の定義まで再検討する予定であったが、現時点では資料調査は行えていない。資料調査が不十分な中で拙速な議論や結論は避けたいと考えているため、位置づけなどの詳細な検討については今後の課題としたい。

## 6 漁具としての刀子に係る予察的検討

### (1) 検討にあたって

刀子は、モノを切ったり、削ったり、モノの加工や調理の際の包丁として用いられた小型工具の一種である。このため、刀子は漁労や狩猟など生活全般に必要なものであるが、特に古墳時代の和歌山県西庄遺跡や志摩半島などの海浜部に位置する集落では、刀子自体や鹿角製刀子柄が良く出土し、刀子は漁労活動における主要な道具と考えられている。また福岡市海の中道遺跡の発掘調査では計 70 点以上の刀子が出土しているが、漁網錘や釣用錘、ヤス等も多量に出土したことから、古代玄界灘沿岸地域において魚介類や海藻類の加工、調理等にも使用されたと推測される。

西新町遺跡でも刀子が少なからず出土し、同時に多量に出土した漁具から刀子の一部は漁労活動に用いられたとみられるが、刀子自体が万能工具であることから、漁労活動かその他の生産活動に使用されたものか、かつ漁労活動の使用であっても用いた場面の特定が難しい。

そこで、民俗資料などの類例調査の結果、出土刀子のうち無関のものは現代の漁師が使用する「マキリ庖丁」の形態と類似することを確認し、無関の刀子は主として漁労活動に使用された可能性を想定することができた。資料調査が不十分な状態であり、予察的な内容となるが、若干の検討を行いたい。

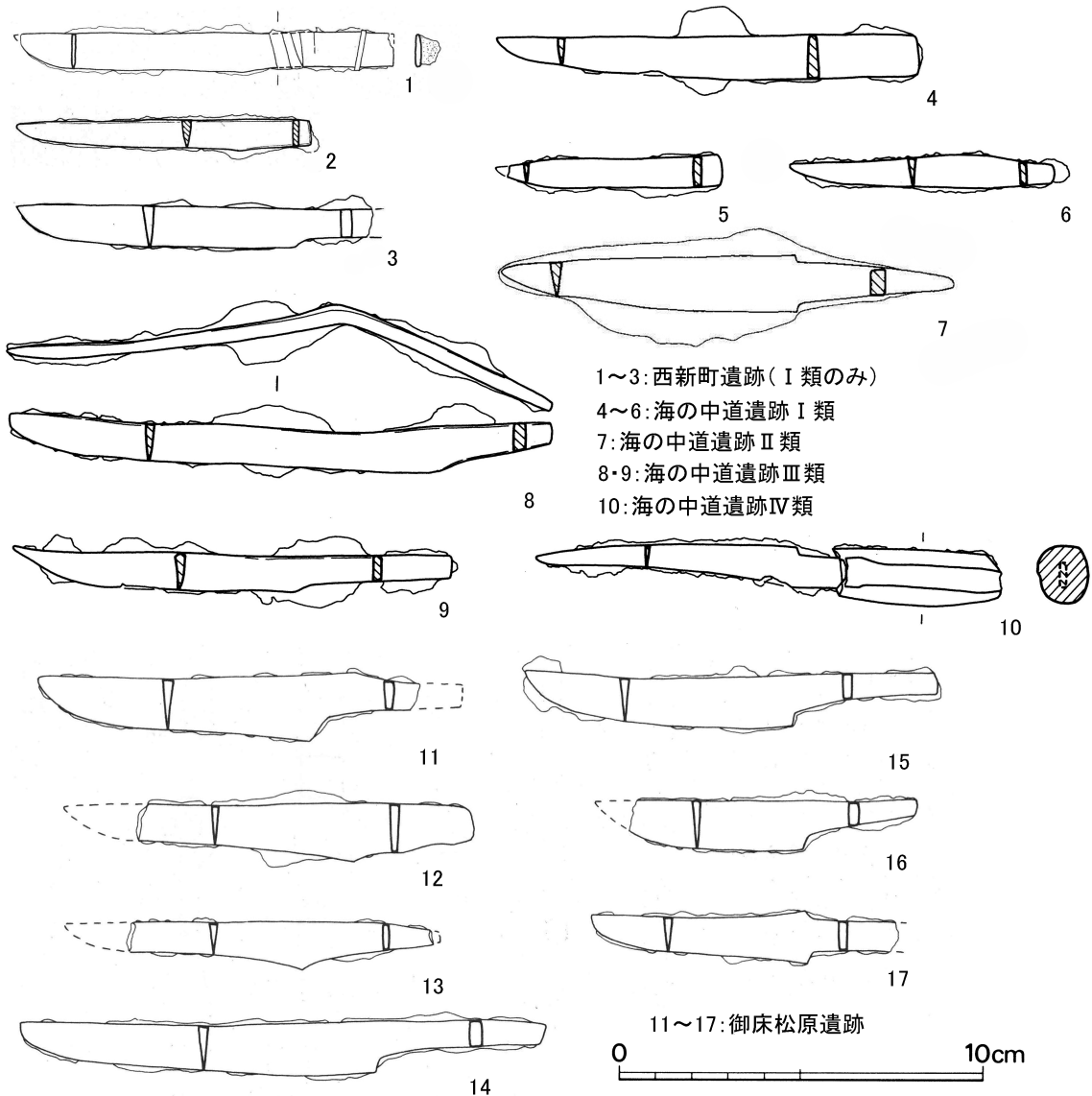
### (2) 検討結果

検討にあたり、一部は古墳時代に遡る可能性があるものの、遺構・遺物で確実な海の生産活動時期が

8～11世紀と、西新町遺跡とは存続時期が異なるが、多様な形態とともに出土刀子と動物遺存体の相関関係が見いだせる海の中道遺跡出土刀子をみてみたい。海の中道遺跡出土刀子の大きさは大小あるが、報告書では刀子の関の形状から、I類は関がないもの、II類は両関のもの、III類は刃関のもの、IV類は背部側に関がある背関のもの4つに分類されている(山崎1982)。このうち、最も多いものは集落出土刀子では稀な形態のIV類の背関である(第108図10)。IV類の刀子は、木製の柄まで残存するものがあるが(第108図10)、これは背関を2段有するという特殊な事例であることを除いても、刃部側に関を設けないことと、身幅が細いことから、対象物に刃が入りやすい構造を指向しているとみている。

また背関のみという形状は、先の刃部側を無関に仕上げると同時に、背部から把の落とし込みにより身と柄の固定を図ったため、背部側のみに関を設けたと考えられる。刃が入りやすい形態を指向するのは、無関であるI類も同様であり、I・IV類の刃部に関を設けないものは海の中道遺跡出土刀子全体の7割近くに上る。漁労活動に特化した特徴を持った遺跡環境を考えると、刃部側に関を設けないことは、魚介類を捌いた可能性が推測される。

そこで、漁で使用する刀子(ナイフ・庖丁)の現用例を調査したところ、漁師が使用する「マキリ庖丁」



第108図 関連刀子 (1/2)

と呼ばれるものが、弥生・古墳時代の刀子の用途を検討する上で参考になることを確認した。現在、マキリ庖丁は、魚の解体やロープ切り、場合によってはナイフのように木を削るなど船上でのあらゆる作業が可能な小刀で、研ぎ直し易いことから片刃を基本とする。船上や水産加工場において、身厚があるが身幅が細く刃が入りやすい形状から、イカや魚を捌いたりするのに使われ、特にイカ裂きに便利とされる。現在、法量は刃渡りが135mm、150mmのものが販売されており、身幅が27mm、身厚が3mmで、柄まで入れた全長は250～270mmを図る。重さは約100g程度と軽い。このマキリ庖丁は関がほとんどないようにみえることと、身幅が細い細長い形状と身厚がある特徴は、先の海の中道遺跡Ⅰ・Ⅳ類刀子と似ており、Ⅰ・Ⅳ類が魚の解体に使用されたことの証拠の一つとなる可能性がある。

西新町遺跡出土刀子をみると、海の中道遺跡Ⅰ類刀子と類似する刀子を3点確認した（第108図1～3）。まず、20次13号竪穴住居跡出土刀子（第108図1）は、基部と切先をわずかに欠失するがほぼ完形品で、残存長10.4cm、残存幅1.2cm、厚さ0.2cm、重量は11gを図る。関は明瞭な段差をもたず、緩いカーブを描いて刃に至る。茎の関寄りの部分には幅0.35cmほどの布のような有機物が巻き付けてある。木質も残っているが、柄には木質はみられないため、木製柄を装着したかどうかは確実ではなく、茎部には布を巻いたまま使用した可能性がある。

次に完形品である17次1号竪穴住居跡周辺遺構面出土刀子は、全長8cm、刃部長6.1cm、身幅1.1cm、身厚0.2cmを測り、小型品ながら身厚が厚い（第108図2）。またⅢ類に分類されるが、13次50号竪穴住居跡出土刀子もほとんど刃部に関がない（第108図3）。この3点は、医療用メスを想像させることから、魚を捌くために用いられたものの可能性があり、このような小型刀子が工具組成の一つになるとみられる。

ただし、熊本県幅・津留遺跡における全長5cmにも満たない小型刀子は、同遺跡で滑石製の勾玉・管玉の玉作におけるの成形・整形段階の「削り出し」に特化した工具と指摘されている（田中2021）。幅・津留遺跡における小型刀子と他の農工具との共伴関係から、この玉作用の小型刀子は、玉類の生産とともに、様々な生産活動にも転用・併用されていた可能性が指摘されていることは（田中2021）、西新町遺跡における刀子も、西新町遺跡における玉作をはじめとする他の生産活動にも転用・併用されていた可能性は否定できない。

一方御床松原遺跡では、弥生時代の遺構から刀子の出土は報告されておらず、古墳時代の竪穴住居跡出土から刀子が出土している（第108図11～17）（井上編1983）。この古墳時代の刀子の形態をみると、刃部側の片関が多いが両関もあり、関が明確でないものもあるが、同時期の西新町遺跡、海の中道遺跡Ⅰ類と同様の無関のものはない。

これは、博多湾と糸島半島西部という地理的な要因による集団の特徴の違いや遺跡周辺の環境による捕獲対象魚類の差など、様々な要因が考えられるため、要因の特定は難しい。一案としては、御床松原遺跡では出土した石錘や土錘の在り方から釣漁や地曳網、刺突漁などが漁労活動中心で、第Ⅳ章の2・3で検討したように網漁の依存度が高い西新町遺跡より網漁の依存度が低いことが想定されることと関係がある可能性がある。また想像たくましくすれば、Ⅰ類の無関の刀子は西新町遺跡の海人集団が行った網漁で捕獲した特定の魚類を解体するためのものであった可能性も考えられよう。しかし、先述したように転用・併用のことも考えると、その特定は難しいことも事実であり、ここでは可能性を示すのみにとどめておく。

## V 総括

### 1 玄界灘沿岸地域における漁業技術史の画期

弥生時代は、水稲農耕が主要な生業となり、先行する狩猟採集を主要な生業とする縄文時代とは、大きな画期があったとされる。しかし、弥生時代を通してコメへの依存度、人口増加に伴う食料増産や食料の安定的な供給、水稲農耕と併行して行われたヒエやアワなどの雑穀類の栽培のほか、漁労活動や狩猟活動などを含む、複合的な生業体系の復元については、新たなアプローチが求められていた。

そこで本研究では、水稲農耕以外の生業のうち、漁労活動に注目し、その中でも水産物の生産技術を主な研究対象とした。対象地域としては、海域を通じた中国・朝鮮半島との対外交渉に関する列島側の主要な港津であり、弥生～古墳時代の漁労活動に関わる豊富な出土資料から、活発な海生産活動が確認されると同時に、集落・墳墓についての研究蓄積がある、玄界灘沿岸の博多湾沿岸地域を軸に据えた。研究の内容としては、漁具のうち特徴的な種類について、形態や使用痕跡の観察、出土状況等を組み合わせた考古学的な事象に基づき、古代玄界灘沿岸地域の漁労活動の復元を試みた。加えて、これらを使用した特定の遺跡を対象に遺跡の実態を把握し、遺跡立地や道具組成、地域特性と地域社会、生業と生産、立地と環境、動物遺存体などの多角的な観点から、漁具の分析を基軸とした漁労技術、社会的な要因の検討を試みることで、漁具研究の方法論の進化及び社会像の把握を目指した。

そのため分析にあたっては、出土漁具の用途を特定するため、その当時の立地環境・歴史的環境に係る関連研究を取り入れ（第II章）、形態や製作技法などの諸特徴がどのような理由で選択されたかという視点のもと、先行研究における各種の漁労活動に関する研究や文献、民俗など諸分野の研究成果をまとめた（第III章）。それらを基盤として、第IV章以降、いくつかの特徴的な漁具から出土漁具を類型化し、漁具・漁法を復元していく姿勢をとった。また、各遺跡での固有な生態系や社会状況を背景とした生産活動を明らかにするため、各種の出土漁具がまとまって出土し、朝鮮半島系土器をはじめとする列島内外に由来する遺構・遺物の研究が進む福岡市西新町遺跡出土漁具を対象に主に検討を行った（第IV章）。

検討にあたっては、様々な漁具のうち、釣漁・網漁の錘である石錘を対象とした。石錘は列島各地に分布する漁具であるが、対象とする弥生～古墳時代の玄界灘沿岸地域においては、地形や魚種などの漁場の特性に応じて石錘が多様化及び特徴的に発達し、漁具・漁法の発達を見いだすことができる。その石錘の素材、分布、形状、色調などの外形的な特徴と使用痕跡から、漁労活動の中で石錘がどのように使われ、いかに生産性に寄与したのかという機能的視点をメインとした検討を行った。その結果、捕獲対象魚種や漁法については、いくつかの機能分化された器種ごとに使用場面の復元が把握できた。加えて、各種工具の鉄器化により、漁具の形態的特徴が伝統を受け継ぎつつも、機能の有効性に応じてさらに特化した漁具を創り出した可能性を提示できた。そのことで、操業規模の大規模化など、玄界灘沿岸地域における漁労活動の実証的な研究成果を上げることができた。また、本研究では漁労活動のみならず、その他の生産活動を含めた多くの視点を提示することができた。特に使用痕跡や加工痕跡、色調の関係性についての視点は今後出土漁具の報告の中で必要事項と思われる。

研究成果を具体的にみてみると、釣漁については大型の鉄製釣針の存在や釣漁で使用したとみられるI～V類石錘の重量から、ある程度の波浪に流されても対応できる漁法が成立していたと推測され、遺跡周辺の地先から少し離れた沖合・水深のある漁場への展開など漁場の拡大をもたらしたと予測できる。I類石錘については、形態、色調、使用痕跡、分布及び近代の民俗例から、先行研究の諸説より具

体的な復元に踏み込み、イカ釣具の錘として使用された可能性を示すとともに、捕獲したイカの加工、流通についても、本格的な土器製塩導入以前という時代背景や社会との関連性も提示した（第IV章1）。

また、VI類石錘とした半球状有孔滑石製品については、刺網漁の錘であることを示し、その広範囲な分布は定型化した刺網による網漁業がシステム化され、展開したと考えた。その終焉にあたっては、備讃瀬戸地域や大阪湾沿岸地域などの外来系の漁具・漁法を選択的に受容し、展開する中で、伝統的な半球状有孔滑石製品を用いた刺網漁は、より特定の魚種に有効的な西新町型石錘を用いたまき網漁に取って代わられた可能性を考えた（第IV章2）。

さらに、II類石錘のうち西新町型石錘は詳細な観察による使用痕跡の検討と複数の民俗例から、タイという交換価値の高い特定の魚類を対象にした、既存の技術を進化させた船団によるまき網系漁網の錘であると考えた。加えて、西新町遺跡の集団はタイを捕獲・加工することで特産物化し、それを交易で獲得した国内外の特産物とともに内陸部まで往来して、特産物として様々な物資を流通の結節点としての役割から、社会を維持するためのシステムの一つとなった可能性を示した（第IV章3）。

特定の地域的に焦点を当てたものとして、壱岐島における九州型石錘の在り方について検討を加えた。まず原の辻遺跡では博多湾西部・糸島半島の九州型石錘の動向と一致することから、両地域の漁業圏が継続的に重なり合うことで、両地域の生活・交易圏の基盤が形成されていた可能性を示した。一方、カラカミ遺跡では九州型石錘の一部の器種のみみられる。この様相については、朝鮮半島系土器の各遺跡での出土傾向を踏まえると、『魏志』倭人伝にある一支国は原の辻遺跡を頂点とするピラミッド構造ではなく、複雑な集落間関係や対外関係により成り立っていた可能性を示した（第IV章4）。

以上の分析から、石錘という地域・時代を特徴的に示す漁具・漁法を共有した玄界灘沿岸地域という広域的なまとまりが確認された。加えて、出土石錘の資料集成（第VI章）の成果を含めると、博多湾沿岸地域の海人集団が用いた釣用錘であるI類石錘や主に網用錘であるII類石錘など、九州型石錘は基本的に博多湾外では西では糸島半島東部や唐津、壱岐島にまとまってみられるが、東は福津市に少数みられるのみである。このように、東への展開がほとんどなく、現在の福津市周辺を境として後の阿曇氏と宗像氏の海の勢力範囲を彷彿とさせる分布状況を把握できた。また、各種の生産用具の鉄器化が急速に進む弥生時代中期後半以降、九州型石錘の出土量の増加及び多様化から機能分化の画期が見い出せる。この弥生時代中期後半は朝鮮半島北西部に設置された楽浪郡を通じて、大陸の前漢の文物が列島にもたらされた時期にあたり、交易に直接的に関与した玄界灘沿岸地域の海人はいち早く入手した鉄器や考古遺物としては残りにくい、網糸の素材の進化や新たな製網技術などの導入などにより、九州型石錘の多様化を達成するとともに、漁具・漁法の発達から生産・流通の萌芽的なシステム化を伴う海人集団自体の拡大や活動範囲の拡大が想定される。さらに、西新町型石錘の創出、ii・iii類石錘等の小型石錘から想定される釣糸やVI類石錘を用いた刺網漁の発展からみえる網糸の細線化などの漁具の改良により、漁獲方法と対象範囲の拡大を図ることで、季節的な振幅を低く抑え、捕獲の効率化と捕獲量の拡大など、各々の遺跡の環境に適応したある程度の自然の摂理を乗り越えた資源利用システムを構築した可能性をみることができる。また博多湾東西における様相が異なることは（森本2015他）、各小地域の環境や集団の特徴による漁業生産力の違いに応じて変化したものと捉えられることに加え、その条件を活かす生産経済システムをそれぞれの条件に応じて構築したことによると思われ、博多湾沿岸～糸島半島の「海村」間では志向性の異なる小地域圏が形成されたと考えている。

北部九州の弥生集落研究では、弥生時代後期後半以降、集落の内部構造における格差が顕在化する点からみて（武末2002他）、後期前半～中頃に進行した集団の統合・再編は、集団の移動により集団

関係が質的に変化した事態が想定され、集団の序列化を伴うものであったと考えられることと（小澤 2008）、今回の漁具・漁法の発達と時期的に整合し、この時期に海の生産活動に関わる集団が内容的にも質的にも大きく変化した可能性がある。また弥生時代後期後半以降の九州型石錘や管状土錘 C・棒状土錘、飯蛸壺、製塩土器等の動向から想定される海の生産活動を担った人の動きは、広域的な土器の動きからみえる玄界灘沿岸から瀬戸内以東といった地域同士の広域交流の在り方とも重なっており、この広域交流の基層に先の発達した海人集団の関与を想定することができる。以上のことから、弥生時代後期後半～古墳時代前期は、玄界灘沿岸地域の漁業技術史において一大画期として評価できる。

だが、古墳時代中期は、北部九州では宗像地域や筑後川中流域で大型前方後円墳が築かれ、後に「胸肩君」や「的臣」などと呼ばれる有力氏族の基礎が形成されたと考えられている（辻田 2013）。また列島各地に一定数の渡来人が居住し、初期須恵器や鍛冶、馬匹生産などの先進技術の入手とその生産活動、文物など、新たな技術や生活様式を移植した（辻田 2013）。古墳時代中～後期にかけて「胸肩君」や「阿曇連」、後に海部となる集団の形成が進んだとみられるが、玄界灘沿岸地域における渡来人の伝来や通交、王権への海産物の貢納を直接的に支えた海人集団の考古学的な状況証拠は古墳時代前期に比べよく見えなくなっている。

山崎純男氏は、5世紀中頃～後半にかけて博多湾を中心とした玄界灘沿岸地域の製塩専業集団は、政治的な背景の下、九州の中央部西岸地域の天草諸島から宇土半島の有明海側に移動し、同時に海人集団の再編が行われたと想定する（山崎 1997）。天草諸島から宇土半島で行われた土器製塩は古墳時代前期、博多湾沿岸地域の今山・今宿遺跡の製塩活動とより大規模で、多くの塩を生産できたと考えられる。

このように、多くの塩を用いることができたことで、I類石錘を用いたイカ釣漁、西新町型石錘を用いたタイまき網漁など、さほど塩が加工に要しない特定の魚種を対象にした漁法や西新町遺跡のような一つの遺跡内における集約的な塩蔵加工生産が廃れ、後の海部郷程度の一定の地域内を単位とするまとまった生産、つまり集落内での漁労活動は小規模であるが、地域内総体として貢納品を生産するような体制に移行した可能性を考えている。

## 2 水産物を中心とした交易品の流通構造

古墳時代になると、より規模の大きな網漁に加え、土器製塩の開始、水産物の加工、その商品の内陸部との交易など漁労活動の飛躍的な発展が把握でき、集落を超えた分業体制や資源調達などの生産流通構造の大きな変化が生じた可能性を提示することができた。

『魏志』倭人伝の「末盧国」の記事にみられるように、玄界灘沿岸地域の弥生時代後期～古墳時代前期は地域間を結び、陸上交通の基盤となる道路等は未整備であったことが想定される。さらに、「南北市糶」の記事から、対外交易にとどまらず、列島内交易においても陸上交通に比べてはるかにより遠隔地に大量の物資を一度に輸送できる海上交通の占める割合が高かったことは想像に難くない。

第IV章3の西新町遺跡の分析を通じて、在来の漁具に加え、瀬戸内地方の袋網漁に関係する可能性がある新たな網漁法の開発等新たな漁労技術の導入と改良によって、多様な漁法と規模の拡充を図ることで水産資源の範囲を拡大させ、交換財としての水産物を調達した可能性を提示した。むしろ、交易を前提とした生産が漁労活動にも要求され、その結果として特定の水産物の漁獲や加工が発達したとも考えることもできる。さらに、土器の移動や外部物資などの財の流通など、その他の研究成果と相互につき合わせることで、積荷集積地としての交易センター的役割を担うため、西新町遺跡自体が直接様々な物

資の生産機能を持つことで、対外及び列島内の交易・流通機構、平たく言えば集団が「商人」的な役割として機能したと考えた。このように、西新町遺跡は列島の複数地域と朝鮮半島諸地域との交易の結節点として機能していた可能性を指摘でき、その当時の交易の構造的な特性にせまることができた。これは、『魏志』倭人伝の「南北市糶」や「加耶の鉄」の入手の在り方を具体的に示すものと考えている。

加えて、博多湾～糸島半島において、弥生時代後期～古墳時代前期に主に漁労活動に従事した專業度の高いとされる海沿いの集落「漁村」の存在が指摘されているが（武末 2009）、その海村間ネットワークは対外交易にとどまらず、主に農業生産に従事した内陸部集落間との交易ネットワークの一部も担っていた可能性を指摘した。このような流通構造は、生産物の安定供給が求められる同時に、持続的かつ安定的な社会構造が求められる。ちなみに、博多湾沿岸地域では弥生時代後期終末には新たな水田域構成を作り出し、それに合わせた農耕集団の編成を行うことで、水田経営の在り方を変化させていったと考えられる（朝岡 2020）。この水田経営に係る農耕の労働編成がより管理された集団編成へ変化した影響が海の生産活動にも及び、海人の集団編成を促した可能性も考えている。

また、これらは「博多湾貿易」の構造とも一致すると考えている。具体的にみても東海系土器は博多湾東部の箱崎・堅粕・博多遺跡群に目立ち、飯蛸壺は箱崎・堅粕、西新町、今山・今宿に集中し、朝鮮半島系土器は、後期終末は今山・今宿遺跡群と博多遺跡群、比恵・那珂遺跡群に目立つが、古墳時代前期前半になると西新町遺跡に集中するようになる。ちなみに、西新町遺跡では鍛冶関連遺物は板状鉄斧や鑊羽口が出土するものの、鉄器生産の存在については不明確であるが、博多遺跡群には高度な技術が想定される鍛冶関連遺物がまとまって出土する。このように博多湾沿岸の港津的集落は、各生産活動内容に個性が認められ、前期前半には西新町遺跡を中心に地域内の集落ごとに分業・補完しあう効率的な社会的ネットワークを構成していたとみられる（久住 2007）。ただし、本研究では博多湾沿岸地域の海浜集落はイカやタイのような利用価値の高い水産物を求めて資源調達の方法を多角化することが明らかになったが、冬場など波が荒い時に頻繁に出漁したとは考えにくく、水産物の捕獲については集落経営の多角化とみており、加えて生業のセイフティネットとして、集落間流通を担ったと理解している。

これは、西川修一氏が指摘する弥生時代後期、外部から供給される物資を調達するニーズの高まりに対する代償の確保を図るため、列島各地で地域生産的な特産物的な物資を創出し始め、後代の律令制下の「調・贄」のような、「交易」の端緒となったこと、さらに多様かつ高価値の「財」を生み出した海浜部の漁村が大量の物資が行き交う地域内の特定の場所＝「湊」「港湾」へとシフトしたという意見（西川 2015）と調和する。さらに、中国・朝鮮半島との通交記事から、ハイレベルの外交交渉に際し、特産物を朝貢品として献上していることから、その交渉を行った北部九州の地域勢力は特産物の生産・流通・交易等という経済力を基盤とすることで、外交交渉を可能にしたと考えられる。

今回提示した西新町遺跡の生産機能と流通ネットワークの調整・管理機能、航海技術、朝鮮半島とのコネクション等は、外交交渉を行う上で必須事項であったと考えている。列島各地の集団が西新町遺跡に集い、倭王権や各地の集団も参加した「倭国」というまとまった交渉体を形成することによって、倭国という国際的な地位を高め、より各種の高級品を下賜されたことで交易のレベルを上げ、安定して情報・技術を入手できたというメリットがあったとみている。このように、西新町遺跡の対外活動に長けた集団を傘下に置くことは、倭王権の対外戦略の円滑に進める上で非常に重要であったといえる。

西新町遺跡の衰退は交易ネットワークの衰退が要因であったことが指摘されているように（久住 2007 他）、西新町遺跡の存在価値はやはり対外交易にあったことは間違いないであろう。西新町遺跡の集団は対外交易で得た財とともに博多湾の湾津集落で生産された財や自らの生産活動によって得た水産

物等を各地域に流通する担い手とみている。人が移動して遠隔地を含む他地域の人とつながりを持てば、そこに交流が生まれ、モノの交換や、学問・文化・技術を含む多種多様な情報のやり取りが行われた。西新町遺跡の集団はこの装置の結節点として、地域社会で重要な役割を果たしたと想定できよう。

ただし、西新町遺跡において商品化された水産物は、考古資料として遺存することがほぼ期待できないため、実証するのは難しいが、いずれにしても漁獲した魚の種類やその加工法、流通など、考古資料では測れない供給側の選択や本地域に存在した人々の強い嗜好性などの地域のニーズに応じた在り方の一端も考慮する必要がある。その中で、第IV章1での九州型石錘I類を用いたイカ釣漁と鰯加工、第IV章3の西新町型石錘のように、より高い商品価値が付与されたタイのような大型魚が選択された可能性もあくまでも地域のニーズに基づく結果である。

さらに西新町遺跡の衰退は、対外交易の構造変化によるだけではなく、それを支えた流通構造、博多湾沿岸地域や内陸部との協業システムの崩壊をもたらし、海人集団は次第に農耕集落から分離し、古墳時代後期には海部・海人という海に特化した海人集団として専門化の道をだどったのではなかろうか。

### 3 海人集団の特徴と役割

古代の文献にみられる代表的な海神に住吉神・阿曇神、宗像神があるが、この祭祀を司った集団の根拠地がいずれも玄界灘に存在することから、玄界灘沿岸地域の海人集団の特徴と役割の分析は重要である。海浜部で集落を営んだ古墳時代の海人集団は、釣漁具、網漁具などの多様な漁具、製塩土器などから、交換価値の高い魚介類の捕獲・加工と製塩を専門的に行っていた集団もあれば、漁労や製塩のみならず農耕や狩猟に関わり、さらには鹿角製品の加工や鉄器生産などの手工業生産、広範囲での交易に携わり、水軍の役割を担うなど、その活動や生業の在り方は一様ではない。

古墳時代前期前半、博多湾東西の海人集団を統合し、成立した西新町遺跡の海人集団（森本 2015）は、漁具の分析から活動範囲を眼前の自家消費的な漁労活動に留めることなく、玉生産、鉄器生産などの手工業生産にも関与する等、多角的な生業を指向した。さらには、漁労活動に伴う操船技術や航海技術、造船技術に関する知識を生かし、金属器などの財の流通や新しい文化要素・情報・技術の伝播に携わるなど、国内外、近距離、遠距離を問わない交易や移動の担い手として従事することで、朝鮮半島及び列島内各地域勢力の接点としての役割を担ったと考え、海人集団を比較的独立性の高い集団とみた。

西川修一氏は、弥生時代後期～古墳時代前期における遠距離を移動する能力を持った海人集団の活動範囲の検討から、海人集団のネットワークは極めて広いことが窺われ、「海上交通の優位性」をもっと高く評価し、海上航行の技術やノウハウ、または遠方と交信する能力や知識は、今日私たちが考えている以上に戦略的、かつ「最先端の知的体系」であったとしたが（西川 2015）、西新町遺跡の海人集団はまさにこれに該当する。特に中国・朝鮮半島情勢の変化に応じた卑弥呼や台与等による中国王朝への倭の遣使など、大陸・朝鮮半島の最新の情報の入手にあたって、交易を担った玄界灘沿岸地域の海人集団が大きな役割を果たしたことは容易に想像できる。

ただし、西新町遺跡の海人集団は、海を舞台に水産物生産や物流へと多様な生業に従事したが、出土漁具から推測される漁労活動としては3人程度を一単位とする操業規模基本で、比較的大規模な西新町型石錘を用いたまき網漁でも複数の単位の操業と想定される。漁労活動を担った集団構成員全てが朝鮮半島までの外洋航海を担ったかということについては、少なくとも朝鮮半島までの知識や技術、体力などの問題から、集団構成員の一部のみ担えたと想像できる。

一方、この時期の準構造船による外洋航海がどういった規模で行ったかという点については、分かっていないが、史料では対外交渉の遣使が複数の船団による航海であったとみられるため、少なくとも漕ぎ手のすべて対外交渉を担った集落構成員で行ったとすると、漕ぎ手となりうる屈強な集落構成員の大半で行ったと考えられる。また漁労活動や対外、列島内各地との交易活動は、中世段階で新羅に出向いた倭寇は5～8月に集中すること、海の気象条件から年間通しての外洋航海は難しく、特に海が荒れる冬場は困難である。かつ初夏から初秋にかけての漁労活動の最盛期と、時期的に重複したことが予測されるため、並立は難しい。この漁労活動と対外交渉との関係性については今後の課題である。

以上、古墳時代前期前半～中葉、列島側の窓口は、当該期の国際状況や列島内での地域間関係の在り方から考えると、朝鮮半島南部との交易や政治的交渉などのいずれの場合においても、西新町遺跡の集団が担い手として関与したとみられるが、西新町遺跡の集落規模をもってしても楽浪郡や金官加耶までの外洋航海を集落構成員で一手に担うのは難しいと考えられる。

辻田淳一郎氏は、弥生時代～古墳時代前期における漢鏡の列島への流入について分析する中で、列島の諸集団は北部九州の諸集団から鏡を入手した在り方と、各地域の集団が北部九州の諸集団とともに半島に赴き、入手後各地に持ち帰るという2案を提示した、特に後者の案は列島各地の諸集団が楽浪郡・帯方郡などに遣使を行うにあたり、北部九州の諸集団が先導役いわば水先案内役となって集団に同行し、半島南部を経て楽浪郡・帯方郡に赴き、交易や政治的交渉を行った後、列島に戻り、その後様々な文物をそれぞれの地元まで持ち帰るモデルを「水先案内モデル」と呼称し、海人集団の動向と関連付けた（辻田 2014）。加えて辻田氏は両者のモデルが併存する可能性も示すとともに、後者の各地域集団から派遣された「使者たちの集団」という在り方は、『魏志』倭人伝の「今、使訳通ずるところ三十国」の記述内容とも合致する可能性を指摘した（辻田 2014）。

この後者の「水先案内モデル」と本研究における西新町遺跡の在り方は調和的であると考えており、西新町遺跡の集団は半島との政治的及び日常的な交易など様々なレベルな通交に際し、基本的には水先案内人として半島へ先導する役割であったと考えたい。この水先案内人の役割は航路のパイロットとしての的確な航路の指示や各寄港地の人々との友好関係、言語が必須であり、日韓の人々が混在する西新町遺跡の集団はまさにその条件に合っている可能性がある。

一方、古墳時代前期末～中期にかけて初期須恵器や鍛冶、馬匹生産などの先進文物や技術の入手と新たな生産活動、生活様式など、各地に新たな技術や生活様式を移植した半島との通交関係においては、博多湾沿岸地域において西新町遺跡にかわるような集中的な交易の拠点は形成されていない。この古墳時代中期における渡来規模は前期段階に比べ格段に大きいことは明白で、宗像、志賀（阿曇）、住吉という玄界灘を根拠地とした複数の海人集団がパイロットとしてだけでなく、漕ぎ手など航海全般の担い手となることで、安定的かつ恒常的な航海と規模をもらしたという、複数の海人集団による多元的・安定的な交易体制に変化したと考えている。これには、準構造船から帆走による初期の構造船への発達も考えられるのかもしれない。

これらの交易ルートが安定的に運営されることで、宗像氏、阿曇氏などを筆頭とする海人集団は、水運や軍事を担い、王権に儀礼に用いられた贄などの魚介類を貢納し、時には航海の安全を司る宗教的な技術をもった特殊な專業集団として王権の統制下に置かれ、その後海の職能集団である海部・海人として組織化されたのではなかろうか。なお、これらの集団が奉じた神社の分布から、志賀島を根拠とする阿曇の海人が沿岸航路型であるのに対し、宗像の海人は外洋航路型であるとの指摘があるなど、海運に関わる集団の中でも、集団の特徴を生かした役割分担が行われていたことも考慮しておく必要がある。

## 4 展望

本研究では、玄界灘沿岸地域における弥生～古墳時代前期の漁具のうち、石錘の集成だけでも1,100点にもものぼる膨大な資料を前にいくつかの検討を行ったが、消化不良の感は否めず、改めて浮き彫りとなった課題も多い。総括の最後に今後検証すべき課題や研究の方向性について、整理したい。

漁労活動においては、考古学的な手法を軸とした検討を試み、いくつか漁具の用途や漁法を復元できたが、どの漁法やどの場面で用いられたかという機能が不明な漁具の方が圧倒的に多い。考古学的な検討に加え、民具・民俗例等も引用して、できるだけ多角的な検討を目指し行ったつもりである。だが、本来漁労活動内容は環境選択制が強いものであり、釣漁用という大枠は推定できるが、どの魚種や漁法で使用されたか、使い分けられたのかという具体的な機能が判明しなかったものがほとんどである。

これは、現代の漁具では特定の場所や魚種等がある程度の特定的ないしは限定されるが、古代の漁具では様々な場面で使い回すことが多かったことを示している可能性がある。このように複合的な機能を持つと予想される古代の漁具の用途・機能の追求にあたっては、型式学的な比較検討に加え、使用による磨滅等の使用痕や色調等の客観的な観察を行うことで、機能や用途の違いを認識する手がかりをとることを提示できた。本研究ではできるだけ資料観察を行うことを目指したが、個人研究で全て資料観察できる量ではなく、加えてコロナ禍の影響もあり、十分な観察ができなかった。特に使用痕は使用した海的环境によって損耗度・状況が異なり、今後民具等との比較研究を通じ、使用痕が生じたプロセスを読み取ることで、機能・用途面のパターン化まで至る可能性がある。また今宿五郎江遺跡や元岡・桑原遺跡群では、九州型石錘と木製ヤスが出土していることから、釣漁や網漁と刺突漁を同時に行った複合的な漁労形態であったことも考える必要がある。

本研究では、考古学的な資料に基づいた生業スケジュールの推移の検討まで至らなかった。一般的な生業スケジュールでは、魚類が産卵のために沿岸の浅瀬に押し寄せる春・秋が食料資源利用のピークで、秋・冬になると魚類は沖合や深場に移動・集散してしまうため、食料化しにくくなる。生業スケジュールの検討にあたっては、和歌山県西庄遺跡のように良好な出土動物遺存体の分析によって、地先～沖合までのどの海域で漁労活動を行っていたか、また出土魚類の組成や体長推定等の分析を進めることで、操業海域の特定や農繁期（夏から秋）に漁労活動を行っていたのか、農閑期（冬～春）に行っていたのかなどの生業スケジュールを明らかにすることが可能になる。このことにより、集団の生業形態や利用生業空間の場の差異、分業などの問題が解決できることが期待される。

加えて、内水面漁労については、水稻農耕の開始によって生じた内水面の環境変化により、フナやコイ等の淡水魚の利用が活発になったと考えられる。内水面漁労の発達も海の漁労活動と双方向に影響しあっている可能性があるが、淡水魚の遺存体の出土はほとんどなく、全く検討できなかった。

さらに、捕獲した魚類の加工・調理方法については、食物は食べられることによって消費されることから、食物そのものが残るということは難しい。本研究においてもカマドの導入や土器の丸底化など土器形態の変化により調理法の変化が予測されるものや、先の出土動物遺存体でも刃物痕や出土部位の偏在などにより加工法が推測される場合もまれにあるが、基本的にあくまでも食材や調理道具として明らかになるのみであり、どのように加工・調理し、食したかまではほとんどがわからない。

近年、東南アジアの民俗例では魚調理は「煮る」行為が多くを占め、縄文土器の使用痕跡の詳細な観察でも深鉢では「煮る」行為が多いことと一致する調査成果（小林2017）がある。また、土器の胎土

に残存した脂質を分析する「土器残存脂質分析」により、縄文土器による調理対象物が魚などの水産物の調理加工に圧倒的に偏っているという分析結果や海洋リザーバー効果による炭素 14 年代測定結果の土器型式との年代差により、海産物を調理あるいは食用とした場面の存在が徐々に明らかになっている。さらに、カマドの土壌分析による動物遺存体の様相、人骨のコラーゲンからの窒素炭素同位体比分析による食性分析、人骨の歯石の DNA 分析による口腔内の菌組成からの食生活の復元など、様々な自然科学的な研究手法の導入などの学際的な研究など、良好な動物遺存体の出土という偶然性に期待することなく、食生活の復元、食生活史研究の実証的研究まで視野に入れた成果が期待される。

さらに、考古資料によって把握された海人集団の成立段階はいつか、いかに評価するかという問題がある。先行研究により、弥生～古墳時代にかけての海浜集落 / 海村の把握が進められ、本研究でも主に流通構造から漁労と水稻農耕が不可分の関係であるということを指摘できた。しかし、福岡市今宿五郎江遺跡など海浜部の低湿地遺跡からは多くの農具とともに、漁具や狩猟具が出土することから、この段階の海浜集落の生業構造は、農耕、漁労、狩猟、他の生業等が重層化しつつ、展開していたことが予測される。そうであるならば、海人集団の出現は集団内や集団間で農民と漁民の分化が起こったことを指標とすると、考古学的証拠からどの段階で分業化へと傾倒していたのか、海人集団が成立したかという具体的な認定方法の基準は本研究でも示すことはできなかったが、弥生時代中期後半～後期に大きな変換点を迎えることが想定できる。海人集団の実態として、農民が農耕とともに漁業を行う、いわゆる半農半漁である「農民漁業」、専門的な漁労活動である「海民漁業」など、海人集団内の分業・専門の内容とその度合い、比重についての問題もある。

これらについては、今後考古資料等を用いて弥生～古墳時代までの長期的視点に立って、諸条件の組合せを類型化し、労働単位からみた分業化、流通構造と市場形成、漁業の発達の構造的な分析を行うことで、当該期の社会変化に係る総合的、体系的な理解の進展を期待したい。

ちなみに、社会的な分業の進展については、日常的な食料生産から解放された社会集団が手工業・商業に専門的に従事することが可能になると理解されることが多い。西新町遺跡は、自給自足的なレベルからは脱却したものの、遺跡における水産物加工等の生業諸部門が著しい専門化を伴うレベルであったかということ、水稻農耕と同様、漁労活動が集約的な季節的労働と想定されることをはじめ、藤崎遺跡における複数の在地系石棺を主体部とする方形周溝墓への三角縁神獣鏡と素環頭刀等の副葬から、その活動内容は水産物生産から流通まで一切を掌握した社会的な上位の階層者に委ねられ、漁労活動を専門とする集団の析出までは及んでいないと考えている。

さらに、漁労活動では操船技術はもとより、魚介類の生態、海の環境や気象、天文などの知識が漁獲量に直結するとともに、生死の分かれ目にもなる。そのような特質から祈りや信仰などの精神面が重視されたとみられる。またかつて海から離れた地域であっても、特別な日に海の魚を食すという習慣は日本各地でみられ、弥生～古墳時代における漁村の文化は、海から離れた地域にも伝えられた可能性がある。そのような精神的なものや習慣などについては、今回はほとんど検討できなかった。

海人集団が担った対外交易については、弥生時代以来の北部九州の地域勢力と、朝鮮半島南部との双方向的な伝統的な通交が基軸にあったとみられ、この通交を直接的に担ったのが玄界灘沿岸地域の海人集団で、「海村」間のネットワークを利用して交易にあたったと考えられている（武末 2009）。また、列島諸地域の古墳時代の政治権力の形成にあたり、朝鮮半島及び北部九州の地域勢力を介した海を通じた交流は欠かせない要素であったといえる。その中心が国際交易拠点として博多湾沿岸に整備された港津である西新町遺跡で、西新町遺跡には板状鉄斧などの鉄素材等の物資や技術、情報をもとめるため、

西日本各地から人々が多く集まり、加えて海産物を含む様々な物資の流通、物資が集積された西新町遺跡には通訳がいて物資の交換（商取引）が成り立っていたとみられるという経済的な面で西新町遺跡の集団が担ったいくつかの役割を提示できた。それが倭王権にとって非常に重要であったことは、先の藤崎遺跡の状況から分かる。一方、取引の安全性や病気・治安の問題も同時に生じるため、首長層はこれらを囲い込む必要も生じていた可能性がある。それが周囲から孤立した場所に西新町遺跡が存在する要因となっており、交易センターとしての性格を強く浮き立たせることになったとも推測できる。

なお、朝鮮半島からの人が経済的な理由で西新町遺跡にわざわざ来た理由としては、あまり良くわかっていない。『魏志』倭人伝の記事にある中国王朝との政治的なハイレベルの通交では、ヒスイ等の玉類、真珠、織物・布、生口などを献上していたことが知られるが、経済的な交易を含むローレベルの交流では対馬・壱岐の「南北市糶」の記事にあるように主要交易品としては「コメ」が考えられ、その他絹・布、碧玉や水晶の玉類などが予想されるが、いずれも遺物として残るものは少なく、あくまでも推定の域をでない。このように、流通・交易構造としては、水産物等の日常的なレベルから価値の高い特産物、外国への贅沢な献上物など、モノの流通レベルは重層的で、かつその流通範囲もハイレベルほど大きいと想定される。今回の検討では日常的な流通・交易レベルのみの検討で、その範囲の規定や他のレベルとの比較検討も行っていない。だが、今回一部検討したローレベルの交流でも日韓双方で往来した人々によって持ち込まれた土器から、長距離交易であるが広範囲かつより密接なネットワークが構築されていることは明らかである。考古資料から推測される双方の交換財については、朝鮮半島における倭系遺物の把握や分析、流通構造のカテゴリー化、日韓双方で考古生化学的な分析などの新たな研究手法の導入により明確になることが期待される。

加えて、畿内北部や山陰地域で舶載品の可能性がある刀剣類の分布が顕著であることや鑄造梯形鉄斧などから、日本海沿岸地域の地域勢力が朝鮮半島南部の国々と直接交渉した可能性もあるが、第三章11の航海に係るパイロットの問題等から、基本的に列島各地域の地域勢力が北部九州の地域勢力と全く関係を持たず、独自に対外交渉を行うことはなかったと考えている。特に交易については、言葉の問題とともに交易の場面において交換財の値段がはっきりしなかった際、西新町遺跡の集団は交易交渉の仲介者・情報提供者としての役割も担ったと予測される。このように、多くの場合は北部九州の地域勢力と関係を持ちながら対外交渉や交易が行われたと考える。ただし、列島各地域の地域勢力は北部九州の地域勢力と対等な関係で、主体的に対外交渉を行ったと想定しておきたい。

しかし、4世紀における中国、朝鮮半島の激動する東アジア情勢は、その余波としてこの交易ネットワークの再編を促したと考えられている。古墳時代前期後半になると、列島側の玄関口であった西新町遺跡が衰退・解体するとともに、同時に大和の纏向遺跡も衰退するなど、瀬戸内地方や近畿地方の交易の結節点となる集落も急速に衰退し、これ以後列島内に対外的な交易網が再構築されない（中久保2017）。同時に古墳時代前期後半、玄界灘沿岸地域において九州型石錘に代表される各種石錘は急速に衰退し、これまでの漁労活動の技術継承はもとより、海人集団の存在はみえなくなる。

一方、朝鮮半島南東部では、多島海で天然の良港である金官加耶の中枢を目される金海鳳凰台遺跡では布留系甕を含む多量の土師器系土器が馬韓系土器と共伴し、加えて倭系文物を副葬する大成洞古墳群、福泉洞古墳群、良洞里古墳群を中心に膨大な鉄製品及び鉄素材が副葬され、被葬者が鉄流通を掌握していたことが予測される。その膝下の金海広域市府院洞遺跡では4世紀代の鍛冶生産をはじめとする手工業生産の痕跡とともに倉庫群や船着き場などが確認され、全羅道から金官加耶、西新町遺跡、近畿までつながる金官伽耶－倭王権交流の一大結節点とみられることから（武末2018）、西新町遺跡と交替

するように金官加耶の地に国際的な交易拠点が形成される（中久保 2017）。このように朝鮮半島側の交易拠点の衰退はみられないことから、交易のベクトルは列島から金官加耶へ一方向化したとみられる。この要因としては、4世紀後半には倭王権が百済との同盟を契機に半島に軍事介入したと想定されるなど、鉄をはじめとする安定的な資源や情報の確保のため、倭王権による直接交渉という通交関係に変化したと考えられる。これらの変化は列島内における政治的・経済的・社会的な変化によるものが主で、通交の内実も交易から技術導入に向かったと指摘されている（中久保 2017）。西新町遺跡衰退後も玄界灘沿岸地域では朝鮮半島系遺物の出土がみられるため（重藤 2018）、西新町遺跡と比べると格段に縮小するものの、あくまでも双方向的な日韓交易は続いており、交易の在り方が変化したためと理解できる。

「博多湾貿易」ネットワークの衰退以後、これと入れ替わるように、4世紀後半、玄界灘に浮かぶ孤島である沖ノ島で当時の最先端の器物を用いた倭王権の直接的な関与が指摘されている祭祀活動が始まる。宗像地域には4世紀後半の全長64mの前方後円墳である東郷高塚古墳以外の顕著な前期古墳や遠隔地との交流拠点ともなる拠点集落は確認されていないことなど、沖ノ島祭祀を差配するような求心的な地域勢力はみえず、倭王権での意思決定により主導された祭祀と考えられている。このように、倭王権はこれまでの博多湾沿岸の諸勢力に依存した朝鮮半島南部との間接的な通交関係から、宗像君を中心とする勢力を直接的な担い手にした朝鮮半島との直接的な通交関係を指向したことで、倭王権は半島南部の鉄素材や文物などの物資流通をはじめ、先進技術、統治制度や人材に至るまで、経済的にも政治的にも畿内地域は列島内部において強い求心力を得ることになったと理解される。そうして考えると、西新町遺跡は博多湾西岸に位置するが、その後の史料からみえる交易を直接担った阿曇系や宗像系海人集団は博多湾沿岸の東部から宗像の鐘崎にかけて根拠地とすることから、交易の担い手の主導が博多湾西岸の勢力から東岸の勢力に変化したのではなかろうか。

なお、宗像から朝鮮半島への直接的な航海は間に対馬暖流が流れ、特に朝鮮半島への往路は海流に逆流しなければならないこと、沖ノ島は交易ルート上の寄港地であったとしてもある程度の規模の人が滞在した集落はなく、祭祀の場として機能していること、さらに沖ノ島以北は島がなく、当時の帆がない準構造船を使った地乗り航法で向かうのは難しく、宗像から朝鮮半島への直接的な航路は復路では理論上可能でも、往路では難しかったといわざるをえない。一方、潟湖で天然の良港である博多湾は、西新町遺跡衰退以後も切れ目ない朝鮮半島との交易の痕跡がみられることから、交易を直接的に担う集団は変化するが博多湾沿岸を基調とした交易が基軸であったと考えている。

よって、4世紀後半とされる宗像沖ノ島祭祀の開始のきっかけは、倭王権は北部九州の伝統的な在り勢力の影響化にあった朝鮮半島－博多湾の対外通交ルートを継続的に利用するが、北部九州から東に船で向かう際、海の難所である鐘崎を避けて、「風待ち」のできる内湾があり、津屋崎古墳群における鋸の副葬から優れた造船技術（修理を含む）を持ったと推測される宗像の地を朝鮮半島・北部九州と畿内・瀬戸内や日本海沿岸などの諸勢力の交易ルートの結節点として意図的に整備し、その管理・運営を宗像君に当たらせたとみている。これが、宗像神系の式内社である鳥取県米子市の宗形神社の展開など日本海沿岸地域とのつながりにも表れている可能性がある。

その結果、その交易ルートの目印・象徴となる沖ノ島で倭王権から下賜された器物を用いて宗像君が主体となった祭祀行為が開始され、展開したと考えている。

以上、コロナウイルス感染症拡大による影響により、十分な資料調査が実施できなかったことは心残りであるが、巻末の第VI章に本研究の基盤となる九州型石錘の集成を掲載しているのも、今後研究の発展に本研究の成果が少しでも寄与することを祈念してまとめとしたい。

## 引用・参考文献

本書と関連する遺跡・遺物が掲載された発掘調査報告書については、第Ⅵ章の九州型石錘一覧表に掲載している文献と重複するため、ここでは掲載を省いた。遺跡・遺物に関わる発掘調査報告書については、第Ⅵ章を参照いただきたい。

- 赤澤威 1969「縄文貝塚産魚類の体長組成並びにその先史漁撈学的意味—縄文貝塚民の漁撈活動の復源に関する一試論」『人類学雑誌』第77巻第4号 日本人類学会
- 朝岡俊也 2020「日本考古学における水路研究の手法 弥生時代～中世」『福岡大学考古学論集3』 武末純一先生退職記念事業会
- 東潮 1995「古代朝鮮との交易と文物交流」『日本の古代3 海をこえての交流』 中公文庫
- 阿南亨 2007「古墳時代の船と航海—考古資料を中心として—」『大王の棺を運ぶ実験航海—研究編—』 石棺文化研究会
- 阿部芳郎 2019「製塩研究の課題と展開～縄文時代製塩技術史の展開と課題」『日本列島における製塩技術史の解明 I—縄文から古代まで拡張して見えるもの—』 明治大学資源利用史研究クラスター
- 池田哲夫 1986「漁具・漁法・制度」『北佐渡の漁撈習俗』 両津市郷土博物館
- 池田哲夫 2004『近代の漁撈技術と民俗』 吉川弘文館
- 池田祐司・久住猛雄編 2000『JR 筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集 福岡市教育委員会
- 池畑耕一 1979「隼人の漁撈生活」『隼人文化』第5号 隼人文化研究会
- 池淵俊一 2012「山陰の鉄器生産と流通」『一般社団法人日本考古学協会 2012年度福岡大会研究発表資料集』 日本考古学協会 2012年度福岡大会実行委員会
- 池邊元明 1997『堅粕遺跡群 千代1丁目遺跡』 福岡県文化財調査報告書第130集 福岡県教育委員会
- 石井陽子 2009「博多湾岸地域における古墳時代の集落動態」『九州考古学』第84号 九州考古学会
- 石川県埋蔵文化財センター 2014『石川県埋蔵文化財情報第31号』
- 石橋新次 1992「糸島型祭祀土器の成立とその意義」『北部九州の古代史』 名著出版
- 磯望・下山正一・大庭康時・池崎譲二・小林茂・佐伯弘次 1998「博多遺跡群をめぐる環境変化—弥生時代から近代まで、博多はどう変わったか—」『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために』 九州大学出版会
- 磯望・下山正一 2005「今山遺跡第8次調査地点の地形について」『今山遺跡第8次調査』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集 福岡市教育委員会
- 磯望・黒田圭介 2013「福岡市の自然環境」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』 福岡市
- 石村智 2017『よみがえる古代の港 古地形を復元する』 歴史文化ライブラリー455 吉川弘文館
- 板橋旺爾 2006「古代航海よみがえる」『大王のひつぎ海をゆく 謎に挑んだ古代船』 海鳥社
- 一瀬和夫編 1987『久宝寺南(その2)』 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター
- 一瀬和夫 1992「弥生船の復元」『弥生文化博物館研究報告1』 大阪府立弥生文化博物館
- 岩橋孝典 2015「第3節 16世紀後半における山陰地域水上交通の一断面—島津家久と細川幽斎の旅を題材として—」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』 島根県古代文化センター研究論集第15集 島根県古代文化センター
- 岩本正二・大久保徹也 2007『備讃瀬戸の土器製塩』 吉備考古ライブラリー15 吉備人出版
- 井上裕弘編 1983『御床松原遺跡』 志摩町文化財調査報告書第3集 志摩町教育委員会
- 上野祥史 2020「序章 古墳時代を評価する複数の眼—東アジア・王権・地域社会—」『東アジアと倭の眼でみた古墳時代』 国立歴史民俗博物館研究叢書7 朝倉書店
- 魚津知克 2012「漁具と漁具生産」『古墳時代の考古学』第5巻 同成社
- 魚津知克 2011「趣旨説明—「海の高墳」研究序説—」『海の高墳を考える I—群集墳と海人集団—』 海の高墳を考える会
- 魚津知克 2017「「海の高墳」研究の意義、限界、展望」『史林』100—1 史学研究会
- 内田律雄 1988『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ(海崎地区2)』 島根県土木部河川課 島根県教育委員会
- 内田律雄・江川幸子 1989『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ(海崎地区3)』 島根県土木部河川課 島根県教育委員会
- 内田律雄 2009『古代日本海の漁撈民』 同成社

- 内田律雄 2016 「九州型石錘についての覚書—下條分類 A I 型—涙摘形石錘の成立と展開—」『海と山と里の考古学—山崎純男博士古稀記念論集—』 山崎純男博士古稀記念論集編集委員会
- 宇野隆夫 2017 「運搬具」『モノと技術の古代史 木器編』 吉川弘文館
- 馬路晃洋 2015 「第 2 章 山陰地域の様相」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』 島根県古代文化センター研究論集第 15 集 島根県古代文化センター
- 海の博物館・財団法人東海水産科学協会 1988 『海の図鑑』 光出版印刷
- 江崎靖隆編 2019 『玄界灘の交易要衝『一支国』』 令和元年度秋季特別展図録 伊都国歴史博物館
- 江野道和・江崎靖隆 2005 『潤地頭給遺跡』 前原市文化財調査報告書第 89 集 前原市教育委員会
- 大久保徹也 2020 「製塩土器の展開 瀬戸内海沿岸地帯を中心に」『製塩土器からみた播磨』 第 21 回播磨考古学研究集会資料集 第 21 回播磨考古学研究集会実行委員会
- 大野左千夫 1981 「石錘についての覚書」『古代学研究』 第 95 号 古代学研究会
- 大野左千夫 1992 「弥生時代の漁具と漁撈生活」『考古学ジャーナル』 No. 344 ニューサイエンス社
- 大庭康時 1991 「石錘」『今宿五郎江遺跡Ⅱ』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 238 集 福岡市教育委員会
- 大庭康時 1998 「中世都市博多の成立—博多遺跡群の発掘調査から—」『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために—』 九州大学出版会
- 大庭康時 1998 『博多 64』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 559 集 福岡市教育委員会
- 大庭重信 2018 「東西日本の水田灌漑システムと土地利用—登呂遺跡の時代を中心に—」『境界の考古学』 日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集
- 大庭孝夫 2009 「西新町遺跡出土石錘について」『西新町遺跡Ⅸ』 福岡県文化財調査報告書第 221 集 福岡県教育委員会
- 大庭孝夫 2021 「九州型石錘の機能に関する一試論—福岡市西新町遺跡出土石錘を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』 46 九州歴史資料館
- 大庭孝夫 2022 「漁具からみた西新町遺跡海人集団の特質—西新町型石錘を素材として—」『九州歴史資料館研究論集』 47 九州歴史資料館
- 大庭孝夫 「玄界灘における弥生～古墳時代の網漁業についての一試論～いわゆる「半球形有孔滑石製品」を中心に～」『九州歴史資料館研究論集』 48 九州歴史資料館 投稿中 2023 年 3 月に刊行予定
- 岡崎敬 1968 「倭の水人—壱岐島弥生時代遺跡発見の鯨骨製品とその伝統—」『日本民族と南方文化』 平凡社
- 岡部裕俊 2007 『倭人の海道—一支国と伊都国—』 平成 19 年度秋季特別展図録 伊都国歴史博物館
- 小倉慈司 2021 「『延喜式』にみえる食品とその特徴」『古代の食を再現する』 吉川弘文館
- 小澤佳憲 2008 「集落と集団 I—九州—」『集落からよむ弥生社会』 弥生時代の考古学 8 同成社
- 小澤佳憲 2013 「弥生時代の集落の変遷と社会」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』 福岡市
- 小澤佳憲 2020 「北部九州古墳時代前期前葉頃の棒状土錘」『九州考古学』 第 95 号 九州考古学会
- 大林太良 1987 「沿海と内陸水界の文化」『海人の伝統』 日本の古代 8 中央公論社
- 片岡千賀之 2011 『長崎県漁業の近現代史』 長崎文献社
- 金関丈夫 1979 「むなかた」『えとのす』 12 新日本教育図書
- 金子浩昌 1983 「御床松原遺跡出土の脊椎動物遺体」『御床松原遺跡』 志摩町文化財調査報告書第 3 集 志摩町教育委員会
- 亀井輝一郎 1999 「ヤマト王権と宗像」『宗像市史 通史編 第二巻 古代・中世・近世』 宗像市
- 河合章行 2013 「製作技術からみた骨角器の伝播」『動物考古学』 第 30 号 動物考古学研究会
- 河合章行 2014 「いわゆる「アワビオコシ」をめぐる諸問題」『先史学・考古学論究 6』 龍田考古会
- 河合章行 2022 「骨角器加工からみた鉄器普及」『考古学ジャーナル』 No. 766 ニューサイエンス社
- 川畑誠編 2017 『羽咋郡志賀町 福井ナカミチ遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 川道寛 2007 「つぐめのはな遺跡のクジラ漁」『なりわい 食料生産の技術』 縄文時代の考古学 5 同成社
- 川道寛・古澤義久 2016 『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 18 集 長崎県教育委員会
- 久住猛雄 2000 「今宿遺跡 5 次調査」『J R 筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 654 集 福岡市教育委員会
- 久住猛雄 2004 「古墳時代初頭前後の博多湾沿岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人』 大阪府立弥生文化博物館

- 久住猛雄 2005 「古式土師器について」『今山遺跡第8次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集 福岡市教育委員会
- 久住猛雄 2007 「「博多湾貿易」の成立と解体—古墳時代初頭前後の対外交易機構」『考古学研究』第53巻第4号 考古学研究会
- 久住猛雄 2008 「福岡平野 比恵・那珂遺跡群—列島における最古の「都市」—」『集落からよみ弥生社会』弥生時代の考古学8 同成社
- 久住猛雄 2010 「弥生時代後期の福岡平野周辺における集落動態（1）—近年の研究動向の批判的検討から—」『市史研究ふくおか』第5号
- 久住猛雄 2012 「奴国とその周辺」『邪馬台国をめぐる国』雄山閣
- 久住猛雄 2018 「最古の「都市」～比恵・那珂遺跡群～」『総括シンポジウム「古墳時代における都市化の実証的比較研究—大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地—」資料集』（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所
- 久保禎子 2003 「西庄遺跡における漁撈活動」『西庄遺跡』財団法人和歌山県文化財センター
- 黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉・中村大介・丸山真史・松井章 2010 『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』神戸市教育委員会
- 小池史哲 1983 「御床松原遺跡の貝類」『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集 志摩町教育委員会
- 河野正訓 2014 「地方からみた鉄の管理体制—事例研究③鳥取県長瀬高浜遺跡—」『古墳時代の農具研究—鉄製刃先の基礎的検討をもとに—』雄山閣
- 古賀日香理・立石和也・富岡直人 2013 「1977年・2011年カラカミ遺跡発掘出土軟体動物門と棘皮動物門」『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ—カラカミ遺跡第5～7地点の発掘調査（1977・2011年）』九州大学人文科学研究院考古学研究室 国立歴史民俗博物館 2020 『昆布とミヨク』
- 小林茂・佐伯弘次・磯望・高倉洋彰 1998 「福岡平野の遺跡立地研究」『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために—』九州大学出版会
- 小林嵩 2018 「千葉県南房総市恩田原遺跡の遺構・遺物が提起する課題」『貝塚』第73号 物質文化研究会
- 小林正史 2017 「鍋の形・作りの変化」『モノと技術の古代史 陶芸編』吉川弘文館
- 小林義彦編 1989 『唐原遺跡Ⅱ 集落編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第541集 福岡市教育委員会
- 後藤明 2003 『海を渡ったモンゴロイド』講談社
- 後藤明 2010 『海からみた日本人』講談社
- 小山修三 2000 「交易港」『縄文時代の商人たち』洋泉社新書 洋泉社
- 小山修三・岡田康博 2000 『縄文時代の商人たち』洋泉社新書 洋泉社
- 財西日本文化協会 1982 「福岡県漁業誌 筑前国第1篇」『福岡県史近代史料編 農商誌・漁業誌附録絵馬』福岡県
- 財愛媛県埋蔵文化財調査センター 2011 『上分西遺跡 上分西遺跡乗安地区』国道11号川之江三島バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第2集 財愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 佐賀県立名護屋城博物館 2011 『海に生きる—江戸時代の唐津のくらしと玄界灘—』
- 三井田恒博 2006 『近代福岡県漁業史 1878—1950』海鳥社
- 塩屋勝利・力武卓治 1997 『小葦遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第541集 今津大原小葦遺跡調査会 福岡市教育委員会
- 茂原伸生・松井章 1995 「原の辻遺跡出土の動物遺存体」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集 長崎県教育委員会
- 重藤輝行編 2006 『西新町遺跡Ⅶ』福岡県文化財調査報告書第208集 福岡県教育委員会
- 重藤輝行 2018 「4～5世紀の九州地域の土器と渡来人集落—馬韓・百済系を中心として」『日韓交渉の考古学—古墳時代—（最終報告書 論考編）」「日韓交渉の考古学—古墳時代—」研究会 「韓日交渉の考古学—三国時代—」研究会
- 篠宮正 2012 「マダコ壺漁の開始と展開」『菟原Ⅱ』菟原刊行会
- 柴田昌児 2007 「西部瀬戸内と芸予諸島における海人集団の動向」『古墳時代の海人集団を再検討する』第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会・第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 柴田昌児 2022 「総論 海に生きた弥生人の多様性と多義性」『考古学ジャーナル』No.763 ニューサイエンス社
- 島根県古代文化センター編 2015 『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』島根県古代文化センター研究論集第15集

- 島根県立古代出雲歴史博物館 2015『入り海の記憶 知られざる出雲の面影』
- 下條信行 1984「弥生・古墳時代の九州型石鍾について—玄界灘海人の動向—」『九州文化史研究所紀要』第 29 号 九州大学九州文化史研究施設
- 下條信行 1989「弥生時代の玄界灘海人の動向」『横山浩一先生退官記念論集 I』 横山浩一先生退官記念事業会
- 下條信行 1993「わが国初期稲作期における土鍾の伝来と東伝」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』 潮見浩先生退官記念事業会
- 下條信行 2013「九州型石鍾の系譜と展開」『寒暖流の考古学 I—第 4 回海洋考古学会資料集—』 海洋考古学会
- 下原幸裕編 2009『西新町遺跡 IX』福岡県文化財調査報告書第 221 集 福岡県教育委員会
- 下山正一 1998「福岡平野の縄文海進と第四紀層」『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために—』九州大学出版会
- 下山正一・磯望・野井英明・高塚潔・小林茂・佐伯弘次 1998「鳥飼低地の第四紀層と地形形成」『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために—』九州大学出版会
- 下山正一 2013「福岡市の地質環境の変遷」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 下山正一・磯望・黒木貴一 2013「地形と景観の変遷」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 白井克也 2001「靛島貿易と原の辻貿易」『弥生時代の交易』第 49 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 白石溪牙 2020「原の辻遺跡の船着き場跡」『土を盛り、石を築く—土木・建築技術にみる東アジア交流—』令和 2 年度東アジア国際シンポジウム 長崎県埋蔵文化財センター
- 新川登亀男 1988「海の民」『住吉と宗像の神』筑摩書房
- 神野善治 1984「駿河湾北部のイカ釣漁」『沼津市歴史民俗資料館紀要 8』沼津市歴史民俗資料館
- 菅波正人 2011「潟湖を望む古墳群」『海の高墳を考える I—群集墳と海人集団—』海の高墳を考える会
- 菅豊 1994「水辺」の開拓誌—低湿地農耕は、はたして否定的な農耕技術か?—『国立歴史民俗博物館研究報告』57 国立歴史民俗博物館
- 杉山浩平 2019「弥生時代研究と海」『再考「弥生時代」農耕・海・集落』雄山閣
- 鈴木一有 2010「古墳時代の東海における太平洋沿岸交流の隆盛」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系
- 鈴木靖民 2020『古代の日本と東アジア 人とモノの交流史』勉誠出版
- 田井中洋介 2007「石鍾による網漁」『なりわい 食糧生産の技術』縄文時代の考古学 5 同成社
- 高田貫太 2020「朝鮮半島の倭系古墳」『東アジアと倭の眼でみた古墳時代』国立歴史民俗博物館研究叢書 7 朝倉書店
- 高田健一 2021「魏志倭人伝からみた弥生時代の天然資源」『昼飯の丘に集う—中井正幸さん還暦記念論集—』中井正幸さんの還暦をお祝いする会
- 高橋浩二 2008「潟湖環境と地域間ネットワーク—弥生・古墳時代の日本海沿岸における地域間関係のモデル化」『海—域世界のネットワークと重層性』桂書房
- 武末純一 2002『弥生の村』山川出版社
- 武末純一 2009「三韓と倭の交流—海村の視点から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 151 集 国立歴史民俗博物館
- 武末純一 2010「集落からみた渡来人」『古文化談叢』第 63 集 九州古文化研究会
- 武末純一 2010 b「日本の弥生拠点集落とネットワーク」『青銅器時代と蔚山太和江文化』(財)蔚山文化財研究院
- 武末純一 2013「弥生時代の権—青谷上寺地遺跡例を中心に—」『福岡大学考古学論集 2』福岡大学考古学研究室
- 立石和也 2010「御床松原遺跡第 2 次調査出土の動物遺存体」『新町・御床松原遺跡』糸島市文化財調査報告書第 2 集 糸島市教育委員会
- 田辺悟 2002『網』ものと人間の文化史 106 法政大学出版局
- 谷川健一 1995『古代海人の世界』小学館
- 谷澤亜里 2019「古墳時代の山陰系玉類—出雲地域、北部九州地域の様相から—」『古墳時代の玉類の研究』島根県古代文化センター研究論集第 21 集 島根県古代文化センター
- 千賀久 2019「日本に伝えられた馬文化」『馬の考古学』雄山閣
- 千葉毅編 2022『洞窟遺跡を掘る—海蝕洞窟の考古学—』神奈川県立歴史博物館

- 辻田淳一郎 2011「アワビの大きさとその出土状況」『杵岐カラカミ遺跡Ⅲ—カラカミ遺跡第1地点の発掘調査（2005～2008年）』九州大学人文科学研究院考古学研究室
- 辻田淳一郎 2013「古墳時代の集落と那津官家」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 辻田淳一郎 2014「鏡からみた古墳時代の地域間関係とその変遷—九州出土資料を中心として—」『古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会大分大会 九州前方後円墳研究会
- 辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』株式会社 KADOKAWA
- 常松幹雄・宮井善朗 2013「弥生時代」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 常松幹雄 2013「墓と副葬品からみた北部九州の弥生社会」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 常松幹雄 2015『元岡・桑原遺跡群 24』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1275 集 福岡市教育委員会
- 常松幹雄 2016「元岡・桑原遺跡群」『新修福岡市史 資料編考古 I 遺跡からみた福岡の歴史—西部編—』福岡市
- 常松幹雄編 2018『元岡・桑原遺跡群 29』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1354 集 福岡市教育委員会
- 寺井誠 2005「朝鮮半島系土器」『第8回九州前方後円墳研究会 九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会
- 土岐耕司 2020「滑石製石錘について」『西海考古』第11号 西海考古同人会
- 富岡直人 2010「縄文時代の動物質資源と生業圏」『人と動物の関わり合い 食糧資源と生業圏』縄文時代の考古学4 同成社
- 富岡直人・立石和也・古賀日香理・江川達也 2011「カラカミ遺跡出土軟体動物門と棘皮動物門」『杵岐カラカミ遺跡Ⅲ—カラカミ遺跡第1地点の発掘調査（2005～2008年）』九州大学人文科学研究院考古学研究室
- 豊田祥三 2018「素潜り漁の研究の現状について」『海女文化の歴史踏査報告—素潜り漁に関する基礎資料報告（原始・古代～中世）—』鳥羽市文化財調査報告2 鳥羽市教育委員会
- 中尾篤志 2004「「一支部」における生産基盤—原の辻遺跡出土農耕関連遺物の検討を通して—」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』河瀬正利先生退官記念事業会編
- 中尾篤志 2005「鯨骨製アワビオコシの拡散とその背景」『西海考古』6 西海考古同人会
- 中尾篤志 2011「九州地方の骨角器」『弥生・骨角器サミット～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～』青谷上寺地遺跡フォーラム 2011 鳥取県埋蔵文化財センター
- 中尾篤志 2022「玄界灘と対馬海峡の海と弥生人」『考古学ジャーナル』No.763 ニューサイエンス社
- 長尾隼 2015「第2章 潟湖をフィールドとした人文研究の諸相」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』島根県古代文化センター研究論集第15集 島根県古代文化センター
- 長尾隼 2015b「第5節 潟湖がうつつした近代—干拓以前の波根湖をめぐる景観と生業の記憶」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』島根県古代文化センター研究論集第15集 島根県古代文化センター
- 中久保辰夫 2017『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版会
- 中塚武・鎌谷かおる・佐野雅規・伊藤啓介・對馬あかね 2021『新しい気候観と日本史の新たな可能性』気候変動から読みなおす日本史1 臨川書店
- 納屋内高史・松井章 2008「カラカミ遺跡出土の動物遺存体」『杵岐カラカミ遺跡 I—カラカミ遺跡東亜考古学会第2地点の発掘調査—』九州大学人文科学研究院考古学研究室
- 西川修一 2015「洞穴遺跡にみる海洋民の様相」『海浜型前方後円墳の時代』同成社
- 仁田坂聡 2014「雲透遺跡」『末盧国遺跡群総括報告書』唐津市文化財調査報告書第168集 唐津市教育委員会
- 乗松真也 2000「中国・四国地方における有溝石錘の地域差」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅷ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 乗松真也 2006「漁業用の錘からみた地域間交流」『日本考古学協会 2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会 2006年度愛媛大会実行委員会
- 乗松真也 2007「備讃瀬戸の古墳時代漁業生産体制」『古墳時代の海人集団を再検討する』発表要旨集 埋蔵文化財研究会 第56回埋蔵文化財研究会実行委員会
- 乗松真也 2010「博多湾岸における備讃瀬戸系漁具の受容と背景」『九州考古学』85 九州考古学会
- 乗松真也 2013「山陰系有溝石錘からみた弥生時代後期の妻木晩田遺跡」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2013』
- 橋口達也・八幡一郎 1977「半球形有孔滑石製品」『考古学雑誌』第57巻第3号 日本考古学会

- 橋口尚武 2005 「縄文時代の舟と交流・交易」『考古学ジャーナル』No.536 ニューサイエンス社
- 林田好子・中尾篤志 2014 「九州型石錘の集成と展望」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号 長崎県埋蔵文化財センター
- 早野浩二 2007 「伊勢湾沿岸と三河湾沿岸における臨海の集落と古墳」『古墳時代の海人集団を再検討する』発表要旨集 第56回埋蔵文化財研究会実行委員会
- 肥後和男 1968 『神話と民俗』民俗民芸双書33 岩崎美術社
- 比佐陽一郎 2011 「福岡市域における「海」の古墳」『海」の古墳を考えるⅠ—群集墳と海人集団—』海」の古墳を考える会
- 平尾和久 2003 「福岡県における飯蛸壺型土器の受容と展開—西新町遺跡を中心に—」『古文化談叢』第50集上 九州古文化研究会
- 平尾和久 2004 「北部九州の脚台付製塩土器」『福岡大学考古学論集—小田富士夫先生退職記念—』小田富士雄先生退職記念事業会
- 平尾和久 2007 「北部九州における飯蛸壺と製塩土器の受容と展開」『古墳時代の海人集団を再検討する』発表要旨集 第56回埋蔵文化財研究会実行委員会
- 平尾和久 2009 『泊りユウサキ遺跡』前原市文化財調査報告書第102集 前原市教育委員会
- 平尾和久 2021 「御床松原遺跡出土白色物質付着土器の検討—製塩土器の可能性を探る—」『第3回板石硯・研石研究会(御床松原遺跡検討会)』資料集 糸島市立志摩歴史資料館
- 平川敬治 1990 「網漁における伝統的沈子についての二、三の問題」『九州考古学』第65号 九州考古学会
- 平川敬治 2011 『魚と人をめぐる文化史』 弦書房
- 平川敬治 2012 『タコと日本人』 弦書房
- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』 山川出版社
- 広瀬和雄 2015 「古墳時代の船と海民統治」『海浜型前方後円墳の時代』 同成社
- 福岡県水産林務部漁政課 1991 『福岡県の漁具・漁法』
- 福岡市環境局環境監理部 2016 『博多湾環境保全計画(第二次)』
- 福岡市史編集委員会 2013 『新修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』
- 福岡市史編集委員会 2017 『新修福岡市史 資料編考古1 遺跡からみた福岡の歴史—西部編—』
- 福岡市史編集委員会 2020 『新修福岡市史 資料編考古2 遺跡からみた福岡の歴史—東部編—』
- 富加見泰彦・井石好弘・村田弘・黒石哲夫 2003 『西庄遺跡』財団法人和歌山県文化財センター
- 富加見泰彦 2016 「鯨考—紀伊半島の古式捕鯨について—」『海と山と里の考古学—山崎純男博士古稀記念論集—』山崎純男博士古稀記念論集編集委員会
- 藤井弘章 2019 「総論 漁食の展開と肉食の拡大」『日本の食文化4 魚と肉』吉川弘文館
- 藤木聡 2003 「宮崎地域の錘具の変遷と分布 付『宮崎県内水面漁具図譜』にみる錘具の紹介」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会
- 藤木聡 2006 「宮崎沿海の四ツ目土錘」『宮崎考古』第20号 宮崎考古学会
- 藤木聡 2009 「打欠石錘の用途と切目石錘の来歴」『九州における縄文時代の漁撈具』第19回九州縄文研究会長崎大会九州縄文研究会
- 藤木聡 2012 「黒潮の先史漁撈文化を語る」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要第8号』宮崎県立西都原考古博物館
- 藤口健二 2009 「古代推定船「野性号」による海路踏査 韓国沿岸地域の航海を中心として」『三国志』魏書東夷伝の国際環境』国立歴史民俗博物館研究報告第151集 国立歴史民俗博物館
- 藤田富士夫 1990 『古代の日本海文化』中央公論社
- 藤本貴仁 2019 「肥後地域における土器製塩の波及」『熊本古墳研究』第7号 熊本古墳研究会
- 古澤義久 2015 「長崎県の弥生時代遺跡出土中国貨幣」『平成27年度東アジア国際シンポジウム ロード・オブ・ザ・コイン—弥生時代中国貨幣からみる交流—』長崎県埋蔵文化財センター
- 古澤義久 2016a 「総括 東アジアにおける原の辻遺跡」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 長崎県教育委員会
- 古澤義久 2016b 「原の辻遺跡における日韓交流」『大海を渡り、一支国に至る。—国境の島 壱岐・原の辻遺跡における日韓交流—』平成28年度東アジア国際シンポジウム 長崎県埋蔵文化財センター

- 古澤義久 2018 「弥生時代壱岐島における韓半島系資料」『土器・金属器の日韓交渉』「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会
- 古澤義久 2019 『『魏志倭人伝』に記された「南北市糶」の具体像』『玄界灘の交易要衝『一支国』』令和元年度秋季特別展図録 伊都国歴史博物館
- 北條芳隆 2020 「弥生時代の市場交換」『弥生時代の東西交流～広域的な運動性を考える～』六一書房
- 松浦宥一郎・古谷毅編 2005 『重要文化財西都原古墳群出土埴輪 子持家・船』東京国立博物館所蔵 重要考古資料 有學術調査報告書 東京国立博物館
- 松岡達郎・中田清彦・横山英介 1997 「礫石器考」『考古学研究』24—1 考古学研究会
- 松根正根 1997 『古代日本の軍事航海史』かや書房
- 松見裕二・古澤義久 2016 「原の辻遺跡の盛衰」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 長崎県教育委員会
- 松見裕二 2016 「海の王都・一支国『魏志』倭人伝に記された一支国の世界」『『魏志』倭人伝に記された一支国の世界』壱岐市教育委員会
- 真鍋篤行 1993 「瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書(Ⅱ)』瀬戸内海歴史民俗資料館
- 真鍋篤行 1994 「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第7号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 真鍋篤行 1995 「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第8号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 真鍋篤行 1996 「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第9号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 真鍋篤行 1997 「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題(続)」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第10号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 真鍋篤行 2021 「備讃瀬戸の鯛大網漁について」『香川史学』第47・48号合併号 香川歴史学会
- 丸山真史・松井章 2010 「兵庫津遺跡第14次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』神戸市教育委員会
- 丸山真史・丸崎哲也・松井章・江田真毅・覚張隆史・米田穰 2013 「カラカミ遺跡から出土した動物遺存体」『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ—カラカミ遺跡第5～7地点の発掘調査(1977・2011年)』九州大学人文科学研究院考古学研究室
- 丸山真史 2013 「近世、京都の魚色文化の特徴—近世三都の魚貝類の比較を通じて—」『動物考古学』第30号 動物考古学研究会
- 水澤幸一 2015 「第1章北陸地域の様相」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』島根県古代文化センター研究論集第15集 島根県古代文化センター
- 三舟隆之 2019 「文献史料から見た塩とその使用量—古代食の復元から—」『日本列島における製塩技術史の解明Ⅰ—縄文から古代まで拡張して見えるもの—』明治大学資源利用史研究クラスター
- 三舟隆之・大平知未 2021 「附編1 木簡にみえる鮎の加工法」『古代の食を再現する』吉川弘文館
- 宮崎貴夫 2001 「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第4号 西海考古同人会
- 宮崎貴夫 2012 「「南北市糶」考」『古代壱岐島の世界』高志書院
- 宮元香織 2007 「島嶼部の後期古墳について—玄界灘周辺の事例を中心に—」『古墳時代の海人集団を再検討する』埋蔵文化財研究会 第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 宮本一夫 2013a 「総論—遺跡分布からみた福岡の歴史」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 宮本一夫 2013b 「縄文から弥生へ」『福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 宮本常一 『日本民衆史3 海に生きる人々』未来社
- 村井章介 1996 「港町めぐり—瀬戸内海からバルト海・北海へ—」『津・泊・宿 中世都市研究3』中世都市研究会 新人物往来社
- 村上勇 2009 「バリア海退が中世地域に与えた影響について」『西国城館論集Ⅰ 河瀬正利先生追悼論集』中国・四国地区城館調査検討会
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店

- 森川昌和・大森宏・上野晃・山口英一・田辺常博・入江文敏・畠中清隆・芝田寿朗・藤本香城 1980 『岡津製塩遺跡 - 第1次・第2次発掘調査報告 -』 小浜市教育委員会
- 森田克行 2019 「4世紀から9世紀の日本における造船・航海術」『古代東アジアの公開と宗像・沖ノ島』宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業第1回国際検討会報告書 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
- 森本幹彦 2011 「集落空間の変化、集落フォーメーションの展開」『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学4 同成社
- 森本幹彦 2013 「博多湾岸域出土の日本海沿岸系土器—土器からみた弥生時代後期における日本海交流の様相—」『みずほ別冊 弥生研究の群像』大和弥生文化の会
- 森本幹彦 2015 「海人集団の東西—九州型石錘の再検討—」『弥生研究の交差点—池田保信さん還暦記念—』みずほ別冊2 大和弥生文化の会
- 森本幹彦 2015b 「外来系土器からみた対外交流の様相」『古代文化』66—4
- 森本幹彦 2016 「今宿五郎江遺跡」『新修福岡市史 資料編 考古①』福岡市
- 森本幹彦 2017 「弥生・古墳時代の博多湾沿岸に流入した中国銭」『福岡市博物館研究紀要』第26号 福岡市博物館
- 森本幹彦 2019 「漁具の様相」『元岡・桑原遺跡群34』福岡市埋蔵文化財調査報告書1385集 福岡市教育委員会
- 森岡秀人・三好玄・田中元浩 2016 「総括」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 森浩一 1984 「潟と港を発掘する」『海を越えての交流』日本の古代第3巻 中央公論社
- 山下義満 2015 『天草の伝統的漁撈具』
- 山下義満 2016 『天草漁撈の伝統』
- 山崎純男編 1982 『海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集 福岡市教育委員会
- 山崎純男 1984 「福岡市海の中道遺跡出土自然遺物の検討」『九州文化史研究所紀要』第29号 九州大学九州文化史研究施設
- 山崎純男 1985 『多々良込田遺跡Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第121集 福岡市教育委員会
- 山崎純男編 1993 『海の中道遺跡Ⅱ』朝日新聞社西部本社 海の中道遺跡発掘調査実行委員会
- 山崎純男 2007 「九州における海人集団の成立と展開」『古墳時代の海人集団を再検討する』第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会・第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 山崎健 2021 「古代の蠅害考—生鮭実験の中間報告と副次的成果—」『古代の食を再現する』吉川弘文館
- 柳田康雄編 1996 『徳永川ノ上遺跡2』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告7 福岡県教育委員会
- 山田隆一 2006 「西三河の土器製塩と交流拠点」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004年度共同研究成果報告書』
- 山中英彦・大澤元裕 2003 『海の幸を求めて—古代の漁具—』行橋市歴史資料館・行橋市教育委員会
- 山中英彦 2007 「「博多湾貿易」を支えた古代海人」『古文化談叢』第57集 九州古文化研究会
- 山梨千晶 2019 「壱岐における弥生時代の鉄」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 長崎県埋蔵文化財センター
- 山村信栄 1989 「石錘について」『唐原遺跡Ⅱ 集落編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第207集 福岡市教育委員会
- 吉田広 2020 『文京遺跡 VII—2』愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXVII—2 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 米倉秀紀編 2005 『今山遺跡第8次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集 福岡市教育委員会
- 読売新聞西部本社・大王のひつぎ実験航海実行委員会 2006 『大王のひつぎ海をゆく 謎に挑んだ古代船』海鳥社
- 力武卓治 1997 「石器」『小葎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第541集 福岡市教育委員会
- 両津市郷土博物館編 1997 『佐渡—島の自然・くらし・文化』
- 渡辺誠 1973 『縄文時代の漁業』雄山閣
- 渡辺誠 1976 「スダレ状圧痕の研究」『物質文化』26 物質文化研究会
- 渡辺誠 1995 「朝鮮海峡における漁民の交流」『日韓交流の民族学』名古屋大学出版会
- 和歌山県史紀伊風土記の丘 2019 『黒潮の海に糧をもとめて—古墳時代の海の民とその社会—』平成30年度春季特別展図録
- 和田晴吾 1982 「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社

## VI 九州型石錘出土一覧表

本研究の基礎データとして、令和4年3月現在筆者が集成した九州内の玄界灘沿岸地域を中心とする九州型石錘（本書のⅠ～Ⅵ類、九州型石錘を模した土錘も含む、九州型石錘を規定した下條信行氏はⅥ類（半球状有孔滑石製品）を氏の九州型石錘には含めていないことは注意）の一覧表を作成した。

本章では、本研究の成果として一覧表を掲載する。

本一覧表は、林田好子・中尾篤志氏による九州型石錘出土遺跡一覧表（林田好子・中尾篤志 2014「九州型石錘の集成と展望」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第4号』長崎県埋蔵文化財センター、Ⅰ～Ⅴ類のみ集成、61遺跡、430点）を基礎データとし、これに半球状有孔滑石製品（Ⅵ類）などの新たな情報を追補して作成した（127遺跡、1,106点）。

本来であれば、今回作成した一覧表の石錘について、石材の種類やその色調、加工状況、特徴等の観察を随時行い、情報を加えていく予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止措置等により資料調査できたものは全体の1/3弱程度にとどまる。

なお、本一覧表の記載内容については、筆者の責任に帰するものである。

### ○一覧表凡例

- ・「遺跡番号」は、遺跡ごとに番号を付与した。
- ・「参考」は、弥生～古墳時代前期の九州型石錘ではないが、形態からその可能性があるものを記載した。  
また軽石を加工した浮子のうち、特徴的なものを掲載した。
- ・「遺跡名」は、調査回数や調査地点名等も記載した。
- ・「市町村名」は、県名は除いた。なお、括弧内で示したものは合併前の市町村名である。
- ・「分類」の基準は、本書「第三章 1 弥生～古墳時代の石錘の集成」24～30頁に基づく。
- ・「石材」は、一部は実見して確認した石材情報を記載したが、多くが報告書に記載された石材情報である。
- ・「色調」は、報告書に記載されたものは非常に少ないため、この記載されたものの多くは実見して確認したものである。
- ・「加工状況」は、（疑似餌機能のため海中で光り輝くために）表面を研磨したものを「●」、（多面体を構成し海中で光り輝くために）表面に加工痕が残るものを「○」とした。この視点における成果は、第四章 1、76頁を参照のこと。
- ・「法量」「重量」は、括弧で示したものは欠損等による残存値を示す。
- ・「溝幅」「孔径」は、溝幅・孔径が綱紐の太さ・径を示し、それが網の規模と相関するという真鍋篤行氏の先行研究（真鍋 1994・1995等）から、最も狭い（細い）部分で計測した。
- ・「孔径」の上から1・2・3番目の順序は実測図から機械的に計測したもので、実際の使用の際の天地を必ずしも示したのではない。
- ・「時期」については、本石錘の性格上、溝や包含層出土のものが少なくなく、その場合は上限・下限の時期も示すようにした。

遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	石材		加工状況	法量			溝槽			埋蔵番号	時期(下限)	備考	文献	
							色調	色調		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	長軸の溝幅(mm)	短軸の溝幅(mm)					1番上の孔径(mm)
1	1	堀水ヤマト遺跡跡	行橋市	II B-3-1 類	住16	滑石	灰赤色～ 黄灰色	●	9.0	4.3	3.1	184.9	2.0	1.0	4.5	6.0	144-6	古墳前期前半	黄色を呈する滑石、石材、形骸等、 骨多量埋蔵の点と類似し、形質的 可能性、溝の幅から約5cm通して 部に顕著な磨滅、見きりなどの使 用痕か。	九州歴史資料館2013「東九州百箇 遺跡文化財調査報告書 福岡県行橋市延長 ヤマト遺跡跡1区の調査」
2	2	小倉城二ノ宮遺跡跡	北九州市小倉北区	I-1-1 類	黄褐色砂土	滑石		●	(11.0)	5.2	(2.0)	5.0	5.0				68-19	弥生後期～ 古墳前期	北九州市教育委員会2012「小倉城二ノ宮 遺跡跡(鎌倉)～室町時代中期、弥生・古 墳時代」北九州市文化財調査報告書第26 集	
3	3	小倉城二ノ宮遺跡跡	北九州市小倉北区	II B-1 類				●	(5.4)	1.8	1.0	1.5	1.5				68-21	弥生後期～ 古墳前期	同上	
4	4	倉山遺跡跡	北九州市小倉南区	III A-3 類	3号井壁				3.5	2.8	2.0	2.0	2.5			16	古墳前期前半～古 墳時代の混入の可 能性	北九州市教育委員会2012「倉山遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第122集		
5	5	長野尾遺跡跡	北九州市小倉南区	III A-3 類	住8	紺長石		●	4.8	3.4	2.8	51.0	3.0	1.0		41-24	弥生中後後半	北九州市教育委員会2012「長野尾遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第37集		
6	6	長野小倉遺跡跡	北九州市小倉南区	III A-3 類	中央A2 覆土黒色砂質土	紺灰岩		●	5.0	2.6	2.2	38.1	0.5	1.0		52-34	弥生中後後半～9C	北九州市教育委員会2012「長野小倉遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第122集		
7	7	長野小倉遺跡跡	北九州市小倉南区	III A-3 類	土器だまり	緑閃石	白色		9.5	5.0	4.3	299.6	6.0	5.0		98-7	弥生前期前半	北九州市教育委員会2012「長野小倉遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第37集		
8	8	高瀬遺跡跡	北九州市八幡南区	III A-1 類	7号土坑	紺灰岩			4.0	2.2	1.5	18.5	1.0		31-3	弥生中前期前半	北九州市教育委員会2012「高瀬遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第246集			
9	9	高瀬遺跡跡	北九州市八幡南区	IV D 類	第34号影穴 (貯蔵穴)				12.0		2.0		18.0			88-2	弥生前期末～ 中期初頃	北九州市教育委員会1985「高瀬遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第193集		
10	10	相生遺跡跡	水巻町	I A-3 類	包舎欄				9.5	3.7	3.3	3.0	2.5		14	弥生後期後半か	相生遺跡跡調査団1989「相生遺跡跡」			
11	11	相生遺跡跡	水巻町	VA-2 類	A-1地点 7号影穴住居跡	片岩		●	7.7	2.6	(2.8)	(50.0)	3.0		18-27	古墳後期末	水巻町教育委員会1986「相生遺跡跡A地点」			
12	12	尾崎・天神遺跡跡	速買町	II A-2 類	住29	砂岩			8.0	4.3	3.7	6.0	2.0		72-4	弥生中前期前半	水巻町教育委員会1989「尾崎・天神遺跡跡」			
13	13	尾崎・天神遺跡跡	速買町	II A-3 類	5号不明遺構	砂岩			8.2	5.0	2.8	2.0	2.0		107-44	弥生中前期前半	速買町文化財調査報告書第13集			
14	14	野原一丁目遺跡跡	宗像市	III B-3 類	74号影穴				4.0	2.0	1.6	18.6	1.0	0.5	46-79	弥生中期～ 古墳前期前半	宗像市教育委員会1985「宗像市野原一丁目遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第34集			
15	15	野原一丁目遺跡跡	宗像市	III B-3 類	74号影穴				3.5	2.0	1.4	12.4	1.5	1.5	46-80	弥生中期～ 古墳前期前半	宗像市教育委員会1985「宗像市野原一丁目遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第34集			
16	16	野原一丁目遺跡跡	宗像市	III A-1 類	A地点 包舎欄	砂岩			4.8	3.0	3.1	40.0	2.5		75-167	古墳前期後半	宗像市教育委員会1985「宗像市野原一丁目遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第34集			
17	17	野原一丁目遺跡跡	宗像市	III B-1 類	A地点 包舎欄	安山岩			3.5	1.4	1.4	8.0	0.5		79-168	古墳前期後半	宗像市教育委員会1985「宗像市野原一丁目遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第34集			
18	18	野原一丁目遺跡跡	宗像市	VB 類	A地点 包舎欄	頁岩	緑紫色		5.6	4.1	0.9	3.0	2.0		81-39	古墳前期後半	宗像市教育委員会1985「宗像市野原一丁目遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第34集			
19	19	野原一丁目遺跡跡	宗像市	I B-1-1 類	C地点 包舎欄	安山岩	紫色		10.1	7.2	(4.4)	(230.0)	2.0	2.0		83-31	弥生後期後半～ 古墳前期前半	宗像市教育委員会1985「宗像市野原一丁目遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第34集		
20	20	野原一丁目遺跡跡	宗像市	II A-3 類	SC-056				10.4	4.0	4.0	2.0	3.0		72-05607	弥生中後後半	宗像市教育委員会1985「宗像市野原一丁目遺跡跡 遺跡文化財調査報告書第34集			
21	21	花見遺跡跡	古賀市	III A-3 類	第86号土壇	砂岩			10.6	6.2	2.0	2.0	3.0		32-1	弥生中期中葉～ 後期初頃	津島町教育委員会2002「花見遺跡跡」			
22	22	花見遺跡跡	古賀市	III A-1 類	住1	細粒砂岩			2.3	1.7	1.8	2.0	2.0		6-11	弥生中期中葉～ 後半	津島町教育委員会1984「花見遺跡跡」			
23	23	花見遺跡跡	古賀市	III B-1 類	C地点 第4号住居跡	石英長石斑 岩	白色		5.0	3.8	2.5	3.0	3.0		10-1	弥生中期後半	古賀市教育委員会1985「花見遺跡跡」			
24	24	花見遺跡跡	古賀市	III A-1 類	C地点 第4号住居跡	砂岩	白色		5.1	3.3	3.0	2.5	2.5		10-2	弥生中期後半	古賀市教育委員会1985「花見遺跡跡」			
25	25	花見遺跡跡	古賀市	III A-1 類	C地点土壇	砂岩		●	8.0	5.4	4.8	2.5	2.5		26-6	弥生中期後半	古賀市教育委員会1985「花見遺跡跡」			
26	26	千鳥古墳群	古賀市	III A-1 類	第13号土壇	滑石		○	4.8	1.7		1.5			102	弥生中期か	千鳥古墳群調査委員会1985「千鳥古墳群」			
27	27	千鳥古墳群	古賀市	II A-1 類	粘板岩		●	11.3	3.3	2.8	138.0	3.0		48-23	弥生後期後半～古墳 前期前半	古賀市教育委員会2016「千鳥古墳群」				
28	28	千鳥古墳群	古賀市	II A-1 類	粘板岩		●	4.7	1.7	1.6	19.0	1.5		48-24	弥生後期後半～古墳 前期前半	古賀市教育委員会2016「千鳥古墳群」				
29	29	千鳥古墳群	古賀市	VC 類	C地点土壇	滑石		●	6.4	1.2	1.2	12.0		1.5	3.0	48-25	弥生後期後半～古墳 前期前半	古賀市教育委員会2016「千鳥古墳群」		
30	30	千鳥古墳群	古賀市	III B-1 類					(7.0)	4.0	2.2	3.5	2.5		22-8	弥生後期後半か	千鳥古墳群調査委員会1985「千鳥古墳群」			
31	31	千鳥古墳群	古賀市	III B-3 類					6.3	5.0	2.0	10.0	3.0		22-9	弥生後期後半か	千鳥古墳群調査委員会1985「千鳥古墳群」			
32	32	千鳥古墳群	古賀市	III B-3 類					8.2	4.7	3.8	7.5	7.0		22-10	弥生後期後半か	千鳥古墳群調査委員会1985「千鳥古墳群」			
33	33	千鳥古墳群	古賀市	III B-3 類					(6.2)	4.5	(1.0)	5.0	6.0		22-11	弥生後期後半か	千鳥古墳群調査委員会1985「千鳥古墳群」			
34	34	千鳥古墳群	古賀市	III A-3 類					5.5	2.1	2.0	1.0	1.0		22-12	弥生後期後半か	千鳥古墳群調査委員会1985「千鳥古墳群」			
35	35	千鳥古墳群	古賀市	III A-3 類					4.5	2.0	(2.0)	1.5	1.0		22-13	弥生後期後半か	千鳥古墳群調査委員会1985「千鳥古墳群」			
36	36	千鳥古墳群	古賀市	III B-3 類					8.4	5.1	3.0	2.0	5.0		22-14	弥生後期後半か	千鳥古墳群調査委員会1985「千鳥古墳群」			
37	37	千鳥古墳群	古賀市	III B-3 類					6.2	4.3	2.6	4.0	2.0		22-15	弥生後期後半か	千鳥古墳群調査委員会1985「千鳥古墳群」			

第5表 九州型石鍾一覽表①

遺跡 番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材		加工 状況	法量			重量(g)	清堀			孔径		挿入 番号	時期(下限)	備考	文献		
						石材の種類	色調		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		長さの誤差 (mm)	埋物の深さ (mm)	1層上の孔径 (mm)	上から3層 目の孔径 (mm)	上から2層 目の孔径 (mm)					上から3層 目の孔径 (mm)	
19	38	熊野川遺跡第2次	古賀市	II-B-3類					5.5	3.7	2.5		3.0	8.0				23-16	弥生後期後半か	側面欠損	古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第4巻 古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第5巻 古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第6巻		
	39			II類未製品					4.2	3.4	1.3		7.0	4.0					23-17	弥生後期後半か		未製品	
	40			II-B-11-必類					7.2	4.5	2.4		6.0	6.5						23-18		弥生後期後半か	一部欠損
	41			II-B-3類					8.1	3.9	2.2		4.5	3.5						23-19		弥生後期後半か	断面扁平
	42			II-B-1類					6.0	4.7	1.9		3.5							23-20		弥生後期後半か	
	43			II-A-11-必類					7.4	4.0	1.8		5.0	6.5						23-21		弥生後期後半か	
	44			II-B-2類					7.9	4.0	2.5		3.5	7.5						23-22		弥生後期後半か	
45	III-A-1類					4.8	4.3	2.8		5.0							23-23	弥生後期後半か					
46	II-A-1類					9.2	4.5	2.2		5.0							23-24	弥生後期後半か	溝深い				
47	II-A-1類					6.0	2.0	1.9		2.0							23-25	弥生後期後半か	一部欠損				
20	48	熊野川遺跡第2次	古賀市	II-A-11-必類	II区包含層	滑石		●	4.5	1.4	1.3	9.6	1.5				22-1	弥生後期後半		古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第39巻			
21	49	熊野川遺跡第2次	古賀市	MIA類	住居1柱穴	滑石		○	8.3	11.3			14.0					124-13	弥生後期前半	半分欠損	古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第39巻 古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第39巻 古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第39巻 古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第39巻 古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第39巻 古賀市教育委員会2009年熊野川地区遺跡調査報告書第39巻		
	50			II-A-1類					3.5	1.4	2.0		1.0					117-10					
	51			II-A-3類					7.7	3.4			2.5						117-11			短軸端全周しな	
	52			II-A-2類					6.6	2.3			0.5						117-12			粗い加工	
	53			II-A-1類					9.9	4.9	4.3		2.5						117-13				
	54			VA-3類					10.7	1.9	1.4		1.5						41-198	古墳中期前半か		短軸端4条	
	55			MIA類					9.3	9.0	9.0	(583.0)		27.0					未報告			1/2欠損、孔内つる、全面覆れ加工、使用痕不明	
56	VI-B類か					(6.8)	(12.3)	(3.6)		(348.8)	33.0					未報告		大きく欠損、孔内工具痕あり					
23	57	人丸古墳	新宮町	VI-B類	箱式石棺 蓋石直上	滑石		●	16.3	8.6		3,737.0					15	古墳中期前半	箱式石棺蓋石直上に削痕、孔内つるつるがあるが、工具痕残る。底面キズ多く、磨減、海底で欠かれたか、上面端が当たったか	新宮町教育委員会1999年人丸古墳調査報告書第3巻 文化財発掘調査報告書第3巻			
	58			VI-B類	包含層	滑石		●	13.5		6.3	(1,423.0)	15.0					不明	孔はノミ状工具によるが、孔内はつるつるの気味、側面は不足方向のノミ痕残る。上面端のあたりで折れるか				
24	59	三代須川石塚	新宮町	VI-C-1類	墳丘内	滑石		●	11.7	7.3		1,377.0					17-1	弥生後期?	注孔・孔内つる、底面使用による磨損、側面下部全体5mm前後の先鋭が深いノミ状工具(鉋類?)によるケズリ、表面には欠損なし	新宮町教育委員会1999年三代須川石塚調査報告書第13巻 宮町文化財発掘調査報告書第13巻			
	60			VI-D-1類	墳丘内	滑石		●	13.6		5.2	(1,508.0)	16.0					17-2	弥生後期?		注孔工具痕、削孔つる、底面削痕、側面端方向の工具痕、全体磨減で凹みに転用		
25	61	内藤野見遺跡3次	相模町	II-B-3類	第9号墓穴住居	滑石		○	2.8	1.3	0.8		0.5					弥生後期後半	先に短軸端を彫る	相模町教育委員会2015年内藤野見遺跡3次調査報告書第38巻			
26	62	辻田遺跡	春日市	I-A-11-必類	大溝 II-B区 第6層下部	滑石		●	(7.3)	4.9	3.6	(219.4)	2.5				47-17	弥生後期後半	上半部欠損、全体丁寧な研磨、底面多量加工、孔内凹面磨若千あり	福岡県教育委員会2017年春日市遺跡調査報告書第12巻			
28	63	三吉水瀬遺跡	福岡市東区	I類か	包含層	泥岩		●	(6.1)	(4.4)		(59.1)	(7.5)					148-10	古墳前期か	大きく欠損、器表は折れ頭著	福岡県教育委員会2017年福岡市東区遺跡調査報告書第4巻 福岡県教育委員会2016年三吉水瀬遺跡調査報告書第47巻 福岡県教育委員会2016年三吉水瀬遺跡調査報告書第47巻		
	64			II-B-1類	II地区SC02	砂岩		○	3.7	1.7	1.7	13.8	2.0					57-6	弥生中期後半				
	65			II-A-1類	II地区SD08	74407-242			8.7	4.9	3.4	189.2	4.0						58-17	弥生後期前半		一部欠損	
	66			II-B-3類	II地区SX10				(2.3)	1.6	0.9	(6.05)	2.0							59-564		弥生後期後半か	半分欠損
	67			II-A-1類	II地区SX10				5.2	2.4	2.0	32.4	4.0							59-566		弥生中期後半	一部欠損
	68			II-A-1類	II地区SX40				7.3	5.7	4.0	242.9	12.0							105-6		弥生後期後半	溝深い、敲打による施溝か
	69			II-B-1類	II地区SD73				4.5	2.2	1.5	11.9	3.0							117-5		弥生後期後半	
	70			II-A-1類	II地区SC12				6.6	5.6	5.6	16.5	2.0	2.0						137-16		弥生後期前半	長軸端2条
	71			vC類	II地区SC32				(4.3)	0.8	0.7	(5.66)	1.5	1.5						173-21		古墳後期前半	1/3欠損、中央に未貫通の孔
	72			III-B-1類	II地区D6区 包含層				2.5	1.7	2.0	7.1	1.5							180-37		弥生中期後半～後期	
73	II-B-1類	II地区D7区 包含層				4.3	1.7	1.9	17.5	2.0							180-38	弥生中期後半～後期					
74	II-A-1類	II地区SC01				5.1	2.3	2.0	25.4	2.5							198-1	弥生中期後半～末	大きく欠損、側面に加工痕				
75	VI-B類	II地区SC01				(12.3)	(12.3)	(3.8)			24.0						198-5	弥生中期後半～末	大きく欠損、側面に加工痕				

第5表 九州型石錘一覽表②



遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類		加工状況	寸法			溝槽			孔径			時期(下段)	備考	文献
						石材の種類	色調		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	長軸の溝幅(mm)	短軸の溝幅(mm)	1番上の孔径(mm)	上の2番目の孔径(mm)	上の3番目の孔径(mm)			
34	107	博多遺跡群第180次	福岡市博多区	V A-2-V 類	SE13	泥岩	●	11.8	2.3	1.0	3.0	4.0	5.0	6.0	39-66	弥生後期	類例なし	福岡市教育委員会2009年博多133、福岡市埋蔵文化財調査報告書第1045集		
	108	博多遺跡群第190次	福岡市博多区	I B-1-V 類	4ESK34	滑石	●	6.2	2.0	0.7	1.0	4.0	4.0	22-132	弥生中期前半? 混入	小型品	福岡市教育委員会2011年博多43、福岡市埋蔵文化財調査報告書第126集			
	109	博多遺跡群第203次	福岡市博多区	V A-1 類	混入	滑石	●	6.7	2.1	1.6	1.0	2.0	2.0	59-709	古墳前期前半? 混入	下半部欠損	福岡市教育委員会2012年博多70、福岡市埋蔵文化財調査報告書第405集			
	110	博多遺跡群第210次	福岡市博多区	II A-3 類	SD01中央部下層	滑石	●	4.3	1.4	1.1	2.0	2.0	23.0	2-4	弥生後期前半? 混入	上下欠損、表面ケズレ痕	福岡市教育委員会2011年博多165、福岡市埋蔵文化財調査報告書第399集			
	111	大層	福岡市博多区	MI B-1 類	X1ライン	滑石	●	12.2	12.2	7.0	0.4	1.0	6-15	弥生後期後半		山口県立総合文化センター、日本考古学雑誌、藤守英彦2017年11月、福岡市埋蔵文化財調査報告書第1309集				
	112	山王遺跡第10次	福岡市博多区	II A-1 類	SK178	粘板岩		7.3	1.7	(1.2)	4.0	5.0	18-133	弥生後期後半~古墳前期前半	裏面欠損	福岡市教育委員会2010年山王遺跡第12、福岡市埋蔵文化財調査報告書第1396集				
35	113	山王遺跡第15次	福岡市博多区	II A-1 必類	SC03	滑石	○	6.8	1.9	1.6	1.5	1.5	34-219	弥生後期後半	表面、主孔は削りかたに全周せず	福岡市教育委員会1987年比恵遺跡第6次、福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集				
	114	比恵遺跡第6次	福岡市博多区	III A-3 類	SC03	滑石	●	3.1	1.6	1.4	1.5	1.5	77-51	古墳前期前半	一部欠損	福岡市教育委員会1987年比恵遺跡第6次、福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集				
	115	比恵遺跡第6次	福岡市博多区	III A-3 類	土層SH14	砂岩		3.0	2.0	1.5	1.5	2.0	19-80	古墳前期前半	自然石に施軸溝を入れたもの	福岡市教育委員会1987年比恵遺跡第6次、福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集				
	116	比恵遺跡第11次	福岡市博多区	III B-2 類	井戸SE-04	砂岩		4.6	3.7	2.3	1.0		85-3	弥生後期~古墳前期	下半部欠損、表面良く研磨	福岡市教育委員会1990年比恵遺跡第9、福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集				
	117	比恵遺跡第18次	福岡市博多区	VIC 類	井戸SE-02	滑石	●	8.0	9.7	4.4	(370.9)	21.0	60-232	弥生中期後半	大きく欠損、主孔は削りかた	福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集				
	118	比恵遺跡第18次	福岡市博多区	VIC 類	包含層	滑石	●	14.7	14.7	(2.6)	(580.1)	25.0	60-233	弥生中期後半	表面、主孔は削りかた、半分深目が残ったか	福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集				
37	119	比恵遺跡第24次	福岡市博多区	VIC 類	包含層	滑石	●	12.5	12.5	6.9	1,638.0	17.0	61-234	弥生中期後半	上半部欠損、側面は幅1.8mm前後の切削痕、主孔・副孔も削りかた、表面は多少欠損	福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集				
	120	比恵遺跡第24次	福岡市博多区	VIC 類	包含層	滑石	○	12.7	12.7	(4.8)	(1,401.5)	14.5	61-235	弥生中期後半	軸を側面下端を少し敲打して製品としたものか、副孔も玉止めしたものか					
	121	比恵遺跡第24次	福岡市博多区	VIC-1 類	包含層	滑石	●	10.7	10.7	7.7	1,338.5	23.0	61-236	弥生中期後半	主孔周囲、主孔、副孔は削りかた、主孔は削りかた、表面は多少欠損					
	122	比恵遺跡第31次	福岡市博多区	MI B-1 類	SE-18	滑石	●	(10.0)	(9.3)	(2.4)	(271.8)	21.0	67-36	弥生後期前半	下半部欠損、表面、主孔は削りかた	福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集				
	123	比恵遺跡第31次	福岡市博多区	II A-1 類	SD-005	滑石	●	5.1	2.7	2.5	1.5		85-5	古墳前期前半	主孔は長方形、孔内、下面に削りかた、表面には加工痕なし、副孔は削りかた、表面は多少欠損	福岡市教育委員会1994年比恵遺跡第13、福岡市埋蔵文化財調査報告書第468集				
	124	比恵遺跡第40次	福岡市博多区	VIC-1 類	SD01上層	滑石	●	13.2	11.5	8.2	1,592.0	12.0	26-155	弥生後期前半	表面には加工痕なし、副孔は削りかた、表面は多少欠損	福岡市埋蔵文化財調査報告書第468集				
	125	比恵遺跡第42次	福岡市博多区	II B-3 類	SC-63	滑石	●	3.9	1.7	1.2	12.8	2.0	58-357	古墳前期か?	短軸は切込み	福岡市教育委員会1994年比恵遺跡第13、福岡市埋蔵文化財調査報告書第468集				
	126	比恵遺跡第42次	福岡市博多区	MI B-1 類	SD41	片岩系	こぶ、黄褐色	11.7	10.6	6.0	(1,013.0)	13.0	27-186	弥生後期前半	円形の縦をそのまま使用、主孔上面は削りかた、表面には多少欠損	福岡市埋蔵文化財調査報告書第468集				
	127	比恵遺跡第43次	福岡市博多区	I 類	SC06	滑石		(7.8)	(5.4)			11.0	13-75	弥生後期前半	北側の口の手状に曲がる、溝槽運動	福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集				
	128	比恵遺跡第43次	福岡市博多区	II A-3 類	SC05	滑石		6.1	1.4	1.2	2.0	2.0	13-84	弥生後期前半	北側の口の手状に曲がる、溝槽運動	福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集				
	129	比恵遺跡第43次	福岡市博多区	II A-1 必類	IESK73	滑石		(4.0)	2.4	1.8	3.0	2.0	30-230	弥生後期後半	上半部欠損、中央に1孔か	福岡市埋蔵文化財調査報告書第459集				
	130	比恵遺跡第45次	福岡市博多区	II A-1 類	包含層	滑石		4.6	1.7	1.6	3		8-5	弥生中期後半		福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集				
	131	比恵遺跡第45次	福岡市博多区	III A-3 類	包含層	砂岩		6.5	2.0	1.9	2.5	2.0	8-6	弥生中期後半		福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集				
	132	比恵遺跡第45次	福岡市博多区	III A-3 類	包含層	滑石		5.3	3.0	2.9	3.0	2.0	8-7	弥生中期後半		福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集				
133	比恵遺跡第45次	福岡市博多区	MI B-1 類	2号住居跡	滑石		13.0	13.0	5.6	1,020.5	15.0	60-6-7	弥生後期前半	縦をそのまま使用、主孔は削りかた、表面には多少欠損	福岡市教育委員会1998年比恵遺跡第22、福岡市埋蔵文化財調査報告書第454集					
134	比恵遺跡第51次	福岡市博多区	I C-1-必類	SD06	細粒砂岩	黄褐色	11.0	3.0	3.1	100.0	5.0	28-7009	古墳前期前半	経路砂岩製、上下面は溝槽に砥石で平柱面を作り出す、幅約6mm程度の連続切削痕のち丁寧研磨	福岡市教育委員会2004年比恵遺跡第32、福岡市埋蔵文化財調査報告書第782集					
135	比恵遺跡第53次	福岡市博多区	III B-3 類	ビコ内	滑石		4.5	2.6	1.7	2.0	1.0	17-26	弥生中期後半		福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集					
136	比恵遺跡第53次	福岡市博多区	II B-3 類	ビコ内	頁岩		3.4	1.0	0.8	1.5	0.5	17-28	弥生中期後半		福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集					
137	比恵遺跡第53次	福岡市博多区	II A-1 類	SC-09	滑石		4.6	3.2	2.8	2.5	2.5	20-56	弥生中期か?	一度破損した製品を再利用	福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集					
138	比恵遺跡第53次	福岡市博多区	III A-1 類	SC-09	頁岩		3.7	1.5	1.2	2.5	2.5	20-57	弥生中期か?		福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集					
139	比恵遺跡第53次	福岡市博多区	III A-1 類	SD-01	滑石		3.0	1.8	1.3	2.0	2.0	20-58	弥生後期前半	上半部欠損	福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集					
140	比恵遺跡第53次	福岡市博多区	III A-1 類	SC07	砂岩		6.7	1.5	1.3	1.5	2.0	25-S18	弥生後期後半	上半部欠損	福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集					

第5表 九州型石錘一覽表④

遺跡 番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	加工 状況	法量			重量(g)	長軸の幅 (mm)	短軸の幅 (mm)	溝幅 (mm)	1層上の孔 径(mm)	孔径		時期(下限)	備考	文献
								長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)						上の空層 高さ(mm)	上の空層 直径(mm)			
37	144	比叡遺跡第115次	福岡市博多区	ⅡD-1類	SD07	滑石		14.0	14.0	5.0	6410.0			25.0			古墳前期前半か?	半分穴掘	福岡市教育委員会2010「比叡遺跡第115次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1097集	
	145	比叡遺跡第116次	福岡市博多区	ⅡB-1類	SP216	砂岩		4.3	2.2	1.6								一部方形	福岡市教育委員会2016「比叡遺跡第116次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1097集	
	146	比叡遺跡第117次	福岡市博多区	ⅡA-3類	1区階西置土		5.8	2.0	1.4									下部方形	福岡市教育委員会2016「比叡遺跡第117次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1097集	
	147	比叡遺跡第118次	福岡市博多区	ⅡA-3類			4.6	1.2	1.1									下部穴掘	福岡市教育委員会2016「比叡遺跡第118次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1097集	
	148	比叡遺跡第119次	福岡市博多区	ⅡB-3類	溝B-1類		3.0	1.5	0.9									断面扇形	福岡市教育委員会2016「比叡遺跡第119次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1097集	
38	149	那珂河内遺跡第21次	福岡市博多区	ⅡD類	第49号竈礎上層	滑石片岩	●	9.2	9.2	2.2	385.4			20.0				断面が草履形	福岡市教育委員会1982「那珂河内遺跡第21次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集	
	150	那珂河内遺跡第22次	福岡市博多区	ⅡD類	第49号竈礎上層	滑石		(10.2)	5.0	4.2								断面が草履形、半分穴掘、半分穴掘、孔後に表面加工	福岡市教育委員会1982「那珂河内遺跡第22次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集	
	151	那珂河内遺跡第23次	福岡市博多区	ⅡA-1類	滑石			4.0	3.0	(1.5)	338.0			2.0				一部穴掘	福岡市教育委員会1982「那珂河内遺跡第23次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集	
	152	那珂河内遺跡第24次	福岡市博多区	ⅡC類	SP-45A	頁岩		5.0	2.0					4.0	4.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用、表面つるつるのため、海底で腐りすぎたか	福岡市教育委員会1982「那珂河内遺跡第24次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集	
	153	那珂河内遺跡第25次	福岡市博多区	ⅡB-1類	SC-116	滑石	●	9.2	3.4	2.7	145.0	4.5						Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用、表面つるつるのため、海底で腐りすぎたか	福岡市教育委員会2015「那珂河内遺跡第25次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1199集	
39	154	那珂河内遺跡第18次	福岡市博多区	ⅡB-1類	SP-01	緑泥石岩	○	2.9	1.3	1.0								Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2015「那珂河内遺跡第18次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1280集	
	155	那珂河内遺跡第19次	福岡市博多区	ⅡA-1-1少類	SD-001	滑石	●	(5.5)	3.4	(3.3)	683.6	5.0			7.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2015「那珂河内遺跡第19次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1280集	
	156	那珂河内遺跡第20次	福岡市博多区	Ⅱ-1類	包含層 第2層	頁岩	●	7.0	3.2	1.1	(40.6)				5.5			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2015「那珂河内遺跡第20次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1280集	
	157	那珂河内遺跡第21次	福岡市博多区	ⅡB-1類	環溝(第二区)	滑石	○	4.0	2.5	1.6	23.4	3.0						Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2015「那珂河内遺跡第21次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1280集	
	158	那珂河内遺跡第22次	福岡市博多区	ⅡA類	環溝(第二区)	滑石	○	11.0	12.0	9.0	2,480.0				16.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2015「那珂河内遺跡第22次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1280集	
40	159	高田遺跡第20次	福岡市博多区	ⅡA-3類	137号河川	頁岩		4.5	1.1	0.9								Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2012「高田遺跡第20次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集	
	160	高田遺跡第21次	福岡市博多区	ⅡB-3-1少類	SD03 E7上層	土壌		6.4	3.6	2.4	60.0	3.0			5.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2012「高田遺跡第21次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集	
	161	高田遺跡第22次	福岡市博多区	ⅡB-3-2少類	T15下	土壌		5.3	3.0	1.5	26.6	3.0			3.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2012「高田遺跡第22次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集	
	162	高田遺跡第23次	福岡市博多区	ⅡB-3-3少類	SD03 B5上層	土壌		4.4	2.8	1.6	19.9	3.0			3.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2012「高田遺跡第23次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集	
	163	高田遺跡第24次	福岡市博多区	ⅡB-2-1類	SD03 E7上層	土壌		6.5	3.8		(88.7)	5.5			4.5			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2012「高田遺跡第24次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集	
41	164	雀原遺跡第7次	福岡市博多区	ⅡA-1-1類	包含層	粘板岩		12.0	3.0	2.1	106.1	2.0			3.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2003「雀原遺跡第7次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第746集	
	165	雀原遺跡第10次	福岡市博多区	ⅡC-1-1類	土器SI-01	滑石	●	(8.9)	2.7	2.6	(94.9)	4.0			5.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2003「雀原遺跡第10次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第746集	
	166	雀原遺跡第12次	福岡市博多区	ⅡD類	第Ⅲ面遺構跡出	滑石		12.9		4.5	(85.1)				18.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2003「雀原遺跡第12次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第746集	
	167	雀原遺跡第18次	福岡市博多区	ⅡD類	SN678	滑石		12.9	11.0	3.9	725.6				19.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1997「雀原遺跡第18次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第334集	
	168	雀原遺跡第19次	福岡市博多区	ⅡA-1類	SN-01	滑石		3.8	2.2	1.9					7.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1997「雀原遺跡第19次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第334集	
42	169	高田青木遺跡第3次	福岡市博多区	ⅡB-1類	SP-300	滑石?		(12.0)	(7.0)	(5.3)								Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2003「高田青木遺跡第3次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第777集	
	170	高田青木遺跡第5次	福岡市博多区	ⅡB-3類	用水跡掘方内	滑石		6.6	1.3	1.5					0.5			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2003「高田青木遺跡第5次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第777集	
43	171	大谷遺跡第4次	福岡市博多区	ⅡA-1類	第2区、下層	滑石	○	4.0	2.9	2.8	22.0	3.0						Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1997「大谷遺跡第4次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第337集	
	172	大谷遺跡第4次	福岡市博多区	ⅡA-1類	第2区、下層	滑石	○	4.4	2.9	2.7	21.0	2.5						Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1997「大谷遺跡第4次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第337集	
44	173	久島遺跡第4次	福岡市博多区	ⅡB-3類	SK0513	滑石		5.0	1.8	0.7								Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2012「久島遺跡第4次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1078集	
	174	寺尾遺跡	福岡市博多区	ⅡA-1-1少類	SK-81	滑石	●	(4.2)	1.8	(1.5)	(19.8)	4.0			3.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2003「寺尾遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第534集	
46	175	小倉遺跡第2次	福岡市博多区	ⅡA-3-1少類	C区-C地点 A溝	粘板岩		5.5	1.2	0.8					3.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1997「小倉遺跡第2次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第337集	
	176	小倉遺跡第2次	福岡市博多区	ⅡB-1類	SC-006	滑石		3.2	1.6	1.4	9.7	3.0						Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1997「小倉遺跡第2次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第337集	
47	177	田原1遺跡	福岡市博多区	ⅡB-1類	SC-002	滑石		3.1	1.6	1.4								Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1982「田原1遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1078集	
	178	田原1遺跡	福岡市博多区	ⅡA-1類	SC-002	滑石		2.2	1.4	1.2	5.0	1.0						Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1982「田原1遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1078集	
48	179	柳井16遺跡第1次	福岡市城南区	ⅡB-1-1類	SC-006	滑石		6.8	2.2	1.5					5.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会2004「柳井16遺跡第1次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1078集	
	180	柳井16遺跡第1次	福岡市城南区	ⅡB-1-1類	C区住9	滑石	○	11.4	3.9	2.4	195.0	4.0			5.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1982「柳井16遺跡第1次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1078集	
49	181	西野1遺跡第1次	福岡市早良区	ⅡB-1類	排土3	頁岩		5.4	4.8	1.5					8.0			Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1989「西野1遺跡第1次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集	
	182	西野1遺跡第1次	福岡市早良区	ⅡC類	SK-04	滑石	○	(5.8)	1.8	1.4								Ⅰ類失敗品をⅡ類に転用	福岡市教育委員会1989「西野1遺跡第1次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集	

第5表 九州型石錘一覽表⑤

遺跡 番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	石材		加工 状況	法量			清礎			孔塞			挿入 番号	時期(下限)	備考	文献
							色調	種類		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	長軸の寸法 (mm)	短軸の寸法 (mm)	1層上の孔 径(mm)	上から2層 目の孔径 (mm)	上から3層 目の孔径 (mm)				
183	I-1-1	西新町遺跡第5次	福岡市早良区	I-1-1	SC04	土製品	茶灰色	○	6.0	(4.0)	(4.2)	(90.0)	4.0	6.0	16-44	古墳前期前半	土製品、1孔上縁が、表面には板子 ノミ	福岡市教育委員会第1994年西新町遺跡3次福岡 市埋蔵文化財調査報告書第375集				
184	ⅤB-1	西新町遺跡第6次	福岡市早良区	ⅤB-1	SC05	砂岩	茶灰色	○	20.0	16.2	13.2	4,380.0	4.0	18.0	14-39	弥生後期終末	加工少ない、自然石を利用	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
186	ⅡA-1	西新町遺跡第6次	福岡市早良区	ⅡA-1	SC07	砂岩	茶灰色	○	3.4	1.5	1.3	8.5	2.0		14-42	弥生後期終末		福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
187	ⅢB-3	西新町遺跡第6次	福岡市早良区	ⅢB-3	SC-52	砂岩	茶灰色	○	4.6	4.2	(4.8)	83.0	3.0	4.0	12-11	弥生中期後半	底石配用、細く破片散乱	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
188	ⅣD-類A	西新町遺跡第6次	福岡市早良区	ⅣD-類A	SC65	滑石	茶灰色	○	(4.8)	(7.0)	(3.2)	(1,500.0)	3.0	(4.2)	16-26	弥生中期後半	大きく欠損、側面に未貫通の孔あり	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
189	ⅢA-1	西新町遺跡第9次	福岡市早良区	ⅢA-1	SC85	滑石	茶灰色	○	(1.4)	(2.0)		2.0		19-40	弥生中期後半	大きく欠損	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集					
190	ⅢA-1	西新町遺跡第9次	福岡市早良区	ⅢA-1	SK78	滑石	茶灰色	○	2.9	1.8	1.4	9.0	1.5		27-61	弥生中期後半	表面・両端が擦れ荒れる	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
191	ⅡA-2	西新町遺跡第10次	福岡市早良区	ⅡA-2	SC22	砂岩	茶灰色	○	6.4	(4.0)	(3.5)	(120.0)			36-127	弥生後期後半	一部欠損、浅い溝	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
192	ⅡB-1-1	西新町遺跡第10次	福岡市早良区	ⅡB-1-1	SC037	滑石	茶灰色	○	(12.1)	5.4	2.7	(228.0)	2.5	8.0	34-080	弥生後期終末	一部欠損、溝端部磨耗	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
193	ⅡB-1	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅡB-1	SC44	滑石	茶灰色	○	6.4	3.3	1.9	65.4	1.0		23-79	弥生後期終末		福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
194	Ⅵ類	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	Ⅵ類	SN39	滑石	茶灰色	○	(6.2)	(3.3)	(1.7)	(248.5)		6.0	23-80	弥生中期後半	Ⅵ類の加工上、削孔が現る	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
195	ⅡB-1	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅡB-1	3区B-1	滑石	茶灰色	○	6.7	3.5	(1.9)	54.1	9.0		242-1	古墳前期	若干欠損、溝から使用痕著	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
196	ⅡB-1	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅡB-1	98号住居跡上面	滑石	茶灰色	○	(10.6)	4.7	2.2	(185.5)	0.5		242-2	古墳前期中葉	下部欠損、面をなして整形	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
197	ⅢA-3	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅢA-3	Ⅰ区東部張区	滑石	茶灰色	○	4.8	3.5	3.0	70.3	2.5	0.5	242-3	古墳時代前期	溝は使用痕あり、側面に磨耗	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
198	ⅡA-3	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅡA-3	74-75号住居跡	滑石	茶灰色	○	5.7	1.6	1.4	19.8	1.5		242-4	古墳前期中葉	先端部ごく一部欠損	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
199	ⅢB-3	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅢB-3	119号住居跡	滑石	茶灰色	○	3.6	2.7	(2.2)	(26.4)	2.5	2.0	242-5	古墳前期前半	裏面未加工、未使用か	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
200	ⅡB-3	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅡB-3	93号住居跡覆土	滑石	茶灰色	○	6.6	4.1	3.4	97.6	3.0	1.5	242-6	古墳前期前半	下当部は加工せず使用か、全体 的に磨耗	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
201	ⅡB-3	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅡB-3	144号住居跡 付近遺構面	滑石	茶灰色	○	(10.1)	4.0	2.0	(159.5)	1.5	4.0	242-7	古墳前期中葉	下部欠損、たまたま使用か、溝端部 少ない、縦断面くの字状	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
202	ⅢA-3	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅢA-3	3南3区遺構面	滑石	茶灰色	○	8.9	5.5	3.7	224.7	5.0	3.0	242-8	古墳時代前期	溝端部、このまま使用か	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
203	ⅢB-3	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅢB-3	119号住居跡	滑石	茶灰色	○	4.8	4.0	2.0	60.6	1.5	1.1	242-9	古墳前期前半	長軸部2、短軸部1、裏面短軸部一 部磨滅のみ、溝端部、一部自然面 のまま	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
204	ⅡA-2	西新町遺跡第8次	福岡市早良区	ⅡA-2	43号住居跡	滑石	茶灰色	○	8.0	3.6	2.8	107.9	1.5		242-10	古墳前期中葉	自然石に短軸溝を刻み、短軸部3 本製品で、下部部破石に転用か、 短軸部1面のみ、孔は未貫通、上半 部磨滅	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
205	ⅠA-2	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅠA-2	3中3区散乱	砂岩	茶灰色	○	10.1	3.8	3.8	156.0	4.0		242-11	古墳前期	中央断面が半円形、あまり使用して いないが、側面加工	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
206	ⅤA	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅤA	3区中3区散乱	滑石	茶灰色	○	11.8	1.4	0.8	19.3			242-12	古墳前期		福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
207	ⅤA	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅤA	125号住居跡	粘板岩	茶灰色	○	(9.9)	1.6	0.8	(19.7)			242-13	古墳前期前半	上下突起欠損、側面加工	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
208	ⅤA	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅤA	4号住居跡	滑石	茶灰色	○	7.8	1.4	0.9	12.6			242-14	古墳前期中葉	若干使用か、加工痕顕著	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
209	ⅠA-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅠA-1	43号住居跡上面	滑石	茶灰色	○	11.5	3.9	2.5	170.8		6.5	242-15	古墳前期中葉	上下孔のみ、側面と下面以外磨 耗、孔は使用痕と下 部磨滅	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
210	ⅤC類A	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅤC類A	154号住居跡	滑石	茶灰色	○	(1.9)	(0.8)	(1.0)	(2.4)		(3.0)	242-16	古墳前期中葉	大きく欠損、丁寧に研磨、孔は使用 痕あり	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
211	ⅤC類	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅤC類	21号住居跡	滑石	茶灰色	○	6.9	1.7	0.7	22.4		3.0	242-17	古墳前期中葉	下部欠損後も利用か	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
212	ⅠA-1-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅠA-1-1	144号住居跡 付近	滑石	茶灰色	○	7.4	3.9	2.9	126.1	3.5	7.0	242-18	古墳前期中葉	顕著な使用、全体的に磨滅	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
213	ⅠA-2-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅠA-2-1	19号住居跡	緑色片岩	茶灰色	○	6.2	4.3	3.5	114.7	3.0	4.5	242-19	古墳前期前半	磨滅少ない	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
214	ⅠA-1-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅠA-1-1	29,30号住居跡付 近遺構面	滑石	茶灰色	○	9.8	3.8	3.0	175.3	2.0	5.5	242-20	古墳前期中葉	溝使用少ない	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
215	ⅠC-1-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅠC-1-1	30号住居跡	粘板岩	茶灰色	○	10.2	2.7	2.3	105.9		5.0	242-21	古墳前期中葉	溝使用少ない	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
216	ⅠB-1-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅠB-1-1	139号住居跡	細粒砂岩	茶灰色	○	12.1	4.2	3.0	178.0	2.0	6.0	242-22	古墳前期中葉	孔には使用痕	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
217	ⅠB-2-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅠB-2-1	72号住居跡 覆土上面	砂岩	茶灰色	○	11.9	3.8	3.4	186.8	3.0	1.5	243-23	古墳前期中葉	顕著な使用、全体的に磨滅	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
218	ⅠA-1-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅠA-1-1	166号住居跡	凝灰質黄泥 岩	茶灰色	○	12.7	4.0	3.0	274.3	2.0	3.0	243-24	弥生後期終末	1孔未貫通、底石の転用品、下部部 磨滅的に加工、使用少ない	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
219	ⅡB-3-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅡB-3-1	43号住居跡 検出面	滑石	茶灰色	○	(6.2)	5.0	(1.0)	(35.8)	4.0	4.0	243-25	古墳前期中葉	下部部、裏面欠損	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
220	ⅡB-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅡB-1	64号住居跡 覆土上面	滑石	茶灰色	○	(2.6)	3.9	(1.5)	(23.8)	5.0		243-26	古墳前期中葉	大きく欠損	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
221	ⅡB-1-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅡB-1-1	43号住居跡	滑石	茶灰色	○	11.4	5.2	2.5	228.8	9.0	4.0	243-27	古墳前期中葉	Ⅲ377図8と同一体、表面磨耗し、 研磨痕み文字、溝はシャープではな く、孔には使用痕	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
222	ⅡB-1-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅡB-1-1	43号住居跡 付近遺構面	滑石	茶灰色	○	10.4	5.0	3.3	239.4	8.0	4.5	243-28	古墳前期中葉	2孔未貫通、3孔貫通、溝には工具 痕みあり、体部の磨滅は少なく、本 来の形状に近い	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				
223	ⅡB-1-1	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	ⅡB-1-1	43号住居跡 検出面	滑石	茶灰色	○	9.3	3.9	1.7	102.9	4.5	5.0	243-29	古墳前期中葉	両面とも顕著な使用により、溝の取 りかた異なる	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集				

第5表 九州型石錘一覽表⑥

遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	石材		加工状況	法量			溝幅		孔径			時期(下段)	備考	文献
							色調	色別		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	糸軸の溝幅(mm)	1番上の孔径(mm)	上の2番目の孔径(mm)	上の3番目の孔径(mm)			
福岡県教育委員会『西新町遺跡Ⅰ』福岡県埋蔵文化財調査報告書第154集	224	西新町遺跡第12次	福岡市早良区	II B-1-a ⅴ類	50号住居跡	滑石	灰白色	●	7.0	4.6	(1.2)	46.4	3.5	7.0	5.0	243-30	表面大きく割傷 下部欠損、側面に長軸溝、中央に溝、孔には使用痕	福岡県教育委員会2001『西新町遺跡Ⅰ』福岡県埋蔵文化財調査報告書第154集		
	225			II A-1-a ⅴ類	78号住居跡	滑石	灰白色	●	2.5	1.6	1.3	(6.9)	2.0	(4.5)	243-31	研磨途中				
	226			II 類? 未製品	1号住居跡 覆土層	滑石	灰白色	○	8.3	3.9	3.1	156.8			243-32	ケズリ後に研磨途中				
	227			II B類未製品	119号住居跡	滑石	暗赤色 と、深い溝痕	○	4.1	4.8	3.3	108.9			243-33	加工痕顕著				
	228			II 類未製品	119号住居跡	滑石	と、深い溝痕	○	11.4	4.8	3.6	295.7			243-34	面加工、一部研磨中				
	229			ⅴ類未製品	3北1区遺構面	細粒砂岩	色	○	4.9	1.4	1.2	(9.8)			243-35	面加工、一部研磨中				
	230			ⅴ類未製品	95号住居跡	細粒砂岩	と、深い溝痕	○	6.5	1.4	1.3	14.5			243-36	面加工、一部研磨中				
	231			II B-1類	17号土坑	頁岩	灰色	●	7.0	3.3	(1.8)	(69.7)	8.0		377-1	表面欠損、敲打による陥凹、穴縁のため、未使用か				
	232			II B-3類	3区遺構面	滑石	赤灰色～灰オリーブ色	●	6.2	5.2	2.4	97.1	3.0	1.0	377-2	滑石の質悪い、溝あまり磨滅して、孔には使用痕				
	233			III B-3類	3区遺構面	滑石	灰色～赤灰色	○	7.5	8.0	3.6	169.8	3.0	1.0	377-3	表面研磨、裏面敲打痕が残る、溝には使用痕、補助用道具の可能性、下部欠損、孔には使用痕、非常に丁寧な研磨				
	234			II B-3類	3区北1区遺構面	滑石	灰黄色	○	14.8	4.1	3.7	330.1	6.0	5.0	377-4	長軸溝も、短軸溝も、意図的に加工痕を残した可能性、断面人角形をなす、溝あまり使用していない				
	235			III B-2類	3区南控強区遺構面	滑石	灰色	●	10.3	6.0	4.0	398.2	4.0		377-5	表面研磨、裏面敲打痕が残る、溝には使用痕、補助用道具の可能性、下部欠損、孔には使用痕、非常に丁寧な研磨				
	236			I 類小	3区南控強区遺構面	頁岩	灰白色	●	(4.1)	5.3	3.0	(103.6)			377-6	自然石を一部面加工、未製品				
	237			ⅴ類未製品	3区南1区遺構面	細粒砂岩	灰オリーブ色	●	5.5	1.5	1.0	13.6			377-9	短軸溝、裏面あまり加工せず				
	238			ⅴ A類	112号住居跡	滑石	灰オリーブ色～黒色	●	9.5	3.2	1.7	85.6	2.5	2.0	377-14	短軸溝、裏面あまり加工せず				
	239			II B類小	2号住居跡	滑石	灰白色	●	(6.8)	(3.6)	(2.0)	(67.9)	10.0		188-1	大きく欠損、溝加工痕あり、未使用品か				
	240			III B-1類	25号住居跡	滑石	灰色	○	9.7	6.0	3.1	254.1	1.5		188-2	表面ほぼ面加工、溝のみ面溝で、裏面に溝、短軸溝は顕著に磨滅、孔径3mmの未貫通の孔あり				
	241			III A-3類	25号住居跡	滑石	灰白色	○	9.4	5.1	3.6	291.4	5.0	3.0	188-3	先端部欠損、孔使用痕あり				
	242			II B-2-a ⅴ類	50号住居跡	滑石	灰色	●	4.9	1.4	1.2	13.2	2.5	1.0	188-4	表面丁寧な研磨				
	243			II B-a ⅴ類	59号住居跡	砂岩	オリーブ黄色		(5.3)	2.5	1.6	(21.6)			188-5	表面未加工				
244	ⅴ類未製品	2号住居跡	滑石	灰色	●	8.0	2.5	2.3	90.9			188-6								
245	ⅴ類未製品	78・79号住居跡 土層	滑石	明暗灰色		7.0	2.3	1.2	34.2			188-7								
246	II A-1-a ⅴ類	17号住居跡	土製品	明暗灰色～明暗灰色		5.5	2.4	2.4	31.7	2.0		194-1								
247	ⅴ類未製品	18号住居跡	滑石	●	6.0	2.0	1.5	30.0			106-1	未製品								
248	I 類未製品	19号住居跡	硬質砂岩		5.5	4.0	2.7	73.3			106-2	上面は自然面のまま使用か、外面の加工痕顕著、孔には使用痕あり								
249	II A-2-a ⅴ類	排土	滑石	灰白色		(4.3)	2.9	2.1	30.0	2.5		106-3	割れ口にも穿孔痕、割れただけ、片側穿孔し転倒しやすがるか、回転時孔痕が浅いため、未使用品か							
250	II 類未製品小	23号住居跡	滑石	赤灰色	○	6.5	3.0	2.0	57.9			106-4	再加工品か、上下に元の溝らしきものが残るもの、再加工品としては深は磨滅していない、磨滅痕あり							
251	ⅴ C類	4号住居跡	細粒砂岩	緑灰色	●	7.7	1.0	1.8	17.9			106-5	全体的に散粒状か、表面には線状痕があり、粗い凹跡、下面は多量加工、硬質砂岩、孔には使用痕							
252	II A-2-a ⅴ類	8号住居跡	砂岩	褐色	●	11.9	3.7	3.7	207.5	1.5		106-6	半分欠損、穴縁面研磨のため再加工か、主孔・副孔とも顕著な磨耗							
253	ⅴ B-1類	包含層	滑石	灰色～赤灰色	●	10.3		7.3	(556.5)			106-9								
254	III B-1類	1区包含層	滑石	●	2.8	1.7	1.1			1.5		19-44	弥生中期後半							
255	III A-3類	1区包含層	滑石	●	2.6	1.2	1.0	2.5		2.5		19-45	弥生中期後半							
256	III A-3類	1区包含層	滑石	●	5.4	3.2	2.5			1.5		19-46	弥生中期後半							
257	III A-a ⅴ類	1区包含層	滑石	●	(6.2)	(4.2)	(3.1)				4.0		19-49	半分程度欠損、孔内の回転痕顕著						
258	III 類未製品	2区SCO18	滑石	●	5.2	2.4	1.9						34-93	先端部欠損						
259	III C類	2区SX019	滑石	●	12.9	12.9	8.1				34.0		34-96	後部初期						
260	ⅴ C類	2号住居跡 覆土中部	シルト岩	暗オリーブ灰色	●	6.3	1.1	0.6	7.2			149-1	● 2号住居跡で、裏面破損した後も使用、表面加工痕よく残る、孔の回転痕からあまり使用していない							
261	II 類未製品	5号住居跡覆土	砂岩	灰白色～赤灰色	○	9.3	3.7	3.4	130.7			149-2	加工痕顕著							
262	I 類小 II類	6号住居跡覆土	滑石	●	(7.2)	3.0	2.7	(144.5)			6.0	5.0	149-3	● 2号、上下欠損、未使用品か						

第5表 九州型石鏝一覧表①

遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類		加工状況	法量			溝幅			挿入3階目の孔径(mm)	挿入2階目の孔径(mm)	挿入1階目の孔径(mm)	重量(g)	長軸の溝幅(mm)	短軸の溝幅(mm)	時期(下限)	備考	文献	
						色調	形状		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)										
49	263	西新町遺跡第17次	福岡市早良区	I B類未製品	7号住居跡	滑石	灰白色	○	4.9	5.4	3.5	100.5			149-4						古墳前前前	面加工	福岡県教育委員会調査報告書第208集 文化財調査報告書第208集	
	264			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	(7.7)	5.0	2.0	(126.6)	7.0	3.5	3.0	2.5	149-5					古墳前前前	穿孔3、上部欠損、孔・溝使用痕跡あり	
	265			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	10.8	3.9	2.0	128.3	5.5	4.0	5.0	5.5	149-6					古墳前前前	穿孔3、頭蓋不使用により、溝の彫りなくなど、削れたま使用か。	
	266			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	8.0	5.4	2.4	143.9	6.0	4.0	5.5		149-7					古墳前前前	穿孔2、溝・孔頭蓋に磨耗	
	267			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	9.7	4.7	2.3	142.9		5.5	4.0		149-8					古墳前前前	穿孔2、自然石に穿孔のみしたものの、孔は磨耗	
	268			II B-3類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	8.8	4.2	2.5	156.1	3.0	1.0			149-9					古墳前前前	短軸溝は全周しない、溝シャープ、一部磨減	
	269			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	10.4	4.2	2.3	134.3	7.0	3.0	4.0	5.0	149-10					古墳前前前	穿孔3、一部欠損、溝・孔・片面磨減	
	270			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	(9.4)	4.3	(1.1)	(66.6)	6.5	3.0	3.5		149-11					古墳前前前	穿孔2、裏面欠損、孔・溝磨耗	
	271			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	8.8	4.9	2.4	(142.7)	6.5	4.0	4.0	4.0	150-12					古墳前前前	穿孔3、孔未貫通分、一部欠損、表面磨耗	
	272			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰色～灰白色	●	13.2	4.8	2.7	254.0	3.0	4.0	4.0	4.0	150-13					古墳前前前	穿孔3、裏面磨耗、溝・孔磨耗	
	273			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	9.7	4.8	2.9	168.7	6.5	3.0	4.5	3.0	150-14					古墳前前前	穿孔3、一面頭蓋に磨耗か、孔・溝磨耗	
	274			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	(6.5)	4.2	2.4	(101.1)	8.0	3.0	3.0	3.0	150-15					古墳前前前	穿孔3、孔未貫通、下半部欠損、孔・溝磨耗	
	275			II B-1-1類	7号住居跡	滑石	灰白色	●	10.3	4.8	2.7	(175.0)	6.0	4.0	5.0	5.0	150-16					古墳前前前	穿孔3、孔未貫通、片面磨耗、孔は磨耗	
	276			II B-1-1類	8号住居跡床面	滑石	黄緑灰色	○	(8.0)	4.9	2.6	(148.2)	7.0	5.5			150-17					古墳前前前	穿孔2、使用による裏面割離	
	277			II B-1-1類	9号住居跡覆土上面	滑石	灰白色	○	10.6	5.9	2.7	(248.2)	9.0	6.5	5.5		150-18					古墳前前前	穿孔2、孔・溝は磨耗	
	278			v C類小	13号住居跡覆土上面	シロト岩	黒色	●	(4.2)	1.4	1.3	(10.5)		2.0			150-19					古墳前前前	穿孔1、下半部欠損	
	279			I B類未製品	25号住居跡覆土上面	滑石	に白い赤褐色	●	8.0	2.7	1.6	40.3		4.0			150-20					古墳前前前	未貫通の孔	
	280			v 類未製品小	32号住居跡床面下部	シロト岩	黒色	○	4.5	1.6	1.4	14.6					150-21					古墳前前前	加工痕跡あり	
	281			II A-1-1類	溝14	砂岩	灰黄色	●	(6.5)	3.8	3.7	(98.5)	2.5	6.5	6.0		150-22					古墳前前前	穿孔2、半分欠損、孔は磨耗	
	282			II B-3類	SK10	滑石		○	10.4	4.3	3.8		4.0	2.5			3-22					弥生後前		福岡県教育委員会調査報告書第105集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集
	283			II B-1類	SK18	滑石			14.0	14.0	6.0			20.0	4.0		3-21					弥生中前		
	284			II A-1類		滑石			3.4	1.4	1.2		0.4				17-161					弥生中前		
	285			II A-3類		滑石		○	3.9	1.2	1.3		2.0	3.0			19-179					弥生中前		
	286			II 類未製品		滑石			3.9	1.5	1.0						19-180					弥生中前		
	287			V A-1類		滑石		●	(3.0)	(2.6)	(1.6)	(22.0)	3.0	2.0			15-7					古墳前前中	大きく欠損、突起部に溝を長軸と短軸に並らす	
	288			I B類未製品		滑石		○	4.5	2.2	1.8	27.0					15-8					古墳前前中		
	289			VI-1類小		滑石			(3.7)	(1.7)	1.4			8.0			15-9					古墳前前小	破片、VI類ではない可能性	
	290			VI-1類小		滑石			(6.3)	(5.6)	(0.8)			5.0			15-10					古墳前前小	破片、VI類ではない可能性	
	291			V A類		滑石		●	11.1	2.3	2.0	70.9	2.5				33-4					弥生後前	高軸に突起、溝あまり使用していない、側面一部自然面	
	292			VI C類		緑泥片岩		●	12.6	6.8	5.3	673.0					33-5					弥生後前	短軸側に若干打欠と磨り丸痕、長軸一方のみ打欠	
293	I A-1-6類	第10号住居址	凝灰岩			9.9	5.0	4.1	220.0	1.0	7.0			10-4					弥生後前	土塊平面、上溝途中で終了				
294	II B-1類	有田 西新町中学校所蔵品	滑石		○	19.4	19.4	10.0	5,800.0		30.0	8.0		2-5					超大型品、表面には入痕跡あり					
295	I B-1-1類	有田 藤野第15次	II区黒褐色土 包含層	滑石		8.5	3.0	2.5		2.0	2.0	5.0		17-41					古墳前前前		福岡県教育委員会調査報告書第71集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集			
296	I B-6類	有田 藤野第33次	II区包含層	土塊		10.7	6.3	2.9		9.0				17-41					弥生中前	土塊				
297	II B-2類	有田 藤野第64次	住10	凝灰岩		(6.1)	3.1	2.0		1.5				31-041					古墳前前	下部欠損				
298	I A-1-1類	有田 藤野第64次	住18	滑石		9.9	4.2	3.8	(200.0)	3.5	4.5	6.0		122-139					弥生後前					
299	I B-4類	有田 藤野第124次	SC08	土塊		(5.5)	3.4	3.4		5.0	6.0			15-104					古墳後前	土塊、先端部欠損				
300	II A-1類	有田 藤野第116次	ビツ内	滑石		3.8	1.2	1.1		2.0				52-36					弥生中前					
301	II A-3類	所蔵品	V区	滑石		9.2	3.5	3.2	120.0	1.0	1.0			99-8					古墳前前	直軸6条、短軸1条磨減、上下端部欠損				
302	I B-3-1類	有田 藤野第35次	V区2号溝	滑石		10.6	3.5	3.1	170.0	2.0	6.5	6.5		99-9					古墳前前	先端部欠損				
303	II A-3類	有田 藤野第11次	SK103	滑石		(11.3)	5.2	4.0	(427.0)	4.0	2.0			19-16					弥生後前	長軸1、短軸2、先端部欠損				

第5表 九州型石錘一覽表⑧

遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工状況	寸法			重量(㎏)	溝幅		孔径		挿固番号	時期(下限)	備考	文献					
									長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)		長軸の溝幅(㎜)	短軸の溝幅(㎜)	1層上の孔径(㎜)	上から2層目の孔径(㎜)									
54	304	鹿野D遺跡	福岡市早良区	IIA-3類	7区SD273	滑石			○	6.6	2.0	1.2	25.2	1.0	0.8			58-300	古墳後期中葉	長軸・短軸各1条のみ	福岡市教育委員会1995「蘇我の遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第440集				
	305			IIA-3類	19区SC935	777/4石岩(硬質)			○	6.9	1.9	1.9	31.6	1.0	1.5			33-338	古墳後期中葉						
	306			IIA-3類	8区SC060-2	777/4石岩(軟質)	床面上			○	5.6	1.4	1.2	15.0	1.0	7.0			33-339	弥生後期後半		鉄器が付着			
	55	307	鹿野D遺跡	福岡市早良区	VA類	第5地点					6.8	2.4	1.9	64.0	2.5				89-044	古墳前期前半か?		福岡市教育委員会1987「田村遺跡Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集			
		308			IA-1-砂類	SD-019	蛭石				7.5	4.9	3.5	86.5		8.0			41-232	8C前半、混入少、古墳前期中	蛭石製、IA類に似せる、横方向に縦の穴痕				
		309	IA-1-砂類	SD-2010	滑石				10.5	5.2	3.0	216.5	2.0	5.0			56-63	古墳前期前半	扁平な石材、厚みなし						
		310	VB-1類	住居跡					○	12.0	12.0	8.0	1,820.0		23			2-2	1935年出土、九州大学所蔵	藤川通也1979「岩塚遺跡有孔滑石製品」『考古学雑誌』99(2)巻99号					
		311	VA-1類	IKSC023	滑石					(9.0)	1.9	1.8	41.0	1.0				10-21	古墳前期前半	断面鏡削、鉄器によるクズ刃	福岡市教育委員会1996「陸奥国野宮2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集				
		312		IKSC025	滑石	未製品					(4.1)	1.4						12-25	古墳前期後半	半分欠損					
		313	II B-3類	IKSC083	滑石				○	12.5	4.6	3.7	369.0	6.0	5.0			15-43	古墳前期前半	溝には鉄器使用					
		314	II B-3類	IKSC083	滑石					11.0	4.0	2.3	185.0	3.5	2.5			15-44	古代前期前半	使用による磨滅					
		315	II B-3類	IKSC083	滑石					9.2	3.8	2.1	129.0		5.5			15-45	古墳前期前半	溝では欠、端部を切込む、剥離痕跡そのまま					
		316	VB類	IKSC105	滑石					(10.4)		(5.5)			55.0			24-94	弥生後期前半	3/4欠損					
	317	II B-3類	IKSC082	滑石					10.6	4.2	3.6	249.0	5.0	4.0			26-97	古墳前期後半	使用による磨滅						
	58	318	鹿野遺跡第3次	福岡市早良区	II B-3-砂類	II区SK094	滑石		○	14.5	8.2	3.5	(524.0)	13.0	14.0			30-105	弥生中期初頭	溝に紐痕も痕み、未使用品か、大型、形川氏が石神の瓦子として例示	福岡市教育委員会2009「陸奥国野宮3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集				
		319			II B-1類	II区SK073	滑石				8.0	2.9	2.2	(93.0)	1.5				40-144	弥生中期前半		断面方形、下半部欠損			
		320			II B-1類	近世以降の遺構					○	6.0	5.0	2.0	82.7	6.0				52-285			民俗例のカナギ網石類と類似		
321		II B-1類			近世以降の遺構					○	6.9	5.5	2.5	160.3	7.5				52-286			民俗例のカナギ網石類と類似			
322		II B-1類			近世以降の遺構						6.0	2.5	3.1	43.5	5.0				52-287			285・286の使用によりこのよみか形になるのか			
323		II B-1類			近世以降の遺構						4.8	2.6	2.1	46.8	6.0				52-288			285・286の使用によりこのよみか形になるのか			
324		II B-3-砂類			近世以降の遺構						10.2	8.4	(2.2)		16.0	12.0			52-289			裏面欠損、未製品孔1、未製品			
325		II B-3類			近世以降の遺構						6.7	2.1	2.1	65.8	1.5				52-290			溝が長軸と側面の2面に各1条			
326		II A-2類			SK-04 繪出面	砂岩					8.0	5.1	3.7	194.4	12.0				17-83	弥生後期前半		半分の欠損			
327		II A-1類			SK-04	滑石					6.6	3.0	3.0	79.2	3.0				17-85	弥生後期前半					
328		II A-1類			SK-04	滑石					6.0	2.8	2.4	58.4	3.0				17-86	弥生後期前半					
329		II A-1類			SK-04	山原石					4.6	1.3	1.0	8.4	2.0				17-87	弥生後期前半					
330		II B-1類			SK-04	滑石					2.6	1.4	(0.9)	4.9	2.0				17-88	弥生後期前半					
331		II A-1類			SK-04	滑石					3.0	1.8	1.8	10.3	2.0				17-89	弥生後期前半		長軸溝が直線ではない			
332		II A-1類			SK-08	砂岩					3.1	1.4	1.7	9.3	3.0				19-98	弥生後期前半		一部欠損			
59		333			宮の前遺跡 A-D地点	福岡市早良区	IA-V類	B地点 竪穴外	乾砂岩		●	10.8	5.1	4.3			4.5	5.0				8	古墳前期前半	一部欠損、上孔は上平垣面とく(1)の部欠損、下孔は上平垣面とく(1)の部欠損	福岡市教育委員会1970「宮の前遺跡Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第161集
		334					II B-3類	C-01表面	滑石		○	10.5	4.5	2.5	169.5	5.0	4.0					14	弥生後期終末～古墳前期前半		
	335	IA-V類	江戸層褐色土層	滑石						●	10.7	3.6	3.5	292.0	3.5				26-3	弥生後期終末～古墳前期前半	底部に加工痕意図的				
	336	IC-V類	江戸層褐色土層	滑石						●	(9.2)	3.9	3.1	(142.0)		3.5			26-4	弥生後期終末～古墳前期前半	上半部欠損				
	337	II A-1-砂類	江戸層褐色土層	乾砂岩						●	7.5	4.1	4.0	162.0	2.5	6.0			26-5	弥生後期終末～古墳前期前半	中央に1孔				
	338	II A-1-砂類	江戸層褐色土層	滑石							(3.1)	1.8	1.5	(9.0)	2.0	2.5			26-6	弥生後期終末～古墳前期前半	未製品、下半部欠損、中央孔は穿北途中				
	339	II A-1類	D地点	乾砂岩							(2.7)	1.2	1.2	(6.5)	2.0				26-7	弥生後期前半	上下欠損				
	340	II A-3類	EH6・47	滑石			緑灰色			●	5.0	1.5	1.2	(16.0)	1.5	2.5			10-2	弥生後期か?	下部欠損、全体に磨滅				
	341	I B-3-砂類	E・EG-49	滑石			明青灰色～青灰色			●	9.0	4.8	3.8	235.4	3.0	1.0	7.0		11-4	古墳前期前半	一部欠損、全体・溝は使用による磨滅、痕跡は浅い				
	342	IA-3-砂類	E・EG-49	滑石			灰カサ色			●	10.7	5.2	4.4	290.4	3.0	1.5			11-5	古墳前期前半	表面のみ未貫通孔、重心不安定のため、磨滅				
	343	I-1類か	EL-49	滑石			明青灰色			●	(3.0)	(2.7)	(1.3)	(22.0)	3.5				16-3	弥生後期後半	欠損、丁寧に研磨				
	344	V C-2-V類	EH-EN-58	頁岩			明青灰色			●	5.0	1.8	1.1	14.1	1.0	3.5			21-2	弥生後期後半	両孔に凹痕痕み、継ぎ合わせ、側面のみ加工・研磨				

第5表 九州型石錘一覽表⑨

遺跡番号	個別番号	遺跡名	甲種名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工状況	法量			清幅			孔径			挿入番号	時期(下限)	備考	文献
									長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	長軸の清幅(mm)	短軸の清幅(mm)	1番上の孔径(mm)	上から2番目の孔径(mm)	上から3番目の孔径(mm)				
59	345	宮の南遺跡地点 福岡市西区	福岡市西区	I B-1-a類	EH~EN-58 アリッド	滑石	こがみ黄緑色	●	9.7	5.2	3.3	279.3	8.0	4.0	5.5	7.0	21-3	弥生後期後半	長軸部に孔、うち1孔は十字溝、全体の磨減、使用によるものか、溝内土粒の混入	福岡市教育委員会委員1971年宮の南遺跡調査報告書第1集 埋蔵文化財調査報告書第1集	
	346								6.3	3.6	2.3	(55.5)	2.5	(8.0)		21-4	弥生後期後半	大きく欠損、未製品か			
	347								5.4	1.5	1.2	(18.0)	1.0			21-5	弥生後期後半				
	348								17.2	13.4	8.0	2,402.5		24.0		22-1	弥生後期後半	側面は縦方向磨減、下面は風化がなため、割つたものか、両面・孔ともに磨減するため使用品、紐掛け痕あり			
	349								14.1	11.0	5.6	1,076.0	18.0			22-2	弥生後期後半	孔は方形、粗削後に穿孔、そのまま磨減、磨減がため未使用			
	350								3.9	1.4	1.1	7.5	2.0			5-2	弥生後期後半	中央に1孔			
	351								(7.0)	4.1	2.3	(60.0)				5-3	弥生後期後半	下半部欠損後に再使用			
	352								(9.8)	(9.8)	5.1	(2,000.0)	20.0	10.0		5-4	弥生後期後半	半分欠損			
	353								(4.0)	3.5	1.1					9-2	弥生後期後半	未製品			
	354								9.9	5.0	4.5	384.0	4.0	7.0		125-1	古墳前期か	上孔はくぐりの形状に上端に曲がる、下孔はくぐりの形状に上端に曲がる、下孔はくぐりの形状に上端に曲がる、下孔はくぐりの形状に上端に曲がる			
	355								10.0	5.0	4.5	329.8	3.0	6.5		125-2	古墳前期か	上孔はくぐりの形状に上端に曲がる、下孔はくぐりの形状に上端に曲がる、下孔はくぐりの形状に上端に曲がる、下孔はくぐりの形状に上端に曲がる			
	356								8.0	5.5	5.4	334.8	3.0	6.0		125-3	古墳前期か	上孔はくぐりの形状に上端に曲がる、下孔はくぐりの形状に上端に曲がる、下孔はくぐりの形状に上端に曲がる、下孔はくぐりの形状に上端に曲がる			
	357								(9.0)	4.8	4.0	(230.1)	4.5	6.5		125-4	古墳前期か	追加品、各体的に磨減、欠損、破断、頭部が使用痕			
	358								(11.0)	(6.0)	(4.7)	(447.9)	18.0			125-5	古墳前期か	再加工品、使用時に半分に分かれたもの			
	359								10.8	4.5	3.5	261.1	2.0	2.0		126-1	古墳前期か	顕著な使用による磨減			
	360								6.1	1.9	1.9	27.3	1.0	1.0		126-2	古墳前期か	磨減あり			
	361								3.2	1.7	1.4	10.6	1.5	1.5		126-3	古墳前期か	一部欠損			
	362								(6.5)	1.8	1.9	18.4	2.5			126-4	古墳前期か	断面方形に磨減、溝も方形、深い、使用による磨減			
	363								4.5	2.0	1.8	22.6	1.5			126-5	古墳前期か	使用による磨減			
	364								4.5	1.9	2.1	18.9	1.5			126-6	古墳前期か	使用による磨減			
	365								3.5	1.3	0.9	5.6	1.0			126-7	古墳前期か	使用による磨減			
	366								(4.2)	1.6	1.1	(12.1)	1.0			126-8	古墳前期か	下半部欠損、顕著な磨減			
	367								(4.2)	2.0	1.5		1.0			126-9	古墳前期か	上半部欠損			
	368								3.7	2.1	0.9	(8.9)	1.5	6.0		126-10	古墳前期か	中央に1孔、裏面欠損			
	369								2.8	1.4	1.4	8.4				126-11	古墳前期か	未製品			
	370								4.0	3.1	2.5	44.3	3.5			126-12	古墳前期か	粗加工			
	371								7.0	3.5	(2.2)	(83.3)	5.0			126-13	古墳前期か	半分欠損、自然石に磨減			
	372								8.3	3.6	3.3	142.2	3.0	5.5		126-14	古墳前期か	孔・表面は磨減			
	373								16.5	(6.6)	11.6					127	古墳前期か	半分以上欠損、研磨痕顕著			
	374								8.2	4.0	2.4	134.8	1.0	4.0		128-10002	弥生後期後半				
	375								7.1	3.5	2.4	2.0	2.0	3.0		128-10001	古墳前期前半				
	376								8.0	3.5	2.2		1.0	2.0		22-10002	古墳前期前半	下孔は側面を貫通			
	377								9.3	4.4	4.0	4.0	4.0	2.5		22-10003	古墳前期前半	上孔は未貫通か、孔は十字に貫通			
	378								8.2	1.6			1.0			27-10009	弥生後期後半～終末	中央に短軸溝			
	379								12.6	4.8		4.0	4.0	4.0		27-10010	弥生後期後半～終末	下側部のみ加工痕、意図的か			
380	5.8	5.0		2.0	2.0	4.0		27-10011	弥生後期後半～終末												
381	14.0	14.0	9.4			20.0		27-10012	弥生後期後半～終末	1/3欠損、ケズリ痕顕著											
382	8.4	3.2	2.6			4.0		27-10013	弥生後期後半～終末	1B類でも長い、再加工品か											
383	8.6	4.8	3.6					27-10014	弥生後期後半～終末	未製品											

第5表 九州型石錘一覽表⑩



遺跡 番号	遺跡番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	石材		加工 状況	法量			溝幅		孔径			構図 番号	時期(下段)	備考	文献
							色調	種類		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	長さ(m)	幅(m)	重量(kg)	長軸の溝幅 (mm)	短軸の溝幅 (mm)				
77	425	榑木遺跡 今宿五郎江遺跡 第1次	福岡市西区	II A-3類	P5309	頁岩					(2.7)	1.4	1.4	1.5	1.5	26-10	弥生後期後半か?	半分以上欠損	福岡市教育委員会1987年榑木遺跡調査報告書第169集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集		
	426			表土	片岩		11.6	11.9	4.4					28.0		27-19	弥生後期後半か?	欠損1.3cm			
	427			表土	滑石?		18.2	18.5	8.5					38.0	4.5	27-20	弥生後期後半か?				
	428			II B-1-砂類	溝溝 II層	滑石		(5.2)	3.9	3.6				(110.0)	4.0	39-1	弥生後期前半~中葉	上半部欠損			
	429			I 類小	溝溝 II層	滑石		(11.5)	4.6	2.9+a				(220.0)	4.0	39-2	弥生後期前半~中葉	後半分欠損、I B層底部を削り加工、 欠損欠ける			
	430			III B-1類	溝溝 II層	滑石		14.2		6.0			(840.0)	25.0	10.0	39-3	弥生後期前半~中葉	半分欠損			
	431			VID類	表探			11.8	11.8	4.4				1,050.0	28.0	39-4					
432	II B-3類	SD-100	滑石		12.5	4.8	2.4				(195.2)	5.0	1.0	42-10044	弥生中期後半~ 後期後半	裏面一部欠損、長軸溝1、短軸溝、 多未達、両方溝とも使用	福岡市教育委員会1991年今宿五郎江遺跡 II層福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集				
433	III A-1類	SD-100	滑石		10.5	12.3	1.24				2,312.5	22.0	8.0	42-10045	弥生中期後半~ 後期後半	平面長楕円形、底面磨減少ないが、 主孔・副孔ツルツル					
434	III B類	SD-100	滑石		(11.0)	(5.9)	(4.9)				(406.6)	26.0		42-10047	弥生中期後半~ 後期後半	半分以上欠損、縦断面跡、裏面丁 彫に研磨、主孔ツルツル					
435	III A類	SD-100	滑石		10.1	(5.0)	10.5			(730.8)	15.0			42-10048	弥生中期後半~ 後期後半	半分以上欠損、表面丁寧な研磨、 上面磨減なし、主孔ツルツル					
436	III B-1類	SD-100	滑石		11.3	11.2	7.5			1,182.0	27.0	9.0		42-10056	弥生中期後半~ 後期後半	全体的に頭部が磨減、主孔・副孔ツ ルツル、下面も磨減					
437	III A-1類	SD-100	滑石		10.7	10.2	11.1			1,600.0	19.0	11.0		42-10057	弥生中期後半~ 後期後半						
438	III D-1類	SD-100	滑石		10.5	14.3	4.0			1,071.5	24.0	8.5		43-10051	弥生中期後半~ 後期後半	完形品、副孔8.5×13mmの方形、ノ ミで穿孔、表面は入痕、上面の方が ツルツル、網目関係か?					
439	III 類未製品小	SD-100	滑石		10.7	14.6	3.9			607.1				43-10052	弥生中期後半~ 後期後半	未製品であるが、突き込みから穴開で あるかは不明					
440	III C類	SD-100	滑石		16.3	16.0	5.8			1,922.0	32.0			43-10055	弥生中期後半~ 後期後半	表面幅1~3cmの突き込み痕、孔相 対する範囲が磨減、網が当たったも のが、主孔は磨減、下面も磨減					
441	III B類	SD-100	滑石		16.2	(11.5)	7.8			1,050.0	20.0			43-10046	弥生中期後半~ 後期後半	半分近く欠損					
442	III D類	SD-100	滑石		13.4	13.5	6.3			1,940.0	24.0			43-10054	弥生中期後半~ 後期後半	不純物の非常に多い、工具痕不明					
443	III D-1類小	SD-100	滑石		(11.4)	(5.4)	2.4			(246.6)	28.0	12.0		43-10053	弥生中期後半~ 後期後半	大きく欠損、側面丁寧な研磨、石維 ではほぼ可能					
444	III A-3-砂類	SD-100	粘板岩		8.1	2.6	1.8			66.0	2.5	1.5		44-10027	弥生中期後半~ 後期後半	表面磨減、先端部と下部部に粗か け磨各1					
445	III A-3類	SD-100	粘板岩		8.2	1.7	2.1			29.0	1.5	1.0		44-10028	弥生中期後半~ 後期後半	表面丁寧な磨き					
446	III A-1類	SD-100	粘板岩		5.4	2.6	1.8			36.0	1.6	0.2		44-10029	弥生中期後半~ 後期後半						
447	III A-1類	SD-100	粘板岩		4.9	2.2	1.9			25.0	1.7			44-10030	弥生中期後半~ 後期後半	横溝は作らなかつたか?					
448	III A-3類	SD-100	頁岩		4.4	1.7				14.5	2.0	1.5		44-10031	弥生中期後半~ 後期後半	西端近くに粗かけ溝、縦方向のケス リで成形、溝シャープ					
449	I B-3-砂類	SD-100	頁岩		7.5	(3.1)	(2.9)			(51.4)	2.5	1.0		44-10032	弥生中期後半~ 後期後半	半分欠損、縦方向の幅4mmのケスリ のち丁寧な研磨、溝シャープ、あまり 使用していないが、					
450	I A-1-1類	SD-100	滑石		5.8	2.8	1.8			34.8	2.0			44-10033	弥生中期後半~ 後期後半	下部部に粗かけの切込、穿孔は両 方を同時に使用して固定、上と下で 別の糸を引下げたか、					
451	II A-1-砂類	SD-100	滑石		6.9	2.6	2.2			50.0	2.5			44-10037	弥生中期後半~ 後期後半						
452	III A-1類	SD-100	滑石		4.9	2.3	2.4			33.6	1.5			44-10038	弥生中期後半~ 後期後半	全面研磨、溝に工具痕なし					
453	III B-1類	SD-100	滑石		9.2	3.7	2.7			111.3	2.5			44-10040	弥生中期後半~ 後期後半	断面三角形、溝断面細く、使用顯著 1/4残存、溝に工具痕あり、あまり使 用せず					
454	III A-1類	SD-100	粘板岩		(3.25)	1.2	0.9			(3.8)	3.5			44-10041	弥生中期後半~ 後期後半	後に石維以外に転用か					
455	III A-1類	SD-100	滑石		5.1	1.5	1.2			13.5	1.0			44-10042	弥生中期後半~ 後期後半	溝は使用顯著					
456	III A-1-砂類	SD-100	滑石		5.1	2.3	2.0			37.0	2.5			44-10043	弥生中期後半~ 後期後半	溝に使用顯著					
457	III A-1類	SD-100	粘板岩		5.4	1.3	1.2			12.7	1.0			44-10183	弥生中期後半~ 後期後半	溝に使用顯著					
458	I A-1-砂類	SD-100	滑石		10.0	5.1	4.4			317.2	1.0	7.0		45-10024	弥生中期後半~ 後期後半	先端部欠損、表面4~6mmの縦方向 の加工痕、長軸溝V字、鋭い、孔下 は使用痕なし、側面にも溝があるが 使用痕なし、孔内は磨減					
459	I A-1-砂類	SD-100	滑石		7.2	3.4	3.2			(105.7)	2.5	7.0		45-10025	弥生中期後半~ 後期後半	側溝は曳きずらされた?					

第5表 九州型石錘一覽表⑫



遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工状況	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	長軸の径(mm)	短軸の径(mm)	溝幅の径(mm)	1番上の孔の径(mm)	上から2番目の孔の径(mm)	上から3番目の孔の径(mm)	検出番号	時期(下段)	備考	文献
496	496	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	VIC類ハ	SD01 21層	滑石			(6.9)	13.5	9.5	(922.3)				21.0			10-35	弥生中期末～後期前	半分欠損	福岡市教育委員会2008年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第737集
																			23-150	弥生中期末～後期前	主孔は両面穿孔、表裏通の孔	
																			32-224	弥生中期末～後期前	半分欠損	
																			32-225	弥生中期末～後期前		
500	501	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	VIC類	溝6	滑石		●	15.6	(3.5)	32.0	(600.0)			32.0	3.0	5.0		102-5112	弥生後期末	半分欠損、断面扁平、板状素材	福岡市教育委員会2008年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第824集
																			86-2614	弥生後期ハ	主孔で上字溝	
502	502	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	VIC類	流跡449 砂層	滑石			11.0	9.8	7.1	1,270.0	1.6			10.0	7.0		86-2616	弥生後期ハ	主孔に突き刺さる工痕が残る、副孔には凹輪穿孔痕、使用により浅くなる	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集
																			15-8371	弥生後期前半～古墳前期初	上端部、先端突出部、下半部欠損、上孔直交	
503	504	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-A類	SD-427	土製品		●	(6.2)	(3.4)	(1.9)		2.0			2.5	3.0		15-8371	弥生後期前半～古墳前期初	上端部、先端突出部、下半部欠損、上孔直交	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集
																			16-6721	弥生後期前半～古墳前期初	下端部を意図的に加工	
505	505	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-B類	SD-427	砂岩		●	11.0	4.5	4.3	283.0	2.5			4.0	2.5		16-6721	弥生後期前半～古墳前期初	下端部を意図的に加工	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集
																			16-3283	弥生後期前半～古墳前期初	端部若干欠	
506	506	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-B類	SD-427	滑石		○	9.1	4.0	3.8	187.0	2.5			5.0	6.5		16-6722	弥生後期前半～古墳前期初	端部若干欠	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集
																			16-6727	弥生後期前半～古墳前期初		
507	507	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-B類	SD-427	滑石		●	6.1	3.9	3.0	117.0	2.5			5.0	4.0		16-6724	弥生後期前半～古墳前期初	表面に材質による凹凸あり	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			16-6789	弥生後期前半～古墳前期初	上端に小さな平面相面	
508	508	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-B類	SD-427	滑石		○	6.0	4.0	3.2	114.0	2.5			4.5	6.0		16-6724	弥生後期前半～古墳前期初	表面に材質による凹凸あり	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			16-6789	弥生後期前半～古墳前期初	上端に小さな平面相面	
509	509	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-B類	SD-427	変成岩?		●	5.6	3.7	3.1	108.0	3.5			7.0			16-6724	弥生後期前半～古墳前期初	表面に材質による凹凸あり	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			16-6789	弥生後期前半～古墳前期初	表面に材質による凹凸あり	
510	510	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-B類	SD-427	滑石		○	7.3	3.2	2.6	88.0	2.0			6.0			16-2103	弥生後期前半～古墳前期初	加工痕顕著	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			16-6723	弥生後期前半～古墳前期初		
511	511	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-B類	SD-427	滑石		●	8.7	3.7	3.6	176.0	3.5			4.0			16-6723	弥生後期前半～古墳前期初		福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			16-6720	弥生後期前半～古墳前期初	孔なし	
512	512	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-A類	SD-427	滑石		○	9.3	4.9	3.9		3.5			7.5			16-6720	弥生後期前半～古墳前期初	孔なし	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			16-6726	弥生後期前半～古墳前期初	下端部を若干加工	
513	513	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-A類	SD-427	安山岩ハ		○	7.6	4.6	4.1	188.0	3.5			5.0			16-6726	弥生後期前半～古墳前期初	下端部を若干加工	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			16-6729	弥生後期前半～古墳前期初	I類とII類の折衷	
514	514	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I-B類	SD-427	片岩ハ		○	6.5	2.6	2.5	63.0	2.5			5.0			16-1389	弥生後期前半～古墳前期初	端部欠損、孔なし	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			16-2317	弥生後期前半～古墳前期初	全体に粗い磨打、後彫形	
515	515	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I類木製品	SD-427	蛇紋岩			11.0	5.5	4.9	355.0				3.0			16-2317	弥生後期前半～古墳前期初	全体に粗い磨打、後彫形	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			16-6501	弥生後期前半～古墳前期初	ケズ彫形	
516	516	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I類木製品	SD-427	蛇紋岩			12.2	5.2	3.8	340.0				3.0			16-6501	弥生後期前半～古墳前期初	ケズ彫形	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-1084	弥生後期前半～古墳前期初		
517	517	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii A-3類	SD-427	滑石		○	4.7	1.6	1.3	14.0	1.5			3.0			17-1084	弥生後期前半～古墳前期初		福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-6864	弥生後期前半～古墳前期初		
518	518	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii A-1類	SD-427	滑石		○	5.0	1.1	1.0	9.0	1.5			3.0			17-6864	弥生後期前半～古墳前期初		福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-2784	弥生後期前半～古墳前期初		
519	519	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii A-1類	SD-427	滑石		○	5.4	1.4	1.3	13.0	1.5			3.0			17-2784	弥生後期前半～古墳前期初		福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-5023	弥生後期前半～古墳前期初		
520	520	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii A-1類	SD-427	滑石		○	6.7	1.8	1.7	28.0	2.0			3.0			17-5023	弥生後期前半～古墳前期初		福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-6579	弥生後期前半～古墳前期初	打ち欠き後彫形	
521	521	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii類木製品	SD-427	片岩ハ		○	7.1	2.4	1.7	43.0							17-6579	弥生後期前半～古墳前期初	打ち欠き後彫形	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-6305	弥生後期前半～古墳前期初	未製品、半分欠損、主孔は突き刺さる形、工具による穿孔、周縁を打ち欠き彫形	
522	522	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	VIC類	SD-427	蛇紋岩		●	12.6	12.6	8.1	(1,013.0)				30.0			17-6305	弥生後期前半～古墳前期初	未製品、半分欠損、主孔は突き刺さる形、工具による穿孔、周縁を打ち欠き彫形	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-6717	弥生後期前半～古墳前期初	下半部欠損	
523	523	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	VIC類	SD-427	砂岩		○	17.8	(8.3)	6.0	(1,474.0)				24.0			17-6717	弥生後期前半～古墳前期初	下半部欠損	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-6915	弥生後期前半～古墳前期初	一部欠損	
524	524	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii B-1類	SD-427	片岩?		○	4.4	2.0	(1.1)	(13.0)	1.5						17-6915	弥生後期前半～古墳前期初	表面欠損	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-6944	弥生後期前半～古墳前期初	表面欠損	
525	525	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii B-1類	SD-427	滑石		○	4.4	2.2	1.6	20.0	2.0						17-6944	弥生後期前半～古墳前期初	表面欠損	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-6914	弥生後期前半～古墳前期初		
526	526	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii A-1類	SD-427	緑色片岩		○	5.9	2.4	2.0	36.0	1.5						17-6914	弥生後期前半～古墳前期初	ケズ彫形	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-5303	弥生後期前半～古墳前期初		
527	527	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	I A-1類	SD-427	細紋質砂岩		●	8.6	5.1	4.9	235.0	4.5						17-5303	弥生後期前半～古墳前期初	ケズ彫形	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
																			17-6709	弥生後期前半～古墳前期初		
528	528	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	VIC類	SD-01(A)	滑石		○	(6.8)	(4.8)	(194.5)					26.0			17-6709	弥生後期前半～古墳前期初	2/3欠損	福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集
																			24-108	弥生後期前半		
529	529	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	VIC類	SD-01(A)	滑石		○	11.5	(3.4)	(183.1)					23.0			24-108	弥生後期前半		福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集
																			24-109	弥生後期前半		
530	530	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii B-3類	SD-01(B)	頁岩		●	6.1	1.6	1.2	15.0	1.5			1.0			27-148	弥生後期前半		福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集
																			27-149	弥生後期前半		
531	531	今宿五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	ii B-3類	SD-01(B)	滑石		●	7.1	1.7	1.5	23.3	1.0			1.0			27-148	弥生後期前半		福岡市教育委員会2007年今宿五郎江遺跡IV区福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集
																			27-149	弥生後期前半		

第5表 九州型石錘一覽表⑭

遺跡番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	溝幅(mm)	溝幅の深さ(mm)	1層上の孔径(mm)	上から2層目の孔径(mm)	上から3層目の孔径(mm)	柱頭番号	時期(下段)	備考	文献
534			II B-3 塼	SD-0(B)	蛇紋岩	暗緑灰色 10YR6/6~ 緑灰色 10YR5/4	●	(5.7)	1.7	1.3	(16.9)	1.0	1.5				27-150	弥生後期前半	上下次損	福岡市教育委員会2010『今福五郎江遺跡 福岡県文化財調査報告書第1066集』
535			IA-1-1 砂塼	SD-0(B)	滑石	灰色N4~明 カドマ灰色 2.5Y7/1	●	8.2	3.5	4.6	(173.6)	6.0	10.0				27-151	弥生後期前半	一部次損	
536			IB-1-1 砂塼	SD-0(B)	蛇紋岩	カドマ灰色 10YR7/1~ 暗緑色 7.5YR6/6	●	8.4	(3.2)	4.4	(153.0)	3.0		7.0			27-152	弥生後期前半	半分次損	
537			IA-1-1 砂塼	SD-0(B)	滑石	カドマ黄緑 色10YR7/2 カドマ黄緑 色10YR6/3	●	10.1	3.7	4.2	220.8	3.0		7.0			27-153	弥生後期前半	下部部を意図的に加工	
538			IA-1-1 砂塼	SD-0(B)	蛇紋岩	カドマ黄緑 色10YR7/2 カドマ黄緑 色10YR6/3	●	10.1	5.1	(2.6)	(177.9)	7.0		7.5			27-154	弥生後期前半	裏面次損	
539			IA-2-1 砂塼	SD-0(B)	滑石	緑灰色 5Y7/1~7/2	●	(7.1)	(3.4)	3.5	(73.1)	3.0		6.0	4.0		27-155	弥生後期前半	1/3次損	
540			IA-2-1 砂塼	SD-0(B)上層	滑石	灰色N5/~ 灰色N5/~ 2.5Y6/2	●	8.3	4.3	3.9	166.2	1.0		6.0	7.0		27-156	弥生後期前半	下部部を意図的に加工	
541			IA-2-1 砂塼	SD-0(B)上層	滑石	灰色10Y5/1	●	8.65	4.3	2.6	222.2	2.0		2.5	9.0		27-157	弥生後期前半	下部部を意図的に加工	
542			VA-3 塼	SD-0(B)	蛇紋岩	カドマ黄緑 色10YR7/2 カドマ黄緑 色10YR6/3		(11.1)	5.0	3.1	263.6	4.0	3.0				27-158	弥生後期前半	先端部による突起、十字溝	
543			II A-1 塼	井泉	滑石	灰色N6/~ 10YR5/4		3.8	1.4	1.2	0.0	1.0					29-173	弥生中期末~ 古墳前期初頭		
544			II A-1 塼	井泉	蛇紋岩	灰色N6/~ 10YR5/4		6.0	1.3	1.1	12.5	1.0					29-174	弥生中期末~ 古墳前期初頭		
545			IA-2-1 砂塼	井泉	蛇紋岩?	灰色N6/~ 10YR5/4	●	5.9	3.5	1.6	30.4	2.0		4.0			29-175	弥生中期末~ 古墳前期初頭		
546			IB 塼未製品	井泉	蛇紋岩	灰色N5/~ カドマ黄緑 色10YR7/2 カドマ黄緑 色10YR6/3	未成品	7.9	4.5	3.9	211.0						29-176	弥生中期末~ 古墳前期初頭		
547			VB 塼	井泉	蛇紋岩	灰色N5/~ カドマ黄緑 色10YR7/2 カドマ黄緑 色10YR6/3		(9.2)		2.7	(126.3)			14.0			29-177	弥生中期末~ 古墳前期初頭	半分次損、風化	
548	今福五郎江遺跡 第12次	福岡市西区	IB-1-1 砂塼	SD-01 土器集中部	滑石	灰色N5/~ 10YR5/8	●	6.8	5.1	4.7	195.5	3.0		6.0	4.0		38-246	古墳前期初頭		
549			IA-1-1 砂塼	SD-01 土器集中部	蛇紋岩	緑灰色 10Y5/1~ 灰色N4/~ 5Y6/1	●	8.6	3.6	3.6	170.6	3.0		3.0	5.0		38-247	古墳前期初頭	下部部を意図的に加工	
550			II A-1 塼	SD-01黒色土	滑石	カドマ黄緑 色10YR7/2 カドマ黄緑 色10YR6/3		4.7	1.5	1.3	11.9	1.0					52-389	弥生後期後半~ 古墳前期初頭		
551			II A-1 塼	SD-01黒色土	滑石	灰色N5/~ 10Y5/1		5.1	1.3	1.1	9.8	1.0					52-400	弥生後期後半~ 古墳前期初頭		
552			II B-1 塼	SD-01黒色土	瓦葺か 蛇紋岩	灰色N5/~ 10Y5/1		(4.5)	1.6	0.9	(8.5)	1.0					52-401	弥生後期後半~ 古墳前期初頭	下部次損	
553			II A-1 塼	SD-01黒色土	滑石	緑灰色 10Y5/1		(5.8)	1.8	1.7	(21.2)	1.0					52-402	弥生後期後半~ 古墳前期初頭	下部部次損	
554			II B-1 砂塼	SD-01黒色土	頁岩	灰色N4/~ 10Y5/1		6.1	2.3	1.3	22.9	1.0		4.0			52-403	弥生後期後半~ 古墳前期初頭		
555			IA-1-1 砂塼	SD-01黒色土	不明	暗緑灰色 7.5YR7/1~ 2.5Y6/1~ 暗緑黄色 2.5Y4/2	○	7.3	4.0	3.4	141.4	2.0					52-404	弥生後期後半~ 古墳前期初頭	上部部平組	
556			IB-1-1 砂塼	SD-01黒色土	滑石	緑灰色 10Y5/1		8.9	5.0	4.0	231.5	4.0		3.0	6.0		52-405	弥生後期後半~ 古墳前期初頭		
557			IA-1-1 砂塼	SD-01黒色土	滑石	灰カドマ 5Y6/2~暗 灰色 5Y6/1	○	12.1	3.9	3.3	224.5	3.0		4.0	5.0		52-406	弥生後期後半~ 古墳前期初頭	3面加工、一方を抉り出して溝を刻 き	
参考			脩石 ブイ	SD-01黒色土	脩石	緑灰色 10Y5/1		20.5	16.9	12.4	1,235.5	8.0					52-410	弥生後期後半~ 古墳前期初頭		
558			II A-1 砂塼	SD-01清掃時 玄武岩?	玄武岩?	暗緑灰色 10Y5/1		4.6	2.1	1.6	17.9	2.0		4.0			55-463	弥生後期後半~ 古墳前期初頭	下部部次損	
559			II A-1 砂塼	SD-01厚部除去 滑石	滑石	暗緑灰色 10Y5/1		(5.1)	1.9	1.5	(18.3)	2.0		3.0			55-464	弥生後期後半~ 古墳前期初頭		
560			II A-1 塼	SD-01壁面	滑石	暗緑灰色 10Y5/1	○	4.5	1.8	1.6	14.1	2.0					56-465	弥生後期後半~ 古墳前期初頭	下部部次損	
561			II A-1 塼	SD-01	蛇紋岩	カドマ黄緑 色10YR7/2 カドマ黄緑 色10YR6/3		(5.4)	2.2	2.1	(34.1)	2.0					56-466	弥生後期後半~ 古墳前期初頭	下部部次損	
562			IB-1-1 砂塼	SD-01壁面	滑石	灰色N6/~ 2.5Y6/1		5.4	3.5	3.6	92.2	4.0		5.0			56-467	弥生後期後半~ 古墳前期初頭	上孔と下孔が直交	
563			VID 塼	SD-01壁面	滑石	暗緑灰色 10Y5/1	○	(13.0)		(4.5)	(532.5)			18.0			56-470	弥生後期後半~ 古墳前期初頭	2/3次損	

第5表 九州型石甕一覽表⑮

道跡 番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工 状況	法重			重量(g)	長軸の溝幅 (mm)	短軸の溝幅 (mm)	孔径			挿入 番号	時期(下限)	備考	文献
									長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				1層上の孔 径(mm)	上から2層 目の孔径 (mm)	上から3層 目の孔径 (mm)				
78	564			VA類	A3遺構面	滑石				6.4	2.5	1.4	77.0		0.5			61-769	弥生後期前半～ 後期後半	丁寧に加工し、突起部を作り出す	福岡市教育委員会2011/今宿五郎江9遺跡 福岡県文化財調査報告書第109集
	565			HA-1類	A1遺構面	滑石				4.2	1.8	1.7	17.0		2.0			61-770	弥生後期前半～ 後期後半		
	566			HA-1類	B2遺構面	滑石	○			5.1	1.2	1.2	12.9		2.5			61-771	弥生後期前半～ 後期後半		
	567			HA-3類	B4遺構面	滑石				4.7	1.8	1.2	14.0		2.0	1.5		61-772	弥生後期前半～ 後期後半		
	568			HA-3類	D2遺構面	滑石				5.3	1.6	1.2	(17.6)		1.0	0.5		61-773	弥生後期前半～ 後期後半	下半部欠損	
	569			HA-1-1少類	B2003 2層	滑石	○			6.7	3.0	2.5	77.0		2.0	5.0		61-774	弥生後期前半～ 後期後半		
	570			IA-1-1少類	B3遺構面 砂層	滑石	○			6.5	3.5	3.5	107.0		2.0		10.0	61-775	弥生後期前半～ 後期後半		
	571			IA-1-1少類	C2遺構面	滑石				8.3	4.7	4.2	230.0		2.5		5.0	61-776	弥生後期前半～ 後期後半		
	572			IA-1-1少類	D2遺構面トレン 5層下面	滑石				7.9	4.1	3.9	161.0		3.5		6.0	61-777	弥生後期前半～ 後期後半		
	573			IB-2-2少類	A3 003レン/フ5 2層上面	滑石	●			6.4	3.2	2.5	17.0		2.5		6.5	62-778	弥生後期前半～ 後期後半	一部欠損	
	574			IB-1-1少類	A3 003 2層	滑石				7.4	4.8	3.5	154.0		4.5		9.5	62-779	弥生後期前半～ 後期後半	下半部欠損、側面に溝	
	575			IB-1-1少類	B3遺構面	滑石	○			(7.4)	4.0	2.5	(98.0)		1.0		8.5	62-780	弥生後期前半～ 後期後半		
	576			IB-2-2少類	B3 003 1層下 層	滑石				6.5	4.2	3.8	123.0		3.5		5.0	62-781	弥生後期前半～ 後期後半		
	577			IB-1-1少類	A3 003 2層	滑石	●			9.3	4.6	3.8	263.0		3.5		7.5	63-782	弥生後期前半～ 後期後半		
	578			IB-1-1少類	C2遺構面	滑石	●			10.3	4.3	3.4	239.0		2.5		9.5	63-783	弥生後期前半～ 後期後半	先端部欠損	
	579			IA-1-1少類	A3遺構面	滑石				9.5	3.6	2.6	121.0		1.5		6.5	63-784	弥生後期前半～ 後期後半	全体的に彫蝕	
	580			IA-1-1少類	C2遺構面	滑石				9.4	3.2	3.4	(130.0)		2.5		5.0	63-785	弥生後期前半～ 後期後半		
	581			IB類少	D2遺構面	滑石				4.0	(2.3)	(2.0)	21.0				3.5	63-786	弥生後期前半～ 後期後半	破片	
	582			IB類少	B2遺構面	滑石				(3.0)	3.4	0.7			2.0			63-787	弥生後期前半～ 後期後半	破片	
	583			IB-2類	B3 003 1層上面	滑石				8.2	3.6	2.8	133.0		2.0			64-788	弥生後期前半～ 後期後半	孔なし、側面に長軸溝	
	584			IB-1類	D2上面	滑石				10.4	5.0	3.3	246.0		4.5			64-789	弥生後期前半～ 後期後半		
	585			IA-3類	C2 遺構面	滑石	○			8.0	5.0	2.9	162.0		5.0	1.0		64-790	弥生後期前半～ 後期後半	孔なし	
	586			IB類未製品	B2遺構面	滑石	○			9.2	3.7	4.9	220.0					64-791	弥生後期前半～ 後期後半	未製品	
	587			IB類未製品	B3 003 1層下面	滑石	○			9.3	6.0	5.1	314.0					64-792	弥生後期前半～ 後期後半	未製品	
	588			IB類未製品	B2 トレン/フ2	滑石	○			7.0	4.2	3.2	186.0					64-793	弥生後期前半～ 後期後半	未製品、未研習	
	589			IB類未製品	B2遺構面	滑石				8.0	5.0	2.9	162.0					64-794	弥生後期前半～ 後期後半	未製品、未研習	
	590			IA-1類	SC06	紀岩				4.5	1.3	1.0	7.5		0.5			9-15	弥生後期後半～終末		
	591			HA-1-1少類	SD120					5.3	2.3	1.9			0.5		5.0	24-109	弥生後期前半		
	592			IA-1-1少類	SD120					7.5	4.7	4.0			4.5		6.5	30-163	弥生後期後半		
	593			IA-1-1少類	SD120					10.0	5.0	4.3			4.0		6.5	35-212	弥生後期後半～ 古墳前期初頭	上孔と下孔が直交	
	594			VIC-1類	SD120	花崗岩				19.7	21.1	9.0	5,200.0			18.0	8.0	37-225	弥生後期後半～ 古墳前期初頭	全体的に彫蝕？	
	595			IB-1-1少類	SD170	頁岩				(6.1)	3.5	3.4	(41.3)		2.0		7.0	41-249	弥生後期後半～ 古墳前期初頭	上半部欠損	
	596			IB類未製品	SD130	滑石				4.4	1.7	1.1	10.8					41-252	弥生後期後半	未製品	
	597			IA類未製品	SD130	滑石	○			12.2	5.0	3.7	361.3				7.0	41-256	弥生後期後半	全面に加工痕	
	598			IA-1-1少類	SD090	片岩				12.3	5.6	4.2	357.8		4.5		6.5	45-284	弥生中期～中世	上孔と下孔が直交	
	599			IA-3類	SD164	滑石				6.0	1.0	0.9			3.0			122-5065	弥生後期後半～終末	上半部欠損	福岡市教育委員会2006/今宿五郎江5遺跡 福岡県文化財調査報告書第872集
	600			IB-1-1少類	SD164+216	滑石	○			10.0	5.0	4.0			5.0		5.0	122-5127	弥生後期後半～終末	一部欠損	
	601			IB-1-1少類	包含層	滑石				7.1	1.9	(1.6)			1.0		2.0	130-5123	弥生後期か、5C末～ 6C初	表面欠損、孔に磁子カ痕少	

第5表 九州型石錘一覽表⑩

道跡 番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工 状況	法量			溝幅 短軸の溝幅 (mm)	溝幅 長軸の溝幅 (mm)	重量(g)	孔径		備考	文献
									長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)				上から2層 目の孔径 (mm)	上から3層 目の孔径 (mm)		
79	602	谷津跡第1次	福岡市西区	IB-1-1必須	包含層	清石	●	8.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	50-3	弥生後期か、5C末～ 弥生後期か、5C末～ 弥生後期か、5C末～ 弥生後期か、5C末～	福岡市教育委員会2006「今宿遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第872集	
	603	谷津跡第2次	福岡市西区	IA-2-1必須	包含層	清石	○	11.1	5.1	4.0	6.0	8.0	8.0	8.0	60-3	下部部を意図的に研削痕	福岡市教育委員会2012「谷津跡2」大塚遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1151集	
	604	谷津跡第3次	福岡市西区	VD類	IV区灰色砂下	清石		17.6	15.6	3.5	1,402.0		26.0		80-1	弥生後期後半	福岡市教育委員会2013「大塚遺跡6」福岡市埋蔵文化財調査報告書第118集	
	605	大塚遺跡第9次	福岡市西区	IA-1類	第1地点	清石		4.2	1.5	1.2	2.0	2.0	2.0	2.0	80-2	弥生中期～後期終末	福岡市教育委員会2011「大塚遺跡4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第111集	
	606			IC-1類	T3-4下層	清石		(10.1)	4.5	4.0	(270.6)		3.5	5.0	80-3	弥生後期終末		
	607			IA-1-1必須	T3-4下層	清石		9.6	3.4	2.7	113.4	2.5	5.0	6.0	80-4	弥生後期終末		
	608			I類未製品	2区谷津層上層	清石		6.4	5.1	2.9	116.3				80-5	弥生後期終末		
	609	大塚遺跡第14・15次	福岡市西区	IB-1-1必須	T3-4下層	清石		5.4	3.3	2.7	71.7	2.0	2.0	4.0	80-6	弥生後期終末		
	610			IA-1類	SB-011	清石		5.5	2.7	2.3	40.9	2.5	2.5		80-7	古墳中期前半		
	611			VA-1類	SK-018	清石		7.8	1.9	1.8	37.6	2.5	2.5	1.0	1.5	80-8	古墳中期前半	
80	612		IA-1-1必須	SD06	清石		7.5	2.6	2.0	2.0	2.5	2.5	3.5	20-52	弥生後期後半～終末	両端に紐かけ溝、長軸端1	福岡市教育委員会2012「大塚遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第114集	
	613		IA-2-1必須	SX069	清石		12.5	5.8	4.6	3.5	3.5	3.5	3.0	31-167	弥生後期後半～終末	2孔上層		
	614	大塚遺跡第16・17次	福岡市西区	IB-1-1必須	SX069	清石	●	9.3	4.4	1.9	(148.8)	3.0	6.0	6.0	31-168	弥生後期後半～終末	全面磨滅、横方向への紐平目もあるため、西新町石樋とは使用法が異なる。孔は縦方向の磨滅、下半部欠損後も使用可。	
	615			IA-2-2必須	SX069	清石	○	10.1	5.5	2.1	4.5	5.0	4.5	4.5	31-169	弥生後期後半～終末	裏一部欠損、溝幅広い	
	616			IB-2-2必須	SX-011	清石		4.6	4.2	3.4	6.0	6.0	3.0	29.0	30-76	弥生後期終末	2孔途中、未製品、小型品	福岡市教育委員会2015「大塚遺跡8」福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集
	617			VB類	SX-011	清石		20.0		9.0	(3,650.0)				31-92	弥生後期終末	1・3次損	
	618			IB-1-1必須	SX-011	清石	●	8.8	3.8	3.7	183.2	3.0	6.0	6.0	34-126	弥生後期終末	上下平坦に加工	
	619			IB-1-1必須	SX-011	清石	●	7.8	4.2	3.8	181.0	2.0	7.0	7.0	42-220	弥生後期終末		
	620	大塚遺跡第18次	福岡市西区	VC-2類	SX-011	清石		5.0	1.7	1.2	19.5	2.0	2.0		42-222	弥生後期終末		
	621			I類未製品	SX-011	清石		5.0	1.5	1.3	12.3				42-223	弥生後期終末	未製品	
622			IA-1類	SX-011	清石	○	3.8	1.2	0.8	6.5	2.0	2.0		42-224	弥生後期終末			
623			IA-1-1必須	SX-011	清石		10.1	4.8	4.2	306.2	3.0	3.0	5.0	54-565	弥生後期終末			
624			IA-1-1必須	検出時	清石		7.7	4.3	3.2	169.0	2.0	2.0	4.5	57-397	弥生中期後半か？	扁平石を短軸一面に溝、自然石を使用	福岡市教育委員会1981「今宿遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集	
625	今山・今宿遺跡	福岡市西区	IB-2類	43地点	袋状岩片		42.0	18.0	7.0		2.8			48-188	弥生中期後半か？		福岡市教育委員会2005「今宿遺跡第6次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第124集	
626			VA類	43地点	砂岩		9.2	2.6	1.6		0.5			48-192	弥生中期後半か？	一方のみ突起		
627	今山遺跡第6次	福岡市西区	III A-3類	第9地点表土			7.4	6.6	3.0	5.0	5.0	5.5		30	古墳時代	自然石に溝を施溝	福岡市教育委員会2015「今宿遺跡第6次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第124集	
628			VD類	緑覆07	清石		20.0	16.3	9.8	4,423.0		4.0		79-201	弥生前期後半	自然石を加工、孔は縦打による。上面、側面磨れるが、下面より磨れる。未貫通の孔あり、孔両側に紐平目痕あり	福岡市教育委員会2005「今山遺跡第8次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第83集	
629			VB-1類	C11区緑覆	清石		19.1	16.8	10.1	3,522.0		24.0	5.0	79-202	弥生前期後半	自然石を加工、主孔、副孔ともに磨れる。側面が一番磨れるため、見えずらるる孔が多かつたか、溝は紐平目によるもの		
630	今山遺跡第8次	福岡市西区	III B-3類	SX-02下層層	玄武岩		11.6	9.5	3.3	480.0	5.0	6.0		80-207	弥生前期後半			
631			III B-3類	中区緑覆	清石		10.4	8.1	3.9	505.0	4.0	4.0		80-209	弥生前期後半			
632			III B-3類	南区緑覆	堆積岩		10.6	9.6	5.2	875.0	8.0	14.0		80-213	弥生前期後半			
633			III B-3類	SD-01下層層	清石		8.3	5.9	1.9	120.0	4.0	6.5		81-215	弥生前期後半	溝は加工		
634			III B-3類	SD-01下層層	玄武岩		7.4	5.8	2.8	170.0	7.0	10.0		81-216	弥生前期後半	溝は加工か		
635			III B-3類	SX-04	砂岩		8.1	4.2	2.6	125.0	2.0	2.0		81-224	弥生前期後半	溝は表面のみ加工		
636	今宿遺跡第3次	福岡市西区	VD類	1号溝	清石		11.5		5.5			11.0		28-121	中世に投入	2・3次損	福岡市教育委員会2003「今宿遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集	
637	今宿遺跡第5次	福岡市西区	IB-1-1必須	第1面上層	清石		6.3	3.0	1.2	2.0	2.0	4.0	5.0	46-195	古墳前期か		福岡市教育委員会2000「JR筑肥線緑化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第65集	
638	大塚遺跡第1次	福岡市西区	III A-1類	SCI035	清石		2.3	2.0	1.7	15.0	3.0			7-6	弥生中期後半		福岡市教育委員会1965「大塚遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集	
639			III B-1類	SP1236	清石		3.4	1.6	1.0	10.0	1.5			7-10	弥生後期後半		福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集	
640	大塚遺跡第1次	福岡市西区	III B-2-1必須	SC041	清石		7.2	2.1	(1.1)	9.0	9.0	3.5	3.0	27-64	古墳中期前半	2孔上層軸線に浅いV字を削り出し、裏面欠損	福岡市教育委員会1965「大塚遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集	

第5表 九州型石樋一覧表①

遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工状況	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	長軸の半径(cm)	短軸の半径(cm)	1番上の孔径(mm)	上から2番目の孔径(mm)	上から3番目の孔径(mm)	検出番号	時期(下段)	備考	文献	
86	641			ii 類夾製品	壱穴住居跡床面	滑石	灰オリーブ色	○	4.6	2.6	0.9	33.5						52-5	弥生中期後半～前期前半	面取り成形、石鏝？表面使用による凹凸顯著で、見えずられたか。	福岡市教育委員会1997小森遺跡Ⅰ福岡市埋蔵文化財調査報告書第541集	
	642			I A-2-a 類	壱穴住居跡床面	滑石	灰色	●	5.8	2.7	2.6	53.4	4.0	4.0	3.0	4.0		52-6	弥生中期後半～前期前半	極めて精巧、海中で採掘、幅約3mmのケズリ後研磨、V字溝深い、あまり使用されていない。		
	643			I B-2-a 類	壱穴住居跡床面	滑石	灰オリーブ色	●	7.9	3.4	3.6	108.8	2.0	2.0	4.0	4.5		52-7	弥生中期後半～前期前半	側面3面から入り、平面略三角形、下平やや磨滅するも見えずつた痕跡なし。		
	644			MI A 類	壱穴住居跡床面	滑石	オリーブ灰色		10.9	9.6	8.9	1,034.5			19.0			52-8	弥生中期後半～前期前半	切削Bのち研磨、表面・孔・溝は磨滅、使用品。		
	645			I A-1-a 類	Ⅲ区Ⅱ面上	滑石	灰黄色	●	5.6	3.4	2.8	119.1	4.0	4.0	6.0			59-9	弥生中期後半～後期後半	切削Bのち丁字に研磨、下面に面溝採取、使用品。		
	646			I A-2-a 類	D-9Ⅱ面上	滑石	暗緑色	●	5.9	3.3	3.1	151.0	4.0	4.0	4.0			59-10	弥生中期後半～後期後半	切削Bのち研磨、全体均等に磨滅するが、孔内磨滅減少、使用品。		
	647			I A-1-a 類	E-15	滑石	灰白色	●	12.2	4.4	3.9	246.9	5.0	5.0	6.5			59-11	弥生中期後半～後期後半	幅4mmの切削Bのち研磨、溝・孔磨滅減少、あまり使用していない。		
	648			I A-1-a 類	I 1レ	滑石	暗緑色	●	14.1	4.1	3.7	253.6	4.0	4.0	7.0			59-12	弥生中期後半～後期後半	断面穿孔、溝・孔磨滅、使用品、下部部・裏面欠損。		
	649			I A-1-a 類	F-7Ⅰ面	滑石	灰白色	●	5.6	3.1	2.1	(52.6)	3.5	3.5	4.5			59-13	弥生中期後半～後期後半	上半分のみ敲打のち研磨、下部部は敲打のみ、使用痕ほとんどなく、I B 類の未製品か。		
	650			I B-1 類	L-8Ⅰ面下	滑石	灰オリーブ色		5.9	5.4	4.3	220.7	3.0	3.0				59-14	弥生中期後半～後期後半	上下端若干欠損、断面欠損、断面丸み、溝が浅い、上下面が明瞭で、網漉し。		
	651			II A-1-a 類	I 1レ	滑石	灰色～オリーブ色	●	12.2	5.0	5.0	(363.7)	5.0	5.0	5.0			91-15	弥生中期後半～後期後半	断面穿孔、溝・孔磨滅、使用品、下部部・裏面欠損。		
	652			II A-1 類	J-9Ⅱ面上	滑石	暗緑色～暗赤色、興味強い	●	14.1	4.9	4.9	(437.9)	5.0	5.0				91-16	弥生中期後半～後期後半	上下端若干欠損、断面欠損、断面丸み、溝が浅い、上下面が明瞭で、網漉し。		
	653			Ⅲ A-1 類	Ⅳ区Ⅰ面	砂岩	灰オリーブ色	●	3.2	2.0	1.9	15.5	1.5	1.5				93-17	弥生中期後半～後期後半	磨滅、使用品。		
	654	小森遺跡(大原遺跡群第1次)		福岡市西区	Ⅲ A-3 類	J-7	砂岩砂岩	黄褐色	●	3.2	1.8	1.6	11.5	2.5	2.5				93-18	弥生中期後半～後期後半	粗い研磨	
	655				Ⅲ B-3 類	I 区Ⅰ面	砂岩砂岩	こげ黄色	●	4.1	1.5	1.5	10.8	2.0	1.5				93-19	弥生中期後半～後期後半	溝シャープ	
	656				Ⅲ B-1 類	F-7Ⅰ面	滑石	灰白色	●	3.2	1.3	0.9	6.0	1.0	1.0				93-20	弥生中期後半～後期後半	上下端は平直、磨滅	
	657				v B-3 類	I 1レ	灰オリーブ灰色	●	(2.6)	1.0	0.8	(2.8)	1.0	1.0				93-21	弥生中期後半～後期後半	半欠損、溝少し磨滅		
	658				II B-1 類	K-7Ⅱ面	滑石	灰オリーブ色～暗灰色、少し興味ある	●	11.5	6.0	2.8	274.9	7.0	7.0				95-22	弥生中期後半～後期後半	断面扁平、溝浅い、見えずられたか	
	659				II B-3 類	D-11Ⅱ面下	滑石	暗灰色		7.8	4.8	2.5	139.2	4.0	2.0				95-23	弥生中期後半～後期後半	表面のみ十字溝、裏面そのままだ	
	660				II B-1 類	2r	滑石	暗灰色		(8.3)	7.5	2.5	237.8	14.0					95-24	弥生中期後半～後期後半	溝は片面のみ扁平、削片を使用	
	661				MI A 類	F-6Ⅱ下	滑石	黄褐色		11.0	10.2	10.7	(1,225.0)	21.0					101-39	弥生中期後半～後期後半	1/3欠損、全体的に磨滅するため、加工痕、使用痕不明、1/3被熱顔	
	662				MI B 類	G-12Ⅰ下	滑石	灰白色	●	11.8	10.2	6.2	1,204.0			25.0			103-40	弥生中期後半～後期後半	孔内つるつる、上面磨滅で網のあたりが、側面粗い研磨、下面使用による磨滅	
	663				MI B 類	F-2Ⅰ下	滑石	灰白色		12.5	11.5	6.2	1,335.6			25.0			103-41	弥生中期後半～後期後半	敲打による成形、ほとんど研磨なし、上面のみ磨滅、網のあたりが、孔内つるつる	
	664				MI B 類		蛇紋岩	緑褐色		12.2	13.6	5.5	2,622.0			16.0			105-42	弥生中期後半～後期後半	中継の一部研磨、表面削れる、孔内幅5mmの工具痕残る	
	665				MI B 類		滑石	暗緑色～灰白色		12.7	14.0	8.0	3,545.0			17.0			105-43	弥生中期後半～後期後半	ほぼ自然石を利用、孔内つるつる、側面敲打痕、上・下面明瞭、上面は網のあたりが	
	666				ii B 類		滑石	暗灰色		6.6	6.0	1.5	98.6			10.0			107-44	弥生中期後半～後期後半	断面穿孔、孔周辺に磨けなし	
	667				I 類夾製品	Ⅱ面上	滑石	灰白色		10.0	5.2	3.7	390.1						107-45	弥生中期後半～後期後半	一部このみケズリ、未製品	
	668				I 類夾製品	F-6Ⅰ面下	滑石	灰色		8.1	4.2	(1.1)	(52.1)						107-46	弥生中期後半～後期後半	半欠損、切削面全面、良好な使用	
	669		桑原遺跡群第1次	福岡市西区	IV A 類	Ⅱ区包含層			6.8	6.7	2.1	2.5							27-176	弥生中期後半～前期後半	断面穿孔	福岡市教育委員会1965桑原遺跡群第一調査第一福岡市埋蔵文化財調査報告書第432集
	670				VI D 類	SX-009	片岩系	灰褐色	○	15.8	13.4	3.5	1,159.5			13.0			94-5	弥生中期後半	上下面顯著に磨ける、孔内は特に磨ける、片側に磨滅、敲打による穿孔	福岡市教育委員会2004元岡・桑原遺跡群Ⅲ福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集
	671		元岡・桑原遺跡群第3次	福岡市西区	VI B 類	SX-009	滑石		○	12.4	11.8	6.2				13.0			94-6	弥生中期後半	自然石を使用、定型的ではな、孔内はつるつるだが、下側の1/3は削り、下面上の磨ける	
	672				ii B-1 類	SC-3	滑石		○	3.6	1.5	1.1	2.0						94-7	弥生中期後半		

第5表 九州型石鏝一覽表⑱



遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類		加工状況	法量			溝幅			孔径			時期(下限)	備考	文献
						色調	石材の種類		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	長さの標準値(cm)	1番上の孔径(mm)	上から2番目の孔径(mm)	上から3番目の孔径(mm)	長さの標準値(mm)	重量(g)			
87	714	三田 桑原遺跡群 第12次調査	福岡市西区	I A-1-a 類	II区土器群113	滑石	灰色	○	8.7	2.5	2.2	92.6	2.0	4.0	6.5	128-66	弥生中期後半～古墳前期前半		福岡市教育委員会2015年完成、桑原遺跡群 福岡市産業文化財調査報告書第12号	
	715			I A-1-a 類	II区土器群106	滑石	灰色		10.7	4.6	4.1	261.0	2.5	6.0	6.5	128-67	弥生中期後半～古墳前期前半			
	716			VIA類	II区土器群103	滑石	灰白色	○	12.0		10.1		(1,601.0)		38.0		129-68	弥生中期後半～古墳前期		1/3欠損、孔下面は紐づけ痕跡、上面つるつる、側面工具痕跡があるため、顕著に動いたものではない。
	717			VII D類	II区土器群106	滑石	灰白色	○	11.5		4.2		897.9		28.5		129-69	弥生中期後半～古墳前期		上面つるつる、孔内下方つるつる、上面粗い線状の加工痕
	718			VII B類小	II区土器群106	片岩	緑灰色		13.9		6.6		(802.8)		(19.0)		129-70	弥生中期後半～古墳前期		半分以上欠損、底面使用により荒れる、孔内つるつる
	719			VII C-1類	II区土器群110	滑石	明褐色		9.9	10.2	12.0	1,612.0	32.0	10.0			129-71	弥生中期後半～古墳前期		被熱のため、加工痕みえず、底面つるつる、主孔、副孔つるつる
	720			VII D-1類	II区土器群112	花崗岩	灰白色		10.5	4.8	5,000.0			10.0	5.0		130-72	弥生中期後半～古墳前期		上面側面敲打痕跡、底面磨滅するが、重量があるため、あまり動いていない。主孔、副孔つるつる
	721			V A類	II区包含層	赤味を帯びた灰色		8.6	1.5	1.3	26.2						135-139	弥生中期後半～古墳前期		両端部に紐かけ溝、磨滅
	722			II B-1類	II区包含層	灰色～明褐色～灰色		(3.5)	1.2	0.7	5.0	5.0					135-142	弥生中期後半～古墳前期		長軸溝は2/3弱
	723			II A-1類	II区包含層	粘板岩		4.2	1.2	1.0	4.0	1.5					135-143	弥生中期後半～古墳前期		
	724			II A-1類	II区包含層	粘板岩		4.6	1.8	1.3	12.0	2.0					135-144	弥生中期後半～古墳前期		溝下部が剥離
	725			II A-1類	II区包含層	粘板岩		4.3	1.6	1.3	11.6	1.5					135-145	弥生中期後半～古墳前期		
	726			II A-1類	II区包含層	滑石	灰色	(4.6)	1.5	1.4	(12.0)	2.0					135-146	弥生中期後半～古墳前期		一部欠損
	727			II A-1類	II区包含層	滑石	オリーブ灰色	(3.0)	2.7	2.0	(19.3)	2.5					135-147	弥生中期後半～古墳前期		下部欠損
	728			III A-1類	II区包含層	滑石	赤味を帯びた灰色	3.4	1.9	1.9	16.0	2.0					135-148	弥生中期後半～古墳前期		
	729			III A-1類	II区包含層	滑石	褐色	3.1	2.1	1.6	(12.3)	1.5					135-149	弥生中期後半～古墳前期		裏面1/4欠損
	730			III A-1類	II区包含層	滑石	灰少～褐色	3.5	2.1	1.5	16.1	1.5					135-150	弥生中期後半～古墳前期		
	731			III A-3類	II区包含層	滑石	灰色～濃い黄褐色	4.4	2.4	2.2	28.6	2.0	0.2				135-151	弥生中期後半～古墳前期		
	732			II A-1類	II区包含層	滑石	赤味を帯びた灰色	5.2	2.3	2.0	42.3	1.0					135-152	弥生中期後半～古墳前期		
	733			III B-1類	II区包含層	滑石		5.4	2.7	2.0	36.3	1.5					135-153	弥生中期後半～古墳前期		
734	III B-1類	II区包含層	滑石		5.6	3.4	2.6	75.0	2.5	2.5				135-154	弥生中期後半～古墳前期	裏面に紐は擦痕				
735	II A-3類	II区包含層	粘板岩?		4.3	1.9	1.7	17.3	2.0	2.5				135-155	弥生中期後半～古墳前期					
736	II A-3類	II区包含層	粘板岩		5.6	1.4	1.2	13.3	1.5	2.5				135-156	弥生中期後半～古墳前期	長軸溝は側面に施す、側面には細い、擦痕				
737	III A-3類	II区包含層	花崗岩	灰色	8.6	4.6	4.0	208.0	3.5	3.5				135-157	弥生中期後半～古墳前期	前面柱形、下半部欠損				
738	III B-3類	II区包含層	花崗岩		(9.9)	4.9	3.2	(246.0)	10.0	6.5				135-158	弥生中期後半～古墳前期					
739	II A-1-1類	II区包含層	粘板岩		5.3	1.7	1.2	13.3	2.0			3.0		136-159	弥生中期後半～古墳前期	孔下寄りに穿孔				
740	II A-1-1類	II区包含層	粘板岩		4.8	1.5	1.1	(12.3)	1.0					136-160	弥生中期後半～古墳前期	裏面1/4欠損				
741	II A-1-1類	II区包含層	粘板岩		6.3	1.8	1.4	19.0	1.5			3.5		136-161	弥生中期後半～古墳前期					
742	II A-1-1類	II区包含層	滑石		5.0	2.0	1.5	(17.7)	1.5					136-162	弥生中期後半～古墳前期	一部欠損				
743	II B-2-a 類	II区包含層	土舞	黒灰色	4.1	1.3	1.1	6.3	2.0			1.5	2.0	136-163	弥生中期後半～古墳前期	土舞、一部欠損				
744	I B-2-a 類	II区包含層	玄武岩		6.4	3.6	1.9	64.2	0.5			6.0		136-164	弥生中期後半～古墳前期	断面柱形				
745	I A-1-1類	II区包含層	玄武岩		5.8	4.7	4.0	174.0	3.5			6.5		136-165	弥生中期後半～古墳前期	先端部欠損後にも使用か				
746	I B類	II区包含層	滑石	灰白色	6.2	3.2	2.7	82.7						136-166	弥生中期後半～古墳前期	全体に使用痕?				
747	I B類未製品	II区包含層	滑石	赤味を帯びた灰色	9.0	3.4	2.1	120.1						136-167	弥生中期後半～古墳前期	断面四角形				
748	I B-1-1類	II区包含層	滑石	濃い黄褐色	7.3	3.2	1.6	59.7	2.0			4.0		136-168	弥生中期後半～古墳前期	断面四角形、断面多数				
749	I B-1-1類	II区包含層	滑石		8.2	4.0	3.5	140.0	2.5			8.0		136-169	弥生中期後半～古墳前期	全体的に線状痕				
750	I A-3-1類	II区包含層	滑石	黒色～灰色	10.8	4.3	4.2		3.5	0.5	4.0			136-170	弥生中期後半～古墳前期	横溝あり				

第5表 九州型石錘一覽表②

遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工状況	寸法			重量(㎏)	溝幅		孔径		挿入部(下段)	備考	文献	
									長さ(㎝)	幅(㎝)	高さ(㎝)		長軸の溝幅(㎜)	短軸の溝幅(㎜)	1層上の孔径(㎜)	上から2層目の孔径(㎜)				上から3層目の孔径(㎜)
福岡県東郷郡糸原町	751	糸原遺跡群第1次調査	糸原町	IA-1-1-1	II区包含層	滑石	灰白色	○	10.3	4.3	3.7	217.0	2.5	6.0	6.0	136-171	弥生中期後半～古墳前期	再利用?	福岡市教育委員会2015(元岡)・糸原遺跡群25(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1276集)	
	752			IA-3-1-1	II区包含層	滑石	灰色	○	10.1	4.2	3.2	219.0	3.5	7.0	7.0	136-172	弥生中期後半～古墳前期	未貫通の孔1		
	753			IA-1-1-1	II区包含層	滑石	灰色	●	13.5	3.9	3.5	232.0	1.0	3.5	7.0	137-173	弥生中期後半～古墳前期	1/2欠損、側面も研ぎ、転用品、主に、副孔内につる。側面溝は縁に施す		
	754			VID-1-1	II区包含層	頁岩	青灰色	●	8.7	8.7	4.2	(294.5)	11.0	30.0	4.5	137-177	弥生中期後半～古墳前期	下面使用により飛れる。孔内につる。上面・側面も磨かれる。自然石をそのまゝ利用。孔は磨滅するが、下面等は磨滅していない		
	755			VIC-1	II区包含層	滑石	灰白～青灰色	●	13.0	13.1	10.3	2544.0		26.0		137-178	弥生中期後半～古墳前期	一部欠損、下面は使用により丸味定		
	756			VD-1	II区包含層	滑石	灰白色		14.2	10.3	3.1	790.3		14.0		136-179	弥生中期後半～古墳前期	一部欠損、下面は使用により丸味定		
	757			VD-1	II区包含層	花崗岩	灰白色		13.8	12.0	6.6	1112.0		42.5		136-180	弥生中期後半～古墳前期	質の悪い滑石、使用痕不明		
	758			VB-1	II区包含層	滑石	灰白色	○	14.8	13.8	10.2	(2319.5)		20.0		136-181	弥生中期後半～古墳前期	一部欠損、下面は使用により丸味定		
	759			VD-1	II区包含層	粘板岩	明緑色		14.0	16.0	6.9	2843.5		28.0		137-182	弥生中期後半～古墳前期	一部欠損、下面は使用により丸味定		
	760			IA-2-1-1	II区包含層	滑石	灰色		(7.7)	2.9	(2.8)	(71.7)	2.0	4.0	4.5	128-107	弥生中期後半～古墳前期	一部欠損		
	761			IA-1-1	II区包含層	滑石	灰白色		(10.1)	(3.8)	3.6	(144.7)		9.0	9.0	128-108	弥生中期後半～古墳前期	下半部欠損		
	762			IA-3-1-1	II区包含層	滑石	灰色～黄褐色		9.8	5.3	4.8	385.0	5.0	9.0		128-109	弥生中期後半～古墳前期	長軸溝1、短軸溝2、下交差で孔		
	763			IB-1-1-1	II区包含層	滑石	灰白色		10.3	4.3	4.3	(242.5)	1.0	7.0		128-110	弥生中期後半～古墳前期	上半部欠損		
	764			IB-1-1-1	II区包含層	滑石	灰白色		8.6	4.2	3.1	188.3	3.0	6.0		128-111	弥生中期後半～古墳前期	未貫通の孔1		
	765			I-1-1	II区包含層	滑石	灰色～黄褐色		(6.6)	3.8	3.1	(109.8)	(6.0)			128-112	弥生中期後半～古墳前期	大部分欠損、溝なし		
	766			IB-1-1	II区包含層	滑石	灰白色		5.8	3.9	3.0	100.5		2.0	1.5	5.5	128-113	弥生中期後半～古墳前期		長軸溝なし、未貫通の孔2あり
	767			IB-2-1-1	II区包含層	滑石	灰色～灰白色		7.6	3.9	3.5	142.9	2.5	5.0	6.0	128-114	弥生中期後半～古墳前期			
	768			IB-2-1-1	II区包含層	滑石	灰色～黄褐色		8.6	4.5	3.1	184.8	2.5	5.0	6.0	128-115	弥生中期後半～古墳前期			
	769			IA-1-1	II区包含層	滑石	灰色～灰白色		9.1	5.0	3.4	202.5		3.0		128-116	弥生中期後半～古墳前期	未製品、未貫通孔3		
	770			I-1-1	II区包含層	滑石	灰色～黄褐色		8.3	4.4	1.7	107.2		8.0		128-117	弥生中期後半～古墳前期	蓋部割離、欠損するが、後に打次石縁として用い		
	771			III A-3-1	II区包含層	滑石	灰色		6.6	3.1	2.1	54.1	1.5	1.5		129-119	弥生中期後半～古墳前期	断面矩形		
	772			II B-1-1	II区包含層	滑石	灰色～黄褐色		5.4	2.4	2.1	54.5	2.5			129-120	弥生中期後半～古墳前期			
	773			III A-3-1	II区包含層	滑石	灰色		4.9	2.8	2.5	48.8	2.0	0.2		129-121	弥生中期後半～古墳前期			
	774			II A-3-1	II区包含層	滑石	灰色		5.3	2.7	2.4	38.6	2.5	0.5		129-122	弥生中期後半～古墳前期			
	775			III A-1-1	II区包含層	粘板岩	灰色		3.1	1.8	1.6	11.0	2.5			129-123	弥生中期後半～古墳前期			
776	II B-1-1	II区包含層	滑石	灰褐色		3.6	1.6	1.4	11.8	1.5			129-124	弥生中期後半～古墳前期						
777	II B-1-1	II区包含層	滑石	灰色～灰褐色		4.0	1.6	1.2	10.1	1.5			129-125	弥生中期後半～古墳前期						
778	II B-1-1	II区包含層	滑石	灰色		2.9	1.3	1.0	5.1	1.0			129-126	弥生中期後半～古墳前期	大きく欠損					
779	III A-1-1	II区包含層	滑石	灰白色～灰褐色		(3.7)	1.5	1.4	(10.8)	2.0			129-127	弥生中期後半～古墳前期	縦横から底石に転用か					
780	II B-1-1	II区包含層	滑石	灰褐色		5.5	1.5	1.5	(17.8)	0.5			129-128	弥生中期後半～古墳前期						
781	ⅴ B-1-1	II区包含層	滑石	黄褐色		7.1	1.4	1.3	18.4	0.5			129-129	弥生中期後半～古墳前期						
782	III A-1-1	II区包含層	滑石	灰色		(2.4)	1.6	0.7		0.5			129-130	弥生中期後半～古墳前期	大きく欠損					
783	III A-3-1	II区包含層	滑石	青黒い		(4.1)	1.3	1.3	(6.3)	0.3			129-132	弥生中期後半～古墳前期	滑石の質が悪く、使用痕不明、下面は平らに成形					
784	ⅴ A-1-1	II区	滑石	緑灰色		10.5	9.1	11.3	1270.0		23.0		130-138	弥生中期後半～古墳前期	滑石の質が悪く、使用痕不明、底面は平らに成形、北内下部には六角					
785	ⅴ C-1-1	II区	滑石	灰白色		11.4	10.9	10.3	1475.0		21.0		130-139	弥生中期後半～古墳前期	下面使用により飛れる。側面丁家に研ぎ、北内につる					
786	ⅴ B-1-1	II区	頁岩	オリーブ灰色	●	15.5	15.5	9.0	2868.0		30.0		130-140	弥生中期後半～古墳前期	滑石の質悪く、凹凸顯著、底面使用による磨滅か					
787	ⅴ B-1-1	II区	滑石	黄褐色		15.8	12.0	(7.3)	(1944.0)		31.0		130-141	弥生中期後半～古墳前期	全面につる。よく使用、孔下部部					
788	ⅴ B-1-1	II区	滑石	灰白色	●	11.9	11.9	6.1	1115.0		28.0		131-142	弥生中期後半～古墳前期	使用により広がる					

第5表 九州型石錘一覽表①

遺跡番号	個別番号	遺跡名	甲種名称	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工状況	法重			重量(g)	長軸の幅(mm)	短軸の幅(mm)	1層上の孔の径(mm)	孔径			時期(下限)	備考	文献		
									長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)					上から3層目の孔径(mm)	上から2層目の孔径(mm)	上から1層目の孔径(mm)					
87	789	元圃・桑原遺跡群 第52次	福岡市西区	ⅥA類	Ⅱ区	滑石	灰白色		(10.0)		(9.0)	(507.2)			32.0				弥生中期後半～古墳前期	半分以上欠損、主孔内側にコシ痕	福岡市教育委員会2018元圃・桑原遺跡群 29福岡市埋蔵文化財調査報告書第1354集		
	790			ⅥB類未製品	Ⅱ区	滑石	灰白色		16.8	17.3	13.0	4706.0								弥生中期後半～古墳前期		未製品か、穿孔時に半分に割れたものか	
	791			ⅥA類	Ⅱ区	滑石	黄褐色	●	9.8		12.9	(1,017.0)					18.0					弥生中期後半～古墳前期	半分欠損、主孔内には加工痕、底部は平たく成形しているか、孔内下部広がる
	792			ⅢA-1類	SD-01	滑石			9.3	5.4	4.1	290.0	3.5									弥生中期後半～古墳前期	短軸線は再加工により広がったものか
	793			ⅡA-3類	SD-01 4層底成砂	滑石			7.4	3.2	2.5	86.0	2.0	2.5								弥生中期後半～古墳前期	
	794			ⅢA-3類	SD-01	滑石			7.6	3.9	2.7	104.2	2.5	1.5								弥生中期後半～古墳前期	
	795			ⅢA-3-1類	SD-01	安山岩			(6.0)	4.3	3.7	(130.8)	3.0	1.5								弥生中期後半～古墳前期	下半部欠損、未貫通の孔1ありか
	796			ⅡA-1類	SD-01	滑石			4.7	2.0	(1.3)	(17.9)	1.5									弥生中期後半～古墳前期	一部欠損
	797			ⅢA-1-1類	SD-01	滑石			4.4	2.1	2.0	21.1	1.5	4.5								弥生中期後半～古墳前期	中央に1孔
	798			ⅡA-1類	SD-01	滑石			6.9	2.5	2.0	56.0	1.5									弥生中期後半～古墳前期	側面にも長軸線1、上下面平組
	799			ⅡA-1-1類	SD-01	滑石			8.2	1.7	1.2	23.9	2.5	3.0								弥生中期後半～古墳前期	中央に1孔と未貫通の孔1
	800			ⅡA-3類	SD-01	滑石			7.3	3.2	2.9	92.8	1.5	1.0								弥生中期後半～古墳前期	
	801			ⅢA-3類	SD-01	砂岩石			6.4	3.3	3.4	80.0	2.0	0.5								弥生中期後半～古墳前期	一部欠損
	802			ⅡA-1類	SD-01	滑石			7.6	3.5	3.4	124.0	3.5									弥生中期後半～古墳前期	
	803			ⅢA-1類	SD-01				5.8	3.3	2.6	63.7	3.0									弥生中期後半～古墳前期	横方向に歪みあり
	804			ⅡA-1類	SD-01	滑石			6.3	2.5	2.1	39.5	2.0									弥生中期後半～古墳前期	
	805			ⅡA-1類	SD-01	滑石			6.1	1.5	1.3	16.0	2.0									弥生中期後半～古墳前期	一部欠損
	806			ⅡA-1類	SD-01	滑石			6.0	1.8	1.4	18.0	1.5									弥生中期後半～古墳前期	
	807			ⅡA-3類	SD-01	滑石			5.7	2.1	1.8	22.0	2.5	1.0								弥生中期後半～古墳前期	
	808			ⅡA-3類	SD-01	滑石			5.5	1.9	1.7	23.0	2.0	1.5								弥生中期後半～古墳前期	一部欠損
	809			ⅡA-1類	SD-01	安山岩			5.0	1.7	1.6	14.8	2.0									弥生中期後半～古墳前期	
	810			ⅢA-1類	SD-01	滑石			4.0	2.2	1.8	20.6	2.0									弥生中期後半～古墳前期	
	811			ⅡA-3類	SD-01	滑石			4.6	1.5	1.4	11.7	1.5	1.0								弥生中期後半～古墳前期	
	812			ⅡA-1類	SD-01	滑石			4.3	2.0	1.7	17.0	2.0									弥生中期後半～古墳前期	
	813			ⅡA-1類	SD-01	滑石			4.6	1.6	1.3	13.0	1.5									弥生中期後半～古墳前期	大きく欠損
	814			Ⅱ類	SD-01				4.3	1.9	1.1	(12.5)										弥生中期後半～古墳前期	
815	ⅡA-1類	SD-01	滑石			3.6	1.2	0.9	6.0	2.5								弥生中期後半～古墳前期					
816	ⅡA-1類	SD-01	滑石			3.6	1.1	0.9	5.0	2.5								弥生中期後半～古墳前期					
817	ⅡA-1類	SD-01	滑石			(3.0)	1.3	1.0	(4.0)	1.5								弥生中期後半～古墳前期	下半部欠損				
818	ⅢA-3類	SD-01	滑石			2.7	1.9	(0.9)	(6.0)	1.5	1.0							弥生中期後半～古墳前期	裏面半分欠損				
819	ⅢC-2-1類	SD-01	滑石			(3.9)	2.3	1.6	(22.0)	2.0	4.5							弥生中期後半～古墳前期	下半部欠損				
820	ⅠC-1-1類	SD-01	滑石			12.8	5.6	3.1	336.0	3.5	6.5							弥生中期後半～古墳前期					
821	ⅠA-1-1類	SD-01	滑石			10.5	4.2	4.2	256.0	2.5	4.5							弥生中期後半～古墳前期					
822	ⅠA-1類	SD-01	滑石			8.9	4.7	4.1	252.0	2.0	2.0							弥生中期後半～古墳前期	孔なし				
823	ⅠB-1-1類	不明	砂岩系			8.5	4.6	3.8	205.0	2.5	8.5	6.0						弥生中期後半～古墳前期	上下平組面				
824	ⅠA-1-1類	SD-01	玄武岩			6.6	2.8	3.0	52.0	1.5	5.0							弥生中期後半～古墳前期					
825	ⅠB-2-1類	SD-01	滑石			6.7	4.5	3.1	162.0	3.0	7.0							弥生中期後半～古墳前期	上下平組面				
826	ⅠB-1-1類	SD-01	滑石			6.0	4.3	2.7	95.0	3.5	6.0							弥生中期後半～古墳前期					

第5表 九州型石錘一覽表②

遺跡番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	加工状況		重量			清礎		孔壁		埋蔵品	備考	文献		
						色調	状況	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	重量(g)	長軸の幅(mm)	短軸の幅(mm)	1層上の孔径(mm)				上から2層目の孔径(mm)	上から3層目の孔径(mm)
87	元即・糸原遺跡南首42次	福岡市西区	IA-1-必類	SD-01	砂岩				4.2	4.1	(110.0)	3.5	3.5	7.0		弥生中期後半～古墳前期	上半部欠損	福岡市教育委員会2017元即・糸原遺跡南首42次埋蔵文化財調査報告書第128集	
			IB-1-必類	SD-01	滑石				5.2	4.2	87.0	3.5	3.5	5.0	6.5	弥生中期後半～古墳前期			
			VB-1類	SD-01	滑石				13.0		6.8	(1,013.0)			20.0	4.0	弥生中期後半～古墳前期		1/3欠損、下面使用により荒れる、孔下部欠損
			VC類	SD-01	滑石				12.0		8.9	(1,920.5)			22.0		弥生中期後半～古墳前期		一部欠損、下面使用により荒れる、孔内つらつら、側面磨滅
			VD類	SD-01	滑石				14.7		5.4	(849.0)			38.0		弥生中期後半～古墳前期		半分欠損、下面つらつら、孔下部欠損
			VID類	SD-01	滑石				14.1	12.3	3.4	970.0			24.0		弥生中期後半～古墳前期		下面つらつら
			VIC類	SC-5	滑石				12.2	12.2	6.8	3,244.0			16.0		弥生中期後半		加工痕あり、全体的に磨滅、滑石質良くない、孔上下端磨耗、側面削打痕、底面凹凸磨滅で、あまり動いた形跡なし
88	泊川・糸原遺跡南首	糸原市(旧前原市)	VB類	SC-5	滑石			11.3	11.3	6.1	2,174.5			17.0		弥生中期後半	滑石質非常に悪い、孔上面磨れる、全体的に磨滅	福岡市教育委員会2009泊川・糸原遺跡南首埋蔵文化財調査報告書第102集	
			VC類	SC-5	滑石			11.7	11.7	5.7	2,342.5			20.0		弥生中期後半	下面一部磨滅、海底で見つれた、孔全体的に磨れる、孔上面磨れる、孔内つらつら、側面磨滅		
89	泊川・糸原遺跡南首	糸原市(旧前原市)	VB-1類	SC-5	滑石			12.5	12.5	5.4	2,569.5			19.0		弥生中期後半	孔上面方に磨れる、孔全体的に磨れる、全体的に磨滅	福岡市教育委員会1997泊川・糸原遺跡南首埋蔵文化財調査報告書第64集	
			VB-3類	谷	花崗岩			4.6	2.2	1.1		1.0				弥生中期後半	自然石を利用、漆不明瞭		
90	志家石巻遺跡	糸原市(旧前原市)	IC-1-1類	北沢組溝	滑石			11.4	4.4	3.2	1,940.0			5.5	5.0	弥生中期後半	表面にはつらつらあり	文化財保護委員会1966志家石巻遺跡埋蔵文化財調査報告書第54号	
			VB類	III-E区	滑石			10.4	5.2	3.0	231.4	2.5		21		弥生中期後半	表面にはつらつらあり		
91	瀬田遺跡	糸原市(旧前原市)	IIA-1類	III-E区	滑石			4.2	2.3	1.7	23.7	0.5				弥生中期後半	表面にはつらつらあり	福岡市教育委員会2006瀬田遺跡埋蔵文化財調査報告書第53号	
			IIA-1-1類	III-E区	滑石			5.0	2.2	1.9	28.2	2.5		4.5		弥生中期後半	孔全体的に磨れる、孔上面磨れる、孔内つらつら、側面磨滅		
92	瀬田遺跡	糸原市(旧前原市)	IIA-1-1類	III-E区	砂岩			5.4	2.0	1.4	18.3	1.0		4.5		弥生中期後半	孔全体的に磨れる、孔上面磨れる、孔内つらつら、側面磨滅	福岡市教育委員会2006瀬田遺跡埋蔵文化財調査報告書第53号	
			IIA-3類	III-E区	滑石			3.8	2.0	0.7	11.3	1.0				弥生中期後半	孔全体的に磨れる、孔上面磨れる、孔内つらつら、側面磨滅		
93	上柳子遺跡南首	糸原市(旧前原市)	IIA-3類	III-E区	砂岩			3.6	1.7	1.4	10.7	1.0	1.0			弥生中期後半	長軸磨滅、短軸磨滅、中央に孔あり	福岡市教育委員会2007上柳子遺跡南首埋蔵文化財調査報告書第96集	
			IIA-3-必類	III-E区	砂岩			7.8	5.4	4.7	255.9	3.5	2.5	9.5		弥生中期後半	表面にはつらつらあり		
94	多入川木古遺跡	糸原市(旧前原市)	VID類	大溝	砂岩			18.7	19.2	6.6	2,398.5			42.0		弥生中期後半	表面にはつらつらあり	福岡市教育委員会2013多入川木古遺跡埋蔵文化財調査報告書第10集	
			IIA-3類	III-E区	滑石			4.3	2.5	1.8		2.0	1.5			弥生中期後半	表面にはつらつらあり		
95	三草・井原遺跡	糸原市(旧前原市)	IIA-1類	III-E区	白雲母片岩			5.7	2.0	2.1		1.5	1.0			弥生中期後半	縦方向に孔貫通	福岡市教育委員会1992三草・井原遺跡埋蔵文化財調査報告書第39集	
			IIA-1-1類	III-E区	白雲母片岩			7.5	4.2	4.0	195.0	4.0		4.0	5.0	弥生中期後半	縦方向に孔貫通		
96	三草・井原遺跡	糸原市(旧前原市)	IIA-1類	III-E区	白雲母片岩			4.7	2.6	2.5	37.0	1.5		10.0		弥生中期後半	縦方向に孔貫通	福岡市教育委員会2013三草・井原遺跡埋蔵文化財調査報告書第39集	
			IIA-1-1類	III-E区	白雲母片岩			5.5	2.6	1.2		1.0		4.0		弥生中期後半	縦方向に孔貫通		
97	三草・井原遺跡	糸原市(旧前原市)	IIA-2-1類	III-E区	白雲母片岩			9.5	4.3	3.6	283.0	3.5		7.5	8.5	弥生中期後半	縦方向に孔貫通	福岡市教育委員会2013三草・井原遺跡埋蔵文化財調査報告書第39集	
			IIA-3類	III-E区	白雲母片岩			3.1	2.6	2.0		1.5				弥生中期後半	縦方向に孔貫通		

第5表 九州型石錘一覽表②

遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類		加工状況	法重			溝幅			孔徑			挿固番号	時期(下限)	備考	文献		
						石材の種類	色調		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	長軸の溝幅(mm)	短軸の溝幅(mm)	1番上の孔径(mm)	上から2番目の孔径(mm)	上から3番目の孔径(mm)						
95	865	三雲・井原遺跡	糸島市(旧前原町)	IB-1-1類	三雲41番地B身土層	粘板岩											165-10	古墳時代	大きく欠損	糸島市教育委員会2013「三雲・井原遺跡調査報告書第10集」 糸島市文化財調査報告書第20集			
	IB-1-2類			切芝2575番地Pc30	滑石?													165-11			一部欠損		
	IA-1-1類			三雲41番地Pc30	粘板岩														165-12		古墳時代?	大きく欠損	
	IIA-1-1類			字ノノA1身土層埋土	字ノノA1身土層埋土														165-14		古墳時代?	v C類のみ	
96	869	八幡旗遺跡	糸島市(旧志摩町)	III A-3類	包含層	花崗岩											23-6	弥生中後後半~後期末		志摩市教育委員会2008「八幡旗遺跡調査報告書第2集」 志摩市文化財調査報告書第25集			
	IIA-1類			III層	凝灰岩													25-119	弥生中後後半~古墳前期前半				
	870			IIA-3類	III層	砂岩													25-120		弥生中後後半~古墳前期前半		
	871			IIA-3類	III層	砂岩													25-121		弥生中後後半~古墳前期前半		
	872			IIA-3類	III層	頁岩															25-122	弥生中後後半~古墳前期前半	
	873			III A-1類	P561	頁岩	帯ナツブ灰色														16-108	弥生中後後半~古墳前期	溝シヤブ、体部には加工痕、あまり使用していないが、
	874			II B類	P562	砂岩	灰ナツブ色														16-109	弥生中後後半~古墳前期	全体を丁寧に研磨、大きく欠損、孔に片が残存
	875			IB-2-1類	SK43	滑石	灰白色														16-110	弥生中後後半~古墳前期	全体的に磨滅、底部丁寧に加工
	876			II A-1類	帯ナツブ	泥質片岩	灰白色														16-111	弥生中後後半~古墳前期	下半部欠損
	877			II B-1類	P79	頁岩	帯ナツブ灰色														17-171	弥生中後後半~古墳前期	一部欠損、加工痕、あまり使用していないが、
	878			II A-2-1類	P128	泥質片岩	帯ナツブ灰色														17-172	弥生中後後半~古墳前期	底面平たく研磨
	879			II A-1類	遺物包含層上位	泥質片岩	帯ナツブ灰色														30-187	弥生中後後半~古墳前期	下半部欠損、底部平たく加工、全体を丁寧に研磨、凝灰岩製のため磨いていないが、
	880			IB-3類	遺物包含層下位	凝灰岩	灰色														32-206	弥生中後後半~古墳前期	木製穿孔あり、孔の間に殺があり、あまり使用していないが、
	881			IA-1類	遺物包含層上・下位	泥質片岩	帯ナツブ灰白色														35-254	弥生中後後半~古墳前期	下半部欠損、断面扁平、未貫穿孔あり、何かに能用か、
	882			I類	遺物包含層上・下位	理質頁岩	灰色														35-255	弥生中後後半~古墳前期	半分欠損、側面に工具痕あり
	883			IB-1-1類	遺物包含層上・下位	理質頁岩	帯ナツブ灰色														35-256	弥生中後後半~古墳前期	下部の片のみ短軸端2
	884			IB-3-1類	遺物包含層上・下位	滑石	灰白色														35-257	弥生中後後半~古墳前期	大きく欠損、溝内に加工痕わずかに残る
	885			III A-3類	遺物包含層上・下位	頁岩	灰色														35-258	弥生中後後半~古墳前期	
	886			II A-1類	遺物包含層上・下位	滑石	灰白色														35-259	弥生中後後半~古墳前期	欠損後もそのまま使用か、
	887			II A-1類	遺物包含層上・下位	凝灰岩	帯ナツブ灰色														35-260	弥生中後後半~古墳前期	
888	II A-1-1類	遺物包含層上・下位	片岩	帯ナツブ灰色													35-261	弥生中後後半~古墳前期	未貫穿孔1				
889	III B類	遺物包含層上・下位	滑石	灰白色													35-263	弥生中後後半~古墳前期	未貫穿孔、孔周囲磨滅のため使用品				
890	IB-2-1類	遺物包含層最上位	滑石	帯ナツブ灰色													36-279	弥生中後後半~古墳前期	上半部欠損、底部平たく加工				
891	I-1-1類	遺物包含層最上位	滑石	灰白色													36-280	弥生中後後半~古墳前期	大きく欠損、上面平坦に、上溝1孔上下孔1				
892	IB-1類	遺物包含層上位	滑石	灰白色													38-319	弥生中後後半~古墳前期	II A類をI類に再加工か、短軸の切込みがあるが、察し難いため、確認なしと判断				
893	II A-1類	遺物包含層上位	花崗岩	灰白色													38-320	弥生中後後半~古墳前期	溝シヤブではない				
894	II A-3類	遺物包含層下位	理質頁岩	帯ナツブ灰色													40-346	弥生中後後半~古墳前期	下半部欠損、加工痕あり				
895	IB-1-1類	遺物包含層下位	滑石	灰白色													42-367	弥生中後後半~古墳前期	底面平たく加工、未貫穿孔2あり				
896	IA-1-1類	遺物包含層下位	頁岩	帯ナツブ灰色													42-368	弥生中後後半~古墳前期	作りかけ、孔内に凹面痕あり、あまり使用していないが、				
897	II B-1類	遺物包含層下位	理質頁岩	灰色													42-369	弥生中後後半~古墳前期	1孔未貫通、溝シヤブ				
898	II B-1-1類	遺物包含層下位	理質頁岩	灰色													42-370	弥生中後後半~古墳前期	丁寧に研磨、溝シヤブ				
899	II A-1類	遺物包含層下位	理質頁岩	灰色													42-371	弥生中後後半~古墳前期	上下平坦に加工、両端のフレイ使用によるものか、				
900	IB-2-1類	遺物包含層上位	砂岩	灰白色													51-420	弥生中後後半~古墳前期	底面平たく加工、砥石に能用				

第5表 九州型石錘一覽表④

道跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工状況	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	重量(g)	長軸の幅(mm)	短軸の幅(mm)	1番目の孔の直径(mm)	2番目の孔の直径(mm)	上から2番目の孔の直径(mm)	埋込深さ(mm)	埋込方向	埋込位置	備考	文献			
98	901	一の町遺跡跡4次	永島市(旧志摩町)	IB-2-10類	包舎層	滑石	黄灰色		7.0	4.2	(1.3)	(103.8)	1.0	0.5	4.5				半分欠損、底部存在に加工		志摩町教育委員会2009「一の町遺跡跡4次発掘調査報告書第30集				
	902			IB-10類	包舎層	頁岩	暗緑灰色		7.3	(2.1)	(3.0)		0.5							半分欠損、破断面一部研磨、何かに転用したか					
	903			IA-1-10類	遺物包含層	滑石	灰白色		10.0	4.2	3.9	207.8	3.0							弥生中期後半～後期					
	904			IIA-1類	遺物包含層	泥質片岩	灰カキゾ色		13.8	5.6	4.5	539.0	5.0								粗い加工				
	905			IB-3類	遺物包含層	泥質頁岩	灰色		5.6	2.6	1.8		0.5	0.5							転用品、面として加工、長軸・短軸2切込				
	906			IA-2-10類	遺物包含層	土製品	灰緑色		8.0	4.6	4.8	178.7	4.0								孔内あまり摩耗していない				志摩町教育委員会1983「御珠谷遺跡発掘調査報告書第3集
	907			IB-10類	16号住居跡床面	滑石			7.4	3.5	3.2	121.0									長軸横置き				
	908			IB-2-10類	41号住居跡	花崗岩			6.3	4.8	4.7	154.0	4.0	4.0	8.0										
	909			IIA-1類	75号住居跡	粘板岩			4.1	1.9	(1.4)	(11.5)	2.0												
	910			IIA-3類	75号住居跡土	安山岩			4.8	3.5	3.6	84.5	2.0	2.0											
911	IB-2-10類	75号住居跡	滑石			(4.6)	4.4	4.2	2.0	2.0															
912	IIA-1類	76号住居跡	滑石			(3.7)	1.4	1.3	(6.5)	1.0															
913	IIA-3類	78号住居跡土	滑石			8.2	4.5	4.4	224.0	4.0	0.3														
914	IB-2-10類	85号住居跡床面	滑石			5.8	3.3	2.4	74.5	2.0															
915	IIA-1-10類	98号住居跡土	滑石			8.0	3.7	3.3	(130.0)	4.0															
916	IIA-1類	5号溝	滑石			2.3	1.6	1.3	8.0	0.5															
917	IB-1-10類	3号住居跡 ピット(貯物)	滑石			7.1	4.3	3.6	140.0	2.0															
918	IB-10類	6号住居跡床面	滑石			(7.4)	(1.6)	(2.2)																	
919	IB-2-10類	9号住居跡	滑石			9.6	4.6	3.0	178.0	1.0															
920	IA-10類	14号住居跡床面	玄武岩			5.9	2.8	2.6	67.0	3.0															
921	IA-2-10類	14号住居跡床面	滑石			5.5	3.8																		
922	VA-10類	15号住居跡	粘板岩			5.6	1.5	0.7	9.0		1.0														
923	I-1-10類	15号住居跡	粘板岩			(5.6)	(2.6)	2.4																	
924	IB-1-10類	22号住居跡土	粘板岩			7.4	4.3	3.0	147.0	3.0															
925	IIA-3類	26号住居跡				(7.7)	3.8	3.6	5.0	3.0															
926	I類	30号住居跡土	粘板岩			(4.4)	3.0	(0.8)																	
927	IB-10類	31号住居跡土	粘板岩			(7.0)	(1.8)																		
928	IB類未製品	31号住居跡	泥岩																						
929	IB-10類	34号住居跡	滑石			(10.4)	4.4	3.5																	
930	I類	34号住居跡	滑石			(6.5)	(4.4)	2.2																	
931	IB-1-10類	52号住居跡	滑石			5.1	4.4	3.7	240.0	5.0															
932	IA-1-10類	53号住居跡床面	滑石			(6.4)	3.8	(2.3)																	
933	IB-3類	54号住居跡	滑石			(10.0)	(4.7)	3.2																	
934	VB類	54号住居跡床面	花崗岩			14.1	13.8	7.5	1,668.0	2.0	2.0														
935	IA-2-10類	59号住居跡土	滑石			6.6	4.1	3.1	158.0	2.0															
936	IB類	60号住居跡土	粘板岩			(5.0)	(3.3)	(3.2)																	
937	I-1-10類	72号住居跡床面	砂岩			(3.3)	3.2	2.8																	
938	I類か	96号住居跡床面	粘板岩			(8.0)	(4.5)	(2.8)																	
939	IA-2-10類	100号住居跡床面	滑石			10.7	4.4	(2.4)																	
940	未製品	5号土壘	粘板岩			(6.3)	2.8	2.7																	
941	IB-3-10類	1号溝	粘板岩			8.5	(1.6)	2.1	(89.0)	4.5	4.0	20.0	4.0												
942	IB-1-10類	2号溝	粘板岩			8.0	3.4	1.9	69.5	3.0															
943	IB-1類	D-06 3層上部	粘板岩			2.3	1.8	1.0	5.0	1.0															
944	IB-1類	D-06 3層上部	粘板岩			2.6	1.0	0.7	1.5	0.5															

第5表 九州型石錘一覽表⑤

遺跡番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	石材		加工状況	法重			清幅			孔径			挿図番号	時期(下段)	備考	文献
							色調	石材の種類		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	長軸の清幅(mm)	短軸の清幅(mm)	1番上の孔径(mm)	上から2番目の孔径(mm)	上から3番目の孔径(mm)				
99	945	御床松原遺跡	糸島市(但志摩町)	ii B-1類	SD-07 2層	粘板岩		○	3.2	1.4	1.2	5.0	1.0					93-199	古墳前期小		志摩市教育委員会1987年御床松原遺跡調査 遺跡文化財調査報告第8集	
	946			ii B-1類	SD-07 2層	粘板岩		○	4.5	1.4	1.0	11.0	1.0						93-200	古墳前期小		
	947			ii B-1類	SD-07 2層	滑石		○	5.9	1.6	1.3	23.0	2.0						93-201	古墳前期小		
	948			ii B-1類	SD-06 3層	粘板岩		○	7.3	3.2	2.8	88.0	1.0						93-202	弥生中期後半～ 弥生後期終末		
	949			ii B-1類	包含層	花崗岩			7.9	4.5	3.0	148.0	6.0						93-203			
	950			ii A-1類	SD-06 3層	滑石			13.7	5.0	5.4	489.0	4.0						93-204	弥生中期後半～ 弥生後期終末		
	951			ii B-1類	包含層	粘板岩			4.7	2.2	1.8	25.6	2.0						93-205	長軸溝2条		
	952			ii B-3類	包含層	砂岩			5.8	3.3	2.7	78.0	2.0	1.0					93-206	一部欠損		
	953			v A-3類	包含層	花崗岩			15.2	6.3	4.3	555.0	8.0						93-207	長軸切込、短軸溝2		
	954			v A類	包含層	滑石			14.0	5.9	4.3	896.0	2.5						93-208	長軸切込、短軸溝1		
	955			v A類	包含層	滑石			7.3	1.8	1.5	37.0							93-209	中世か		
	956			v A類	SD-06 3層	粘板岩			7.0	2.6	0.9	28.0							93-210	分銅型		
	957			i A-5類	包含層	滑石			6.5	3.5	3.4	144.0							93-211	夾製品、孔未貫通		
	958			v B-1-1類	SD-06 3層	粘板岩			8.6	1.8	1.7		2.0						93-212	弥生中期後半～ 弥生後期終末		
	959			i B-1-1類	包含層	滑石			5.9	3.0	2.7	78.0	1.0	3.0	4.0				93-213	中央に孔1		
	960			i B-2-1類	包含層	滑石			11.0	3.6	2.8	224.0	4.0	7.0	7.0				93-214			
	961			i B-2-1類	包含層	粘板岩			5.1	2.6	2.0	42.0	1.0	3.0	3.0				93-215			
	962			i A-2-1類	包含層	滑石			2.5	4.2	2.8	301.0	0.3	5.0	6.0	5.0			93-216	孔3ヶ所		
	963			i B-1-1類	包含層	滑石			6.3	3.2	3.2	104.0	3.0	4.0					93-217	下孔側面から穿孔		
964	i A-5類	包含層	砂岩			9.0	5.7	3.9	278.0	2.0	4.0	5.0				93-218	孔側面から穿孔					
965	i 類未製品	包含層				4.5	3.0	1.8								93-219						
966	i 類未製品	包含層				6.0	4.0	4.0								93-220						
967	i 類未製品	SD-06 4層				5.9	2.8	2.0	51.5							93-221						
968	VID類小	包含層 3層	結晶片岩			18.0										93-228	20.0	下半部大きく欠損				
969	VID類小	包含層	砂岩			23.0										93-229	20.0	下半部大きく欠損、石皿に転用小				
970	ii B-2-1類	第2地点包含層	滑石			12.0	4.4	3.8	310.0	5.0	7.0	6.0				12-2	古墳前期前半か?		志摩市教育委員会1987年新町遺跡調査報告第7集			
971	VID類	2号石組	砂岩			19.0		5.7	310.0							12-2	弥生後期～古墳前期		志摩市教育委員会1987年新町遺跡調査報告第7集			
972	ii A-3類	SHM9-1 第III層上面	玄武岩			3.0	1.0	1.1	4.5	0.3						13-45			志摩市教育委員会2010年新町・御床松原遺跡調査報告第2次調査			
973	II類	H-2	玄武岩			2.8	4.6	(1.8)	(40.2)	3.0	(8.0)					13-52	古墳期後半か?	大きく欠損	志摩市教育委員会1988年新町遺跡調査報告第2集			
974	i A-5類	SHM9-1 第III層上面	石灰岩			6.0	4.3	3.8	(134.9)		2.0	7.0				14-55	古墳期後半か?	上半部欠損	志摩市教育委員会1987年新町遺跡調査報告第2集			
975	ii B-3類	P108<sub>上</sub>	滑石			11.8	7.8	3.1		12.0	5.0					25-260	弥生中期後半	片面のみ				
101	976	深江舟田遺跡	糸島市(但志摩町)	ii B-1類	I区	頁岩		○	5.7	1.8	1.4	13.0	2.0	2.0				47-9	弥生中期後半～ 後期終末	珍しい形態、上層は表面、下層は側面と縁の磨き面が異なる。溝はシヤブ、未使用品か。	三文字町教育委員会1994年深江舟田遺跡調査報告第5集	
	977			ii B-1-1類	I区	頁岩					2.5	1.3	1.0	(5.8)	1.0	5.0		47-10	弥生中期後半～ 後期終末	極小品、孔や溝が磨耗し、使用品、加工し、先端からせる		
	978			i 類小II類	I区	細粒砂岩			(4.9)	4.8	3.2	(90.3)	3.0	(5.0)				47-11	下半部欠損			
	979			i B-2-1類	I区	滑石			8.9	4.5	3.6	230.4	3.0	5.0				47-12	弥生中期後半～ 後期終末	底部を平らに加工、溝に加工痕、孔にも回転痕、あて使用していない、溝工具痕ほとんどなし、孔縁状痕なし、使用品、底部多面加工		
	980			i C-2-1類	I区	細粒砂岩			13.5	3.5	3.0	162.7	1.0	5.0	8.0				47-13	弥生中期後半～ 後期終末		16と平面形近い
	981			VID類	I区	滑石			16.7	11.7	5.7	2,040.0		31.0					48-15	弥生中期後半～ 後期終末		
	982			VID類	I区	砂岩			17.0	11.7	8.3	2,200.0		37.0					48-16	弥生中期後半～ 後期終末		15と平面形近い
	983			VIC類	I区	滑石			13.0	13.0	8.1	1,970.0		27.0					48-17	弥生中期後半～ 後期終末		
	984			VID類	I区	滑石			18.5	14.6	7.8	2,600.0		25.0					48-18	弥生中期後半～ 後期終末		

第5表 九州型石錘一覽表⑤

遺跡番号	遺跡名	市町名	分類	出土遺構	石材の種類	色調	加工状況	法量			重量(kg)	溝幅		孔径		挿入の深さ(mm)	挿入の長さ(mm)	挿入の位置	挿入の方向	挿入の角度	備考	文献
								長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)		長径(mm)	短径(mm)	上からの深さ(mm)	上からの長さ(mm)							
985	深江井田遺跡	糸島市(旧二丈町)	IB-1-a類	Ⅲ区	細粒砂岩	灰黄色	○	12.4	3.8	3.2	205.7	2.0	6.0	8.0							二丈町教育委員会1997『深江井田遺跡』 二丈町文化財調査報告書第8集	
986		糸島市(旧二丈町)	IB-1-a類	Ⅲ区上層	細粒砂岩		●	9.4	4.6	3.9	259.4	2.0	5.0	7.0							表面に粗いワカ-ロコ方向の長さ7mm位の幾何形状、研磨仕上げ途中の未使用品か、孔縦方向の筋痕、縦方向に工具で穿孔したか、	
987	石崎曲り田遺跡第1次	糸島市(旧二丈町)	VB類/a	黒色包層	片岩系小	オリーブ灰色	●	(12.2)	6.8	6.8	(228.8)		25.0								福岡県教育委員会1997『石崎曲り田遺跡』 上中巻 糸島市/イノベ文化財調査報告書第27集	
988	石崎曲り田遺跡第2次	糸島市(旧二丈町)	ⅡA-1類	Ⅵ区下層	花崗岩			7.5	4.8	(2.7)		3.0									福岡県教育委員会2007『石崎曲り田遺跡第3次調査』 Ⅱ区文化財調査報告書第20集	
参考	曲り田周辺遺跡	糸島市(旧二丈町)	IB-4類	谷部包層	滑石			3.4	2.1	1.3			4.5	6.0							二丈町教育委員会2007『石崎曲り田遺跡第3次調査』 Ⅱ区文化財調査報告書第20集	
989	竹ノ原瀬手遺跡	糸島市(旧二丈町)	IA-1-a類	3号溝	砂岩			12.0	4.8	4.2		1.0	5.0	7.0							二丈町教育委員会2007『竹ノ原瀬手遺跡』 Ⅱ区文化財調査報告書第22集	
990			IB類/a製品	第1地点谷部				8.0	3.9	3.5											二丈町教育委員会2007『竹ノ原瀬手遺跡』 Ⅱ区文化財調査報告書第22集	
991			IB-1-a類	第2地点谷部	安山岩		○	11.2	4.0	(2.7)		3.5	8.5								二丈町教育委員会2007『竹ノ原瀬手遺跡』 Ⅱ区文化財調査報告書第22集	
992			IB-1-a類	第2地点谷部	砂岩		○	8.9	4.8	4.6			6.0	7.0							二丈町教育委員会2007『竹ノ原瀬手遺跡』 Ⅱ区文化財調査報告書第22集	
993	吉井水付遺跡	糸島市(旧二丈町)	IC-3-a類	第2地点谷部	砂岩		○	10.6	4.6	3.9		4.0	2.0	7.0	11.5						二丈町教育委員会2007『吉井水付遺跡』 Ⅱ区文化財調査報告書第24集	
994			IB類/a製品	第2地点谷部	安山岩			13.1	6.3	3.4	11.9		8.5								二丈町教育委員会2007『吉井水付遺跡』 Ⅱ区文化財調査報告書第24集	
995			IB類/a製品	第2地点谷部	安山岩			(3.8)	(3.0)				(7.50)								二丈町教育委員会2007『吉井水付遺跡』 Ⅱ区文化財調査報告書第24集	
996			IB-1-a類	SK105	頁岩?		●	11.0	3.6	3.0	139.9	3.0	5.0								二丈町教育委員会2007『吉井水付遺跡』 Ⅱ区文化財調査報告書第24集	
997	鱒白遺跡	唐津市	IB-1-a類	包層	頁岩			5.7	1.7	1.8	18.7	2.0	2.0								佐賀県教育委員会2007『鱒白遺跡』佐賀県文化財調査報告書第15集	
998			IB-1-a類	包層	頁岩			7.1	4.0	(1.30)	(35.7)	1.5	4.0	4.5							佐賀県教育委員会2007『鱒白遺跡』佐賀県文化財調査報告書第15集	
999			I類	SH11149	砂岩			6.3	4.1	2.9	67.4		(4.0)								佐賀県教育委員会2007『鱒白遺跡』佐賀県文化財調査報告書第15集	
1000	中原遺跡11~13区	唐津市	IB-1-a類	SH11138	滑石			5.8	2.5	2.8	55.4	3.0	2.0	4.0							佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第199集	
1001			vA類	SH11094	滑石		○	4.9	2.0	1.5	17.6	1.0									佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第199集	
1002			iiB-1類	SH11205	滑石			2.0	1.0	0.7	1.8	1.0									佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第199集	
1003	中原遺跡9・10区	唐津市	IC-1-a類	P-31包層	細粒花崗岩			13.2	4.8	4.3	236.0	4.0	10.0								佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第203集	
1004			I類/a製品	SD9002 2層	砂岩			(6.4)	3.0	2.6	67.2		5.0								佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第203集	
1005			iiB-3類	4層	砂岩			5.8	3.0	2.9	62.2	3.0	2.5								佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第203集	
1006			iiB-3類	4層	滑石			5.2	1.5	1.1	12.2	1.0	1.0								佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第203集	
1007			iiA-1類	5a層	砂岩			2.9	1.5	1.3	6.2	3.0									佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第203集	
1008	中原遺跡15・11区	唐津市	iiA-1-a類	5a層	滑石			(5.8)	2.9	2.5	(44.4)	3.0	5.0								佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第203集	
1009			IC-1-a類	SX11155	片岩			7.8	2.9	2.6	95.2	5.0									佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第203集	
1010			IC-1-a類	P-34包層			○	12.8	3.4	2.0	124.0	3.0	7.0								佐賀県教育委員会2007『中原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第203集	
1011			vA類	W-X-37SD11065 4層				5.2	1.7	1.4	14.2	4.0									佐賀県教育委員会2007『五反田松木遺跡』 唐津市文化財調査報告書第149集	
1012	五反田松木遺跡	唐津市	IB-2-a類	覆乱層	土製品			7.0	3.5	3.8	80.0	0.5	2.0								佐賀県教育委員会2007『五反田松木遺跡』 唐津市文化財調査報告書第149集	
1013			IA-4類		砂岩			8.5	3.7	3.2	115.0		5.0	5.5							佐賀県教育委員会2007『五反田松木遺跡』 唐津市文化財調査報告書第149集	
1014	大深田遺跡	唐津市	iiA-3類	P99	滑石			3.8	1.5	1.3		0.5	0.5								佐賀県教育委員会1980『大深田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集	
1015			IC-1-a類	O区	滑石			11.4	(3.7)			1.0	0.5	4.0							佐賀県教育委員会1978『大深田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集	
1016			iv類/a製品	O区	滑石			(7.0)	(3.8)	1.6			8.0								佐賀県教育委員会1978『大深田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集	
1017	森の下遺跡	唐津市	iiA-a類	O区				(6.0)	2.2	1.9											佐賀県教育委員会1978『大深田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集	
1018			vA類	O区		灰色		(5.3)	1.2	1.3		0.5									佐賀県教育委員会1978『大深田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集	
1019	寺ノ元遺跡	唐津市	I-1-a類/a	I区包層	滑石			(7.1)	3.5	3.5	(93.6)	5.0	4.0								佐賀県教育委員会2007『寺ノ元遺跡』上野野遺跡佐賀県文化財調査報告書第210集	
1020			IB-3-a類	A地区G-3区	砂岩			12.9	4.6	4.6	320.0	3.0	6.0								唐津市文化財調査報告書第49集	
1021			IA-3-a類	A地区G-5区	滑石			8.0	3.8	3.4	130.0	3.0	9.0								唐津市文化財調査報告書第49集	
1022	神田中村遺跡	唐津市	IB-1-a類	A地区F-2区	滑石		●	7.3	2.4	2.0	56.0	2.0	4.0								唐津市文化財調査報告書第49集	
1023			IB-3-a類	A地区G-2区	滑石		●	14.1	3.4	3.8	255.0	3.0	0.2	5.0							唐津市文化財調査報告書第49集	
1024			IA-a類	A地区	滑石			14.8	3.3	3.7			6.0								唐津市文化財調査報告書第49集	

第5表 九州型石錠一覽表⑦

遺跡番号	遺跡名	市町名	分類	出土遺構	石材の種類	石材		加工状況	法量			溝幅			孔径		備考	文献	
						色調	長さ(cm)		幅(cm)	厚さ(cm)	重量(α)	長軸の溝幅(mm)	短軸の溝幅(mm)	溝上の孔径(mm)	溝下の孔径(mm)	長さ(cm)			幅(cm)
113	1025 神田中村遺跡	唐津市	I 類未製品	F-3区	滑石	●	(9.0)	3.8	2.3				6.0				弥生後期後半～古墳前期	唐津市教育委員会1992「神田中村遺跡」唐津市文化財調査報告書第49集	
	1026		I 類	A地区F-2区	滑石		(9.3)	4.0	4.2								弥生後期後半～古墳前期	唐津市文化財調査報告書第50集	
114	1027 菜園遺跡	唐津市	ii A-1類	攪乱層	滑石		3.6	1.5	1.3	10.0	1.0						上下部欠損	唐津市教育委員会1982「菜園遺跡」唐津市文化財調査報告書第51集	
	1028		ii A-1類	E-1-3 7下層	滑石		4.0	1.3	1.2	56.0	1.0						上下部欠損	唐津市教育委員会1982「菜園遺跡」唐津市文化財調査報告書第51集	
	1029		ii B-1-1類	F-1-1 7下層	滑石		4.7	2.2	1.9	(30.0)	2.0		5.0				上半部欠損	唐津市教育委員会1982「菜園遺跡」唐津市文化財調査報告書第51集	
	1030		皿類	C-1-4 8層	滑石		(3.7)	(2.7)	0.5	(6.5)	1.0						下半部大きく欠損、断面扁平	唐津市教育委員会1982「菜園遺跡」唐津市文化財調査報告書第51集	
115	1031 西前遺跡	唐津市教育委員会	ii B類?	H-IV区	安山岩												弥生時代後期～古墳時代	唐津市教育委員会1982「西前遺跡」唐津市文化財調査報告書第10集	
116	1032 藤中野遺跡	唐津市	I C-1-1類	CW-27 表土	滑石		(10.3)	3.6	3.1	(200.0)	1.0		(1.2)	1.0			上半部欠損、この他に凹化されて、ない資料1点(未集成)	唐津市教育委員会1982「藤中野遺跡」唐津市文化財調査報告書第14集	
117	1033 藤主遺跡	唐津市(自北沢多村)	I 類	5区包含層	土製品	○	(7.0)	(2.5)	(2.0)		3.0		4.5				下半部欠損	佐賀県教育委員会1981「藤主遺跡」佐賀県文化財調査報告書第60集	
	1034		I C-1-1類	6区東側包含層	土製品		(6.8)	3.2	3.0		3.0		5.5				上半部欠損	佐賀県教育委員会1981「藤主遺跡」佐賀県文化財調査報告書第60集	
118	1035 託田西分遺跡	神埼市(自千代田町)	I A-1-1類	採集	滑石	○	12.0	3.2	2.8		3.5		5.5				県立博物館保管資料、出土地点等詳細不明、下端部を意図的に加工	千代田市教育委員会1990「託田西分遺跡」県立博物館保管資料第20集	
119	1036 黒丸遺跡	大村市	v A-3類		滑石	○	8.0	2.3			2.0	1.5					突起以外に十字溝	大村市「黒丸遺跡調査会1980」黒丸遺跡発掘調査報告書第1集	
120	1037 坂口船跡	大村市	v A-2類	12区 ヒット68	滑石	○	8.0	1.9	1.7	(41.4)	1.5						中央縦軸上、下先端欠損	大村市「黒丸遺跡調査会1980」黒丸遺跡発掘調査報告書第1集	
121	1038 繁城遺跡	大村市	ii A-3類	I-28	砂岩		5.5	3.1	2.7	49.0	3.0	2.5						中央縦軸上、下先端欠損	大村市「黒丸遺跡調査会1980」黒丸遺跡発掘調査報告書第1集
122	1039 黒丸遺跡	大村市	ii B-1-1類	I-28	滑石		5.2	3.0	2.0		3.0		5.6					中央縦軸上、下先端欠損	大村市「黒丸遺跡調査会1980」黒丸遺跡発掘調査報告書第1集
	1040		ii A-1類	II区	滑石		4.0	1.8	(1.2)	(10.0)	2.0							突起以外に十字溝	大村市「黒丸遺跡調査会1980」黒丸遺跡発掘調査報告書第1集
123	1041 黒丸遺跡	唐津市	ii B-1-1類	5号溝	頁岩	●	12.6	2.8	2.4	139.1	2.0		5.0	6.0				断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1042		ii B-1-1類	79-27区 4層上部	頁岩	●	11.3	2.4	2.5	79.5			6.0	4.0				全体的に磨滅がひどく、孔の磨耗と表面の剥離は使用によるもの、特に下孔は下方方向に軸を下けたことにより剥離で、下方方向に軸が加わつたもの、上も剥離が認められ、上下孔は直交、両端はフラットに、細くする	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1043		ii A-3類	不明			5.0	1.9	1.5		0.5	1.5						断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1044		ii A-1類	5号溝	砂粒砂岩		4.6	2.2	1.5	21.4	1.5							断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1045		ii A-1類	1号溝 粘土製製品	頁岩		4.5	1.9	1.9	19.0	1.5							断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1046		ii A-1類	2号溝	頁岩		4.1	1.6	1.3	10.6	0.5							断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1047		ii A-1類	2号溝	頁岩		7.7	2.3	2.2	48.8	2.5							断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1048		v A-1類	2号溝	頁岩		7.4	1.3	(1.0)	(9.0)	1.0	1.0						断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1049		vi D類				12.7		1.2									断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1050		ii A-1類	1号旧河道か、層御包含層V層	粘板岩		3.5	1.5	1.3	7.0	0.5							断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1051		ii B-1類	1号旧河道か、土器層VI層	砂岩		3.4	2.0	1.7	16.0	2.0							断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1052		I B-2-1類	1号旧河道 土器層IV層	滑石	●	7.4	5.7	4.9	285.0	2.0		3.0	5.5				断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1053		iv A類	土器層VII層	凝灰岩		7.2	5.7	3.5	79.0			4.0					断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1054		vi A類	A区包含層3層	凝灰岩		(9.6)		4.5	(250.0)			35.0					断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1055		v C類	E区落ち込み	頁岩	○	6.0	1.5	6.0	10.0	4.5							断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1056		ii B-1類	B区10号土溝	頁岩	○	5.0	1.9	8.0	20.0	1.5							断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集
	1057		iii A-1類	C区5層	頁岩		5.8	3.2	(2.9)	(83.0)	3.5	1.5						断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしつかりあつたため未使用品か、上下孔は直交	唐津市教育委員会1990「黒丸遺跡」唐津市文化財調査報告書第88集

第5表 九州型石錘一覽表②

遺跡 番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	加工 状況		質量			溝幅		孔径		埋 番 号	時 期 (下 限)	備 考	文 献
							色調	状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	取軸の溝幅 (mm)	短軸の溝幅 (mm)	1層上の孔 径(mm)				
1058		原の辻遺跡南7区 (平成10・11年度調査)	香城市	ⅡA-3類	Ⅱ7区	片岩系小	●	4.8	1.6	1.2	2.0	2.0	1.0	69-40	弥生後期後半		長尾原の辻遺跡調査事務所2003原の辻遺跡調査報告書第18集		
1059			香城市	ⅡA-3類	Ⅱ7区	片岩系小	●	5.4	2.2	1.8	3.0	3.0		66-41	弥生後期後半	表面泥が自立つ、納塵使用によるものか、被熱痕あり、主孔/ミ状工具による、底面凹凸石粒からすべり、はあせりよくないか、			
1060				ⅡB類	4a層	凝灰岩	●	13.8		10.0	1,679.5		30.0		古墳前期前半				
1061				ⅡA-3類	ⅡA-IV層	砂岩		5.3	1.9	1.6	19.8	2.5	2.0	58-37	弥生後期前半	断面扁平	長尾原の辻遺跡調査事務所2000原の辻遺跡調査報告書第19集		
1062				ⅡB-1類	土器溜	砂岩		3.4	2.6	1.2	16.7	2.0		58-38	弥生中期前半～ 後期後半				
1063		原の辻遺跡下條八 反地区(平成11年度 調査)	香城市	ⅡA類	2号日押道Ⅱ層	頁岩		2.8	1.1	0.9	4.8	2.0	1.5	58-39	弥生後期～ 古墳前期				
1064				ⅡC類	2号日押道Ⅱ層	頁岩		(5.4)	2.9	1.5	(11.7)		6.0	58-40	弥生後期～ 古墳前期	半分以上欠損			
1065				ⅡB類		頁岩		(5.2)	2.1	1.6	(10.9)			58-41	半分以上欠損				
1066				ⅡB-3類	SD1 I層	頁岩	○	2.5	1.3	0.9		2.0	1.5	16-1	弥生後期後半	上面は浮石に整形	長尾原教育委員会2002原の辻遺跡調査報告書第24集		
1067				ⅡA-3類	SD3 I層	頁岩	●	7.5	1.5	1.4	1.0	0.5		48-1	弥生後期後半	長輪溝、短輪溝4			
参考				浮子	SD3 II層	凝石		11.4	7.2		13.0			48-18	弥生後期後半	浮子、加工痕みえない			
1068				ⅡA-1-砂類	SD3 II層	滑石	○	13.7	6.4	4.6	4.0		5.0	48-19	弥生後期後半	表面には加工痕残る、赤味がかるた め、左岸灘沿岸地域からの輸入品 か、			
1069		原の辻遺跡八反地区 (平成10年度調査)	香城市	ⅡA-1類	落ち込みD31VI	細粒砂岩	●	(8.0)	1.6	1.3	(21.8)		3.5	22-10	古墳前期前半	下部欠損	長尾原教育委員会2003原の辻遺跡調査報告書第26集		
1070				ⅡA-2類	表探			10.6	7.1	5.5	369.1		7.0	22-12		自然石を利用か、			
1071				I類小	B10 I区 I層	砂岩	●	3.8	2.9	2.2	21.8	2.0	7.0	49-3	弥生中期後半か 古墳前期か	下半部欠損した後転用、水中で光る ことはいない素材か、			
参考				ⅡA類	SD02	凝石		3.6	1.7	2.0			2.0	23-6	古墳前期前半		長尾原教育委員会2004原の辻遺跡調査報告書第27集		
1072				ⅡC類	第10調査区	頁岩	○	(6.0)	1.4	(9.0)			6.0	53-6	弥生後期後半	下部欠損、裏面欠損			
1073		原の辻遺跡高元Ⅱ区 (平成15年度調査)	香城市	ⅡB-1-砂類	Ⅱ区A70pp 4層周辺	滑石	●	6.5	3.2	4.5	173.8	3.5	9.0	73-16	弥生中期後半か	表面使用による磨滅、底面は丁寧な 研磨、溝・孔には使用による磨滅、 SK28に本来残っていた可能性あり	長尾原教育委員会2004原の辻遺跡調査報告書第28集		
1074		原の辻遺跡高元Ⅱ区 (平成16年度調査)	香城市	ⅡA-3類	高元F区2層	頁岩		9.6	2.5	2.4	66.0	0.5	0.2	40-82	弥生後期後半		長尾原教育委員会2005原の辻遺跡調査報告書第31集		
1075		原の辻遺跡石田高取 地区A9B区	香城市	ⅡB-2-Ⅱ類	SD03 3層	凝灰岩	○	4.9	(1.4)	1.0	12.1	2.0	1.5	38-88	弥生中期後半か 古墳前期か	全体的に磨滅、風化もすすみ、一部 欠損	長尾原教育委員会2005特別史跡原の辻 跡上段中文化財調査報告書第1集		
1076		原の辻遺跡 (高元ⅡB区)	香城市	ⅡA-2類	高元ⅡB区 包含層	滑石	○	(2.7)	(0.8)	(0.8)	0.6			8-16	弥生中期後半	面加工	長尾原教育委員会2006特別史跡原の辻 跡上段中文化財調査報告書第1集		
1077		原の辻遺跡高元Ⅱ区 (高元ⅡB区)	香城市	ⅡA-2類	SC23	頁岩	○	6.4	(0.8)	(1.0)	(5.3)	0.6		27-3	弥生中期後半	下部欠損、半分欠損	長尾原教育委員会2007特別史跡原の辻 跡上段中文化財調査報告書第9集		
1078		原の辻遺跡高元Ⅱ区 (高元ⅡB区)	香城市	ⅡB-1類	土器溜	頁岩	○	6.0	3.0	1.4	44.0		4.5	38-188	弥生後期後半～末		長尾原教育委員会2007特別史跡原の辻 跡上段中文化財調査報告書第10集		
1079		原の辻遺跡高元Ⅱ区	香城市	ⅡA-3類	高元Ⅱ区2～5区	砂岩		4.4	2.0	2.0	2.5	2.0		29-145	弥生中期後半～ 後期後半		長尾原教育委員会2008特別史跡原の辻 跡上段中文化財調査報告書第12集		
1080		原の辻遺跡高元Ⅱ区	香城市	Ⅱ期未製品か	包含層	安山岩		5.8	2.2	1.7	32.0			17-123	弥生中期～後期		長尾原教育委員会2009特別史跡原の辻 跡上段中文化財調査報告書第14集		
1081		原の辻遺跡高元Ⅱ区	香城市	ⅡA類	包含層	凝灰岩		5.6	1.2		3.5			51-265	不明	両端に切込、断面割円形			
1082		原の辻遺跡高元Ⅱ区	香城市	Ⅱ期未製品	SD-1トレンチ 埋土	頁岩		6.0	1.3	(0.8)	(8.6)			19-158	弥生中期後半	未製品、裏面欠損	長尾原教育委員会2011特別史跡原の辻 跡上段中文化財調査報告書第16集		
1083		原の辻遺跡高元Ⅱ区 (高元ⅡB区)	香城市	ⅡB-3類	B-Ⅱ区 落ち込み3層	頁岩	○	4.9	1.6	1.0	8.2	1.0		32-4	弥生後期後半		長尾原教育委員会2008原の辻遺跡調査報告書第38集		
1084		原の辻遺跡高元Ⅱ区 (高元ⅡB区)	香城市	ⅡA-1類	5区2層	砂岩		(7.9)	3.7	3.7	(120.5)	3.0		46-35	弥生後期	上部欠損	長尾原教育委員会2009原の辻遺跡調査報告書第40集		
1085				ⅡA-3類	3区3a層	頁岩		(3.1)	1.6	(0.8)	(4.9)	2.0		46-36		大部分欠損			
1086		原の辻遺跡高元Ⅱ区	香城市	ⅡA-2-Ⅱ類	B区 I層	滑石	○	11.2	4.6	4.0	296.2	4.0	5.0	12-126		溝内には加工痕が残り、使用 による磨滅、下層に紐すれ痕あり	長尾原教育委員会2012原の辻遺跡調査報告書第46集		
1087		原の辻遺跡高元Ⅱ区	香城市	ⅡB類	D2区			(23.0)		(13.2)			60.0	9-88	不明	半分欠損	長尾原教育委員会2012原の辻遺跡調査報告書第46集		
1088		原の辻遺跡高元Ⅱ区	香城市	ⅡB-3類	10区 2層	頁岩		(7.0)	1.4	0.7	(20.0)	2.0		113-1		下部欠損	長尾原教育委員会2016原の辻遺跡調査報告書第51集		
1089		原の辻遺跡高元Ⅱ区	香城市	ⅡB-1類	9-B 土坑	頁岩		3.6	2.0	1.5	20.0	2.0		113-2			長尾原教育委員会2016原の辻遺跡調査報告書第51集		
1090				ⅡB-1類	中区SD-5	頁岩	○	7.4	1.8	1.8	32.0		3.5	26-12	弥生後期後半～ 古墳前期前半	右製穿孔具を転用か、上面切込3、 下面切込4で紐すれ	原の辻遺跡断崖等協議会2001原の辻 跡上段中文化財調査報告書第3集		
1091		原の辻遺跡高元Ⅱ区 (平成13年度調査)	香城市	ⅡA-1類	南区SD-5	凝灰岩		15.0	5.2	4.0	478.0	3.5		26-13	弥生後期後半～ 古墳前期前半	表面磨滅、頭部が磨滅なし			
1092				ⅡA-1-砂類	南区SD-5	頁岩		8.4	3.2	(1.2)	(60.0)	2.5	5.0	26-14	弥生後期後半～ 古墳前期前半	1/2程度欠損、孔内に加工痕			
1093				ⅡA類	北区B-2 7層	凝灰岩	○	9.6	(6.2)	4.5	(299.0)		25.0	26-16	弥生後期後半				

第5表 九州型石鏝一覽表⑳

遺跡 番号	個別番号	遺跡名	市町村名	分類	出土遺構	石材の種類	石材		加工 状況	法重			清輪			孔徑			神 号	時 期(下 限)	備 考	文 献
							色調	石材の重量		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	長軸の半径 (mm)	短軸の半径 (mm)	1番上の孔 径(mm)	上から2番 目の孔径 (mm)	上から3番 目の孔径 (mm)				
123	1094	原の辻遺跡跡地区 平成11・12年度調査 地帳	老城市	I-3-3 類	V区SC-4	頁岩	297-7黒色	●	(9.7)	(2.5)	(1.8)	(35.0)	2.5	1.5	4.0	6.0	66-4	弥生中期後半～ 弥生後期前半～	上半部欠損。孔は使用に上の際減	原の辻遺跡跡地区 平成11・12年度調査報告書第2集		
	1095			vC類	Q29 3層	頁岩	灰黄色	○	(4.5)	1.3	1.1	11.6	1.0	2.0	2.0	66-5	弥生後期前半～ 後半か					
	1096			vC類	U-11 3層	頁岩	黒色	○	10.2	1.8	1.8	38.4	3.0	3.0		66-6	弥生後期前半～ 後半か					
	1097			ⅢA-2類	Q29 柱穴	頁岩	黒色		4.1	1.2	1.2	10.2	1.0			66-7	弥生後期前半～ 後半か					
	1098			ⅢB-1類	H-9 柱穴				6.1	2.2	1.8	35.6	2.0			66-8	弥生後期前半～ 後半か					
	1099			ⅢA-3類	B-11 3層	頁岩	黒色		3.3	1.6	1.4	10.4	1.0	1.5		66-8	弥生後期前半～ 後半か					
124	1100	車出遺跡	老城市	I B-2-1類	D-1区 III層	滑石		7.2	2.2	2.4	41.1	3.0	4.5	4.5	7.0	14-39	弥生中期～後期 後期終末		彌生中期教育委員会2002「車出遺跡」丹波 郡老城市「車出遺跡」第7期町文化財調査報告 書第2集			
125	1102	カアノ遺跡 東区考 カアノ遺跡 古学館跡地点	老城市	ⅢB-3類	A-3区 IV層	頁岩		5.7	2.1	2.0	22.4	2.0	1.5			14-40	弥生中期後半～ 後期後半		宮本一兵衛2008「老坂ワラカ遺跡」九州 大学大学院人文科学研究科考古学研究室 宮本一兵衛2013「老坂ワラカ遺跡」九州 大学大学院人文科学研究科考古学研究室 宮本一兵衛2017「老坂ワラカ遺跡」九州 大学大学院人文科学研究科考古学研究室			
126	1103	カアノ遺跡 第6～7地点	老城市	ⅢB-1類	F区	粘板岩		5.8	1.9	1.1	15.0	1.0				49-392	弥生後期後半	下端部欠損				
127	1104	カアノ遺跡 第1地点	老城市	vA-3類	7r 5層	頁岩		(5.7)	1.6	1.3	(14.0)	4.0	4.0			53-354	弥生中期後半～ 後期後半	短軸溝は全周しない				
	ⅢB-3類			B-8 4層	砂岩		4.8	2.1	1.5	11.0	2.0	1.0			65-395	弥生中期後半～ 後期後半						
	1105			ⅢB-3類	B-8 5層	砂岩		4.1	1.5	1.4	10.0	2.0	1.0			73-439	弥生中期後半					
	1106			ⅢA-1類	B-10 5層	頁岩		3.8	1.8	1.8	17.0	2.0				73-440	弥生中期後半					
参考		瀬島中学校跡品	平戸市	ⅣC-1類		滑石		11.8	11.8	8.2				21.0	9.0	14-7			京都大学平戸学術調査団1951「平戸学術調 査報告書」			
参考		花渡川遺跡	札幌市	I C-1-6類	表面採取	滑石		(23.3)	5.8	5.7		5.0		4.0					池田耕一1979「卑人の遺跡生活」東人文 化刊第5号 東人文化研究会			

第5表 九州型石錘一覽表③

## 古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究

平成30年度～令和4年度科学研究費補助金

(基盤研究C) 研究成果報告書

課題番号 18K011085

研究代表者 大庭孝夫 (九州歴史資料館研究員)

発行年月日 令和4 (2023) 年1月31日

編集・発行 九州歴史資料館

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

TEL : 0942-75-9575

FAX : 0942-75-7834

<https://kyureki.jp/>

印刷

東筑印刷株式会社

〒807-0821 北九州市八幡西区陣原 4-14-36

TEL : 093-602-0009

FAX : 093-603-8014